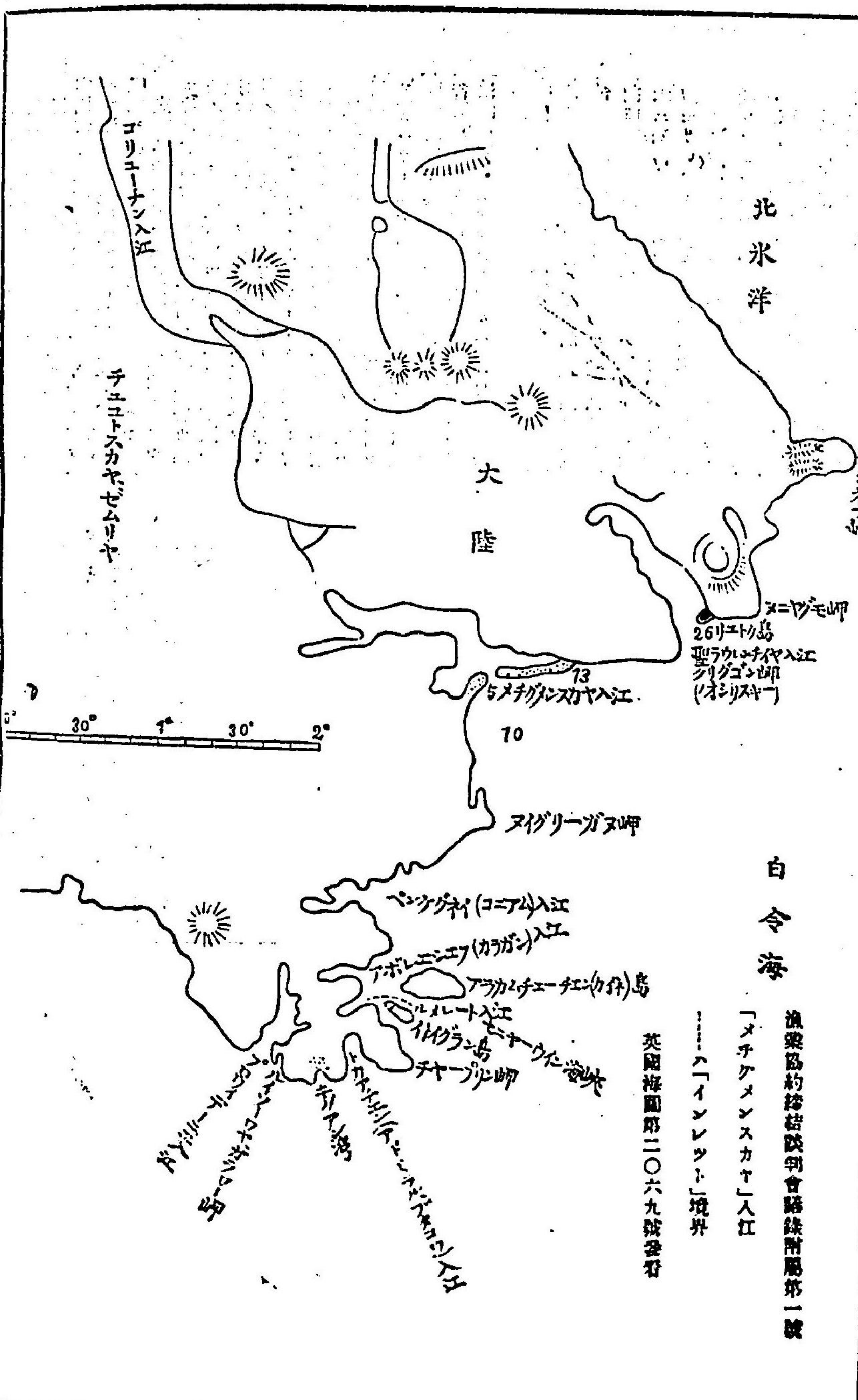
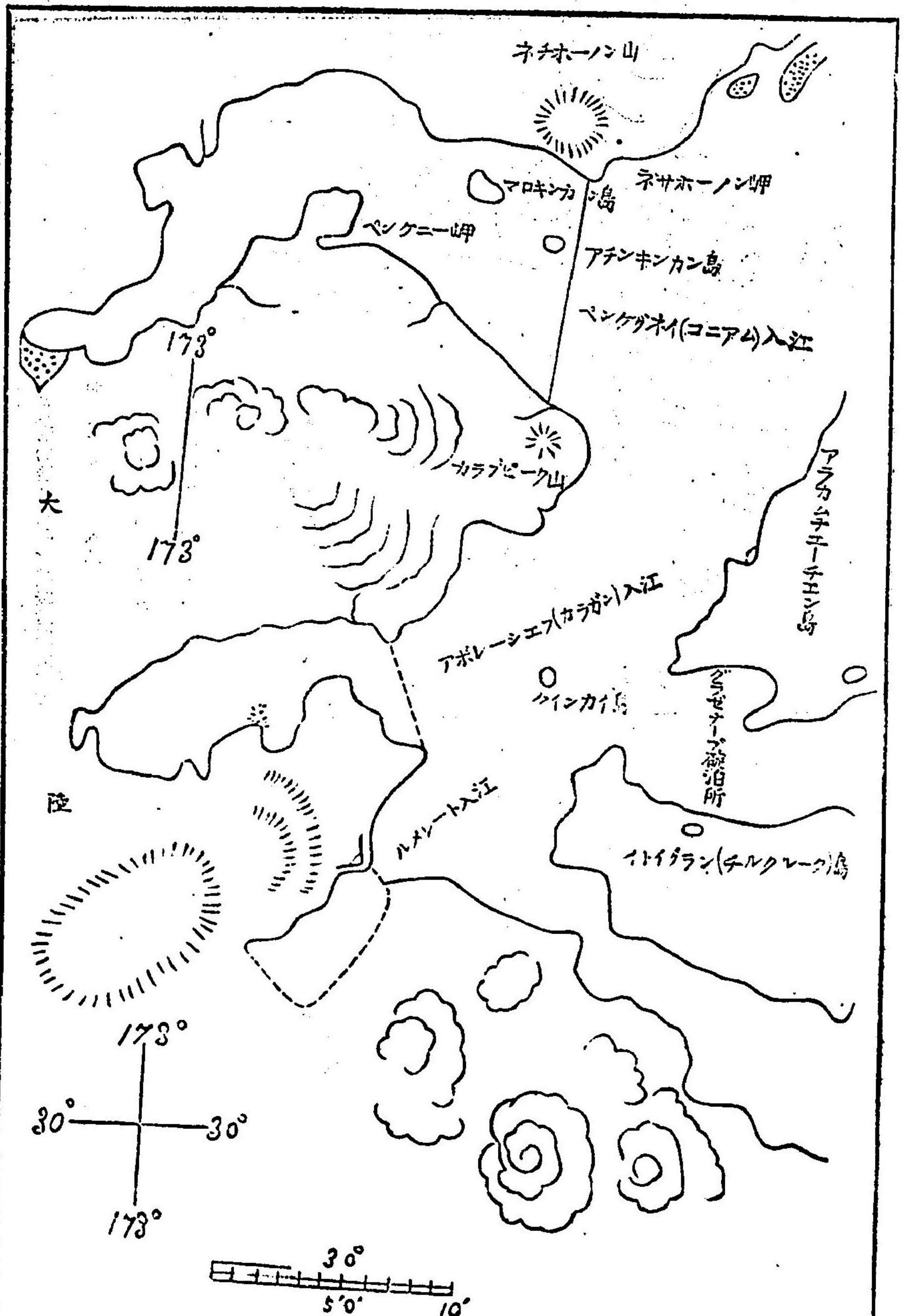

北氷洋
大陸
ゴリユーナン入江
チユコトスカヤ、ゼムリヤ
ラジネフ岬
ヌニヤグモ岬
26リエトク島
聖ラウレンチイヤ入江
グリグゴン岬
（オシリスキー）
13
5メチグメンスカヤ入江
10
30°
1°
30°
2°
ヌイグリーガヌ岬
白令海
ペンケグネイ（コニアム）入江
アボレエシエフ（カラガン）入江
アラカムチエーチエン（カイ拝）島
ルメレート入江
イトイグラン島
チヤープリン岬

漁業協約締結談判會議錄附屬第一號

「メチケメンスカヤ」入江

……ハ「インレット」境界

英國海圖第二〇六九號參看


ネチホーノン山
ネサホーノン岬
マロキンカ島
ペンケニー岬
アチンキンカン島
ペンケグネイ（コニアム）入江
173°
173°
カラプピーク山
大
陸
アラカムチエーチエン島
アボレーシエフ（カラガン）入江
クインカイ島
グゼナー碇泊所
ルメレート入江
イトイグラン（チルクレーク）島
173°
30°
30°
173°
30°
5'0'
10'

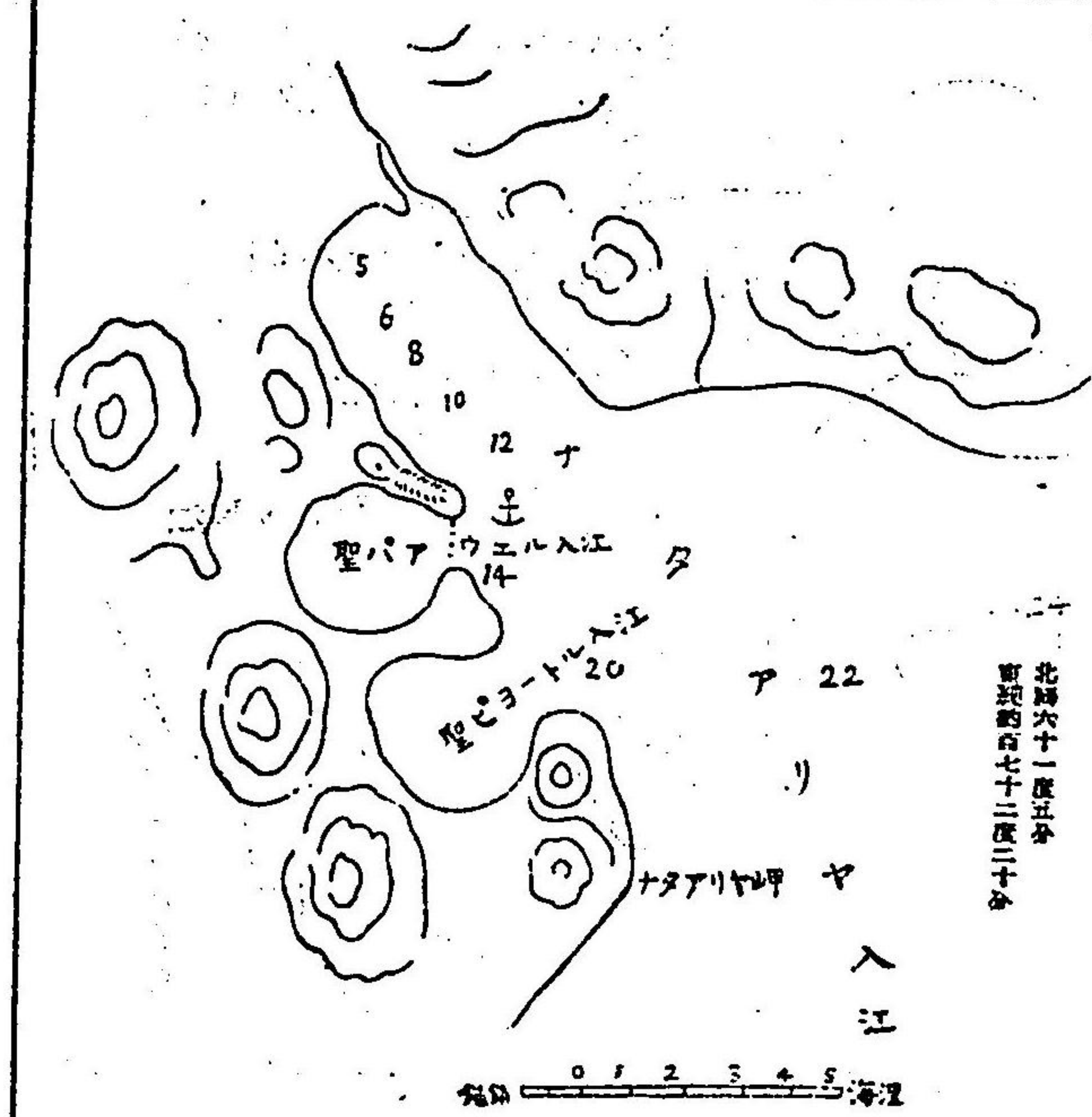
漁業協約締結談判會議錄附屬第二號

一、「アボレーシエフ」（カラガン）入江

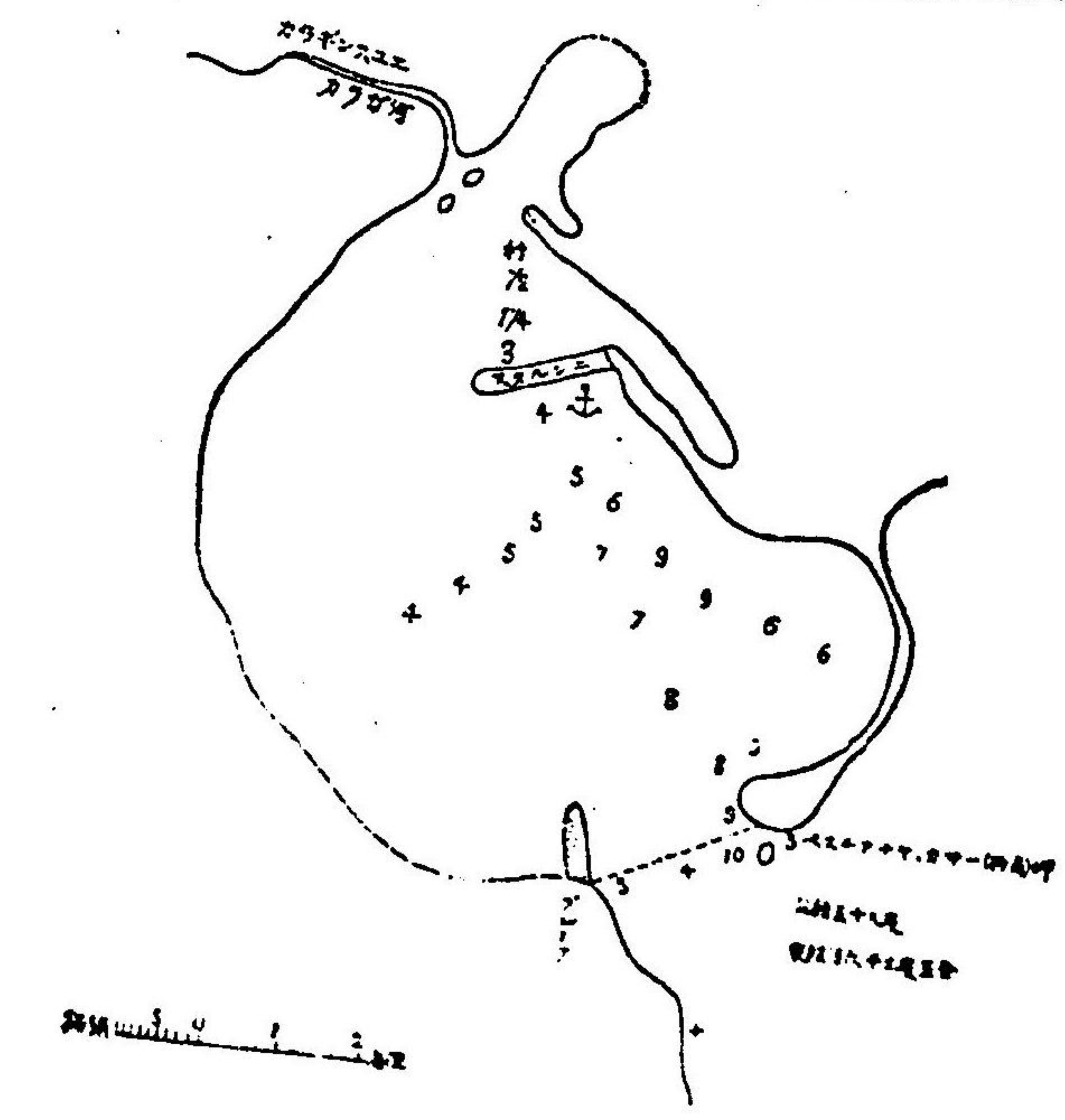
二、「ルメレート」入江

……ハ「インレット」境界

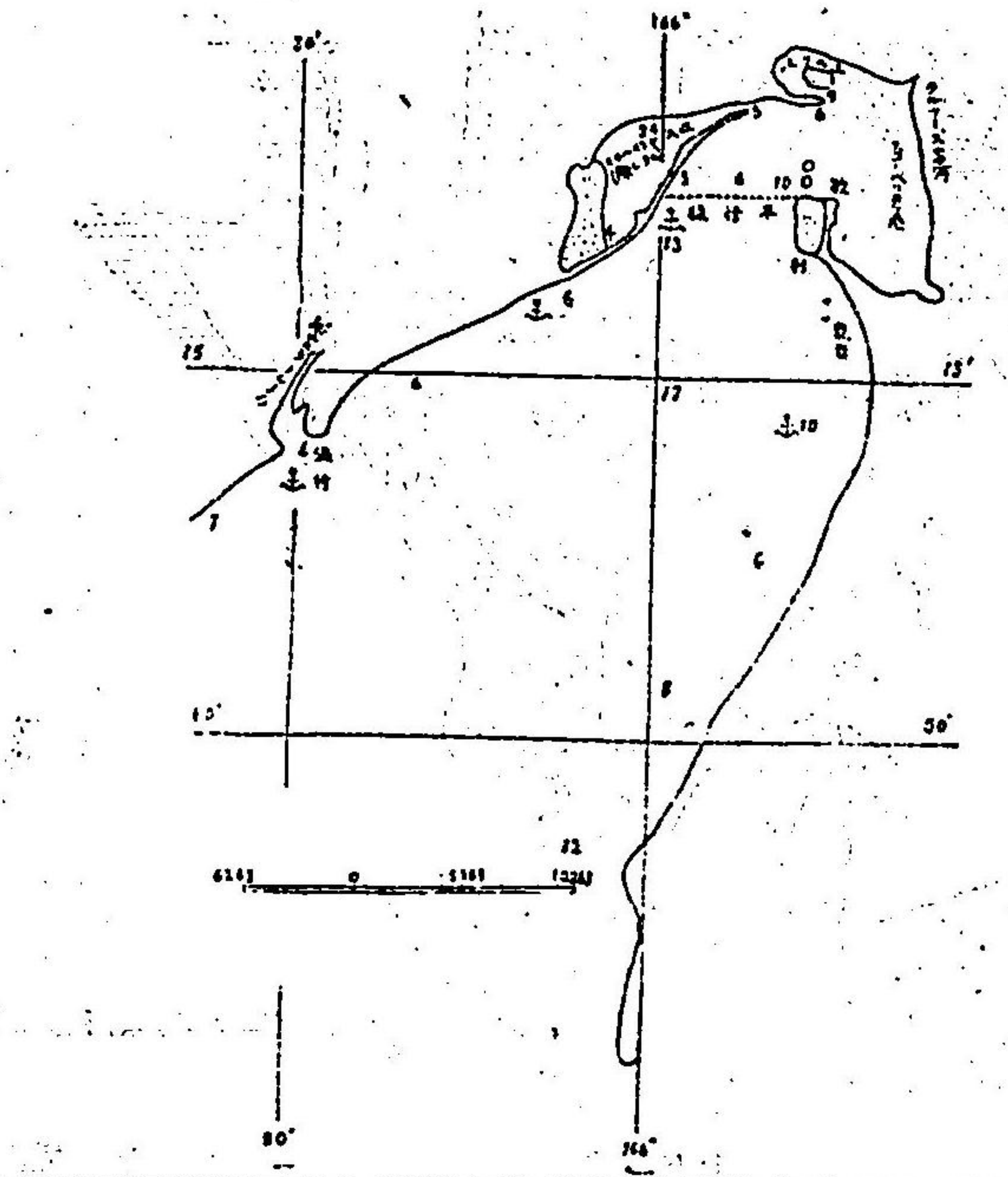
英國海圖第二〇七一號參看


聖パアウエル入江
聖ピヨートル入江
ナタアリヤ岬
ナ タ ア リ ヤ 入 江
北緯六十一度五分
東經百七十二度三十分
海浬

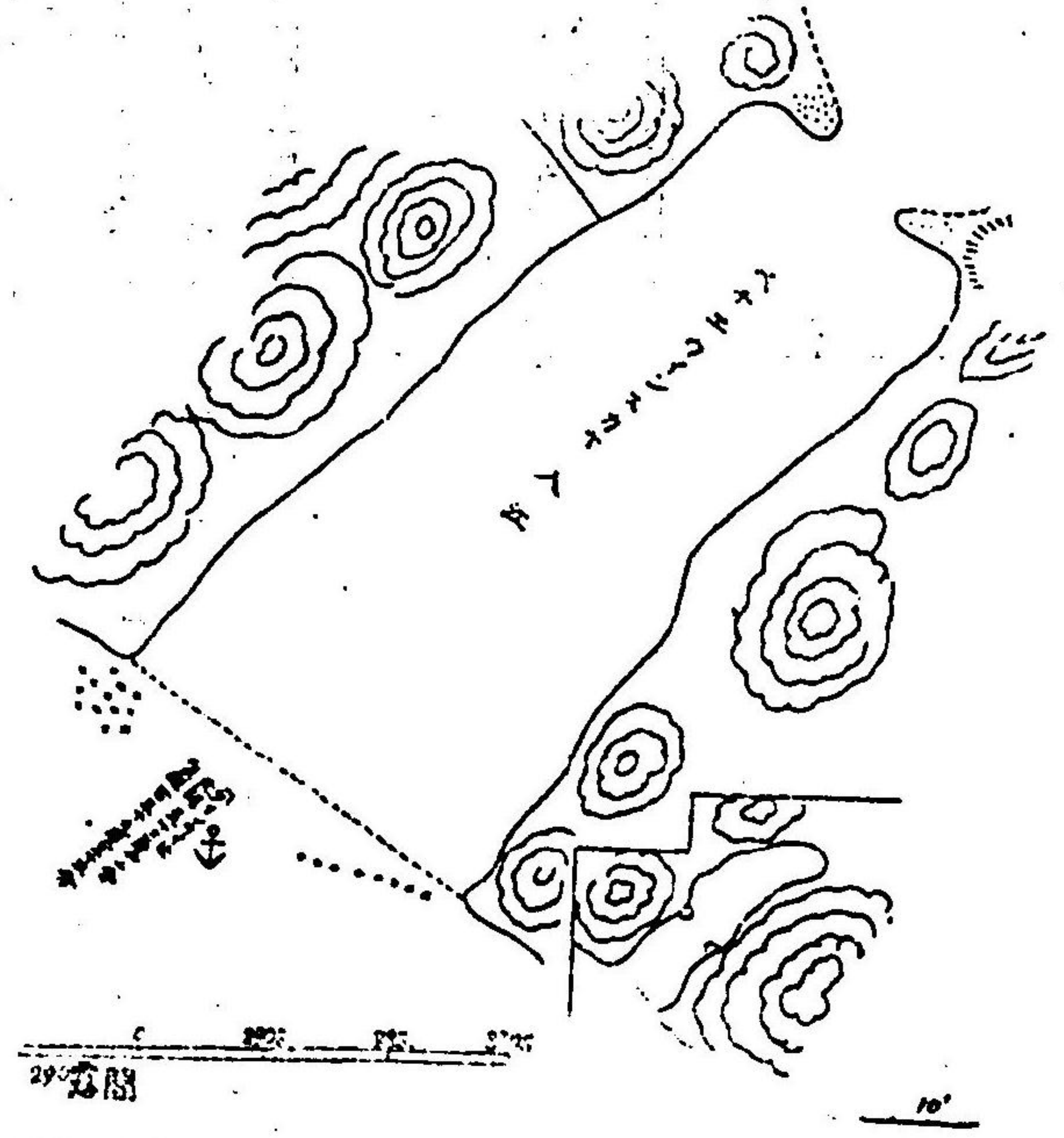
漁業協約締結談判會議錄附圖第三號
聖「パアウエル」入江
---ハ「インレット」境界
英國海圖第二〇一七號參看


カラガ河
カラガ
村落
海里

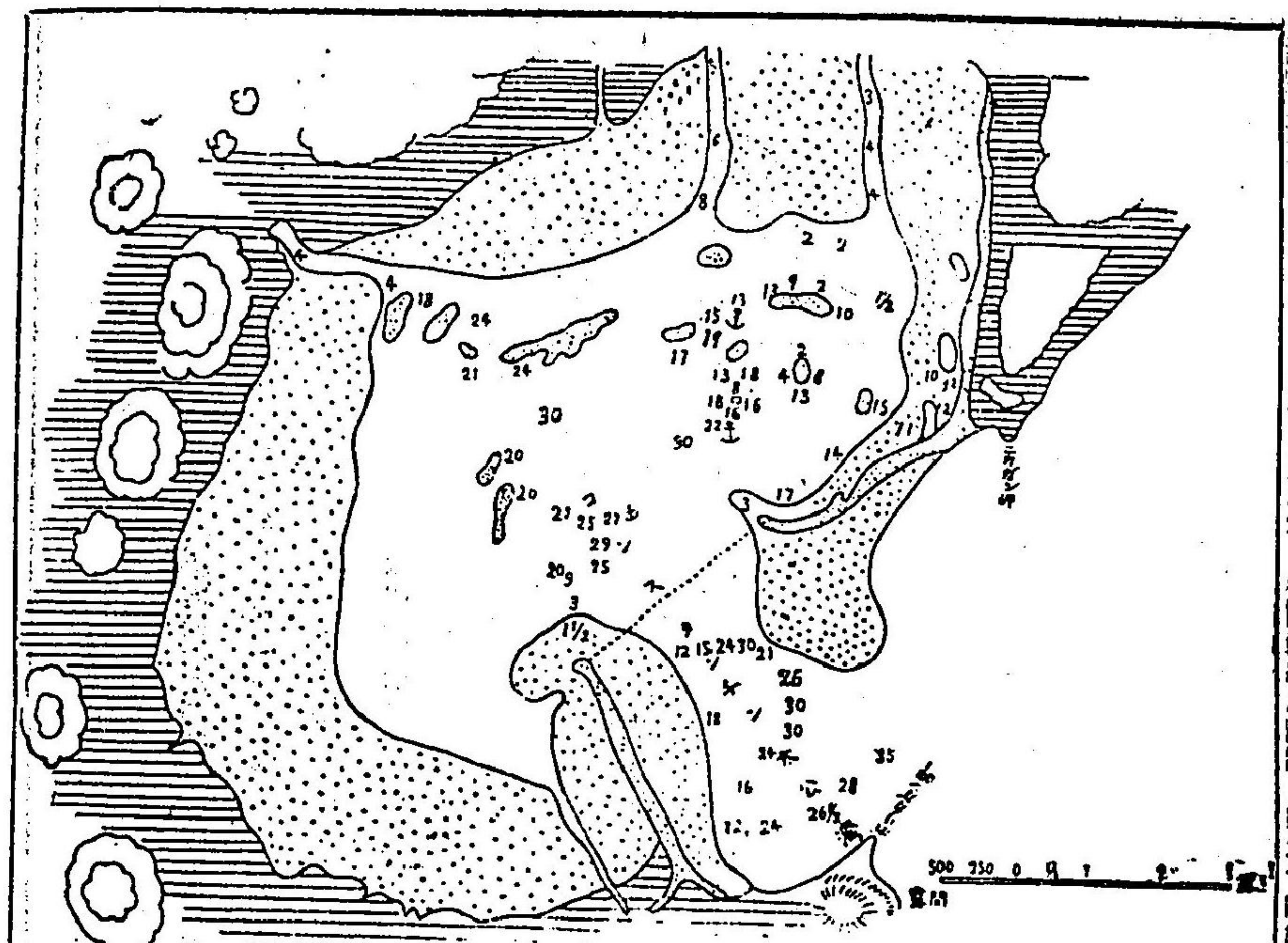
漁業協約締結談判會議錄附圖第四號
「カラガ」灣
---ハ「インレット」境界
英國水路部海圖第二〇七一號參看


166°
30'
15'
15'
50'
80'

漁業協約締結談判會議錄附圖第五號
「メロン、ゴルフ」灣
---ハ「インレット」境界
露國海圖第二九八號參看


ベナエウインスカヤ入江

漁業協約締結談判會議錄附圖第六號
「ベナエウインスカヤ」入江
---ハ「インレット」境界
露國海圖第五六八號及一四五三號參看



漁業協約締結談判會議錄附屬第七號

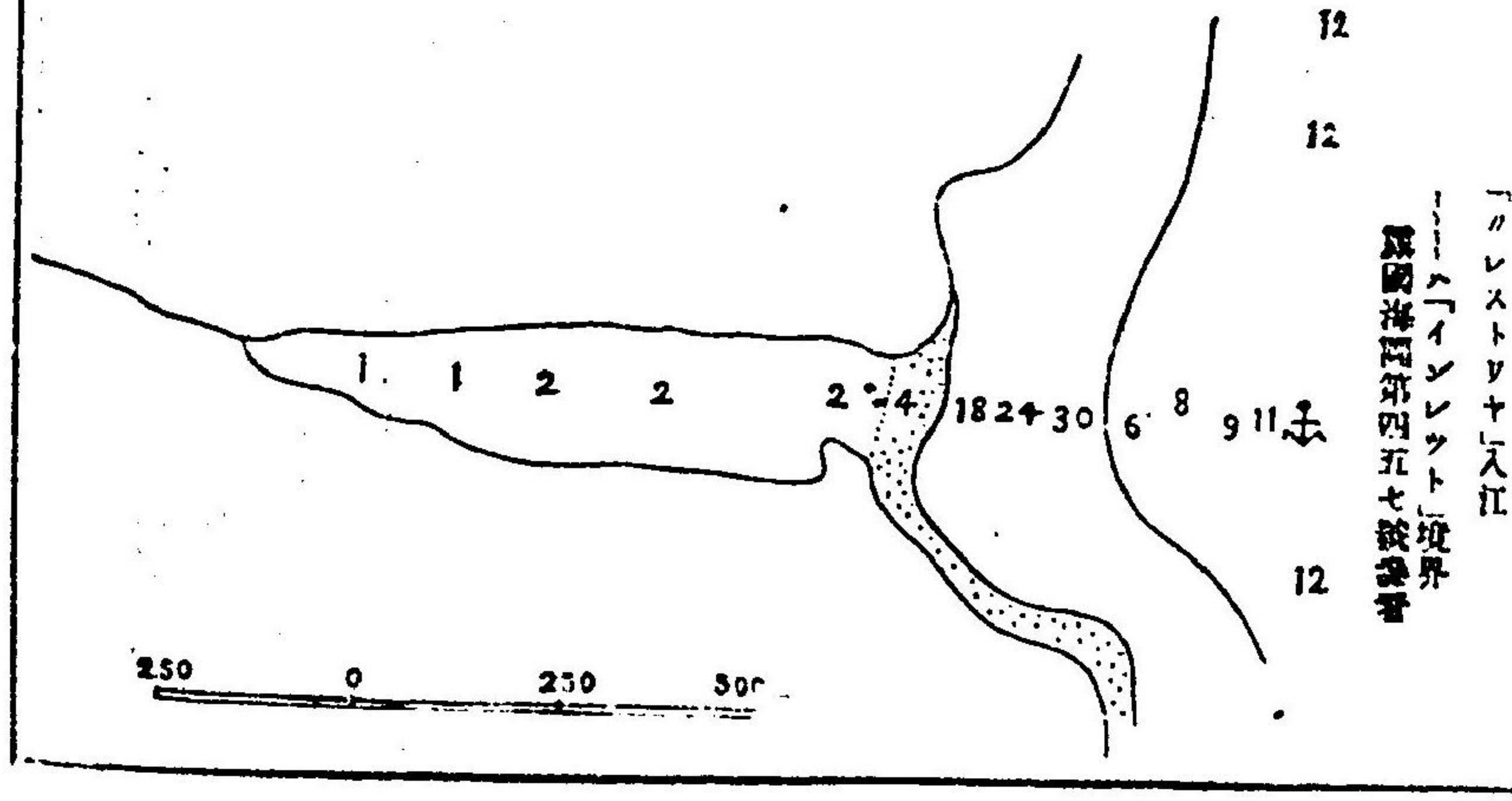
「コンスタンチン」大公灣

----ハ「インレット」境界

露國海圖第一四二六號參看

「グリンウイチ」北緯五十四度六分七秒

東經百三十七度三十七分三十秒


12
12
1 1 2 2 2 4 18 24 30 6 8 9 11
12
250 0 250 500

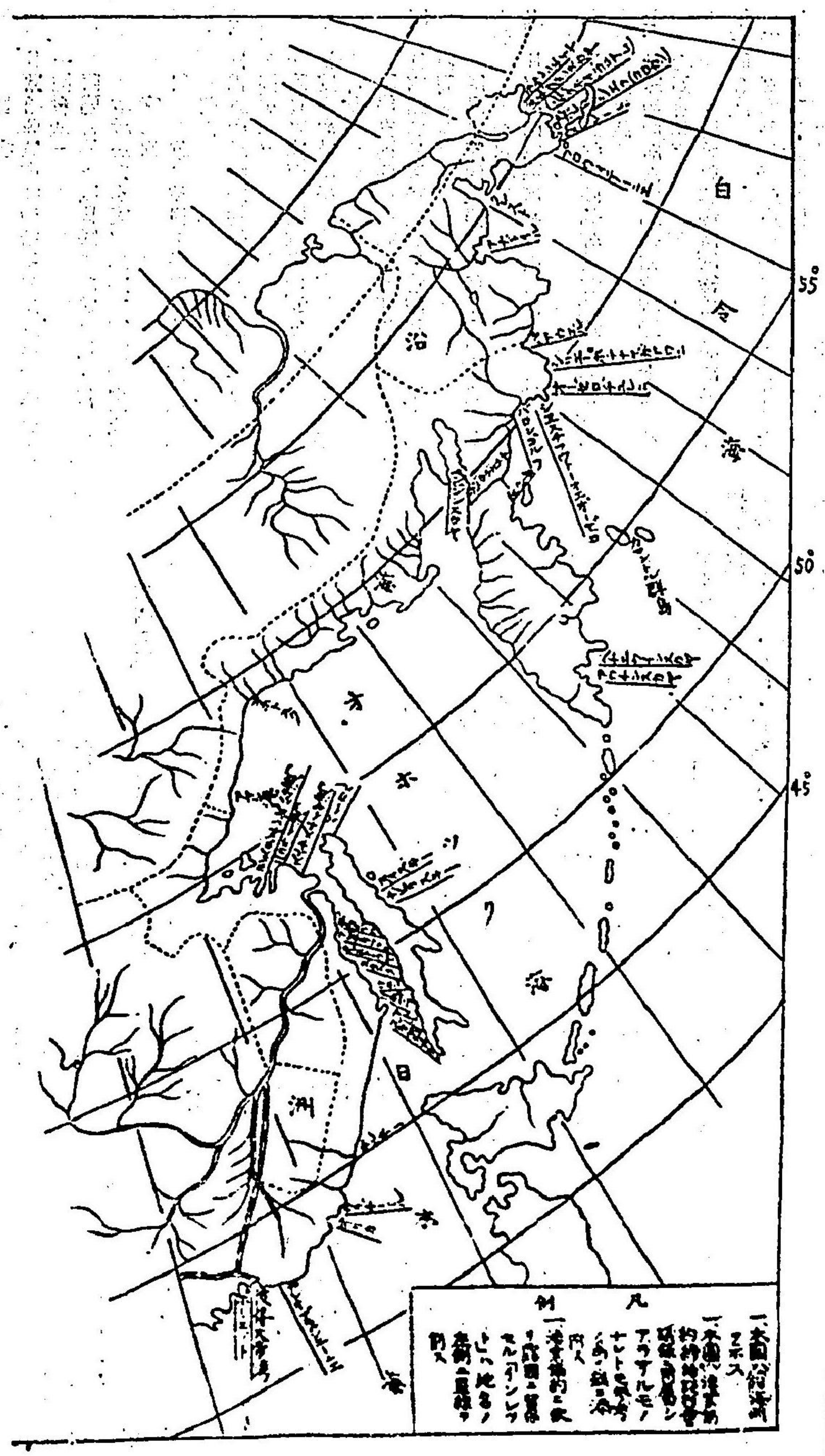
漁業協約締結談判會議錄附屬第八號

「グレストリヤ」入江

----ハ「インレット」境界

露國海圖第四五七號參看

備考　日露漁業協約第六條、第十一條及日露漁業協約ニ關スル宣言書中「沿海州」ナル文字ハ露領樺太ヲ包含スルモノト解スヘキモノトス


白
令
海
55°
50°
45°
沿
オ
ホ
ー
ツ
ク
海
日
本
海
凡例
一、本圖ハ沿海州ヲ示ス

日露通商航海條約締結會議錄左ノ如シ

明治四十年十月十日官報

目次

一、日露通商航海條約締結會議錄第一號（第一同會議）
附屬書第一號日露通商航海條約案（日本政府提出案）、議定書案竝外交文書案二通
同　第二號同上條約案及議定書案説明書

二、日露通商航海條約締結會議錄第二號（第二同會議）
附屬書露西亞國政府修正摘要書

三、日露通商航海條約締結會議錄第三號（第三同會議）
附屬書露西亞國政府修正摘要書（承前）

四、日露通商航海條約締結會議錄第四號（第四同會議）
附屬書露西亞國政府修正案摘要書ニ對スル同答書

五、日露通商航海條約締結會議錄第五號（第五同會議）

六、日露通商航海條約締結會議錄第六號（第六同會議）

七、日露通商航海條約締結會議錄第七號（第七同會議）

日露通商航海條約締結會議錄第一號

第一同會議

千九百六年（八月四日　七月二十二日）午後二時三十分外務大臣兼露西亞國皇帝陛下ノ侍從「イズヴォルスキー」閣下議長ノ下ニ露西亞國外務省ニ於テ開會

列席者

日本國　全權委員聖彼得堡駐箚日本國特命全權公使本野閣下、書記官聖彼得堡日本國公使館一等書記官落合氏、書記官同公使館二等書記官丸毛氏

露西亞國　全權委員宮内大臣元老院議員「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏、商工務省委員商務局次長「プリレジャイエッフ」氏、書記官商工務省外國貿易課長、帝室ナヤンデオンム、「ウエルクホウスキー」氏、書記官同省外國貿易課部長「ソロトボッフ」氏、書記官同省外國貿易課部長「リッサンコ」氏、書記官外務省第一局事務取扱「グラヴエ」氏

缺席者　商工務省委員商工局參事官「ツンゴザヴオエ」氏、商工務省委員通商局長「アレクセイエッフ」氏

「イズヴォルスキー」閣下ハ開議ヲ宣言シ兩國交誼ノ將醇ヲ證明シ日露通商航海條約締結ニ關スル會議ノ事業カ兩國ノ利益ニ便スヘキ結果ニ達スヘキ希望ヲ述ヘタリ

本野氏ハ露西亞國外務大臣ノ陳述セル意見ニ賛成シ議事ノ進行ヲ容易ナラシメムカ爲露西亞國全權委員ニ對シテ追テ本件ニ關スル詳細ナル説明書（附屬書第二號）ヲ交付スルコトト爲シ以テ日本國政府作成通商航海條約案（附屬書第一號）ヲ交付セリ

「イズヴォルスキー」氏ハ此ノ通知ニ付日本國公使ニ謝辭ヲ述ヘ以テ該案ヲ愼重ナル調査ニ附スヘキコトヲ約シ同時ニ氏ハ日本國全權委員ニ對シテ「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ノ全權委任狀ハ、未タ準備セラレスト雖次回ノ會議ニ於テ該書類ノ交換ヲ行フコトヲ得ヘク準備スヘキ旨ヲ通知セリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ會議事業順序ノ問題ヲ提起シ日本國政府作成條約案カ露西亞國政府ニ依リテ調査セラレ露西亞國ノ希望カ決定セラルルヤ直ニ次回ノ會議ヲ開クヘキ旨ヲ提議セリ然ルトキハ條約案ノ逐條討議ヲ爲シ以テ訣列ヲ適行セシムルコトトナルヘク其ノ議事錄ハ簡明ナル文體ヲ以テ編成シ討議ノ最重要ナル點ノ證明ニ限ルヘク兩國全權委員ノ認可ヲ經且本書二通ヲ作成シ共ニ其ノ記名ヲ爲スコトヲ要ス

露西亞國全權委員ノ請求ニ基キ「プリレジャイエッフ」氏ハ露西亞國墺地利洪牙利國間通商條約締結會議ニ於テ毎會議單一ノ議事錄ヲ作リタルコト且此ノ方法ハ日露通商條約ノ會議ニ於テモ亦之ヲ採用スヘキ意思ヲ陳述シタリ

本野氏ハ會議錄カ簡明ニ編成セラルヘキコトニ付異議ヲ有セサルモ疑ノ存スル場合ニ於テハ會議錄ニ據ルコトアルヘキ事ヲ考ヘ其ノ編成ニ付最大正確ヲ加フヘキ事ヲ主張シ同時ニ「プリレジャイエッフ」氏カ提唱セル會議錄編成方法ニ關スル問題ノ解決ハ全ク議事ノ進行ニ關スルモノナルカ故ニ後日ニ之ヲ留保スルコトヲ得ヘキ意見ヲ陳述シタリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ日本國全權委員ノ所見ニ賛成シ此ノ問題ヲ中止シタリ

本野氏ハ兩國全權委員ノ會議中ニ生スヘキ提議若ハ其ノ提議ノ修正ハ互ニ書面ニ依リテ之ヲ通知スヘキ希望ヲ述ヘタリ

「マレヴスキー」、マレヴィッチ」氏ハ會議ノ事業ヲ進行シ且書記官ノ任務ヲ容易ナラシムルノ目的ヲ以テ此ノ方法ノ採用ニ付異議ヲ有セス

午後四時散會

本野一郎（記名）
「イズヴォルスキー」（記名）
「マレヴスキー、マレヴィッチ」（記名）

附屬書第一號

日露通商航海條約案

日本國皇帝陛下及全露西亞國皇帝陛下ハ兩國通商上ノ關係ヲ進捗セシメムカ爲明治三十八年九月五日即千九百五年八月二十三日（九月五日）締結講和條約第十二條ニ基キ公正ノ主義ト相互ノ利益ヲ基礎トシ新ニ一ノ通商航海條約ヲ締結スルコトニ決シ之カ爲ニ日本國皇帝陛下ハ、、、、、、、、、、、ヲ全露西亞國皇帝陛下ハ、、、、、、、、、、、、ヲ各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ各全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ以テ左ノ諸條ヲ協議決定セリ

第一條

兩締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ其ノ國ノ法律ニ遵由シ何レノ所ニ到リ旅行シ或ハ居住スルモ全ク隨意タルヘク而シテ其ノ身體及財産ニ對シテハ完全ナル保護ヲ享受スヘシ

該臣民ハ其ノ權利ヲ伸張シ及防護セムカ爲自由ニ且容易ニ裁判所ニ訴出ルコトヲ得ヘク又該裁判所ニ於テ其ノ權利ヲ伸張シ及防護スルニ付内國臣民ト同樣ニ代言人及代人ヲ撰擇シ且使用スルコトヲ得ヘク而シテ右ノ外司法取扱ニ關スル各般ノ事項ニ付相互ノ條件ヲ以テ内國臣民ノ享有スル總テノ權利及特典ヲ享有スヘシ、

住居權、旅行權及各種動産ノ所有、遺囑又ハ其ノ他ノ方法ニ因ル所ノ動産ノ相續竝合法ニ得ル所ノ各種財産ノ如何ニ處分スルコトニ關シ兩締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ在リテ内國臣民若ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ト同樣ノ特典、自由及權利ヲ享有シ且此等ノ事項ニ關シテハ内國臣民若ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ニ比シテ多額ノ税金若ハ賦課金ヲ徵收セラルルコトナカルヘシ

兩締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ良心ニ關シ完全ナル自由及法律、勅令及規則ニ從テ公私ノ禮拜ヲ行フノ權利竝其ノ宗敎上ノ慣習ニ從ヒ埋葬若ハ火葬ノ爲設置保存セラルル所ノ適當便宜ノ地ニ自國人ヲ埋葬若ハ火葬スルノ權利ヲ享有スヘシ

動産及不動産ノ所有權ニ關スル各般ノ事項ニ關シテハ露西亞國ニ於ケル日本國臣民及日本國ニ於ケル露西亞國臣民ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ト均等ノ取扱ヲ受クヘキモノトス

何等ノ名義ヲ以テスルモ該臣民ヲシテ内國臣民若ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ノ納ムル所若ハ將來納ムヘキ所ニ異ナルカ又ハ之ヨリ多額ノ取立金若ハ租税ヲ納メシムルヲ得ス

兩締約國ノ一方ノ臣民ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ住居スル者ハ陸軍、海軍、護國軍、民兵等ニ論ナク總テ强迫兵役ヲ免カレ且其ノ服役ノ代リトシテ取立ル所ノ一切ノ納金ヲ免カレ又一切ノ强募公債及軍事上ノ賦斂或ハ徵發ヲ免カルヘシ

前記ノ免除ハ不動産ノ所有ニ付著スル所ノ賦課金及一般ノ内國臣民カ土地所有者、農業者又ハ土地若ハ建物ノ占有者トシテ負擔スルコトアルヘキ軍事上ノ賦役及徵發ヲ包含セサルモノトス

第二條

兩締約國ノ間ニハ相互ニ通商航海ノ自由アルヘシ

兩締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内何レノ所ニ於テモ總テ工業又ハ手工業ニ從事シ正業ニ屬スル各種ノ生産物、製造品及貨物ノ卸賣若ハ小賣營業ニ從事スルヲ得ヘシ右營業ニ從事スルニ於テ自身ニ之ヲ爲シ或ハ代理人ヲ以テシ又ハ一人ニテ之ヲ爲スモ外國人若ハ内國臣民ト組合ヲ結ヒテ之ヲ爲スモ隨意タルヘク又家屋、倉庫ヲ所有シ或ハ之ヲ借受ケ又ハ使用シ住居及營業ノ爲ニ土地ヲ借受クルコトヲ得但内國臣民ト同樣其ノ國ノ法律、警察規則及税關規則ヲ遵守スルヲ要ス

該臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ノ各地、諸港及諸河ニシテ外國通商ノ爲開カレ又ハ開カルヘキ場所ヘ船舶及貨物ヲ以テ自由ニ到ルヲ得且通商及航海ニ關シテハ政府、官吏、公吏、一私人或ハ會社若ハ何等施設ノ名義ヲ以テスルカ又ハ其ノ利益ノ爲ニ課セラルル所ノ税金或ハ取立金ハ其ノ性質若ハ名稱ノ如何ヲ論セス内國臣民ノ拂フ所ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノモノヲ拂フコトナク内國臣民ト同一ノ取扱ヲ受クヘキモノトス

然レトモ本條及前條中ニ揭クル規定ハ兩國ノ一方ニ於テ現ニ行ハレ又ハ行ハルルコトアルヘキ商業、警察、公安及衞生ニ關スル特別ノ法律、勅令及規則ニシテ外國人一般ニ適用スヘキモノ

ニハ何等ノ影響ヲ及ホササルモノトス

第三條

兩締約國ノ一方ノ臣民カ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ住居、商業若ハ工業ノ爲ニ供スル家宅、倉庫、店舗及之ニ屬スル構造物ハ侵スヘカラス

右家宅及構造物ヘハ强ニ侵入搜索スヘカラス又帳簿、書類或ハ簿記帳ヲ檢査點閲スヘカラス但内國臣民ニ對シ法律、勅令及規則ヲ以テ制定セル條件及定式ニ據ルトキハ此ノ限ニ在ラス

第四條

全露西亞國皇帝陛下ノ版圖内ノ生産或ハ製造ニ係ル物品ヲ何レノ地ヨリ日本國皇帝陛下ノ版圖内ヘ輸入シ又日本國皇帝陛下ノ版圖内ノ生産或ハ製造ニ係ル物品ヲ何レノ地ヨリ全露西亞國皇帝陛下ノ版圖内ニ輸入スルニモ總テ別國ノ生産或ハ製造ニ係ル同種ノ物品ニ課スル所ノ税ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノ税ヲ課セラルルコトナカルヘシ

兩締約國ノ一方ノ版圖内ヘ別國ノ生産或ハ製造ニ係ル物品ノ輸入ヲ禁止スルニ非サレハ他ノ一方ノ版圖内ノ生産或ハ製造ニ係ル同種ノ物品ヲ何レノ地ヨリ輸入セラルルモ之ヲ禁止スルコトナカルヘシ此規定ハ人畜或ハ農業ニ有用ナル植物ノ安全ヲ保護スルニ必要ナル衛生上及其ノ他ノ禁止ニ適用スヘカラサルモノトス

遼東租借地ノ生産若ハ製造ニ係ル物品ニシテ陸路滿洲國境ヲ經テ露西亞國ヘ輸入スルモノ及露西亞國ノ生産若ハ製造ニ係ル物品ニシテ滿洲國境ヲ經テ陸路遼東租借地ニ輸入スルモノハ孰レモ輸入税ヲ免セラルヘシ

第五條

兩締約國ノ一方ノ版圖内ヨリ他ノ一方ノ版圖内ヘ輸出スル一切ノ物品ヘハ他ノ各外國ヘ輸出スル同種物品ニ對シ賦課シ若ハ賦課スヘキ所ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノ税金又ハ雜費ヲ賦課スルコトナカルヘシ又兩締約國ノ一方ノ版圖内ニ於テ他ノ各外國ニ向ヒ物品ノ輸出ヲ禁止スルニ非サレハ他ノ一方ノ版圖内ヘ同種ノ物品ヲ輸出スルコトヲモ禁止セサルヘシ

第六條

兩締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ内地通過税、保税倉庫、獎勵金、便益及戻税ニ關シ最惠國ノ臣民或ハ人民ト全ク均等ノ取扱ヲ享受スヘシ

第七條

日本國皇帝陛下ノ版圖内ノ諸港ヘ日本國ノ船舶ヲ以テ適法ニ輸入シ若ハ輸入セラルヘキ物品ハ又露西亞國ノ船舶ヲ以テ同樣ニ之ヲ右諸港ニ輸入スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ日本國船舶カ右樣ノ物品ヲ輸入スルトキ課スヘキ税金或ハ雜費ノ外何等ノ名義ヲ以テスルモ更ニ別種或ハ多額ノ税金、雜費等ヲ課セサルヘシ又全露西亞國皇帝陛下ノ版圖内ノ諸港ヘ露西亞國ノ船舶ヲ以テ適法ニ輸入シ若ハ輸入セラルヘキ物品ハ又日本國ノ船舶ヲ以テ同樣ニ之ヲ右諸港ヘ輸入スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ露西亞國船舶カ右樣ノ物品ヲ輸入スルトキ課スヘキ税金或ハ雜費ノ外何等ノ名義ヲ以テスルモ更ニ別種或ハ多額ノ税金、雜費等ヲ課セサルヘシ右物品ハ直チニ原産地ヨリ到ルト其ノ他ノ場所ヨリ到ルトヲ問ハス必ス之ヲ施スモノトス

輸出ニ關シテモ前項ノ場合ト同樣全ク均等ノ取扱ヲ施スヘシ故ニ締約國ノ一方ヨリ適法ニ輸出シ若ハ輸出セラルヘキ物品ハ其ノ輸出ノ日本國船舶ニ依ルト露西亞國船舶ニ依ルトニ拘ハラス又其ノ仕向先ノ締約國ノ一港タルト第三國ノ一港タルトヲ問ハス締約國ノ版圖内ニ於テハ之ニ課スル同一ノ輸出税ヲ以テシ又之ニ許スニ同一ノ獎勵金及税金拂戻ノコトヲ以テスヘシ

第八條

政府、官吏、公吏、一私人、會社若ハ何等施設ノ名義ヲ以テスルカ又ハ其ノ利益ノ爲ニ課セラルル所ノ噸税、港税、水先案内料、燈臺税、檢疫費其ノ他之ト同種ノ税金ハ其ノ性質及名義ノ如何ニ拘ハラス同一ノ條件ヲ以テ同樣ノ場合ニ於テ内國船舶一般ニ課スルモノニ非サレハ兩締約國ノ一方ハ其ノ版圖内ノ港ニ於テ之ヲ他ノ一方ノ船舶ニ課セサルヘシ此ノ如キ均等ノ取扱ハ兩國ノ船舶カ何レノ地或ハ港ヨリ來リ又何レノ所ニ往クモノタリトモ相互同一タルヘキモノトス

第九條

兩締約國ノ一方ハ其ノ版圖内ノ津、灣、船塢、碇泊所或ハ河川ニ於テ船舶ノ繫留又貨物ノ船積、船卸ニ關スル一切ノ事項ニ就キ他ノ一方ノ締約國ノ船舶カ均霑セサル特典ヲ自國船舶ニ許與セサルヘシ但本件ニ關シテモ亦兩締約國ノ目的ハ兩國ノ船舶ニ對シ互ニ全ク均等ノ取扱ヲ施スニ在ルモノトス

第十條

兩締約國ノ沿海貿易ハ本條約ニ於テ規定スルノ限ニ在ラス各其ノ法律、勅令及規則ニ從ヒ之ヲ規定スヘキモノトス然レトモ日本國皇帝陛下ノ版圖内ニ於ケル露西亞國臣民又ハ全露西亞國皇帝陛下ノ版圖内ニ於ケル日本國臣民ハ此ノ事項ニ關シテハ各右法律、勅令及規則ヲ以テ他ノ外國臣民或ハ人民ニ許與シ若ハ許與セラルヘキ諸權利ヲ享有スルモノトス

全露西亞國皇帝陛下ノ版圖内ノ二箇以上ノ港ヘ仕向ケタル荷物ヲ外國ニ於テ積載シタル日本國船舶及日本國皇帝陛下ノ版圖内ノ二箇以上ノ港ヘ仕向ケタル荷物ヲ外國ニ於テ積載シタル露西亞國船舶ハ外國貿易ヲ許サレタル仕向港ノ一ニ於テ其ノ積荷ノ一部ヲ陸揚シ而シテ其ノ最初ニ積載シタル荷物ノ剩餘ヲ陸揚スル爲他ノ一港若ハ數港ヘ進航スルコトヲ得ヘシ但常ニ兩國ノ法律及税關規則ニ從フヘキモノトス

第十一條

兩締約國ノ一方ノ軍艦或ハ商船ニシテ暴風又ハ其ノ他ノ危難ニ遭遇シ避難ノ爲已ムヲ得ス他ノ一方ノ港ニ進入スルモノハ内國船舶ノ拂フヘキ税金ノ外何等ノ税金ヲ拂フコトナク其ノ港ニ於テ更ニ艤裝ヲ爲シ一切ノ需用品ヲ求メ再ヒ航行スルヲ得ヘシ但商船ノ船長ニシテ其ノ費用ヲ支辨スル爲其ノ積荷ノ一部ヲ賣却スルヲ要スル場合ニハ該船長ハ其ノ寄港地ノ規則及税目ヲ遵守スヘキモノトス

兩締約國ノ一方ノ軍艦或ハ商船ニシテ他ノ一方ノ沿岸ニ於テ淺瀨ニ乘上ケ或ハ難破シタルトキハ地方官ヨリ其ノ事件ノ生シタル地方ニ在ル所ノ總領事、領事、副領事又ハ代辨領事ヘ其ノ旨ヲ通知スヘシ但若其ノ地方ニ領事官ノ駐在セサルトキハ最近地方ノ總領事、領事、副領事又ハ代辨領事ヘ通知スヘシ

全露西亞國皇帝陛下ノ領水ニテ難破シ若ハ海岸ニ乘上ケタル日本國船舶ノ救助ニ關スル一切ノ手續ハ露西亞國法律、勅令及規則ニ從テ之ヲ爲スヘク又相互ノ主義ニ基キ日本國皇帝陛下ノ領水ニテ難破シ若ハ海岸ニ乘上ケタル露西亞國船舶ニ關スル一切ノ救助ノ處分ハ日本國法律、勅令及規則ニ從テ之ヲ爲スヘシ

右難破若ハ乘上ケタル船舶竝其ノ器具及其ノ他一切ノ附屬品及該船舶ヨリ救上ケタル貨物竝商品及右等ノ諸物件ニシテ海中ニ投棄セラレタルモノ又ハ之ヲ賣却シタルトキハ其ノ收得金竝該難船内ニ發見セラレタル一切ノ書類ハ右船舶ノ持主或ハ代理人ヨリ要求スルトキハ之ニ引渡スヘシ右持主或ハ代理人ノ現場ニ在ラサルトキハ内國法律ニ定メタル期限内ニ當該總領事、領事、副領事或ハ代辨領事ヨリ請求アレハ之ヲ引渡スヘシ而シテ右領事官、持主或ハ代理人ハ内國船難破ノ場合ニ於テ拂フヘキ所ノ物品保存費竝難破救助費及其ノ他ノ費用ノミヲ拂フヘキモノトス

難破船ヨリ救上ケタル貨物及商品ハ消費ノ爲ニ通關手續ヲ爲スモノニ非サレハ一切ノ關税ヲ免除スヘシ但消費ノ爲ニ賣捌ク場合ニハ普通ノ關税ヲ納ムルヲ要スルモノトス

兩締約國ノ一方ノ臣民ニ屬スル船舶ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ淺瀨ニ乘上ケ或ハ難破シタルトキ其ノ持主、船長若ハ他ノ持主代理人カ不在ノ場合若ハ現場ニ在リテ請求スル場合ニハ當該總領事、領事、副領事若ハ代辨領事ハ其ノ自國民ニ必要ナル輔助ヲ與フル爲干與スルコトヲ許サルヘキモノトス

第十二條

本條約ニ於テハ日本國ノ國法ニ從ヒ日本國船舶ト看做サルヘキ一切ノ船舶ハ之ヲ日本國船舶ト看認メ又露西亞國ノ國法ニ從ヒ露西亞國船舶ト看做サルヘキ一切ノ船舶ハ之ヲ露西亞國船舶ト看認ムヘシ

日本國ノ現行法律ニ從ヒ作成シタル日本國ノ船舶積量測度證書及露西亞國ノ現行法律ニ從ヒ作成シタル露西亞國ノ船舶積量測度證書ハ日本國及露西亞國ノ諸港ニ於テ更ニ測度ヲ爲スコトナクシテ承認セラルヘキモノトス

第十三條

兩締約國ノ一方ニ屬スル軍艦或ハ商船ノ海員ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ脫船スル者アルニ際シ右船舶所屬國ノ領事又ハ其ノ代理官ヨリ其ノ逮捕、引渡ノコトヲ地方官ニ依賴スルトキハ該地方官ハ其ノ權力ノ及フ限リ脫船人ヲ逮捕シ且之ヲ引渡ス爲助力ヲ爲スヲ要スルモノトス

但海員カ其ノ各自ノ所屬國ニ於テ脫船シタルトキハ此ノ規定ヲ適用セサルモノトス

第十四條

兩締約國ハ其ノ一方ノ通商航海及工業ヲ他ノ一方ニ於テ最惠國ノ基礎ニ置クノ主意ヲ有スルニ因リ通商航海工業及手工業ニ關スル一切ノ事項ニ關シ其ノ一方ヨリ別國ノ政府、船舶、臣民或ハ人民ニ現ニ許與シ或ハ將來許與スヘキ一切ノ特典、殊遇若ハ免除ハ他ノ一方ノ政府、船舶又ハ臣民ニモ卽時ニ且條件ヲ附セスシテ之ヲ許與スヘキコトヲ兩締約國ニ於テ約ス

第十五條

兩締約國ノ一方ハ他ノ一方ノ港、都府及其ノ他ノ場所ニ總領事、領事、副領事、領事代及代辨領事ヲ置クコトヲ得ヘシ但領事官ノ駐在ヲ認許スルニ便宜ナラサル場所ハ此ノ限ニ在ラス

然レトモ右ノ制限ハ他ノ諸外國ニ對シ之ヲ適用スルニ非サレハ一方ノ締約國ニ對シテ之ヲ適用スルヲ得サルモノトス

總領事、領事、副領事、領事代及代辨領事ハ相互

ノ條件ヲ以テ一切ノ職務ヲ執行シ且其ノ在留國ニ於テ最惠國ノ領事官ニ現ニ許與シ或ハ將來許與セラルヘキ一切ノ特典、特權、免除及職權ヲ享有スルコトヲ得ヘシ

露西亞國ニ於ケル文書檢閲ニ對シテハ日本國ヨリ露西亞國ニ派遣スル外交代表機關及正式領事館並之ニ附屬スル館官吏ハ新聞雜誌並學術技藝及文學ノ著作ニ關シ完全ナル自由ヲ享有スヘシ

第十六條

兩締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖內ニ於テ法律ニ定ムル所ノ手續ヲ履行スルトキハ專賣特許、商標及意匠ニ關シ內國臣民ト同一ノ保護ヲ受クヘシ

第十七條

本條約ハ批准交換後十日ヲ經テ實施セラレ玆ニ規定シタル方法ニ依リ終了スル迄效力ヲ持續スヘシ

兩締約國ノ一方ハ明治四十三年七月十七日即千九百十年七月四日(十七日)以後ハ何時タリトモ本條約ヲ終了セムコトヲ欲スル旨ヲ他ノ一方ヘ通知スルノ權利ヲ有スヘシ而シテ此ノ通知ヲ爲シタル後十二箇月ヲ經過シタルトキハ本條約ハ全然消滅ニ歸スヘキモノトス

第十八條

本條約ハ批准セラルヘシ該批准ハ成ルヘク速ニ且如何ナル場合ニ於テモ其ノ調印後四箇月以內ニ東京ニ於テ交換セラルヘシ

右證據トシテ雙方ノ全權委員ハ本條約ニ記名調印スルモノナリ

明治三十九年　月　日即千九百六年
月　日(　月　日)ニ於テ之ヲ作ル

議定書案

日本國皇帝陛下ノ政府及全露西亞國皇帝陛下ノ政府ハ本日調印セシ通商航海條約ノ外雙方ニ關スル特別ノ事項ヲ規定スルヲ以テ兩國ノ利益ト爲シ雙方ノ全權委員ハ左ノ約定ニ同意セリ

第一　日本國臣民ノ携帶スル自國旅券ニ對スル露西亞國官憲ノ査證ノ有效期限ヲ六箇月トス

露西亞國官憲カ日本國臣民ニ外國行旅券ヲ交付シ若ハ其ノ所持ノ旅券ニ露西亞國出發許可ノ旨ヲ記入スルニ當リ徵收スル手數料若ハ取立金ハ何等ノ名義ヲ以テスルヲ問ハス五拾哥ヲ超過セサルヘシ

亞細亞露西亞ニ旅行シ若ハ居留スル日本國臣民ノ旅券或ハ居住券ニ對シ徵收スル査證料及手數料若ハ取立金ハ歐羅巴露西亞ニ對スル旅券或ハ居住券ニ關シ徵收スル金額ノ二分ノ一ヲ超過セサルヘシ

第二　露西亞帝國政府ハ滿洲國境ヲ經テ露西亞國領土ニ輸入スル日本國ノ貨物及商品ニ對シ賦課スル輸入税率ヲシテ如何ナル場合ニ於テモ西比利亞諸港ヲ經テ露西亞國領土ニ輸入スル貨物及商品ニ對シテ賦課スルモノヲ超過セシメサルコトニ同意ス

第三　本議定書ハ本日調印シタル通商航海條約ノ批准ト共ニ批准セラレタルモノト看做サルヘシ又本議定書ハ前記條約ノ無效ニ歸スルト同時ニ終了スヘキモノトス

右證據トシテ雙方ノ全權委員ハ本議定書ニ記名調印スルモノナリ

明治三十九年　月　日即千九百六年　月
日(　月　日)ニ於テ之ヲ作ル

在露日本國公使ヨリ露國外務大臣ニ至ル
外交文書案

拜啓陳者從來松花江ノ航權ハ千八百五十八年五月十六日締結露清條約中ニ露清兩國ノ船舶ノ外之ヲ他國ノ船舶ニ許與セサルコトニ規定相成居候處其ノ後ニ於ケル滿洲內地ノ商工業ハ著シク發達シタル事實ニ鑑ミ貴國政府ハ貴國ニ關スル限リ該航權ヲ今後日本帝國ノ船舶ニ及ホスコトニ御同意相成候樣致度帝國政府ノ訓令ニ依リ此段得貴意候敬具

露國外務大臣ヨリ在露日本國公使ニ至ル
外交文書案

拜啓陳者從來松花江ノ航權ハ千八百五十八年五月十六日締結露清條約中ニ露清兩國ノ船舶ノ外之ヲ他國ノ船舶ニ許與セサルコトニ規定相成居候處其ノ後ニ於ケル滿洲內地ノ商工業ハ著シク發達シタル事實ニ鑑ミ該航權ヲ今後日本帝國ノ船舶ニ及ホスコトニ關スル日本國皇帝陛下ノ政府ノ本日附公文ニ對シ帝國政府ハ帝國ノ關スル限リ全然之ニ同意ヲ表シ候此段得貴意候敬具

在露日本國公使ヨリ露國外務大臣ニ至ル
外交文書案

拜啓陳者日本國ト露西亞國トノ通商及漁業上ノ關係著シク發達シ且今後益々重要ト可相成ハ明瞭ニ有之候ニ付此際帝國政府ハ浦潮港及「ニコラエフスク」港ニ帝國領事館「ペトロパウロフスク」港ニ領事館分館ヲ設置致度候間貴國政府ニ於テ之ニ御同意相成候樣致度帝國政府ノ訓令ニ依リ此段得貴意候敬具

露國外務大臣ヨリ在露日本國公使ニ至ル
外交文書案

拜啓陳者露國ト日本國ノ通商及漁業上ノ關係著シク發達シ且今後益々重要ト可相成ハ明瞭ニ有之候ニ付浦潮港及「ニコラエフスク」港ニ日本國領事館「ペトロパウロフスク」港ニ領事館分館ヲ設置スルコトニ關スル日本國皇帝陛下ノ政府ノ本日附公文ニ對シ帝國政府ハ前記各港ニ日本國領事館及領事館分館ヲ設置スルコトニ全然同意ヲ表シ候此段得貴意候敬具

外交文書第一

日本國船舶松花江航權ノ件

千八百五十八年露清兩國間ニ締約セル愛琿條約第一條ハ黑龍江、松花江及烏蘇里ノ航行權ハ特ニ露清兩國ノ船舶ニ留保セラルヘキコトヲ規定セリ故ニ「ポーツマス」會議會議錄ニ記載セル如ク露西亞國全權委員ハ露西亞國ハ滿洲ニ於テ機會均等ノ主義ニ反セル何等專屬的特權ヲ有セス而シテ實際此ノ如キ特權存スルトキハ其ノ特權ハ無效ニ歸スヘキコトヲ聲明シタリ且此ノ點ニ關スル討議ノ結果講和條約第三條第二項ハ雙方ノ一致ヲ以テ下ノ如ク決定セラレタリ「露西亞帝國政府ハ清國ノ主權ヲ侵害シ又ハ機會均等主義ト相容レサル何等領土上利益又ハ優先的若ハ專屬的讓與若ハ免税ヲ滿洲ニ於テ有セサルコトヲ聲明ス」

松花江ハ滿洲ノ內地ニ在ルカ故ニ露清兩國船舶航行ノ特權ハ機會均等主義ト相容レス從テ上記講和條約ノ宣言及規定ト相背馳スルモノナリ

日本國臣民ハ日清條約ニ依リ總テ清國ノ內地ニ於ケル河川ノ航行權ヲ有ス而シテ松花江ノ航行ハ滿洲ニ於テ日本國臣民カ有セル經濟上ノ利益上日本國臣民ニ取リテ最大重要ナルモノナリ

外交文書第二

浦潮斯德「ニコラーエウスク」及「ペトロパウロウスク」ニ於ケル日本國領事館設定ノ件

「ポーツマス」會議會議錄第十號ノ末文ニ於テ此ノ問題ニ關スル一節ニ曰ク「ウ井ッテ」氏ハ本條約草案末文ニ揭ケタル浦潮斯德ニ於ケル領事任命ノ件ハ別ニ之ヲ攻究スヘキモノニシテ講和條約中ニ之ヲ揭クヘキモノニ非スト述ヘ小村男爵ハ此ノ問題タルヤ戰爭前久シク日露間ノ交渉事件タリシモノナルカ故ニ此ノ際之ヲ解決セムトシタルモノナリト雖本件ノ解決ヲ通商條約談判ノ時ニ讓ルコトニ對シテハ故障ナキ旨ヲ陳ヘ兩國全權委員ハ此ノ意見ヲ容ルルコトニ決シタル旨ヲ記セリ

元來正式領事館ノ代リニ日本國貿易事務官ノ設置ハ全ク特別ナル場合ニ於テ承認セラレタルモノナルカ故ニ當時ノ露西亞國官憲ハ該貿易事務官ニ對シテ幾ムト總テ領事ノ權限ヲ認メタリ然レトモ該貿易事務官ノ設定以來三十年間其ノ權限及特權ハ次第ニ露西亞國官憲ノ回收若ハ既ニ拒否スル所ト爲リ終ニ近年ニ至リ該事務官ハ既ニ以テ有效ニ此ノ沿海地方ニ於ケル日本國臣民ノ廣大ナル利益ヲ保護スルニ足ラサルコトト爲リ今ヤ此ノ地方ニ於ケル日本國臣民ハ漸次衆多ト爲リ而シテ漁業條約カ日露兩國間ニ締結セラルルトキハ益其ノ人烟ノ增加スヘキヤ疑ヲ容レス通商關係ノ發達ハ兩國共通ノ目的タルカ故ニ日本帝國政府ハ露西亞帝國政府カ同樣ノ意思ニ齊リ此ノ沿海地方ニ於ケル日本國臣民ノ接近及滯在ニ對シ便易ヲ與フルコトヲ拒マサラムコトヲ信セムト欲ス

東部西伯利亞及浦潮斯德特ニ其ノ附近ニ於ケル日本國臣民通商上ノ利益ノ大發展ニ依リ又日本海、「オコーツク」海及白令海ニ於ケル露領沿海漁業權ノ設定ニ依リ日本國政府ハ有效ニ此ノ地方ニ於ケル日本國臣民ノ莫大ナル利益ヲ保護セムカ爲ニ浦潮斯德「ニコラーエウスク」及「ペトロパウロウスク」ニ於ケル正式領事館ヲ設定スルヲ以テ緊要ノ事ト思考ス

日本國政府ハ此ノ領事館設定問題カ日露兩國間親交關係ノ復活ノ時ニ於テ其ノ確定セラレムコトヲ熱望ス

附屬書第二號

千九百六年八月十四日（二十七日）日本國全權委員本野閣下送附日露通商航海條約案及議定書案說明書

第一條

第二項

「司法取扱ニ關スル各般ノ事項ニ付」ト「內國臣民ノ享有スル總テノ權利及特典ヲ享有スヘシ」トノ間ニ「相互ノ條件ヲ以テ」ノ文字ノ挿入

此ノ挿入ハ下ノ如ク本項ノ意義ヲ明定スルノ目的ヲ以テ提議セラレタルモノトス

兩締約國ノ一方カ他ノ一方ノ臣民ニ對シ裁判所ニ自由ニ訴出スルコト及司法行政ニ關スル條件ニ付許與スル自由、權利及特典ハ其ノ自由、權利及特典カ他ノ一方ニ依リ同樣ニ許與セラルルニ非サレハ此ノ一方ノ臣民ニ對シ之ヲ許與セサルモノトス

第四項

「又埋葬ノ權利ヲ享有ス」ト「其ノ宗教上ノ慣習ニ從ヒ其ノ自國人ヲ」トノ間ニ「若ハ火葬」ノ文字ノ挿入

千八百九十九年浦潮斯德在日本國臣民ハ火葬場ヲ設置セムト欲シ該港ノ露西亞國地方官憲ニ對シテ其ノ許可ヲ出願シタルニ露國地方官憲ハ之ヲ拒斷スルコトヲ得ス爲ニ當該本

舍ニ對シ其ノ指令ヲ求メタリ而シテ千九百一年七月二十三日黑龍江總督ニ對スル內務大臣ノ指令ニ依リ該地方官憲ハ之カ許可ヲ與ヘタリ而シテ此ノ日本國臣民ノ出願カ許可セラレタル理由ハ該指令ニ詳ナリ

元來火葬ハ外國ニ於テ死亡セル日本國臣民ノ慣習ニシテ既ニ露西亞國官憲カ該出願ノ正當ヲ認メタルモノナルカ故ニ日本國臣民ニ對シ條約ヲ以テ此ノ權能ヲ保障セラレムコトヲ希望ス

第五項

「農業及不動產ノ所有權ニ關スル各般ノ事項ニ關シテハ露西亞國ニ於ケル日本國臣民及日本國ニ於ケル露西亞國臣民ハ最惠國ノ臣民又ハ人民ト均等ノ取扱ヲ受クヘキモノトス」ノ一項ノ挿入

日本國政府ハ農業及不動產所有權ニ關スル問題ハ內國法ニ依リテ規定セラルヘキモノナリト雖露西亞國ニ於ケル日本國臣民日本國ニ於ケル露西亞國臣民ハ此ノ點ニ關シ自餘諸國臣民ト差等若ハ劣等ノ取扱ヲ受クヘカラサルモノト思考シ為ニ本條中ニ最惠國ノ條款ヲ挿入シタリ

此ノ如キ規定ハ尙現行日佛通商航海條約中ニモ存セルモノナリ

第八項

「前記ノ免除ハ不動產ノ所有ニ附著スル所ノ賦課金及一般ノ內國臣民カ土地所有者、農業者又ハ土地若ハ建物ノ占有者トシテ負擔スルコトアルヘキ軍事上ノ賦役及徵發ヲ包含セサルモノトス」

本條第七項ノ解釋上一切ノ誤解ヲ生セサラシメムカ為日本國政府ハ本項ニ於テ第八項ニ包含セル免除ノ範圍ヲ明定スルヲ必要ト信シ為ニ現行日墺通商條約（第二條第二項）ヲ茲ニ再揭シタリ

第二條

第二項

「兩締約國一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖內何レノ所ニ於テモ」ト「正業ニ關スル各種ノ生產物、製造品及貨物ノ卸賣」云々ト間ニ「總テ工業又ハ手工業ニ從事シ」ノ挿入

日本帝國政府ハ此ノ挿入ニ依リ兩締約國一方ノ臣民ニ對シ各他ノ一方ノ版圖內ニ於テ工業及手工業ノ自由竝農業ノ自由ヲ保障セムコトヲ提議セリ商業ノ自由カ保障セラレタル時ニ當リ工業若ハ手工業ヲ排除スルノ何等理由ナカルヘシ

同項

「營業」ハ「商業ニ從事ス」ニ修正

日本國政府ハ此ノ修正ニ依リ兩締約國一方ノ臣民ニ對シ他ノ一方ノ版圖內ニ於テ各單ニ住居及商業ニ從事スル為ノミナラス尙或營業ヲ為スノ目的ヲ以テ家屋及商店ヲ賃借及所有シ又ハ土地ヲ賃借スルノ權利ヲ保障セムト欲ス

第四項

「公安」ノ次ニ「及衞生」ノ挿入及「現ニ行ハレ又ハ行ハルルコトアルヘキ」ノ挿入ハ本項ノ條文ヲ完補セムカ為ニシテ其ノ結果衞生ニ關スル法規ハ警察又ハ公安ノ法律ト同樣ノ地位ニ置カルヘキモノト為ルヘシ

第三條

第一項

「商業」ノ次ニ「若ハ工業」ノ挿入

此ノ挿入ハ原條文ヲ完補セムト欲スルモノニシテ其ノ理由ハ第二條第二項ニ說明セルモノニ同シ

第四條

第三項

「遼東租借地ノ生產若ハ製造ニ係ル物品ニシテ陸路滿洲國境ヲ經テ露西亞國ニ輸入スルモノ及露西亞國ノ生產若ハ製造ニ係ル物品ニシテ滿洲國境ヲ經テ陸路遼東租借地ニ輸入スルモノハ孰レモ輸入稅ヲ免セラルヘシ」

露西亞國政府ハ亞細亞露西亞ニ於ケル輸入物ニ對スル關稅準施行ニ關スル千九百年六月ノ勅令ヲ以テ陸路黑龍江省ニ輸入セル滿洲原產物ニ對シテ製茶及若干禁止物ヲ除キ總テ輸入稅ヲ免除シ又千九百四年五月一日ノ新勅令ヲ以テ黑龍江總督府ニ輸入セル外國物品ハ製茶ヲモ包含シ總テ輸入稅ヲ免除セリ

日本國政府ハ露西亞國政府ノ上記ノ措置ニ鑑ミ本項ノ規定ハ兩國ノ利益適合セルモノト思考シ露西亞國政府ノ當路ニ逆著セサルヘシト信シ此ノ處置ヲ取リ以テ之ヲ露西亞國ニ提議スルモノナリ

第六條

「通過稅ノ免除、保稅倉庫、獎勵金、便益及戾稅其ノ他最惠國臣民ニ許與セラルルコトアルヘキ一切ノ利益ニ關スル」ハ「於テ內地通過稅、保稅倉庫、獎勵金、便益及戾稅ニ關シ最惠國ノ臣民又ハ人民ト全ク均等ノ取扱ヲ受クヘシ」ニ修正

此ノ修正ノ目的ハ本條ノ意義ヲ明定スルニ在ルニ過キス從テ特ニ說明ヲ要セス

第十一條

第六項

「持主又ハ船長其ノ他ノ代理人カ不在ノ場合ニ於テ其ノ自國民ニ必要ナル救助ヲ與ヘムカ為ニ其ノ職權上ノ助力ヲ與フルコトヲ許可セラルヘシ持主、船長又ハ其ノ他ノ代理人カ現場ニ在リテ此ノ種ノ救助ヲ出願セル場合ニ於テモ亦同シ」ハ「其ノ持主又ハ船長其ノ他ノ代理人カ不在ノ場合又ハ現場ニ在リテ之ヲ請求スル場合ニハ當該總領事、領事、副領事又ハ代辨領事ハ其ノ自國民ニ必要ナル補助ヲ與フル為干與スルコトヲ許サルヘキモノトス」ニ修正

此ノ修正ハ單ニ條文ノ形體ヲ變更セルモノニシテ固ヨリ其ノ根本ノ意義ヲ變更シタルモノニ非ス

第十二條

第二項

「日本國ノ現行法律ニ從ヒ作成シタル日本國ノ船舶積量測度證書及露西亞國ノ現行法律ニ從ヒ作成シタル露西亞國ノ船舶積量測度證書ハ日本國及露西亞國ノ諸港ニ於テ更ニ測度ヲ為スコトナクシテ承認セラルヘキモノトス」

兩締約國一方ノ港內ニ於ケル他ノ一方ノ船舶ノ積量測度證書ノ相互承認ハ稅關ノ手續ヲ簡易ニセムカ為各自國臣民ノ利益上必要ナルモノト認メ日本國政府ハ露西亞國政府ニ對シテ第十二條ニ本項ノ附加ヲ提議スヘキモノト信ス

第十四條

第三行ニ「工業及手工業」第六行、第八行及第九行ノ間孰レモ「船舶ニ」竝第十一行ノ初ニ「及工業」ノ挿入

第二條修正ノ結果「工業及手工業」ノ挿入ハ第二條ニ於ケルト同一ノ理由ニ依リテ提議セラルルモノナリ

日本國政府ハ船舶モ又最惠國ノ取扱ヲ受クヘキモノト思考シ「船舶ニ」ノ挿入ヲ提議スヘキモノナリト信ス

第十五條

第三項

「行使スヘシ」ハ「相互ノ條件ヲ以テ行使スルコトヲ得」ニ修正シ而シテ「特典、特權、免除」ノ次ニ「及職權」ヲ挿入ス

右第一ノ修正ハ第一條第二項ニ付說明シタルモノト同一ノ理由ニ依レルモノナルカ故ニ兩締約國一方ノ版圖內ニ於テ他ノ一方ノ領事ノ特典等ノ享有ハ其ノ特典、特權カ其ノ一方ノ領事ニ對シテモ又許與セラルヘシトノ條件ニ非サレハ許與セラレサルモノトス

第二ノ修正即チ「及職權」ノ挿入ニ付テハ日本國政府ハ左ノ事由ニ依リテ之ヲ提議スルモノナリ

即チ露西亞國ニ於ケル日本國領事日本國ニ於ケル露西亞國領事ノ職權ニ關シ日露兩國間ニ協定ノ存セサルトキハ該領事ハ一般ニ認メラレタル國際慣例ニ據ルニ非サレハ互ニ其ノ職務ヲ行使スルコトヲ得サルヘシ然ルニ日露兩國間商業上ノ關係次第ニ親密ヲ致シ將來漸ク複雜ヲ致スヘキカ故ニ兩締約國ハ遠カラス其ノ各自國領事ノ職權ニ關スル特別條約ノ必要ヲ見ルニ至ルヘシ今本項中ニ「及職權」ノ文字ヲ挿入スルトキハ露西亞國ニ於ケル日本國領事及日本國ニ於ケル露西亞國領事ハ其ノ各自職權ニ關シ最惠國ノ領事ト同一ノ地位ニ置カルルコトト為ルヘク特別條約ナキモ其ノ駐在國ニ於テ既ニ其ノ邦國ニ對シ領事條約ヲ有セル國ノ領事ニ與ヘタル職權ヲ行使スルコトヲ得ヘシ日本國ニ於ケル最惠國領事ノ職權ハ千八百九十六年ノ日露領事職務條約及千八百九十七年日白領事職務條約中ニ規定セラルルモノニシテ日本國ニ於ケル佛蘭西國ノ領事ハ相互ノ名義ヲ以テ右諸條約ニ依リ露西亞國及白耳義國ノ領事ニ許與セル職權ヲ享有スルコトヲ得タリ

第四項

「露西亞國ニ於ケル文書檢閱ニ對シテハ日本國ヨリ露西亞國ニ派遣スル外交代表機關及正式領事館竝之ニ附屬スル諸官吏ハ新聞雜誌竝學術技藝及文學ノ著作ニ關シ完全ナル自由ヲ享有スヘシ」

本項ノ附加ニ付テハ日本國政府ハ之ト同樣ノ自由ヲ露西亞國政府カ既ニ千九百四年ノ露英條約及千九百五年ノ露佛條約ニ依リ英國及佛蘭西國ノ外交代表機關及正式領事館竝其ノ附屬官吏ニ許與シタルカ故ニ露西亞國政府ハ今後日本國ニ對シテモ何等異議ヲ有セサルヘシト信シテ之ヲ提議スルモノナリ

第十七條

「本條約ハ批准交換後十日ヲ經テ實施セラレ茲ニ規定シタル方法ニ依リ終了スル迄效力ヲ持續スヘシ」

第一項ハ急速ニ本條約ヲ施行セムトノ希望ニ依レルモノナリ

第二項ニ付テハ日本國ト諸外國トノ現行各通商條約ニハ兩締約國ノ一方カ他ノ一方ニ對シ千九百十年七月十七日ヲ以テ其ノ條約ヲ終了セムコトヲ欲スル旨ヲ通知スルコトヲ得ヘク而シテ此ノ通知後十六箇月ヲ經過シタルトキハ其ノ條約ハ全然消滅ニ歸スヘキモノトストノ規

定ヲ包含セリ故ニ日本國政府ハ本條約ニ付テモ亦同樣ノ權能ヲ保障セムコトヲ欲ス

議定書

第一號

「日本國臣民ノ携帶スル自國旅券ニ對スル露西亞國官憲ノ査證ノ有效期限ヲ六箇月トス露西亞國官憲カ日本國臣民ニ外國行旅券ヲ交付シ若ハ其ノ所持ノ旅券ニ露西亞國出發許可ノ旨ヲ記入スルニ當リ徵收スル手數料若ハ取立金ハ何等ノ名義ヲ以テスルヲ問ハス五十哥ヲ超過セサルヘシ」

此ノ規定ヲ提議シ日本國政府ハ露西亞國政府ハ之カ承認ニ付何等異議ヲ有セサルヘシト確信ス蓋シ之ト同樣ノ規定ハ既ニ露獨條約中ニ存セルモノナレハナリ（千九百四年七月（二十八日十五日）伯林ニ於テ締結シタル露獨通商航海條約追加條約第二條）

「亞細亞露西亞ニ旅行シ若ハ居留スル日本國臣民ノ旅券或ハ居住券ニ對シ徵收スル査證料及手數料若ハ取立金ハ歐羅巴露西亞ニ對スル旅券或ハ居住券ニ關シ徵收スル金額ノ二分ノ一ヲ超過セサルヘシ」

日本國ト亞細亞露西亞トノ間就中黑龍江省ニ於ケル通商及漁業ノ關係ハ次第ニ其ノ發達ヲ致スヘキモノナルカ故ニ日本國政府ハ露西亞國政府カ此ノ規定ヲ承認シ黑龍江省ニ於ケル日本國臣民ノ出入ヲ便セムコトヲ希望セリ此ノ地方ニ於ケル日本國臣民殊ニ日本國漁業者ノ往來ハ甚頻繁ナルカ故ニ其ノ都度歐羅巴露西亞ニ於ケルト同額ノ徵收金ヲ納附スヘキモノナルトキハ此ノ徒ニ取リテ甚過重ナル負擔タルヘシ

第二號

「露西亞帝國政府ハ滿洲國境ヲ經テ露西亞國版圖內ニ輸入スル日本國ノ貨物及商品ニ對シ賦課スル輸入稅率ヲシテ如何ナル場合ニ於テモ西比利亞諸港ヲ經テ露西亞國ノ版圖內ニ輸入スル貨物及商品ニ對シテ賦課スルモノヲ超過セシメサルコトニ同意ス」

日本國政府ハ此ノ規定ヲ提議シテ露西亞國政府ハ既ニ滿洲國境ヲ經テ輸入セル物品ニ關シテ採レル特別處置ニ基因スヘキ課稅ノ不均等ニ對スル保障ヲ與ヘタルカ故ニ此ノ提議ヲ承認スルニ付何等異議ヲ有セサルコトヲ希望セムト欲ス又日本國政府ハ露西亞國政府カ西比利亞諸港ニ於ケル自由港ノ廢止中ト雖モ概シテ滿洲國境ヲ經テ輸入セル淸國ノ物品及商品ニ對スル輸入稅ノ免除ヲ保持シタルカ故ニ今復何等異議ヲ有セサルヘシト思考ス

日露通商航海條約締結會議錄第二號

第二回會議

千九百六年（十月二十三日十一月五日）午後四時外務省ニ於テ開會

列席者

日本國　全權委員本野閣下、聖彼得堡日本公使館書記官落合氏、丸毛氏、津田氏

露西亞國　全權委員「マレヴスキー、マレヴィッチ」閣下、商工務省委員、「ランゴヴォイ」氏、「アレクセイエッフ」氏、「プリレジヤイエッフ」氏、會議書記官「ウエルクホウスキー」氏、「ペトロッフ」氏、「リッサンコ」氏、「ド、マルテンス」氏、「ウオズネツセンスキー」氏

會議ノ開始ニ當リ兩國全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ此ノ手續ハ外交上ノ慣例ニ由リ之ヲ行ヒ「マレヴスキー、マレヴィッチ」閣下ハ本野閣下ニ對シテ陳述シテ曰ク日露兩國間通商航海條約締結ニ關スル第一回ノ會議以來既ニ二箇月以上ヲ經過シタリ而シテ我帝國政府ハ貴下カ本職ニ提示セラレタル條約案ノ愼重ナル調査ニ此ノ期間ヲ使用シタルコトヲ疑フコトナカルヘク日本國政府提案ノ率先調査ノ任ニ當レル我當該官憲ハ其ノ複雜ナル利益ニ關シ立案セル規定ノ分析ニ付特別ナル注意ヲ傾盡シタリ而シテ該調査事業ノ結果ハ行々當サニ其ノ討議ノ進行ト共ニ現ハルルコトアルヘシ蓋シ諸般ノ現狀ニ於テ貴國政府カ千八百九十五年ノ條約中ニ挿入セムト欲セル變更ノ全體ヨリ生スヘキ一切ノ問題ニ付確定的ニ之ヲ斷定スルハ早計ト謂フヘク實際七月二十三日ノ會議ニ於テ貴下カ予ニ送付セムト欲セラレタル條約案ハ若シク日露間ノ將通商規定即チ今將ニ締結スヘキ條約ノ基礎ト爲ルヘキ規定ト異レハナリ千八百九十五年ノ條約ニ對シ貴國政府カ發案セル變更ハ第一、舊成ノ變更第二、新條項ノ附加及第三、舊條約若干規定ノ除去ノ三種ニ細分スルコトヲ得ヘシ」閣下ノ說明書ハ吾人ニ取リテ大ニ有益ノモノニシテ之カ爲ニ日本國政府ナシテ舊條約ノ若千條項ヲ變更シ而シテ幾多ノ新規定ヲ加フルコトニ決セシメタル理由ニ付貴重ナル參考ト爲リ以テ吾人ノ任務ヲ容易ナラシメタリ然レトモ吾人ハ貴下ニ對シ數多ノ點ニ付補助的說

明ヲ求ムルノ已ムヲ得サルコトハ貴下ニ秘スルコトヲ得ス故ニ望ムラクハ貴下カ吾人ニ對シテ此ノ說明ヲ與フルヲ拒マサラムコトヲ先ツ舊條約ノ一聯ノ條項カ何等理由ノ說明ナク其ノ削除ヲ爲セルアリ又新條項ノ範圍カ充分ニ說明書ニ由リテ確定セラレサルカ如ク視ユルモノアリ是ヲ以テ吾人ハ吾人ノ疑點カ氷釋セラレタルトキハ追テ貴下ニ對シテ吾人ノ對案ヲ送付スヘキ權利ヲ吾人ニ留保シ以テ我修正案ノ編成ハ之ヲ他日ニ讓ルヲ以テ會議ノ事業ノ利益ニ適合セルモノト認メタリ

是ヲ以テ予ハ條約案第一讀會ノ討議ニ移リ其ノ間貴國提出案ノ調査上逢着スヘキ困難ヲ擧ケテ之ヲ貴下ニ提示セムト欲ス同時ニ予ハ亦露西亞國政府カ貴國政府提出案ノ若干條項ニ關シ必要ナリト信セル修正ヲ提示スルノ職務ヲ盡サムト欲ス而シテ此ノ注意事項ノ摘要ハ第一回ノ會議ニ於テ合意シタルカ如ク書面ニ由リテ遲滯ナク之ヲ貴下ニ提示スヘシ

貴下ニシテ此ノ討議方法ヲ認容セラルルトキハ雙方互ニ變更ナキ條款ノ編成ハ之ヲ確定セルモノト看做スノ方針ヲ採リ今ヨリ條約案ノ逐條討議ヲ開始スヘシ

本野氏ハ此ノ提議セラレタル討議方法ヲ承認スルニ付異議ヲ有セス而シテ日本國政府案ノ逐條討議ヲ爲サムト期セル旨ヲ聲明セリ

露西亞國委員ノ書記官ハ日本國提出案第一條第一項ノ朗讀ニ移リ本項ハ雙方何等變更ノ加フヘキモノナカリシカ故ニ採用ト認定セラレタリ

第一條第二項ノ朗讀後「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ案文中「相互ノ條件ヲ以テ（アシャルヂユ、ド、レシプロシテ）」ト言ヘル語ノ挿入ニ際シ說明書中ニ揭ケタル文案ニ於ケル解釋ハ第二項ノ文意ト符合セルカ如ク見ユル旨ヲ說示セリ蓋シ本項ハ千八百九十五年ノ舊文案ニ於テハ規則上兩國臣民ニ對シテ自國臣民ノ取扱ヲ與ヘタルカ故ニ此ノ點ニ關シ日本國ニ於ケル露西亞國臣民及露西亞國ニ於ケル日本國臣民ハ內國人ノ有スル一切ノ權利ヲ享有シタリ然ルニ日本國提出新條約案ニ據レハ此ノ全權ハ既ニ日露各國ノ臣民ニ與ヘラレサルコトナリ規則上ノ自由、權利及特權ハ同一ノ自由、權利及特權カ同一ノ方法ヲ以テ他ノ一國ニ與ヘラレタルニ非サレハ他ノ國民ニ對シテ締約國ノ一方ニ依リテ與ヘラルルコトヲ得サルモノトス露西亞國全權委員ノ意見ニ於テハ日本國政府カ果シテ指定セラレタル意義ニ於テ各自國民ノ權利ヲ制限スルノ意思ヲ有スルモノナルトキハ全ク第二項ノ文案ヲ變更スヘキモノト爲セリ

本野氏ハ露西亞國全權委員ハ上記挿入ノ事項ニ付追加說明ヲ得ムト欲スルモノナルカ又ハ之ニ對シテ修正ヲ加ヘムト欲スルモノナルカヲ質問シ日本帝國政府ハ討議ニ基ケル修正ヲ勸誘シ說明書中ニ論述セラレタルカ如ク兩國臣民均等權利ノ設定ヲ希望セリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ提議ノ變更ノ正確ナル意義ニ關シ補足的說明ヲ得ムコトノ希望ヲ述ヘ露西亞國政府ニ於テハ各自國民ニ對シ單純ニ自國民ノ取扱ヲ許與シタル第二項ノ舊文案ヲ保持セムコトヲ擇ミ氏ハ以爲兩締約國ノ一方ハ訴訟上ノ權利及特權適用ニ付其ノ訴訟法ノ特質ノ爲勢訴訟上ノ權利及特權ノ適用ニ於テ或不均一ヲ生スヘキ特別ナル訴訟法ヲ有スヘキカ故ニ此ノ提議ニ係レル變更ハ實際超越スヘカラサル困難ヲ惹起スルノ虞ナキヤ否ヤヲ懸念セリ特別ナル各持合ニ於テ其ノ訴訟者ニ對シテ或便宜ヲ與フルニ至リ之ト同樣ナル便宜若ハ方法カ他ノ一國ニ於テ與ヘラルルモノナルヤ否ヤヲ確ムルノ義務アレハナリ

本野氏ハ露西亞國全權委員ノ說明ヲ領シ第二讀會ニ於テ本件ヲ確定セムト期セリ

第一條第三項ニ移リ本項ハ何等ノ疑問ヲ生セサリシヲ以テ該文案ハ確定セルモノト看做サレタリ

日本國提出案第一條第四項ハ「或ハ、、、、ノ身體ヲ火葬スル」ト言ヘル語ノ挿入ヲ包含ス

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ露西亞國政府ハ此ノ挿入ヲ諾セル旨ヲ聲明セリ

第一條新項（第五）ノ討議ニ移リ日本國ノ提議ニ由レハ本項ハ左ノ如ク記載セラルルモノトス

農業及不動產ノ所有權ニ關スル各般ノ事項ニ付テハ露西亞國ニ於ケル日本國ノ臣民及日本國ニ於ケル露西亞國ノ臣民ハ最惠國ノ臣民又ハ人民ト同一ノ取扱ヲ受クヘキモノトス

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ本項ハ二箇ノ觀念即チ第一、不動產所有權第二、農業ニ關スル事ヲ說示シ其ノ第一ニ關シテハ露西亞國全權委員ハ露西亞帝國ノ法律ニ據レハ若干ノ制限ヲ除キ外國臣民ハ通則上特定若干地方及州ヲ除キ露西亞國ニ於テ不動產取得ノ權利ヲ有スルコトヲ認證シ爲ニ露西亞帝國政府ハ此ノ便宜ヲ擧ケテ又之ヲ日本國臣民ニ許與セムト欲セルモ露西亞國臣民ハ日本國ニ於テ同一ノ權利ヲ享有スルカヲ明知セムト欲シ此ノ目的ヲ以テ露西亞國全權委員ハ問題トナレル條款ニ對シテ「相互ノ條（[illegible]）

（レシプロシテ）件ニ於テ」トノ語ヲ加ヘムコトヲ提議セリ此ノ附加ハ日本國ニ於ケル露西亞國臣民ニ對シテ不動產所有ノ權利ヲ保障スルヲ以テ目的ト爲スモノニシテ氏ハ日本國全權委員ニ對シテ日本國ノ法制カ之ト反對セサル場合ニ於テ此ノ保障ヲ確認セムコトヲ請ヘリ

本野氏ハ日本國ノ法制ニ於テハ不動產ヲ二種ニ區別シ第一、家屋第二、土地ト爲シ家屋ハ日本國ニ於テ外國人之ヲ取得スルコトヲ得ルモ土地ノ購入ハ外國人ニ對シテ之ヲ許サス此ノ問題ノ規定ハ內國法制ヲ以テ常ニ之ヲ日本國ニ留保セルカ故ニ露西亞國臣民ノ爲ニ此ノ通則ニ對スル例外ヲ設ケムトスルコトハ不可能ナル事ニシテ所有權ニ關スル內國法制ヨリ之ヲ見レハ日本國ニ於ケル露西亞國臣民ハ自餘各國臣民ト全然均等ノ地位ニ在リ日本國政府カ露西亞國ニ於ケル日本國臣民ノ爲ニ求ムル所ノモノハ此ノ均等ノ待遇ニ在ル旨ヲ說示セリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ此ノ點ニ關シ日露兩國ノ法制ヲ比較シ難キ旨ヲ說示シ其ノ基礎ト爲ルヘキ原則ノ差異ハ甚大ニシテ固ヨリ外國臣民ハ露西亞國ニ於テ此ノ點ニ付多少ノ制限ニ服從セリト雖通則上外國臣民ハ合法的一切ノ方法ニ由リ各種ノ不動產取得ニ付テハ完全ナル全權ヲ有ス之ニ反シテ本野氏ノ說明ニ於ケルカ如ク日本國法制ハ明確ニ外國人ニ對シテ日本國ニ於ケル土地ノ取得ヲ禁セリ是レ日露兩國法制間所有權ニ關スル全然取扱ノ不均一ヲ證示スルモノニシテ露西亞國ニ於テハ法律ノ制限ハ若干地方ニ關スルニ過キサルモ日本國ニ於テハ其ノ禁止ハ絕對的ナリ

本野氏ハ信スラク此ノ差異ハ法律上ノ性質ヲ有セス唯事實上ノ問題ニ過キス凡ソ不動產ノ所有權ハ日本國ヨリ之ヲ見レハ內國法制ニ之ヲ委シ露西亞國ニ於テモ亦其ノ領土內ニ於ケル土地ノ購入ヲ外國人ニ禁スルノ自由ヲ有スル故ニ此ノ如キハ如何ナル場合ニ於テモ且爭議ノ存セル條款ニ拘ラス單ニ最惠國臣民ノ取扱ヲ主張スルニ過キサル日本國側ニ異議ヲ生スヘキモノニ非ス之ト同樣ノ約款カ自餘諸外國殊ニ佛蘭西國ト日本國トノ條約ニ於テ締結セラレタルモ亦同一ノ主旨ニ基ケルモノニシテ佛蘭西國ニ於テハ外國人ハ任意ニ不動產取得ノ全權ヲ有スルモ佛蘭西國政府ハ日本國トノ條約ニ於テ本文ノ條款ヲ挿入スルコトヲ躊躇セサリキ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ此ノ問題ノ法律的基礎ニ付其ノ疑ヲ保持シ條約ニ由リテ外國人ニ許與シタル權利ノ享有ヲ任意ニ變更スルコトハ國家ノ完全ナル自由ニ屬スルモノト看做ストキハ外交上ノ協定カ其ノ目的トスル所果シテ如何ニ歸著スヘキカ氏ノ意見ニテハ凡ソ國際關係ノ條約カ一タヒ調印セラレタルトキハ各締約國臣民ニ對シテ其ノ許與セラレタル權利ノ行使ト其ノ鞏固トヲ保障スルモノナリ千八百九十五年ノ條約ハ不動產ニ關スル條款ヲ包含セサルニ反シテ新條約ハ其ノ現狀ニ於テ日露兩國臣民相互ノ所有權ノ承認ニ關シ一步ヲ進メタルカ如シ由是觀之日本國ハ露西亞國臣民ニ對シテハ同一ノ便宜ヲ保障スルコトナク日本國臣民ノ爲ニノミ露西亞國ニ於テ前記特典ヲ要求スルモノナリ極メテ現實ナル權利ヲ與フル條約ノ約款ト來ルヘキ與論ノ變更ニ關スル漠然タル希望トノ間ニ甚大ナル差異アルハ言ヲ俟タス提議條款カ承認セラレタル場合ニ於テ露西亞國ノ與論ハ露西亞國ニ與ヘラレタル對價ノ何物タルカヲ問フヘキヤ必セリ之ヲ要スルニ日本國ノ要求セル讓步ハ露西亞國全權委員ノ所見ニ由レハ片務的性質ヲ有セサルカ如ク然リ

本野氏ハ完全ナル對價ノ存セル事ヲ肯認シ以爲ク此ノ條款ナキトキハ日本國政府ハ露西亞國臣民ニ對シテ自餘諸外國ニ許與セル權利ヲ拒否スルコトヲ得ヘク此ノ約款ニシテ削除セラルルトキハ露西亞國臣民ハ自餘諸外國人ニ比シテ劣等ナル境遇ニ立ツコトトナルヘク又露西亞國ニ於ケル日本國臣民ニ於テモ同樣ノ事トス露西亞國政府ハ此ノ權能カ自餘諸外國人ニ許與セラレタルニ拘ラス獨リ日本國臣民ニ對シテノミ若干地方ニ於ケル土地ノ所得ヲ禁スルコトヲ得ヘシ故ニ第一條第五項ノ規定ハ優ニ其ノ存在ノ理由ヲ有シ日露兩國臣民ニ對シ最惠國民ノ取扱ヲ保障スルモノナリ加之露西亞國ニ於ケル日本人及露西亞國ニ於ケル露西亞人間ニ於ケル土地所有權ニ關シテ露西亞國全權委員カ主張スル所ノ不均等ハ又事實上存セサルモノナリ日本人ハ昔時黑龍江諸州ニ於テ土地ヲ取得スルコトヲ得タリシモ今ヤ此ノ取得ハ日本人ニ禁止セラルルコトト爲レルカ故ニ日本國臣民カ購入シ得キ露西亞國ノ地方ニ於テ日本國臣民ハ既ニ土地ヲ買得スルコトヲ得ス日本國全權委員ハ日本人カ土地ノ取得上最大利益ヲ有スルハ正ニ歐羅巴露西亞ニ非ス從テ法律上ヨリ觀察スルモ事實上ヨリ觀察スルモ日露兩國各臣民ノ境遇上何等不均等ノ存スルヲ見スト

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ先ツ露西亞國ノ法律ハ例外ナク一切ノ外國人ニ對シ黑龍江地方ニ於ケル不動產ノ取得ヲ一般ニ禁セルコトヲ說示シ而シテ日本國全權委員カ引證セル各場合ニ付說示セラレムコトヲ欲シ本野氏カ說述セル取得ノ事ハ禁止法ノ發布以前ノ時期ニ關スルモノナリト推定シ外國人ニ對シテ露西亞國ニ於ケル土地ノ取得ヲ許可セル一般規定ニ付テハ立法者カ此ノ權能ヲ外國人ニ許與シ以テ在外露西亞國人ノ爲ニ完全ニ之ヲ相互的トナスヘシトノ推定ニ據レルモノナル事ハ爭フヘカラサルコトナルヘシト爲セリ

本野氏ハ黑龍江地方ニ於ケル日本國人取得ノ土地ニ關シ正確ナル說明ヲ示スヘキコトヲ約セリ但シ本件ノ規定ハ保持セラレムコトヲ固執シ露西亞國全權委員ニ對シテ滿足スヘキ方法ヲ以テ之カ解決ヲ爲サムカ爲ニ本件ヲ再議セムコトヲ請求シタリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ追テ此ノ討議ヲ再開スヘキコトヲ約シ本項ニ揭ケタル「農業」ト言ヘル字句ノ討議ニ移ラムコトヲ提議シ其ノ譯語ト正確ナル意義トヲ質問シタリ

本野氏ハ「農業」ナル文字ハ單ニ農事產業ヲ謂フモノニシテ即チ特ニ露西亞國ニ於ケル日本國人及日本國ニ於ケル露西亞國人ノ爲ニ其ノ耕作上ノ借地權ヲ許與スルモノナルコトヲ確言セリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ條約案第二條ニ揭ケタル「各種ノ產業」ナル文字ニ付本野氏ノ注意ヲ喚起シ之ヲ以テ農事產業ニ關スルモノトスルトキハ何カ故ニ「農業」ナル文字ヲ第一條ニ揭ケタルカ本野氏ニ對シテ其ノ補足的說明ヲ提示セムコトヲ求メタリ

第六項及第七項ノ朗讀ニ移レリ修正ヲ加フル所ナシ

日本國提出案第一條第八項ノ討議ニ移レリ其ノ條文ハ次ノ如シ「前記ノ免除ハ不動產ノ所有ニ付徵收スル所ノ賦課金及一般ノ內國臣民カ土地所有者、農業者又ハ土地若ハ建物ノ占有者トシテ負擔スルコトアルヘキ軍事上ノ賦役及徵發ヲ包含セサルモノトス」

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ之ト同一ノ例外ハ露獨條約及露瑞典條約中ニモ亦存セルコトヲ證言シ從テ日本國ニ於ケル兵役ノ性質確定セラルルトキハ露西亞帝國政府ハ本條約ニ於ケル此ノ規定ノ附加ヲ承認スルニ付不都合アルコトヲ見サルヘク露西亞國ニ於ケル兵役ハ專ラ人的ノモノニシテ本文ノ留保ハ宿舍、馬匹、輸送方法ノ供給ニ關スルニ過キスシテ毫モ軍隊內ノ役務ヲ規定セルモノニ非ス此ノ如キ原則ハ日本國ニ於テモ亦之ヲ採用セルヤ否ヤヲ知ルコトヲ要ス」

本野氏ハ日本國ニ於ケル不動產ノ所有ハ此ノ事實ノミニ依リテ何等人的兵役ノ義務ヲ生セス從テ兵役ノ原則ハ兩國互ニ相同シキコトヲ肯認セリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ此ノ聲明ヲ領シ諸日露條約中ニ使用セル「內國臣民」ナル文字ニ冠セル「一般ノ」ナル文字ヲ削リ「不動產ノ賃借者」ノ文字ヲ以テ「土地若ハ建物ノ占有者」ナル文字ニ代ヘムコトヲ提議シタリ

第二條第一項ハ修正ヲ加フル所ナシ

同條第二項ノ朗讀後「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ露西亞國政府ハ日本國ノ提議ニ基キ「各種ノ工業又ハ手工業」及「營業ニ從事ス」ナル文字ヲ本項ニ挿入スルノ異議ナキ旨ヲ聲明シ同時ニ氏ハ右「各種ノ工業又ハ手工業」ナル文字ノ前ニ「總テ其ノ國ノ法律、規則及命令ニ遵由シテ」ナル文字ヲ加ヘムト提議シタリ此ノ修正ハ例ヘハ特ニ內國臣民ニ留保セル藥業ノ如キ工業カ露國ニ存スルカ故ニ其ノ必要アルモノノ如シト爲セリ

本野氏ハ露西亞國全權委員カ揭示セル留保ハ既ニ本項ノ終リニ存セルコトヲ說示シ從テ此ノ如キ字句ノ附加ハ不必要ト看做セリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ從來本野氏ト同一ノ感ヲ抱キタリシモ偶々本項條文ノ譯査ヲ爲スヤ其ノ意見ヲ變更スルコトト爲レリ蓋シ本項ハ・前ノ句讀ニ從リテ分割セラレタル二箇ノ部分ヲ包含シ其ノ第一ハ手工業ニ從事シ及商業ヲ營ムノ權利ヲ包含シ其ノ第二ハ特ニ不動產ノ所有及賃借ノ權利ヲ規定スルモノニシテ該文言ノ留保カ關係スル所ノモノハ此ノ第二ノ部分ニ過キス

本野氏ハ第二讀會ニ於テ此ノ修正案ニ對スル確定的回答ヲ爲スヘキ旨ヲ約セリ

第二條第三項ノ討議ニ移レリ本項ハ千八百九十五年ノ條約文ト同一ナルカ故ニ直ニ可決セラレタリ

露西亞國全權委員ハ露西亞國政府ハ第二條ノ末項ニ日本國政府カ提議セル「及衞生ニ關スル」及「現ニ行ハレ又ハ行ハルルコトアルヘキ」ナル文字ヲ挿入スルコトニ付何等支障ノ存セサルコトヲ聲明シタリ

露西亞國全權委員ハ第三條第一項ニ揭ケタル「若ハ工業ノ爲ニ」ナル文字ニ付テモ亦同樣ノ聲明ヲ爲セリ

本條第二項ハ何等修正ヲ加フル所ナシ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ千九百四年ノ獨逸國（第六條）千九百五年ノ和蘭國（第十四條）千九百六年ノ墺地利洪牙利國（第二條）千九百

六年ノ「ルーマニー」國及「ブュルガリー」國ト露西亞國トノ新通商條約ニ採用セル最惠國條款ノ文例ニ依リ第四條ノ最初ノ二項ヲ修正セムコトヲ提議シタリ而シテ本項ハ左ノ如ク前記各條約中ニ記載セラレタリ

、、、ニ輸入セラルヘキ露西亞國ノ土地若ハ工業ノ生產物及露西亞國ニ輸入セラルヘキ、、、ノ土地若ハ工業ノ生產物ニシテ或ハ消費或ハ入庫或ハ再輸出又ハ通過ニ供セラルヘキモノハ最惠國ノ生產物ト同樣ノ取扱ヲ受クヘク如何ナル場合ニ於テモ亦如何ナル理由ニ依ルモ該生產物ハ一層高額ナルカ又ハ他ノ種類ノ課稅ヲ課セラルルコトナク又他國ノ同種生產物カ付擔セサル附加稅又ハ禁止ヲ被ラサルヘシ殊ニ總テノ殊遇若ハ便宜、締約國ノ一方カ永久又ハ一時ノ名義ヲ以テ無償又ハ相殺ヲ以テ第三國ニ許與スヘキ一般稅率又ハ協定稅率ニ規定セル輸入稅ノ免除、及輕減ハ即時且條件、留保又ハ相殺ナク他ノ一方ノ土地若ハ工業ノ生產物ニ適用セラルヘシ

此ノ新文言ハ最惠國ノ取扱ニ付最完全ナル定義ヲ與ヘタルモノニシテ露西亞帝國政府ノ意見ニ於テハ新文言ニ依リテ既ニ多少無效ト爲リタル前文言ヲ修正スルニ若カス

本野氏ハ此ノ提議セラレタル文言ヲ調査シ日本國政府ノ訓令ニ接シタル後其ノ囘答ヲ爲スヘキコトヲ約セリ

本條約案ニ關スル經濟上ノ條件ニ關シ補足的說明ノ接受ニ至ル迄第四條末項ノ討議ヲ延期セムトノ「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ノ請求ニ基キ本項ノ討議ヲ中止シタリ

第九條ノ討議ニ移レリ其ノ文言ハ千八百九十五年ノ條約ニ於ケル同條ノ文言ト異ル所ナキカ故ニ本條ハ確定可決セラレタリ

露西亞國全權委員ハ條約案第六條ハ露西亞國政府ノ承認スル所ト爲レル旨ヲ聲明セリ

第七條ノ討議ニ移レリ毫モ修正ヲ加フル所ナシ而シテ露西亞國全權委員ハ條約ノ條文中ニ於ケル交互ノ注意ニ關シ一般的說明ヲ爲セリ此ノ留保ヲ除キ第七條ハ確定可決セラレタリ

第八條及第九條ノ文言モ（「一方ノ」ナル文字ノ插入ヲ以テ）亦確定可決セラレタリ

第十條ニ付テハ露西亞國全權委員ニ於テ下記ノ陳述ヲ爲セリ即チ「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ先ツ最近ノ露獨通商條約第十五條ニ揭ケタル留保ヲ以テ本條第二項ヲ補足セムコトヲ提議セリ此ノ留保ノ文言ハ次ノ如シ「獨逸國ハ其ノ荷物ニ付內國航海定率ノ外徵收セラルルコトナキ監視料以外ニ何等關稅ヲ納附スルノ義務ヲ有スルコトナシ」第二ニ露西亞國全權委員ハ下ノ說示ヲ爲シテ曰ク諸條約第十條ハ現條約案ト相睽離セル最終ノ一項ヲ包含シ露西亞國船舶ニ對シテ特定三港以外ノ日本帝國諸開港間ニ其ノ荷物輸送ノ權利ヲ保障セリ露西亞帝國ハ將ニ締結スヘキ新條約ニ於テモ亦此規定ヲ保存セムコトヲ欲ス日本國カ英獨佛各國ニ對シ其ノ現行條約ニ從ヒ此ノ殊遇ヲ與フルモノトセハ從來露西亞國船舶ニ許與シタル此ノ權能ノ確認ハ總テノ點ニ於テ最惠國取扱ノ原則ニ適合セルモノニシテ露西亞國カ此ノ殊遇ノ享有ヲ除外セラルルトキハ將ニ締結スヘキ條約ノ基礎ト爲ルヘキ千八百九十五年ノ日露舊條約ノ原則ニ對シテ重大ナル侵害ヲ及ホスヘキモノナリト

本野氏ハ條約案第十四條ニ付日本國政府カ提議セル「船舶ニ」ノ文字ノ附加ニ依レル末項ノ除去ヲ說明シ此ノ文字ノ插入ハ通商航海ニ關スル一切ノ事項ニ付最惠國條款ノ適用ト保障スルモノナルカ故ニ日本國政府ハ本條約ニ於ケル此ノ文ノ記入ヲ以テ不必要ト看做セリ且本野氏ハ次囘ノ會議ニ於テ此ノ點ニ付之カ詳說ヲ爲サムトスル旨ヲ聲明セリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ日本國全權委員ノ此ノ確約ヲ領シ條約案第十四條ニ揭クル「船舶ニ」ナル文字ノ插入ハ最惠國條款ニ據リ露西亞國船舶ニ對シ他諸外國ノ船舶ニ與ヘタル許可ヲ保障スルモノトシテ解釋スヘキコトヲ說示セリ然レトモ氏ハ條約ノ條文中ニ特定セル權利ト孤絕ナル解釋ニ基クル殊遇ノ享有トノ間ニ大差ノ存スヘキ事ヲ證明セリ

第十一條第一項第二項第三項第四項及第五項ハ修正ヲ加フル所ナク「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ日本國政府カ本條第六項ニ加ヘタル修正ハ露西亞國政府之ヲ承認セル旨ヲ聲明シタリ

第十二條第一項ハ諸條約ノ文面ヲ保存シタルモノナルカ故ニ第二項ノ討議ニ移レリ本項ハ日本國提出案ニ於テ下ノ如ク記載セラレタリ「日本國ノ現行法律ニ從ヒ作成シタル日本國船舶積量測度證書及露西亞國ノ現行法律ニ從ヒ作成シタル露西亞國船舶積量測度證書ハ日本國及露西亞國ノ諸港ニ於テ更ニ測度ヲ爲スコトナクシテ承認セラルヘキモノトス」

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ固ヨリ兩國ノ利益上成ルヘク船舶積量測度ニ關スル稅關ノ手續ヲ簡易ニスヘキコトヲ認ムト雖兩國船舶積量測度方法ノ差異ハ其ノ測度證書ノ承認ニ特別ナル協定ヲ必要トス此ノ種ノ條約ハ既ニ露西亞國ト各外國トノ間ニ締結セラレタルモノニシテ露西亞國政府ハ日本國ニ對シテモ又此ノ如キ取極ヲ締結セムト欲ス目下唯條約文中ニ此ノ如キ專門的協定ノ將來ノ締結ヲ確認スヘキ特別ナル一項ヲ記入セムト欲ス此ノ條項ハ千九百六年ノ露西亞國及墺地利洪牙利國間通商條約第十六條ニ據リ下ノ如ク記載セラルルコトアルヘシ「兩締約國ノ一方ヨリ交付シタル船舶積量測度證書ハ追テ兩國間ニ協定スヘキ特別ノ取極ニ依リ他ノ一方ニ於テ之ヲ承認スヘシ」

露西亞國全權委員ノ請求ニ基キ通商局長「アレキセイエッフ」氏ハ船舶登簿噸數算定制度ノ一致セサルカ爲積量測度證書承認上通商條約ト獨立セル別異ノ取極ヲ必要トスル旨ヲ確認セリ

第十三條ハ何等文言ノ修正ナキニ依リ確定可決セルモノト認メラレタリ

露西亞國全權委員ハ露西亞國政府カ日本國政府ノ提議ニ係ル「工業及手工業」及後段「船舶ニ」「船舶ニ」及「工業」ナル文字ヲ第十四條ニ記入スルコトニ付何等支障ヲ見サル旨ヲ聲明セリ但シ「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ「手工業」ナル文字ヲ複數ニ爲スニ若カスト思考セリ

此ノ提議ハ日本國全權委員ニ依リテ承認セラレ日本國全權委員モ亦「領事代」ナル贅字ヲ第十五條第一項ヨリ削除スルニ付何等ノ支障ヲ見スト爲セリ

本條第二項及第三項ハ其ノ第三項中ニ「相互ノ條件ヲ以テ執行シ」及「及職權」ノ文字ノ插入ヲ以テ會議ニ於テ可決ト聲明セラレタリ

兩國全權委員ハ雙方ノ領事官ノ職權ヲ明確ナラシムルノ必要上兩國間領事條約締結ノ機會ニ關シテ多少ノ意見ヲ交換セリ

第十五條新第四項ヲ再度討議シタル結果檢閱ニ關シ兩國外交官及正式領事官ノ取扱ヲ均等ニ爲スコトニ關スル問題ヲ生シ露西亞國全權委員ハ此ノ點ニ關シ日本國法制ノ提示ヲ望ミ露西亞帝國政府ハ露西亞國ニ駐在セル外交官及領事官ニ對シ既ニ獨逸國佛蘭西國及墺地利洪牙利國ノ外交官及領事官ニ對シテ許與セル檢閱上ノ免許ヲ許與スルニ付何等支障ヲ見サル旨ヲ確認シタリ但シ前記讓與ハ相互ノ條件ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス此ノ目的ニ於テ露西亞國全權委員ハ下記ノ文言ヲ以テ本項ヲ記載セムコトヲ提議セリ「締約國ノ一方カ他ノ一方ノ版圖內ニ派遣セル外交官及正式領事官ハ新聞雜誌並學術、技藝及文學ノ著作物ノ檢閱ニ關シ相互ノ條件ヲ以テ完全ナル自由ヲ享有スヘシ」

日本國全權委員ハ「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ノ修正ヲ承認シ其ノ提議セル文言ヲ調査スヘキ旨ヲ聲約セリ

商標及特許ニ關スル草案第十六條ノ討議ニ移レリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ千八百九十五年ノ諸條約ニ於ケル此ノ規定ヲ保持スルニ付毫モ異議ヲ有セサル旨ヲ聲明シ千八百九十五年五月二十七日ノ議定書第四ノ文言ニ據リ本條ヲ補正スルノ必要ニ付本野氏ノ注意ヲ喚起セリ實際本項ハ日本國ニ對シ露西亞國ト工業及商業所有權相互ノ保護ニ關スル特別條約ヲ締結スルノ義務ヲ課セルモノナルモ此ノ規定ハ竟ニ效力ヲ生セス爲ニ外國ノ特許、商標、意匠ノ保護ハ果シテ日本國ニ於テ法律ニ據リテ保障セラルルカヲ知悉セサルヘカラス其ノ保護セラレサル場合ニ於テハ千八百九十五年五月二十七日ノ議定書第四ニ基キ作成セル第二項ニ據リテ第十六條ヲ補正セサルヘカラス即チ本項ハ下ノ如ク記載セラルヘキモノトス「兩締約國ハ成ルヘク速ニ工業及商業所有權ノ保護ニ關シ相互條件ヲ基礎トシテ一ノ條約ヲ締結セムカ爲談判ヲ開クコトヲ約ス」

本野氏ハ日本國政府ハ議定書第四ニ揭クル特別協定ノ締結ニ付嚴ク露西亞國政府ニ通知シタルモ露西亞國政府ハ此ノ提議ヲ排斥シタリ故ニ日本國政府ハ議定書第四ノ文言ヲ削除スヘキモノト信シタリ而シテ日本國政府ハ露西亞國政府ニシテ其ノ從前ノ態度ニ復スルトキハ此ノ點ニ付其ノ談判ヲ妨礙スヘキ異議ヲ有スルコトアルヘシト信セサル旨ヲ說示セリ

露西亞國全權委員ノ請求ニ依リ商工務省參事官「ランゴヴォイ」氏ハ露西亞國商人ハ常ニ特許及商標ノ保護ニ付日本國ト取極ノ存在セムコトヲ希望セルコトノ證明者ト爲リ本野氏カ基礎トセル日本國ノ提議ニ關シ何等關知スル所ナシトセリ

此ノ意見ノ交換後本項ノ討議ハ之ヲ次囘ノ會議ニ延期シタリ

條約案第十七條ノ討議ニ移ルニ臨ミ露西亞國全權委員ハ千八百九十五年ノ條約第十七條ニ關シ本野氏ノ注意ヲ喚起セリ本條ハ日本國ノ市區ニ編入セラレタル外國人居留地ニ於ケル永代借地ニ關スルモノニシテ本條中ノ現規定ハ全ク其ノ必要ナ求シ此ノ規定ヲ削除スルトキハ露西亞國ノ利益ニ對シ重大ナル危害ヲ加フルニ至ルヘシ殊ニ永代借地券ノ確認及無借料ニテ既ニ許與シタル各地所ノ免稅ニ關スルモノニシテ新通商條約ハ前記規定カ日本國ト諸外國トノ間ニ締結セ

ル他ノ數多ノ條約中ニ存スルトキハ益前記規定ヲ保存セサルヘカラサルモノトス

本野氏ハ千八百九十四年、千八百九十五年及千八百九十六年ニ於テ日本國カ締結セル諸條約中ニ前記條文ヲ挿入セシ理由ハ當時日本國カ過渡的事情ノ下ニ在リシカ爲ナル事ヲ說明シ此ノ事情ハ今ヤ既ニ經過シ了リ現條約中ニ此ノ如キ規定ヲ保持スヘキ現實的理由ナシト爲セリ

「マレヴスキー、マレヴイッチ」氏ハ舊條約第十七條ノ全文ヲ保持セムト提議スルニ非ス唯永代借地券ノ確認及無借料ニテ既ニ貸與シタル各地所ノ免稅ニ關スル本條ノ規定ヲ保持セムト欲スル旨ヲ辨明シ一切ノ留保ヲ以テ下ノ如キ舊第十七條ノ新文言ヲ會議ニ提出スルコトヲ得ヘシト信シタリ「日本帝國政府ハ日本國ノ市區ニ編入セル舊外國人居留地ニ於ケル永代借地券ヲ確認シ有借地券ニ載セタル條件ノ外ハ此ノ財產ニ關シテ別ニ何等ノ條件ヲ附セサルヘシ前記外國人居留地公共ノ目的ノ爲ニ日本政府ヨリ無借料ニテ既ニ貸與シタル各地所ハ永代ニ免稅セラルヘシ且該地所ニシテ最初貸與シタルトキノ如ク公共ノ目的ニ使用セラルル限ハ總テノ公課ヲ免スヘシ但シ土地收用權ニハ從フヘキモノトス」

本野氏ハ此ノ修正ニ付テハ調査ヲ爲シ而シテ次回ノ會議ニ於テ其ノ確定的意見ヲ回答スヘキコトヲ約セリ

露西亞國全權委員ハ日本國政府ノ說明書ニ據リ第一、露西亞帝國政府ハ條約ノ施行期ヲ二箇月ト定ムヘキ旨ヲ提議シ第二、露西亞國政府ハ本條ノ案文ヲ改メテ最近露獨條約第三條ニ使用セル文言ノ如クスルニ若カスト爲シ露西亞國全權委員ノ請求ニ基キ商務局次長「ナリレシヤイエッフ」氏ハ將ニ締結スヘキ條約ニ揭クヘキ確定期日ニ付テ疑義ヲ挿ミ協定セル施行期ハ千九百十一年ニ在リト推定スル旨ヲ述ヘ此ノ問題ハ未タ充分ニ明確ニセラレタルニアラス而シテ露西亞國全權委員ハ之ヲ後日ノ討議ニ附スヘキコトヲ請求シ次ニ露西亞國政府ハ條約案第十八條ノ新文言ヲ承認セル旨ヲ聲明セリ

日程終了シタルヲ以テ會議ハ其ノ議事ヲ畢クヲ之ヲ次回ノ會議ニ附スルコトト爲セリ前記討議諸條ニ對スル露西亞國政府修正案摘要書（附屬書參照）ハ會議ノ終ニ於テ之ヲ日本國全權委員ニ交付シ午後六時三十分ヲ以テ散會セリ

本野一郞（記名）

「エス、マレヴスキー、マレヴイッチ」（記名）

附屬書

露西亞國政府修正摘要書

第一條第二項

司法事項ニ關スル日本國提出案第一條第二項ニハ「相互ノ條件ヲ以テ」ナル文字ヲ挿入シアリ此ノ挿入ハ本野閣下送附ノ說明書中ニ明カナルカ如ク司法上ノ自由、權利及特典ハ兩締約國ノ一方ニ依リ同樣ニ許與セラレタルニ非サレハ他ノ一方ノ臣民ニ對シテ許與セラレストノ意義ニ於テ本項ヲ明定セムトノ目的ヲ以テ提議セラレタルモノニシテ第一、說明書ニ提議セル該條文ノ解釋ハ第二項ノ一般意義ト抵觸セルカ如ク見ユルコトヲ注意スルコトヲ要ス蓋シ本項ノ規定ニ依レハ「兩締約國一方ノ臣民カ享有セル司法上ノ一切ノ權利及特典」ハ他ノ一方ノ臣民ニ對シテモ均シク許與セラルルヲ以テ前記ノ解釋ハ此ノ完全ナル權利ノ享有ニ對シテ制限ヲ附スルモノナレハナリ提案ニ依レハ千八百九十五年ノ條約ニ規定セル司法上ノ權利ハ相互ノ臣民ニ與ヘラルルモノニ非ス單ニ許與セラルルコトアルヘキ權利ニ限リ之カ許與ヲ爲スモノトス果シテ之ヲ以テ日本國政府ノ意思ナリトセハ必スヤ自國臣民待遇ノ主義ニ基ケル第二項ノ文言ハ全部之ヲ修正セサルヘカラス

第二、又締約國雙方ノ法制ノ差異ヲ思慮セサルヘカラス締約國雙方各々其ノ內國ノ慣習ニ基因セル特別訴訟法ヲ有スルカ故ニ露西亞國ノ裁判所ニ對シテ日本國ノ裁判所カ露西亞國ノ臣民ニ對シテ許與スルコトヲ得ヘキモノト同一ノ便宜ヲ日本國臣民ニ對シテ許與スヘシト主張スルコト難シ例ヘハ日本國ノ法制ハ露西亞國ノ法制ニ於テ認許セル「訴訟上ノ救助ヲ受クルノ權」（ドロア、ダッシスタンス）ヲ認メサルモノトセハ日本國裁判所ニ出訴スル露西亞國臣民ニ對シテ之カ適用ヲ爲スヘシト主張スルコト能ハサルヘク之ト同樣ニ露西亞國裁判所ニ出訴スル日本國臣民ニ對スル場合ニ付テモ亦同シ

第一條第二項ハ千八百九十五年ノ條約ニ規定セラレタルカ如ク露西亞國ニ於ケル日本國臣民及日本國ニ於ケル露西亞國臣民ニ對シテ司法上單純ニ自國臣民ト同樣ノ權利ヲ許與セリ此ノ規定ヲ存スルコトハ兩國ノ利益ニ適合セルモノナルヘク且此ノ規定ハ依シテ此ノ種條約ノ大半即チ露英條約第十二條露獨條約第二條露佛條約第二條ニ於テ採用セラレタルモノナリ

日本國政府カ提議セル修正ハ實際著大ナル困難ヲ生スルノ虞ナキニ非ス蓋シ特別ナル場合ニ於テ露西亞國ニ於ケル日本國臣民又ハ日本國ニ於ケル露西亞國臣民ニ對シ一定ノ司法上ノ便宜ヲ許與スルニ先テ當該裁判所ハ之ト同樣ノ便宜カ兩締約國ノ一方ニ於ケル自國臣民ニ對シテ許與セラルルモノナルヤ否ヲ確メサルヘカラス之ヲ要スルニ日本國政府ノ此ノ提議ノ正確ナル意義ニ付更ニ詳密ナル說明ヲ得ムコトヲ欲ス

第一條第五項

日本國政府ハ第一條中ニ新タナル一項（第五項）ヲ加ヘタリ其ノ文言ハ次ノ如シ「農業及不動產ノ所有權ニ關スル各般ノ事項ニ關シテハ露西亞國ニ於ケル日本國臣民及日本國ニ於ケル露西亞國臣民ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ト均等ノ取扱ヲ受クヘキモノトス」

此ノ附加ハ說明書ニ述ヘアルカ如ク農業及不動產所有權ニ關シ露國ニ於ケル日本國臣民ニ對シテ最惠國條款ヲ以テ保障セムトスルニ在リ

露西亞國ノ根本法ニ依レハ若干ノ制限ヲ除キ外國臣民ハ特定ノ或地方ヲ除キ通則上露西亞國ニ於テ不動產取得ノ權利ヲ有ス故ニ日本帝國ノ臣民ニ對シ此ノ權能ヲ許與スルニ付何等支障ノ在ルヲ見ス然ルニ本文ニ於テハ日本國政府ハ自國臣民ノ爲ニ露西亞國ニ於テ不動產所有ノ權利ヲ要求スルモ露西亞國臣民ニ對シテハ同一ノ權利ヲ保障スルコトヲ得ルカ詳言セハ日本國提出案ノ規定ハ露西亞國臣民ニ對シ日本國ノ版圖內ニ於テ不動產所有權取得ノ權利ヲ與フルモノナルカ果シテ然リトセハ「相互ノ條件」ナル文字ヲ挿入シ以テ本項ノ規定ヲ承認スルニ付固ヨリ何等ノ困難ヲ有セス之ヲ要スルニ此ノ取扱ノ均等ハ雙方互ニ設定セラルヘキヲ正當トス

本項中ニ挿入セル「農業」ナル文字ニ付テハ日本國政府カ此ノ文字ニ如何ナル範圍ヲ與ヘタルカヲ知ラムト欲ス日本國政府ノ說明書ニハ此ノ文字ノ正確ナル意義ヲ明示セス單ニ田畑ノ勞働又ハ土地ノ耕作ニ關スルモノナルカ露西亞國ト諸外國ト諸通商航海條約ニハ農業又ハ土地ノ耕作ニ關スル何等特別ノ規定ヲ包含セス故ニ兩締約國ノ爲ニ此ノ文字ノ包含セル明了ナル意義ヲ知悉セスシテ將ニ締結スヘキ條約中ニ此ノ如キ新用語ヲ挿入スルハ難事ト爲ササルヲ得ス

第一條第八項

本條ハ兵役及之ニ代ハルヘキ賦課金ニ關シテ前諸項ニ規定セル免除ニ關スル留保ノ場合ヲ揭ケタリ此ノ留保ハ日本國政府ノ說明書ニ於テ承認スルカ如ク日墺通商條約ヨリ採リ來レルモノニシテ又露墺條約及露獨條約中ニモ存スルモノナリ故ニ露西亞國政府ハ果シテ日露兩國兵役ノ原則カ同一ナルコト確實ナルトキハ本項ノ挿入ヲ承認スルニ付異議ヲ有セサルヘシ露西亞國ニ於テハ總テ獨逸國及墺地利洪牙利國ニ於ケルカ如ク其ノ兵役ハ本人專屬ノ性質ヲ有シ如何ナル方法ニ於テモ土地ノ所有ニ關係セス土地ノ所有ニ附著セル軍事上ノ負擔ハ露西亞國ニ於テハ上記諸國ニ於ケルカ如ク宿舍、馬匹、輸送方法等ノ供給ニ限レルモノニシテ如何ナル方法ニ於テモ入隊服役ヲ爲スモノニ非ス日本國ノ法律ハ果シテ此ノ原則ニ合致セルモノナルカ或ハ不動產ノ所有ハ人身的服役ノ義務ヲ包含スルカ本野閣下ノ說明書ハ此ノ點ニ付何等ノ說明ヲ與ヘス

本項ノ字句ニ付テハ「臣民」ノ前ノ「總テ」ノ文字ヲ除去シ「土地又ハ建物ノ保有者」ハ「不動產ノ貸借者」ト改メムコトヲ希望ス是レ最近ノ露獨條約ニ使用セル用語ナリ

第二條第二項

日本國政府ハ第二條第二項中ニ「總テノ工業若ハ手工業」ナル字句竝「營業」ナル文字ヲ挿入セムト提議セリ

露西亞國政府ハ此ノ修正ヲ承認スルニ付異議ヲ有セスト雖「總テ其ノ國ノ法律、命令及規則ニ遵由シテ」ナル文字ヲ上記第一ノ修正字句ノ前ニ置カムト欲ス此ノ修正ハ露西亞國ニ於テハ手工業及例ヘハ特ニ自國臣民ノミニ留保セル採鑛業ノ如キ工業ノ存スルアルカ故ニ其ノ必要ヲ認ムルモノナリ

第二條第四項

第二條第四項ハ日本國提出案ノ文言ニ依レハ「及衞生」及「現ニ行ハレ又ハ行ハルルコトアルヘキ」ノ文字ニ依リテ修正セラレタルモノナリ露西亞帝國政府ハ此ノ修正ヲ承諾スルト同時ニ更ラニ法律、命令及規則ノ列舉中ニ「工業、手工業、商業」ノ文字ヲ加ヘ以テ本條ヲ補正セムト欲ス」此ノ補正ノ文字ハ日本國政府カ本條第二項中ニ加ヘムト欲シタル用語ヲ思量セルモノナリ蓋シ各種手工業及職業又ハ工業ニ從事スルノ自由カ兩締約國ノ臣民ニ對シ相互ニ保障セラレタル以上ハ商業、警察、公安及衞生ニ關スルノミナラス工業、手工業及職業ニ關シテモ亦法律ニ遵由スヘキコトヲ本條ニ於テ規定スルコトヲ必要ト爲セハナリ

第四條第一項及第二項

第四條及殊ニ其ノ初ノ二項ハ千八百九十五年ノ條約ト同一ノ文言ヲ以テ最惠國條款ヲ規定スルモノナリ露西亞帝國政府ハ此ノ規定ノ根本ニ關接スルコトナク千九百四年ノ露獨新通商條約ニ用ヰタル最惠國條款ノ文例ヲ以テ此ノ二項ノ文言ニ代ヘムコトノ提議ヲ爲スヘキモノト信ス此ノ規定ニ關スル露獨條約第四條ノ文言ハ次ノ如シ

「獨逸國ニ輸入セラルヘキ露西亞國ノ生產物及

製造品竝露西亞國ニ輸入セラルヘキ第三國ノ生産物及製造品ニシテ消費、保税倉庫、再輸出又ハ通過ニ係ルモノハ最惠國ノ物品ト同一ノ取扱ヲ受ケ如何ナル場合ニ於テモ且如何ナル事由ニ依ルモ總テ別國ノ同種物品ニ課スル所ノ税ヨリ高額ナルカ又ハ之ト異レル料金、課税又ハ賦課金ヲ課セラルルコトナク又總テ別國ノ同種物品カ被ルコトナキ附加税又ハ禁止ヲ受クルコトナカルヘシ殊ニ兩締約國ノ一方カ第三國ニ對シ永久又ハ一時、無償又ハ有償ノ名義ヲ以テ許與スヘキ總テノ便易、一般税率又ハ協定税率ニ規定セル輸入税ノ免除及減額ハ他ノ一方ノ生産物及製造品ニ對シ即時且無條件、無留保又ハ無償ヲ以テ之ヲ適用スヘキモノトス

此ノ規定ハ最惠國ノ取扱ニ付最詳密且最完全ナル査定ヲ與フルモノニシテ之ト同一ノ文言ヲ以テ將ニ締結スヘキ條約ノ本條ヲ作成スルコトヲ要ス此ノ如キハ最大注意ヲ以テ作成シタル同一ノ規定カ既ニ雙方ノ承認ヲ得以テ千九百四年以來露西亞國ト下記諸國トノ間ニ締結セル新通商規定中ニ掲ケラレタルカ故ニ此ノ如キ規定ハ最善ク時宜ニ適セルモノナリ即チ千九百五年ニ於テ佛蘭西國(第十四條)千九百六年ニ於テ墺地利洪牙利國(第二條)及千九百六年ニ於テ「ルーマニー」國等是ナリ故ニ專ラ最惠國ノ取扱ヲ基礎トスル日露新條約ニ於テモ又此ノ字句ヲ襲踏スルヲ可トス、

露西亞帝國政府ハ日本帝國政府カ新ニ採用セル字句ヲ以テ既ニ多少舊式ニ屬セル以前ノ字句ニ代ユルニ付何等異議ヲ有セサラムコトヲ希望ス

第十條第一項及第二項

第十條第一項及第二項ニ修正ヲ加フル所ナシ但シ露西亞帝國政府ハ「其ノ荷物ノ此ノ殘リノ部分ニ付テハ自國船舶ニ對シテ定メタル税率ノ外徴收セラルルコトナカルヘク且監視料ノ外其ノ荷物ニ付何等關税ヲ拂フコトナカルヘシ」トノ文字ヲ加ヘ以テ第二項ヲ修正セムコトヲ提議ス此ノ規定ハ露獨新通商條約第十二條ニ存スルモノニシテ其ノ目的ハ兩締約國ノ通商航海ヲ容易ナラシムルニ在リ故ニ露西亞帝國政府ハ此ノ提議カ日本國政府ノ歡迎ヲ受クヘキコトヲ疑ハス」加之本條ニ付テハ下ノ注意ヲ爲ササルヘカラス即チ千八百九十五年ノ日露條約ノ該當條文ハ日本國政府提出案ニ於テ削除セラレタル末項ヲ包含シ此ノ末項ハ露西亞國船舶ニ對シ特定三港ノ外日本帝國ノ開港間ニ其ノ荷物ヲ輸送スルノ權利ヲ保障スルモノナリ本野閣下ノ説明書ニハ日本國政府カ條約案中ヨリ本項ヲ削除シタル理由ノ説明ナシ然ルニ日本國諸開港間ニ其ノ荷物ヲ輸送スルノ權能ハ英吉利國ニ對シテハ千八百九十四年ノ條約(第十一條)ニ依リ獨逸國ニ對シテハ千八百九十六年ノ條約(第十三條)ニ依リ佛蘭西國ニ對シテハ千八百九十六年ノ條約(第十二條)ニ依リ日本國ハ皆之ヲ許與セルコトヲ省ミサルヘカラス而シテ此ノ諸條約ハ現ニ今尚施行セラレ以テ千九百十一年ニ至ル迄其ノ效力ヲ繼續スヘキモノナリ日露新條約モ亦同一ノ期限ヲ有スルモノナルカ故ニ上記各國ニ對スル日本國ノ諸條約ト同時ニ適用セラレサルヘカラス然ラハ則チ露西亞國船舶ニ對シ諸別國ノ船舶ニ對シテ許與セル此ノ權能ヲ拒否スルハ全然最惠國ノ主義ニ違背スルモノト謂ハサルヘカラス日本國政府カ條約案第十四條ニ提議セル「船舶ニ」ノ文字ノ挿入ハ最惠國條款ニ依リ露西亞國船舶ニ對シテ日本國ニ於ケル諸別國ノ船舶ニ許與シタルト同一ノ特權ヲ保障スルモノトシテ解釋セサルヘカラス但シ國際間ノ協定ヲ以テ特定セル權利ト單純ナル解釋ニ基ケル殊遇ノ享有トノ間ニ著ナル差異ノ存スルモノアリ且日露通商航海新條約ハ兩國交戰以前ニ施行セル露日通商規定ヲ以テ基礎ト爲スヘキコトハ明カニ「ポーツマス」條約ニ規定スル所ナリ故ニ露西亞帝國政府ハ露西亞國船舶ノ爲ニ千八百九十五年ノ條約ニ規定セル重要ナル讓與ヲ依然保持セムコトヲ主張シ以テ此ノ決意カ嚴格ニ確認セラレムコトヲ欲ス

第十二條第二項

條約案第十二條第二項ハ兩締約國ノ一方ノ港內ニ於ケル他ノ一方ノ船舶積量測度證書ノ相互承認ノコトヲ規定ス船舶積量測定ニ關スル税關ノ手續ヲ簡易ナラシムルコトハ兩國ノ利益タルヤ言ヲ須タス然レトモ日露兩國間船舶積量測度制度ハ其ノ測度證書相互承認ヲ保障スルニ先チ須ラク互ニ相一致セシムルコトヲ要スル或差異ノ存スルモノアルヘシ露西亞國ニ於テハ英吉利國ノ規定(English rule)ヲ適用シ「ムールソム」式ヲ採用セリ然レトモ露西亞國船舶噸數ノ算定ハ特別ノ規定ニ從フモノナルカ故ニ露西亞國ハ船舶積量測度ニ關シ諸外國ト幾多ノ宣言ヲ交換シ此ノ種ノ條約ハ墺地利洪牙利國、白耳義國、大不列顛國、獨逸國、丁抹國、西班牙國、伊太利國、佛蘭西國、亞米利加合衆國、瑞典國及諾威國ニ對シテ既ニ締結セラレタリ日露兩國間ニ於テモ亦通商航海ノ利益上此ノ種ノ協定ヲ締結スルコトヲ指定セサルヘカラス此ノ協定ハ專門的性質ヲ有セルモノニシテ固ヨリ通商條約ト同立セル外交文書ヲ作成スヘキモノナリ然レトモ日本國政府ノ希望ニ應セムカ爲露西亞帝國政府ハ目下條約案第十二條中ニ此ノ點ニ關スル特別條項ヲ挿入スルニ付異議ヲ有セス此ノ條項ハ「ルーマニー」國トノ通商條約第十二條及露墺通商條約第十六條ニ依リ作成スルコトヲ得ヘシ此ノ兩條約ハ千九百六年ニ於テ締結セラレタルモノニシテ其ノ規定ノ字句ハ次ノ如シ「兩締約國ノ一方カ交付セル船舶積量測度證書ハ兩締約國間ニ既ニ協定シ及將來協定スヘキ特別ノ取極ニ依リ他ノ一方ニ於テ之ヲ承認スヘシ」

此ノ規定ハ「既ニ協定シ」ナル文字ノ削除ノ外他ノ修正ヲ爲スコトヲ要セサルヘシ

第十四條

「工業及手工業」、「船舶ニ」及「工業」ナル文字ノ挿入ハ既ニ第二條ニ於テ承認セル修正ニ基因セルモノナルカ故ニ露西亞帝國政府ハ唯「手工業」ナル文字ヲ複數ニ爲スヘキコトヲ提議シ以テ此ノ挿入ニ付何等異議ヲ有セス

第十五條第三項

本條第三項ニ關スル説明書ニ於テ日本國政府ハ兩國領事職務上ノ權限ヲ明定セムカ爲ニ日露兩國ノ間ニ領事職務條約ノ欠缺セルヲ認メ商業關係ノ發達上此ノ不便ヲ匡正スルノ必要ヲ見タリ此ノ領事職務條約ノ締結ニ至ルマテ日本國政府ハ露西亞國ニ於ケル日本國ノ領事ヲシテ最惠國臣民ノ地位ニ置カシメムト欲シ露西亞帝國政府モ亦日本國ニ於ケル露西亞國領事ニ關シ全ク同一ノ意見ヲ有シ此ノ意識ヲ以テ第十五條第三項ヲ修正スルニ付何等異議ヲ有セス

第十五條第四項

露西亞國政府ハ又露西亞國ニ於ケル日本國ノ正式領事及外交官ニ對シ露西亞國カ獨逸國、佛蘭西國、墺地利洪牙利國ノ外交官及領事ニ對シテ許與シタル露西亞國ノ檢閲ニ關スル同様ノ便易ヲ保障スヘキ新タナル一項ヲ加ヘ以テ第十五條ヲ補修スルコトヲ承認ス此ノ便易ハ固ヨリ相互ノ條件ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ許與スルコトヲ得ス故ニ露西亞國政府ハ本項中ニ「相互ノ條件ヲ以テ」ナル文字ヲ挿入セムコトヲ提議ス此ノ挿入及若干文言修正ノ結果本條ハ下ノ如クナルヘシ「兩締約國ノ一方ヨリ他ノ一方ニ派遣セラレタル一切ノ階級ノ外交官及領事官ハ新聞雜誌竝學術技藝及文學ノ著作ニ關シ相互ノ條件ヲ以テ完全ナル自由ヲ享有スヘシ」

第十六條

條約案第十六條ハ全然千八百九十五年ノ條約第十六條ニ同シ然レトモ特許、商標及意匠相互保護ノ規定ハ日本國ニ對シテ露西亞國ト工業及商業所有權ノ相互保護ニ關スル特別條約ヲ締結スルノ義務ヲ設定シタル五月二十七日ノ議定書第四ニ依リ完成セラレタルコトヲ注意セサルヘカラス此ノ規定ハ其ノ後實行セラレス而シテ今回日本國ノ提案ハ總テ舊條約第十六條ノ全文ヲ其ノ儘維持スルニ在ルカ故ニ前記議定書第四ノ規定シタル義務ハ全然拋擲セラルルニ至ルヘシ故ニ外國ノ特許、商標及意匠保護ニ關スル法律カ日本國ニ於テ發布セラレ而シテ第十六條ニ規定セル便易ハ片務的ニ非サルカヲ知ラムコトヲ望ム日本帝國公使館ノ斡旋ニ依リ特許、商標及意匠ノ保護ハ露西亞國ノ法律ニ依リテ規定セラレタル手續ヲ遵守スルコト竝日本國ニ於ケル露西亞國臣民ニ對シテ同様ノ取扱ヲ保障スルコトノ條件ヲ以テ曩ニ(千九百六年四月二十八日)既ニ露西亞國ニ於ケル日本國臣民ニ對シテ許與セラレタリ今乃チ實際日本國ニ於ケル露西亞國皇帝陛下ノ臣民カ此ノ點ニ付露西亞國ニ於ケル日本國皇帝陛下ノ臣民ト同様ニ保護セラルルヤ否ヲ知ラムト欲ス

若夫レ然ラサルトキハ千八百九十五年五月二十七日ノ議定書第四ニ準據シテ作成セル第二項ヲ以テ下ノ如ク第十六條ヲ完成セサルヘカラス

「兩締約國ハ成ルヘク速ニ工業及商業所有權ノ保護ニ關シ相互條件ヲ基礎トシテ一ノ條約ヲ締結セムカ爲商議ヲ開クコトヲ約ス」

第十七條

千八百九十五年ノ舊條約第十七條

日本國ニ於ケル外國人居留地及永代借地ニ關スル千八百九十五年ノ條約第十七條ハ今ヤ全然日本國ノ提案ヨリ除去セラレタリ而シテ本野閣下ノ説明書ニハ其ノ理由ヲ説明セス日本國ニ於ケル外國人居留地カ既ニ日本國ノ市區ニ編入セラレタル以來千八百九十五年ノ條約第十七條規定ノ大半ハ其ノ存在ノ理由ヲ喪失シタリ然レトモ從來日本國ニ於ケル永代借地及無借料ニテ既ニ貸與シタル各地所ノ税ニ關スル本條ノ規定ハ總テ其ノ必要ヲ持續シ日本國ニ於ケル露西亞國臣民ノ利益ヲ侵害スルニ非レハ之ヲ廢除スルコトヲ得ス是レ此ノ規定ノ適用カ千九百五年五月二十二日海牙仲裁裁判ノ判決ニ依リテ解決シタル國際紛爭ヲ惹起シタル所以ナリ該判決ハ均シク露西亞國臣民ニモ適用セラルルモノナリト雖仲裁裁判所ハ單ニ評網ノ問題即チ永代借地上ニ建造セラレタル家屋税ノコトヲ裁判シタルコトヲ注意スルコトヲ要ス故ニ新通商條約中ニ舊條約第十七條ヲ以テ明定シタル許與ヲ保持スルノ必要アリ此ノ確認ハ之ト同様ノ規定カ日英條

約、日佛協約、日露條約中ニ存在シ而シテ最惠國ノ主義ニ基キ露西亞國モ又之ヲ取得シタル以上ハ益其ノ必要ヲ見ルモノナリ

此ノ理由ニ基キ露西亞帝國政府ハ新條約中ニ下ノ如キ條文ヲ以テ第十七條（第一）ヲ挿入セムコトヲ提議ス「日本帝國政府ハ日本國ノ市區ニ編入セル諸外國人居留地ノ土地ノ永代借地ヲ確認シ該永代借地カ包含セルモノノ外此ノ財產ニ對シテ何等條件ヲ附スルコトナシ外國人居留地公共ノ目的ノ爲ニ無借料ニテ日本國政府カ既ニ貸與シタル各地所ハ永代ニ保存セラルヘシ且該地所ニシテ最初貸與シタルトキノ目的ニ使用セラルル限ハ總テノ租稅及徵收金ヲ免スヘシ但シ土地收用權ニハ從フヘキモノトス」

第十七條

日本國提出案第十七條ハ其ノ第一項ニ於テ將ニ締結スヘキ條約ノ施行期ヲ十日ト定メタリ露西亞國政府ハ露西亞帝國各洲ノ遼隔セル爲之ヲ以テ甚短期ニ失セリト認メ之ヲ二箇月ニ延長セムコトヲ提議ス而シテ該條約ヲ廢止スヘキ方法ニ付テハ最近ノ露獨通商條約第三條ノ字句ヲ採用スルニ若カス即チ該條約ニ則トリ條約案第十七條ハ左ノ如ク之ヲ作成スヘキモノトス「本條約ハ批准交換後二箇月ヲ經テ實施セラレ千九百十一年即チ明治四十三年七月四日（十七日）迄其ノ效力ヲ有ス兩締約國ノ一方カ右期限ノ滿了前十二箇月內ニ本條約ヲ終了セムト欲スル旨ヲ他ノ一方ニ通知セサルトキハ本條約ハ兩締約國ノ一方又ハ他ノ一方カ之ヲ通知シタル日ヨリ起算シテ一年間其ノ效力ヲ持續スルモノトス」

第三回會議

日露通商航海條約締結會議錄第三號

千九百六年（十月二十六日／十一月八日）午後四時露西亞國外務省ニ於テ開會

列席者

日本國　全權委員本野閣下、聖彼得堡日本國公使館書記官落合氏、丸毛氏、津田氏

露西亞國　全權委員「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏、商工務省委員「ランゴヴォイ」氏、「アレキセイ、エッフ」氏、「ブリレウヤイエッフ」氏、會議書記官「ウエルクホウスキー」氏、「リッセンコ」氏、「ド、マルテンス」氏、「ツオツネツセンスキー」氏

開會後「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ本野閣下ニ對シテ陳述シテ曰ク

日本國全權委員閣下、予ハ條約案ノ討議ヲ再開スルニ臨ミ談判ニ關スル一般事項ニ付閣下ノ注意ヲ喚起セムト欲スルモノアリ

「ポーツマス」談判ノ際日露通商關係回復問題ノ提起セラレタル時ニ於テ露西亞國全權委員ハ講和ノ事實ノミニヨリテ直ニ千八百九十五年ノ舊條約カ再ヒ其ノ效力ヲ生スヘキモノト看做シタリ此ノ如キ見解ハ固ヨリ此ノ會議ニ之ヲ保持スルコトヲ得スト雖兩締約國ハ千八百九十五年ノ條約ヲ以テ將ニ締結スヘキ新協定ノ基礎ト認ムルコトニ一致シタリ此ノ根本的觀念ハ千九百五年四月二十九日ノ議定書ニ記載セラレタルモノニシテ以テ日露兩國經濟關係ノ問題ヲ解決シ而シテ「ポーツマス」條約第十二條ハ舊條約ノ原則ヲ保持スルニ付兩締約國ノ決意ヲ確定シタリ

此ノ如キ決意ハ固ヨリ實際上ノ理由ニ發生セルモノニシテ日露兩國ハ千八百九十五年以來長久ニシテ困難ナル談判ノ後決定セル協定ニ依リテ連結セラレタリ此ノ協定ノ締結ハ條約上ノ範圍ニ對シ兩國政府ノ苦心ニ依リ各先ツ自國經濟上ノ利益ヲ規定セリ然レトモ此ノ企圖ハ其ノ成功ヲ見ルコト能ハス千八百八十九年ノ條約ノ實施ハ東京內閣ノ請求ニ依リ中止セラレ其ノ後通商上ノ協約改正ノ目的ヲ以テ兩國意見ノ交換ヲ爲スヤ日本國政府ハ露西亞國ノ提案ニ對シ全ク條約ノ要求ヲ顧慮シ而シテ露西亞國ニ對シテ單純ニ相互的トナスコトノミヲ讓與セルニ過キサリキ

此ノ原則ハ最有力ナルモノニシテ最惠國條款ハ締結條約ノ施行期タル千八百九十九年七月五日以來不變的ニ互ニ適用セラレタリ是兩國商業上ノ利益ハ外交上ノ協約ニ據リ確定セル制度ニ適合セルコトヲ明證スルモノナリ

然ラハ即チ舊條約ヲ保持シ之ヲ以テ將ニ締結スヘキ條約ノ基礎ト看做スヘキ「ポーツマス」談判ノ賢明ナリシコトヲ認識スルコトヲ要ス

此ノ如キハ此ノ談判ニ關シテ得ラレタル出發點ニシテ新條約ハ稅率ノ讓步ヲ包含シ日露兩國ニ對シ最惠國ノ取扱ヲ保障スルコトニ限ルヘキモノトス

此ノ事由ニ基キ露西亞國全權委員ハ第四條第三項ニ揭クル條項ハ千八百九十五年ノ條約ノ原則ニ反セルコトヲ認ム蓋シ日本國政府ハ本項ニ於テ滿洲ノ國境ヨリ露西亞國ニ輸入セル遼東租借地ノ生產物若ハ製造物及滿洲ノ國境ヨリ右租借地內ニ輸入セル露西亞國ノ生產物若ハ製造物

ニ對スル輸入稅ノ免除ヲ提議セリ此ノ條項ハ日露兩國間ニ稅率ニ關スル相互讓步ノ協定ヲ缺ケムトスルモノナリ

此ノ形式上ノ理由以外ニ露西亞國全權委員ハ根本的ノ理由ニ基キ露西亞國政府ハ日本國ノ提議ヲ排斥スヘキモノト信シタリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ此ノ條項ノ說明書中ニ引用セル千九百四年五月一日ノ勅令ハ國際間ノ協定ニ基クモノニ非ス唯特ニ露西亞國ノ自治權ニ屬セル旨ヲ證明シ例外ノ場合ニ屬セル此ノ立法上ノ措置ハ暫定的性質ヲ有スルモノニシテ任意ニ之ヲ取消スコトヲ得ヘク又此ノ暫定的措置ニ依リテ一定ノ期間露西亞國政府ヲ拘束スヘキ國際協定ノ基礎ヲ作ルコトヲ得サルモノトス此ノ勅令ハ帝國關稅規則第九百三十七條ノ形態ヲ以テ成典トナリタルハ事實ナリト雖露西亞國政府ハ黑龍江省ノ例外的制度ノ廢止ニ就テハ固ヨリ完全ナル自由ヲ有ス前記廢止ハ固ヨリ既定ノ順序ニ從フヘキ新立法事業ヲ要スヘシ日本國全權委員ハ露西亞國ノ輿論カ浦鹽斯德自由港ノ問題ニ甚重キヲ置ケルコト及當該官憲ハ今ヤ此ノ問題ノ調査ニ從事セルコトヲ知ラサルヘカラス事情此ノ如クナルカ故ニ露西亞國政府ハ一定ノ年限間繼續シテ之ヲ自由港トナスニツキテ外交上ノ協定ヲ締結スルコトハ困難ナルヘシトセリ

此ノ觀念ニ基キ露西亞國全權委員ハ日本國ノ請求範圍ヲ論難シ以爲ク日本國ノ請求ハ滿洲國境ニ於ケル現行制度ノ規定以外ニ出ツルモノニシテ千九百四年五月一日ノ法律ニ依レハ黑龍江口及黑龍江以南ノ諸港及滿洲國境ヲ經由シテ輸入セル外國商品免稅ノ許可ハ單ニ黑龍江省ノミニ限レルモノニシテ此ノ地方ノ境界ヲ超ヘタル商品ハ一般稅率ニ揭ケタル課稅ニ從フヘキモノナリ而シテ日本國ノ提議ハ黑龍江省ニ限局セスシテ滿洲國境ヲ經過シ陸路ニ依ル露西亞國內ニ於ケル一切ノ輸入ニ對シテ免稅ヲ擴張セントスルモノナリ此ノ如キ規定ニ依ルトキハ遼東租借地ノ生產物ハ輸送費ヲ支持スル限リ深ク自由ニ西比利亞ニ侵入スルコトヲ得ヘシ

日本國カ要求セル讓與ノ範圍ハ露西亞國カ最惠國臣民ノ基礎ニ於テ條約ニ拘束セラレタル諸國ニ對シ此ノ殊遇ヲ與フヘキ義務ニ依リテ增加セラルヘク之カ爲露西亞國政府カ一定ノ期間滿洲國境ニ無制限ノ自由港ヲ設定スヘキ國際條約ニ依リテ束縛セラルヘキ場合ニ於テハ啻ニ遼東ノ生產物カ關稅ヲ課セラルルコトナクシテ露西亞國內ニ到來スルコトヲ得ヘキノミナラス尙此ノ殊遇ハ歐羅巴及亞米利加諸國殆ト全部ノ貨物ニ適用セラルヘシ

此ノ如キ讓與ハ露西亞國ノ爲ニ正當ナル報償ヲ發見シ難キ程廣大ニシテ且夥多ナル利益ヲ侵害スルモノナリ

此ノ意見ノ陳述ニ對スル答辯トシテ日本國全權委員ハ第二讀會ニ於テ「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏カ主張セル論旨ニ對シ其ノ意見ヲ說示スヘキ旨ヲ聲明シ目下露西亞國提唱意見ノ要點ヲ表明スルコトヲ要スト信シタリ「ポーツマス」ニ於テ舊條約ヲ取リテ新條約ノ基礎ト爲スヘキコトヲ約シタルコトハ事實ナリト雖此ノ事實ハ以テ毫モ將ニ締結スヘキ條約中ニ事實ノ新狀況ニ依リテ必要トナリタル若干新條項ヲ插入スルノ機會ヲ除去スルモノニ非ス從テ千八百九十五年ノ條約ノ文字ヲ固守スヘキモノト信セシムヘキモノニ非ス若シ之ヲ以テ「ポーツマス」談判委員ノ希望ナリシトセハ單ニ舊通商條約施行ノ旨ヲ講和條約中ニ記入スヘカリシナリ而シテ本項ノ插入ハ新狀況ニ依リ其ノ必要ヲ生シタルモノナリ又本野氏ハ本條項ハ日本國ヨリ輸入セル日本國ノ商品ニ關スルモノニ非スシテ專ラ遼東租借地內ニ於ケル生產物若ハ製造品ニ關スルモノナルコトヲ注意セリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ第二讀會ニ於テ此ノ問題ノ基礎ニ關シ補足的說明ヲ與フヘシトノ豫約ニ付日本國全權委員ニ謝辭ヲ述ヘ自己ハ毫モ舊條約ノ條文中ニ新條項ヲ插入スルコトニ付兩締約國ノ權利ヲ爭ハサルコトヲ附言セリ然レトモ此ノ新規定ハ根本的原則ニ適應セサルヘカラス蓋協定ハ相互ノ原則ニ基ケルモノナルカ故ニ條約上ノ協定ハ之ニ依リテ制限セラレサルヘカラス是ニ由リテ之ヲ觀レハ第三項ノ提議ハ「ポーツマス」條約第十二條ニ揭ケタル方針ニ違背セルコトハ爭フヘカラサルモノナルカ如シ最後ニ舊條約ヲ單純ニ更新スルコトハ事實ノ變化カ千八百九十五年ノ條約ノ若干規定ヲ無效ト爲シタルニ依リ之ヲ行フコト能ハサルモ之カ修正ニ就テハ依然トシテ「ポーツマス」條約ニ認メタル方針ニ基カサルヘカラス

本野氏ハ第四條末項ニ揭ケタル提議ハ課稅ノ讓步ニ關スルモノニ非ス唯新狀況ニ依リテ發生シタルモノナリト信シ日露兩國間ノ一般的條約上ノ協定ニ關スルモノニ非ス唯稅率ノ部分的變更ニ關スルモノナリ且租借地內ニ輸入セル露西亞國ノ生產物モ亦同一ノ免稅ヲ享有スルカ故ニ相互ノ原則ハ毫モ侵害セラレサルモノナリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ之ニ反シテ提

該條項ハ稅率ヲ零ニ定メタル協定ヲ規定セリト信シタリ

日本國提出案全體ノ討議ヲ終リ會議ハ附屬書ノ討議ニ移レリ時ニ露西亞國全權委員ハ昔日露通商條約ハ本條約案ニ附屬セラレサル數多ノ別約ヲ包含セルコトヲ注意シ本野氏ノ說明書ハ此ノ遺脫ニ付何等說明ヲ與ヘス此ノ別約ハ露西亞國、瑞典國及諾威國竝亞細亞接壤諸國ノ境界關係ヲ規定セル特別規定ニ關係ヲ有スルモノニシテ又其ノ許與ハ相互ノ原則ニ背馳セスト宣言セラレタル特別性質ノ免稅、免除及特典ヲ掲ケタル此ノ規定ハ尙施行セラルルモノナルカ故ニ露西亞國全權委員ノ意見ニ依レハ將ニ締結スヘキ條約中ニ全部之ヲ保存スルコトヲ要スト爲シ此ノ理由ニ依リ「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ將ニ締結スヘキ條約中ニ包含セラルヘキ別約トシテ此ノ規定ヲ作成シ且露獨條約ノ規定ニ倣ハムコトヲ提議シ同時ニ露西亞國全權委員ハ如何ナル事由ニ依リ此ノ留保カ條約案中ヨリ除却セラレタルカヲ知ラムト欲スル旨ヲ說示シタリ

本野氏ハ露西亞國ノ提案ヲ調査シ次回ノ會議ニ於テ其ノ回答ヲナスヘキ旨ヲ聲明セリ然レトモ本野氏ハ千八百九十五年ノ條約ニ附屬セル別約ハ舊條約ニ於テ露西亞國カ日本國ニ許與セル利益ニ對シ日本國カ露西亞國ニ對シテ許與シタル報償ノ性質ヲ有シタルモノノ如ク見ユルコトニ注意セシムルコトヲ要スト信シタリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ日本國全權委員ニ對シテ千八百九十五年ノ條約ノ別約ニ揭ケタル留保ハ一般的性質ヲ有セルモノニシテ露西亞國カ諸外國ト締結シタル總テノ通商上ノ協約中ニ此ノ留保カ反覆セラレタルコトニ注意セムコトヲ請ヒ此ノ留保ハ其ノ性質ノ如何ヲ問ハス以テ保障トシテ看做サレス此ノ留保ノ特質ノ結果此ノ規定ノ理由ニ關シ露西亞國政府ノ修正案摘要書（附屬書參照）ニ付更ニ長ク之ヲ討議スルノ必要ヲ認メスト爲セリ

次ニ會議ハ日本國提出條約案附屬議定書第一節一項ノ討議ニ移リ本號ハ日本國臣民ノ携帶スル自國旅券ニ對スル露西亞國官憲ノ査證ノ有效期限ヲ六箇月ニ擴張シ露西亞國官憲カ日本國臣民ニ外國行旅券ヲ交附シ及其ノ所持ノ旅券ニ露西亞國出發許可ノ旨ヲ記入スルニ當リ徵收スル手數料若ハ取立金ヲ五十哥ト定メタリ

露西亞國全權委員ハ獨逸國及墺地利洪牙利國ト露西亞國トノ間ノ通商規定ニ據リ露西亞國政府ハ最惠國條款ニ從ヒ日本國臣民ニ對シ上記諸國ノ人民ニ許與セル旅券ノ便宜ヲ保障スヘキコトヲ聲明シ日本國臣民ノ旅券ニ對スル露西亞國官憲ノ査證有效期間ハ六箇月ニシテ露西亞國政府ハ露西亞帝國出發ノ際露西亞國官憲カ交附スヘキ旅券ノ手數料ヲ法律ニ由リテ五十哥ト爲セルコトヲ議定書中ニ記載スルニ付異議ヲ有セス然レトモ露西亞國全權委員ハ此ノ手數料ハ政府ニ對シ旅券ノ印刷費ヲ支辨セシムルニ過キサルコトヲ注意セムコトヲ請ヒ旅券規則第二百一條ハ此ノ手數料以外ニ赤十字ノ爲ニ五留ノ取立金ノ事ヲ規定シ露西亞國臣民ハ總テ外國人ト共ニ此ノ徵收ニ從フヘキモノトス

露西亞國委員ノ書記官ハ議定書第一節第二項ノ討議ニ移リタリ本號ハ亞細亞露西亞內ニ滯在若ハ旅行スル日本國臣民ニ對スル特種ノ特權ヲ規定シタルモノナリ

本條項ノ討議ニ移リ露西亞國全權委員ハ先第一ニ日本帝國政府ノ請求ハ明確ナラサルカ如ク見ユルコトヲ說示シ露西亞國全權委員ハ本條項ハ露國亞國出發ノ際領事ノ査證若ハ旅券交附ノ手數料ニ關スルカ又ハ內地居住ノ爲ノ旅券交附手數料ニ關スルカヲ說示セラレムコトヲ欲シ露西亞國出發ノ爲ノ旅券手數料ハ居住許可ニ對スル印紙稅（七五哥乃至一留）ト同樣旣ニ極メテ小額ナリ（五十哥）稍高額ナル領事ノ査證料（二留二五哥）ニ至リテハ此ノ査證ノ期間カ六箇月ニ擴張セラルヘキコトヲ考量スルコトヲ要ス此ノ期間內ハ其ノ地方駐在露西亞國領事カ合法的ニ査證セル內國旅券ヲ所持セル外國人ハ其ノ旅券ニ對シ追加納附金ヲ納附スルコトヲ要セスシテ國境ノ經過及再經過ヲ爲スコトヲ得ヘシ此ノ請求セラレタル殊遇ハ說明書ニ依レハ特ニ日本國漁業者ノ爲ナルカ故ニ露西亞國全權委員ハ六箇月ノ期間ハ以テ漁業季ニ充分ナリト思考セリ

內國旅券ノ有效期間ニ關シ日本國全權委員ハ露西亞國沿海地方ニ使用セラルヘキ各種ノ漁業者ニ對シ「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ノ注意ヲ喚起シ純然タル漁業者以外ニ日本國ノ勞働者ハ漁業ニ關スル各種ノ工業ニ從事スヘク此ノ徒ハ漁業季間外ハ露西亞國ノ版圖內ニ滯在セサルヘカラス又其ノ數ノ漸ク增加スル傾アル日本國商業上ノ旅客ニ就キテモ同樣ナルモノニシテ日本國政府ハ其ノ臣民ノ爲ニ旅券ノ特別殊遇ヲ要求シ以テ此ノ種ノ旅客及勞働者ニ對シテ特別ノ觀察ヲナセリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ本野氏カ最精密ニ其ノ請求セル許與ノ範圍ヲ說明セムコトヲ望ミ日本國全權委員ニ對シテ日本國臣民ニ對スル領事査證料ノ減額ハ露西亞國ニ於テ最惠國條

款ヲ享有セル諸國臣民ノ爲ニ同樣ノ減額ヲ爲スノ必要ヲ生スヘキコトヲ考量セムコトヲ求メ且非正式ノ名義ニテ參考ノ爲旅券ノ新規則カ內務省ニ於テ制定セラルヘキコトヲ附言セリ此ノ法律案ハ現行旅券制度中ニ大ナル便宜ヲ採入シ帝國「ドゥマ」ノ初ノ會議ニ於テ其ノ調査ニ附セラルヘキモノナリ

本野氏ハ此ノ問題ニ付第二讀會ニ於テ其ノ補足的說明ヲ與フヘキコトヲ約シ此ノ條項ハ領事査證料及外國人ニ對スル居住ノ許可及旅券ニ付露西亞國ニ於ケル徵收金ニ關スルモノナリト信シ此ノ手數料ハ如何ニ小額ナルモ單純ナル勞働者ニ取リテハ甚タ重キモノナリト爲セリ

會議ハ議定書第二ノ討議ニ移リタリ本號ハ滿洲國境ヲ經ルモノト西比利亞ノ諸港ニ依レルモノト其ノ輸入稅ノ同一ナルコトニ關スルモノナリ

此ノ問題ノ基礎ヲ調査スルニ先チ露西亞國全權委員ハ日本國全權委員ニ對シテ會議ノ初ニ於テ爲シタル一般的注意ヲ喚起シ日本國全權委員カ請求セル便宜ハ稅率ノ協定ヲ推定スルモノニシテ是レ「ポーツマス」條約第十二條ニ牴觸セルモノナルコトヲ說明シ此ノ唯一ノ理由ハ日本國ノ提議ヲ排斥スルニ足ルモノト爲セリ然レトモ「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ此ノ問題ノ經濟上ノ價値ニ付說明セムトスル旨ヲ聲明セリ此ノ點ニ付自由港ノ制度ハ常ニ黑龍江口以北ニ於ケル太平洋ノ諸港ニ存セルコトヲ明示シ此ノ制度ハ自由港カ黑龍江口及黑龍江以南ニ於テ停止セラレタル時期即チ千九百年ニ於テモ亦保持セラレ且西比利亞ノ北岸モ亦全ク特別ナル關稅制度ニ依リテ規定セラレ外國商品ノ輸入ハ「カラ」海航行ノ困難ニ依リ「エニッセイ」及「オビ」ノ河口ニ於テ特別殊遇ノ取扱ヲ受ク「エニッセイ」河口ニ就キテハ大藏大臣ハ千九百五年五月五日ノ勅裁ニ依リ免稅輸入商品目錄調製ノ權利ヲ有ス故ニ議定書第二ニ揭クルカ如キ日本國政府ノ希望ハ黑龍江省ノ地境ヲ經由スル日本國商品輸入稅ノ全免ヲ附帶ヘルモノナリ

滿洲國境ニ於ケル滿洲商業ニ許與セル便宜ハ露西亞國全權委員ノ意見ニ依レハ日本國政府請求ノ論據ニ引用スルコトヲ得ス蓋シ此ノ殊遇ハ例外ノ性質ヲ有スルモノニシテ特ニ亞細亞ノ接境地方ノ商業ノミニ適用セラルルモノナレハナリ此ノ國境ノ商業ニ許與セル特別免除ハ常ニ相互ノ原則ニ違背スヘカラサルモノト看做サレ露西亞國カ締結セル通商條約ニ於テ特別留保ノ目的ヲ爲シ千八百九十五年ノ日露條約ニ附屬セル別約ニ於テモ又同樣ニシテ此ノ別約ニ依レハ兩締約國ノ商業關係ノ爲ニ亞細亞ノ接境國ニ對スル露西亞國ノ商業關係ニ對抗スルコトヲ得ス此ノ點ニ付露西亞國ニ對スル日本國ノ狀況ハ變動ヲ受ケサルモノニシテ此ノ留保ハ獨逸國、墺地利洪牙利國「ルーマニー」國等ニ對シテ露西亞國カ締結セル新通商規定ニ存スルモノナルカ故ニ日本國ハ此ノ特權ヲ主張スル何等ノ理由ヲ有セス

且淸國ノ國境貿易ニ對シテ許與セル便宜ハ總テ條約ノ性質ヲ有セス專ラ露西亞國ノ國內法制ニ屬スルモノナルコトヲ考察スヘキモノナリ

會議ノ終ニ於テ露西亞國全權委員ハ日本國全權委員ニ對シテ露西亞國政府修正案ノ摘要書ノ一部（附屬書參照）ヲ交附シ日本國全權委員ト共ニ爾後談判ノ進行ニ關シテ協定ヲ爲セリ

午後五時三十分散會

本　野　一　郞（記名）

「エヌ、マレヴスキー、マレヴィッチ」（記名）

附屬書第三號

露西亞國政府修正摘要書（承前）

第四條第三項

日本國政府ハ條約案第四條第三項ニ於テ遼東租借地ノ生產若ハ製造ニ係ル物品ニシテ陸路滿洲國境ヲ經テ露西亞國ニ輸入スルモノ及露西亞國ノ生產若ハ製造ニ係ル物品ニシテ滿洲國境ヲ經テ陸路遼東租借地ニ輸入スルモノニ對シ執レモ輸入稅ヲ免スヘキコトヲ提議セリ此ノ規定ハ兩國間ニ稅率ノ相互關與ヲ爲スヘキ條約上ノ協定ヲ設定スヘキモノナリ然ルニ千九百五年「ポーツマス」條約第十二條ハ兩國政府ニ對シテ千八百九十五年ノ舊條約ヲ基礎トシテ新通商條約ヲ締約スルノ義務ヲ課スルモノナルヲ以テ日本國政府ノ要求ハ該舊條約カ單ニ兩締約國ニ對シ最惠國ノ取扱ヲ保障セムトスル條約上ノ制度ト全然相反スルニ至ルナリ此ノ唯一ノ主義ハ千八百九十五年ニ於テ義務的ノモノナリト宣言セラレ以テ日露兩國間經濟上ノ關係ヲ規定スヘキモノト爲セリ

之ヲ要スルニ露西亞國政府ノ意見ニ依レハ日本國ノ此ノ提議ハ「ポーツマス」條約第十二條ノ明文ト顯著ナル矛盾ヲ爲スモノナリ

此ノ形式的理由ノ外ニ尙最切實ナル實際的理由ノ存スルアリ此ノ實際的理由ニ依リ露西亞國政府ハ日本國ノ此ノ提議ヲ承認スルコトヲ得ス

即チ第一、說明書中此ノ請求事項ノ論據トシテ引用セル千九百四年五月一日附ノ勅令ハ陸境上ノ協定ニ基クモノニ非スシテ露西亞國ノ自治權ニ屬スルモノナリ例外ノ場合ニ屬セル此ノ

法制上ノ措置ハ臨時的性質ヲ有スルモノニシテ任意ニ取消スコトヲ得ヘク之カ爲ニ一定ノ期間露西亞國政府ヲ拘束スヘキ國際上ノ協商ノ基礎ヲ形成スルコトヲ得ヘキモノニ非ス

第二、千九百四年ニ於テ許與セラレタル特遇ハ單ニ黑龍江省ニ輸入セル外國商品ノ免稅ニ關スルモノニシテ黑龍江省境外ニ於ケル外國輸入ノ物品ハ固ヨリ關稅ヲ納附セサルヘカラス然ルニ日本國ノ提議ハ黑龍江省ニ限局セス滿洲國境ヲ經テ陸路露國ニ輸入セル物品ニ對シ免稅ヲ擴張セムトセリ此ノ如キ規定ニ據ルトキハ遼東租借地ノ生產物ハ其ノ輸送費ヲ支持スル限リ遠ク自由ニ西比利亞ニ運入スルコトヲ得ヘク其ノ結果日本國ノ希望ハ黑龍江省ニ於ケル現行自由港制度ヲハ條約ノ規定ニ依リ更ニ現狀ヨリ比類ナキ廣大ナルモノト爲サムトスルモノナリ

此ノ如キ讓與ハ之ニ對シテ其ノ正當ナル對價ヲ發見シ難キ廣大且重要ナル利益ヲ包有スヘク遼東租借地ニ對シ日本國カ提議セル關稅ノ免除ハ固ヨリ以テ充分ナル對價ト見做スコトヲ得サルヘキヤ明ナリ

日本國カ請求セル讓與ノ範圍ハ露西亞國カ最惠國ノ基礎ニ基キ條約ニ依リテ拘束セラレタル諸國ニ對シ同樣ノ特遇ヲ與フヘキ義務ヲ加重セラルコト爲ルヘシ亞細亞ノ接境諸國ニ許與セル免除ニ關シ右諸條約ノ大半中ニ揭ケタル留保ハ此ノ規定ニ對スル例外ヲ爲スモノニシテ之ヲ日本國ニ適用スヘキモノニ非ス千八百九十五年ノ條約ハ特ニ別約第一條ニ於テ亞細亞ノ隣接國ニ對スル露西亞國ノ通商關係ハ露西亞國ト日本國トノ通商關係ヲ變更セムカ爲ニ之ヲ引用スルヲ得サル旨ヲ明記セリ

第三、清國ノ商品ニ對シ關稅規則ニ規定セル特殊ノ特權ニ就テハ此ノ便宜カ一定ノ條約ニ基カサルカ故ニ固ヨリ條約ノ性質ヲ有セサルモノナルコトヲ考量セサルヘカラス露西亞國ハ任意ニ此ノ措置ヲ取消スコトノ自由ヲ有ス且清國ニ對シテ許與シタル特別ノ免稅ハ接境諸國ニ對シテ設定シタル國境貿易便易ノ範圍ニ屬スルモノナルニ過キス從テ此ノ如キ特遇ハ常ニ最惠國ノ取扱中ヨリ除外セラルルモノナリ

千八百九十五年ノ條約ノ別約

日露通商舊條約ニハ現條約案ニ附屬セラレサル數多ノ別約ヲ包含シ本野閣下ノ說明書ニハ此ノ削除ニ關シ何等理由ヲ述ヘス該別約ハ露西亞國、瑞典國、諾威國、亞細亞ノ接境諸國ノ間其ノ境界ノ關係ヲ規定セル特別規定ニ關スルモノニシテ其ノ讓與ハ相互ノ主義ニ變更ヲ及ホスヘカラサルモノト宣言セラレタル特別性質ノ免除及特典及特權ヲ規定シ而シテ此ノ規定ハ尙現今施行セラルルモノナルカ故ニ此ノ規定ヲ擧ケ盡ク之ヲ特ニ締結スヘキ條約中ニ存スルコトヲ必要トス加之此ノ規定ハ一定ノ必要ヲ有スルモノナルコトヲ考量シ且批准ノ形式ヲ簡易ニ爲サムカ爲ニ露西亞國政府ハ別約（第六號第一）トシテ新條約中ニ此ノ留保ヲ挿入セムコトヲ提議ス此ノ別約ハ露獨條約ノ例ニ依リ次ノ如ク之ヲ記載スヘシ

第一條　幅員五十「ヴェルスト」ニ達スル國境地帶內ノ地方貿易ヲ容易ナラシムル爲ニ接境諸國ニ現ニ許與シ又ハ將來許與スルコトアルヘキ特遇

第二條　輸入又ハ輸出ニ關シ「アルカンヴェル」洲ノ住民及亞細亞露西亞ノ北部沿岸（西比利亞）ニ現ニ許與シ又ハ將來許與スルコトアルヘキ特遇

第三條　千八百三十八年（五月二十六日六月七日）露西亞國ト瑞典國及諾威國トノ間ニ締結シタル條約中ニ包含セラレタル特別條款

第四條　露西亞國ト其ノ亞細亞ニ於ケル接境諸國トノ商業ニ關スル規定

第五條　露西亞國ニ於テ建造シ且露西亞國臣民ニ屬スル船舶ニ與ヘラルル建造後三箇年間航海稅ノ免除

第六條　露西亞國ニ於テ遊船俱樂部ト稱スル各種ノ娛樂協會ニ許與シタル免除

第七條　露西亞國政府カ留保スルコトアルヘキ各種ノ物品ニ關スル專賣權

議定書第一項

議定書案ハ旅券ニ關スル特別規定ヲ包含シ其ノ第一項ノ一號ニ於テ日本國臣民ノ携帶スル旅券ニ對スル露西亞國官憲查證ノ有效期限ヲ六箇月ニ擴張シ露西亞國官憲カ日本國臣民ニ外國旅券ヲ交付シ及其ノ所持ノ旅券ニ露西亞國出發許可ノ旨ヲ記入スルニ當リ徵收スル手數料ヲ五十哥ト定メタリ

獨逸國及墺地利洪牙利國ト露西亞國トノ通商條約ニ於テ該諸國臣民ノ旅行券ニ對スル露西亞國領事ノ查證ノ有效期間ハ六箇月ト爲セリ此ノ規定ハ日本國臣民ニ對シ同一便宜ノ享有ヲ保障スルニ付最惠國取扱ノ主義ニ適用スルモノナリ露西亞國出發ノ際其ノ外國人ニ對シテ旅券交付ノ手數料五十哥ニ付テモ又法律ニ規定セル所ニシテ（旅券規則第二百一條第四項）露西亞帝國政府ハ議定書中ニ此ノ手數料ノ額ヲ記載スルコトニ付何等異議ヲ有セス但シ此ノ手數料ハ旅券印刷

ニ關シ政府ニ對スル費用ノ支辨タルニ過キサルコトヲ注意スルコトヲ要ス

終ニ露西亞國出發ノ許可ニ付テハ通則トシテ全ク手數料ヲ免除セラルルモノトス前記事實ノ結果露西亞國政府ハ其ノ末文ニ「國庫ノ爲ニ」ナル文字ヲ加ヘ以テ議定書第一項第一號ヲ承認スルニ付異議ヲ有セス此ノ第一ノ說明ハ外國人ニ對シテ交付セル各旅券ニ對シ赤十字ノ爲ニ五留ノ徵收ヲ規定セル前記旅券規則第二百一條ニ關係スルモノニシテ露西亞國臣民及外國人ハ孰レモ一時的性質ヲ有セル此ノ徵收ニ服スルモノトス

第一項第二號ハ亞細亞露西亞ニ旅行又ハ滯在ノ日本國臣民ニ對スル特種ノ特權ヲ規定スルモノニシテ殊ニ同項ハ該日本國臣民ニ對シ歐羅巴露西亞ニ於ケル手數料ニ比シテ半減ノ查證及滯在許可ノ手數料ヲ規定セリ此ノ規定ニ關スル說明書ニ於テ此ノ特別ノ殊遇ハ黑龍江省ニ於ケル日本國臣民ノ出入ヲ容易ナラシメムカ爲ナリト爲セリ又此ノ說明書ニ據レハ日本國臣民就中日本國漁業者ノ此ノ地方ニ於ケル往來ハ甚頻繁ニシテ其ノ出入ノ際一々歐羅巴露西亞ニ於テ徵收セラルヘキ旅券查證料ノ同額ヲ支辨スルハ其ノ困難ヲ感スル所ナルカ故ナリト爲セリ

先ツ該說明書ハ其ノ半減スヘキ手數料ノ何ナルカヲ明示セサルコトヲ注意スルコトヲ要ス領事ノ查證ナルカ露西亞國出發ノ際其ノ旅券ニ課スヘキ料金ナルカ將タ地方官憲カ外國人ニ對シ露西亞國ニ於テ交付セル滯在旅券ニ課セル料金ナルカ之ヲ知悉スルコトヲ得ス此ノ點ニ關シ尙注意セムト欲スルコトハ右外國人カ携帶セル自國旅券ハ六箇月間露西亞國ニ於ケル滯在ニ付有效ニシテ露西亞國領事カ合法ニ查證セル旅券携帶外國人ハ此ノ期間追加手數料ヲ納附スルコトヲ要セス以テ露西亞國ノ國境ヲ通過及再通過スルコトヲ得ヘク而シテ露西亞國ニ滯在セル外國人カ露西亞國ノ旅券ヲ領受スルコトヲ要スルハ其ノ滯在六箇月ノ後ニ在ルコト是ナリ

故ニ西比利亞沿岸ニ到來セル日本國漁業者ハ例外ノ場合ニ非サレハ露西亞國ノ交附セル旅行券ヲ領受スルコトヲ要セサルヘシ蓋シ其ノ滯在カ上述ノ期間即チ六箇月ヲ超過スルコト甚稀ナレハナリ

加之此ノ問題ヲ確定セムカ爲ニハ露西亞國政府ハ此ノ請求事項ニ關シ更ニ明白ナル說明ヲ得サルヘカラス

議定書案第二項

議定書案第二項ハ滿洲地境及西比利亞ノ諸港經由輸入稅ノ均等ニ關スル日本國政府ノ提議ヲ包含ス

日本國政府ハ此ノ規定ニ於テ滿洲國境ヲ經テ露西亞國ニ輸入セル物品ニ對スル特別措置ニ基因スルコトアルヘキ稅率ノ不均等ニ對スル保障ヲ定メムト欲シ露西亞國政府カ概シテ西比利亞沿岸ニ於ケル自由港ノ廢止中ト雖滿洲ノ國境ヲ經テ輸入セル清國商品ニ對スル輸入稅ノ免除ヲ保持シタル事實ヲ以テ日本國政府要求ノ理由ト爲スヘキモノト信シタリ

此ノ提議ノ根本ヲ論究スルニ先チ日本國提出條約案第四條末項ニ關スル一般的注意ヲ喚起スルコトヲ要ス

蓋シ議定書第一項ニ揭ケタル便宜ノ目的ハ稅率ノ協定ニ在リ而シテ之ニ由テ此ノ種ノ通商上ノ協定ニ採用セラレタル條約上ノ殊遇ヲ得ムトスルニ在リ而シテ「ポーツマス」條約第十二條ニ依リ兩國政府カ當サニ採ルヘキ基礎ハ即チ最惠國取扱ノ主義ニ存スルモノナリ此ノ理由ニ基キ該提議ハ遠ク其ノ起點ヲ離レ稅率ノ讓步ヲ要セムトスルモノトシテ排斥セラレサルヘカラス」

然レトモ日本國政府ニ對シ敢テ日本國ノ提議ニ係ル諸事項ヲ愼重ニ調査セシコトヲ證明セムカ爲露西亞國政府ハ日本國ノ此ノ提議ヲ排斥シタル根本的事由ヲ更ニ說明セムト欲ス

抑自由港ノ制度ハ常ニ黑龍江口以北ノ大平洋諸港ニ對シテ存シタル事ヲ考量セサルヘカラス此ノ制度ハ黑龍江口及其ノ以南ニ對シテ自由港ノ制度ヲ廢止シタル時期即チ千九百年ニ於テモ尙其ノ保持ヲ見タリ且西比利亞ノ北岸ハ全ク特別ナル關稅制度ニ依リテ規定セラレ外國商品ノ輸入ハ「カラ」海交通ノ困難ノ爲「エニツセイ」及「オビ」ノ河口ニ於テ例外ナル殊遇ノ取扱ヲ受ク故ニ議定書第二項ニ規定セルカ如キ日本國政府ノ希望ハ竟ニ黑龍江省ノ地境ヲ經由スル日本商品輸入稅ノ全免ヲ要求スルモノト謂ハサルヘカラス

日本國政府カ其ノ要求ノ援助トシテ主張スル滿洲ノ露西亞國ノ國境ヲ經由スル清國輸入貨物ニ許與セル免除ハ之ヲ以テ其ノ事由ト爲スコトヲ得ス露西亞國ノ國境ヲ經由スル輸入貨物ニ對シ清國カ享有スル殊遇ハ例外ノ性質ヲ有シ特ニ亞細亞接境諸國ノ商業ノミニ適用セラルルモノナリ此ノ如ク國境貿易ニ許與セル特別ノ免除ハ常ニ相互ノ主義ニ違背セサルモノト看做サレ露西亞國カ諸國ニ對シテ締結セル各通商條約中ニ特別留保ノ事項ト爲レリ千八百九十五年ノ日露條約附屬別約及獨逸國、墺地利洪牙利國、「ルーマ

ニ一」國等ニ對シ露西亞國カ締結セル諸新通商協定ニ於テモ皆然ラサルハナシ故ニ日本國ハ此ノ特權ヲ主張スルノ何等理由ヲ有セサルモノナリトス

日露通商航海條約締結會議錄第四號

第四回會議

千九百六年十一月十九日（六日）午後四時露西亞國外務省ニ於テ開會

列席者

日本國　全權委員本野閣下、聖彼得堡日本國公使館書記官落合氏、丸毛氏、津田氏

露西亞國　全權委員「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏、商工務省委員「ランゴヴォイ」氏、「アレクセイエッフ」氏、「プリレジヤイエッフ」氏、會議書記官「ウエルクホウスキー」氏、「ペトロッフ」氏、「ド、マルテンス」氏、「ウオッネシセンスキー」氏

開會後露西亞國全權委員ハ日本國全權委員ニ對シ第一讀會ニ於テ確定セル規定ニ觸ルルコトナク其ノ新討議ヲ請求セル條款ニ關シ以テ條約案ノ第二讀會ヲ開クヘキコトヲ提議セリ

本野閣下ハ此ノ提議セラレタル日程ヲ承認シ十月三十日（十七日）ノ會議ニ提起セラレタル各種ノ問題ニ付補足的說明ヲ與フヘキ旨ヲ聲明セリ

第一條第二項ノ討議ニ移リ日本國全權委員ハ條約案ニ揭ケタル「相互ノ條件ヲ以テ」ナル文字ノ削除ハ二箇ノ理由ニ依リ露西亞國ノ側ヨリ主張セラレタルモノナルコトヲ注意セリ即チ第一、內國臣民カ享有スル司法上ノ一切ノ權利及特典ヲ許與スル文言ト相互ノ條款トハ相一致セサルコト第二、兩締約國法制ノ差異ノ爲實際上著大ナル困難ノ存スル虞アルコト是ナリ

日本國全權委員ハ露西亞國政府カ日本國臣民ニ對シ相互ノ條件ヲ以テ日本國ノ法制カ日本國臣民ニ對シテ許與スル司法上一切ノ權利及特典ヲ許與スルトキハ露西亞國臣民モ亦日本國ニ於テ同樣ノ權利ヲ享有スルモノトセハ第一條第二項ノ文言ト相互ノ條款トノ間所謂抵觸ノ存スルコトヲ認ムルコト能ハス故ニ露西亞國臣民ハ日本國ニ於テ司法上日本國臣民カ享有スル一切ノ權利ヲ享有スヘシ

第二ノ異議ニ付日本國全權委員ハ司法上兩國ノ法制ノ差異ニ基因セル踰越スヘカラサル困難ノ存スヘキコトヲ考量セス第一條第二項ニ規定セル相互ノ事ハ主トシテ訴訟手續上ニ於テ實益ヲ見ルモノニシテ本野氏ノ意見ニ依レハ兩國法制中ニ存スルコトアルヘキ規定ノ差異ニ付互ニ兩國ノ訴訟法ヲ告知スルコト容易ナリト爲セリ

然レトモ其ノ調和ノ精神ヲ表證セムカ爲ニ日本國全權委員ハ露西亞國全權委員カ其ノ削除ヲ固執スヘキモノト信スルトキハ「相互ノ條件ヲ以テ」ナル文字ヲ削除スルコトヲ承認スヘシ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ本野氏ニ對シ其ノ說明ヲ陳謝シ「相互ノ條件ヲ以テ」ナル文字ノ削除ニ對スル其ノ承認ヲ領シタリ然レトモ「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ十月二十三日（十日）ノ會議ニ於テ指示シタル抵觸ハ其ノ文言ニ關スルモノニアラスシテ日本國政府說明書ノ制限的解釋ニ關セル旨ヲ說示シタリ

本野氏ハ第一條第五項ニ移リ先ツ「農業」ノ意義ニ關シ此ノ語ハ一切農業上ノ事業ニ從事スルノ權能ヲ指示スルモノナルコトヲ聲明スルモノナルカ故ニ此ノ條文ニ依リ日本國ニ於ケル露西亞國人ハ露西亞國ニ於ケル日本國人ノ如ク土地ノ耕作及總テ他ノ農業上ノ事業ニ從事スルノ權利ヲ有ス

露西亞國全權委員ハ露西亞國臣民カ日本國ニ於テ農業ニ從事スルノ權利ヲ有セリトノ日本國全權委員ノ說明ヲ領シ「農業」ナル用語ハ承認セラレタリ

同項（第五項）ノ討議ヲ繼續シ日本國全權委員ハ第二ニ土地所有權ノ問題ニ關スル其ノ意見ヲ陳述セリ此ノ點ニ付テハ日本國全權委員カ十月十日、二十三日ノ會議ニ於テ與ヘタル說明ニ據ルノ外ナク日本國全權委員ハ其ノ論旨ヲ確認スルニ限ルヘシ即チ法律上及事實上日本國ニ於ケル露西亞國臣民ト露西亞國ニ於ケル日本國臣民トノ間ニ土地ニ關スル何等取扱上ノ不均等ハ存スルモノニアラス法律上ニ於テハ兩國ハ其ノ內國法制ヲ以テ土地所有權ノ問題ヲ規定スルコトニ付全ク自由ニシテ兩國臣民ハ最惠國ノ取扱ヲ享有シ事實上ニ於テハ露西亞國ノ版圖ノ廣大ナルニ拘ラス日本國臣民カ之ヲ取得スルノ大利益ヲ有セル日本國ノ接壤地方即チ黑龍江沿海地方ニ於テ土地ヲ取得スルコトヲ得サルニ依リ事實上露西亞國ニ於ケル日本國臣民ハ日本國ニ於ケル露西亞國臣民ヨリ優越ナル境遇ニ在ルモノニアラス

之ヲ要スルニ本野氏ノ意見ニ依レハ法律上ヨリ觀察スルモ將タ事實上ヨリ觀察スルモ土地所有權ニ關シ日本國ニ於ケル露西亞國臣民ト露西亞國ニ於ケル日本國臣民トノ間ハ全ク均等ナリトス

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ反對ノ意見ヲ有シ土地取得ノ權利ニ關シ外國人ニ對スル制限ニ付明確ナル不權衡ノ存セルモノト思考シ日本國ニ於テハ此ノ制限ハ全國ニ適用セラルルモ露西亞國ニ於テハ露西亞帝國ノ或部分ニ限レリ然レトモ露西亞國全權委員ハ露西亞國政府ニ讓步ノ名義ヲ以テ其ノ調和ノ精神ヲ表證セムカ爲ニ本項中ニ「所有權」ナル文字ヲ記入セムトセル旨ヲ聲明セリ

本野氏ハ再語ヲ繼キ露西亞國臣民カ日本國ニ於テ他ノ諸外國人ノ有スル如キ特別性質ノ不動產所有權ヲ明確ニ確定保障セムカ爲ニ左ノ如ク第一條第五項ヲ修正スルニ付議ヲ有セサル旨ヲ述ヘタリ

> 農業、不動產ノ所有權並其ノ他何等ノ名義ヲ以テスルヲ問ハス土地ノ保有ニ關スル各般ノ事項ニ付テハ露西亞國ニ於ケル日本國臣民及日本國ニ於ケル露西亞國臣民ハ最惠國ノ臣民又ハ人民ト均等ノ取扱ヲ受クヘキモノトス

「何等ノ名義ヲ以テスルヲ問ハス土地ノ保有」ナル文字ノ附加ニ依リ日本國全權委員ハ永代借ニ關スル露西亞國臣民ノ權利ハ充分ニ保障セラレタリト思考セリ

且第六項ノ條文ト結合セラレタル第五項ノ右修正條文ハ露西亞國臣民ニ對シ課稅上最惠國臣民ノ取扱ニ關シ最有效ナル保障ヲ與ヘタルモノナリ

露西亞國臣民ノ權利ハ此ノ如ク全ク保障セラレタルカ故ニ日本國全權委員ハ千八百九十五年ノ條約第十七條ノ若干規定カ本條約中ニ再揭セラルルノ必要ナシト思考シ爲ニ露西亞國全權委員ニ對シ本條ニ關スル修正ニ固執セサラムコトヲ提議セリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ第五項中ニ露西亞國臣民ニ對シ永代借權ヲ保障スヘキ「何等ノ名義ヲ以テスルヲ問ハス土地ノ保有」ナル文字ヲ挿入スルニ付異議ヲ有セス前記土地ノ課稅ニ付テハ第一條第六項カ舊條約第十七條末項ニ揭クル全然「無借料」ノ事ヲ包含スヘキ證明ヲ得ムコトヲ欲シ日本國全權委員カ此ノ點ニ付明確ナル證明ヲ與フルコトヲ得ヘキヤヲ問ヘリ

本野氏ハ之ニ對シ積極的同答ヲ與ヘタルカ以テ第一條第五項及第六項ノ文言ハ採用セラレタリ

第一條第八項ノ討議ニ移レリ

日本國全權委員ハ既ニ本項ニ關シ爲シタル口頭ノ聲明ヲ確認シ更ニ日本國ニ於テハ兵役ハ專ラ對人的性質ヲ有シ如何ナル方法ニ於テモ土地ノ所有ニ關係セス而シテ正ニ歐洲國若ハ露西亞國ニ於ケルト同一ノ性質ヲ有スルコトヲ肯認セリ

本項ノ文言ニ關シ日本國全權委員ハ「貸借者又ハ」ナル文字ノ後ニ「保有者」ナル文字ノ附加ヲ以テ露西亞國ノ提議ヲ承認シタリ故ニ本項ノ末文ハ「不動產ノ所有者、小作人、貸借者又ハ保有者トシテ負擔スヘク」トナルヘシ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ「不動產ノ保有者」ト謂ヘル文字カ同條第五項ニ暗示セルモノト推定シ日本國ノ提議ヲ承認セリ

第八項ハ確定セラレタリ

第二條ニ關シ本野氏ハ本條第二項中ノ「從事シ」及「總テ工業又ハ手工業」ノ間ニ「其ノ國ノ法律、命令及規則ニ遵由シテ」ナル文字ノ挿入ニ付異議ヲ有セス又第四項中「商業」及「警察、公安及衛生ニ關スル「工業、手工業、商業」ナル文字ノ附加ヲ承認シタリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ前條第五項ニ據リ「職業」ト「警察」トノ間ニ「所有權」ナル文字ヲ挿入セムコトヲ提議シタリ

本野氏ハ此ノ附加ヲ承認セリ

條約案第四條ニ移レリ日本國全權委員ハ本條ノ初ノ二項ノ文言ニ關スル露西亞國全權委員カ提議セル修正ニ對シ愼重ニ之カ調査ヲ爲シ以テ此ノ點ニ付遂ニ日本國政府ノ訓令ヲ求メムトセルコトヲ說示セリ

日本國政府ハ露西亞國政府ノ提議セル文言ヲ精査シタル後問題ノ根本ニ付何等實質的異議ヲ有セス

此ノ兩項ハ舊條約ニ於テ露西亞國政府カ承認セル條文ノ再出ニ過キス條文ノ解釋上實際何等困難ノ發生ヲ見サルカ故ニ日本國政府ハ提議條文ヲ保持セムト欲シタリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ千八百九十五年ノ條約ニ於ケル最惠國條款ノ文言ハ實際誤解ヲ生セサリシトノ日本國全權委員ノ說旨ヲ確認セリ然レトモ「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ他諸國ニ對スル露西亞國ノ通商關係ニ於テハ然ラサリシコトヲ認メタリ最惠國條款ノ同一文言ハ露西亞國ノ數多通商條約中ニ揭ケラレタルモ露西亞國生產物ノ一種殊ニ砂糖ニ對シ之カ保障ヲ爲サス即チ「ブリュッセル」砂糖條約ニ參同セル諸國ニ於ケル露西亞國砂糖ノ輸入ニ對シ賦稅ヲ課セリ砂糖及場合ニ從ヒ其ノ他ノ商品ニ對スル重稅ノ徵收ヲ防カムカ爲ニ露西亞國政府ハ最惠國條款ニ對シ露西亞國ノ爲ニ制限的解釋ノ偶生ヲ保障スヘキ新文言ヲ與ヘムト決定セリ故

ニー」國等ニ對シ露西亞國カ締結セル諸新通商協定ニ於テモ皆然ラサルハナシ故ニ日本國ハ此ノ特權ヲ主張スルノ何等理由ヲ有セサルモノナリトス

日露通商航海條約締結會議錄第四號

第四回會議

千九百六年十一月十九日／六日午後四時露西亞國外務省ニ於テ開會

列席者

日本國　全權委員本野閣下、聖彼得堡日本國公使館書記官落合氏、丸毛氏、津田氏

露西亞國　全權委員「マレザスキー、マレヴィッチ」氏、商工務省委員「ランゴヴォイ」氏、「アレクセイエッフ」氏、「プリレジャイエッフ」氏、會議書記官「ウエルクホウスキー」氏、「ペトロッフ」氏、「ド、マルテンス」氏、「ウオツネシセンスキー」氏

開會後露西亞國全權委員ハ日本國全權委員ニ對シ第一讀會ニ於テ確定セル規定ニ觸ルルコトナク其ノ新討議ヲ請求セル條款ニ關シ以テ條約案ノ第二讀會ヲ開クヘキコトヲ提議セリ

本野閣下ハ此ノ提議セラレタル日程ヲ承認シ十月二十三日／十日ノ會議ニ提起セラレタル各種ノ問題ニ付補足的說明ヲ與フヘキ旨ヲ聲明セリ

第一條第二項ノ討議ニ移リ日本國全權委員ハ條約案ニ揭ケタル「相互ノ條件ヲ以テ」ナル文字ノ削除ハ二箇ノ理由ニ依リ露西亞國ノ側ヨリ主張セラレタルモノナルコトヲ注意セリ即チ第一、內國臣民カ享有スル司法上ノ一切ノ權利及特典ヲ許與スル文言ト相互ノ條款トハ相一致セサルコト第二、兩締約國法制ノ差異ノ爲實際上著大ナル困難ノ存スル虞アルコト是ナリ

日本國全權委員ハ露西亞國政府カ日本國臣民ニ對シ相互ノ條件ヲ以テ日本國ノ法制カ日本國臣民ニ對シテ許與スル司法上一切ノ權利及特典ヲ許與スルトキハ露西亞國臣民モ亦日本國ニ於テ同樣ノ權利ヲ享有スルモノトセハ第一條第二項ノ文言ト相互ノ條款トノ間所謂牴觸ノ存スルコトヲ認ムルコト能ハス故ニ露西亞國臣民ハ日本國ニ於テ司法上日本國臣民カ享有スル一切ノ權利ヲ享有スヘシ

第二ノ異議ニ付日本國全權委員ハ司法上兩國ノ法制ノ差異ニ基因セル踰越スヘカラサル困難ノ存スヘキコトヲ考量セス第一條第二項ニ規定セル相互ノ事ハ主トシテ訴訟手續上ニ於テ實益ヲ見ルモノニシテ本野氏ノ意見ニ依レハ兩國法制中ニ存スルコトアルヘキ規定ノ差異ニ付互ニ兩國ノ訴訟法ヲ告知スルコト容易ナリト爲セリ然レトモ其ノ調和ノ精神ヲ表證セムカ爲ニ日本國全權委員ハ露西亞國全權委員カ其ノ削除ヲ固執スヘキモノト信スルトキハ「相互ノ條件ヲ以テ」ナル文字ヲ削除スルコトヲ承認スヘシ

「マレザスキー、マレヴィッチ」氏ハ本野氏ニ對シ其ノ說明ヲ陳謝シ「相互ノ條件ヲ以テ」ナル文字ノ削除ニ對スル其ノ承認ヲ領シタリ然レトモ「マレザスキー、マレヴィッチ」氏ハ十一月二十三日／十日ノ會議ニ於テ指示シタル牴觸ハ其ノ文言ニ關スルモノニアラスシテ日本國政府說明者ノ制限的解釋ニ關セル旨ヲ說示シタリ

本野氏ハ第一條第五項ニ移リ先ツ「農業」ノ意義ニ關シ此ノ語ハ一切農業上ノ事業ニ從事スルノ權能ヲ指示スルモノナルコトヲ聲明スルモノナルカ故ニ此ノ條文ニ依リ日本國ニ於ケル露西亞國人ハ露西亞國ニ於ケル日本國人ノ如ク土地ノ耕作及總テ他ノ農業上ノ事業ニ從事スルノ權利ヲ有ス

露西亞國全權委員ハ露西亞國臣民カ日本國ニ於テ農業ニ從事スルノ權利ヲ有セリトノ日本國全權委員ノ證言ヲ領シ「農業」ナル用語ハ承認セラレタリ

同項（第五項）ノ討議ヲ繼續シ日本國全權委員ハ第二ニ土地所有權ノ問題ニ關スル其ノ意見ヲ陳述セリ此ノ點ニ付テハ日本國全權委員カ十月十日、二十三日ノ會議ニ於テ與ヘタル說明ニ據ルノ外ナク日本國全權委員ハ其ノ論旨ヲ確證スルニ限ルヘシ即チ法律上及事實上日本國ニ於ケル露西亞國臣民ト露西亞國ニ於ケル日本國臣民トノ間ニ土地ニ關スル何等取扱上ノ不均等ハ存スルモノニアラス法律上ニ於テハ兩國ハ其ノ內國法制ヲ以テ土地所有權ノ問題ヲ規定スルコトニ付全ク自由ニシテ兩國臣民ハ最惠國ノ取扱ヲ享有シ事實上ニ於テハ露西亞國ノ版圖ノ廣大ナルニ拘ラス日本國臣民カ之ヲ取得スルノ大利益ヲ有セル日本國ノ接壤地方卽チ黑龍江沿海地方ニ於テ土地ヲ取得スルコトハ得サルニ依リ事實上露西亞國ニ於ケル日本國臣民ハ日本國ニ於ケル露西亞國臣民ヨリ優越ナル境遇ニ在ルモノニアラス

之ヲ要スルニ本野氏ノ意見ニ依レハ法律上ヨリ觀察スルモ將タ事實上ヨリ觀察スルモ土地所有權ニ關シ日本國ニ於ケル露西亞國臣民ト露西亞國ニ於ケル日本國臣民トノ間ハ全ク均等ナリトス

「マレザスキー、マレヴィッチ」氏ハ反對ノ意見ヲ有シ土地取得ノ權利ニ關シ外國人ニ對スル制限ニ付明確ナル不權衡ノ存セルモノト思考シ日本國ニ於テハ此ノ制限ハ全國ニ適用セラルルモ露西亞國ニ於テハ露西亞帝國ノ或部分ニ限レリ然レトモ露西亞國全權委員ハ露西亞國政府ニ讓步ノ名義ヲ以テ其ノ調和ノ精神ヲ表證セムカ爲ニ本項中ニ「所有權」ナル文字ヲ記入セム、セル旨ヲ聲明セリ

本野氏ハ再話ヲ續キ露西亞國臣民カ日本國ニ於テ他ノ諸外國人ノ有スルカ如キ特別性質ノ不動產所有權ヲ最明確ニ確定保障セムカ爲ニ左ノ如ク第一條第五項ヲ修正スルニ付異議ヲ有セサル旨ヲ述ヘタリ

農業、不動產ノ所有權並其ノ他何等ノ名義ヲ以テスルヲ問ハス土地ノ保有ニ關スル各般ノ事項ニ付テハ露西亞國ニ於ケル日本國臣民及日本國ニ於ケル露西亞國臣民ハ最惠國ノ臣民又ハ人民ト均等ノ取扱ヲ受クヘキモノトス

「何等ノ名義ヲ以テスルヲ問ハス土地ノ保有」ナル文字ノ附加ニ依リ日本國全權委員ハ永代借ニ關スル露西亞國臣民ノ權利ハ充分ニ保障セラレタリト思考セリ

且第六項ノ條文ト結合セラレタル第五項ノ右修正條文ハ露西亞國臣民ニ對シ課稅上最惠國臣民ノ取扱ニ關シ最有效ナル保障ヲ與ヘタルモノナリ

露西亞國臣民ノ權利ハ此ノ如ク全ク保障セラレタルカ故ニ日本國全權委員ハ千八百九十五年ノ該條約第十七條ノ若干規定カ本條約中ニ再揭セラルルノ必要ナシト思考シ爲ニ露西亞國全權委員ニ對シ本條ニ關スル修正ニ固執セサラムコトヲ提議セリ

「マレザスキー、マレヴィッチ」氏ハ第五項中ニ露西亞國臣民ニ對シ永代借權ヲ保障スヘキ「何等ノ名義ヲ以テスルヲ問ハス土地ノ保有」ナル文字ヲ挿入スルニ付異議ヲ有セス前記土地ノ課稅ニ付テハ第一條第六項カ該條約第十七條末項ニ揭クル全然「無借料」ノ事ヲ包含スヘキ證明ヲ得ムコトヲ欲シ日本國全權委員カ此ノ點ニ付明確ナル證明ヲ與フルコトヲ得ヘキヤヲ問ヘリ

本野氏ハ之ニ對シ積極的回答ヲ與ヘタルヲ以テ第一條第五項及第六項ノ文言ハ採用セラレタリ

第一條第八項ノ討議ニ移レリ

日本國全權委員ハ既ニ本項ニ關シ爲シタル口頭ノ聲明ヲ確認シ更ニ日本國ニ於テハ兵役ハ專ラ對人的性質ヲ有シ如何ナル方法ニ於テモ土地ノ所有ニ關係セス而シテ正ニ獨逸國若ハ露西亞國ニ於ケルト同一ノ性質ヲ有スルコトヲ肯認セリ

本項ノ文言ニ關シ日本國全權委員ハ「貸借者又ハ」ナル文字ノ後ニ「保有者」ナル文字ノ附加ヲ以テ露西亞國ノ提議ヲ承認シタリ故ニ本項ノ末文ハ「不動產ノ所有者、小作人、貸借者又ハ保有者トシテ負擔スヘク」トナルヘシ

「マレザスキー、マレヴィッチ」氏ハ「不動產ノ保有者」ト謂ヘル文字カ同條第五項ニ暗示セルモノト推定シ日本國ノ提議ヲ承認セリ

第八項ハ確定セラレタリ

第二條ニ關シ本野氏ハ本條第二項中ノ「從事シ」及「總テ工業又ハ手工業」ノ間ニ「其ノ國ノ法律、命令及規則ニ遵由シテ」ナル文字ノ挿入ニ付異議ヲ有セス又第四項中「商業」及「醫業、公安及衞生ニ關スル」ノ間ニ「工業、手工業、農業」ナル文字ノ附加ヲ承認シタリ

「マレザスキー、マレヴィッチ」氏ハ前記第五項ニ「農業」ト「商業」トノ間ニ「所有權」ナル文字ヲ挿入セムコトヲ提議シタリ

本野氏ハ此ノ附加ヲ承認セリ

條約案第四條ニ移レリ日本國全權委員ハ本條ノ初ノ二項ノ文言ニ關スル露西亞國全權委員カ提議セル修正ニ對シ愼重ニ之カ調査ヲ爲シ以テ此ノ點ニ付速ニ日本國政府ノ訓令ヲ求メムトセルコトヲ說示セリ

日本國政府ハ露西亞國政府ノ提議セル文言ヲ精査シタル後問題ノ根本ニ付何等實質的異議ヲ有セス

此ノ兩項ハ新條約ニ於テ露西亞國政府カ承認セル條文ノ再出ニ過キス條文ノ解釋上實際何等困難ノ發生ヲ見サルカ故ニ日本國政府ハ提議條文ヲ保持セムト欲シタリ

「マレザスキー、マレヴィッチ」氏ハ千八百九十五年ノ條約ニ於ケル最惠國條款ノ舊文ハ實際誤解ヲ生セサリシトノ日本國全權委員ノ證言ヲ確認セリ然レトモ「マレザスキー、マレヴィッチ」氏ハ他諸國ニ對スル露西亞國ノ通商關係ニ於テハ然ラサリシコトヲ認メタリ最惠國條款ノ同一文言ハ露西亞國ノ數多通商條約中ニ揭ケラレタルモ露西亞國生產物ノ一種殊ニ砂糖ニ對シ之カ保障ヲ爲サス即チ「ブリユセル」砂糖條約ニ參同セル諸國ニ於ケル露西亞國砂糖ノ輸入ニ對シ重稅ヲ課セリ砂糖及場合ニ從ヒ其ノ他ノ商品ニ對スル新稅ノ徵收ヲ防カムカ爲ニ露西亞國政府ハ最惠國條款ニ對シ露西亞國ノ爲ニ制限的解釋ノ偶生ヲ保障スヘキ新文言ヲ與ヘムト決定セリ故

ニ現條約ニ於テ此ノ文言ヲ採用セムコトヲ希望セリ

本野氏ハ露西亞國全權委員ニ對シテ其ノ說示セル說明ヲ謝シ露西亞國ノ提議ヲ再考スヘキコトヲ約セリ然レトモ本野氏ノ所見ニ依レハ條約案第十四條ト結合セル第四條ノ新文言ハ一切差等ノ取扱ニ對シ充分ニ露西亞國ノ輸出ヲ保障スルカ如シ蓋シ日本國ハ若干邦國ニ對シ一定條件ノ下ニ許與セル最惠國條款ニ基ケル通商條約ヲ有ス然シテ日露條約ニ於テ此ノ條款ハ何等條件ノ存スルコトナク許與セラルルモノナルカ故ニ制限的解釋ニ從フコトナカルヘシ

此ノ問題ノ解決ハ延期セラレタリ

第十條ノ討議ニ移リ本野氏ハ日本國政府カ露獨條約第十五條ノ例ニ做フテ本條第二項中ニ露西亞國全權委員カ提議セル附加規定ノ範圍ヲ詳知セサルコトヲ說示シ此ノ附加規定ハ日露航海關係上何等實際的必要ヲ有セサルカ如シト爲セリ

千八百九十五年ノ舊條約第十條第三項ヲ復活セシメムトノ露西亞國全權委員ノ請求ニ付日本國全權委員ハ是又現今ノ狀況ト全ク異ナレル場合ニ於テ日本國及諸外國間ニ締結シタル舊條約ノ痕跡ヲ再用スルノ必要存セスト思考セリ加之日本國ノ諸開港ニ於ケル露西亞國船舶ノ航海權ハ本條約第十四條ニ依リ特ニ露西亞國船舶ニ對シテ許與セル最惠國ノ取扱ニ依リ充分ニ保障セラルルモノナリ且日本國全權委員ハ本條ノ「船舶ニ」ナル文字ハ自餘諸國ニ對シテ日本國カ締結セル舊條約ノ該當條項中ニ存セサリシコトヲ注意セシムヘキモノト信シ而シテ日本帝國政府カ此ノ文字ヲ同條中ニ附加スヘキモノト信シタル所以ハ露西亞國船舶ニ對シテ最惠國ノ取扱ヲ留保セシメムカ爲ナリ是ヲ以テ日本國全權委員ハ此ノ說明後露西亞國全權委員カ其ノ本條ニ對シテ提議セル修正ニ固執セサラムコトヲ信セムト欲シタリ

第十條第二項末文ノ提議附加ニ關シ露西亞國全權委員ハ下ノ如キ說明ヲ通告セリ此ノ規定ハ露西亞國關稅規則第七十一條ニ基ケルモノニシテ二箇ノ目的ヲ有シ第一、陸揚セサル貨物ノ一部分ハ關稅ヲ免除セラルルコト第二、外國船舶ハ其ノ積載貨物ノ一部分ニ對スル監視料ヲ納附スルノ義務是ナリ此ノ監視料ハ其ノ第七十一條ニ依リ碇泊外國船舶內ニ勤務セル各稅關吏ニ對シ一日ニ付四十哥ト定メラレタリ

本野氏ハ條約案ニ揭ケラレタルカ如キ第十條第二項ハ大ニ通商航海ノ利益ヲ保障スルモノナリト信シ陸揚セサル外國貨物ノ一部分ハ日本國ニ於テ全ク其ノ監視料ヲ免除セラルルモノト思考シ且其ノ監視上稅關吏ニ對スル何等報酬ノ存セサルモノト爲セリ

日本國全權委員ハ此ノ說明ニ對シ「マレザスキー、マレヴィッチ」氏ハ露西亞國ニ於テ右監視料ノ存セサルコトニ付本野氏ノ注意ヲ喚起シ其ノ諸同條ト共ニ其ノ提議ニ係レル附加規定ニ固執セサルコトヲ聲明セリ

舊條約第十條第三項ヲ復活セムトノ問題ニ付露西亞國全權委員ハ條約案第十四條及殊ニ新ニ揭ケタル「船舶ニ」ノ文字ハ露西亞國ニ對シテ既ニ千八百九十五年ノ舊條約第十條ニ規定セル殊遇ノ享有ヲ保障シ而シテ其ノ享有ハ又日本國カ現行條約ニ依リ自餘諸國ニ與ヘタルモノナリトノ日本國全權委員ノ趣旨ヲ領セリ然レトモ一般的觀察上將ニ締結スヘキ條約中ニ此ノ規定ノ保持ヲ固執スヘキモノト信シ本項ハ露西亞國船舶ノ航海ニ對シ何等實際上ノ價値ヲ有セス露西亞國全權委員ノ意見ニ依レハ新條約中ニ此ノ讓步ノ享ヲ保持セムト欲スル所以ハ取扱均等ノ原則ヨリ觀察シタルニ過キス其ノ除却ハ露西亞國ノ商船カ自餘諸國ノ船舶ニ與ヘラレタル若干特權ヲ喪失スヘシトノ推定ヲ生セシムルモノトセハ不快ノ感觸ヲ生スヘシ此ノ理由ニ依リ「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ本野氏ニ對シ一層調和的方法ヲ以テ之ヲ解決セムカ爲此ノ問題ヲ再考セムコトヲ請ヘリ

日本國全權委員ハ日本國政府ノ名ヲ以テ第十二條ニ對スル露西亞國全權委員提議ノ修正カ承認セラレタル旨ヲ聲明シ本條第二項ハ下ノ如ク記載スルコトト爲セリ曰ク兩締約國ノ一方ヨリ交付シタル船舶積量測度證書ハ追テ兩國間ニ協定スヘキ特別ノ取極ニ依リ他ノ一方ニ於テ之ヲ承認スヘシ

本野氏ハ第十四條ノ「手工業」ナル文字ヲ複數ニ爲スコト及第十九條第一項ノ「プロコンシュール」ナル文字ヲ削除スルコトニ付異議ヲ有セサル旨ヲ報告セリ

本條第四項ニ付テハ本野氏ハ日本國ニ於テ檢閱ノ制度存スルコトナク而シテ本野氏ノ所見ニ依レハ日本帝國政府ハ此ノ制度ヲ採用スルノ意思ヲ有セサルカ故ニ「相互ノ條件ヲ以テ」ナル文字ノ挿入ハ承認セラルルコトヲ得スト認メ爲ニ獨逸國ニ對シ露西亞國政府カ承認セル千九百四年七月（二十八日十五日）ノ露獨追加條約ノ條文ノ再揭ニ過キサル日本國提出條約案ノ條文ヲ保持セムト提

議シタリ

故ニ此ノ點ニ關シ獨逸國ノ外交代表機關及領事館ニ對スルト同一ナル原則ヲ日本國外交代表機關及正式領事館ニ對シ承認スルコトヲ拒マサラムコトヲ希望セムト欲シタリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ露西亞國修正案中ニ揭ケタル說明ハ露西亞國政府カ毫モ日本國外交代表機關及領事館ニ對シ獨逸國外交代表機關及領事館ニ與ヘタル檢閱ニ關スル同一ノ便宜ヲ拒マサルコトヲ確定セムトスルコトヲ說示シ是故ニ日本國ニ於ケル露西亞國代表者ニ對スル相互ノ事ニ關スルニ過キス故ニ檢閱制度ノ欠缺ハ露西亞國政府ニ取リテ此ノ相互ノ充分ナル保障ナリト認ムルコト能ハス蓋シ日本國政府ノ自治權ニ屬セル此ノ如キ事物ノ狀態ハ常ニ變更セラルルコトアルヘケレハナリ而シテ「マレザスキー、マレヴィッチ」氏ハ如何ナル性質ナルヲ問ハス兩締約國ノ一方ノ官吏ニ許與シタル便宜ハ正ニ當ニ他ノ一方ノ官吏ニ對シテ事實上保障セラルヘキモノナラス尙又法律上保障セラルヘキモノナルカ故ニ露獨追加條約中ニ檢閱ニ關スル片務的條款ノ存在ハ單純ナル錯誤ニ依ルモノナルコトヲ說明シ日本國全權委員ニ對シ檢閱ニ關シテ露獨條約中ニ揭ケタル條文ハ檢閱ノ制度ニ關スルモノニアラスシテ一定ノ政府的機關ニ依リテ適用セラルヘキ制度的措置ニ關セルモノニアルコトヲ注意セムコトヲ請ヒ日本國ノ郵便官廳及警察ハ外國ヨリ到來セル印刷物ニ對シ此ノ種ノ若干權限ヲ有セリトノ報告ニ接シタリ然レトモ日本國政府カ相互ノ規定中ニ「檢閱」ナル語ヲ使用スルニ付困難ナリト認ムルトキハ「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ本項ノ他ノ文言ヲ提議セムトスル旨ヲ聲明シタリ

本野氏ハ此ノ新文言カ通知セラルルヤ直ニ之ヲ調査スヘキコトヲ約セリ

特許、商標及意匠ニ關シ日本國全權委員ハ露西亞國ニ於ケル日本國臣民及日本國ニ於ケル露西亞國臣民ノ權利カ完全ニ第十六條ノ規定ニ依リ保護セラルルモノト思考セリ

日本國ニ於ケル露西亞國臣民カ實際露西亞國ニ於ケル日本國臣民ト同一ノ程度ニ於テ保護セラルルカノ點ニ付露西亞國全權委員カ說示セル懸疑ニ付工業及商業所有權ノ保護ニ關スル最完全ナル法律カ現今日本國ニ施行セラルルカ故ニ此ノ疑ハ全ク必要ナキコトヲ注意セシムルコトヲ要セス（千八百九十九年三月法律第三十六號、第三十七號、第三十八號及其ノ施行ニ關スル同年ノ諸勅令參照）

日本國全權委員ハ此ノ聲明後此ノ點ニ關シ特別條約ノ將來締結ノ爲ニ特別條項ヲ揭クルノ必要ナシト思考セリ

然レトモ若シ露西亞國政府ニ於テ上記特別條約ノ爲本條第二項トシテ追加條項ノ挿入ヲ強テ主張セラルルナラハ日本帝國政府ハ之ニ對シテ異議ヲ有セスト爲セリ

露西亞國全權委員ハ本野氏ニ對シ此ノ聲明ヲ謝シ而シテ本條第二項ノ討議ニ移リ下ノ文言ヲ以テ之ヲ規定スルコトヲ承認シタリ「兩締約國ハ成ルヘク速ニ工業及商業所有權ノ保護ニ關シ相互條件ヲ基礎トシテ一ノ條約ヲ締結セムカ爲商議ヲ開クコトヲ約ス」

日本國全權委員ハ本條約施行期ノ十日ヲ二箇月ニ改メムトノ露西亞國ノ提議ヲ承認セリ

第十七條ノ文言ニ付テハ根本上ノ何等差異カ原文ト露西亞國ノ修正文トノ間ニ存セサルカ故ニ案文ヲ保持スルノ意見ヲ有セリ

此ノ文言ハ可決セラレタリ

會議ノ終ニ於テ日本國全權委員ハ露西亞國全權委員ニ對シ千九百六年十月十日ノ會議ニ提示シタル露西亞國修正案ノ摘要書ニ對スル問答書（附屬書參照）ヲ交付セリ

午後六時散會

本　野　一　郎（記名）

「エヌ、マレヴスキー、マレヴィッチ」（記名）

附屬書第四號

千九百六年十月（二十三日十日）ノ會議ニ提出セル露西亞國政府ノ修正案摘要書ニ對スル問答書

第一條第二項

露西亞國全權委員ハ十月（二十三日十日）ノ會議ニ於テ第一條第二項ノ修正トシテ「相互ノ條件ニ於テ」ナル文字ノ削除ヲ提議シタリ其ノ理由ハ

第一、一國臣民カ享有スル司法上一切ノ權利又ハ特典ヲ許與スル規定ト相互ノ條款トハ互ニ相牴觸スルモノナルコト

第二、兩締約國法制ノ差異ニ基キ實際上著シキ困難アルヘキコトヲ慮ルルコト

是ナリ日本國全權委員ハ露西亞國政府カ日本國臣民ニ對シテ相互ノ條件ヲ以テ日本國ノ法制カ自國臣民ニ許與スル司法上一切ノ權利又ハ特典ヲ許與スルトキハ露西亞國臣民ハ日本國ニ於テ同樣ノ權利ヲ享有スヘキカ故ニ第一條第二項ノ規定ト相互ノ條款トノ間ニ所謂牴觸アリトノコトハ之ヲ承認スルヲ得ス從テ露西亞國臣民ハ日本國ニ於テ司法上內國臣民ノ享有スル一切ノ權利ヲ享有スヘシ

第二ノ異議ニ付テモ亦日本國全權委員ハ司法上兩國法制ノ差異ニ基因セル踰越シ難キ實際上ノ困難存スルコトアルヘシト思考セス第一條第二項ニ規定セル相互ノ事ハ主トシテ訴訟手續上ニ於テ實際ノ必要ヲ見ルモノニシテ兩國法制ノ間ニ存スルコトアルヘキ差異ニ付テハ互ニ兩國ノ訴訟法ヲ審ニスルノ簡易ナルニ若カス

然レトモ日本國全權委員ハ調和ノ精神ヲ表彰セムカ爲露西亞國全權委員カ前記削除ニ關シテ自己ノ意見ヲ固執セサルヘカラスト思考セラルルニ於テハ「相互ノ條件ニ於テ」ナル文字ノ削除ヲ認諾スヘシ

第一條第五項

露西亞國全權委員ハ前記會議ニ於テ本項中ヲ包含セル「農業」ナル文字ノ範圍ニ付說明セムコトヲ求メタリ

日本國全權委員ハ此ノ文字カ一切ノ農業上ノ勞務ニ從事スルノ權能ヲ指示スルモノナルコトヲ容易ニ聲明スヘシ故ニ本條ノ規定ニ依レハ日本國ニ於ケル露西亞國臣民及露西亞國ニ於ケル日本國臣民ハ土地ノ耕作其ノ他一切ノ農業上ノ勞務ニ從事スルノ權利ヲ有スヘシ

土地ノ所有權ニ關シ露西亞國全權委員カ提示シタル意見ニ付日本國全權委員ハ十月十日（二十三日）ノ會議ニ於ケル說明ニ據ルノ外ナシ日露兩國ハ其ノ內國法ヲ以テ所有權ニ關スル一切ノ問題ヲ規定スルコトヲ得ヘク而シテ兩國臣民ハ最惠國臣民ノ取扱ヲ享有スルモノナルカ故ニ日本國全權委員ハ法律上日本國ニ於ケル露西亞國臣民及露西亞國ニ於ケル日本國臣民トノ間ニ土地ニ關スル取扱上何等不均等ノ存スルコトナシトノ論旨ヲ確認スルニ止ムヘシ

又事實上ニ於テモ露西亞國ニ於ケル日本國臣民ハ露西亞國版圖ノ廣大ナルニモ拘ラス日本國ノ附近即チ黑龍江省ニ於テ土地ヲ取得スルノ利益ヲ有スヘキ地方ニ於テ之カ取得ヲ爲スヲ得サルモノトセハ日本國ニ於ケル露西亞國臣民ニ比シテ優等ナル位地ニ在ラサルヘシ之ヲ要スルニ法律上ヨリ觀察スルモ將タ又事實上ヨリ考察スルモ日本國ニ於ケル露西亞國臣民ト露西亞國ニ於ケル日本國臣民トハ土地ノ所有權ニ關シテ全ク均等ナルヘシ

然レトモ最明白ニ露西亞國臣民カ日本國ニ於テ別國臣民ノ如ク土地ノ所有ニ關スル特別性質ノ不動產權ヲ確定且保障セムカ爲ニ日本國全權委員ハ下ノ如ク本條第五項ヲ修正スルニ付異議ヲ有セサルヘシ

農業、不動產ノ所有權其ノ他何等ノ名義ヲ以テスルヲ問ハス土地ノ保有ニ關スル各般ノ事項ニ付テハ露西亞國ニ於ケル日本國臣民及日本國ニ於ケル露西亞國臣民ハ最惠國ノ臣民又ハ人民ト均等ノ取扱ヲ受クヘキモノトス

「其ノ他何等ノ名義ヲ以テスルヲ問ハス土地ノ保有」ナル語ノ挿入ニ依リ日本國全權委員ハ永代借地ニ關シ露西亞國臣民ノ權利カ充分ニ保障セラレタリト思考ス

加之第六項ノ規定ト結合セル第五項ノ右修正規定ハ露西亞國臣民ニ對シ其ノ課稅ニ關シ最惠國臣民ノ取扱上最有力ナル保障ヲ確メタルモノナリ」

露西亞國臣民ノ權利カ此ノ如ク完全ニ保障セラレタルニ依リ日本國全權委員ハ千八百九十五年ノ舊條約第十七條ノ若干規定ヲ擧ケテ更ニ之ヲ本條約ニ再揭スルノ實益ナカルヘシト思考シ露西亞國全權委員ニ對シテ本條ニ關スル其ノ修正ノ承認ヲ固執セサラムコトヲ提議ス

第一條第八項

日本國全權委員ハ既ニ本項ニ關シテ爲シタル口頭宣言ヲ確認シ更ニ日本國ニ於ケル兵役ハ專ラ人的性質ヲ有シ全ク兩國又ハ露西亞國ニ於ケルモノト同樣ノ性質ヲ有シ如何ナル方法ニ於テモ土地ノ保有ニ關係セサルコトヲ確認ス

本項ノ字句ニ付日本國全權委員ハ「借地人若ハ」ナル文字ノ次ニ「保有者」ナル文字ヲ挿入シ以テ露西亞國ノ提議ヲ承認ス而シテ本項ノ末文ハ左ノ如シ

「不動產ノ所有者、小作人、賃借人又ハ保有者トシテ負擔スルコトアルヘキ」

第二條

日本國全權委員ハ本條第二項「從事シ」ト「各種ノ工業及手工業」トノ間ニ「總テ其ノ國ノ法律、命令及規則ニ遵由シテ」ナル文字ノ挿入ニ付異議ヲ有セス

日本國全權委員ハ又本條第四項「商業」ト「會社、公安及衞生」トノ間ニ「工業、手工業、職業」ナル文字ノ挿入ニ付異議ヲ有セス

第四條

日本國全權委員ハ本條ノ最初ノ二項ノ文言ニ付露西亞國全權委員カ提議セル修正ヲ精査シ以テ此ノ點ニ付日本國政府ノ訓令ヲ求メタリ

日本國政府ハ露西亞國政府カ提議セル文言ヲ審査シタル後本問題ノ根本ニ付テハ何等實質的異議ヲ有セス

本問題タル二項ハ單ニ舊條約ニ於テ露西亞國政府カ承認シタル文言ノ再揭ニ過キサルカ故ニ此ノ規定ノ解釋ニ付テハ事實上何等ノ困難ヲ生セス從テ日本帝國政府ハ此ノ提議ニ係レル條文ヲ保持スルノ意見ナリ

故ニ日本國全權委員ハ露西亞國全權委員ニ對シテ日本國提出ノ文言ニ對シ修正ヲ加ヘスシテ之ヲ承認セムコトヲ請求スルノ光榮ヲ有ス

第十條

日本帝國政府ハ露獨條約第十五條ニ依リ本條第二項ニ付露西亞國全權委員カ提議セル文字ノ附加ノ範圍ヲ審ニセス此ノ附加ハ日露兩國航海關係上何等實益ヲ有セサルカ如シ

千八百九十五年ノ舊條約第十條第三項ヲ復活セシメムトノ露西亞國全權委員ノ請求ニ關シ日本帝國政府ハ現在ノ場合ト全ク別異ナル場合ニ於テ日本國ト諸外國トノ間ニ締結シタル條約ノ舊痕跡ヲ再用スルノ必要ナカルヘシト思考ス且日本國ノ諸開港ニ於ケル露西亞國船舶航行ノ權利ハ本條約第十四條ニ依リ特ニ露西亞國船舶ニ許與セル最惠國臣民ノ取扱ニ依リ充分ニ保障セラルルモノナリ加之日本國全權委員ハ本條ノ「船舶ニ」ノ文字ハ日本國ト諸別國トノ間ニ締結シタル舊條約ノ條文中ニ存セサルコトヲ注意セシムヘキモノト信ス而シテ日本帝國政府カ本條ニ於テ此ノ文字ヲ挿入スヘキモノト信シタル所以ハ特ニ露西亞國船舶ニ對シ最惠國臣民ノ取扱ヲ留保セムカ爲ニ外ナラス

是ヲ以テ日本國全權委員ハ此ノ說明ニ依リ露西亞國全權委員カ本條ニ對スル其ノ修正ノ提議ニ固執セサラムコトヲ欲ス

第十二條

日本國全權委員ハ本條第二項ニ關シ露西亞國全權委員カ提議セル修正ヲ承認ス

第十四條

日本國全權委員ハ本條ニ於ケル「手工業」ナル文字ヲ複數ニ爲スコトニ付何等異議ヲ有セス

第十五條

第十五條第一項「領事代」ナル文字ノ削除ハ日本國全權委員ニ於テ何等異議ヲ有セス

本條第四項ニ於ケル「相互ノ條件ヲ以テ」ナル文字ノ挿入ニ付日本國ニ於テハ檢閱ノ制度存セサルノミナラス日本國全權委員ノ知悉スル所ニ依レハ日本帝國政府ハ此ノ如キ制度ヲ日本國ニ採用スルノ意思ヲ有セサルカ故ニ日本國全權委員ハ之ニ對シテ其ノ承認ヲ與フルコトヲ得サルヲ遺憾トス故ニ日本國全權委員ハ日本國提出案ノ條文ヲ保持セムコトヲ提議ス且此ノ條文ハ露西亞國政府カ獨逸國ニ關スル事項ニ付承認シタル千九百四年七月十五日（二十八日）ノ露獨追加條約規定ノ再出ニ過キス

故ニ日本國全權委員ハ露西亞帝國政府カ此ノ點ニ關シ日本國ノ外交代表機關及正式領事館ニ對シ獨逸國ノ外交代表機關及領事館ニ對スルト同樣ノ原則ヲ認許スルヲ拒マサルコトヲ希望セムト欲ス

第十六條

特許、商標及意匠ニ關シ日本帝國政府ハ露西亞國ニ於ケル日本國臣民ノ權利及日本國ニ於ケル露西亞國臣民ノ權利ハ本條ノ規定ニ依リ完全ニ保護セラレタリト思考ス

日本國ニ於ケル露西亞國臣民カ實際露西亞國ニ於ケル日本國臣民ト同一ノ程度ニ於テ保護セラルルヤ否ノ點ニ付露西亞國全權委員カ說示セル憂慮ニ付テハ工業及商業所有權保護ニ關スル最完全ノ法律（千八百九十九年三月法律第三十六號、第三十七號、第三十八號及同年此ノ諸法律ノ施行ニ關スル諸勅令參照）カ今ヤ日本國ニ施行セラルルカ故ニ該憂慮ハ全然無益ナルコトヲ茲ニ注意スル迄モナカルヘシ

日本國全權委員ハ右ノ宣言ヲ爲シタル後此ノ點ニ付將來特別條約ノ締結ノ爲特別ノ條項ヲ挿入スルノ必要ナカルヘシト思考ス

然レトモ露西亞國政府カ上記條約ノ爲本條第二項トシテ追加條項ヲ挿入セムト主張スルニ於テハ日本帝國政府ハ之ニ對シ異議ヲ有セス

第十七條

日本國全權委員ハ將ニ締結セラルヘキ條約ノ施行期ノ十日ヲ二箇月ニ變更セムトノ露西亞國ノ提議ヲ承認ス

本條ノ文言ニ關シ該文言ト露西亞國ノ修正トノ間何等根本上差異ノ存セサルヲ以テ日本國全權委員ハ該提議ノ條文ヲ保持セムト欲ス

日露通商航海條約締結會議第五號

第五回會議

千九百六年十二月十二日（二十五日）午後三時露西亞國外務省ニ於テ開會

列席者

日本國　全權委員本野閣下、聖彼得堡日本公使館書記官落合氏、丸毛氏、津田氏

露西亞國　全權委員「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏、商工務省委員「アレクセイエッフ」氏、「プリレサイエッフ」氏、會議書記官「ウエルクホウスキー」氏、「ペトロッフ」氏、「ド、マルテンス」氏、「ウオグネウセンスキー」氏

會議ノ開始ニ臨ミ露西亞國全權委員ハ條約案ノ全體ヲ確定セルモノト看做スコトヲ得ムカ爲ニハ尚ホ僅ニ若干點ノ解決スヘキモノアルニ過キサルコトヲ證言シ日本國全權委員ノ希望ニ從ヒ

去ル十一月六日ノ會議錄ニ掲ケタル條約案第四條第一項及第二項ニ關スル其ノ說明宣言書ヲ新調査ニ附スルコトヲ忘ラス右說明書ニハ第一、日本國全權委員ノ意見ニ於テ條約案第十四條ト結合セル該條約第四條ノ文言ハ一切ノ殊別的取扱ニ對シ露西亞國ノ輸出ヲ十分ニ保障スルコト第二、日本國政府ノ意見ニ從ヒ條件附最惠國條款ノ理論ハ日露條約ニ於テ認許セラレサルカ故ニ最惠國條款ノ適用ハ制限的解釋ニ從フコトヲ說示セリ依テ此ノ說明ヲ領シ而シテ露西亞國政府カ懷抱セル調和ノ精神ノ證明ヲ爲サムカ爲ニ露西亞國全權委員ハ露西亞國政府ノ名義ヲ以テ千八百九十五年ノ條約第四條ノ初ノ二項ノ舊文言ハ變更ヲ加フルコトナク之ヲ保持セムトノ日本國ノ提議カ承認セラレタルコトヲ聲明セリ

本野氏カ露西亞國全權委員ニ對スル口頭及文書ニ依レル說明ノ結果露西亞國政府カ千八百九十五年ノ條約第四條ノ初ノ二項ノ舊文言ヲ變更スルコトヲ固執セストノ露西亞國全權委員ノ聲明ヲ領シ露西亞國全權委員ニ對シテ此ノ終局ニ達セムカ爲ニ其ノ傾注シタル苦心ヲ謝セリ

再ヒ第四條ノ討議ヲ開キ露西亞國全權委員ハ滿洲ノ國境ヲ經テ露西亞國ニ輸入セル遼東租借地ノ生產又ハ製造ニ係ル物品ニ對シ輸入稅ヲ免除セムトノ日本國政府ノ提出案ニ付十一月八日（十月二十六日）ノ會議ノ始ニ於テ聲明シ置キタル異議ヲ保持シ以テ下ノ注意ヲ爲セリ露西亞國政府ヲシテ日本國ノ提議ヲ排斥セシメタル主タル理由ハ下記二箇ノ意思ニ在リ第一、既ニ會議錄第三號ニ表示セラレタルカ如ク千九百四年五月一日ノ勅令ニ依リ現今滿洲國境上ニ設定セル自由港ノ事ハ審査中ニ在リ問題ノ豫先調査ハ既ニ終了シタリト雖目下其ノ確定的解決ヲ指定スルコト難ク立法會ハ遠カラス召集セラルヘク而シテ自由港ノ問題ニ付宣言スル所アルヘキヤ必セリ事情此ノ如クナルヲ以テ露西亞國政府ハ將ニ締約スヘキ條約ノ有效期間中滿洲國境上ニ自由港ヲ保持スルノ明約ヲ負擔スルコト難シ第二、假令免稅ヲ黑龍江省ニ限ルトスルモ此ノ免除ニ對シテ正當ナル報償ヲ發見スルコト能ハサルヘシ蓋シ此ノ請求ニ係レル殊遇ハ皆ニ遼東及最惠國ノ取扱ヲ享有スル諸國ヨリ輸入セル商品ニ對スルノミナラス尙租借地內ニ於テ其ノ商業上合法的ニ採用セル一定ノ變形ヲ加ヘラレタル物品ニ對シテモ亦適用セラルヘシ此ノ如キハ右租借地內ニ滿洲國境ヲ經テ黑龍江省中ニ外國商品ノ輸入ヲ爲スヲ以テ特別ノ目的ト爲セル幾多工業上ノ企業ヲ創設スルコトト爲ルヘク此ノ如キ輸入ハ又著シク其ノ發達ヲ爲スヘシ然シテ黑龍江省ハ此ノ取引カ露西亞國ノ商業ニ對シ輕微ノ關係ヲ呈スルニ過キサルカ故ニ遼東ニ發送スヘキ貿易商品ノ該當分量ヲ輸出スルコトヲ得ス是故ニ總テ稅率協定ノ基礎ト爲ルヘキ商業上ノ均衡ハ正ニ此ノ點ニ於テ缺如セルナリ此ノ見解ニ基キ露西亞國全權委員ハ日本國全權委員ニ對シ切ニ此ノ提議ニ固執セサラムコトヲ請ヘリ

本野氏ハ之カ回答トシテ滿足スヘキ解決カ今ニ至ルマテ此ノ討議ニ付發見セラルルコトヲ得サリシコトヲ遺憾ト爲シ日本國政府ニ對シテ露西亞國全權委員カ詳述セル論旨ヲ傳達シ以テ露西亞國全權委員ニ對シ追テ此ノ點ニ付日本國ノ決意ヲ通知スルコトヲ忘ラサルヘキ旨ヲ聲明セリ

第十條ノ調査ニ移リ「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ日本國全權委員ハ會議錄中ニ露西亞國ニ於テ外國船舶ニ對シテ徵收スヘキ監視料ニ關スル註解ヲ插入スルコトニ付何等異議ヲ有セサルコトヲ證言セリ然レトモ本野氏ハ日本國カ此ノ點ニ付最惠國ノ取扱ヲ有スルコトノ證言ヲ得ムコトヲ欲シ露西亞國全權委員ハ右監視料ハ皆ニ外國船舶ニ對スルノミナラス尙關稅ヲ課スヘキ外國商品ヲ積載シテ露西亞國ノ港灣中ニ碇泊セル內國船舶ニ對シテモ亦適用セラルヘキ法律ノ明文ニ依リ徵收セラルヘキモノナルカ故ニ此ノ證言ヲ與ヘムト欲シタリ新條約中ニ露西亞國船舶カ日本國ノ諸開港中ニ其ノ貨物ヲ輸送スルノ權利ニ關スル千八百九十五年ノ舊規定ヲ再錄セル露西亞國政府提出本條第三項ニ付「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ日本國政府カ其ノ實際上ノ必要ヲ認メストシテ新條約中ニ此ノ規定ノ插入ヲ排斥シタルコトヲ說示シタリ然レトモ日本國政府ハ露西亞國船舶ニ對シテ最惠國ノ取扱ニ依リ日本國ノ諸開港內ニ航行スルノ權能ヲ認ムルコトヲ拒メルニアラス此ノ取扱ハ日本國政府カ露西亞國船舶ニ對シテ特ニ最惠國條款ヲ留保スルノ目的ヲ以テ條約案第十四條ニ掲ケタル「船舶ニ」ナル文字ノ附加ニ依リ露西亞國船舶ニ對シテ許與セラレタルモノナリ十一月六日（十九日）ノ會議ニ於テ日本國全權委員ノ證言及其ノ補足的說明ニ依リ露西亞國全權委員ハ露西亞國政府ハ此ノ規定ノ插入ヲ固執セサルコトヲ聲明シタリ然レトモ條約ニ依リテ諸外國ニ與ヘタル此ノ殊遇ハ右諸外國ノ承認ヲ以テ將ニ締結スヘキ條約ノ有效期間前ニ廢止スルコトヲ得ヘシトノ理由ニ基キ「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ日本國政府ハ明示的ニ此ノ殊遇ヲ規定セル條約ノ有效期間前ニ此ノ殊遇ヲ廢止スルノ意思ヲ有セストノ證明ヲ得ムコトヲ欲シタリ

監視料ニ關スル露西亞國ノ聲明ヲ領シ日本國全權委員ハ日本帝國政府カ露西亞國船舶ニ對シ最惠國ノ取扱ヲ許與スルノ明白ナル意思ニ付露西亞國全權委員ニ對スル說明ノ結果露西亞國政府カ尙千八百九十五年ノ條約第十條中ノ一條文ヲ再掲セシムルコトヲ固執セサルコトヲ證認セルコトヲ至幸トシ本野氏ハ「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ニ對シテ日本國政府ハ毫モ關係列國ノ承認ヲ以テ本條約ノ有效期間中此ノ規定ヲ廢止スルノ意思ヲ有セサルコトヲ聲明スルニ付何等ノ困難ヲ有セスト爲セリ

會議ハ第十五條第四項ノ討議ニ移リタリ

露西亞國全權委員ハ十一月六日（十九日）ノ會議錄ニ掲ケタル說明ニ基キ本野氏ニ對シテ本條第四項ハ左ノ文言ヲ以テ記載スルコトヲ承認セムコトヲ請ヘリ「日本國政府ヨリ露西亞國ニ派遣スル外交代表機關及正式領事館竝之ニ附屬スル諸官吏ハ新聞雜誌竝學術、技藝及文學ノ著作物ノ檢閱ニ關シ相互ノ條件ヲ以テ完全ナル自由ヲ享有スヘシ」

本野氏ハ日本國政府ノ名ヲ以テ第十五條第四項ノ案文ヲ承認シタリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ日本國全權委員ニ對シテ其ノ承認ヲ謝シ而シテ此ノ種ノ問題カ協定セラレタルカ故ニ條約ノ全體ハ以テ確定セラレタルモノト看做スヲ得ヘキコトヲ證認シ今後會議ノ事業ハ條約ノ附屬書ニ掲ケタル條項ノ討議ニ供セラルヘシト爲セリ

本野氏ハ第四條第三項ヲ除キ最完全ノ協定カ兩國全權委員間ニ生スルコトヲ得タルコトニ付滿足ヲ以テ之ヲ證認シ而シテ一時中止シアル諸問題モ亦同樣ノ解決ヲ得ヘキコトノ希望ヲ述ヘタリ

散會ニ臨ミ露西亞國全權委員ハ條約案第七條及第八條ノ條文ハ之ヲ單一ノ一條ニ集合スルニ若カサル意見ヲ提示シ又條約ノ前文ニ於ケル「明治三十八年九月五日即チ千九百五年（八月二十三日九月五日）締結」ナル文字ニ代フルニ「ポーツマスニ於テ締結」ナル文字ヲ以テセムコトヲ提議セリ

本野氏ハ主義ニ於テハ此ノ提議ノ修正ニ對シ異議ヲ有セサルモ唯確定條文及形態ノ問題ハ會議事業ノ終局ノ際之ヲ討議スルコトヲ得ヘシト思考セリ

午後四時散會

本　野　一　郞（記名）

「エヌ、マレヴスキー、マレヴィッチ」（記名）

日露通商航海條約締結會議錄第六號

第六回會議

千九百七年（五月二日四月十九日）午後三時露西亞國外務省ニ於テ開會

列席者

日本國	全權委員本野閣下、聖彼得堡日本國公使館一等書記官落合氏、丸毛氏、津田氏
露西亞國	全權委員「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏、商工務省委員「アレクセイエッフ」氏、「プリレシャイエッフ」氏、會議書記官「ド、マルテンス」氏

開會ニ臨ミ露西亞國全權委員ハ條約第十七條及第十八條ノ確定文言ヲ朗讀シ而シテ十一月八日（十月二十六日）ノ會議ニ於テ問題ト爲リタル附約ニ規定セル最惠國條款ニ關スル留保ノ討議ヲ再開セリ

日本國全權委員ハ右附約前文ノ條文ヲ提議セリ其ノ提案ニ依レハ此ノ前文ハ下ノ如ク記載セラルヘキモノナリ「左記ノ留保ハ外國ト日露及關係ニ一般ニ適用セラルル規定ト毫モ關係ヲ有セサル例外ノモノナルニ因リ本條約ニ抵觸セサルモノト看做ス但シ如何ナル場合ニ於テモ左記諸例外ノ爲ノ外ハ本條約ニ定メタル內國臣民待遇及最惠國臣民待遇ノ原則ニ反シテ之ヲ引用スルコト能ハサルモノト知ルヘシ」

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ此ノ提案ノ文言ヲ承認シ而シテ雙方ノ同意ヲ以テ決定シタル文言ニ於テ露西亞國ノ方ニ於ケル附約ノ前題ヲ爲セリ即チ

第一條　幅員五十「ヴェルスト」ニ達スル國境地帶內ノ地方貿易ヲ容易ナラシムル爲ニ接境諸國ニ現ニ許與シ又ハ將來許與スルコトアルヘキ殊遇

第二條　輸入又ハ輸出ニ關シ「アルカンヴュル」洲ノ住民及亞細亞露西亞ノ北部沿岸（西比利亞）ニ現ニ許與シ又ハ將來許與スルコトアルヘキ殊遇

第三條　千八百三十八年（四月二十六日五月八日）露西亞國ト瑞典國及諾威國トノ間ニ締結シタル條約中ニ包含セラレタル特別條款

第四條　露西亞國ト其ノ亞細亞ニ於ケル接境諸國トノ商業ニ關スル規定

第五條　露西亞國ニ於テ建造シ且露西亞國臣民ニ屬スル船舶ニ與ヘラルル建造後三箇年間航海稅ノ免除

第六條　露西亞國ニ於テ遊船俱樂部ト稱スル各種娛遊協會ニ許與シタル免除

第七條　露西亞國政府カ留保スルコトアルヘキ各種ノ物品ニ關スル專賣權

本野氏ハ日本帝國政府ハ新通商條約中ニ此ノ別

約ノ再揭ニ付異議ヲ有セス、雖モ此ノ別約中ニ韓國及「マラッカ」海峽以東ニ位セル東部亞細亞ニ於ケル日本國ノ鄰邦トノ日本國ノ關係ニ關スル若干規定ヲ挿入セシメムト欲ス此ノ規定ハ專賣權ニ關スル第三條ヲ附加スヘキ二條ノ別約ヲ形成スヘキモノナルカ故ニ此ノ三條ハ下ノ如ク之ヲ記載スヘキモノナリ

第一條　日本國ト韓國トノ間ニ於ケル通商、工業及航海ニ關スル特別關係ノ規定

第二條　日本國ト「マラッカ」海峽以東ニ於テ日本國ニ鄰接セル東亞細亞諸國トノ通商ニ關スル規定

第三條　日本國政府カ留保スルコトアルヘキ各種ノ物品ニ關スル專賣權

「マレザスキー、マレヴィッチ」氏ハ露西亞帝國政府ハ日本國ニ對シ其ノ好意ノ明確ナル證明ヲ與ヘムト欲シ上記條項ノ挿入ヲ承認スト雖露西亞國カ日本國提出案第一條及第二條中ニ規定セル事項ニ關シ諸外國ヨリ劣等ナル位地ニ置カレサルコトノ證明ヲ有セムト欲スル旨ヲ聲明シ此ノ點ニ關シ條約ニ附屬セル外交文書ノ形態ヲ有セル明示的宣言ヲ以テ總テ不均等ノ取扱ニ對シ露西亞國ヲ豫防セサルヘカラスト爲セリ

本野氏ハ日本國政府ノ名ニ於テ此ノ證明ヲ與フルニ付異議ヲ有セス而シテ通商條約ト同時ニ締結スルコトヲ許サレタル下ノ外交文書ヲ朗讀シタリ

以書翰致啓上候陳者本日日本國ト露西亞國トノ間ニ締結シタル通商航海條約ニ記名スルニ方リ本使ハ日本帝國政府ノ名ヲ以テ左ノ宣言ヲ爲スノ光榮ヲ有シ候

日本帝國政府カ日本國ト韓國トノ間ニ於ケル商業、工業及航海ニ關スル特殊關係ニ關スル規定竝日本國ト其ノ東亞細亞ノ鄰接諸國トノ間ノ商業ニ關スル規定ヲ本條約ノ別約中ニ記入スルコトヲ露西亞帝國政府ニ提議シタルハ決シテ露西亞國ヲ他ノ諸國ト異ルカ又ハ之ヨリ劣等ノ地位ニ置クノ意思ニ出テタルニ非ス」

日本國カ前記別約中ニ規定セル或種ノ利益ヲ韓國又ハ「マラッカ」海峽ノ東部ニ位スル其ノ鄰接亞細亞諸國ニ許與スル場合ニハ右利益ニ關シ日本國カ他ノ最惠國條款ヲ有スル諸國ニ適用スルト同一ノ取扱ハ均シク之ヲ露西亞國ニモ適用スヘシ

故ニ前記別約ノ規定ハ右規定カ日本國ニ於テ最惠國條款ヲ享有スル他國ニ適用セラルルニ非サレハ露西亞國ニ對シテ其ノ實際上ノ效力ヲ生セサルヘシ

本使ハ茲ニ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具

露西亞國全權委員ノ請求ニ基キ「ランゴヴォエ」氏ハ日本國送附外交文書ノ文言ハ單ニ日本國ニ依リテ將來第一條及第二條ニ揭クル諸國ニ對シテ許與セラルルコトアルヘキ殊遇ノミナラス尙右諸國ニ對シ既ニ許與セラレタル殊遇ヲモ包含スルモノナルヤヲ知ラムト欲スル旨ノ希望ヲ述ヘタリ

日本國全權委員ハ其ノ朗讀セシメタル日本國送附ノ外交文書ハ無差別ニ將來ノ利益及其ノ既ニ許與セル利益ヲ豫見セルコトヲ確認セリ

同時ニ本野氏ハ露西亞國政府カ相互ノ名義ヲ以テ露西亞國ニ對シ別約(第一條乃至第五條)ニ揭クル留保ニ關シテモ亦同樣ノ宣言ヲ爲スコトヲ拒マサルヘシトノ證言ヲ得ムト欲スル旨ヲ述ヘタリ

「マレザスキー、マレヴィッチ」氏ハ露西亞國政府ハ條約調印ノ際交換セラルルコトアルヘキ同樣ノ文書ニ依リ日本國送附ノ外交文書ニ對シ之カ回答ヲ爲サムトスル旨ヲ承認セリ露西亞國ノ右外交文書ハ左ノ如ク記載セラルルモノナリ

以書翰致啓上候陳者本日露西亞國ト日本國トノ間ニ締結シタル通商航海條約ニ記名スルニ方リ本大臣ハ露西亞帝國政府ノ名ヲ以テ左ノ宣言ヲ爲スノ光榮ヲ有シ候

露西亞帝國政府カ別約（露西亞國ノ方ニ於テ）第一條乃至第五條ニ揭クル留保ヲ本條約ノ別約中ニ記入スルコトヲ日本帝國政府ニ提議シタルハ決シテ日本國ヲ他ノ諸國ト異ルカ又ハ之ヨリ劣等ノ地位ニ置クノ意思ニ出テタルニ非ス

露西亞國カ前記別約中ニ規定セル或種ノ利益ヲ最惠國條款ヲ有スル或一國ニ許與スル場合ニハ右利益ニ關スル同一ノ取扱ハ均シク之ヲ日本國ニモ適用スヘシ

故ニ右別約ノ規定ハ最惠國條款ヲ有スル他ノ諸國ニ適用セラルルニ非サレハ日本國ニ對シテ其ノ實際上ノ效力ヲ生セサルヘシ

本大臣ハ茲ニ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具

右外交文書ハ雙方ノ承認スル所ト爲リ兩國全權委員ハ互ニ其ノ宣言文書ヲ交換セリ

別約ノ問題ハ以上ヲ以テ議了ニ歸シ會議ハ議定書案ノ討議ニ移レリ「マレザスキー、マレヴィッチ」氏ハ其ノ第三回會議中ニ提出シタル說明ニ基キ露西亞國政府ハ日本國提出案ノ文言ヲ以テ議定書第一項ヲ承認スト雖「國家ノ爲ニ徵收スル」ノ文字ヲ加ヘ以テ之ヲ補充セムト請求セル旨ヲ聲明セリ

本野氏ハ之ニ對シテ異議ヲ有セサル旨ヲ聲明シ而シテ日本國政府ハ旅券ニ關シ露西亞國全權委員カ提示セル說明書ニ基キ議定書第一號第二項ヲ拋棄スル旨ヲ附言セリ

「マレザスキー、マレヴィッチ」氏ハ此ノ聲明ヲ領シ而シテ日本國提出案第四條第三項ニ規定セル遼東トノ通商關係ノ事項ニ關シ雙方ノ一致ヲ以テ決定シタル條文ヲ以テ議定書案第二號ニ代ヘムコトヲ提議シ露西亞國全權委員ハ日本國全權委員ト特別談判ノ結果遼東問題ニ關スル本號ノ新條文ヲ決定シタルコトヲ會議ニ報告シ日露兩國政府ハ締約兩國ノ商業上ノ利益ニ於テ遼東租借地ト亞細亞露西亞ニ於ケル滿洲接境地方トノ間ニ商業上ノ特別制度ヲ設定スルコトアルヘシト思考シ露西亞國及日本國ニ對シ全ク特別ナル境遇ニ立テル滿洲ノ附近ハ此ノ協定ヲ必要トスヘク兩國政府ハ各自國境上ノ關稅制度ニ關シ互ニ完全ナル自由ヲ留保シ以テ一方ニ於テハ遼東租借地ニ輸入セラルヘキ(一)黑龍江及(二)沿海露領地方ニ於ケル生產若ハ製造ニ係ル物品又一方ニ於テハ右露領二地方內ニ輸入スル遼東租借地ニ於ケル生產若ハ製造ニ係ル物品ヲ擧ケテ之ヲ滿洲ノ產物ニ準セムトスル旨ヲ互ニ聲明セリ

兩國政府間ニ於ケル此ノ一致ノ結果露西亞國全權委員ハ日本國全權委員ニ對シ條約案第四條第三項ヲ下ノ如キ新條項ト爲シ以テ之ヲ議定書中ニ挿入セムコトヲ提議セリ

遼東租借地內ノ生產物又ハ製造品ニシテ陸路滿洲國境ヲ經テ露西亞國黑龍江洲及沿海洲ニ輸入セラルルモノ及前記露西亞國二洲內ノ生產物又ハ製造品ニシテ陸路國境ヲ經テ遼東租借地內ニ輸入セラルルモノハ稅關上ノ便宜及課稅ニ關スル一切ノ事項ニ付雙方共ニ滿洲ノ生產物又ハ製造品ト同一ノ取扱ヲ受クヘシ

本野氏ハ日本國政府ノ名義ヲ以テ右修正セラレタル條文ヲ承認シタリ故ニ議定書第二號ハ確定セラレタルモノト看做サレ又議定書第三號ノ文言モ亦何等異議ヲ生セサリシヲ以テ確定セラレタルモノト看做サレタリ即チ第三號ノ文言ハ左ノ如シ

本議定書ハ本日調印シタル通商航海條約ノ批准ニ依リ批准セラレタルモノト看做サルヘシ

又本議定書ハ前記條約ノ無效ニ歸スルト同時ニ終了スヘキモノトス

「ランゴヴォイ」氏ハ露西亞國全權委員ノ請求ニ基キ議定書第三號ノ文言ト別約ノ末尾ヨリ一行目トノ間ニ差異ノ存スルコトヲ注意シ即チ議定書第三號ハ其ノ期間ノ指示(本議定書ハ前記條約ノ無效ニ歸スルト同時ニ終了スヘキモノトス)ヲ包含スレトモ議定書第三號ニ該當スル別約ノ末尾ヨリ一行目ニハ期間ニ關スル正確ナル指定ヲ包含セスト爲セリ

本野氏ハ議定書案ハ日本國政府ノ作成ニ係ルモノナルモ別約案ハ露西亞國政府ノ作成ニ係レル事實ヲ擧ケテ此ノ文言ノ差異ヲ說明シ且本野氏ハ此ノ文言ノ差異ハ問題ノ根本ニ關シ變更ヲ生スルモノト思考セスト爲セリ

「マレザスキー、マレヴィッチ」氏ハ全ク本野氏ノ此ノ見解ニ同意シ此ノ末尾ヨリ一行目ニハ別約ハ「條約中ニ其ノ全文ヲ記入シタルト同一ノ效力ヲ有スヘシ」トノ正確ナル指示ヲ包含スルカ故ニ議定書及條約ト同一ノ期間ヲ有スルコト明ナリト爲セリ

此ノ說明ノ結果別約及議定書ノ文言ハ確定セラレタルモノト看做サレタリ

次ニ會議ハ松花江ノ航行及浦潮斯德「ニコラーエウスク」及「ペトロパヴロウスク」ニ於ケル日本國領事館ノ設定ニ關スル日本國提出案附屬外交文書ノ討議ニ移レリ

松花江ニ關シ露西亞國全權委員ハ兩國政府ハ通常ノ外交方法ニ委セムカ爲ニ此ノ通商談判ノ問題ヲ分離スルコトニ一致シタリ

「マレザスキー、マレヴィッチ」氏ハ上記領事館ノ事ニ關シ下ノ如ク說明ヲ爲セリ

第一、浦潮斯德ニ付テハ露西亞帝國政府ハ通商上及露西亞國船舶航通上最大關係ヲ有スル日本國諸港ノ一ニ露西亞國領事館ノ設定ヲ認許セラルヘキ條件ヲ以テ通商條約締結後直ニ浦潮斯德ニ於ケル日本國領事館ノ設定ヲ認許セムト欲セリ此ノ一港ノ選定ハ未タ確定セラレスト雖此ノ點ニ付キ既ニ諮問セラレタル當該官廳ハ敦賀ヲ指定セムコトニ一致セリ露西亞國全權委員ハ本野氏ニ對シ數日內ニ之カ確答ヲ爲スニ至ルヘキ希望ヲ有セリ

第二、「ニコラーエウスク」ニ關シ露西亞國政府ハ主義ニ於テハ此ノ地ニ日本國領事館ヲ設定スルニ付異議ヲ有セス然レトモ日本國政府ヲシテ該港ヲ要求セシメタル理由ハ漁撈ニ漁業ノ利益ニ關スルモノナルカ故ニ露西亞國政府ハ漁業條約ノ締結ニ至ル迄此ノ問題ヲ留保スヘク露西亞國カ對價ノ名義ヲ以テ例ヘハ小樽ノ如キ日本國ノ該當港ニ露西亞國領事館設定ノ認許ヲ請求スヘキハ勿論ノコトトス

第三、終ニ「ペトロパヴロウスク」ニ付テハ露西亞國政府ハ此ノ問題カ通商條約ト何等直接ノ關係ヲ有セス從テ通常ノ外交方法ニ依リ各

則ニ議定セラルヘキモノト思考ス之カ爲ニ露西亞國全權委員ハ切ニ本野氏ニ對シ會議中ニ此ノ問題ノ討議ヲ廢止セムコトヲ請ヘリ又日本國全權委員カ日本國公使館ト露西亞國外務省トノ間直接關係ニ依リ慣例ニ從ヒ領事館ノ問題ニ關スル協定ヲ設クルコトヲ概括的ニ承認セムコトヲ請ヘリ

本野氏ハ此ノ聲明ヲ領シタリ但シ各別ニ領事館ノ問題ヲ討議スルコトヲ承認スルモ少クトモ條約調印前ニ浦潮斯德及「ニコラーエウスク」ニ關スル事項ニ付之ヲ決定スルノ留保ヲ以テ之ヲ承認スヘキコトヲ注意セリ

「マレヴスキー、マレヴイッチ」氏ハ成ルヘク速ニ敦賀及小樽ニ關シ確定回答ヲ得ムカ爲ニ其ノ盡力ヲ爲スヘキコトヲ約セリ

本野氏ハ會議ノ事業カ幸福ニ終了セルモノト看做サルヘキコトヲ證認シ露西亞國全權委員ニ對シ其ノ會議ニ於テ傾注セル懇切ノ情ヲ謝シ而シテ商工務省ノ各委員ニ對シ會議事業ノ成功ニ與リテカアリタル其ノ盡瘁ノ勞ヲ謝シ此ノ通商上ノ協定カ兩國間友誼的關係ヲ確保スルニ至ルヘキ希望ヲ述ヘタリ

「マレヴスキー、マレヴイッチ」氏ハ又日本國全權委員ニ對シ此ノ談判ニ於ケル其ノ大ナル調和心ヲ謝シ「マレヴスキー、マレヴイッチ」自身ノ名ニ於テ竝其ノ諸同僚ノ名ニ於テ日本帝國公使館各書記官ノ懇切ナル助力ヲ謝シ本野氏ト共ニ新條約カ兩國ノ關係ヲ鞏固ニシ且發達セシムルニ至ルヘキ希望ヲ有シ以テ本野氏ノ希望ニ對シ滿腔ノ同意ヲ表セリ

午後四時散會

本野一郞（記名）

「エヌ、マレヴスキー、マレヴイッチ」（記名）

日露通商航海條約締結會議錄第七號

最終會議

千九百七年七月二十八日／十五日午後二時露西亞國外務省ニ於テ開會

列席者

日本國　全權委員露西亞國駐劄日本國特命全權公使法學博士本野閣下、書記官落合氏、津田氏

露西亞國　全權委員外務大臣「メートル、ド、ラ、クール、アムペリヤール」「アレキサンドル、イスヴォルスキー」閣下、全權委員商工務大臣、帝國參事院議官、「エキュイエ、ド、ラ、クール、アムペリヤール」「ドミトリ、フィロソフォウ」閣下、全權委員元老院議員「メートル、ド、ラ、クール、アムペリヤール」「ニコラス、マレヴスキー、マレヴイッチ」閣下、商工務省委員「アレクセイエッフ」氏、「プリレシヤイエッフ」氏、書記官「グールケヴイッチ」氏、「ストラカッチ」氏、「ケラヴエ」氏、「エヌ、ド、マルテンス」氏

兩締約國全權委員ハ通商航海條約ノ正文及附屬書ヲ審査シ其ノ妥當ナルコトヲ認メ互ニ其ノ各全權委任狀ヲ交換シ慣例ニ從ヒ條約及關係書類ニ記名調印ヲ爲セリ

然ル後各全權委員ハ前記外交文書ヲ互ニ領收セリ

午後三時散會

本野一郞（記名）

「イスヴォルスキー」（記名）

「デ、フィロゾフォウ」（記名）

「エヌ、マレヴスキー、マレヴイッチ」（記名）

落合謙太郞（記名）

「エヌ、ド、マルテンス」（記名）

●日露漁業協約

明治四十年九月十一日
條約第五號外務大臣副署

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ日本國及露西亞國間ニ締結シタル日露漁業協約ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

日露漁業協約

日本國皇帝陛下及全露西亞國皇帝陛下ハ明治三十八年九月五日即千九百五年八月二十三日（九月五日）「ポーツマス」ニ於テ締結セラレタル平和條約第十一條ニ依リ一ノ漁業協約ヲ締結セムカ爲日本國皇帝陛下ハ露西亞國駐劄特命全權公使法學博士本野一郞ヲ全露西亞國皇帝陛下ハ外務大臣「メートル、ド、ラ、クール」「アレキサンドル、イズヴォルスキー」、外務次官「コンセイエ、プリヴエ」「コンスタンチン、グバストフ」ヲ各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ兩國全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ左ノ諸條ヲ協議決定セリ

第一條

露西亞帝國政府ハ本協約ノ規定ニ依リ河川及入江（インレット）ヲ除キ日本海、「オコーツク」海及「ベーリング」海ニ瀕スル露西亞國沿岸ニ於テ膃肭獸及臘虎以外ノ一切ノ魚類及水產物ヲ捕獲、採取及製造スルノ權利ヲ日本國臣民ニ許與ス前記入江ハ本協約附屬議定書第一條ニ之ヲ列擧ス

第二條

日本國臣民ハ魚類及水產物ノ捕獲及製造ノ目的ヲ以テ特ニ設ケラレタル水陸兩面ニ亙ル漁區ニ於テ魚類及水產物ノ捕獲及製造ニ從事スルコトヲ得ヘシ前記漁區ノ貸下ハ其ノ短期タルト長期タルトヲ問ハス總テ競賣ノ方法ニ依テ之ヲ爲シ日本國臣民ト露西亞國臣民トノ間ニ何等ノ區別ヲ設クルコトナク該事項ニ關シ日本國臣民ハ本協約第一條ニ特定シタル各方面ニ於テ漁區ノ貸下ヲ受ケタル露西亞國臣民ト同一ノ權利ヲ享有スヘシ

前記競賣ノ爲ニ指定シタル時日及場所竝各種漁區ノ貸下ニ關シ必要ナル細目ハ競賣施行ヨリ少クトモ二箇月前浦潮斯德駐在日本國領事ヘ公然通牒セラルヘシ

特別ノ免許狀ヲ備フル船舶ニ在ル日本國臣民ハ鯨、鱈其ノ他特定漁區内ニ於テ捕獲スルコト能ハサル一切ノ魚類及水產物ノ漁獲ニ從事スルコトヲ得ヘシ

第三條

本協約第二條ノ規定ニ從ヒ漁區ノ貸下ヲ受ケタル日本國臣民ハ其ノ漁區ノ限界内ニ於テ漁業ニ從事スルカ爲貸與セラレタル岸地ヲ自由ニ使用スルノ權利ヲ有スヘシ前記日本國臣民ハ該岸地ニ於テ漁船及漁網ニ必要ナル修繕ヲ加ヘ、漁網ヲ曳キ、魚類及水產物ヲ揚陸シ竝漁獲物及採取物ヲ鹽漬シ、乾燥シ、製造シ又ハ貯藏スルコトヲ得ヘシ且此等ノ目的ヲ以テ建物、倉庫、小屋及乾燥場ヲ自由ニ築造シ又ハ移轉スルコトヲ得ヘシ

第四條

本協約第一條ニ特定シタル各方面ニ於テ漁區ノ貸下ヲ受ケタル日本國臣民及露西亞國臣民ハ漁業ヲ爲シ且捕獲物ヲ製造スル權利竝漁業ニ必要ナル動產及不動產ニ對シ賦課シ又ハ賦課セラルルコトアルヘキ一切ノ公課ニ關シテ均等ノ取扱ヲ享クヘシ

第五條

露西亞帝國政府ハ沿海洲及黑龍江洲ニ於テ捕獲又ハ採取セラレタル魚類及水產物カ日本國ニ輸出セラルルトキハ其ノ製造セラレタルト否トヲ問ハス何等ノ稅ヲ課スルコトナカルヘシ

第六條

本協約第一條ニ特定セラレタル各方面ニ於テ日本國臣民カ魚類及水產物ノ漁獲又ハ製造ノ爲使用スル人員ノ國籍ニ關シテハ何等ノ制限ヲ設クルコトナカルヘシ

第七條

魚類及水產物ノ製造方法ニ關シテハ露西亞帝國政府ハ本協約第一條ニ特定セラレタル各方面ニ於テ漁區ノ貸下ヲ受ケタル露西亞國臣民ニ加ヘサル特別ノ制限ヲ日本國臣民ニ加フルコトナキヲ約ス

第八條

漁業權ヲ取得シタル日本國臣民ハ日本國ニ於テ當該露西亞國領事ノ發シタル證明書及日本國官憲ノ發シタル健康證書ヲ有スル船舶ヲ以テ日本國ト漁場トノ間ニ直接往復スルコトヲ得ヘシ

前記船舶ハ何等ノ公課ヲ課セラルルコトナク一ノ漁場ヨリ他ノ漁場ヘ漁業上必要ナル人員、物件竝漁獲物及採取物ヲ運搬スルコトヲ得ヘシ但シ前記船舶ハ他ノ一切ノ關係ニ於テハ沿岸航海ニ關スル露西亞國ノ現行又ハ將來ノ法律ヲ遵守スヘキモノトス

第九條

本協約第一條ニ特定シタル各方面ニ於テ漁區ノ貸下ヲ受ケタル日本國臣民及露西亞國臣民ハ魚類ノ蕃殖方法、魚類及水產物ノ保護、此等產業ニ關スル取締竝漁業上他ノ一切ノ事項ニ關スル現行又ハ將來ノ法律、命令及規則ニ關シ均等ノ取扱ヲ受クヘシ

前記法律及命令カ新ニ制定セラレタルトキハ其ノ施行ヨリ少クトモ六箇月前日本國政府ニ通牒セラルヘシ

前記規則カ新ニ發布セラレタルトキハ其ノ施行ヨリ少クトモ二箇月前浦潮斯德駐在日本國領事ニ通牒セラルヘシ

第十條

本協約ニ於テ特ニ規定セサル事項ト雖本協約第一條ニ特定シタル各方面ニ於ケル漁業ニ關係スルモノニ付テハ日本國臣民ハ前記各方面ニ於テ漁區ノ貸下ヲ受ケタル露西亞國臣民ト同一ノ待遇ヲ享クヘシ

第十一條

日本國臣民ハ本協約第一條ニ特定シタル各方面以外ノ借區内ニ於ケル一切ノ魚類及水產物ノ製造ニ從事スルコトヲ得ヘシ但シ此ノ場合ニ於テハ露西亞國在留一切ノ外國人ニ適用セラルル現行又ハ將來ノ法律、命令及規則ヲ遵守スヘシ

第十二條

日本帝國政府ハ露西亞帝國政府カ本協約ニ依リ日本國臣民ニ對シ漁業權ヲ許與シタルコトニ鑑ミ沿海洲及黑龍江洲ニ於テ漁獲又ハ採取シタル魚類及水產物ニ對シ其ノ製造セラレタルト否トヲ問ハス何等ノ輸入稅ヲ課スルコトナキヲ約ス

第十三條

本協約ハ十二箇年間效力ヲ有スヘク第十二箇年ノ

終ニ於テ兩締約國相互ノ合意ニ依リ之ヲ更新又ハ改正スヘキモノトス

第十四條

本協約ハ批准セラルヘシ而シテ其ノ批准書ハ成ルヘク速ニ且如何ナル場合ニ於テモ調印後四箇月以内ニ東京ニ於テ交換セラルヘシ

右證據トシテ兩國全權委員ハ本協約ニ記名調印スルモノナリ

明治四十年七月二十八日即千九百七年七月十五日（二十八日）聖彼得堡ニ於テ之ヲ作ル

本野一郎㊞
イズヴォルスキー㊞
グバストフ㊞

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル日本國皇帝（御名）此ノ書ヲ見ル有衆ニ宣示ス

朕明治四十年七月二十八日露西亞國聖彼得堡ニ於テ帝國全權委員カ露西亞國全權委員ト共ニ記名調印シタル日露漁業協約ヲ閱覽點檢シ之ヲ嘉納批准ス

神武天皇即位紀元二千五百六十七年明治四十年九月九日東京宮城ニ於テ親ラ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名　國璽

外務大臣　子爵林董

【參考】

明治四十年十一月二十九日官報

日露漁業協約締結會議錄、往復文及關係文書左ノ如シ

目次

（一）日本國公使ヨリ露國外務大臣ニ至ル書翰（千九百六年（七月十三日／六月三十日）附）

（二）露國外務大臣ヨリ日本國公使ニ至ル書翰（千九百六年（八月九日／七月二十七日）附）

（三）露國外務大臣ヨリ在東京露國公使ニ至ル電信（千九百六年（八月十日／七月二十八日）附）

（四）日露漁業協約締結會議錄第一號（第一回會議、千九百六年八月（十四日／一日））
附屬書千九百六年八月（十四日／一日）日本國全權委員本野閣下ノ提出ニ係ル日露漁業協約案

（五）日露漁業協約締結會議錄第二號（第二回會議、千九百六年（十月十三日／九月三十日））
「グバストフ」閣下ヨリ本野閣下ニ至ル書翰（千九百六年（九月五日／八月二十三日）附）
附屬書第一號千九百六年（九月五日／八月二十三日）露西亞國全權委員「グバストフ」閣下ノ提示ニ係ル日露漁業協約案
同第二號千九百六年（九月五日／八月二十三日）露西亞國全權委員「グバストフ」閣下ノ提示ニ係ル日露漁業協約案說明書
同第三號千九百六年（十月十三日／九月三十日）（土曜日）ノ會議ニ於テ漁業協約露西亞國案ノ說明書ニ對スル回答トシテ日本國全權委員本野閣下ノ提出ニ係ル意見書
同第四號千九百六年（十月十三日／九月三十日）（土曜日）ノ會議ニ於テ日本國全權委員本野閣下ノ提出ニ係ル第一條ノ文言ニ關スル修正案
本野閣下ヨリ露國全權委員ニ至ル書翰（千九百六年十月（二十五日／十二日）附）

（六）日露漁業協約締結會議錄第三號（第三回會議、千九百六年十月（二十五日／十二日））
附屬書第一號千九百六年十月（二十五日／十二日）木曜日）ノ會議ニ於テ露西亞國全權委員「グバストフ」閣下ノ提出ニ係ル要點ニ關スル說明書
同第二號千九百六年十月（二十五日／十二日）（木曜日）ノ會議ニ於テ露西亞國全權委員「グバストフ」閣下カ「同年（十月十三日／九月三十日）附日本國全權委員ノ意見書」ニ對シ爲シタル答辯書

（七）日本國公使ヨリ露國外務大臣ニ至ル覺書（千九百六年（十一月七日／十月二十五日）附）

（八）露國外務大臣ヨリ日本國公使ニ至ル回答覺書（千九百六年十一月（二十五日／十二日）附）

（九）「入江（アンス）」ノ定義ニ關スル下調委員會第一回會議（千九百六年十一月（十四日／一日）開會）「アンス」ナル語ノ定義ニ關スル露國委員ノ意見

（十）「入江（アンス）」ノ定義ニ關スル下調委員會第二回會議（千九百六年十一月（三十日／十七日）開會）露國委員ノ下シタル定義ニ對シ日本國委員ノ意見

（十一）「入江（アンス）」ノ定義ニ關スル下調委員會第三回會議（千九百六年（十二月十日／十一月二十七日）開會）日本國委員ヨリ提出シタル意見ニ對シ露國委員ノ答辯

（十二）日本國全權委員ヨリ露國全權委員ニ至ル覺書（千九百七年一月（二十二日／十日）附）竝附屬覺書

（十三）本野閣下ヨリ「グバストフ」閣下ニ至ル半公信（千九百七年（二月一日／一月十九日）附）竝別紙覺書（千九百七年（二月一日／一月十九日）非正式會見ニ於ケル決議）

（十四）「グバストフ」閣下ヨリ本野閣下ニ至ル返信（千九百七年（二月二日／一月二十日）附）

（十五）日本國全權委員ヨリ露國全權委員ニ至ル覺書（千九百七年二月（二十八日／十五日）附）

（十六）本野閣下ノ口上書（千九百七年（三月八日／二月二十三日）附）

（十七）露國全權委員ヨリ日本國全權委員ニ至ル覺書（千九百七年三月（十七日／四日）附）

（十八）「グバストフ」閣下ノ口上書（千九百七年三月（二十八日／十五日）附）

（十九）日本國公使本野閣下ヨリ露國外務大臣「イズヴォルスキー」閣下ニ至ル覺書（千九百七年（四月九日／三月二十七日）附）

（二十）日本國全權委員ヨリ露國全權委員ニ至ル覺書（千九百七年（四月十日／三月二十八日）附）

（二十一）露國外務大臣「イズヴォルスキー」閣下ノ回答覺書（千九百七年（四月十三日／三月三十一日）附）

（二十二）露國全權委員ヨリ日本國全權委員ニ至ル回答覺書（千九百七年四月（二十五日／十二日）附）

（二十三）「グバストフ」閣下ヨリ本野閣下ニ至ル半公信（千九百七年四月（十七日／四日）附）

（二十四）本野閣下ヨリ「グバストフ」閣下ニ至ル返信（千九百七年四月（十九日／六日）附）

（二十五）千九百七年（五月四日／四月二十一日）聖彼得堡ニ於テ作成シタル日露漁業協約ノ原則ノ承認ヲ證スル議定書

（二十六）日露漁業協約締結會議錄第四號（第四回會議、千九百七年六月（十八日／五日））

（二十七）日露漁業協約締結會議錄第五號（最終會議、千九百七年七月（二十八日／十五日））

（一）日本國公使ヨリ露國外務大臣ニ至ル書翰（千九百六年（七月十三日／六月三十日）附）

第一九號

以書翰致啓上候陳者日本帝國政府ハ千九百五年九月五日「ポーツマス」ニ於テ調印セラレタル講和條約第十一條及第十二條ノ規定ニ從ヒ露西亞帝國政府ト一ノ通商航海條約竝一ノ漁業協約ヲ締結セムトノ希望ヲ以テ本使ニ其ノ全權御委任狀竝本事項ニ必要ナル訓令ヲ送達セラレ候ニ付茲ニ別紙御委任狀譯文及送付候就テハ閣下ヨリ前記事項ニ關シ露西亞帝國政府ノ執ラルル處置ヲ成ルヘク速ニ本使ニ御通牒被下候得者幸甚ノ至ニ存候

本使ハ茲ニ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表シ候敬具

千九百六年（七月十三日／六月三十日）在聖彼得堡日本國公使館ニ於テ

本野一郎（記名）

外務大臣「イズヴォルスキー」閣下

（別紙御任狀佛譯文添付）

（二）露國外務大臣ヨリ日本國公使ニ至ル書翰（千九百六年（八月九日／七月二十七日）附）

以書翰致啓上候陳者本年六月三十日附貴翰第一九號ニ關シ本大臣ハ我至尊ナル皇帝陛下カ千九百五年八月二十三日「ポーツマス」ニ於テ調印セラレタル講和條約第十一條ノ規定ニ從ヒ日露兩國間ニ一ノ漁業協約ヲ締結調印セムカ爲外務次官「グバストフ」氏ヲ全權委員ニ任命シ閣下ト談判ヲ開始スルノ任務ヲ授ケラレ候旨閣下ニ通牒スルノ光榮ヲ有シ候

「グバストフ」氏ニ隷屬スヘキ專門委員ノ氏名ハ後日閣下ニ御通知致スヘク候

本大臣ハ茲ニ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表シ候敬具

千九百六年七月二十七日外務省第一局ニ於テ

「イズヴォルスキー」（記名）

日本國特命全權公使本野一郎閣下

（三）露國外務大臣ヨリ在東京露國公使ニ至ル電信（千九百六年（八月十日／七月二十八日）附）

勅命ヲ以テ「コンセイエー、プリヴェー」「グバストフ」ハ「ポーツマス」條約第十一條ニ基ク漁業協約ヲ締結セムカ爲全權委員ノ資格ヲ以テ本野氏ト談判ヲ開始スルノ任務ヲ授ケラレタリ

「イズヴォルスキー」（記名）

在東京露國公使宛

（四）日露漁業協約締結會議錄第一號、

第一回會議

千九百六年八月（十四日／一日）午後三時開會

列席者

日本國　全權委員日本國特命全權公使本野閣下、書記官公使館一等書記官落合氏、書記官公使館二等書記官丸毛氏

露西亞國　全權委員外務次官「コンセイエー、プリヴェー」「グバストフ」閣下、專門委員「アッセッスール、ド、コレージュ」「プラシニコフ」氏、書記官外務大臣附帝室「ヂヤンチオンム」「メイエンドルフ」男爵、書記官外務省在勤「スクレテール、ド、コレージュ」「ウオブネセンスキー」氏

闕席者

露西亞國　專門委員漁業視察官「コンセイエー、プリヴェー」「グリム」氏、專門委員「コムマンドール」島長官「コンセイエー、デター」「グレブニツキー」氏

外務次官「グバストフ」閣下ハ日本國公使本野閣

下ニ對シテ歡迎ノ意ヲ表シ露西亞國外務大臣ノ名ヲ以テ會議ヲ開キ同時ニ外務大臣ハ公正ニシテ調和的ノ精神ヲ有スルニ依リ本談判カ兩國ノ利益ノ爲ニ滿足ナル一致ヲ見ルニ至ラムコトヲ希望スル旨ヲ述ヘタリ

本野氏ハ「ゲベストフ」氏ノ厚遇ヲ陳謝シ等シク將來ニ於ケル兩國ノ政策ノ爲ニ最迅速ニ此ノ談判ノ良好ナル落著ヲ見ルニ至ラムコトヲ希望スル旨ヲ述ヘ自國政府ノ漁業協約案ヲ外務次官ニ交付セリ(附屬書第一號)同時ニ日本國公使ハ既ニ千遂ヲ始メタル新聞紙ノ秘密漏洩ヲ避クル爲談判ノ經過ヲ極テ秘密ニ附セムトノ意見ヲ提出シ「ゲベストフ」氏ニ漁業協約案ヲ手交スルニ際シ本野氏ハ追テ協議ノ上時日ヲ定ムヘキ次會ノ開會前ニ書面ヲ以テ露國側ノ意見書竝修正案ヲ提示セラレムコトヲ希望スル旨ヲ表明セリ

「ゲベストフ」氏ハ日本政府ノ草案ヲ受領スルニ際シ露國政府ノ意見書ヲ送遞スルニツキ約二週間ノ猶豫ヲ求メタリ進行中ノ談判ニ付守ルヘキ秘密ニ關シテハ必要ノ場合兩國全權委員カ探メ協定シタル後新聞紙ニ通知セムコトノ意見ヲ述ヘ本野氏ハ之ニ同意セリ

日本國ノ代表者ハ「ゲベストフ」氏ニ其ノ全權委任狀ノ寫竝譯文ヲ提示セムコトヲ求メ外務次官ハ之ヲ欣諾セリ

午後三時三十分散會

本野一郎(記名)

「セー、ゲベストフ」(記名)

附屬書第一號

千九百六年八月十一日（二十四日）日本國全權委員本野閣下ノ提出ニ係ル日露漁業協約案

日本國皇帝陛下及全露西亞國皇帝陛下ハ明治三十八年九月五日即千九百五年八月二十三日締結講和條約第十一條ニ依リ漁業協約ヲ締結セムカ爲日本國皇帝陛下ハ、、、、、、、、ヲ全露西亞國皇帝陛下ハ、、、、、、、、ヲ各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ兩國全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ左ノ諸條ヲ協議決定セリ

第一條

露西亞帝國政府ハ本協約ノ規定ニ依リ日本海、「オコーツク」海及「ベーリング」海ニ屬スル露西亞國領水ニシテ土民ノ爲留保シアル河川及入江ヲ除クノ外總テ露西亞國臣民ニ漁業ヲ營ムコトヲ許ス場所ニ於テ一切ノ魚類及水産物ヲ捕獲及採取スルノ權利ヲ日本國臣民ニ許與ス

第二條

本協約第一條ニ記載シタル各方面ニ於ケル漁區ノ貸下ハ其ノ短期タルト長期タルトヲ問ハス總テ競爭入札ノ方法ニ依リ日本國臣民ト露西亞國臣民トノ間ニ何等ノ區別ヲ設クルコトナカルヘシ前記入札ノ時日及場所、貸下ニ關スル必要事項竝公賣ニ付スル各種漁區ハ入札施行ヨリ少クトモ二箇月前ニ浦潮港駐在日本國領事ヘ公然通牒セラルヘシ

第三條

前條ノ規定ニ依リ漁區ノ貸下ヲ受ケタル日本國臣民ハ其ノ漁業ト關聯スル總テノ目的ヲ以テ附帶岸地ヲ自由ニ使用スルノ權利ヲ有スヘシ前記日本國臣民ハ該岸地ニ於テ漁船及漁網ニ必要ナル修繕ヲ加ヘ漁網ヲ曳キ魚類及水産物ヲ揚陸シ竝捕獲物及採取物ヲ鹽漬シ乾燥シ製造シ若ハ貯藏スルコトヲ得且此等ノ目的ヲ以テ建物、倉庫、小屋及乾燥場ヲ自由ニ築造シ若ハ移轉スルコトヲ得ヘシ又本協約第一條ニ記載シタル各方面ニ於テ貸下ヲ了セサル總テノ部分ニ於テ日本國臣民ハ自由ニ且露西亞國臣民ト同一ノ條件ヲ以テ一切ノ魚類及水産物ヲ捕獲及採取スルノ權利ヲ有シ且個人ノ財産權ニ妨ナキ限リ漁區ノ附帶岸地ヲ使用スルト同一ノ方法及範圍内ニ於テ漁業ト關聯スル總テノ目的ヲ以テ前記貸下ヲ了セサル部分ノ附帶岸地ヲ使用スルコトヲ得ヘシ

第四條

本協約第一條ニ記載シタル各方面ニ於ケル漁業權竝漁業及之ニ使用スル財産ニ對シ現ニ賦課シ又ハ將來賦課スルコトアルヘキ一切ノ税金若ハ取立金ニ關シテハ日本國臣民及露西亞國臣民ハ均等ノ取扱ヲ享クヘシ

第五條

本協約第一條ニ記載シタル露西亞國領水ニ於テ捕獲若ハ採取シタル魚類及水産物ニシテ日本國ニ輸出セラルルトキハ其ノ製造セラレタルト否トヲ問ハス露西亞國政府ハ之ニ對シ何等ノ税ヲ課スルコトナカルヘシ

第六條

日本國臣民カ漁業若ハ魚類及水産物ノ製造ノ爲使用スル人員ノ國籍ニ關シテハ何等ノ制限ヲ設クルコトナカルヘシ

第七條

日本國臣民ハ魚類及水産物ノ製造方法ニ關シ何等ノ制限ヲ受クルコトナカルヘシ

第八條

漁業權ヲ取得シタル日本國臣民ハ露國證書ヲ有スル船舶ヲ以テ日本國ト漁場トノ間ニ直接往復スルコトヲ得ヘシ

前記船舶ハ一ノ漁場ヨリ他ノ漁場ヘ漁業上必要ナル人員、物件竝漁獲物及採取物ヲ運搬スルコトヲ得ヘシ

第九條

本協約第一條ニ記載シタル各方面ニ於ケル魚類ノ蕃殖、保護、漁獵取締其他漁業ニ關スル現今若ハ將來ノ法令ハ日露兩國臣民ニ對シ均一ニ適用セラルヘシ

露西亞國政府ニ於テ新ニ前項ノ法令ヲ設クルトキハ之カ施行ヨリ少クトモ六箇月前ニ之ヲ日本國政府ニ通牒スヘシ

第十條

本協約ニ於テ「魚類及水産物」ト稱スルハ一切ノ魚類及水産動植物ヲ謂フ

第十一條

本協約第一條ニ記載シタル各方面ニ於ケル漁業ニ關シ特ニ本協約ニ揭ケサル事項ニ就テハ日本國臣民ト露西亞國臣民ト均一ノ待遇ヲ享クヘシ

第十二條

本協約ハ兩締約國相互ノ合意ニ依リ十五箇年毎ニ之ヲ更新スヘキモノトス

第十三條

本協約ハ批准セラルヘシ該批准ハ成ルヘク速ニ且如何ナル場合ニ於テモ調印後四箇月以内ニ東京ニ於テ交換セラルヘシ

右證據トシテ兩國全權委員ハ本協約ニ記名調印スルモノナリ

明治　年　月　日即千九百　年
月　日(　月　日)聖彼得堡ニ於テ之ヲ作ル

(五)日露漁業協約締結會議錄第二號

第二回會議

千九百六年八月三十一日（九月十三日）午後四時三十分開會

列席者

日本國　全權委員聖彼得堡駐剳日本國特命全權公使本野閣下、書記官聖彼得堡日本國公使館書記官落合氏、丸毛氏、津田氏

露西亞國　全權委員外務大臣代理「コンセイエー、プリヴェー」「ゲベストフ」閣下、專門委員商工務省次官「コンセイエー、プリヴェー」「ランゴボイ」氏、專門委員「コムマンドル」島長官「コンセイエー、ゲター」「グレブニツキー」氏、專門委員商事航海局次長「コンセイエー、ド、コレージュ」「カチッシース」氏(專門委員商事航海局長「コンセイエー、プリヴェー」「アレキセイエフ」氏不在ニ付臨時代理)、專門委員「アッセッスール、ド、コレージュ」「ブラヂニコフ」氏、書記官「メイエンドルフ」男爵、同「ウォツネセンスキー」氏

缺席者

露西亞國　專門委員商事航海局長「コンセイエー、プリヴェー」「アレキセイエフ」氏、專門委員漁業視察官「コンセイエー、プリヴェー」「グリム」氏

露西亞國全權委員ハ會議ヲ開始スルニ當リ八月二十三日、九月五日ノ日本國全權委員ニ手交セシ露國案竝說明書(附屬書第一號及第二號參照)ニ關シ意見ヲ述ヘムコトヲ日本國全權委員ニ求メタリ

日本國全權委員ハ日本案竝露國對案ハ既ニ貴方ノ知悉スル所ナルニ依リ今ハ兩案ヲ詳細ニ研究スヘキ時刻ナリ依テ逐條研究ニ移ラムコトヲ提議シ「ゲベストフ」氏之ニ同意セルヲ以テ本野氏ハ本協約ノ根帶ト思考スル第一條ノ特ニ重要ナルコトニ付露國全權委員ノ注意ヲ喚起セリ

次ニ露國案ノ全體ニ關シ日本國全權委員ハ同案ヲ熟閲シタル結果妥當ナル基礎ヲ有セスト思惟セラルヘキ或種ノ主張ヲ撤回セムコトヲ望ム旨ヲ述ヘタリ

露國案ノ第一條中(一)漁業權(二)領水ノ範圍ニ就テ述ヘタル第一ノ點即漁業權ニ關シ露國ハ「ポーツマス」條約第十一條ニ於テ日本國カ此ノ文字ニ與ヘタル意義ト著シク相違セル意義ニ用ヰタリ本野氏ハ露國ノ主張ニ對シ日本國ハ國際上ノ外交上ノ用語ニ於テ普通使用スル意義ニ從ヒ此ノ文字ノ意義ヲ一層詳細ニ解スル旨ヲ抗議シ漁業(「ペーシュ」「フィッシング」)ナル文字カ單ニ魚類ノ漁獲ニ止ラス膃肭獸及鯨ノ如キ他ノ水産物ノ漁獲ヲモ含ムコトヲ主張シ此主張ヲ證スル爲日本國全權委員ハ此ノ事項ニ關シ權威アルト見ルヘキ「ヴ、フォンテーヌ」ノ佛文著作第五百二十頁及米國ノ出版物(合衆國「フォーレン、リレーションス」)中ニ用ヰラル海豹漁(「シール、フィッシング」)ナル文字ヲ引證セリ且講和條約第十一條及本協約案第一條中ニ「ベーリング」海ヲ包含セシメタル事實ハ「ポーツマス」ノ談判委員カ漁業ナル文字中ニ均シク水産哺乳動物ノ漁獲ヲモ含ムモノト解スル意思ナリシコトヲ示スモノナリ次ニ露國談判委員カ充分ナル漁業權(「プレー

ン、ドロア、ド、ペーシュ）及漁業ノ權利（デ、ドロア、ド、ペーシュ）ナル文字ノ間ニ設ケタル區別ハ「ポーツマス」條約會議錄第七號ニ從フトキハ漁業區域ノ範圍ノ觀念ニ歸著スルニ過キス「ポーツマス」ニ於ケル露國談判委員ハ漁業權ナル文字ヲ用ヰルニ當テ漁業ノ權利其ノ者ヲ制限セムトセス單ニ漁區ノ範圍ヲ制限セムトシタリ是即前記會議錄第七號ノ閱讀ヲ必要トスル所以ナリトス

第二ノ點ニ關シ日本國全權委員ハ「ポーツマス」ニ於ケル談判委員カ同條約第十一條ノ規定ニ依テ日本人ニ有名無實ナラサル現實有効ノ權利ヲ附與スルノ意思ヲ有セシコトヲ注意セリ而シテ本協約ノ規定中ヨリ入江及河川ナル文字ヲ全然削除スルトキハ叙上ノ權利ハ有名無實トナルノ虞アリ總テノ場合ニ於テ入江及河川ナル文字ヲ削除スルコトハ疑モナク漁業權ヲ著シク減殺スルモノナリ普通ノ語義ニ依レハ入江（アンス）ナル文字ハ水深淺キ小灣ヲ指シ貸下ヲ受クヘキ一漁區內ニ一若ハ數多ノ入江アルコトアルヘク又一入江內ニ一若ハ數多ノ漁區ノ存スルコトアルヘシ故ニ一入江ノ存スル所ニ於テ日本人カ漁業ニ從事スルコト能ハスト決定スルトキハ該日本人ト地方官憲トノ間ニ無數ノ困難ヲ生シ又屢誤解ヲ惹起スヘク地方官憲ハ自己ノ任意ニ之ヲ處分スルナラム「ポーツマス」ニ於ケル談判委員ハ日本國臣民ニ有名無實ノ權利ヲ與ヘムトセシニアラスシテ露國漁民ニ對スルト同樣ニ眞實ノ權利ヲ公平ニ附與セムトセシヤ明ナリ是露國人竝外國人ノ爲ニ存スル權利ノ保障ニ關スル講和條約第十一條ノ規定ノ明示スル所ナリ從テ日本國全權委員ハ日本案ヲ全部維持セムコトヲ要求セサルヲ得サルモ交讓ノ精神ニ基キ兩案ニ對シ公平ニ第一條ヲ修正セムコトヲ希望スル旨ヲ述ヘタリ依テ日本國全權委員ハ一方ニ於テ河川ナル文字ノ削除ヲ承諾スルニ代ヘテ他方ニ於テ日本國臣民ニ漁業ヲ許可スヘキ範圍內ニ入江ヲ含マシメムコトヲ要求スヘシト述ヘ了リテ後日本國全權委員ハ此ノ意味ヲ以テ認メタル第一條ノ修正案ヲ露西亞國全權委員ニ手交セリ（附屬書第三號及第四號參照）

露西亞國全權委員ハ慎重ニ日本國全權委員ノ意見ヲ聽取シタル旨ヲ答ヘ之ニ對スル自己竝露國委員ノ謝辭ヲ呈シ即時ニ該意見ニ就キテ討議スルヲ得サルモ暫時專門委員ノ意見ヲ徵セムコトヲ請ヘリ

玆ニ於テ「グレプニツキー」氏ハ意見ヲ陳示シテ曰ク場所ニ關シテ日本國全權委員カ慮ル將來ニ於ケル地方官憲ノ誤解ハ寧ロ漁區ト入江トカ相符合スルニ依リ將來ニ於テ之ヲ避クルコトヲ得ヘシ其ノ理由タルヤ漁區ノ配設ハ中央政府ヨリ發スル規則ニ從テ之ヲ定メ地方官憲ノ發スル規則ニ從テ定ムルコトナキヲ以テナリ尙露西亞國臣民ニハ「ベーリング」海ニ於テ水中哺乳動物（鯨族）ヲ漁獲スルコトヲ禁止セリ而シテ該禁止ハ之ヲ英國竝米國ノ國籍ヲ有スル漁夫ニ擴張セリ日本國ハ華盛頓ノ最終條約ノ調印者中ニ加入セサルヘカラスト

日本國全權委員ハ之ニ答ヘテ日本國ハ日本國臣民ノ爲ニ特別ノ待遇ヲ要求スルニアラス露西亞國臣民ニ與フルモノト均等ナル待遇ヲ要求スルモノナルコトヲ以テセリ若シ一般ノ利益ニ於テ特別ノ規定アリトセハ素ヨリ之ニ違背スヘキニアラス日本國臣民ノ爲ニ要求スル唯一ノ權利ハ哺乳動物ノ漁業ニ關シ設置アリタル場合ニ日本人カ入札シ得ルコト之ナリト述ヘタリ

「グレプニツキー」氏ハ「ベーリング」海ニ於ケル漁業カ主トシテ魚類ヲ目的トスルコトヲ述ヘタルニ日本國全權委員ハ此ノ點ニ付同意シタルモ水中哺乳動物ノ漁業ハ同海ニ於テ均シク重要ナルコトヲ附言セリ

露西亞國全權委員ハ意見ヲ陳述シテ曰ク第一條中ノ問題ヲ處理スルニ當テ露西亞國談判委員ハ全然「ポーツマス」條約ニ準據セサルヲ得スト

玆ニ於テ日本國全權委員ハ講和條約中ニ用ヰタル文字ニ付種種解釋ノ異ルコト有リ得ヘキ事實ニ關シ露西亞國全權委員ノ注意ヲ喚起セサルヘカラスト認メ第一、漁業ナル文字ニ付「ポーツマス」談判委員ハ之ヲ最廣義ニ解シ露國案其ノ者モ固有ノ意義ニ於ケル魚類ノ漁獲ノミナラス他ノ水產物ニモ之ヲ適用セリ從テ此ノ文字ハ國際慣習上ノ見地ヨリスルニセヨ或ハ學說上ノ見地ヨリスルニセヨ要スルニ日本案カ此ノ文字ニ與ヘタル意義ヲ有スルニスキスト述ヘタリ第二、日本國全權委員ハ更ニ入江ナル文字ニ關シテ聲明シテ曰ク此ノ文字ヲ削除スルトキハ日本人ハ漁區ノ貸下ヲ受クルニ付最早均等ナル待遇ヲ享受シ得サルヘシ斯ノ如キハ是本協約ヲシテ實際有名無實ノモノタラシムルモノナリト最後ニ日本國全權委員ハ入江ナル文字ニ就テハ相矛盾セル解釋ヲ與ヘ得ルカ故ニ之ヲ削除スルトキハ實際上無數ノ紛爭ヲ生スヘシト述ヘ此ノ點ニツキ露西亞國全權委員ノ注意ヲ喚起セリ

「グレプニツキー」氏ハ問題タル露領沿岸ノ全地域七千四百哩中二千八百六十五哩即殆ト其ノ半部ハ日本人ニ貸與シ得ルモノナルカ故ニ有名無實ト謂ヘルハ誇張ノ言ナリトノ意見ヲ陳述セリ

日本國全權委員ハ露西亞國ノ解釋ニ從テ日本人ニ賃貸シ得ル漁區ト日本人ニ賃貸シ得サル漁區トノ雙方ノ數量ヲ確定スルニアラサレハ露西亞國ノ與フル讓與ノ價値ヲ評價シ得サルヘシト謂ヘリ

「グレプニツキー」氏ハ二千八百六十五哩ナル數字ハ既ニ入江ヲ削除シテ謂ヒシ數ナル旨ヲ答ヘタリ

日本國全權委員ハ入江內ニ存スル漁區及既存漁區內ニ存スル入江ノ正確ナル範圍若ハ大體ノ範圍ヲ知ラムコトヲ希望スル旨ヲ述ヘタルニ露西亞國全權委員ハ露國專門委員ノ意見ニ依ルニ該地方ノ精確ナル地圖ナキヲ以テ其ノ數ハ今日正確ニ之ヲ指示スルコトヲ得スト答ヘタリ

「ランゴボイ」氏ハ「アカデミー」ノ辭書ニ依レハ「漁業」（ペーシュ）ナル文字ハ單ニ魚類ノ漁獲ノミヲ指ストノ意見ヲ述ヘタリ

日本國全權委員ハ此ノ意見ハ語原上精確ナルヘキモ是外交上ノ用語ニアラス外交上ノ用語トシテハ漁業ナル文字ハ一層廣義ニ解セル旨ヲ答ヘタルニ「ブラジニコフ」氏ハ「ポーツマス」會議錄ノ明文ニヨリテ協約ノ效果ヲ入江及河川ニ及ホササルコトニ確定セル以上最早此ノ問題ニ立戾リテ討議スルハ無益ノコトニシテ今日討議ノ目的トスル所ハ入江ナル文字ノ解釋ヲ確立スルニアルコトヲ注意セリ

日本國全權委員ノ考察ハ大體ニ於テ露國專門委員ノ所說ニ合致セルコトヲ認ムルモ該文字ハ「ポーツマス」條約中ニ於テモ亦日本ノ提示セシ漁業協約案カ與ヘタル意義ト同一ノ意義ヲ有スヘキモノナルコト竝條約ノ條文ノ解釋ニ關シテハ談判委員ノ意思ノ合致ヲ考量セサルヘカラス此ノ見地ヨリスルニ此ノ文字ハ以上說明セシ以外ノ意義ヲ有セサルナリ（即入江及河川ヲ削除スルトキハ土民ノ利益ニ歸スヘシ）ト謂ヘリ

「ブラジニコフ」氏ハ入江ヲ削除スルトキハ日本國民ノ權利ヲ著シク減殺スヘシトノ意見ハ之ヲ認ムルモ之ヲ削除スルカ爲協約ヲ有名無實ノモノトナスコトナシトノ確信ヲ述ヘ其ノ理由トシテハ入江及河川ヲ削除スルモ尙漁業ニ利アル稍廣大ナル沿岸ヲ殘スヘク原則トシテハ入江及河川ハ之ヲ削除スルモ特別ノ各場合ニ此ノ文字ヲ適用スルニ當テ互ニ協議ヲ遂クルコトヲ得ヘシト謂ヘリ

日本國全權委員ハ「ポーツマス」條約ニ依テ確立セラレタル削除主義ニハ同意スヘキモ入江ナル文字ノ解釋ニ關シテ協議ヲ爲スノ必要アリトシ「ポーツマス」會議ノ談判委員ハ土民ニ留保セル入江ニ著眼セシコトヲ主張シタリ

「ブラジニコフ」氏ハ入江削除ノ原則ハ聖彼得堡駐箚日本國公使本野氏カ既ニ本年（五月十九日／六月一日）ノ口上書ニ於テ承認セシ所ナル旨ヲ述ヘタリ

日本國全權委員ハ右口上書ノ趣旨ヲ承認セシモ入江ナル文字ノ解釋ハ當時與ヘラレサリシモノナルカ故ニ今玆ニ問題トナルハ正ニ此ノ文字ノ眞正ノ意義如何ヲ知ルニ在リト謂ヘリ

「グレプニツキー」氏ハ灣（ベー）ナル語ノ變體タル英語ニ所謂入江（インレット）ナル文字ヲ以テ佛語ノ入江（アンス）ナル文字ニ換ヘムコトヲ提議セリ

日本國全權委員ハ「インレット」ナル文字ノ固有ノ意義ヲ知悉セサル旨ヲ述ヘ「アンス」ナル文字トノ比較研究ヲ爲サムコトヲ留保セリ

「グレプニツキー」氏ハ「インレット」ハ陸地ニ突入シ稍閉塞セル灣ヲ意味シ「ポーツマス」條約ノ英文中ニアル文字ナリト說明シ其ノ適例トシテ亞米利加ノ地圖上ニ在ル「アラスカ」ノ「クークス、インレット」ヲ擧ケタリ

日本國全權委員ハ「インレット」ノ精確ナル意義如何ヲ質問セルニ「グレプニツキー」氏ハ「インレット」ナル文字ハ小灣ヲ指スト答ヘ日本國全權委員ハ「アンス」及「インレット」ノ二者ノ意義カ同一ノ觀念ニ相當スト謂ヒ露西亞國全權委員ハ英文ヲ以テ一層正確ナリト信スト主張セリ

日本國全權委員ハ「インレット」ナル文字ニ關スル理由ヲ附シタル說明書ヲ交付セラレムコトヲ求メ自ラ之ヲ詳細ニ研究スヘシト約セリ

露西亞國全權委員ハ「アンス」ナル語ノ解釋ハ次回ノ會議ノ問題タルヘシト論結セリ

日本國全權委員ハ自己ノ意見ヲ充分比較研究セラレムコトヲ反覆要請シ自身モ亦「アンス」及「インレット」ノ差異ヲ攻究スヘク尙「河川」ニ關シテハ之ヲ拋棄スル意向ナルニ付「入江」ナル文字ニ依ル除外ハ之ヲ拋棄セムコトヲ希望スト述ヘタリ

本問題ハ依然懸案トシテ殘レリ

玆ニ於テ兩國全權委員ハ互ニ其ノ全權委任狀ヲ交換シ第一回會議ノ議事錄ニ記名シタリ

午後六時二十五分散會

本野一郎（記名）

「セー、グバストフ」（記名）

「グバストフ」閣下ヨリ本野閣下ニ呈スル書翰（千九百六年八月二十三日／九月五日附）

以書翰致啓上候陳者本年八月一日（十四日）ノ漁業協約締結會議第一回會議ニ於テ貴全權委員ヨリ御提出

相成候貴國ノ提案ヲ詳細ニ研究致候結果露國談判委員ニ於テ作成致候漁業協約露國案並說明書ヲ茲ニ閣下ニ送付スルノ光榮ヲ有シ候之ト同時ニ本員ハ次回ノ會談ノ期日ニ關シ閣下ト協定致度候本員ハ茲ニ重テ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具

「ゲバストフ」（記名）

特命全權公使本野一郎閣下

附屬書第一號

千九百六年九月五日（八月二十三日）露西亞國全權委員「ゲバストフ」閣下ノ照會ニ係ル日露漁業協約案

全露西亞國皇帝陛下及日本國ノ皇帝陛下ハ千九百五年九月五日（八月二十三日）即明治三十八年九月五日締結セラレタル講和條約第十一條ニ依リ一ノ漁業協約ヲ締結セムカ爲全露西亞國皇帝陛下ハ、、、、、、、、、、ヲ日本國皇帝陛下ハ、、、、、、、、、、ヲ各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ兩國全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ左ノ諸條ヲ協議決定セリ

第一條

露西亞帝國政府ハ本協約ノ規定ニ依リ河川及入江ヲ除キ日本海「オコーツク」海及「ベーリング」海ニ瀕スル露西亞國沿岸ニ於テ魚類、無脊椎動物及水藻類ヲ捕獲及製造スルノ權利ヲ日本國臣民ニ許與ス前記河川及入江ハ本協約ノ規定ヨリ之ヲ除外ス

第二條

日本國臣民ハ本協約第一條ニ示ス領水內ニ於テ魚類無脊椎動物及水藻類ノ捕獲及製造ニ從事スルコトヲ得ヘシ但シ魚類、無脊椎動物及水藻類ノ捕獲及製造ノ目的ヲ以テ特ニ設ケラレタル水陸兩面ニ亙ル漁區ニ限ル漁區ノ貸下ハ競賣ノ方法ニ依テ之ヲ爲シ日本國臣民ハ前記領水內ニ於テ漁區ノ貸下ヲ受ケタル露西亞國ノ實業家ト同一ノ權利ヲ享有スヘシ

前記競賣ノ爲ニ指定シタル時日及場所並各種漁區ノ貸下ニ關シ必要ナル細目ハ競賣施行ヨリ少クトモ二箇月前浦潮斯德駐在日本國領事ヘ公然通牒セラルヘシ

第三條

本協約第二條ノ規定ニ依リ漁區ノ貸下ヲ受ケタル日本國臣民ハ其ノ漁區ノ限界內ニ於テ漁業ニ從事スルカ爲貸與セラレタル附帶ノ岸地ヲ自由ニ使用スルノ權利ヲ有スヘシ前記日本國臣民ハ該岸地ニ於テ漁船及漁網ニ必要ナル修繕ヲ加ヘ漁網ヲ曳キ魚類及水產物ヲ揚陸シ並漁獲物及採取物ヲ鹽漬シ、乾燥シ、製造シ又ハ貯藏スルコトヲ得ヘシ且此等ノ目的ヲ以テ一漁期間ニ必要ナル倉庫、小屋、乾燥場ヲ自由ニ建造スルコトヲ得ヘシ

第四條

本協約ノ規定ニ支配セラルヘキ各地方ニ於テ漁區ノ貸下ヲ受ケタル日本國臣民及露西亞國臣民ハ本協約第一條ニ指定セル各地方ニ於テ漁業ヲ爲シ且捕獲物ヲ製造スル權利並漁業ニ必要ナル動產及不動產ニ對シ賦課シ又ハ賦課セラルルコトアルヘキ一切ノ公課ニ關シテ均等ノ取扱ヲ享クヘシ

第五條

露西亞帝國政府ハ本協約第一條ニ指定セル露西亞國領水ニ於テ捕獲又ハ採取セラレタル魚類、水產無脊椎動物及水藻類ニ對シ此等ノ魚類、水產無脊椎動物及水藻類カ日本國ニ輸出セラルヘキモノナルトキハ其ノ製造セラレタルト否トヲ問ハス何等ノ稅ヲ課スルコトナカルヘシ

第六條

日本國臣民カ魚類、水產無脊椎動物及水藻類ノ漁獲又ハ製造ノ爲使用スル人員ノ國籍ニ關シテハ何等ノ制限ヲ設クルコトナカルヘシ

第七條

露西亞國政府ハ魚類、水產無脊椎動物及水藻類ノ製造方法ニ關シテ漁區ノ貸下ヲ受ケタル露西亞國實業家ニ加ヘサル特別ノ制限ヲ日本國臣民ニ加フルコトナキヲ約ス

第八條

漁業權ヲ取得シタル日本國臣民ハ領事證書及日本國ニ於テ當該露西亞國領事ノ發シタル證明書ヲ有スル船舶ヲ以テ日本國ト漁場トノ間ニ直接往復スルコトヲ得ヘシ

前記船舶ハ一ノ漁場ヨリ他ノ漁場ヘ漁業上必要ナル人員、物件並漁獲物及採取物ヲ運搬スルコトヲ得ヘシ但シ前記船舶ハ一切ノ關係ニ於テ沿岸航海ニ關スル露西亞國ノ現行又ハ將來ノ法律ヲ遵守スヘキモノトス

第九條

本協約ノ規定ニ支配セラルヘキ各地方ニ於テ漁區ノ貸下ヲ受ケタル日本國臣民及露西亞國臣民ハ魚類ノ蕃殖方法並魚類、水產無脊椎動物及水藻類ノ保護ニ關スル取締其ノ他漁業上一切ノ事項ニ關スル現行又ハ將來ノ法律規則ニ關シ均等ノ取扱ヲ受クヘシ

前記法律規則カ新ニ發布セラレタルトキハ其ノ施行ヨリ少クトモ六箇月前日本國政府ニ通牒セラルヘシ

第十條

本協約ニ於テ特ニ規定セサル事項ト雖本協約第一條ニ指定セル各方面ニ於ケル漁業ニ關スルモノニ付テハ日本國臣民ハ本協約ノ規定ニ支配セラルヘキ各地方ニ於テ漁區ノ貸下ヲ受ケタル露西亞國臣民ト同一ノ待遇ヲ享クヘシ

第十一條

本協約ハ十箇年毎ニ兩締約國相互ノ合意ニ依リ之ヲ更新スヘキモノトス

第十二條

本協約ハ批准セラルヘシ而シテ其ノ批准書ハ成ルヘク速ニ且如何ナル場合ニ於テモ調印後四箇月以內ニ、、、、、、、、ニ於テ交換セラルヘシ

右證據トシテ兩國全權委員ハ本協約ニ記名調印スルモノナリ

千九百六年　月　日（　月　日）即明治　年　月　日聖彼得堡ニ於テ之ヲ作ル

附屬書第二號

千九百六年九月五日（八月二十三日）露西亞國全權委員「ゲバストフ」閣下ノ提示ニ係ル日露漁業協約案說明書

露西亞國全權委員ハ本年八月一日（十四日）日本國全權委員ノ提出セル日露漁業協約案ヲ知悉シタルニ依リ茲ニ說明ヲ爲スヲ必要トシ該案ノ種種ノ點ニ關シテ注意ヲ喚起セサルヘカラスト思考セリ

就中同案第一條中ニ「一切ノ漁業及水產物ヲ捕獲及採取スルノ權利」トアル漁業權ナル文字ハ漁業協約ノ根帶タル講和條約第十一條中ニ使用セル文字ニシテ極メテ廣義ニ解釋セラレ魚類ノ漁獲ノミナラス哺乳動物（鯨族）無脊椎動物、水產植物ノ漁獲ヲモ包含セシメタリ（日本案第十條參照）ト雖元來漁業ナル語ハ其ノ眞義ニ於テ決シテ斯ノ如ク廣義ニ解スヘキモノニアラス歷史上竝博言學上其ノ他ノ論據ニ基ク吾人ノ定義ニ依レハ漁業ナル文字ハ專ラ魚類ノ漁獲ノミニ就キテ謂フモノトス併ナカラ日本國ノ希望モアルコトナレハ露西亞帝國政府ハ一層廣義ニ之ヲ解シ水產無脊椎動物及水藻類ノ漁業ヲモ包含スルモノト解スヘシ哺乳動物（鯨、海豹、膃肭獸、臘虎）ニ關シテハ露西亞國談判委員ハ何レノ外國ニモ露國領水ニ於テ之カ捕獲ヲ許スコトハ到底問題トナリ得サルモノナルコトヲ宣言スルノ光榮ヲ有ス

草案ノ第一條ノ第二ノ部分ニ於テ日本國政府ハ日本海、「オコーツク」海及「ベーリング」海ニ瀕スル露國領水ニシテ土民ノ爲留保シアル河川及入江ヲ除クノ外總テ露西亞國臣民ニ漁業ヲ營ムコトヲ許ス場所ニ於テ漁業ヲ營ムコトノ權利ヲ日本國臣民ノ爲ニ要求セリ「ポーツマス」條約第十一條ノ精確ナル意義ニ基キ帝國政府ハ到底太平洋沿岸ノ自國領水ノ各方面ニ於テ自由ニ漁業ニ從事スルノ權利ヲ日本國臣民ニ讓與スルコトニ同意スルヲ得ス且又入江及河川ニハ必然本協約ノ效力ヲ及ホササルヘキモノト信ス

「ポーツマス」條約ノ八月十八日（三十一日）ノ會議ニ於テ日本國全權委員ハ太平洋沿岸、露西亞國領地ニ於ケル漁業權ヲ日本國臣民ニ讓與セムコトノ要求ヲ提出セリ其ノ要求ハ「露西亞國ハ日本海、「オコーツク」海及「ベーリング」海ニ瀕スル露西亞國領地ノ沿岸、灣、港、入江及河川ニ於テ充分ナル漁業權ヲ日本國臣民ニ讓與スヘキコト」ト記サレタリ之ニ對シテ露西亞國全權委員ハ「露國ハ本問題ニ關シ日本ト協定ヲ爲スノ意向ナルモ右漁業ノ權利ハ獨リ海洋ニ瀕スル沿岸ニノミ及ヒ入江及河川ニ及ハス且既存ノ權利ハ依然效力ヲ有セサルヘカラサル旨ヲ答ヘ合議錄ニ示ス如ク此ノ留保ニ同意ヲ表シ茲ニ第十一條ハ講和條約確定ノ際該條約中ニ規定セラルルコトトナレリ而シテ日本國ニ讓與スヘキ漁業權ノ範圍並性質ノ問題ハ講和條約第十一條ノ意義並豫備談判ヨリ生スル左ノ二原則ニヨリテ解決スルヲ得ヘシ

一、露西亞國ハ日本國ニ或種ノ漁業權ヲ讓與スルコトヲ約セリ右讓與スヘキ漁業權ノ種類ハ特別ノ協定ニ依リテ之ヲ決定スヘキモ充分ナル權利即露西亞國臣民ト同等ノ權利ハ到底之ヲ讓與スルヲ得ス現ニ日本國ノ提案ニ係ル「充分ナル權利」（プレーン、ドロア）ナル文字ハ露西亞國全權委員ノ回答ニ於テ其ノ確定ノ際權利（デ、ドロア）即追テ決定スヘキ權利（デ、ドロア、ア、デテルミネー）ナル文字ニ換ヘラレタリ

二、露西亞國ハ海洋ニ瀕スル沿岸ニ於テ或種ノ漁業權ヲ日本國ニ讓與スルコトヲ約スルモ入江及河川ハ之ヲ討議ノ目的以外ニ置キ本協約ノ規定ヨリ當然削除セラルヘキモノトス事實上モ露西亞國全權委員ハ日本國ノ提案中ニ在リシ「沿岸、灣、港、入江及河川」ナル文字ヲ承認セシコトナク日本國ノ有スヘキ權利ノ範圍ハ入江及河川ニ及ハス獨リ海洋ニ瀕スル沿岸ニノミ及フヘキ旨ヲ宣言シ日本國全權委員ハ此ノ留保ニ同意セリ終局灣、港、入江及河川ナル文字ハ確定條文中ヨリ削除セラレタリ

露西亞國談判委員ハ露西亞國領水ノ總テノ方面ニ於テ漁業ヲ營ムニ付日本國臣民ノ有スヘキ權

利ニ關スル第一條ハ前記第二ノ主張ト矛盾ス從テ本協約中ニ規定スルヲ得ストノ宣言ヲ爲ササルヘカラサルモノト思考ス

第一條ノ末文ニ規定セル如ク土民ニ留保セル入江及河川ニ本協約ノ效果ヲ及ホササルコトニ關シテハ其ノ實價ヲ報償スルヲ得ス現ニ太平洋沿岸ノ露西亞國領地ニ在ル土民ハ其ノ數僅ニ數千人ノミニシテ漁業ヲ營ムト雖現時更ニ國家經濟ニ貢獻スル所ナシ加之土民ノ營ム漁業ハ遠カラスシテ不幸ニモ全然絶滅スルノ運命ヲ有スヘキコトハ確ニ疑ナキコトナリ

第三條ニ修正ヲ加ヘムコトヲ提言セル理由ハ次ノ如シ

太平洋沿岸ノ露西亞國領地ニ於ケル漁業管理ノ方法ニ依レハ水陸兩面ニ亙ル漁區貸下ノ公賣ハ經營ノ最通例ナル形式ニシテ自由ニ產業ヲ營ムノ權利ハ近接スヘカラサル荒蕪ノ沿岸地方ニ於テ例外ノ場合ニ認メラルルニ過キス帝國政府ハ經營竝漁業取締ノ改善ヲ目的トスルカ故ニ嚴格ニ經營ノ第一方法ニ從ヒ特ニ此ノ利用ノ爲ニ設ケラレタル漁區ノ貸下ヲ爲シ竝日露兩國何レノ國籍ヲ有スルニ論ナク一切ノ企業家ニ對シテ均等ノ待遇ヲ與ヘムト欲ス但シ之カ爲沿岸十「サジエーヌ」ヲ使用セシムル海岸水路（ペチエヴニ）ノ權利（法典第十二卷第一部第三百五十八條以下參照）ヲ廢止スルコトナキハ勿論ナリ

追テ發布セラルヘキ漁業法ニ依レハ漁獲ニ必要ナル水面竝該產業ノ全目的ニ必要ナル陸地ニ亙ル漁區ヲ特別ノ企業家ニ貸下ケムトノ提案アリ

草案第四條ニ關シ講和條約ノ正確ナル意義ニ基キ露西亞國談判委員ハ前記日本案第一條ノ說明書中ニ示サレタル如ク漁業權ニ關シテ日露兩國官民カ完全ニ均等ナルヘキコトヲ認ムルハ正當ニ非スト信スルコトヲ注意セサルヘカラス帝國政府ハ住民殊ニ土民、地方民及移住民ト企業者及特別ノ漁民トノ間ニ常ニ明確ナル區別ヲ設ケ沿岸ノ移住ニ依ル國家ノ利益ヨリ打算シテ前者ヲ優遇セリ

企業者ニ與ヘラルヘキ漁業ノ利源經營ノ唯一ノ形式ハ若干ノ漁區ヲ貸下クルコトナルニ依リ露西亞國談判委員ハ本協約ノ效力ノ及フ地方ニ於テ漁區ノ貸下ヲ受ケタル露西亞國臣民ト均等ナル權利ヲ日本國臣民ニ讓與スルヲ至當ナリト思考ス

帝國政府カ產業ヲ無償ニ營ムノ權利ニ就テハ格段ナル保護竝特權ヲ享有シ又ハ將來享有スルコトアルヘキ住民及移住民ト日本國臣民トヲ均等ニ待遇スルヲ得サルハ全然明白ナルコトナリ

草案第七條ヲ修正セル理由ハ漁獲物ノ製造方法ヲ企業者ノ自由ノ處置ニ一任スルコト能ハサルコト竝該事項ニ關シ或種ノ規則ヲ注意スルノ必要アルコトニアリ斯ク漁業法中ニ規定スル必要アルニ依リ鯡族ノ魚類ヨリ肥料ヲ製造スルコトヲ禁セムトノ提案アリ兎ニ角以上ノ結果トシテ生スルコトアルヘキ制限ハ日露兩國ノ企業者ニ等シク擴張セラルヘシ

第九條ニ關シ前記ノ原則ニ從ヘハ本協約ニ依リ產業ニ從事スル日本國臣民ハ本協約第一條ニ指定セラレタル各方面ニ於テ漁區ノ貸下ヲ受ケタル露國漁業者ト均等ナル待遇ヲ受クルヲ得サルコトヲ示ササルヘカラス

日本案第十條ハ之ヲ規定スルノ必要ナカルヘシ何トナレハ漁業ナル文字ハ本漁業協約露國案第一條中ニ充分定義セラレアルヲ以テナリ

第十一條ニ關シテモ亦第九條ニ關スルト同一ノ觀察ヲ下シ得ヘシ

本協約ノ有效期限ニ關シテハ慣習ニ從ヒ十年ニ制限スルヲ優レリトス

附屬書第三號

千九百六年（九月二十一日十月四日）（木曜日）ノ會議ニ於テ漁業協約露西亞國案ノ說明書ニ對スル回答トシテ日本國全權委員本野閣下ノ提出ニ係ル意見書

露西亞帝國政府ノ對案及之ニ附帶セル說明書ヲ熟閱シタル結果日本國全權委員ハ理由ナシト思考セラルル或種ノ主張ヲ露西亞國全權委員ニ於テ撤回セラレ日本帝國政府ノ提出セシ最初ノ草案ヲ再度閱讀セラレムコトヲ望ム

第一條

第一條ニ對スル露國ノ說明書ハ特ニ次ノ二點ヲ研究セリ

一、漁業權ナル文字ノ意義

二、日本國カ漁業權ヲ要求スル露西亞國領水ノ範圍

第一ノ點ニ關シ露西亞國ノ說明書ハ講和條約第十一條中ニ用ヰタル漁業權ナル文字ニ付日本國政府ノ與ヘタル意義ニ對シ歷史上及語學上其ノ他ノ論據ニ基キ之ヲ爭ヘリ

日本國全權委員ハ日本國政府カ歷史上及語學上其ノ他ノ論據ニ從ヒ實際該文字カ有スル意義ヨリモ一層廣キ意義ヲ該文字ニ與ヘタリト謂フ主張ニ對シテ極力抗議セサルヘカラスト信ス日本國政府ハ一般ニ外交上ノ用語ニ於テ該文字ニ與フル意義ヲ之ニ附シタルノミ

現ニ外交上ノ用語トシテ漁業權（「ペーシュ」「フイッシング」）ナル文字ハ決シテ露西亞國說明書カ與ヘシ如キ魚類ノ漁獲ノミニ限レル意義ヲ有セサルナリ

二三ノ實例ヲ舉示セムニ日本國全權委員ハ白耳義國ノ元老院議員ニシテ國際法ノ教授タル「エッチ、ラ、フォンテーヌ」氏ノ萬國仲裁裁判ニ關スル知名ノ著書「パシクリシー、アンテルナショナール」（「ブリュッセル」千九百二年出版）ヲ露西亞國全權委員ニ於テ參考セラレムコトヲ望ム該著書ノ第五百二十頁ニ於テ膃肭獸ノ漁獲ノ爲武裝船ノ拿捕長カ英國民ニ賠償スヘキ損害賠償額ヲ決定スル目的ヲ以テセル仲裁裁判協約ノコトヲ記載セリ（同第四百二十五頁參照）

英語ニ所謂漁業（フイッシング」）ナル文字モ亦日本案カ此ノ文字ニ與ヘタル意義ニ於テ外交上ノ用語トシテ普通ニ使用セラルルモノナリ即膃肭獸ノ漁獲ヲ「シール、フイッシング」ト謂ヘリ（合衆國「フォーレン、リレーションス」千八百七十三年第一部第四百二十六頁）

日本國全權委員ハ漁業權ヲ日本國人ニ許與スヘキ地方ノ內ニ「ベーリング」海ヲ包含セシメタル唯一ノ事實ハ前記ノ各方面ニ於ケル主タル漁業カ膃肭獸其ノ他ノ海獸ノ捕獲ニ在ルカ故ニ明カニ「ポーツマス」談判委員ニ於テ哺乳動物ヲ刪除セサルノ意思ヲ有セシモノナルコトヲ示スモノナリ

日本國全權委員カ漁業ノ權利（デ、ドロア、ド、ペーシュ）ナル文字ヲ以テ充分ナル漁業權（プレーン、ドロア、ド、ペーシュ）ナル文字ニ換ヘタルコトニ關スル議論ニ就テハ日本國全權委員ハ此ノ修正ハ露西亞國ノ說明書カ之ニ附與セムトスル如キ程度ノモノニアラサルコトヲ確認スル爲會議錄第七號ヲ熟讀セレハ足ルコトヲ注意スヘシ前記ノ修正ハ漁業權ヲ或地方ニ於テ日本國臣民ニ許與セラルヘキコトヲ精確ニセムカ爲ニ他ナラサリシノミ即前記會議錄中ニ「露西亞國回答書ニ於テ露西亞國全權委員ハ露國ハ本問題ニ關シ日本國ト協定ヲ爲スノ意向ナルモ右漁業ノ權利ハ獨リ海洋ニ瀕スル沿岸ニノミ及ヒ入江及河川ニ及ハス且既存ノ權利ハ依然效力ヲ有セサルヘカラサル旨ヲ說明セリ」ト明記セル所以ナリ併ナカラ之カ爲露西亞國ハ或種ノ漁業權ヲ許與スルコトヲ約束セリトノ結果ハ決シテ生セサルナリ

「ポーツマス」ノ露西亞國全權委員ノ留保ハ專ラ入江及河川ノ問題ニ限ラレタリ故ニ前記會議錄ニ「日本國全權委員ハ敍上ノ條件ニ同意ヲ表シタルニ依リ第十二條ノ文言ハ左ノ如ク確定セラレタリ」ト確實ニ記載セラレタルナリ

第一點ヲ約言セムカ爲日本國全權委員ハ次ノ如キ宣言ヲナスヘシ

「ポーツマス」條約談判委員ハ同條約第十一條中ニ「漁業ノ權利」ナル文字ヲ挿入シタルモ決シテ之カ爲此ノ文字ノ意義ヲ制限スルノ意思ニアラサリシコト從テ此ノ文字ハ本來ノ魚類ノミナラス水產哺乳動物、無脊椎動物及植物ノ漁獲ニモ適用セラルヘシ

要スルニ日本國全權委員ハ日本國案第一條ノ第一ノ部分ヲ全部維持セムコトヲ露西亞國全權委員ニ提言スルノ光榮ヲ有ス

第二點即帝國政府カ我臣民ノ爲ニ漁業權ヲ要求スル露西亞國領水ノ範圍ニ關シテ露西亞國全權委員ハ其ノ說明書ニ於テ入江及河川ハ本協約ノ規定ヨリ除外セラルヘキコト竝日本國臣民ノ漁業權ハ日本海、「オコーツク」海及「ベーリング」海沿岸一帶ノ露西亞國領水ニ限ラルヘキコトヲ宣言セリ

日本國全權委員ハ河川及入江ノ刪除ニ關スル露西亞國全權委員ノ提議ニ對シテハ強テ爭ヘサルヘキモ次ノ意見ニ就キテ露西亞國全權委員ノ斟酌ヲ煩ハササルヘカラス

日露兩國全權委員カ「ポーツマス」條約中ニ第十一條ノ規定ヲ設ケタルハ明ニ前記諸海洋ニ瀕スル露西亞國領水ニ於テ日本國臣民ニ現實有效ナル漁業權ヲ公平ニ許與スルノ意思ヲ有シタリ日本國全權委員ハ當時ニ於ケル露西亞帝國政府ノ意思モ亦等シク此ノ如キモノナリト信セサルヲ得サルコトヲ認ムルヲ欣幸トス

茲ニ日本海、「オコーツク」海及「ベーリング」海ニ瀕スル露領沿岸ニ存スル河川及入江ヲ本漁業協約ノ規定ヨリ全然刪除スルトキハ日本國全權委員ハ本協約ノ規定ニ依リテ日本國臣民ニ許與セラルヘキ漁業ノ權利カ有名無實ノモノトナルナキカヲ懼レサルヲ得ス又入江及河川ナル文字ニ日本案カ與ヘタル如キ意義ヲ與ヘサルトキハ日本國臣民ノ漁業權ハ全然減却セラルルカ若ハ著シク減殺セラルヘシト思考ス

黑龍江方面ニ於ケル漁業ノ主タル目的ハ鮭鱒ノ如キ紅魚ノ漁獲ニ在リ從テ河川ヲ全然刪除スルトキハ日本人ノ漁業權ハ著シク制限セラルヘキヤ明ナリ入江ノ刪除ニ就テモ亦此ノ如シ現ニ自然ノ意義ニ於テ入江トハ水深淺キ小

海ヲ指セリ日本國全權委員ハ沿洋ニ瀕セル露領沿岸ノ詳細ナル地圖ヲ有セサルカ故ニ該沿岸ノ正確ナル地形ヲ確知スルヲ得スト雖該沿岸中ニハ數多ノ入江アルヘキハ想像スルヲ得ヘシ漁區ノ範圍狹少ナルトキハ該漁區ハ入江內ニ存スルコトアルヘク反之其ノ範圍廣大ナルトキハ入江ハ該漁區內ニ存スルコトアルヘシ兩者何レノ場合ニセヨ日本國競落人ノ運命ハ果シテ如何若シ入江カ日本人ノ漁業權ヲ行使シ得ル地方內ニ含マレサルトキハ其ノ權利ハ全ク有名無實トナルヘシ何トナレハ一漁區カ一入江內ニ存シ若ハ一入江カ一漁區內ニ存スル總テノ場合ニ於テ日本人ハ貸下ヲ受クルコトヲ得サレハナリ且「ポーツマス」條約第十一條ノ規定ヨリ入江ヲ刪除セシ意義ニシテ果シテ此ノ如キモノナリトスレハ漁區ヲ日本人ニ競落セシメサラムトセハ地方官廳ノ行政處分ヲ以テ足ルヘク本協約ニヨリ與ヘラルヘキ漁業權ハ全ク偶然ノモノトナルヘシ

「ポーツマス」ノ談判委員ハ漁業ノ權利カ特別協約ニヨリテ日本國臣民ニ許與セラルヘキコトヲ決定スルニ際シ該談判委員ノ意思ハ明ニ敍上ノ如キモノニアラス現實有效ナル漁業ノ權利ヲ誠實公平ニ日本國臣民ニ與ヘムトセシモノニシテ此ノ意思ヲ明證スルモノハ露西亞國臣民若ハ外國人ニ關スル既存權利ノ保護ニ注意セルコトナリ該談判委員ノ考察ニヨレハ日本國臣民ハ前記海洋ニ屬スル露西亞國領水ノ他ノ部分ニ於テ露西亞國人若ハ外國人ノ保有スル權利ト全ク同一ノ權利ヲ有セサルヘカラス從テ「ポーツマス」條約第十一條ニ於テ河川及入江ヲ刪除セル意味ハ日本案ニ示セル意味ニ於テ解釋ヲ下スヨリ他ナキナリ

日本國全權委員ハ完全ナル一致ヲ見ルニ至ラムコトヲ希ヒ交讓ノ精神ヲ證明セムコトヲ欲スルニ依リ河川ヲ漁場ノ範圍ヨリ刪除スルコトニ就テハ敢テ主張セサルヘキモ之ニ代ヘテ競賣ニ附スヘキ漁區カ入江ヲ含ミ若ハ入江內ニ存スル何レノ場合ニ於テモ之ヲ日本國臣民ニ貸下ケ得ルコトト爲サムコトヲ切ニ要求スヘシ

要スルニ日本國全權委員ハ茲ニ添付セル文書ニ付露西亞國全權委員ノ考量ヲ煩ハスノ光榮ヲ有ス

附屬書第四號

千九百六年九月三十日（十月十三日）（土曜日）ノ會議ニ於テ日本國全權委員本野閣下ノ提出ニ係ル

第一條ノ文言ニ關スル修正案

露西亞帝國政府ハ本協約ノ規定ニ依リ日本海、「オコーツク」海及「ベーリング」海ニ屬スル露西亞國領水全部ニ於テ一切ノ魚類及水產動植物ヲ捕獲、採取及製造スルノ權利ヲ日本國臣民ニ許與ス

本野閣下ヨリ露國全權委員ニ至ル書翰

（千九百六年十月二日（十五日）附）

以書翰致啓上候陳者本年九月三十日（十月十三日）（土曜日）ノ漁業協約締結會議ニ於テ口頭ヲ以テ提言スルノ光榮ヲ有シ候意見ノ摘要書ヲ茲ニ閣下ニ御送附致候就テハ漁區ニ關スル左記本員ノ質問ニ對シ成ルヘク速ニ御回答被下候ハヽ幸福ノ至ニ存候

一、日本海、「オコーツク」海及「ベーリング」海ニ於テ最近ノ露國規定ニ從ヒ現存スル漁區ノ全數如何

二、右漁區中前同ノ會議ニ於テ露國專門委員ノ說明セラレシ如ク「アンス」ナル文字ヲ「インレット」ノ意義ニ解スル場合ニ日本國臣民ニ貸下ケラレサルヘキ漁區ノ數如何

本員ハ閣下ノ御厚誼ニ對シ豫メ謝辭ヲ呈シ茲ニ重テ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具

本野一郎（記名）

「ゲバストフ」閣下

（六）日露漁業協約締結會議錄第三號

第三回會議

千九百六年十月二日（十五日）午後四時二十分開會

列席者

日本國　全權委員[illegible]日本國特命全權公使本野閣下、書記官落合氏、丸毛氏、津田氏

露西亞國　全權委員外務次官代理「ゲバストフ」閣下、專門委員「ランゴボイ」氏、「アレキセイエフ」氏、「グレアニツキー」氏、「プラジニコフ」氏、書記官「メイエンドルフ」男爵、「フオツネセンスキー」氏

陪席者

露西亞國　專門委員「グリム」氏

露西亞國全權委員ハ日本國全權委員ニ左ノ趣旨ヲ述ヘテ會議ヲ開始セリ曰ク露西亞國談判委員ハ閣下カ前回ノ會議ニ於テ本協約ノ對案第一條ニ關シテ述ヘラレタル意見竝提案ヲ熟閱シタリ吾人カ共同從事セル至難至要ノ問題ヲ最善且ニ解釋セムカ爲談判ノ進行中ニ於テ吾人ヲ指導スル原則竝吾人ヲ刺激スル善意ニ關シ閣下ノ精神ニ全然疑惑ナカラムコトヲ希望スルニ依リ一般主要ノ考量ニ關シテ簡略ナル說明ヲ爲スヘシト

次ニ書記官「メイエンドルフ」男爵ハ露西亞國全權委員ノ請求ニ應シテ要點ニ關スル說明書ヲ朗讀セリ（附屬書第一號參照）

右朗讀了ルヤ露西亞國全權委員ハ日本國全權委員ノ九月三十日（十月十三日）附最終說明書ニ關スル詳細ナル自己ノ意見書ヲ示シ（會議錄第二號附屬書第三號參照）且漁業ナル文字ノ解釋ニ關スル日本國ノ主張ヲ容サムコトヲ努メ日本國全權委員カ曩ニ引用セシ同一ノ科學上ノ著書ヲ採用シテ之ヲ駁セリ「入江」ナル文字ニ關シテハ「ゲバストフ」氏ハ下調委員會ヲ構成シテ之ニ其ノ定義ノ決定ヲ委任セムコトヲ提議セリ（附屬書第二號參照）

日本國全權委員ハ右朗讀セラレタル文書カ熟閱ヲ要スル迄ニ極テ重要ナル諸點ヲ包含スルコトヲ宣言シ且其ノ寫ノ交付ヲ要請セリ

本野氏ハ右寫ノ交付ヲ受ケタル後直ニ「インレット」ナル文字ハ「アンス」ナル文字ト均シク不正確ノ文字タルヲ失ハスト思考セラルルコト竝漁業ヲ許可スル地方ト之ヲ許可セサル地方トヲ決定スルニ付此ノ文字ヲ以テ滿足スルヲ得サル旨ヲ宣言セリ尙日本國全權委員ハ「入江」ナル文字ノ意義ニ相當スル沿岸地方ノ目錄ヲ共同決定スルノ任務ヲ有スル下調委員ヲ任命セムトスル露西亞國全權委員ノ提言ニ同意スルヲ得ス日本國全權委員ノ意見トシテハ斷ル事業ニ入ルニ先チ第一ニ此ノ文字ノ意義ヲ確定スルヲ絕對的必要トナスカ故ニ若モ下調委員會カ入江ナル文字ノ意義ヲ確定スルヲ以テ其ノ任務ト爲スニ於テハ前記委員ヲ任命セムトスル意見ニ同意スヘシ「漁業權」ナル文字ノ意義ニ關シテハ日本國全權委員ハ露西亞國全權委員ノ說明セル見解ニ同意ヲ表スルコト能ハサルヲ遺憾トスルモノナリ今ハ單ニ自己ノ觀察ヲ陳述スルニ止メ後日更ニ其ノ詳細ニ亙テ述フル所アルヘシ

露西亞國全權委員ハ下調委員會ノ構成ニ同意セシコトニ關シ日本國全權委員ニ陳謝シ該委員會ノ目的ヲ「入江」ナル文字ノ意義ノ確定ニ限ルコトニ關シテハ異議ナキ旨ヲ宣言シ且委員トシテ「ブラジニコフ」氏及「グレアニツキー」氏ヲ指名セリ

日本國全權委員ハ露西亞國全權委員ノ宣言書ヲ受領シ落合氏及丸毛氏ヲ推薦シ該下調委員會ノ事業ハ兩國全權委員ノ承認ヲ經サルヘカラサル旨ヲ附言セリ

午後五時散會

本野一郎（記名）

「セー、ゲバストフ」（記名）

附屬書第一號

千九百六年十月十二日（二十五日）（木曜日）ノ會議ニ於テ露西亞國全權委員「ゲバストフ」閣下ノ提出ニ係ル要點ニ關スル說明書

露西亞國全權委員ハ爾後ノ交涉ヲ繼續スル前ニ前記交涉ノ一般的性質ニ關スル帝國政府ノ見解竝露國ノ對案カ認ムル讓與ノ眞價ヲ日本國全權委員ニ說明スルヲ以テ有效ナル結果ニ到達スルカ爲ニ缺クヘカラサルコトナリト思考セリ首府ヨリ遠隔セル未開ノ領土ニ關スル合理的政策ノ唯一ノ基礎ハ沿岸ノ不充分ナルカ爲ニ其ノ運命ヲ左右セラルルコトナキ國民分子ノ廣汎雜然タル移住ヲ爲スニ在リ然ルニ地方ノ事情ヨリシテ極東ノ露國領土ニ於ケル移住民ハ海洋ノ自然ノ富ニ其ノ富源ヲ求メサルヘカラス該僻陬ノ諸部割讓以來殊ニ沿岸ニ於ケル漁業權ノ問題ハ日本國カ自國臣民ニ留保セラレタル特種ノ權利ノ限界ハ何程ナルカヲ精確ニ規定スルコト必要ト爲リタルニ依リ日本ノ爲ニハ專ラ專門的利益ノ圈內ニ含マルルニ至レリ然ルニ露國ニ於テハ之ト異リ此ノ問題ハ實ニ死活ノ問題ニシテ其ノ解決如何ハ極東ニ於ケル露國ノ全領土ニ影響ヲ及スヘキモノナルカ故ニ國家ノ利益ヨリ打算シテ太平洋ニ瀕スル露領沿岸ノ移住ニ付障害トナルヘキ規定ハ露國ニ於テ之ニ承諾ヲ與フルヲ得サルハ明ナルコトナリ敍上ノ根帶的目的ヲ達スルカ爲帝國政府ハ露國領水ニ於テ或種ノ條件ノ下ニ漁業ニ從事スルノ權利ヲ日本國ニ附與シタル「ポーツマス」條約第十一條ノ規定ニ基ク日本國ニ對スル露國ノ義務ヲ充分ニ認メタリ

帝國政府ハ其ノ對案ニ於テ協約上ノ權利ヲ享受スルカ爲ニ日本國漁民ニ實際上必要ナル讓與ハ充分之ヲ考量シタリト雖露西亞帝國ノ死活ニ關スル利益ヲ保護スル爲ニハ「ポーツマス」條約ニ於テ露西亞國全權委員ノ加ヘタル制限ノ如何ニ拘ラス該利益ヲ減殺スルヲ得サルナリ

漁業ノ實際的必要竝ニ「ポーツマス」條約第十一條ノ文言ノ明確ナル解釋ニ從ヒ帝國政府ハ既ニ次ノ如キ種種ノ讓與ヲ提供セリ

一、太平洋沿岸ニ於ケル漁業カ特別事情ヲ有スルニ依リ露西亞國ハ沿岸ノ土地ヲ漁區トシテ貸下ケ受クル權利ヲ日本國臣民ニ與ヘムトセリ此ノ權利ハ講和條約第十一條ノ豫見セサル所ニシテ現存セル何レノ漁業協約中ニモ絕テ其ノ規定ヲ見サル權利ナリ千九百四年ノ英佛

移民協商ニ於テモ灣及港内ニ避難スルノ權利ヲ「ニユー、フアウンドランド」ニ在ル佛國臣民ニ讓與セルノミ

二、前記漁區ニ於テ魚類ヲ製造シ倉庫ヲ築造スルノ權利ヲ日本國臣民ニ與ヘタリ此ノ事實ハ既ニ露國ノ政治上ノ利益ニ直接ノ損害ヲ與ヘタルモノナリ

三、帝國政府ハ日本國漁民ニ魚類ノ漁獲權ヲ與ヘタルノミナラス漁業（「ペーシユ」）ナル文字ノ本來ノ意義如何ニ拘ラス水中無脊椎動物及水藻類ヲ漁獲スルノ權利ヲモ認メタリ

四、日本國漁民ハ露國領水ニ於テ漁區ノ貸下ヲ受ケタル露西亞國漁民ト同樣ノ權利ヲ與ヘラルヘシ是「ポーツマス」條約第十一條ニ於テモ亦其ノ會議錄第七號ニ於テモ豫見セサリシ所ノモノナリ

五、本協約ノ有效期限滿了以前ニ太平洋ニ瀕スル露領沿岸ニ於ケル沿岸航行權ノ現狀ニ變更ヲ來シタル場合ノ爲帝國政府ハ極テ輕キ條件ノ下ニ其ノ產業ニ關スル一切ノ目的ニ於テ同一企業者ニ屬スル漁區間ニ交通ヲナスノ權利ヲ日本國臣民ノ爲ニ維持セムコトヲ確保セリ

其ノ他輸出稅ノ免除、勞働者ノ國籍制限ニ關スル法律ノ廢止及漁業ニ關スル一切ノ新法令ハ之ヲ日本國貿易事務官ニ通報スル等稍細目ニ涉ル讓與ノ多クハ特ニ茲ニ揭クルヲ煩ト爲スノミ

六、帝國政府ハ本協約ノ規定以外ニ在ル地帶ニ於テモ魚類ヲ購買スル權利及漁獲物ヲ製造スル爲漁區トシテ土地ノ貸下ヲ受クル權利ヲ日本國臣民ニ與フル規則ヲ制定スル考ナリ

七、最後ニ將來ニ於ケル誤解ヲ避クル爲爾後漁業ニ關スル主義ノ問題ハ地方行政官廳ノ判斷ニ任スルコトナク總テ中央政府ノ詮議ヲ經ヘキモノト決定セリ然レトモ帝國政府ハ日本案ノ豫見セル如ク漁業ノ範圍及目的ニ一切制限ヲ加ヘスシテ日本國臣民カ漁業ニ從事スルコトヲ認ムルヲ得ス且露西亞國漁民及移住民カ享受スル一切ノ權利ヲ日本國臣民ニ擴張シ又ハ前記一般的理由ノ爲ニ露領沿岸ニ於ケル沿岸航海權ヲ日本國臣民ニ讓與スルコトニ同意スルヲ得ス帝國政府ハ切ニ日露兩國相互ノ利益ニ鑑ミ且成ルヘク速ニ落著セムコトヲ希望セリ

上述スル所ニ依リ日本國全權委員ハ露國對案ノ一般的性質竝帝國政府カ極テ重要ナル本談判ニ適用セサルヘカラスト思考スル原則ニ關シ容易ニ正確ナル觀念ヲ得ラルナラム是即本談判ノ當初ニ於テ帝國政府カ一切ノ讓步竝全然讓步シ得サル點ヲ成ルヘク明瞭ニ且腹藏ナク陳示スルヲ必要トセシ所以ナリ

帝國政府ハ其ノ讓步シ得ル最大限度ヲ腹藏ナク提示シタル以上ハ露西亞國ノ對案ハ交涉ノ進行中ニ起レル適當ナル考察ニヨリ根本問題ヲ變更スルコトナク以テ一層深キ調査ノ目的タルニ至ルヘキコトヲ注意セムト欲ス

帝國政府ハ本年九月二十三日交付セシ露國案竝說明書ノ基礎タル「ポーツマス」條約第十一條ノ確立セル原則ヲ超越セサル鞏固ナル意思ヲ有スルコトヲ再確言スヘシ前記說明書ハ次ノ如ク認メラレタルモノナリ

一、露西亞國ハ日本國ニ或種ノ漁業權（セルテーン、ドロア、ド、ペーシユ）ヲ讓與スルコトヲ約セリ右讓與スヘキ漁業權ノ種類ハ特別ノ協定ニ依リテ之ヲ決定スヘキモ充分ナル權利（プレーン、ドロア）即露西亞國臣民ト同等ノ權利ハ到底之ヲ讓與スルヲ得ス

二、露西亞國ハ或海洋ニ瀕スル沿岸ニ於テ漁業ノ權利ヲ日本國ニ讓與スルコトヲ約スルモ入江及河川ハ之ヲ右讓與ノ目的以外ニ置クヘシ

附屬書第二號

千九百六年十月（二十五日十二日）（木曜日）ノ會議ニ於テ露西亞國全權委員「ゲベストフ」閣下カ「同年（十月十三日九月三十日）附日本國全權委員ノ意見書」ニ對シ爲シタル答辯書

第一條

漁業協約第一條ノ新規ノ文言竝本年十月二日（十五日）附日本國全權委員ノ提案ニ係ル覺書附屬ノ意見ヨリ生スル結果ヲ見ルニ前記各種ノ新條件ト露西亞國ノ提案トノ差異ハ次ノ二點ニ存セリ

一、本協約ノ效力ヲ及ホス地域

二、漁業ナル文字ノ解釋

第一ノ點ニ關シテハ露西亞國委員ハ本協約ノ效力ノ及フヘキ限界ハ「ポーツマス」條約ニ依リテ既ニ確定セラレシモノナルコトニ付重テ注意ヲ喚起スヘシ即其ノ第十一條ニ基キ入江及河川ヲ除キ日本海、「オホーツク」海及「ベーリング」海ニ瀕スル露西亞國領水ニ於ケル漁業權ヲ日本國臣民ニ許與スルコトヲ約シタルモノナルコト之ナリ

吾人ハ此ノ機會ニ際シ日本國政府カ本年五月十九日（六月一日）ノ覺書ニ依リ極テ近頃吾人ト全ク同一ノ見解ナリシコトヲ立證シ得ルヲ光榮トス即深ク該文書ノ內容ニ立入ルコトナク單ニ次ノ引證ヲ爲スニ止ムヘシ

「リマン」ノ漁區ハ講和條約ノ豫見セル協約ノ目的タルヘキ漁區中ニ包含セラルヘシ但シ前記漁區ハ海洋ニ瀕スル沿岸ニ限リ前記條約ニ依リテ刪除セラレタル入江及河川ニ及ハス

加之日本ノ意見書ハ法律學上ノ根據ヲ缺クカ故ニ「ポーツマス」條約第十一條ニ就テ下シ得ヘキ唯一ノ解釋即入江及河川ヲ刪除スルコトノ解釋ヲモ變更スルニ足ルヘキ根據ヲ有セス

日本國全權委員ハ（本年十月（十五日二日）ノ覺書ニ附屬セル）其ノ意見書ニ於テ露國說明書ノ議論ノ根據アルコトヲ認ムルト共ニ入江及河川ニ協約ノ效力ヲ及ホササルトキハ日本國臣民ノ權利ヲ有名無實ノモノト爲スカ若ハ著シク之ヲ減殺スヘシト述ヘ日本ノ回答書ハ「ポーツマス」談判ノ委員ノ意思カ確ニ斯ノ如キモノニアラサリシナラムト謂ヘリ

吾人ハ左ノ事項ニ關シ注意ヲ喚起セサルヘカラス

本協約ノ效力ヲ入江ニ及ホササルカ爲日本國臣民カ協約上ノ權利ヲ行使スルニ付何等ノ障害ヲ來スコトナシ現ニ薩哈嗹ノ南部ニ於テハ全然入江ナルモノナク其ノ沿岸ハ全ク屈曲ナキニモ拘ラス漁業ハ充分繁榮ヲ極メツツアリ「ポーツマス」ニ於ケル露西亞國全權委員ノ意思如何ニ關シテハ我政府現在ノ見解ト絕對的同一ニシテ我國固有ノ漁業竝移住ヲ保障スル範圍ニ於テ日本國臣民ニ漁業ノ權利ヲ認メタルニ過キス「ポーツマス」ニ於ケル露西亞國全權委員ハ敍上ノ考慮ニ基キ協約ノ效力ヲ入江及河川ニ及ホサス且日本國全權委員カ用ヰタル「充分ナル漁業權」（「プレーン、ドロア、ド、ペーシユ」）ナル文字ヲ修正シテ「漁業ノ權利」（「デ、ドロア、ド、ペーシユ」）ナル文字ニ改メ確定會議錄ニ於テ之ヲ採用スルコトトナリシハ明ナルコトナリ以上ノ事實ハ「ポーツマス」ニ於テ露西亞國政府カ日本國ノ要求セシ權利ヲ之ニ讓與セストノ確乎タル意思ヲ有シタルコトヲ示スモノナリ

入江ト漁區トノ符合ヲ口實トシテ露西亞國地方官憲カ日本國ノ競落人ヲ除斥スルコトナキカヲ虞ルル旨日本ノ意見書中ニ言明セラレタルモ是ハ要スルニ根據ナキコトナリ近ク法律ニ規定セラルヘキ規則ニ從ヘハ實際上水上漁區ノ正式ナル範圍ハ入江ヲ包括スルニ足ラス其ノ結果漁區ハ入江ヨリモ小ナルカ故ニ入江カ漁區内ニ包括セラルルコトハ有リ得サルコトナルヘク入江外ニ存スル漁區ハ一切日本國臣民ニ競買シ得ヘク入江内ニ存スル漁區ハ露西亞國臣民ノ爲ニ留保セラルヘシ

以上述フル所ニ依リ「ポーツマス」條約ノ確立セル入江及河川ニ協約ノ效力ヲ及ホサストノ原則ハ變更ヲ加フルヲ得ス從テ現ニ進行中ノ談判ニ於テ討議ノ目的タルヘカラサルモノト信ス按スルニ吾人ノ目的トスル所ハ「ポーツマス」條約ノ修正ニアラス何トナレハ是吾人ノ委任ヲ超越スルモノナレハナリ併ナカラ入江ナル文字ヲ水深キ小灣ト解スルカ爲生スル結果ヲ日本國ノ爲ニ輕減スルコトヲ希望スルニ依リ明確ナル露國ノ權利カ損害ヲ蒙ルニモ拘ラス「ポーツマス」會議錄ノ英文中ニ用ヰタル「インレット」ナル文字ノ意義ヲ佛語ノ「アンス」ナル文字ニ與ヘムコトヲ提議スヘシ斯クスルトキハ公平ノ處置ニ於テ兩國ノ利益ヲ確保スルト共ニ日本國臣民ニ一層有利ナル條件ノ下ニ其ノ協約上ノ權利ヲ實行セシムルコトヲ得ヘク吾人ノ切ニ希望スルカ如ク紛議ナク全部ノ協約ヲ遂クルニ付最良ノ方法タルヲ失ハサルヘシ「インレット」ノ意義ハ例ヘハ「ポッシエート」灣、「聖オルガ」灣、「イムペリアル」灣、「ド、カストリー」灣、「アヴァチンスキー」、「インレット」ノ如ク陸地ニ嵌入シ稍閉塞セル灣陸地間ニ横ハレル狹隘ノ海峽ヲ謂フ

入江（「アンス」）ナル文字ヲ英語ノ「インレット」ノ如ク適用スルニ就テ生スルコトアルヘキ將來ノ誤解ヲ避ケムカ爲本協約ノ效力ヲ及ホササルヘキ入江（「インレット」）ノ意義ニ相當スル沿岸各方面ノ目錄ヲ今日ニ於テ共同作成セムコトヲ日本國全權委員ニ提議セサルヘカラスト思考ス

吾人ノ見解ニ依レハ日露兩國ヨリ委員ヲ任命シテ下調委員會ヲ組織シ之ニ該事業ヲ委任スルヲ適當トスヘシ該下調委員會ノ作成ニ係ル草案ヲ確定認可スルノ權能ハ兩國全權委員ニ屬スヘキモノトス

前記事業ニ必要ナル材料タルヘキ該沿岸地方ノ英文航海地圖ハ露西亞國全權委員ニ於テ提供シ得ヘシ但シ前記地圖ハ當該沿岸ノ全部ヲ含マス從テ「アイアンス」灣ヨリ「チケイユ」河口ニ至ル「オコーツク」海沿岸及「カムチヤツトカ」岬以北ノ「ベーリング」海沿岸ハ未タ充分ナル探險ヲ經サルニ依リ此ノ地方ニ關スル地圖ハ該目錄ヲ作成スルニ付提供スルヲ得サルカ故ニ該方面ニ關シテハ原則トシテ入江ナル文字ノ解釋ヲ確立スルニ止メサルヘカラス而シテ時ヲ經テ該沿岸地方ニ關スル探險ノ進捗スルニ從ヒ前記ノ處置ヲ以テ入江ノ目錄ヲ作成スルヲ得ヘシ

右ハ即本協約ノ效力ヲ及ホスヘキ地域ニ關スル確乎タル吾人ノ見解ナリ

第二ノ點即漁業ナル文字ノ意義ニ就テノ爭點ニ關シテハ左ノ如ク陳述スルニ止ムヘシ

本年十月十二／二十五日ノ覺書ニ附屬セル日本國ノ意見書ニ於テ述ヘラレシ如ク「漁業」（ペーシュ）ナル文字ハ外交上及國際上ノ用語トシテ一般ニ魚類ノ漁獲ノミナラス一切ノ水產動植物ノ漁獲ヲモ意味セリトノ意見ニ同意スルヲ得サルヲ遺憾トス右反對ノ意見ヲ確實ニスルカ爲ニハ露國說明書ニ對シテ日本國全權委員ノ論據トセシ「ラ、フォンテーヌ」、諸氏「ペジクリジー」、アンテルナショナール」（「ベルン」、千九百二年）ヲ熟閱スルヲ以テ足レリトス即其ノ第六百十八頁第百六十六章（千九百年九月八日）膃肭獸ノ捕獲ニ從事セル米國「スクーナー」形帆船及捕鯨船拿捕ノ辯難ヲ目的トスル仲裁裁判問題ニ於テ膃肭獸ノ獵獲（「シャッス、オー、フォク、ア、フーリュール」）ナル文字ヲ用井タリ從テ「漁業」（ペーシュ）ナル文字ハ外交上ノ用語ニ於テ各種ノ水中動物ノ捕獲ニハ之ヲ使用セス而シテ外交上ノ用語ニ於テモ此ノ分類ヲ排斥スルコトナキナリ

露西亞國政府ハ數次漁業ニ關スル交涉ヲナセシモ常ニ「魚類ノ漁獲」（「ペーシュ、デ、ポアツソン」）ト「鯨族ノ捕獲」（「カプチュール、デ、セタセ」）トヲ區別セリ外觀上日本國政府ハ少クトモ農商務省ノ公刊書（東京、千九百年）ニ於テ從來同一ノ區別ヲナセリ例ヘハ同書中ニ膃虎及膃肭獸ノ獵獲（「ラ、シャッス、ア、ラ、ルートル、エ、オ、フォーク」）ト題スル特別ノ一章（第八十七頁）アリ

國際法（「プラジエー、フォデレー」歐米國際公法詳論、巴里、千八百九十一年、海事關係ノ節、第五卷第二千四百四十四頁參照）ハ小漁業（即沿岸漁業）ト大漁業トヲ區別シ海岸ニ沿テ實行セラルル沿岸漁業ノ目的物ハ魚類ニシテ大漁業ノ目的物ハ鯨其ノ他ノ鯨族ナリトセリ右區別ノ結果「ポーツマス」條約第十一條ニ從ヒ日本國臣民ニ許與セラルヘキ漁業ハ沿岸漁業ニ限ラレ從テ哺乳動物ノ捕獲ヲ含マサルモノトス

日本ノ意見書ノ主張ニ據レハ「ベーリング」海ニ於テ漁業權ノ讓與ヲ與ヘタル事實ハ即所謂該沿岸ノ主タル富ヲ形成スヘキ哺乳動物ノ捕獲ヲ含ムモノナリト爲スト雖實際上露國カ斯ル讓與ヲ爲スコト能ハサルハ現ニ膃肭獸及海獺ノ獵獲ハ露西亞國臣民ニモ均シク禁止セル所ノモノナルコトニ茲ニ注意セムト欲ス

以上陳述セシ所ニ依リ露西亞國政府ハ日本國政府カ漁業ナル文字ニ餘リニ廣キ意義ヲ與ヘタル傾向アル事實竝最正鵠ヲ得タル此ノ文字ノ解釋ハ露國說明書ノ採用セシ博言學上及歷史上其ノ他ノ論據ニ基ク科學的解釋ナルコトヲ當然主張スヘシ

敍上ノ如ク日本國臣民ノ利益ノ爲ニ「入江」ナル文字ニ就テハ制限セル解釋ヲ採リタルモ「漁業」ナル文字ニ關シテハ露西亞國全權委員ハ前記ノ如ク論理上ノ解釋ヲ維持セムト欲ス而シテ此ノ條件ノミニテ「入江」ナル文字ニ關スル露國ノ讓與ハ充分報償セラレタリト思考スルニ依リ日本國全權委員ニ於テモ亦「漁業」ナル文字ニ付自己ノ解釋ヲ拋棄セラレムコトヲ提言ス其ノ對價トシテ露西亞國全權委員ハ佛語ノ「アンス」ナル文字ニ英語ノ「インレット」ナル文字ノ意義ヲ與フルコトニ同意スヘシ

（七）日本國公使ヨリ露國外務大臣ニ呈シタル覺書（千九百六年十一月十一／二十四日附日本國公使館）

日本國公使ハ日露兩國間ニ漁業協約締結ノ爲開催セラレタル談判カ同協約草案第一條ノ規定ニ關シ日露兩國全權委員ノ間ニ意見ヲ異ニスルモノアルニ依リ妥フ可キ決議ヲ見ルニ到リシコトヲ言明セサルヲ得サルヲ遺憾トス蓋シ本協約草案第一條ハ太平洋岸ニ瀕スル露國領水內ニ於テ日本國臣民ノ爲ニ許與セラル可キ漁業權ノ原則ヲ規定セルモノナルカ故ニ本協約ノ大本ヲ爲スモノナリト認メサル可ラサルヲ以テナリ

兩國全權委員ノ意見ヲ異ニスル所ハ即チ左ノ二點ニ在リ

一、漁業ノ目的タリ得可キ水產物ニ關スルコト

二、日本人ノ漁業權ヲ行使シ得可キ方面ニ關スルコト

第一、右第一點ニ關シテハ日本國草案ハ「ポーツマス」條約ニ基キ其ノ第一條ニ於テ一切ノ魚類竝水產物ハ共ニ皆日本國臣民ノ漁業權ノ目的タリ得可キコトヲ記載セリ然ルニ之ニ對スル露國草案ハ該解釋ヲ否認シ該漁業權ヲ以テ唯單ニ魚類、海產無脊椎動物及海藻ノ漁獲ノミニ限定セリ

第二、其ノ第二點ニ關シテハ日本國草案ハ「ポーツマス」條約竝同會議錄第七號制定ノ際口頭交換セラレタル聲明ニ據リ單ニ土民ノ爲ニ留保セラルル河川竝入江ノミヲ除外シ得ルモノト信シタリ然ルニ之ニ對スル露國草案ハ入江竝河川ニ關シ何等規定ナキ同條約第十一條ニ依ラスシテ同會議錄第七號ノ字句ヲ根據トシ本協約ヨリ入江及河川ヲ全然除去シタリ

日本國公使ハ露國カ絕東ニ於テ土民及移住民ノ保護ニ關シテ多大ノ利害關係ヲ有スルコトヲ充分ニ承認シ之ト均シク又日本國カ太平洋ニ瀕スル露國沿岸ニ於テ其ノ自國ノ漁業權ヲ保護セサルヘカラサル利害關係ヲ考察ス蓋シ是本讓與ハ「ポーツマス」條約要件中ノ一ニ屬スルカ故ニシテ日本國全權委員ハ「ポーツマス」條約第十一條ヲシテ決シテ之ヲ死文ニ歸セシムルコトヲ承認スル能ハス

日本國全權委員ハ兩國ノ利益ヲシテ調和セシメムカ爲十月十三日（九月三十日）ノ會議ニ於テ將來ニ於ケル一切紛議ノ原因ヲ芟除シ相互ノ利益ヲ確保スルニ適當ナルモノト認メタル修正案ヲ提出シタリ

露國全權委員ハ該修正案ニ對シ絕對ニ之ヲ否認シ而シテ更ニ「入江」ナル文字ニ關シ本來本文字ハ灣入淺キ小灣ヲ指示スルモノナルニ拘ハラス「ポシエット」及「オルガ」ノ如キ竝「インペラトルスカヤ」灣、「デカストリー」灣、「アバチンスキー」入江ノ如キ大灣ヲモ尙之ヲ包含セシメ得ヘキモノナリトノ解釋ヲ提出シタリ

然レトモ斯ノ如キ解釋ハ決シテ之ヲ承認スルコト能ハス蓋シ是若該解釋ヲ承認セムカ「ポーツマス」條約調印者ノ全ク豫見セサリシ結果ニ到達ス可キヲ以テナリ即該解釋ニ依ルトキハ薩哈嗹島黑龍江口間ニ於ケル黑龍江海灣（リマン）ノ漁業ハ除外セラレサルヘカラサルコトヲ承認セサルヘカラサルヲ以テナリ斯ノ如キ結果ハ絕對ニ承認シ得ヘキコトニアラストス

「入江」ナル文字ニ關シ正當公平ナル定義ヲ下サムカ爲材料蒐集ノ目的ヲ以テ一ノ下調委員會ノ設立ヲ見ルニ到リシト雖日本國公使ハ若露國委員ニシテ依然其ノ主張ヲ維持スルニ於テハ滿足ナル效果ヲ納ムルコト能ハサルヘキヲ憂慮シ而シテ尙「入江」ナル文字ニ關シ如何ナル定義ヲ下スニセヨ衝突ハ常ニ免レ得ヘカラサルコトヲ附言スヘシ蓋シ其ノ確定セラレタル定義ニ該當スヘキ入江トハ果シテ何ソヤヲ絕對確實ニ定ムルハ假令之ヲ以テ不可能事ニアラストスルモ至難ノ事ニ屬スルヲ以テナリ是即日本國公使ノ入江ナル文字ノ解釋ニ關シ將來ニ於テ紛議ノ生セムコトヲ憂慮スル所以ナリ

是時ニ際シ二箇ノ解決方法アリ左ノ如シ

一、大小一切ノ灣又ハ入江ニ於ケル漁業ヲ禁止スルコト

二、河川ヲ除クノ外全領水ニ於ケル入江ヲ除外セスシテ漁業ヲ許可スルコト

若夫レ右第一ノ解決方法ヲ承認ストセハ是實ニ「ポーツマス」講和條約ヲ以テ約束セラレタル漁業ノ權利ヲ日本人ヨリ除去スルモノナリ何トナレハ若入江ニシテ或程度ノ大サヲ有スルトキハ入江ノ中ニ漁區ヲ包容セシメ若又入江ニシテ狹小ナルトキハ漁區ノ中ニ入江ヲ包含セシムルハ常ニ是露國官憲ノ隨意ニ屬ス可キヲ以テナリ

日本國全權委員ハ斯ノ如キコトヲ以テ「ポーツマス」條約調印者ノ意思ナリト信スル能ハス蓋シ該調印者ハ確實有效ナル漁業權ヲ誠實公平ニ日本國臣民ノ爲ニ許與セムコトヲ欲シタリシハ毫モ疑ナキ所ナルヲ以テナリ

是ヲ以テ日本國全權委員ハ第二ノ解決方法ヲ以テ兩國ノ利益ヲ調和シ同時ニ「入江」ナル文字ノ解釋ニ關シ一切ノ紛議ヲ解決スヘキ最實際的ナル唯一ノ方法ト思考シタリ蓋シ是某々ノ入江ニシテ若移住民ノ利益ノ爲又ハ土民ノ保護ノ爲ニ競賣人ニ對シ漁區トシテ之ヲ交附スル能ハサル場合ニ於テハ競賣區ハ之ヲ何レノ方面ニ設定スヘキカハ露國官憲ノ隨意ニ屬シ漁業者タル日本國臣民竝露國臣民ニ對シ其ノ漁場ヨリ之ヲ除外スルニ何等ノ障礙ナカルヘキヲ以テナリ

移住民ノ利益ハ日本國全權委員ノ十月十三日（九月三十日）ノ會議ニ於テ提出シタル記錄ニ依リ完全ニ保護セラル該記錄ハ又同時ニ將來ニ於テ發生スヘキ一切ノ紛議ヲ芟除スルノ利益アリ

漁業ノ目的タリ得ヘキ水產物ニ關シテハ日本國全權委員ハ魚類及其ノ他ノ水產物ハ均シク漁業權ノ目的タリ得ヘキモノニシテ二者ノ間ニハ何等ノ差別ヲ設クヘキモノニアラサルコトヲ絕對ニ信シタリ然ルニ露國全權委員ハ漁業ヲ大小二種ニ區別シ而シテ日本國臣民ニ對シテハ小漁業ノ權利ノミヲ許與セムト欲スルモノノ如シ然レトモ「ポーツマス」條約ハ漁業ノ大小二種間ニ何等ノ差別ヲ設ケスシテ概括シテ漁業權ヲ日本國臣民ニ許與セラルヘキコトヲ言明ス

敍上ノ議論ハ兎ニ角日本國全權委員ハ妥協ノ成立ノ爲ニ本國政府ニ對シ其ノ主張ヲ固持セサルヘキコト竝日本人ノ爲ニ漁獲ノ許可セラルヘキ魚類以外ノ水產物ヲ列擧方法ニ依リ定ムヘキコトヲ建言セムト欲スルモノナリ故ニ日本國全權委員ハ若露國政府ニシテ其ノ自國臣民ニ對スルカ如ク日本國臣民ニ對シテモ亦鯨ノ漁獲ヲ許可スルノ底意ニ出テタリシナラムニハ膃肭獸又ハ海豹ノ漁獲ヲ主張セサリシナルヘシ

日本國公使ハ戰後ニ於ケル諸種ノ懸案ノ滿足ナル解決カ兩國相互ノ權利及利益ノ保護ノ爲ニ關

國間ニ誠實親睦ナル協商ヲ成立セシムルニ到ルヘキモノナルコトヲ深ク信スルヲ以テ若外務大臣閣下ニシテ本漁業協約ノ談判ニ關シ日露兩國全權委員ノ間ニ生シタル紛議ノ解決ニ盡瘁セラルルニ於テハ深ク閣下ニ感謝スル所ナリ絶東ニ於ケル兩國將來ノ政略ニ關シ本談判不調ノ及ス可キ懸ム可キ結果ニ關シテハ深ク主張スルニ及ハサルヘシ

（八）露國外務大臣ヨリ日本國公使ニ至ル同答覺書（千九百六年十一月（十二日／二十五日）附第一六二〇號露國外務省第一局）

十月二十五日附ヲ以テ日本國公使ヨリ通牒セラレタル覺書ニ依リテ考察スルニ兩國全權委員ノ意見ノ岐ルル所ハ即左ノ二點ニ在リ

一、漁業ノ目的トナル水産物ニ關スルコト

露國ノ談判委員ハ漁業中ヨリ哺乳動物ヲ除外セムトスルノ意見ナリシナリ日本國談判委員ハ原則トシテ魚類ト其ノ他ノ水産物トノ間ニ區別ヲ設クルニ反對スト雖魚類以外ノ水産物ニシテ其ノ漁獲ヲ許可セラルヘキモノヲ列擧方法ニ依リ定メムトスルモノナルコトヲ聲明セリ

露國政府ハ該聲明ニ同意シ而シテ一定哺乳動物漁獲ノ問題ハ後日ニ至リ意見交換ノ目的ト爲シ得ヘキコトヲ承認ス

二、紛議ノ第二點ハ日本人ノ漁業權ヲ行使シ得ヘキ方面ニ關スル問題ナリ

本紛議ハ最重要ノモノニ屬シ「ポーツマス」條約第十一條竝同會議錄第七號ノ明文自體ヲ以テ除外セラレサルヘカラサルモノノ如ク見ユ

然レトモ同會議錄中ニ使用セラルル佛語ノ「入江」ナル文字ハ少シク明確ヲ缺ク所アルヲ認ム事實海岸ハ總テ其ノ自然ノ構成ニ基キ各入江間岬角ヲ以テ間隔セラレタル入江ノ一帶ヲ以テ形成セラルルモノナリ故ニ「ポーツマス」條約第十一條竝同會議錄第七號ヲ嚴格ニ解釋スルトキハ條約ニ基ク日本國ノ權利ハ殆ムト有名無實ノモノタルニ至ルヘシ此ノ事實ハ本談判ノ開始ニ先ツ久シキ以前ヨリ既ニ我等ノ注意ヲ喚起シタリシ所ニシテ而シテ我等ハ日露兩國ノ間ニ妥協ノ成立ヲ欲シ「ポーツマス」條約ノ附與シタル入江除外ノ權利ヲ固執セス却テ各種ノ入江ニ付キ一ノ區別ヲ認メ以テ露國重要ノ利益ニ背反スル譲與ヲモ爲サムコトヲ斷シタリ該區別ハ我等ノ意見ニ依レハ既成地圖上ノ材料ニ基キ下調委員會ヲシテ之ヲ審査セシムヘキ業務ニシテ該下調委員會ノ成立ハ即日本人ノ爲ニ貸下ケラルヘキ方面ニ關シ妥協ノ端ヲ開クナルヘシ

故ニ吾人ハ下調委員會ノ業務ノ效果ニ關シテハ日本國公使ノ如ク憂惧ノ念ヲ懐ク能ハスシテ却テ吾人ハ該下調委員會ノ事業カ頗好ナル效果ヲ奏ス可キコトヲ切ニ期待スルモノナリ

敍上ノ意見ヲ有スルモノナルカ故ニ本協約ノ進行ニ關スル我等ノ提案ハ其ノ終局ニ對シテ重大ナル障礙ヲ爲スカ如キモノニアラスト信ス

黑龍江海灣（リマン）ノ問題ニ關シテハ我等ハ之ヲ以テ「入江」ナル文字ノ解釋ト何等關係アルモノナルヲ認メス我等ノ意見ニ依レハ本問題ハ「河川（フルーヴ）」ナル文字ノ正確ナル意義ト關聯シテ考察セラルヘキモノナリ

日本國全權委員ハ將來某々ノ場所カ「入江（アンス）」ナル文字ノ正確ナル定義ニ該當スルヤ否ヤヲ決スルノ不可能ヨリ地方行政官署トノ紛爭ヲ來サムコトヲ疑惧シ之ヲ防止セムカ爲ニ本協約ヨリ總テ入江ヲ除外セムコトヲ提案スト雖吾人ノ意見ニ依レハ下調委員會ニ於テ實地區域ヲ制定スルニ於テハ各場所ニ關スル一切ノ紛議ヲ解決シ該洲國ノ希望スル妥協ヲ誘致スルノ好機ヲ提供スヘキコトヲ茲ニ重テ言明スルモノナリ

（九）「入江（アンス）」ノ定義ニ關スル下調委員會第一回會議

千九百六年十一月（十七日／三十日）開會

「アンス」ナル語ノ定義ニ關スル露國委員ノ意見

「アンス」ナル語ハ其ノ固有ノ意義ニ於テハ一種ノ古瓶ノ柄ヲ指稱ス

之ヨリ延テ「アンス」ナル語ハ地理學上ノ語トシテ「深サノ大ナラサル小灣」（即陸地ニ彎入スルコト深カラサル小灣）ヲ意味スルニ至レリ

此ノ語ノ更ニ精確ニシテ且正當ナル意義ハ地理學上ノ典籍ノ精細ナル調査ニ依リテ之ヲ知ルコトヲ得ヘシ

此ノ調査ノ結果ニ依ルトキハ「アンス」ナル語ハ地理學上ノ用語トシテハ全然明白ナル意義ヲ有スルモノニシテ「海岸ノ高低如何ニ關セス圓弧ニ類似スル形狀ヲ有スル小灣ニシテ半圓ヲ超ユルコトナキモノ」ヲ意味ス而シテ「アンス」ハ本來一般ニ此ノ形狀ヲ具有スルモノトス

總テ海岸ナルモノハ本來直線ヲ爲スモノト雖一度海水ニ浸蝕セラルルトキハ著シキ變化ヲ受クルハ物理學ノ通則ト當然ノコトナリ斯ノ如クシテ海岸線ハ弧形ヲ爲セル小曲線（灣）ノ連續ヲ爲シ其ノ曲線ハ多少突出セル岬ニ依リテ接續セラル然レトモ其ノ海岸線タル曲線（灣）ハ大陸ニ彎入スルコト甚シカラス其ノ周線ノ係數（勾ト弦トノ比例）ハ一般ニ〇、三〇ヲ超ユルコトナシ

場合ニ依リテハ海岸ハ侵蝕ノ異リタル變化ヲ受

クルコトアリ即波濤カ海岸ノ一部ヲ破壞シテ其ノ土砂ヲ他ノ地點ニ附著セシムルコトアリ

此ノ場合ニ於テモ亦前記ノ場合ノ如ク海岸線ハ小曲線（灣）ノ連續ヨリ成立シ其ノ形ハ圓弧ニ類似スト雖其ノ相異ル所ハ是ニ在リテハ其ノ弦線長ク其ノ勾線短ク即其ノ係數ノ著シク小ナルニ在リ其ノ海岸ハ常ニ平低ニシテ其ノ岬ノ突出ハ甚タ少ナシ

詳細ニ就テハ委員諸氏ニ於テ「ラッペラン」氏ノ「地理學教科書」「ペンク」氏ノ地理書其ノ他「ウール」「リヒトホーフェン」諸氏ノ著書ヲ參照セラレムコトヲ請フ

故ニ一般ノ事實トシテハ總テ海岸ハ其ノ太洋ニ面スルト否ト將タ海灣内ニ在ルトニ論ナク皆前記ノ曲線（灣）ヨリ成立スルモノニシテ其ノ曲線ハ皆彎入少ナク其ノ形ハ圓弧ヲ爲セルモノナリ

以上ノ事實ハ地圖ノ比例尺ヲ擴大スルニ從テ益明白ニ之ヲ認ムルコトヲ得可シ故ニ比例尺ノ小ナル地圖ニ於テハ殆ト直線ヲ爲ス海岸ト雖比例尺ノ大ナル地圖ニ付同一ノ場所ヲ點檢スルトキハ數多ノ曲線（灣）ヲ以テ示サレ以テ沿岸ノ狀態ヲ容易ニ知悉スルコトヲ得ルヲ認ム可シ

比例尺ノ大ナル地圖ニ於テハ直線的海岸ハ例外ナリトス

海岸ノ基本的要素トモ稱ス可キ此ノ曲線（灣）ハ佛國ノ地理學者之ヲ稱シテ「アンス」ト謂ヒ（「ラッペラン」氏前掲著書參照）獨逸ノ地理學者之ヲ稱シテ「バイ」ト謂フ（「ペンク」氏前掲著書參照）英語ニテ佛語ノ「アンス」ナル語ニ對應スルハ「コーヴ」ナルモ場合ニ依リテハ「コーヴ」ナル語ハ陸地ニ彎入スルコト更ニ大ナル灣ヲ指稱スルコトアリ

地圖學ニ關スル各種ノ材料——是本委員等ノ調査ノ直接ノ材料ナリ——ヲ檢スルトキハ佛國製ノ地圖ニ屢使用セラルル「アンス」ノ語ノ意義カ上來說述シタル科學的意義ニ適應スルコトヲ證スルヲ得ルナリ尤モ實際ニハ此ノ語カ更ニ廣キ意義ニ使用セラレ世人ハ屢「アンス」ナル語ニ依リテ陸地ニ深ク彎入スル小灣ヲ指稱スルコトアリト雖其ノ眞正ノ意義ハ正ニ斯ノ如シ其ノ巨多ノ例證ハ委員諸氏ニ於テ宜シク點檢セラレムコトヲ請フ（佛闌西、「アドリヤチック」、朝鮮、濠洲等ノ地圖）

此等ノ例證ヲ調査スルニ地圖ノ上ニ現ハレタル各所ノ「アンス」ハ其ノ延長必シモ一樣ナラサレトモ一般ニ彎入ノ淺キ小灣ナリ例ヘハ「アンス、ド、ヴォヴイール」ハ其ノ弦ノ延長八、七五哩ナルニ反シ「アンス、ド、ローズ」ハ〇、一七哩ニ過キス但シ「アンス」ノ語ハ又陸地ニ頗ル深ク彎入シ且閉鎖シタル灣ニ對シ屢使用セラルルコトアリ例ヘハ「アンス、デギヨン」「アンス、ドーベルラック」ノ如シ

上掲ノ地圖ハ前記ノ提論ヲ明カニ解說ス可シ即各海岸ハ「アンス」ノ連續ヨリ成立スルモノナルコト竝海岸カ個々ノ「アンス」ニ依リテ成立スルコトハ獨リ太洋ニ面シタル海岸ニ止マラス海灣内ニ於ケルモノニ付テモ亦然リトスルコト之ナリ尤モ灣内ノ「アンス」ニ付テハ其ノ灣ノ名稱ヲ時トシテ特ニ明記セサルモノアリ

地圖ノ比例尺カ大ナルニ從ヒ「アンス」ノ數カ益增加スルハ當然ノコトナリトス（其ノ例證ハ地圖ニ依リテ明カナリトス）

以上說ク所ニ依リ「ポーツマス」會議ニ於テ露國全權委員ノ答覺書ニ使用セラレ決定書第七號ニ插入セラレタル「アンス」ノ語ノ正當ナル意義ハ之ヲ知ルコト困難ニ非ス

以上ノ意義ヲ嚴格ニ遵守シ之ヨリ由來ス可キ結果ヲ考フルニ協約ニ入ルヘキ地域ハ其ノ範圍甚廣カラス即多少直線的ナル海岸ノミニ限ラル可キナリ而シテ吾人ハ斯ノ如キ海岸カ其ノ數ニ於テ甚多カラサルコトヲ言明スルヲ義務ト信スル者ナリ（數例）

故ニ露國カ日本人ニ與フ可キ權利ハ甚制限セラレタルモノニシテ之ヲ日本人ニ與フルモ左シテ露國ノ利益ヲ害スルコトナキモノヲモ竟ニ之ヲ日本人ニ與フルコトヲ得サルヘシ

疑モナク小村閣下及アラユル方法ヲ以テ露國ノ爲ニ其ノ主張ヲ爲シタル「ウイッテ」閣下モ「アンス」ナル語ニ其ノ固有ノ意義ヲ附スルノ意思ヲ有セサリシモノナリ此ノ事ハ「アンス」ナル語ト頗ル其ノ意義ヲ異ニスル英語ノ「インレット」ナル語ヲ以テ此ノ語ノ譯語ト爲シタルヲ以テ之ヲ見ルモ明ナリトス

露國全權委員カ其ノ同答覺書中ニ沿海ノ漁業權ヲ日本人ニ與フル旨ヲ申出タルハ之ニ依リテ海岸線以外ノ地方即多少閉鎖シ且陸地ニ彎入シタル地方ト河川トヲ留保シタルナリ

此ノ兩者ハ沿海地ニ非ス大陸内ニ在ルモノナルカ故ニ當然此ノ協約以外ニ在ルモノナリ加之此ノ留保ハ露國ノ工業發展上最重要ナルモノナリ

故ニ本委員等ハ本會議ニ於テ「インレット」ナル語ハ條約第十一條及決定書第七號ノ實質竝兩國相互ノ利益ニ最能ク適合スルモノト解シ此ノ語ニ深ク留意セリ

本委員等ハ完全ナル協定ニ到達セムコトヲ希望シテ露國ノ明白ナル權利ヲ犧牲ニ供シ「ポーツマス」會議ノ公文ノ用語ニ關シテ文理解釋ヲ主張スルコトヲ止メ日本ノ利益ノ爲ニ「アンス」ノ大部分ヲ抛棄セムトス然レトモ又本委員等ハ「アンス」ノ一部ニシテ明ニ特種ノ性質ヲ有スルモノ即多少孤立シタル灣ヲ爲シ大體ニ於テ「インレット」ニ近キ形ヲ爲ス「アンス」ニ對シテハ之ヲ留保セムト欲ス是本委員等ノ根本主義ノ要旨ナリトス固ヨリ或特別ナル場合ニ就テハ特種ノ理由ニ基キ多少ノ例外ハ之ヲ認ム可キナリ

日本ノ利益ノ爲ニ讓與セラレタル「アンス」カ沿岸ノ大部分ヲ占ムル（日本委員ニ交付セラレタル地圖ニ示サルルカ如ク沿岸ノ三分ノ二以上ナリ）事實ヲ見ルニ本委員等ハ之ヲ以テ權衡ヲ得タルモノト認メサルヲ得ス況ヤ場合ニ依リテハ其ノ地理上ノ特別ナル位置ヨリシテ當然除外セラル可キ灣ヲモ尙之ニ加ヘタルニ於テヲヤ

上記特定ノ部分ハ如何ナル場合ニ於テモ全然日本漁業ノ外ニ立タサルヘカラス其ノ理由ハ重ネテ玆ニ反覆スルノ要無カル可キナリ（「要點ニ關スル說明書」及本年十月（二十五日／十二日）附露國ノ「答辯書」參照）

本委員等ノ見ル所ヲ以テスレハ本問題ノ解決ヲ此ノ以外ノ方法ニ俟ツコトハ不可能ナリ本野閣下ヨリ提議セラレタル解決ノ方案ハ到底之ヲ認諾スルコトヲ得ス該提案ハ問題ヲ解決スルモノニ非スシテ却テ問題ヲ壓抑セントスルモノナルノミナラス兩國ノ利益ヲ調和スルモノニ乖シテ却テ「ポーツマス」條約ニ豫見セラレサル新狀態ヲ創設セムトスルモノナリト思考ス

本委員等ハ玆ニ「インレット」ナル新地理語ニ逐著セリ依テ之カ定義ヲ說明セムトス

「インレット」ナル語ノ正當ナル定義ハ地圖學上ノ材料ノ調査ニ依リテ之ヲ說明スルコト難カラス

「インレット」ナル語ハ世界ノ各所ニ擴マリタル語ナリ多クハ閉鎖セラレタル灣ニシテ多少陸地ニ彎入シタルモノヲ指稱ス例ヘハ北亞米利加ノ太平洋沿岸ニ於ケル「ナスパート、インレット」「ペッダー、インレット」「スック、インレット」「ミユーア、インレット」「クックス、インレット」及其ノ他數箇所、「アドリヤチック」沿岸（ダルマシー）ニ於ケル「ケルカ、インレッド」及「ダケウス、インレット」（朝鮮）ノ如シ

「インレット」ノ入口ハ〇、五哩（「ケルカ、インレット」）ヨリ四八哩（「クックス、インレット」）ニ至ル通常ハ一哩乃至五哩トス又陸地ノ彎入ハ二哩（「ナスパート、インレット」）ヨリ二百哩（「クックス、インレット」）ニ至ル

其ノ形狀ニ至リテハ寧ロ「フヨール」（硤子灣ノ類）ニ似タリ即「インレット」ノ深サハ其ノ入口ノ幅ニ超過スルコト數倍ナリ

時トシテハ漏斗（アントンノアール）（獨語ノ所謂「トリヒターフォオルミッヒ」）ノ形ヲ爲セルコトアリ例ヘハ「ミユーア、インレット」ノ如キハ其ノ深サト入口トハ其ノ距離同一ナリ（五哩）

時トシテ「インレット」ハ又頗ル大ニシテ海灣（ゴルフ）ノ形ヲ爲セルコトアリ例ヘハ「クックス、インレット」ノ如シ

北亞米利加ノ太西洋沿岸ニ於ケル種々ノ「インレット」ハ稍異レル形狀ヲ有シ同地方ニ在リテハ低平ナル海岸ヲ有スル大ナル海灣內ニ於ケル狹キ入口ニ此ノ名ヲ附ス例ヘハ「リットル、インレット」「イーストリッチウエー、インレット」「ニユー、インレット」「ジロンス、インレット」ノ如ク皆其大ナル「グレート、サウス、ベー」ナル灣內ニ在リ

「インレット」ノ名稱カ河畔平原ノ自然ノ延長タル漏斗形ノ海灣（ゴルフ）ニ使用セラルルコト稀ナリトセス例ヘハ「パルリー、インレット」（英吉利）、「ヒンヤン、インレット」（朝鮮）、「アッシユピー、インレット」（朝鮮）ノ如シ

地圖學上ノ材料ニ據ルトキハ「インレット」ナル語カ最多ク使用セラルルハ「深ク陸地ニ彎入シ多少閉鎖セラレタル灣」ノ意義ニ於テナリ而シテソハ獨逸ノ學術的用語ナル「ブフト」ニ相當スルモノナリ

（十二）「入江（アンス）」ノ定義ニ關スル下調委員會第二回會錄

千九百六年十一月（三十日／十七日）開會

千九百六年十一月（十七日／四日）ノ會議ニ於テ露國委員ヨリ提出セラレタル「アンス」ノ語ノ定義ニ關シ下調委員會ニ提出セラレタル日本國委員ノ意見

日本委員ハ十一月（十七日／四日）ノ會議ニ於テ「アンス」ノ語ニ關シ露國委員ニ依リテ與ヘラレタル定義及其ノ後露國委員ヨリ交付セラレタル機密覺書ヲ愼重ニ調査シタリ

本問題ノ詳細ニ入ルニ先チ日本委員ハ兩國委員間ノ誤解ヲ避クル爲現ニ下調委員會ニ附與セラレタル權限ノ範圍ヲ確定スルコトヲ必要ナリト認ム

十月（二十五日／十二日）ノ會議ニ於テ露國全權委員カ「アンス」ノ語ニ包含セラルヘキ沿岸諸地方ノ地名表ヲ雙方共同ノ上作成スル爲下調委員會ヲ指命セムコトヲ提議セラレタルトキ日本國全權委員ハ之ニ答フルニ其ノ提議ニ贊同スル能ハサルコト及日本全權委員ノ見ル所ヲ以テスルトキハ斯ノ如キ事業ニ著手スル前ニ方リ先ツ「アンス」ノ語ノ意義ヲ確定スルノ必要アリ故ニ若下調委員會カ單ニ「アンス」ノ語ノ意義ヲ確定スルノ權限ヲ有スルニ止マルモノナラハ該委員會ヲ指命スルコトニ贊同ス可キ旨ヲ以テセリ露國全權委員ハ此ノ提議ニ贊同シ丸毛氏及本委員ハ此ノ下調委員會ノ委員トシテ任命セラレタリ

此ノ下調委員會ノ權限ハ若兩國全權委員ニ於テ必要ナリト認ムル場合ニ於テハ後日ニ至リ擴張セラレ得ヘシ然レトモ現在ニ於テハ吾人ハ「ポーツマス」議定書ニ使用セラレタル「アンス」ノ語ノ意義ヲ成ルヘク精確ニ定ムルコトニ止メサルヘカラス

本委員等ハ露國委員諸氏モ亦斯ノ如ク其ノ任務ヲ了解セラレタリト信ス何トナレハ十一月（十七日／四日）ノ下調委員會會議ノ席上ニ於テ露國委員ハ「アンス」ノ語ノ意義ニ就テ其ノ意見ヲ表示セラレタルコトハ露國委員カ本委員等ニ交付セラレタル機密覺書ノ證スル所ナリ

本委員等ノ職務ヲ斯ノ如ク明白ニ定ムル以上ハ「ポーツマス」會議ニ於テ日露兩國全權委員カ申出テタル提案ニ就テ判定スルカ如キ殊ニ之ニ對シ意見ヲ發表スルカ如キハ本委員等ノ權限ニ屬セサルコト言ヲ俟タサル可シ

「アンス」及「インレット」ノ語ノ意義ニ關スル露國委員ノ深遠誠實ナル研究ニ就テハ切ニ敬意ヲ表ス而シテ露國委員ハ其ノ結論トシテ「ポーツマス」ニ於ケル日露兩國全權委員ハ「アンス」ノ語ニ依リテ共ニ同一事物ヲ指稱シタルモノナルコトヲ述ヘ且堅ク「小村閣下モ「ウイッテー」閣下モ此ノ語ニ其ノ固有ノ意義ヲ附スルノ意思ヲ有セサリシコトハ此ノ語ヲ翻譯スルニ當リ意義ノ異ナレル英語ノ「インレット」ナル語ヲ使用シタルハ其ノ明ナル證左ナリ」ト謂ハレタリ

露國委員ノ說ニ據ルトキハ日露兩國全權委員カ「アンス」ナル語ニ依リテ表示セムトシタル意義ハ寧ロ英語ノ「インレット」即陸地ニ深ク彎入シ多少閉鎖シタル灣ノ謂ナリ

大體ヨリ論スレハ「ポーツマス」ニ於ケル兩締約國ノ意思ニ就テ明白ナル證左ナキ限ハ日露兩國全權委員カ「アンス」ノ語ニ前記ノ意義ヲ附シタルモノト見ルコトハ本委員等モ主義トシテ之ヲ承認スヘシ

然リト雖本委員等ハ此ノ定義ヲ以テ日本臣民ノ漁業ノ爲ニ留保セラルル地方ト然ラサルモノトヲ區別スルノ標準ト爲スニ方リ之ヲ全然明白ニシテ且精透ナルモノト認ムルコト能ハス

露國委員ノ定義ニ曰ク「多少閉鎖シタル灣」ト然レトモ如何ナル種類ノ灣カ「アンス」ノ語（吾人ハ以後此語ヲ以テ英語「インレット」ニ相當スルモノトシテ使用ス可シ何トナレハ最早此ノ兩語ノ間ニ混淆ヲ來タスコトナカルヘケレハナリ）ニ包含セラレ日本臣民ノ漁業地ヨリ除外セラル可キカ灣ノ入口ハ廣狹一樣ナラス灣ノ深サニ就テモ亦然リ露國委員ノ定義ニ曰ク「深ク陸地ニ彎入スル所ノ」ト然レトモ「深ク」トハ果シテ何ヲ意味スヘキカ露國委員ノ見解ニ指摘セラレタル例ニ依レハ彎入數十海里ヲ有スルモノアリ或ハ又其ノ彎入之ヨリ甚小ナルモノアリ此等ノ「アンス」中日本人ノ爲ニ留保セラレタル漁業地方ヨリ除カルヘキモノハ最深キモノナルヘキカ將タ最淺キモノナルヘキカ露國委員ノ與ヘラレタルカ如キ定義ヲ基礎トシテ漁業地域ヲ定ムルトキハ竟ニ取所ニ困ルノ外ナカルヘキナリ地圖學上ノ材料ニ據リテ漁業地域ヲ定ムヘキ否ヤノ問題ハ全權委員會同ノ上決スヘキ所ナルカ故ニ措テ之ヲ論セス玆ニ問題トナルハ斯ノ如キ漠然不確定ナル定義ヲ基礎トスルトキハ如何ニシテ漁業地域ヲ確定シ得ルヤ殊ニ今日尙精細ナル地圖ヲ缺ク所ノ地域ニ就テハ如何ニシテ之ヲ定ムヘキヤニ在リ

本委員等ノ見ル所ヲ以テスルニ下調委員會カ研究スヘキハ日本人ノ漁業ノ爲ニ留保サレ又ハ日本人ノ漁業ヨリ除外スル地方ヲ確定スルノ標準ヲ定メ以テ將來誤解ヲ生スルノ餘地ヲ存セシメサルニ在リ而シテ之カ爲ニハ日本委員等ハ「アンス」ノ入口及深サノ海里數ヲ基本トシテ之ヲ定ムルノ外他ニ方法ナシト信スルナリ斯ノ如クスレハ漁業地域ヲ確定スルニ付基礎トナル可キ標準ヲ得ルニ至ルヘシ

「ポーツマス」ニ於ケル日露兩國全權委員ノ意思ハ露國委員諸氏ノ明言セラレタルカ如ク日本臣民ニ眞實有效ナル漁業權ヲ與ヘラルルニ在リト思考スルカ故ニ此ノ意思ヲ基礎トシテ日本委員ハ「アンス」ノ語ニ次ノ如キ定義ヲ附スルノ光榮ヲ有ス

「陸地ニ彎入スル長狹ナル水面ニシテ其彎入十五海里ヲ下ラス其ノ入口二海里ヲ超エス陸地ニ依リテ閉鎖セラルルコト深ク湖タルノ性質ヲ有セス平素船舶ノ碇泊ニ使用セラルルコト無キモノ」

（十三）「入江（アンス）」ノ定義ニ關スル下調委員會第三回會錄

千九百六年十一月（三十日／十七日）下調委員會ニ於テ日本國委員ヨリ提出セラレタル意見ニ對スル露國委員ノ答辯

露國委員ハ「ポーツマス」會談ノ議定書第七號カ漁業協約ニ於テ定ムヘキ範圍ヲ太平洋ニ面スル海岸線ノ領水ニ限リタル事實ヲ考慮シ十月（二十五日／十二日）ノ發言ニ於テ「アンス」ノ語ニ附スル「インレット」ノ意義ヲ以テスルコトヲ申出テタリ

日本委員ハ其ノ意見書ニ於テ上記ノ見解ヲ主義トシテ承認シタルモ十一月（十四日／一日）ノ會議ニ於テ露國委員ノ與ヘタル「インレット」ノ定義ニ滿足セス其ノ定義ヲ以テ不完全ナリトシ將來誤解ヲ生スヘキモノナリト爲セリ

地理學上ノ用語ノ定義カ理論上如何ニ精確ナリトスルモ實際ニ於ケル其ノ適用ハ常ニ種種ノ誤解ヲ生スヘク其ノ誤解ハ結局殆ト全海岸線ノ測量ヲ爲スニ非サレハ解決スル能ハサルヘシ然レトモ斯ノ如キ方法ヲ採ルハ長ク月日ニ涉リテ日露兩國漁業ニ障礙ヲ與フルモノナルコトハ言ヲ俟タス

本委員等ノ見ル所ヲ以テスレハ方策ハ唯一アルノミ即「インレット」ナル語ノ定義ノ精確ナリヤ否ヤハ之ヲ別論トシテ雙方ノ協定ニ依リ「インレット」ナル語ニ對應ス可キ露國領水ノ部分ヲ列擧シ之ヲ一種ノ一覽表ニ作成シ以テ「インレット」ノ定義ヲ確定スルニ在リ本委員等ハ此ノ表ノ作成ニ付少クトモ漁業上最モ廣大ニシテ且重要ナル海岸線ニ關シ充分ナル材料ヲ有ス

「インレット」ノ語ニ對シテ本委員等ノ附シタル定義ハ通俗ノ用語ヲ以テ發明セラレタリト雖其ノ意義ハ世界ノ各所ヨリ蒐集シ來リタル例證ニ依リテ既ニ明白ニセラレタリ加之此ノ定義ハ海岸地名表ニ依リテ明白ナルヘク其ノ表ノ一部ハ（浦鹽斯德ヨリ黑龍江迄）曾テ日本委員ニ參考トシテ通報セラレタリ從テ此ノ定義ハ明白ニシテ且實用ニ足ルモノナリト信スルト雖尙此ノ點ニ付テハ特ニ日本委員ノ希望ニ從ヒ出來得ル限リ此ノ定義ヲ釋明スヘシ但シ吾人カ茲ニ提出セムトスル定義ハ本委員等ノ最初ノ定義ト同一ノ地名表ニ基キテ構成セラルルモノナルカ故ニ結局ハ無用ノ業タルニ過キサル可シ

本委員等ハ「インレット」即閉鎖セラレタル灣ナル語ヲ解シテ「入口ノ幅カ其ノ最長ノ幅ヨリ小ナル灣若ハ（反對ノ場合ニ於テハ）其ノ最長ノ深サヲ超エサル灣ト爲ス「インレット」ノ廣サニ就テハ一般「インレット」ノ通常ノ制限ヲ超エサルコトヲ限度トス此ノ制限ニ就テハ第一會議ノ席上ニ於テ本委員等既ニ之ヲ明ニセリ即其ノ入口ノ幅四十五海里ヲ超エス及其ノ深サ百五十海里ヲ超エサルコト是ナリ尙茲ニ附加スルヲ必要ト信スル事項ハ「インレット」ナル語ハ通常河口灣ヲ指稱スルニ使用セラルルコトナリ然レトモ河口灣ハ河川其ノ者ニ包含セラルルモノタルニ外ナラス

日本委員ヨリ提出セラレタル定義ヲ見ルニ其ノ定義ハ二個ノ部分ヨリ成立ス本委員等ハ其ノ第一ノ部分ニ就テ論議スルノ必要ヲ見ルニ過キス何トナレハ其ノ第二ノ部分「陸地ニ依リテ閉鎖セラルルコトナク港タルノ性質ヲ有セス平常船舶碇泊ニ使用セラレス」云々ハ本委員等ノ論議ニ關係ナキ事項ニ關スルモノニシテ「ポーツマス」條約ノ第十一條及「インレット」ノ地理學上ノ定義トハ何等關係ナケレハナリ

日本委員ノ提出ニ係ル定義ノ第一點「即陸地ニ灣入スル長狹ナル水面ニシテ其ノ灣入十五海里ヲ下ラス其ノ入口二海里ヲ超エス」云々ニ關シテハ吾人ハ此定義ノ基礎カ寧ロ恣擅的ノ觀ナキ能ハサルヲ注意セムト欲ス

如何ナル理由ニ基キテ日本委員ハ通常ノ規則ニ反シテ「インレット」ノ入口ヲ二海里以下ニ限リ其深サヲ十五海里以上トシタリヤ如何ナル理由ニ依リテ日本委員ハ入口二海里幅十五海里ノモノヲ「インレット」ト爲シ幅一海里長サ七、五海里ノモノヲ「インレット」ト認メサルヤ抑「インレット」ノ特質ハ主トシテ其ノ形態ヨリ出來シ其ノ各部分ノ配合如何ニ依ルモノニシテ其ノ大小ノ如何ニ基クモノニ非サレハ幅員ノ大ナル「インレット」モアルヘク又小ナル「インレット」モアルヘシ日本委員ノ意見書カ此ノ點ニ關シテ何等ノ說明ヲ加フル所ナキハ吾人ノ遺憾トスル所ニシテ吾人ハ十一月（十四日／一日）ノ會議ノ席上ニ於テ口頭ニモ其ノ說明ヲ聞クコトヲ得サリキ

日本委員定義ノ基本的主旨ヲ前ノ如ク研究シタル後直ニ此ノ定義ヲ我沿岸ニ於ケル各種ノ灣ニ適用スルトキハ其ノ結果ハ容易ニ之ヲ知ルコトヲ得即吾人ハ數千海里ニ涉ル我沿岸線ニ於テ日本委員ノ所謂「インレット」ニ入リ漁業協約ヨリ除外セラルヘキモノハ唯一箇ヲ發見スルニ過キスカノ北海ニ近キ「ミチゲメンスカヤ」灣是ナリ

加之日本委員ノ定義ノ第一第二ノ部分ヲ包括シテ之ヲ考フルトキハ此ノ唯一ノ「ミチゲメンスカヤ」灣スラ其ノ所謂「インレット」ト稱スルコトヲ得サルヘシ何トナレハ米國船ハ「チュクチ」人ト貿易ヲ爲サムカ爲屢此ノ灣ニ來ルコトアレハナリサレハ日本委員ハ同一ノ文書中ニ於テ其ノ劈頭ニ於テハ「ポーツマス」條約ニ從ヒ漁業協約ヨリ「インレット」ヲ除外スルノ權利ヲ露國ニ認メナカラ其ノ末尾ニ於テハ「インレット」ノ語ニ一定ノ定義ヲ附スルノ結果該條約ニ認メラレタル此ノ權利ヲ全然否認スルモノノ如シ

斯ノ如キ方法ヲ以テスルトキハ竟ニ結末ヲ見ルコト能ハサルニ至ルヘシ本委員等ハ此點ニ就テ注意ヲ促スヲ自己ノ義務ナリト信ス

日本委員ニ依リテ與ヘラレタル定義ニ至リテハ其ノ全部ニ於テモ亦其ノ各部ニ於テモ之ヲ承認スルコト能ハス何トナレハ其ノ定義ハ地理學上批難ヲ免ルルコト能ハサルノミナラス又露國ノ利益及權利ニ重大ナル障礙ヲ及ホスモノナレハナリ

（十二）日本國全權委員ヨリ露國全權委員ニ至ル覺書（千九百七年一月（十三日／三十一日）附）

漁業協約談判ノ爲開催セラレタル千九百六年十月二十五日（十二日）ノ會見ニ於テ露國全權委員ハ日本人ノ漁業ヲ營ム能ハサル入江ノ表ヲ作成セムカ爲下調委員會ヲ任命セムコトヲ提案シタルヲ以テ日本國全權委員ハ斯ル表ノ作成ニ先チ「入江」ナル文字ノ意義ニ關シ協定ヲ遂クルノ必要ナルコト竝其ノ結果トシテ若下調委員會ニ於テ本問題ノ審査ヲ爲スニ於テハ該下調委員ノ任命ニ異議ナキコトヲ說示シタリ

露國全權委員ハ該提案ニ同意シ專門委員任命ノ處置ヲ執リタリ

日本國側ニ於テ落合、丸毛ノ兩氏及露國側ニ於テ「ブラジニコフ」氏ハ「ポーツマス」條約會議錄中ニ記載セラルル入江ナル文字ノ正確ナル意義ヲ審査セムカ爲爾來屢會見ヲ重タリ然レトモ「入江」ナル文字ノ正確ナル意義ニ關シ協定ヲ遂ケムトシテ相互ニ熱誠努力シタルニモ拘ハラス終ニ何等滿足ナル定義ヲ發見スル能ハサリシヲ以テ日本國全權委員ハ本問ニ關シ一ノ協定ヲ遂クル目的ヲ以テ落合氏ニ許スニ「ブラジニコフ」氏ト全然私ノ名義ニ於テ協議會ヲ開ク可キコトヲ以テセリ

落合氏ノ日本國全權委員ニ提出セル報告ニ依レハ兩國ノ專門委員ハ其ノ討議ノ基礎トシテ假ニ佛語ノ入江（anse）ナル文字ヲ英語ノ入江（inlet）ナル文字ノ意義ニ解釋スルコトニ詳言スレハ陸地ニ深ク灣入セル灣ニシテ其灣入ノ部分其ノ江口ノ幅ヨリ數倍大ナルモノト解釋スルニ一決シタリ

本原則ニ基キ雙方誠實和衷ノ討議ヲ重タル後一月十八日（五日）ノ會議ニ於テ落合、「ブラジニコフ」ノ兩氏ハ本紙添附（附錄參照）ノ結論ヲ爲スニ至リタリ

「ブラジニコフ」氏ノ最終提案ニ基キ英語ノ入江（インレット）ナル文字ヲ基本トセルモノ即「其ノ灣入ノ部分其ノ江口ノ幅ノ二倍以上アル灣」ノ意義ニ於テ一ノ表ヲ作成シタリ

本定義ニ依ルトキハ多少ノ廣狹アル三十三箇ノ灣ハ日本海、「ベーリング」海及「オコーツク」海ノ岸地ニ於テ日本人ノ漁場ヨリ除外セラルヘシ以上三十三箇ノ灣以外ニ尙六箇ノ閉鎖灣及平降上ノ點ヨリ留保セラレタル四箇ノ灣アルヲ以テ結局除外セラルヘキモノハ其ノ數四十三箇所ニ達ス

「ボドカゲルナヤ」河口ヨリ「アヤン」港ニ至ル「オコーツク」海ノ北岸ニ關シテハ「ブラジニコフ」氏ハ其ノ入江ノ灣入部分其ノ江口ノ幅ノ三倍以上アルニアラスムハ日本人ノ漁業權ヨリ除外セラルヘキモノニアラサルコトニ協定セムコトヲ提案セリ

敍上事項ニ關シテハ二箇ノ注意スヘキ點アリ左ノ如シ

第一、假令日本國全權委員ハ妥協ノ精神ニ依リ露國委員ノ指定セル大本ヲ承認スルコト許容スレハ「入江」ナル文字ハ之ヲ陸地ニ深ク灣入シ且其ノ灣入ノ部分其ノ江口ノ幅ヨリ數倍大ナル灣ノ意義ニ解釋スヘキモノナリトノコトヲ日本國政府ニ建言セサルヘカラスト信シタリトスルモ本定義ニ適切ナル解釋ヲ下シタル露國委員ハ其ノ除外セラルヘキ場所ノ表ヲ完成セムカ爲ニ一ト二トノ比ト云フカ如キモノヨリモ更ニ一層承認シ得可キ係數ヲ定ムルヲ要スト信ス是本提案ハ陸地ニ深ク灣入スル長狹ナル入江ノ觀念ト明ニ合致セサルモノナルカ故ニ東京ニ於テハ本提案ヲ以テ稍恣擅的ノモノト爲スコトヲ深ク怖ルルヲ以テナリ

第二、露國專門委員ハ「オコーツク」海北岸ニ於ケル入江ニ付テハ一ト三トノ係數ヲ定メムト欲スルニ拘ハラス何カ故ニ同委員ハ日本海及「ベーリング」海ニ付テハ同一方法ヲ採用スル能ハサルカ

以上ノ留保ヲ爲シ而シテ日本國全權委員ハ「ブラジニコフ」氏ノ作成セル提案ハ之ヲ我國政府ノ確定提案ト見做スコトヲ得ヘキカ又ハ見做ササルヘカラサルカ並上記ノ意義中ニハ幾分ノ變更ヲ加フルコト能ハサルヘキカヲ日本國全權委員ニ言明セラレムコトヲ露國全權委員ニ望ム

日本國全權委員ハ尙露國全權委員ト會議ノ上其ノ初ハ單ニ入江ノ問題ノミヘ委任シタル日

本國專門委員ノ權限ヲ更ニ擴張シ之ニ附與スルニ水產物ノ問題並黑龍江海灣（リマン）ノ問題ニ關シテモ談判ノ端ヲ開クヘキコトヲ以テセリ

上記二問題ノ中其ノ第一問ニ關シテハ日本國全權委員ハ兩國委員ノ間ニ成立セル協定ニ同意シ該協定ニシテ若露國全權委員ノ均シク承認スル所ト爲ルニ於テハ之ヲ承認セラレムコトヲ日本國政府ニ建言セムト欲ス

黑龍江海灣（リマン）ノ問題ニ關シテハ「プラジニコフ」氏ノ提案セル解決方法ハ日本國全權委員ノ充分滿足スル所トナラス日本國全權委員ハ露國漁業者ノ爲ニ絕對ニ留保セラレタル場所ヲ以テ多大ニ過クルモノト認メタリ次ニ「プラジニコフ」氏ノ落合氏ニ提示セル說明ニ依レハ同氏ノ日本國漁業者ニ許與スヘシト提案スル黑龍江海灣ニ於ケル限定漁區ニ於テモ尙漁夫トシテ日本國臣民ヲ使用スル能ハサルコトヲ欲スルニ在リ然レトモ該要求ハ露國ノ反對提案ニ於テ承認シタル漁業協約草案第六條ト絕對ニ相容レサルモノナリ

黑龍江海灣（リマン）ノ一般問題ニ對シ下サルヘキ解決ノ如何ニ拘ラス日本國全權委員ハ右制限ニ付テハ本國政府ノ承認ヲ受クルコト困難ナルヘキヲ認メタリ

是ヲ以テ日本國全權委員ハ上記諸點ニ關シ露國全權委員ノ更ニ之ヲ再考シ且本問ニ關シ日本國政府ニ建言シ得ムカ爲一ノ確定的回答ヲ與ヘラルルニ於テハ深ク露國全權委員ニ感謝スル所ナリ

「プラジニコフ」氏ト落合氏トノ間ニ成立セル協定ノ後節ニ關シテハ即左ノ如シ

日本國臣民ハ兩國ノ合意ヲ以テ明ニ除外シタル場所ヲ除クノ外日本海「オコーツク」海及「ベーリング」海ニ瀕スル何レノ場所ニ於テモ漁區ノ貸下ヲ願出ルトキハ之ヲ受クルコトヲ得ヘキコトヲ協定ス但シ漁業協約ニ依リ漁業ヲ許可セラレタル方面ニ於ケル魚類ノ蕃殖保護此等工業ニ關スル取締並漁業上其ノ他一切ノ事項ニ關スル現行若ハ將來ノ法律規則ヲ遵守スヘキモノトス此等法律規則ハ又總テ露國ノ漁業者ニモ適用セラルヘキハ言ヲ俟タサルモノトス又「ポーツマス」ニ於テ締結シタル講和條約第十一條第二項ニ規定セラルル場合ヲ除クノ外漁區又ハ場所ニ付テ移住民及土著民即土民ノ利益ノ何等ノ爲留保ヲ爲ササルヘキコトヲ約ス

日本國全權委員ハ兩國委員ノ間ニ成立セル上記ノ協定ニ同意シ之ヲ以テ「ポーツマス」條約ノ神習ナル解釋ヨリ來レルモノト認メ本協定ノ承認セラレムコトヲ本國政府ニ建言スヘシ

千九百七年一月（五日十八日）附附屬最終覺書

「プラジニコフ」氏ハ「インレット」ナル語ヲ以テ灣ノ深サカ其ノ入口ノ二倍以上ナル場合ヲ指スモノト爲サムコトヲ提議シ且日本臣民カ漁業ヲ爲ス能ハサル地域ヲ次ノ如ク列擧セムコトヲ申出テタリ

甲、「インレット」ノ語ニ相當スル灣
一、ラウレンサイヤ灣
二、メチグメンスカヤ灣
三、コニアム灣（ペンケグネイ）
四、アホレエシエフ灣（コロカン）
五、ルメレート灣
六、アミラル、プタコフ灣（トカチエン）
七、プロヴヰデーニエ灣
八、クレスト灣（北ノ灣ハ又閉鎖灣ナリ）
九、アナドイル灣（閉鎖灣）
一〇、アナスタジー灣
一一、サン、ピエール灣、サン、ポール灣及ナタリー灣
一二、アルーホカイア灣
一三、ウヴロワ灣
一四、カラガ灣（閉鎖灣）
一五、セルジユヴァイヤ灣
一六、ベチヴァンスキー灣閉鎖灣及ジロヴイ灣
一七、アヴァチンスキー灣（閉鎖灣）
一八、ヴィリウチンスキー灣
一九、アホムテン灣及キャルコイ灣
二〇、ヘンジンスカヤ灣（マメット岬ヨリ北方）
二一、ニコライ灣
二二、バイカル灣（閉鎖灣）
二三、ヌイスキー灣（閉鎖灣）
二四、ナビルスキー灣（閉鎖灣）
二五、モジロウ灣
二六、クレストヴァイア灣
二七、スタルク灣（閉鎖灣）
二八、ヴァニナ灣
二九、イムペラートルスカヤ灣
三〇、ソアリシーツヤ灣
三一、テルネイ灣
三二、サン、ヴラヂミル灣
三三、プレオブラジエーニエ灣ノ北岸ニ於ケル小「インレット」

乙、海岸線ニ在リタル閉鎖灣
三四、シリユーニナイア灣
三五、チュレニー湖
三六、シエスチフートウォエ湖
三七、バロン、コルフ灣ノ北部
三八、コンスタンチン大公灣
三九、スチヤースチヤ灣

丙、軍略上ノ理由ニ依リ禁止セラレタル灣
四〇、ド、カストリー灣（閉鎖灣）及フレデリックス灣
四一、サント、オルガ灣
四二、彼得大帝灣
四三、ポシエト灣

落合氏ハ「漁業」（ペシユ）ナル語ハ膃肭獸及臘虎ヲ除ク外總テ海產ノ魚類及動植物ノ捕獲ヲ包含スヘシト申出テ「プラジニコフ」氏ハ同氏限リ之ヲ承認シタリ

「プラジニコフ」氏ハ日本人ノ漁業地域ヨリ樺太沿岸以外ノ黑龍江（リマン）全體ヲ除外セムコトヲ申出タリ尤モ該樺太沿岸ニ於テハ露國企業家ト均シク日本企業家ニ對シテモ該日本企業家カ露國企業家ト同樣黑龍江地方ノ河川漁業ニ關スル露國ノ規則ニ從フ可キ條件ノ下ニ漁業權ヲ許與ス可キ旨申出タリ

雙方ノ協定ニ依リ明ニ除外セラレタル地域外ニ於テハ日本臣民ハ其ノ願出ニ依リテ日本海、「オコーツク」海及「ベーリング」海ノ沿岸ノ如何ナル地ニ於テモ漁區ヲ取得スルコトヲ得ヘシ但シ魚類ノ蕃殖及保護ノ爲竝之ニ關スル產業ノ監督ノ爲其ノ他漁業協約ニ依リ日本國臣民ニ漁業ヲ許與セラルヘキ地方ノ漁業ニ關スル諸種ノ事項ノ爲制定セラレタル現行及今後制定セラルヘキ法律、規則ニ從フコトヲ要ス此等法律、規則ハ露國企業家ニ對シテモ均シク適用セラルルハ言ヲ俟タス尙又「ポーツマス」ニ於テ調印ノ講和條約第十一條第二項ニ規定セラレタル場合ノ外漁區並漁場ニ關シ移住民、農民及土人ノ爲何等ノ留保ヲ爲ササルコトヲ約ス

「ボドカゲルナヤ」河ノ河口ヨリ「アヤン」港ニ至ル「オコーツク」海北方沿岸ニ關シテハ此ノ地域內ノ「インレット」ニシテ其ノ深サカ入口ノ幅ノ三倍ヲ超ユルニ非サレハ日本人ノ漁業地域ヨリ除外セラレサルヘキコトヲ約ス

（十三）本野閣下ヨリ「ゲベストフ」閣下ニ至ル半公信（千九百七年二月一日（一月十九日）附）

拜啓陳者一月二十二日（十六日）ノ會見ニ關スル覺書一部取添ヘ閣下ニ及回付候本職ハ該覺書中ニ毫モ誤謬ナキヲ信シ之ニ對シ閣下ノ御確認ヲ得ハ幸甚ニ御座候敬具

千九百七年二月一日（一月十九日）

於聖彼得堡日本公使館
本野一郎（記名）

「ゲベストフ」閣下

前掲半公信附屬別紙覺書（千九百七年（二月一日一月十九日）非正式會見ニ於ケル決議）

日露兩國全權委員ハ相互ニ其ノ專門委員落合氏及「プラジニコフ」氏ヲ伴ヒ一月二十九日（十六日）「ゲベストフ」氏居宅ニ於テ非正式ノ會合ヲ爲シ左ノ決議ヲ爲セリ

一、入江ノ問題ニ關シテハ佛語ノ入江（anse）又ハ英語ノ入江（inlet）ナル文字ハ其ノ灣入ノ部分其ノ江口ノ幅ノ三倍以上アル灣ノ意義ニ解釋ス可ク而シテ日本國臣民ノ爲ニ漁業ヲ許可セラル可キ此等灣ノ數ヲ前揭ノ數ニ基キ作成ス可シ然レトモ前揭ノ數ニ該當セサル七個ノ灣ニ付テハ除外灣トシテ該數中ニ包含セシメ之ヲ該表ノ末尾ニ附ク可シ

日本人ノ爲メニ漁業ヲ許可セサル軍略上ノ沿岸外ニ海岸地ニ存在セサル閉鎖灣竝戰略上ノ理由ニ基キ日本人ニ對シ漁業ヲ禁止スルカ爲留保セラレタル數箇ノ灣アリ

甲、英語ノ入江（インレット）ナル文字ニ該當スル灣
一、「ラウレンチイヤ」灣
二、「メチグメンスカヤ」灣
三、「コニアム」灣一名「ペンケグネイ」灣
四、「アホレエシエフ」灣一名「コロカン」灣
五、「ルメレート」灣
六、「プロヴヰデーニエ」灣
七、「クレスト」灣
八、「バアウエル」灣
九、「カラーガ」灣
十、「ベチエヴヰンスカヤ」灣
十一、「アヴァチンスカヤ」灣
十二、「ベンヂンスカヤ」灣（「マメ」岬ヨリ北方迄）
十三、「ニコライ」灣
十四、「バイカル」灣
十五、「ヌイスキー」灣
十六、「ナビリスキー」灣
十七、「クレストーワヤ」灣
十八、「スタルク」灣
十九、「イムペラートルスカヤ」灣
二十、「テルネイ」灣
二十一、「プレオブラジエーニエ」灣

乙、除外灣
二十二、「アナドイル」灣
二十三、「ヒエール」灣

二十四、「グルーボカイア」灣
二十五、「ヴヰリユーチンスキー」灣及「ジロヴァイア」灣
二十六、「アコムテン」灣及「チキルコイ」灣
二十七、「ヴアニナ」灣
二十八、「カラシーミル」灣
二十九、「シユリユーボヰナイア」灣
丙、岸地ニ存在セサル閉鎖灣
三十、「チユレニー」湖
三十一、「シエスチフートウォエ」湖
三十二、「バロン、コルワ」灣ノ北部
三十三、「コンスタンチン」太公灣
三十四、「スチヤースチヤ」灣
丁、軍略上ノ理由ニ基ク禁止灣
三十五、「デ、カストリー」灣及「フレデリックス」灣
三十六、「オルガ」灣
三十七、彼得大帝灣
三十八、「ポシエツト」灣

以上列記ノ場所ヲ除クノ外日本國臣民ハ日本海「オコーツク」海及「ベーリング」海ニ瀕スル何レノ場所ニ於テモ漁區ノ貸下ヲ願出ルトキハ之ヲ借受クルコトヲ得但シ漁業協約ニ依リ日本人ニ漁業ノ許可セラルヘキ方面ニ於ケル魚類ノ養殖保護之ニ關スル工業ノ取締並漁業上其ノ他一切ノ事項ニ關スル現行若ハ將來ノ法律規則ヲ遵守スヘキモノトス日本國臣民ハ此等方面ニ於テ漁區ヲ取得シタル露國臣民ニ對シ同一法律規則ノ適用アルニ非サレハ之ニ服從スルコトヲ要セサルハ言ヲ俟タサルモノトス

露國政府ハ又「ポーツマス」ニ於テ調印セラレタル講和條約第十一條第二項ノ適用以外ニ其ノ未タ日本國又ハ露國漁業者ニ貸下ケタル漁區ノ存在セサル場所ニ定住ノ爲來著スル移住民ニ對シテ漁業權ヲ許與スルノ權利ヲ留保スルコトヲ合意ス土民ニ對シテモ亦然リ然レトモ露國政府ハ一度漁區ヲ開設シタル場所ニ於テハ漁業協約存續期間內移住民又ハ土民ニ敍上ノ權利ヲ許與セサルヘキコトヲ約ス

「移住民」ナル文字ノ意義ニ關シ將來ノ一切ノ紛議ヲ避ケムカ爲之ニ關スル法律規則ノ內容ヲ日本國全權委員ニ通報スヘシ然レトモ露國法律ニ依レハ概シテ移住民ノ資格ハ漁夫ヲ使用スルコトナク身自ラ漁業ニ從事スル者及其ノ家族ニノミ之ヲ認ムルモノトス

「ボドカゲルナヤ」河口ヨリ「アヤン」港ニ至ル「オコーツク」海ノ北岸ニ關シテハ詳細ノ地圖ヲ缺クヲ以テ前揭一ト三トノ比ニ依リテ日本國臣民ノ爲ニ漁業ノ許可セラレサルヘキ入江ヲ確定スヘシ

二、漁業權ナル文字ハ膃肭獸及膃虎ヲ除クノ外一切ノ魚類及海產動植物漁獲ノ權利ヲ包含スルモノトス

三、黑龍江海灣「リマン」ノ漁區ハ日本國漁業者ニシテ若露國漁業者ト同一ナル河川漁獵ニ關スル法律規則特ニ該方面ニ於ケル外國人ノ漁夫使用ヲ禁止スル規定ヲ遵守スルニ於テハ露國漁業者ト均シク漁區ヲ取得スルコトヲ得ヘシ

露國全權委員ハ敍上ノ事項ヲ以テ全然不可分ノモノト爲シ且此等事項ニ關スル最終提案トシテ提出シタルヲ以テ日本國全權委員ハ之ヲ擁護シ之ヲ本國政府ニ移牒スルニ合意シタリ

（十四）「ケバストフ」閣下ヨリ本野閣下ニ至ル返信（千九百七年二月二日（一月二十日）附）

拜復陳者一月十六日ノ會見ニ於テ討議ニ附セラレ且承認ヲ經タル諸問題ヲ登載ノ覺書御囘附被下感謝ノ至ニ御座候右ノ爲乍延引茲ニ感謝ノ意ヲ表シ候右ニ就テハ總テノ點ニ於テ異存無之候間右御承知相成度此段得貴意候敬具

千九百七年一月二十日

「ケバストフ」（記名）

本野閣下

（十五）日本國全權委員ヨリ露國全權委員ニ至ル覺書（千九百七年二月二十八日（十五日）附）

日本國全權委員ハ二月一日（一月十九日）露國全權委員ニ移牒シタル覺書ノ內容ニ關シ兩國全權委員カ各其ノ本國ノ承認ヲ條件トシテ協定セル解決ノ日本國政府ノ承認ヲ受ケムコトヲ欲シ極力之ヲ擁護シ其ノ本案ヲ日本國政府ニ移牒スルコトヲ急速取リ計ヘリ

日本國全權委員ハ尙其ノ未タ解決ヲ經サル漁業協約ノ其ノ他ノ諸點ニ關シ日露兩國專門委員ノ間ニ開催セラレタル非正式ノ會見ノ結果ヲ東京內閣ニ通報シタリ

日本國全權委員ハ其ノ本國政府ヨリ新訓令ニ接シタルヲ以テ更ニ左ノ諸點ヲ露國全權委員ノ審案ニ附ス

一、佛語ノ入江（anse）又ハ英語ノ入江（inlet）ノ問題ニ關シテハ日本國政府ハ左ノ注意ヲ提示スルヲ要スト信ス

（甲）「ポーツマス」條約ハ河川及入江ヲ除クノ外日本國臣民ノ爲ニ漁業權ノ許與セラル可キ場所ヲ除外シタルコトナク又二月一日（一月十九日）附覺書ノ中ニ記載セラル軍略上ノ理由ニ基ク一定灣ノ除外ニ關シテハ何等記載セラル所非サルナリ故ニ日本帝國政府ハ漁業協約ヨリ此等諸灣ノ除外ヲ排斥スルヲ權利ナリト信ス

然レトモ日本帝國政府ハ妥協ノ精神ヲ證表セムカ爲日露兩國全權委員ノ協定ニ成レル解決ニ對シテ同意ヲ表スヘシ

（乙）之ニ反シ日本帝國政府ハ該覺書中乙號ノ下ニ列擧セラレタル七箇ノ除外灣ニ付テハ其ノ除外ヲ理由ナキモノト認メ之ニ關シ特ニ露西亞帝國政府ノ注意ヲ喚起セサルヘカラスト信ス

露國政府ノ意見ナラサル如ク日本國政府モ亦日本國全權委員ノ勸言ニ基キ且露國政府ニ對シ妥協ノ精神ヲ證表セムカ爲「入江」ナル文字ノ意義ニ關シ其ノ自己ノ意見ヲ放棄シ露國政府ノ主張ニ基ク「陸地ニ深ク灣入セル灣ノ意義」ナル本文字ニ關スル一般的定義ヲ承認セリ是ヲ以テ日本國政府ハ露國政府カ日本國政府ノ本妥協ノ精神ニ鑑ミ江口ノ幅ト其ノ灣入部分トノ比例ニ關シ有理ニ承認シ得ヘキ解決ヲ日本國政府ニ提供セラレムコトヲ期待スルノ權利アルヘシ露國政府ノ最後ノ提案ハ該比例ヲ以テ一ト三トノ關係ニ於テ定メムトシタルモノナルコトヲ日本國全權委員ノ報告ニ依リテ知ルニ及ヒ日本國政府ノ失望シタリシコトハ敢テ茲ニ之ヲ贅スルノ要ナシ

然レトモ本問題ヲ仔細ニ審査シタル後且日本國全權委員ノ勸言アリタルニ依リ日本國政府ハ若露國政府ニシテ除外灣ノ名ヲ附シ乙號ノ下ニ列擧セル七箇ノ灣ノ除外ヲ固執セサルニ於テハ妥協ノ精神ニ基キ一ト三トノ比例ヲ承認スヘシ日本帝國政府ハ該灣カ日本國臣民ノ漁場ヨリ除外セラルヘキ何等正當ノ理由ノ存スルヲ認メス故ニ日本國政府ハ露國政府カ敍上ノ問題ニ關シ其ノ自己ノ主張ヲ重テ唱道セムトスルニ對シテハ深ク主張スルヲ得ス

（丙）閉鎖灣ニ關シテハ日本國政府ハ之ヲ日本國臣民ノ漁場ヨリ除外スルニ同意ス然レトモ日本國政府ハ之ヲ特別項目中ニ列擧スルノ要アリト信セス日本國政府ノ意見ニ依レハ該諸灣ハ甲號ノ下ニ列擧シアル入江ノ種類中ニ入ルヘキモノナリ

二、黑龍江海灣（リマン）ノ漁業ニ關シテハ日本國全權委員ハ既ニ露國全權委員ニ對シ說示シタルカ如ク日本漁夫ノ使用ニ關シ露國政府ノ附セル制限ハ日本帝國政府ノ意見ニ依レハ露西亞帝國政府ノ爲セル讓與ヲシテ殆ムト有名無實ノモノト爲ラシムルモノナリ該方面ニ於ケル日本國企業家ハ露國企業家ニ比シ著シク劣等ノ狀態ニ陷ルヘキナリ是故ニ日本國政府ハ少クモ漁夫ノ半數ハ之ヲ日本國臣民ノ中ヨリ採用スルコトヲ日本國漁業者ニ許可セラレンコトヲ露國政府ニ望ム

三、漁業協約ノ其ノ他ノ點ニ關シ落合「ブラジニコフ」兩氏間ニ開催セラレタル會見ニ關シテハ日本國全權委員ハ本國政府ノ訓令ニ基キ左記ノ事項ヲ露國全權委員ニ提案スヘシ

魚類並水產物ノ製造ニ關スル新條項本條項ハ即左ノ如ク規定セラルヘシ

日本國臣民ハ貸下ヲ受ケタル漁區以外ノ他ノ場所ニ於テ露國臣民ト同一條件ニ於テ魚類並水產物ノ製造ニ從事スルコトヲ得

日本帝國政府ハ露西亞帝國政府ノ承認ヲ得ムト欲シ本條項ヲ提案スト雖畢竟是既ニ兩國ノ承認ヲ經タル通商航海條約（第一條第二項）中ノ一般的確認ヲ要求スルニ外ナラス露國政府ハ實ニ該條約ニ依リテ兩國臣民ハ他方領土ノ何レノ場所タルヲ問ハス其ノ國ノ法律命令及規則ヲ遵守スルニ於テハ一切ノ工業又ハ職業ヲ營ミ得ルコトヲ合意セルモノニシテ今本委員間ノ問題トシテハ唯單ニ魚類ノ製造ニ關スル工業ニ關シテ言フノミ故ニ日本國政府ハ露國政府カ本提案ニ對シ其ノ承認ヲ拒絕スヘキ理由ヲ發見セス是通商航海條約ノ中ニ承認セラルル一般原則ノ特殊ノ適用ニシテ此ノ工業自由ノ原則ハ又露國ト他國トノ條約就中獨逸及墺地利洪牙利國トノ條約中ニ外國人ニ對シ許與セラレタルモノナルヲ以テナリ是故ニ日本帝國政府ハ本特殊ノ事項ニ關スル通商航海條約ノ適用ニ關シテ一切ノ紛議ヲ芟除セムカ爲ニ本提案ノ露國政府ノ容ルル所トナラムコトヲ切望スルモノナリ

四、日本國臣民ノ爲ニ漁業ノ許可セラルヘキ場所ハ河川並入江ヲ除外セルヲ以テ日本國政府ハ露國政府カ該除外河川並入江以外ニ既ニ存在スル漁區ニ付テハ本漁業協約ノ存續期間內其ノ儘之ヲ開キ置クヘキコトヲ將來ノ爲保證セラレムコトヲ望ム

（十六）本野閣下ノ口上書（千九百七年三月八日（二月二十三日）發送）

日本帝國政府ハ露西亞帝國政府カ一箇年ヲ期間トシ且漁業協約談判委員ノ既ニ到達シタル效果ニ鑑ミ久シカラスシテ日本海「オコーツク」海及「ベーリング」海ニ於ケル漁區ヲ競賣ニ附セムトスルノ企畫アルヲ知リタルヲ以テ本漁業協約ノ近ク締結セラルヘキヲ期待シ兩國政府ノ間ニ既ニ意見ノ符合スルモノナキ方面ニ於ケル此等漁

區ノ競賣ヲ日本國漁業者ノ爲ニモ一時的方法トシテ許與セラルルニ於テハ深ク露國政府ニ感謝スル所ナリ

（十七）露國全權委員ヨリ日本國全權委員ニ至ル覺書（千九百七年三月（十七日 四日）附第四五一號露國外務省第一局）

一月二十九日（十六日）ノ非正式ノ會見ニ於テ露國全權委員ハ露國政府ノ妥協ノ精神ヲ證表セムカ爲ニ「ブラジニコフ」氏ノ落合氏ニ提示セル露國政府ノ名ヲ以テ制定セル其ノ最後ノ提案ヲ修正スルコトニ同意シタリ而シテ兩國全權委員ノ間ニ協定案ノ既ニ成立シタルニ依リ露國全權委員ハ兩國全權委員ノ間ニ成立セル解決ハ露國ノ爲ニハ全然不可分ノモノニシテ且確定的ノモノナルコトヲ聲明シタリ（二月一日 一月十九日）ノ本野閣下ノ覺書參照）

露國政府ハ又先ノ意見ヲ維持スルヲ以テ自己ノ權利ナリト信ス

然レトモ露國全權委員ハ成ルヘク速ニ兩國ノ利益ニ關シ公平和親ノ妥協ヲ遂ケムト欲スル念切ナルヲ以テ若三月十三日（二月二十八日）ノ非正式會見ニ於ケ成立セル兩國全權委員ノ協定ヲ以テ之ヲ最終確定ノモノト認メ得ルニ於テハ二月二十八日（十五日）附覺書中ニ記載セラレタル日本國政府ノ提案ヲ承認スルニ躊躇セサルヘシ

一、佛語ノ入江（anse）又ハ英語ノ入江（inlet）ノ問題ニ關シ露國政府ハ日本國政府カ軍略上ノ理由ヲ名トセル灣ヲ漁業協約ヨリ除外スルニ同意セラレタルヲ深謝ス露國政府ハ除外灣ト稱スル四個ノ灣（「ヒートル」灣、「ケルーポカヤ」灣、「ウイリユーチンスキー」灣、「アホムテン」灣）ヲ本協約ヨリ除外スルコト竝特別項目中ニ閉鎖灣ト稱スルモノヲ設クルコトニ關シテハ强テ主張スルモノニアラス

二、黑龍江海灣（リマン）ノ漁業問題ニ關シテハ露國政府ハ先ノ意見ヲ修正スルコト能ハサルヲ遺憾トス而シテ黑龍江海灣方面ニ於テ漁區ヲ取得シタル日本國臣民ハ露國ノ漁業者ト同一制度ノ拘束ヲ受クルヲ至當ト信ス

三、魚類竝水產物ノ購買及製造ノ問題ニ關シテハ露國政府ハ十月二十五日（十二日）露國全權委員ノ聲明セルカ如ク若日本國臣民ニシテ現行若ハ將來ノ法律、規則及命令ヲ遵守スルニ於テハ本漁業協約ヨリ除外セラルル場所ニ於テモ尙魚類ノ購買竝製造ノ權利ヲ他ノ外國人ト均等ニ日本國臣民ニ許與セムトス

四、露國政府ハ漁業協約中ニ認メラルル方面カ河川竝入江除外ノ爲ニ著シク縮減セラレタリト信セス而シテ却テ該除外河川竝入江以外ニ現ニ存在スル漁區ハ移住民ノ既ニ占有スル所トナレルモノヲ除キ本協約ノ存續期間內其ノ儘之ヲ開キ置クヘキコトヲ將來ノ爲保證セムトスルモノナリ

右注意スヘキ點ハ三月十三日（二月二十八日）ノ非正式會見ニ於テ日本國全權委員ニ通報シ而シテ一月十六日ノ協定ニ敍上ノ修正ヲ加ヘ茲ニ兩國全權委員ノ間ニ一ノ確定協定成立シタリ

露國政府ハ此等重要ノ讓與ヲ爲セルニ依リ日本國政府カ兩國全權委員ノ間ニ良好ニ成立セル本協定ニ對シ速ニ承認ヲ與ヘラレムコトヲ望ム

（十八）「ゲベストフ」閣下ノ口上書（千九百七年三月（二十八日 十五日）附露國外務省第一局）

千九百七年（三月二十八日 三月十五日）ノ口上書ニ對スル回答トシテ露西亞國全權委員ハ漁業ノ現狀ニ鑑ミ漁區ノ問題ニ關シテハ日本國政府ト迅速ナル一致ヲ見ルコトヲ希望スルニ依リ帝國政府ハ漁業協約締結ニ至ル迄前記ノ問題ノ迅速ナル解決ヲ延期スルヲ便レリトスルコトヲ本野閣下ニ通牒スルノ光榮ヲ有ス

（十九）日本國公使本野閣下ヨリ露國外務大臣「イズヴォルスキー」閣下ニ至ル覺書（千九百七年（四月九日 三月二十七日）附）

日本國外務大臣ハ漁業協約ノ談判ニ關シ最近生シタル紛議ヲ解決スルカ爲ニ外務大臣閣下ノ懇篤ナル協力ヲ仰カムトス

漁業協約ハ兩國全權委員ノ間ニ久シキニ亙リ困難ナル談判ヲ重ネタル後今ヤ將ニ兩國ノ代表者ニ依リ調印セラレムトスルノ狀況ニ達シタリ

然レトモ今ニ至ル迄不幸ニシテ日本國全權委員ノ其ノ本國政府ヨリ承認ヲ得ル能ハサリシモノ一點アリ即黑龍江海灣ノ漁業ニ關スル問題之ナリ

露國全權委員ハ日本國全權委員ノ切ニ願フ所アリシニ拘ハラス黑龍江海灣ニ於ケル漁業ニ關シテモ他方面ニ於ケルト均シク日本企業家ノ爲ニ日本漁夫ヲ使用シ得ムコトヲ要求セル日本國政府ノ提案ヲ承認セサリシヲ以テ日本國全權委員ハ本問ニ關スル露國全權委員ノ抗議ヲ東京內閣ニ移牒スルニ同意シタリ日本國全權委員ハ其ノ約旨ノ如ク制限ノ附セラレタル漁業協約草案ノ調印セラレムコトヲ本國政府ニ上申シタリ

日本國政府ハ本問題ニ關シ更ニ仔細ニ審査ヲ遂ケタル後左記ノ理由ニ基キ先ノ要求ヲ重テ主張セサルヲ得サルニ至リタリ

黑龍江海灣方面ニ於ケル露國人ノ漁業ハ著シク發達セル狀況ニ在ルヲ以テ若該方面ニ於テ漁區ヲ取得シタル日本企業家ノ爲ニ日本漁夫ヲ使用スルコトヲ許可セラルルニ非サレハ該方面ニ關シ露國政府ノ爲セル讓與ハ全ク有名無實ノモノトナルニ至ルヘシ故ニ若露國全權委員ノ屢詳述セラレタル理由ニ基キ日本漁夫ヲ全部使用スルコト能ハサルニ於テハ日本國政府ハ少クモ其ノ半數ヲ日本人ノ漁夫ノ中ヨリ採用スルコトヲ日本國企業家ニ許可セラレムコトヲ露國政府ニ切望ス

日本國政府ハ漁業協約ノ問題ニ關シ聖彼得堡ニ於ケル其ノ全權代理人ニ最後ノ訓令ヲ與ヘムカ爲本問ニ關スル露國政府ノ回答ヲ焦慮シテ期待スルモノニシテ日本國外務大臣ハ此ノ最近ノ紛議解決ノ爲ニ「イズヴォルスキー」閣下ノ極力盡瘁セラレムコトニ付深ク感謝スルモノナリ

（二十）日本國全權委員ヨリ露國全權委員ニ至ル覺書（千九百七年（四月十日 三月二十八日）附）

日本國全權委員ハ三月十三日（二月二十八日）ノ非正式會見ニ於テ露國全權委員トノ間ニ成レル協定ニ基キ該會見ニ於テ定メタル決定ヲ日本國政府ニ移牒シタリ

日本國政府ハ日本國全權委員ノ報告ニ接シ茲ニ新ニ其ノ妥協ノ精神ヲ露國政府ニ對シテ證表セムト欲シ魚類竝水產物ノ輸入稅免除ニ關スル露國ノ反對提案ヲ主義トシテ承認ス本讓與ハ日本國草案第十條ニ連接シテ挿入セラルヘキ特別條項ノ目的トナルヘキモノニシテ其ノ條文ハ左ノ如シ

日本帝國政府ハ露西亞帝國政府カ本協約ニ依リ日本國臣民ニ對シ漁業權ヲ許與シタルコトニ鑑ミ本協約第一條ニ特定セラルル露國領水內ニ於テ漁獲シタル魚類及水產物ニ對シ其ノ製造セラレタルト否トヲ問ハス何等ノ輸入稅ヲ課スルコトナキヲ約ス

日本帝國政府ハ該記入カ露西亞帝國政府ノ爲ニ充分滿足ヲ與ヘムコトヲ望ム

漁業協約草案ノ其ノ他ノ諸點ニ關シテハ日本國政府ハ其ノ全權委員ニ對シ最後ノ訓令ヲ與フルニ先チ左記ノ諸點即同草案ノ比較的重要ナル諸點ノ討議セラルルニ際シ未解決ノ儘ニ附セラレタル諸點ヲ確定セラレムコトヲ望ム

一、第一條ノ字句ニ關シテハ日本帝國政府ハ「、、、海ニ瀕スル沿岸」ナル語ニ代フルニ「日本海、「オコーツク」海竝「ベーリング」海ニ於ケル露國領水ノ全部ニ於テ」ナル語ヲ以テセムト欲ス該字句ハ露國ノ爲セル讓與ノ實際ニ最好ク適合スルモノトス何トナレハ該讓與ハ露國ニ屬スル領水內ニ於テノミ有リ得ヘキ理由ノモノナルヲ以テナリ露國ノ領水以外ニ於テハ何等讓與ノ必要ナラサルハ明ナルコトニ屬ス

二、第二條及第七條ニ於テハ日本帝國政府ハ「漁業者」ナル文字ニ代フルニ「日本國臣民」ナル文字ヲ使用セムコトヲ欲ス蓋シ是魚類ノ製造業ニ從事シ得ヘキモノニシテ漁區ヲ有セサル日本國臣民ハ有リ得ヘカラサルコトニ屬スルヲ以テナリ

三、日本帝國政府ハ露國政府カ日本漁業者ノ其ノ漁區內ニ於テ網ヲ建ツルコトニ異議ヲ挾マサルコトヲ信ス

然レトモ本項ノ詳細ニ關シ一切ノ誤解ヲ避ケムコトヲ欲シ日本帝國政府ハ之ヲ漁業協約草案ノ中ニ確定セムコト[illegible]條項ハ本協約明文確定ノ際之ヲ選擇スルコトトスヘシ

四、魚類製造ノ權利ニ關シ新ニ設ケラレタル第八條中日本帝國政府ハ「外國人」ナル文字ノ前ニ「一切ノ」ナル文字ヲ附加セムコトヲ欲ス即本條ノ最終部分ハ左記ノ如ク規定セラルヘシ

露西亞帝國在留一切ノ外國人ニ適用セラルル現行若ハ將來ノ法律、命令及規則ヲ遵守シ

三月十三日（二月二十八日）ノ非正式會見ニ於テ日本國全權委員ハ魚類ノ購買竝製造ニ付日本國臣民ノ爲ニ許與セラレタル權利ニ關シ新ニ設定セラレタル條項ノ中ニ規定セラレタル原則ヲ承認シ而シテ日本國臣民ニ對シ課セラルヘキ制限ノ[illegible]ナラサルヘキコト竝成ルヘク其ノ制限ノ縮少セラレムコトヲ要求シタリ

然ルニ露國全權委員ハ露國政府ノ意思ハ黑龍江方面ノ如キ監視ノ容易ニ行ハレ得ヘキ地方ニ於テハ露國臣民ト均等ニ日本國臣民ニ對シ敍上ノ權利ヲ許與スルニ在ルコト竝該制限ハ露國官憲ノ爲ニ監視ノ困難ナル地方ニノミ限ラルヘキモノナルコトヲ回答シタリシヲ以テ日本國全權委員ハ此等聲明カ會議錄ノ中ニ引證セラレムコトヲ要求シタリ

日本國全權委員ハ敍上ノ會見ニ於テ露國全權委員ノ爲セル約束ニ從ヒ敍上ノ聲明カ本談判會議錄作成ノ際其ノ中ニ引證セラルヘキコトニ付露國全權委員ノ異議ナカルヘキコトヲ信スルモノナリ

五、三月十三日（二月二十八日）ノ非正式會見ニ於テ露國全權委員ハ日本國全權委員ニ對シ沿岸航海ニ關シ日本國漁船ニ對シテ課セラレタ

ル條件ハ新規定ニ依レハ舊來ニ於ケルヨリモ輕減セラレタルモノナルコトヲ說示セムト欲シタリ蓋シ舊來ノ規則ニ依レハ漁場ニ到ル一切ノ漁船ハ檢査ヲ受クル爲先ツ浦潮斯德若ハ「ニコラーエウスク」ニ航行スルヲ要シ又日本國ニ歸航スルニハ同一ノ手續ヲ必要トシタリシモ拘ハラス新規定ニ依レハ此等手續ハ最早必要ナラサルヲ以テナリ

日本國政府ハ本聲明ニ同意シ本聲明ノ會議錄中ニ引證セラレムコトヲ望ム

六、黑龍江海灣（リマン）ノ漁場ニ於テ日本人ノ漁夫ヲ使用スルノ件ニ關シテハ日本國全權委員ハ四月十日（三月二十八日）附ヲ以テ日本國外務大臣ヨリ露國外務大臣ニ宛同送シタル機密覺書ヲ參照セラレムコトヲ露國全權委員ニ望ム

（二十一）露國外務大臣「イズヴォルスキー」閣下ノ回答覺書（千九百七年四月十三日／三月三十一日附第六六號露國外務省第一局）

四月九日（三月二十七日）附日本國公使ノ覺書ニ接シ露國外務大臣ハ「漁業條約」締結ノ目的ヲ以テ開催セラレタル談判カ今ヤ將ニ其ノ終局ヲ告ケムトスルノ時機ニ到達シタルニ對シ深ク滿足ノ意ヲ表スルモノナリ

露國全權委員ニ移牒セラレタル四月十日（三月二十八日）附覺書ヲ以テ提案セラレタル本協約明文中一部ノ修正問題ニ關シテハ下調委員會ノ審査ニ附スヘシ何レノ場合ニ於テモ露國外務大臣ハ之カ爲ニ確定的協定成立ノ障害トナラサランコトヲ希望スルモノナリ

之ニ反シ露國外務大臣ハ黑龍江海灣ノ問題ニ關シ三月十三日（二月二十八日）ノ非正式會見ニ於テ兩國全權委員ノ決議シタル協定ヲ承認セムトスルニ付テハ日本國政府ノ抗拒ニ依リテ生シタル紛議ヲ以テ一層大事ト爲スモノナリ通稱「ニコラーエウスク」即黑龍江口ト同海灣トノ間ニ於ケル漁場地方ハ現ニ絕東ニ於ケル露國漁業一切ノ根元地トシテ使用セラルルモノナルカ故ニ該地方ハ露西亞帝國ノ利益ノ爲ニ最重要ナルモノナリトス露國全權委員ハ此ノ事實ニ關シ反覆日本國全權委員ノ注意ヲ喚起シタリ

露國政府ハ適當確實ナル妥協ノ端ヲ啓カムコトヲ希望スルニモ拘ハラス露國臣民ニ優ル權利ヲ日本漁業者ニ許與シ又露國臣民カ自國國家ノ利益ノ爲ニ服從セサルヘカラサル黑龍海灣ニ於ケル漁業取締規則ヲ日本國漁業者ノ爲ニ改正スルヲ得ス

日本國ノ要求ニ應セムカ爲敍上ノ意嚮ニ於テ爲シ得ヘキモノハ一月十六日及二月二十八日ノ非正式會見ニ於テ提示シタル露國全權委員ノ提案中ニ既ニ之ヲ說示シタリ

本問題ノ滿足ナル解決ヲ得ムカ爲ニ露國政府ハ他ノ諸點ニ關シ夥多ノ讓與而モ「ポーツマス」條約ノ範圍ヲ超越シテ尙夥多ノ讓與ヲ爲シタリ

是故ニ三月十三日ニ協定セラレタル漁業協約（就中黑龍江海灣ニ於ケル日本漁夫認許ノ條件）ノ基本案ヲ確定シタル兩國全權委員ノ合意ハ露國委員ニ於テハ之ヲ全然不可分ノモノト認メサルヘカラス而シテ本意見ハ露國全權委員ノ發言シ日本國全權委員ノ承認スル所トナレルモノナリ

敍上注意スヘキ諸點ニ關シ露國外務大臣ハ三月十三日（二月二十八日）ノ會見ニ於テ幸ニシテ議定スルヲ得タル妥協ニ關シ日本國外務大臣ノ其ノ本國政府ヲシテ承諾ノ意ヲ表セシムル樣極力盡瘁セラレムコトヲ希望ス

若夫一切ノ協定ニ反シ東京內閣ニシテ其ノ最後ノ訓令ヲ維持主張セラルルニ於テハ露西亞帝國政府ハ敍上協定ノ基本草案ヲ更ニ討議ニ附スルヨリ他ニ方法ヲ發見セサルナリ

（二十二）露國全權委員ヨリ日本國全權委員ニ至ル回答覺書（千九百七年四月十五日／二日附第六八一號露國外務省第一局）

露國全權委員ハ去ル四月十日（三月二十八日）附日本國全權委員ノ覺書ニ對スル回答トシテ先ツ日本國全權委員カ其ノ本國政府ヨリ魚類及水產物ノ日本國ニ於ケル輸入稅免除ノ件ニ關シ承認ヲ得ラレタルコトヲ日本全權委員ニ對シ感謝ス本問題ヲ規定スヘキ條項ノ字句ニ關シテハ露國全權委員ハ本問ヲシテ最明確ナラシメムカ爲メニ「本協約第一條ニ特定セラルル露國領水內ニ於テ漁獲セラレタル」ナル字句ニ代フルニ「黑龍江地方諸洲ヨリ產出スル」ナル文字ヲ以テセムコトヲ提案スルノ必要ナルヲ認ム

本協約草案中ノ其ノ他ノ條項決定ニ關シ日本國政府ノ加ヘムトスル修正ニ關シテハ露國全權委員ハ之ヲ承認スルニ異議ナシ然レトモ露國全權委員ハ本協約明文ノ最終編成ヲ命セラルヘキ委員會ニ詳細ノ研究ヲ委ネラルヘキモノト思考ス

之ニ反シ露國全權委員ハ本協約ヨリ除外セラルル方面ニ於テ魚類ノ購買及製造ヲ日本國臣民ニ許與スルノ件ニ關シ露國政府ノ意見ヲ[illegible]明確ニセムト欲ス

露國政府ハ三月二十三日ノ非正式會見ニ於テ聲明シタルカ如ク「ニコワーエウスク」[illegible]及同海灣ノ方面ニ於テ[illegible]業ニ從事スル總テノ外國人ノ爲ニ設定セムコトヲ提案ス但シ其ノ監視ノ困難ナル方面ニハ之ヲ擴張セサルノ留保ヲ以テス露西亞帝國政府ハ敍上ノ意見ヲ有スルカ故ニ日本國臣民ハ魚類ノ購買及製造ニ關シ何等專恣ノ抑制ヲ受ケサルハ明ナリ

露國全權委員ハ日本國全權委員ト全然意見ヲ同ウスルヲ以テ本協約ノ條項ニ關スル一切ノ必要ナル說明カ同會議錄中ニ引證セラルルコトニ對シテ何等ノ異議ナシ去ル四月十日（三月二十八日）附ノ覺書第六項ニ揭載セラルル問題ニ關シテハ去ル四月十三日（三月三十一日）附外務大臣ノ回答ヲ以テ之ニ應答シタリシ所ニシテ露西亞帝國政府ノ意見ハ該回答中ニ全部表白セラル

露國全權委員ハ會議ノ發端ヨリ相互ニ妥協ノ精神ヲ以テ擁護セラレ談判ノ滿足ナル進行ヲ見ルニ至リタルヲ欣幸トシ本會議ハ久シカラスシテ兩國ノ利益ノ爲ニ最有益ナル完全ノ協定ヲ得ルニ到ル可キコトヲ深ク確信スルモノナリ

（二十三）「ケパストフ」閣下ヨリ本野閣下ニ至ル半公信（千九百七年四月十七日／四日附）

拜啓陳者本官ハ露國企業者ニ漁區ノ分配ヲ行フ爲ニ定メラレタル期間ノ滿了シタルコトヲ閣下ニ通告セントスルモノニ有之候

吾人ハ今日迄ノ談判ノ性質ニ鑑ミ數日間右期間ノ延期ヲ農務省ニ要請致スヘク候就テハ季節モ極テ進ミ居ル次第ニ有之候間成ルヘク速ニ貴公使ノ回答ヲ得候樣致シ度候

右申進旁得貴意候草々敬具

千九百七年四月十七日／四日

「ケパストフ」（記名）

本野氏宛

（二十四）本野閣下ヨリ「ケパストフ」閣下ニ至ル返信（千九百七年四月十九日／六日附）

拜啓陳者帝國政府ハ現在猶懸案トシテ殘レル餘リ重要ナラサル問題ニ付爲サルヘキ決定ニ關セス兩國政府カ既ニ其ノ大綱ヲ解決シタル漁業協約ニ調印スルコトニ決定セシ旨外務大臣ヨリ通知有之候ニ付本使ハ日本國臣民カ兩國政府ノ既ニ一致セル各方面ノ漁場ニ於テ本年ヨリ短期漁區ノ競賣ニ入札スルコトヲ得ルコトニ必要ナル處置ヲ執ラレムコトヲ閣下ニ要請スルノ光榮ヲ有シ候

右申進旁得貴意候草々敬具

千九百七年四月十九日／六日在聖彼得堡日本國公使館
ニ於テ

本野一郎（手署）

「ケパストフ」氏宛

（二十五）千九百七年五月四日／四月二十一日聖彼得堡ニ於テ作成シタル日露漁業協約ノ原則ノ承認ヲ證スル議定書

日露兩國全權委員ハ「ポーツマス」講和條約第十一條ニ從ヒ將ニ調印セラルヘキ漁業協約ノ主要ノ諸點並一月十六日／三日及三月十三日／二月二十八日ノ全權委員非正式會見ニ於テ成立セシ協定ノ基礎ニ關シテ一致シタルニ依リ（本年二月一日／一月十九日附日本國全權委員ノ覺書及三月十七日／四日附露西亞國全權委員ノ覺書參照）兩國政府ハ成ヘク短キ期間內ニ前記協約ニ調印スヘキコトヲ約ス右協約ニ依リ日本國臣民ハ河川及入江（インレット）ヲ除キ日本海、「オコーツク」海及「ベーリング」海ニ瀕スル露西亞國沿岸ニ於テ膃肭獸及膃虎以外ノ一切ノ魚類及水產物ヲ捕獲、採取及製造スルノ權利ヲ許與セラルヘシ前記入江ハ覺書ニ於テ定義ヲ下シ並之ヲ列擧スヘシ從テ兩國全權委員カ全然一致セル諸地方ニ於テ本協約ノ決定セル從下期間以外ニ亙ル當漁季間ノ漁區競賣ニ入札スルノ權利ヲ日本國臣民ニ許與スルコトハ露西亞帝國政府ノ困難トセサル所ナリ

右證據トシテ千九百七年五月四日／四月二十一日聖彼得堡ニ於テ本議定書二通ヲ作リ之ニ記名シタリ

本野一郎（記名）

「セー、ケパストフ」（記名）

（二十六）日露漁業協約締結會議錄第四號

第四回會議

千九百七年六月十八日／五日午後三時開會

列席者

日本國　本野全權委員書記官落合氏、丸毛氏及澤田氏

露西亞國　「ケパストフ」全權委員、委員「ワンゴボイ」氏、「アレキセーエフ」氏、書記官「マイエンドルフ」男爵、「ヴォズネセンスキイ」氏

露國全權委員ハ開會ノ際左ノ旨ヲ述ヘタリ

十月二十五日（十二日）ノ會議ニ於テ「入江」即佛語ノ「アンス」英語ノ「インレット」ノ字義ヲ確定セムカ爲一ノ下調委員會ヲ設置スヘキコトノ決定アリタリ此ノ下調委員會ハ精勤數個月ノ後其ノ調査ノ結果ヲ復命シタルカ尙之ニ次テ漁業協約ノ目的タル其他ノ問題ヲ研究スルノ命ヲ受ケタリ

委員諸氏カ是等ノ諸問題ニ對シ與ヘタル解決ハ兩國全權委員ノ承認ヲ得且兩國全權委員カ非正式ニ爲シタル數度ノ會見ニ於テ爭議ニ係ル重要ナル諸點ニ付概括的ノ協議ヲ成立セシ

メタリ

斯ノ如クシテ兩國全權委員ハ今ヤ協約及附屬議定書ノ全文ヲ有スルコトトナレリ

日本國全權委員ハ左ノ如ク之ニ答ヘタリ

露國全權委員閣下

十月二十五日(十二日)ノ會議ニ於テ「入江」ノ字義ヲ確定セムカ爲下調委員會ヲ設置スルノ議ヲ承諾シタル際ニハ本員ハ閣下カ本員ノ提言ニ付爲サレタル批評中ノ數點ニ關シ留保ヲ爲シ置クノ必要アルヲ信シ閣下ニ對スル回答ハ次期開會ノ際ニ於テ之ヲ爲サムト欲シタリ然ルニ其ノ後諸種ノ難問ハ或ハ兩國全權委員ノ非正式ノ會見ニ依リ或ハ後ニ至リ兩國全權委員ノ合意ヲ以テ權限ヲ擴張シタル下調委員會ニ於ケル討議ニ依リ之ヲ除去スルコトヲ得タルカ故ニ本員ハ過去ニ於ケル意見ノ差異ヲ喋喋スルハ今日全ク無益ナルヘキコト並現在ニ於テハ漁業協約及之ニ關スル議定書ノ諸條文ヲ確定スルヲ得ルモノナルコトヲ信ス

露國全權委員ハ日本國全權委員ノ宣言ニ對シテ感謝ノ意ヲ表シ尚此ノ際直ニ是迄數度ノ非正式會見ニ於テ雙方ノ間ニ協定シタル基礎ヲ確立シ且漁業協約及議定書ノ條文ヲ逐條確定スルコトハ最機宜ニ適スルモノナルヘシト述ヘタリ

是ニ於テ「マイエンドルフ」男爵ハ露國全權委員ノ命令ニ依リ協約及議定書ノ條文ヲ朗讀セリ

日本國全權委員及露西亞國全權委員ハ本日ノ會議ヲ閉ツルニ先チ互ニ左記ノ宣言ヲ爲セリ

一、「オコーツク」海北岸ニ關シ露西亞帝國政府ハ同沿岸ニ於テ至急ニ著手スヘキ測量調査ノ結果ヲ俟タスシテ日本國臣民ニ對シ「入江」即佛語ノ「アンス」英語ノ「インレット」ノ定義中ニ明ニ包含セラレサル場所ニ於テハ漁區ヲ貸下クルコトヲ約諾ス

二、黑龍江海灣(リマン)ノ漁區ニ於ケル外國勞働者ノ使用禁止ニ關シ露國全權委員ハ日本國全權委員ニ對シテ左記ノ說明ヲ爲セリ」

長期漁區ニ於テハ漁業並魚類ノ製造ニ付外國勞働者ノ使用ヲ禁止ス但シ右漁區ノ所有者ハ自己ノ漁區ヲ距ルコト約半「ヴェルスト」又ハ一「ヴェルスト」ノ場所ニ於テ土地ノ短期貸下ヲ請願スルトキハ其ノ貸下ヲ受クルコトヲ得ヘシ此ノ貸下地區ハ魚類ノ製造用ニ供スヘキモノニシテ其ノ範圍內ニ於テハ使用勞働者ノ國籍ニ付何等ノ制限ヲ設ケサルヘシ

短期漁區ニ於テハ單ニ魚類ノ捕獲ニ關シテノミ外國勞働者ノ使用ヲ禁止ス魚類ヲ製造スルカ爲ニハ陸上ニ於テ如何ナル國籍ノ勞働者ヲモ使用スルコトヲ得ヘシ

長期漁區並短期漁區ニ於ケル前記國籍ノ制限ハ監督者、派出員又ハ手代等ノ如キ勞働者ノ階級ニ屬セサル者ニ對シ其ノ適用ナキハ言ヲ俟タサルモノトス

三、「短期漁區」ナル文字ハ貸下期間一箇年ヲ超エサル漁區ニノミ之ヲ適用スルモノトス

四、漁業協約第一條ニ特定シタル各方面ニ於ケル漁區ニシテ同協約實施前長期ノ貸下ヲ爲シタルモノハ其ノ實施後ニ於テモ亦同シク直ニ長期ノ貸下ヲ爲スヘキコトヲ協定ス

五、漁業ノ爲露國領水內ヲ航行スル一切ノ日本國汽船ハ露譯若ハ英譯ノ航海日誌ヲ備フヘシ漁業ノ爲露國領水內ヲ航行スル日本國帆船モ亦成ルヘク前記ノ規定ニ從フヘシ

六、漁業協約第十一條ノ原則既ニ確定シタルニ付日本國全權委員ハ露西亞帝國政府カ同條ノ適用ヨリ生スルコトアルヘキ諸制限ヲ日本國臣民ニ加フルニ當リテハ單ニ公ノ秩序ノミヲ考慮スルノ方針ヲ採リ事情ノ許ス限リ該制限ヲ減少セラレムコトヲ希望スル旨ヲ述ヘタリ之ニ對シ露西亞國全權委員ハ右ノ見解ニ同意ノ旨及露西亞國政府ノ意思ハ同條記載ノ工業ヲ爲ス一切ノ外國民ニ對シテ「ニコラーエウスク」方面(黑龍江ノ河口及同海灣即チ「リマン」)ニ於ケル既存ノ法制ヲ施行スルニ在リ尤モ監督困難ナル地方ニハ該法制ヲ適用セサルコトアルヘキ旨ヲ答ヘタリ

七、日本國全權委員ハ露西亞國全權委員カ漁業協約第五條ノ文言ヲ確定的ニ承諾シ之ニ依リ露西亞國政府カ沿海洲(露領樺太ヲ含ム)及黑龍江洲ノ露西亞國領水內ニ於テ漁獲又ハ採取セラレ日本ニ輸出セラルヘキ魚類及水產物ハ其ノ製造セラレタルト否トヲ問ハス之ニ對シテ何等ノ名稱ヲ以テスルモ稅金ヲ取立テサルヲ約シタルコトヲ認メタルニ依リ日本國政府ハ沿海洲(露領樺太ヲ含ム)及黑龍江洲ノ露西亞國領水內ニ於テ漁獲又ハ採取セラレ日本國ニ輸入セラルル魚類及水產物ハ其ノ製造セラレタルト否トヲ問ハス之ニ對シテ同協約第十二條ニ記載シタル輸入稅ハ固ヨリ何等ノ名稱ヲ以テスルモ稅金ノ取立ヲ爲ササルヘキコトヲ宣言セリ

八、漁業協約第一條ニ記載シタル例外タルヘキ或入江(「インレット」)ニ關シ將來紛議ノ

原因ヲ全然除去セムカ爲前記諸入江ノ精細ナル境界ヲ示セル地圖ヲ本會議錄ニ添附ス

是ニ於テ露西亞國全權委員ハ左ノ通リ發言セリ

「ポーツマス」條約第十一條ニ基キ漁業協約ヲ締結セムカ爲客年八月一日ヲ以テ開始シタル商議ノ幸ニシテ茲ニ終ヲ告ケタルハ本員ノ深ク滿足スル所ナリ

本員等カ不日調印セムトスル協約ハ「オコーツク」海、日本海及「ベーリング」海ニ於ケル露西亞國沿海ノ海產物漁獲ニ付全ク其ノ狀態ヲ改メ其ノ條件ヲ確定スルモノナルカ故ニ此ノ協約ハ該方面ニ於ケル經濟力ノ發展ニ資スルモノアルヘシ

今回ノ商議ハ其ノ性質ノ特殊ナルカ爲甚難澁ナリキ然レトモ右商議ハ兩國ノ利益ヲ甚シク損傷スルコトナクシテ兩國ノ工業家ヲシテ海中ノ財源ヲ開拓セシムルヲ以テ終始其ノ目的ト爲シタリ

漁業協約及附屬議定書ノ條文ハ今日全ク確定セラレタルヲ以テ本員ハ茲ニ日本國ノ同僚カ交涉ノ終始ヲ一貫シテ表彰セラレタル其ノ公平及調和ノ精神ニ對シ喜ヒテ感謝ノ意ヲ表ス本員ハ又同時ニ本員竝本員ノ同僚ノ名ヲ以テ日本帝國公使館ノ書記官諸君ニ向ヒ其有效ニシテ且友愛ナル協力ニ對シテ感謝ノ意ヲ表ス

日本國全權委員ハ之ニ對シ左ノ答辭ヲ述ヘタリ

露西亞國全權委員閣下

今回ノ難澁ニシテ時ニ困憊セル商議ヲ決了スルヲ得タルハ全ク閣下ト等シク本員ノ滿足ヲ感スル所ニシテ商議ノ進行中閣下カ絕エス表彰セラレタル正義及調和ノ精神ニ對シ此ノ機ニ附シテ敬意ヲ表スルヲ得ルハ本員ノ幸トスル所ナリ而シテ特ニ下調委員諸君ニ向ヒ本員ハ諸君カ兩國共ニ滿足スヘキ結果ヲ以テ此ノ商議ヲ終結セシムルカ爲ニハ如何ナル勞苦ヲモ辭セラレサリシコトニ對シテ特ニ感謝ノ意ヲ表シ又同シク本員等ニ此ノ如ク貴重ナル協力ヲ與ヘラレタル本會議ノ書記官諸君ニ向ヒ感謝ノ意ヲ表ス

本員ハ又閣下ト同シク茲ニ條文完成シタル漁業協約ハ兩國ノ隔意ナキ友交ノ先驅タラムコトヲ敢テ希望スルモノナリ

午後三時四十分閉會

(二十七)日露漁業協約締結會議錄第九號

最終會議

千九百七年七月（二十八日十五日）午後二時露西亞國外務省ニ於テ開會

列席者

日本國　全權委員露西亞國駐箚日本國特命全權公使法學博士本野一郎閣下、書記官、落合氏及津田氏

露西亞國　全權委員外務大臣「メートル、ド、ラクール、アムベリアール」「アレキサンドル、イスヴォルスキー」閣下、全權委員外務次官「コンセイエー、プリヴェー」「コンスタンタン、グバストフ」閣下、商工務省委員「アレキセイエフ」氏、外務省委員「コロストヴェッツ」氏「グルキヴイッチ」氏、「ケリヴェー」氏、會議書記官「メイエンドルフ」男爵「ウォッネセンスキー」氏

兩國全權委員ハ漁業協約及附屬議定書ノ全條項ヲ審査シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ各其ノ全權委任狀ヲ交換シ慣例ニ從ヒ協約竝議定書ニ記名調印セリ

次テ各全權委員ハ前記外交文書ヲ互ニ領收セリ

午後三時三十分散會

本野一郎(記名)
「イズヴォルスキー」(記名)
「グバストフ」(記名)
落合謙太郎(記名)
津田五郎(記名)
「メイエンドルフ」(記名)
「ウォッネセンスキー」(記名)

●滿洲ニ於ケル日露鐵道接續業務ニ關スル假條約追加條款及附屬議定書

明治四十年八月三日官報

本年六月十三日露京ニ於テ帝國特命全權公使ト露國外務大臣トノ間ニ協定セラレタル滿洲ニ於ケル日露鐵道接續業務ニ關スル假條約、追加條款及附屬議定書左ノ如シ

滿洲ニ於ケル日露鐵道接續業務ニ關スル假條約

日本帝國政府及露西亞帝國政府ハ千九百五年（九月五日八月二十三日）「ポーツマス」ニ於テ兩國政府間ニ調印セラレタル媾和條約第八條ノ規定ニ從ヒ滿洲ニ於ケル日本國及露西亞國ノ鐵道接續業務ニ關スル條約ヲ締結スルコトニ決定シ之カ爲下ニ記名スル日本國特命全權公使法學博士本野一郎及露西亞國外務大臣「メートル、ド、ラ、クール、アンベ

リアル」、「アレキサンドル、イスヴォルスキー」ハ各其ノ本國政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ假條約トシテ左ノ諸條款ヲ協議決定セリ

此ノ條約中一方ニ於テ南滿洲鐵道會社及他ノ一方ニ於テ東清鐵道會社ニ關スル規定ハ兩國政府ニ於テ各當該會社ヲシテ之ヲ正確ニ履行セシメムカ爲必要ナル措置ヲ執ルコトヲ互ニ約定ス

第一條

兩鐵道線ノ連絡ハ東清鐵道寛城子停車場ノ境界線ニ於テ之ヲ行フヘシ南滿洲鐵道會社ハ同鐵道會社ノ採用セル線路軌間ヲ以テ同鐵道長春停車場ヨリ東清鐵道寛城子停車場ノ限界マテ其ノ線ヲ延長スヘク東清鐵道會社ハ南滿洲鐵道會社ノ敷設ニ係ル日本ノ該延長線ニ接續シテ之ト同一軌間ノ線路ヲ寛城子露國停車場ノ乘降場ニ至ルマテ敷設スヘシ東清鐵道會社ハ寛城子露國停車場ノ乘降場ヨリ同停車場ノ限界迄一米突五二四ノ軌道幅（即五英尺ノ露西亞軌道幅）ヲ以テ其ノ線路ヲ延長敷設スヘシ南滿洲鐵道會社ハ東清鐵道會社ノ敷設ニ係ル該露國延長線ニ接續シテ之ト同一軌間ノ線路ヲ長春日本停車場ノ乘降場ニ至ル迄敷設スヘシ

日露兩鐵道線ノ連結點及該連結ノ方法ハ兩會社間ノ合意ヲ以テ之ヲ決定スヘシ

第二條

南滿洲鐵道會社及東清鐵道會社ハ其ノ線路連結ノ外尙ホ雙方線路軌間ノ相異ナル結果トシテ必要トナリタル終點停車場ニ於ケル旅客及貨物ノ直接交通ヲ計リ且ツ成ルヘク短少ノ時間ト成ルヘク小額ノ費用ヲ以テ貨物ノ積換ヲ行フカ爲必要ナル諸般ノ設備ヲ爲スヘシ

兩鐵道會社ハ各自己ノ地域內ニ於ケル建築設計ヲ自ラ決定スルノ權利ヲ保留ス

第三條

本條約第一條及第二條ニ規定セル兩鐵道會社各自ノ義務ニ屬スル一切ノ工事ハ各會社ノ負擔トス而シテ該工事ハ兩會社ニ於テ成ルヘク速ニ且成ルヘク同時ニ之ヲ竣成セシムヘシ

第四條

鐵道線路、乘換及積換ノ設備並ニ其他各鐵道所屬地域內ニ於ケル附屬物件ノ維持ハ各會社ノ負擔トス

第五條

南滿洲鐵道及東清鐵道間ノ輸送ハ左記ノ條件ニ從テ之ヲ行フヘシ

南滿洲鐵道ノ旅客列車ハ同列車ニ依リ輸送セラルル旅客、手荷物及其ノ他ノ物件ヲ搭載ノ儘日本線路ニ依リ寛城子ノ露國停車場ニ至ルヘク東清鐵道ノ旅客列車ハ同列車ニ依リ輸送セラルル旅客、手荷物及其ノ他ノ物件ヲ搭載ノ儘露國線路ニ依リ長春日本停車場ニ至ルヘシ

南滿洲鐵道ノ貨物列車ニシテ東清鐵道線ニ向フモノハ日本線路ヲ經テ寛城子ノ露國停車場ニ至リ同所ニテ該貨物ヲ露國鐵道ニ引渡シ若ハ積換スヘク東清鐵道ノ貨物列車ニシテ南滿洲鐵道線ニ向フモノハ露國線路ヲ經テ長春ノ日本停車場ニ至リ同所ニテ該貨物ヲ日本鐵道ニ引渡シ若ハ積換スヘシ

第六條

兩鐵道ノ接續ヲ目的トスル列車運轉時間表ハ兩鐵道會社事務局合意ノ上之ヲ調製スヘシ

第七條

兩鐵道終點停車場間通行ノ爲旅客及貨物ヨリ徵收スヘキ料金ハ南方ヨリ北方ニ向フモノハ南滿洲鐵道線路ノ現行運賃率ニ依リ北方ヨリ南方ニ向フモノハ東清鐵道線路ノ現行運賃率ニ依リテ之ヲ徵收スヘシ

兩會社ノ線路ニ依レル運搬ノ爲ニ徵收シタル收入ノ分配ハ兩會社事務局間ニ締結スヘキ協定ニ從テ之ヲ行フヘシ

第八條

兩會社ハ互ニ地方ニ屬スル接續線路及積換設備ヲ無賃ニテ使用スヘシ

第九條

兩鐵道會社ハ旅客及貨物ノ正確ナル運輸ヲ確實ナラシムルニ充分ナル列車運轉業務ヲ相互ニ協定組織シ且ツ此業務ノ利益ニ基キ作業業務ニ關スル諸規則及規定ヲ設クヘシ

第十條

列車運轉業務、旅客ノ運送、貨物ノ積換、信號事務等ニ關シ本條約ニ基キ追テ設クヘキ一切ノ規定ハ兩會社間ニ於テ各自政府ノ正式認可ヲ經ヘキ特別ノ取極ヲ以テ之ヲ定ムヘシ運送機關ノ相互的使用、兩會社使用人間ノ關係並ニ收入ノ分配ニ付各會社ニ歸スヘキ配當額ヲ定ムルノ方法ハ追テ前記ノ如キ取極ヲ以テ之ヲ制定スヘシ

第十一條

本條約ニ規定セル事項ニ付キ若ハ其ノ他本條約ニ規定セル兩會社相互間ノ關係ニ關スル一切ノ事項ニ付キ兩會社事務局間ニ意見ノ一致セサルコトアル場合ニハ兩國政府ニ於テ意見交換ノ上其ノ協議決定ヲ以テ之ヲ解決スヘシ

右證據トシテ日本國特命全權公使及露西亞國外務大臣ハ本假條約ニ記名調印スルモノナリ

明治四十年六月十三日即千九百七年（五月三十一日六月十三日）聖比特斯堡ニ於テ本書貳通ヲ作ル

本野一郎印

イスヴォルスキー印

追加條款

第一條

日本帝國政府及露西亞帝國政府ハ兩國諸鐵道間ニ旅客及貨物ノ直接交通ヲ開始セムコトヲ希望シ之カ爲成ルヘク速ニ特別協定ノ締結ヲ圖ラムコトヲ約定ス

第二條

下ニ記名スル日本國特命全權公使本野一郎及露西亞國外務大臣アレキサンドル、イスヴォルスキーハ長春吉林間ノ鐵道線路敷設セラルルマテ兩鐵道接續業務假條約第五條ヲ採用スルコトニ同意シタルニ依リ兩締盟國ハ追テ該鐵道敷設セラレタルトキハ東清鐵道ニ依リ北方ヨリ來リテ吉林又ハ大連ニ向フ旅客ノ轉乘及吉林線又ハ南滿洲鐵道線ニ依リ來着シテ北方ニ向フ旅客ノ轉乘ハ長春ノ日本停車場ニ於テ之ヲ行フヘキコトヲ約定ス之カ爲關係兩會社間ニ追テ特別ノ協定ヲ締結スヘシ

第三條

本日調印ノ假條約ニ規定セル工事竣成前ト雖モ滿洲ニ於ケル鐵道接續業務ノ實行ヲ期セムカ爲南滿洲鐵道會社ハ寛城子ノ露國停車場附近ニ假停車場ヲ建設スヘシ且日本假停車場並ニ寛城子露國停車場間ニ旅客列車ニ依リ運送セラルル旅客、小包、手荷物及其ノ他物品ノ轉送及貨物ノ積換ヲ行ハムカ爲兩會社ハ各自此ノ目的ニ必要ナル設備ヲ爲スヘシ

明治四十年六月十三日即千九百七年（五月三十一日六月十三日）聖比特斯堡ニ於テ本書貳通ヲ作ル

本野一郎印

インヴォルスキー印

議定書

滿洲ニ於ケル日本及露國鐵道接續假條約ニ記名スルニ方リ兩締盟國ハ寛城子停車場及石碑嶺並ニ陶家屯炭坑ニ關スル或ル問題ヲ協定スルノ有益ナルコトヲ認メタルニ依リ下ニ記名スル日本特命全權公使法學博士本野一郎及露西亞國外務大臣「メートル、ド、ラ、クール、アンペリアル」アレキサンドル、イスヴォルスキーハ左ノ條款ヲ協定セリ

第一條

寛城子停車場及其ノ附屬物件ハ原則上日本國及露西亞國ノ共有物ナリト雖モ實際ノ便宜上該停車場及其ノ附屬物ハ露西亞國ノ專有ニ歸スヘク之カ爲メ露西亞國政府ハ日本國カ寛城子停車場及其ノ附屬物件ノ共同所有權ヲ放棄シタルノ報償トシテ露貨五拾六萬參千九拾參「ルーブル」ヲ日本國政府ニ支拂フヘシ

第二條

露西亞國政府ハ兩鐵道接續假條約ニ記名後成ルヘク速ニ本議定書ニ添付セル圖面中二二三號ヲ以テ示シタル地點ノ南方ニ在ル一切ノ鐵道及一切ノ附屬物件竝ニ石碑嶺及陶家屯ノ炭坑及一切ノ附屬物件ヲ總テ現形ノ儘之ヲ日本國政府ニ引渡スヘシ日本國及露西亞國政府ハ前記條約ニ記名後直ニ南滿洲鐵道會社竝ニ東清鐵道會社ニ對シ相互前記ノ鐵道及其ノ附屬物件竝ニ前記炭坑ノ受渡ニ必要ナル訓令ヲ發スヘシ

第三條

日本國政府ハ追テ寛城子露國停車場ト長春市街ノ間ニ於テ長春日本停車場ト連絡スヘキ場所ヲ選定スルコトハ兩締盟國間ニ約定ス

吉林鐵道線路延長ノ場合ニ日本國政府ハ長春停車場ノ境界以外ニ於テ寛城子露國停車場ト長春市街ノ間ニ通スル主要ナル道路ト鐵道線路ト交叉スル點ニハ該鐵道會社ヲシテ踏切若ハ陸橋ヲ建設セシムルコトヲ努ムヘシ

第四條

日露兩鐵道會社ノ間ニ締結スヘキ相互鐵道間ノ旅客及貨物ノ轉送ニ關スル詳細ノ規則ハ鐵道接續假條約調印後成ルヘク速ニ關係兩會社間ニ協商決定スヘシ本件ニ關スル兩會社委員ノ會合スヘキ場所及時日ハ最モ雙方ノ便宜トナルヘキ方法ニ依リ追テ之ヲ定ムヘシ

第五條

本日締結セラレタル假條約ハ該假條約ノ追加條款第三條ニ掲クル日本假停車場ノ建築竣工ヲ告クル時ヨリ實行セラルヘキコトヲ兩締盟國間ニ約定ス

右證據トシテ日本國特命全權公使及露西亞國外務大臣ハ本議定書ニ記名調印スルモノナリ

明治四十年六月十三日即千九百七年（五月三十一日六月十三日）聖比特斯堡ニ於テ本書貳通ヲ作ル

本野一郎印

イスヴォルスキー印

〔參考〕

明治四十年十二月十九日官報

滿洲ニ於ケル日露鐵道接續業務ニ關スル假條約、追加條款及附屬議定書締結ニ關シ日露兩國委員ノ間ニ往復シタル文書左ノ如シ

第一號

覺書（本野公使提出）

千九百五年十月（十七 三十）日滿洲ニ於ケル日、露兩軍總司令官ノ代表者カ四平街ニ於テ軍隊ノ撤退及鐵道引渡ニ關スル議定書ニ調印スルニ方リ兩軍ノ代表者ハ露國ヨリ日本ニ讓渡シタル鐵道線路北端點ノ確實ナル示定ニ關スル講和條約第六條ノ解釋ニ付キ協定スルコト能ハサリシニ依リ本件ハ他日外交上ノ手續ニ由リテ決定スヘキモノト定メタリ（四平街議定書第十一條參照）

右鐵道線路最終ノ部分ヲ露國官憲ヨリ日本官憲ヘ引渡スヘキ期日ヲ本年（七月十九日 八月一日）ト該議定書ニ定メアルニ依リ日本帝國政府ハ一切ノ誤解ヲ避ケンカタメ今ヨリ日、露兩國間ニ於テ本問題ニ關スル確乎タル取極ヲ爲スヘキモノト思惟ス

日本帝國政府ノ意見ニ依レハ右分界線ハ講和條約第六條ノ規定及「ポーツマス」會議錄ニ揭クルカ如キ右第六條ヲ起草セル精神ニ基キテ之ヲ協定スヘキモノトス

右書類ニ據レハ日本ニ讓渡セラレタル鐵道線路北端分界點ハ寬城子停車場（一切ノ附屬物件ヲ包含ス）ト定ムヘキモノナルニ依リ該停車場及其附屬物件ハ四平街議定書ニ定メタル期日ニ於テ日本官憲ノ手ニ引渡サルヘキモノナルコトヲ帝國政府ハ確信ス

講和條約第六條ニ依レハ露西亞帝國政府ハ長春（寬城子）旅順間ノ鐵道及其各支線ヲ一切ノ權利、特權及該地方ニ於テ右鐵道ニ附屬スル不動產ト共ニ日本帝國政府ニ讓渡セリ

故ニ同條ニ依リ旅順寬城子間ノ鐵道線路ハ其一切ノ附屬物件ト共ニ讓渡サレタルコト明白ナルヲ以テ旅順ノ停車場及其附屬物件カ露國ヨリ日本ニ讓渡セラレタル鐵道ナル一般名稱中ニ包含セラルヘキハ毫モ疑ヲ存スルノ餘地ナキモノナリ鐵道線路ハ旅順ノ停車場ヲ含マスシテ讓渡セラレタルモノナリトハ何人モ主張スルコト能ハス隨テ寬城子停車場モ亦同樣ナラサルヘカラス講和條約第六條ハ兩停車場ノ間ニ何等ノ區別ヲ設ケス旅順及寬城子ヲ全然同一視シテ鐵道線路及該地方ニ於ケル同線路ノ支線ニ屬スル一切ノ權利、特權及不動產ヲ日本ニ讓渡スト云ヘリ「該地方」トハ旅順及寬城子地方竝ニ此二市街間ノ地方ヲ包含スルコト明瞭ナリ

上段ノ如キ事實ナルヲ以テ旅順及寬城子兩停車場竝ニ其附屬物件ハ第六條ノ條文ニ依リ當然日本帝國政府ニ屬スヘキモノナリ右ノ所見ハ「ポーツマス」會議錄ニ沿リテ一層確實ニ證明セラルヽモノナリ

千九百五年八月十六日ノ會議ニ於テ（會議錄第五號）始テ鐵道讓渡問題ヲ議シタルトキ日本ハ旅順哈爾濱間ノ鐵道讓渡ヲ請求シタリシカ兩國全權委員ノ間ニ意見ノ交換ヲ爲シタル後日本國全權委員小村男爵ハ最初ノ請求ヲ撤回シ露國全權委員ウヰツテ氏ハ又分界點ヲ公主嶺ノ北方ニ於ケル最近ノ大都會即チ商業ノ大中心點ニシテ吉林ニ赴ク鐵道ノ停車場タル寬城子（長春）ニ移スモ妨ナシト宣言セリ

右ウヰツテ氏ノ提議ハ寬城子吉林間ノ支線ヲ日本カ建築スルヲ露國ニ於テ異議ナシト云フヲ條件トシテ小村男爵之ヲ承諾セリ而シテウヰツテ氏ハ該支線カ若シ未タ建築セラレサルニ於テハ日本人ノ經營ニ任スモ異議ナシト宣言セラレタルニ依リ鐵道讓渡問題ハ分界點ヲ示定スルノ件ヲ除キ大體確定セリ

右最後ノ問題ハ千九百五年八月二十九日ノ會議ニ於テ決定セリ（會議錄第十號）該會議ノ議事ニハ左ノ如キ一節アリ

露國全權委員ハ前記鐵道ノ未タ存在セサルコトヲ認メタル回答ヲ得タルヲ以テ前記寬城子若クハ日本ノ有ニ屬スヘキ他ノ停車場ヨリ吉林ニ至ル迄ノ鐵道支線ヲ日本人ニ於テ敷設スルコトニ異議ナキ旨ヲ聲明スルコトヲ承諾セリ

八月十六日及二十九日ノ會議錄ヲ一讀スルトキハ兩締約國ノ意思ハ寬城子ノ停車場カ日本ニ屬スルニ在リタルコト明瞭ナリト思考ス

露國全權委員ハ一方ニ於テ兩國鐵道線路ノ分界點ヲ吉林ニ向フ鐵路ノ停車場タル寬城子停車場ニ移スコトヲ承諾シ（八月十六日ノ會議）他ノ一方ニ於テハ寬城子若クハ他ノ日本ニ屬スル停車場ヲ起點トスル支線ノ建築ヲ日本帝國政府ニ任スコトヲ（八月二十九日ノ會議）承諾セラレタルニ由リ露國全權委員ノ意見モ亦日本全權委員ノ意思ノ如ク吉林ニ向フ支線ノ起點ハ日本ニ屬スル停車場ナルヘク而シテ露國全權委員ハ此支線カ寬城子停車場ヲ起點トスルコトヲ承諾セラレタルヲ以テスレハ該停車場ノ日本ニ屬スヘキヤ明ナリ若シ日、露兩國委員ノ意思カ該停車場ヲ露國政府ノ所有ト爲スニ在リシナランニハ一層明瞭ニ其意思ヲ發彰スヘカリシナリ

講和條約第六條ニ依リ寬城子停車場及其附屬物件カ旅順寬城子間ノ讓渡鐵道ノ內ニ包含セラレテ日本國政府ニ屬スヘキハ何ノ點ヨリスルモ明瞭ナリ

前記ノ理由アルニ依リ日本國公使ハ本國政府ヨリノ訓令ニ基キ兩國鐵道ノ分界點ヲ寬城子停車場ノ北端線ト確定センコトヲ露國外務大臣閣下ニ提議シ同大臣ニ於テ該提議ヲ承諾セラルヽニ於テハ四平街ノ議定書ヲ以テ定メタル期日ニ以內ニ寬城子停車場及附屬物件ヲ日本官憲ニ引渡スニ必要ナル手續ニ及ハレンコトヲ希望ス

千九百六年（五月二十三日 六月五日）聖彼得堡ニ於テ

第二號

覺書（露國外務大臣提出）

露國外務省ハ日本國政府カ日本國ニ讓渡サルヘキ東清鐵道線路ノ北端點ヲ速ニ決定センコトヲ希望セラルヽ旨ヲ報道セラレ且ツ該北端點ヲ寬城子停車場ト定メ而シテ四平街議定書ニ定メタル期日以內ニ該停車場及附屬物件ヲ日本國官憲ニ引渡スヘキコトヲ提議セラルヽ千九百六年（五月二十二日 六月四日）附日本國公使館ノ覺書ヲ接受セリ

協商中ノ問題カ速ニ且ツ滿足ナル解決ヲ見ルハ同シク露國政府ノ希望スル所ナリト雖モ又露國外務省ヨリ日本國公使館ニ與ヘタル說明ニ依レハ本問題ニ關スル日本國政府ノ所見ハ「ポーツマス」條約ノ條文及會議錄ノ本文ニ於テ確證ヲ得サルモノヽ如シ

然レトモ露國外務省ハ右條文ノ所論ヲ辯駁スルモ何等利益アラサルニ由リ本問題ハ之ヲ實地的ニ考究スルノ優レルニ若カスト思惟シ若シ日本國政府ノ意見ニシテ採用セラレ寬城子ノ停車場ハ其附屬物件ト共ニ日本國官憲ニ引渡サルヽモノトセンカ露國ニ於テハ該停車場ヨリ數「キロメートル」ヲ距テ速ニ新停車場ヲ建築スルノ必要アルヘシ而シテ本件ハ「ポーツマス」條約第八條ニ依リ日、露兩國政府間ニ特別ナル條約ヲ結フヘキモノト定メアル滿洲ニ於ケル日、露兩鐵道ノ連絡上ニ不利ナルノミナラス之ヲシテ非常ニ錯雜ナラシムヘシ兩國ノ攻究スヘキ目的ハ出來得ル限ノ手段ニ由リテ兩鐵道ノ運輸交通ヲ容易ナラシムルニ在ルヲ以テ寬城子停車場ニ關スル問題ハ他日前記條約ヲ協商スル時マテ延期シ線路連絡ニ關スル專門技術上ノ要件ヲ酌量シテ雙方ノ間ニ協定スヘキモノト露國外務省ハ思考ス

千九百六年（六月三十日 七月十三日）聖彼得堡ニ於テ

第三號

覺書（本野公使提出）

日本國公使カ本國政府ノ訓令ニ基キ（五月二十二日 六月四日）附ヲ以テ露國政府ニ提出シタル覺書ノ回答トシテ寬城子停車場ノ問題ニ關シ（六月三十日 七月十三日）附ヲ以テ露國外務大臣閣下ヨリ日本國公使ニ送リタル覺書ハ之ヲ日本國政府ニ轉送セリ

日本帝國政府ハ本問題ニ關シ前記覺書中ニ說明シタル所ノ意見ヲ全然維持スト雖モ又（六月三十日 七月十三日）附ノ覺書ヲ以テ露西亞帝國政府カ示サレタル專門及實地問題ヲ考慮スルニ由リ「ポーツマス」條約第八條ニ基キ日、露兩鐵道連絡條約締結ノ時マテ停車場問題ノ解決ヲ延期スルコトニ付キ異議ヲ有セス

故ニ日本帝國政府ハ實地ニ於テ鐵道連絡上有益便利ナル方法ヲ考究セシメ且ツ上記條約ヲ締結センカタメ兩國ニ於テ成ルヘク速ニ專門委員ヲ任命センコトヲ希望ス

日本國政府ハ右條約ノ締結ニ至ル迄ニ陸軍少將中村氏トジエネラル、ド、ウヰツテ氏トノ間ニ調印セラレタル議定書第一條ヲ以テ定メタル點マテノ鐵道線路ヲ假ニ受領センコトヲ欲ス

日本國公使ハ右ノ趣ヲ露國外務大臣閣下ニ通報シ前記條約締結ノタメ露國政府ニ於テ執ランコトヲ欲セラルヽ手續ヲ成ルヘク速ニ通知アランコトヲ同大臣閣下ニ依賴スルノ光榮ヲ有ス

千九百六年七月（七日 二十日）聖彼得堡ニ於テ

第四號

覺書（露國外務大臣提出）

日本國政府ハ寬城子停車場問題ニ關スル解決ヲ「ポーツマス」條約第八條ニ規定セル日、露兩鐵道連絡條約ノ締結マテ延期スル件ニ對シ異議ナキ旨千九百六年七月（七日 二十日）附覺書ヲ以テ日本國公使ヨリ露國外務省ヘ通知セラレタリ

露國政府ハ該問題ヲ篤ト研究シタル後左記ノ方法ハ最モ實際ニ適スルモノト思惟ス

日、露兩國ノ代表者ヲ以テ混成委員ヲ組成シテ速ニ之ヲ現場ニ派遣シ實地ニ就キテ專門上及鐵圖上ノ標準ヲ定メシムレハ寬城子停車場ニ關シ意見ノ相違セル二點ヲ氷解セシムルヲ得ヘシ該委員調査ノ結果ハ成ルヘク速ニ之ヲ日、露兩國政府ニ報告セシムヘシ

然ル後兩國ノ全權委員ハ聖彼得堡ニ於テ鐵道連絡條約ヲ締結スルヲ得ヘク之ト同時ニ混成委員カ實地ニ就キテ得タル材料ニ由リ外交上ノ手續ヲ經テ寬城子問題ノ解決ニ着手スヘシ又該條約締結ノ後連絡點ニ於ケル鐵道線路ノ分割、「ポイント」、「マン」ノ敷設、汽鑵車用水ノ供給等ノ如キ第二ノ問題ハ聖彼得堡ニ於テ條約締結ノ際雙方一致ノ上定メタル一般ノ指定ニ基キテ協商スル兩國鐵道會社ノ專門委員現場ニ於テ之ヲ協定スヘシ

若シ日本國政府ニ於テ上記ノ提議ヲ承諾セラルヽニ於テハ露國政府ハ寬城子混成委員中ノ露國委員任命ニ關シ必要ナル命令ヲ速ニ在滿洲露國官憲ニ發スヘシ

千九百六年九月（六日 十九日）聖彼得堡ニ於テ

第五號

覺書（本野公使提出）

滿洲鐵道連絡問題及寛城子停車場問題ニ關シ露國外務大臣閣下ヨリ日本國公使ニ送ラレタル九月（十六日二十九日）附覺書中ニ掲載セラレタル露國政府ノ提議ハ日本國政府ニ於テ原則上之ヲ承諾セリ

然レトモ日本國政府ハ寛城子停車場問題ニ關シテ其權利ヲ保留スルニ依リ該問題ハ混成委員カ現場ニ於テ蒐集シタル材料ノミニ由リテ解決ヲ與ヘ得ルモノニアラス該委員ノ蒐集ハ專門ノ問題ニ止ルモノニシテ停車場問題ノ基礎ニ關シ其意見ヲ變更スヘキヤ否ヤヲ考究スルコトハ他日總テノ材料ヲ參酌シテ決定スヘキモノト思惟ス

若シ露西亞帝國政府ニ於テ前顯ノ保留ニ對シ異議ナキニ於テハ日本帝國政府ハ直ニ委員ノ任命ニ著手スヘシ而シテ其人員ハ雙方トモ三名若クハ四名ニ限ルヘキモノト思考ス兩國政府ノ委員ハ歐洲暦ノ十月末ニ寛城子ニ會合スルヲ要スヘシ

滿洲鐵道連絡問題ニ關シテハ日本國政府ハ露國政府ノ示サレタル意見ニ全然同意ヲ表ス

千九百六年九月（十一日二十四日）聖彼得堡ニ於テ

第六號

覺書（露國外務大臣提出）

露西亞帝國政府ハ日本帝國政府ノ保留ニ關シ異議ヲ有セサルニ由リ外務省官吏ポツプ氏及東清鐵道會社副社長公爵ヒルコフ氏ヲ歐洲暦十月末寛城子ニ會合スヘキ露國委員ニ任命シタルコトヲ九月（十四日二十七日）附覺書ノ回答トシテ日本國公使館ニ通知スルノ光榮ヲ有ス陸軍委員ノ官姓名ハ他日之ヲ通知スヘシ公爵ヒルコフ氏若シ故障アルトキハ地方事務ニ對スル東清鐵道會社代理人ユルダニエル氏其代員ト爲ルヘシ

依テ露國外務省ハ成ルヘク速ニ日本國委員ノ姓名及同委員ノ寛城子ニ到著スヘキ確實ナル時日ヲ通知セラレンコトヲ日本國公使館ニ請求スルノ光榮ヲ有ス

千九百六年九月二十九日聖彼得堡ニ於テ

第七號

覺書（本野公使提出）

日本帝國公使館ハ遲カラスシテ寛城子ニ會合スヘキ露國委員ノ組織ニ關スル九月二十九日附露國外務省覺書ノ回答トシテ日本帝國政府ハ陸軍少將中村愛三、奉天駐在總領事萩原守一及遞信省鐵道技師古川坂次郎ノ三氏ヲ混成委員會ニ於ケル日本ノ代表者ニ任命シタルコトヲ露國外務省ニ通告スルノ光榮ヲ有ス

既ニ本月モ餘日少キニ由リ日本帝國政府ハ歐洲暦十一月七日ヲ以テ兩國ノ委員ヲ寛城子ニ會合セシムルコトヲ露西亞帝國政府ニ提議ス

日本帝國公使館ハ露國政府ニ於テ前顯ノ提議ヲ承諾セラルヽヤ否ヤ成ルヘク速ニ回報アランコトヲ露國外務省ニ請求ス

千九百七年十月（十三日二十六日）聖彼得堡ニ於テ

第八號

覺書（本野公使提出）

日本國公使館ハ十月（十三日二十六日）附覺書ヲ以テ寛城子ニ會合スヘキ日本國政府委員ノ任命ヲ露國外務省ニ通告スルト同時ニ歐洲暦十一月七日ヲ以テ雙方ノ委員ヲ寛城子ニ會合セシムルコトヲ提議スルノ光榮ヲ有セリ

右提議ニ關シ露帝國政府ヨリ今日マテ未タ何等ノ回答ニ接セス、雖モ右期限マテニ餘日ナキニ由リ日本帝國政府ハ露國委員ニ會合セシムルノ目的ヲ以テ該委員ヲ寛城子ニ向ケ出發セシムルニ決セリ故ニ日本帝國政府ハ露西亞帝國政府ニ於テ其ノ委員カ十一月七日マテニ寛城子ニ到著シ得ルタメ必要ナル手段ヲ執ラレンコトヲ切ニ希望ス

日本國公使館ハ尚ホ任命セラルヘキ露國委員ノ姓名ヲ通知アランコトヲ露國外務省ニ依頼ス

千九百六年十月（十二日二十五日）聖彼得堡ニ於テ

第九號

覺書（露國外務大臣提出）

露國外務省ハ十月（十二日二十五日）附覺書ノ回答トシテ露西亞帝國政府ハ來ル十月二十五日（十一月七日）ヲ以テ日、露兩國ノ委員ヲ寛城子ニ會合セシムルコトヲ承諾スル旨及右期日マテニ現場ニ出張スヘキ命令ヲ露國委員ニ發スヘキコトヲ日本國公使館ニ通告スルノ光榮ヲ有ス露國外務省ハ「イルクーツク」軍管區參謀長陸軍大佐クーツミス、カラヴアイエフ氏ヲ露國委員ニ任命シタルコトヲ茲ニ附言ス

千九百六年十月十三日聖彼得堡ニ於テ

第十號

覺書（露國外務大臣提出）

露帝國外務省ハ第一四四四號覺書（前號覺書）ニ關シ陸軍少將コリノムコウスキー氏現場ニ於テ寛城子ニ會合セル混成委員會ニ於ケル露國ノ代表者ニ任命セラレタルコトヲ日本國公使館ニ通告スルノ光榮ヲ有ス

千九百六年十月三十日聖彼得堡ニ於テ

第十一號

覺書（露國外務大臣提出）

露國外務省ニ達シタル報告ニ依レハ寛城子ニ會合セル日、露兩國委員ノ事業終了シ其議事録ハ不日聖彼得堡ニ到達スヘシ

既ニ約定セルカ如ク議事録ニ基キ寛城子停車場ニ關スル外交上ノ協商ヲ開始シ同時ニ「ポーツマス」條約第八條ニ規定セル鐵道連絡條約締結ニ著手スルヲ得ヘシ

依テ露國外務省ハ茲ニ本件ニ關シテ交換セル公文ニ基キ前記條約ヲ起草締結スヘキ混成委員カ聖彼得堡ニ於テ會合スヘキ凡ソノ時日ニ關スル日本國政府ノ意見竝ニ若シ出來得ヘクンハ該委員ヲ組成スヘキ日本國代表者ノ人員及姓名ヲ通知アランコトヲ日本國公使館ニ依頼スルノ光榮ヲ有ス露國政府ハ右會合ノ日ヲ本年十二月（十日二十三日）後ニ定ムルコト異議ナシ

千九百六年十一月二十六日聖彼得堡ニ於テ

第十二號

覺書（本野公使提出）

露國外務省ハ「ポーツマス」條約第八條ニ規定セル鐵道連絡條約ヲ起草シ且ツ締結スヘキ混成委員ノ件ニ關シ十一月二十六日附公文ヲ日本國公使館ニ送ラレ該委員ノ會合スヘキ凡ソノ時日ニ關スル日本國政府ノ意見竝ニ該委員會ニ於テ日本國ヲ代表スヘキ人員及姓名ノ通知ヲ請求セラレタリ

日本國公使館ハ直ニ日本國政府ニ報告ヲ爲シタルニ滿洲ニ派遣シタル日本國ノ委員ハ歸國シテ未タ數日ナラサレハ日本國政府ハ未タ委員會合ノ期日ニ關スル意見竝ニ聖彼得堡ニ會合スヘキ日本委員ノ姓名ヲ通知スルノ運ニ至ラサル旨ノ回答ニ接セリ

然レトモ日本帝國政府ハ不日本問題ヲ確定シ得ヘキニ依リ日本國公使館ハ其報知ニ接シ次第直ニ之ヲ露國外務省ニ通告スヘシ

千九百六年十二月十三日（十一月三十日）聖彼得堡ニ於テ

第十三號

以書翰致啓上候陳者寛城子停車場問題及「ポーツマス」條約第八條ニ規定セル鐵道連絡條約ニ關シ閣下若クハ之カタメ露國政府ノ任命セラルヘキ他ノ委員ト協商ヲ開始スヘキ旨本國政府ヨリ訓令有之候間千九百六年十一月二十六日（十二月九日）附第一八〇〇號覺書（前々號覺書）ノ回答トシテ右ノ趣ヲ閣下ニ報道スルノ光榮ヲ有シ候

右協商ニ於テハ日本國鐵道技師古川、公使館一等書記官落合及專門委員陸軍工兵大尉靜間ノ諸氏本使ヲ補助可致候

本使ハ本件ニ關シ必要ナル一切ノ書類及訓令ニ接シ居候間閣下ニ於テ適當ト認メラレタル方法ニ成ルヘク速ニ御回報相成候樣希望致候本使ハ茲ニ重ネテ閣下ニ向ヒテ敬意ヲ表シ候敬具

千九百七年（十二月二十一日一月三日）聖彼得堡ニ於テ

本野一郎

露國外務大臣イズヴオルスキー閣下

第十四號

覺書（本野公使提出）

寛城子停車場及鐵道連絡兩問題ハ密接ノ關係ヲ有スト雖モ之ヲ分別ニ調査スルヲ要スヘシ

第一ノ問題ハ「ポーツマス」條約中ノ或ル一條ノ解釋ニ關係シ第二ノ問題ハ同條約第八條ノ適用ニ止ルモノナリ

第一ノ問題ニ解決ヲ與ヘタル後ハ何ノ點ニ於テ鐵道ノ連絡ヲ爲シ得ルヤヲ調査スルヲ得ヘシト雖モ鐵道ノ接續點ニ付キテ雙方一致スルモ寛城子停車場及其附屬物件ノ所有權問題ハ依然未決ノ儘ナルヘシ

故ニ第一ニ停車場ノ所有權ニ關スル原則問題ヲ協定スルノ必要アルヘシ

既ニ提出セラレタル書類ニ依レハ兩國政府ノ主張スル所ハ正反對ニシテ雙方共各々所論ヲ正當トシ日本國政府ノ解釋ニ依レハ停車場ノ全體ヲ露國政府ヨリ取得スヘキモノトセリ

講和條約ノ本文及之ニ關スル書類ニ付キ討論ヲ繼續スルモ雙方ニ於テ多少ノ讓與ヲ爲スニアラサレハ到底滿足ナル解決ヲ見ルニ至ラサルヘシ

當方ノ意見ニ由レハ適當ニシテ正實ナル唯一ノ解決ハ原則上停車場及其附屬物件ヲ二區ニ分割スルニ在リトス日本專門家ノ意見ニ由ルモ實際此解決ハ行ヒ得ルモノト爲セリ然レトモ若シ兩國ニ於テ原則上此解決法ヲ承諾スルモノトセハ停車場ノ全體ヲ兩國ハ一方ノ所有ト爲シ其賠償金ヲ他ノ一方ニ拂フ方一層便利ニシテ且ツ實際ニ適スルモノノ如シ何トナレハ停車場カ兩國ノ何ニ屬スルモ他ノ一方ハ新停車場ノ建築ト必要ナル地所購入ノタメニ費用ヲ要スルカ故ナリ

右ノ問題一旦決定セハ何ノ點ニ於テ鐵道ノ連絡ヲ爲シ得ルヤヲ調査スルヲ得ヘシ

日本國技師ノ説ニ依レハ若シ停車場共有法ヲ採用セサルモノトセハ日本國ハ長春市街ト現今ノ寛城子停車場トノ間ニ滿洲、吉林及哈爾賓ヨリ來ル鐵道線路ノ接續點ト爲ルヘキ中央停車場ヲ建築スルヲ要スヘシ

露國ノ列車ハ該停車場ニ至リテ日本線路ノ爲メニ旅客ノ乘換及貨物ノ積換ヲ爲シ日本ノ列車ハ露國ニ屬スヘキ寛城子停車場ニ至リテ之ヲ行フヘシ斯クスルトキハ線路ノ交叉スルコトナクシテ其連絡ヲ爲スヲ得ヘシ

當方ノ意見ニテハ上記ノ方法ハ最モ實益アル解

決法ナルカ如シ

千九百七年二月（一月二十八日 二月十日）聖彼得堡ニ於テ

第十五號

覺書（露國外務大臣提出）

露西亞國政府ハ寛城子停車場問題ニ關スル本年（一月二十八日 二月十日）ノ覺書ヲ精密ニ調査セリ露西亞國政府ハ正當ニシテ雙方ノタメニ相互的ニ利益ナル協定ヲナサンコトヲ切ニ希望スルニ依リ原則上停車場及其附屬物件ヲ二分シ實際其完全ナル所有權ヲ兩國ノ一方即チ露西亞國ニ移シ他ノ一方即チ日本國ニ賠償金ヲ拂フト云フ日本國政府ノ提議ヲ承諾スヘシ右ノ原則決定セハ日本國ノ列車ヲシテ寛城子露國停車場ニ至ラシメ露國ノ列車ヲシテ日本停車場ニ至ラシムルタメ二箇ノ軌道ニ成ル連絡線路建築ノ必要ヲ生スルハ自然ノ勢ナリ

右ノ計畫ハ尚ホ露國ノ鐵道ヲシテ寛城子停車場ノ設備必要ナル乘換乘降場ノ新設及連絡線路ニ關スル露國ノ出費等ノタメニ巨額ノ經費ヲ免レシメス故ニ上記ノ賠償金ヲ（停車場ニ在ル兵營、廐等ノ如キ鐵道營業ニ關係アラサルモノハ勿論之ヲ除キ）寛城子停車場及其附屬物件建築費ノ半額ト定ムルコト正當ナルヘシ

日本國政府ノ意見ニ依レハ吉林、滿洲ノ南部及哈爾賓ヨリ鐵道線路ノ合集點タルヘキ日本停車場ニ適用スヘキ專門上要求點ヨリ考究セハ本問題ヲ確定スルニ便利ナルヘシト思考ス右三地方ノ運輸ニ便利ヲ與フルタメニ必要ナル條件ヲ包含スル方法ヲ考究シ且ツ露國官憲ノ有スル正確ナル製圖上ノ調査ニ依ルトキハ巨額ナラサル經費ヲ以テ寛城子市街ノ南方鄰接ノ地ニシテ吉林ノ支線上ニ（別紙略圖參照）日本停車場ヲ建築シ得ルノ利益アルコト明瞭ナリ該停車場ハ二箇ノ軌道ヲ有スル線路ヲ以テ之ヲ寛城子露國停車場ニ接續シ一ハ露國ノ軌道幅（五英尺）一ハ日本ノ軌道幅ヲ有スヘシ旅客及貨物ノタメニ要スル乘降場ヲ兩國停車場ノ區域內ニ建設シ第二二四「ウェルスト」ノ南方ニ在ル線路ハ地形上ノ都合ニ依リ吉林ニ向フ日本線路カ長春ノ方面ニ向ヒテ曲形ヲ成ス點マテ之ヲ取除クヲ得ヘシ滿洲ノ南部及吉林ヨリ來リテ北方ニ向フ旅客及貨物ノ中繼ヲ爲ス日本ノ列車ハ總テ寛城子停車場ニ至ルヘク又露國ノ列車ハ總テ長春停車場ニ至ルヘシ連絡線ノ業務ハ其ノ境界ヲ寛城子露國停車場南端轉轍部以外ニ定メテ之ヲ日本鐵道ニ移スヲ得ヘシ本案ハ之ヲ實施スル上ニ於テ專門上ノ困難ナク且ツ地形良好ナルニ依リ多クノ經費ヲ要セサルヘシ

右ニ述ヘタル方法ハ寛城子停車場問題ノ協定ヲ容易ナラシメ且ツ露西亞及日本兩國鐵道營業上一切ノ要求ニ應シ得ルモノナレハ之ヲ日本國政府ノ高閲ニ供ス露國政府ハ日本國政府ニ於テ本問題ニ關スル露國ノ調和的態度及迅速ナル解決ヲ得ントスル趣意ヲ諒セラレンコトヲ切ニ希望ス

千九百七年二月三日聖彼得堡ニ於テ

（別紙圖面省略）

第十六號

以書翰致啓上候陳者東清鐵道會社副總裁ヴェンツェル氏儀「ポーツマス」條約第八條ニ規定セル日、露兩鐵道連絡條約ヲ商議スヘキ首席委員ニ任命相成候間此段本年（一月二十一日 二月三日）附公文ノ回答トシテ閣下ニ報道スルノ光榮ヲ有シ候

大藏省官吏チェレミシノフ及ヴザレフ、外務省第一部次長コロストウェッツノ諸氏專門委員トシテヴェンツェル氏ヲ幇助スル筈ニ有之候

露國委員ハ何時ニテモ商議開始ノ時日決定ノタメ閣下ノ御相談ニ應スヘク候本大臣ハ茲ニ重ネテ閣下ニ向ヒテ敬意ヲ表シ候敬具

千九百七年二月（十二日 二十五日）聖彼得堡ニ於テ

イズヴォルスキー

日本國特命全權公使本野一郎閣下

第十七號

以書翰致啓上候陳者「ポーツマス」條約第八條ニ規定セル日、露滿洲鐵道連絡條約ニ關スル協商ヲ開始スヘキ露國委員ノ姓名ヲ御通知相成候二月（十二日 二十五日）附貴翰ヲ受領スルノ光榮ヲ有シ候本使ハ右ノ御通知ヲ拜謝致候木曜日ヲ除クノ外ハ全然差支無之ニ付キ第一回ノ會合ヲ開クタメ露國委員ニ於テ最モ便宜ト認メラルヽ時日ヲ御回示相成候樣致度右及御依賴候

若シ閣下ニ於テ御異存無之候ハヽ當公使館ノ一室ヲ以テ日露委員ノ談席ト相定メ候テ差支無之候間此段申添置候本使ハ茲ニ重テ閣下ニ向ヒテ敬意ヲ表シ候敬具

千九百七年二月（十二日 二十五日）聖彼得堡ニ於テ

本野一郎

露國外務大臣イズヴォルスキー閣下

第十八號

以書翰致啓上候陳者一月二十一日（二月三日）附公文ヲ以テ申進候次第モ有之候處當公使館二等書記官丸毛氏儀「ポーツマス」條約第八條ニ規定セル日、露兩國鐵道連絡條約商議ノタメ專門委員トシテ日本國委員ニ加ルコトニ相成候間此段及御通知候本使ハ茲ニ重テ閣下ニ向ヒテ敬意ヲ表シ候敬具

千九百七年二月（十二日 二十五日）聖彼得堡ニ於テ

本野一郎

露國外務大臣イズヴォルスキー閣下

第十九號

覺書（本野公使提出）

日本國公使ハ露國政府カ原則上停車場及其附屬物件ヲ二分シ實際其完全ナル所有權ヲ兩國ノ一方ニ移シ他ノ一方ニ賠償金ヲ支拂フヘキ日本國政府ノ提議ヲ承諾セラレタル露國外務大臣閣下ノ二月三日附第二一二號覺書ヲ領收セリ兩國政府ノ抱懷セル調和ノ精神カ寛城子停車場所有權問題ヲシテ斯ク協定ニ至ラシメタルハ日本國公使ノ幸トスル所ナリ

然レトモ日本國公使ハ遺憾ナカラ日本中央停車場ハ吉林及哈爾賓ヨリ來ル線路ノ集合點タルヘキ理由ニ依リ其適當ナル建設地ハ長春市街南方鄰接ノ地ニ在リト認メラルル露國政府ノ意見ニ同意スル能ハス依テ露國政府ノ提議ヲ承諾スル能ハサル理由ヲ左ニ述フヘシ

第一　露國政府ヨリ送付アリタル圖面及理由書ニ依レハ日本新中央停車場トシテ提出セラレタル敷地ハ曩ニ寛城子委員會ノ初期ニ於テ露國委員ヨリ提出セラレタルモ日本委員ハ專門上ノ要求ヲ滿足セシメサルモノトシテ拒絶シタル吉林線日本停車場ノ敷地ト殆ト符合スルモノナリ日本國公使ハ露國ノ理由ヲ精密ニ考究シタル結果寛城子ニ於テ日本委員カ本件ニ關シテ陳述シタル意見ヲ修正セシムルニ足ルヘキ新ナル論旨ヲ發見スル能ハサルニ由リ正當ト認メタル日本委員ノ意見ヲ玆ニ確認スルノ外ナシ若シ露國ノ提議ニ係ル敷地ヲ採用シタルモノト假定センカ日本中央停車場ト目下日本線路ノ假終點タル待避線第七十八號トヲ連絡セシムルタメニ七「ヴェルスト」以上ノ線路建築ヲ要スヘシ而シテ該地方ハ高低甚シク地均シ橋梁ノ建築其他一般ノ工事困難ナルタメ該線路ノ建築ニハ巨額ノ經費ヲ要スヘシ加之該敷地附近ハ家屋充滿セルタメ其收買ハ日本政府ノタメ非常ナル困難ト巨額ナル經費ノ原因ト爲ルヘキハ露國政府ニ於テ容易ニ了解セラルヘシ

第二　又一軌道若ハ二軌道ノ幅員異ナル接續線ヲ日本中央停車場ト寛城子露國停車場トノ間ニ建築スルヲ要スヘシ露國政府ハ該工事ハ實際容易ナルモノナリトノ意見ヲ有セラルヽモ日本ノ專門委員ハ之ニ反シ該線路ハ一條ノ國道及數箇ノ重要ナル道路ヲ有シ多少家屋アル地方ヲ通過シ又日本停車場附近ニ在ル大溪谷ニ橋梁ヲ新設スヘキニ由リ少カラサル經費ヲ要スルモノト思考ス其他ノ點即チ工事ノ困難及不動產購買ニ要スル巨費等ノ如キ件ニ付キ露國ノ提議ニ反對スル論ハ前項第一ニ揭ケタル論旨ヲ引用スルヲ得ヘシ

第三　日本停車場ハ露國停車場ト隔離セルニ因リ列車往復ノタメニ無益ノ時間ト費用トヲ要スヘシ露國ノ提議ニ係ル敷地ハ國ノ經濟上之ヲ避クヘキモノナリ

以上述フル所ハ日本國公使カ日本中央停車場敷地ニ關スル露國政府ノ提議ニ同意スルコト能ハサル理由ノ首ナルモノナリ

日本國公使ハ左ニ列記セル理由ノタメニ日本中央停車場ノ敷地ト選定スヘキ場所ヲ露國委員諸氏ニ提議スルノ光榮ヲ有ス

第一　露國委員諸氏ハ日本國公使ヨリ交付スル圖面ニ依リテ見ラルヽ如ク日本政府ノ選定シタル敷地ハ寛城子停車場ノ南方ニシテ停車場ニ接近シタル地ニ在リ第二二〇「ヴェルスト」ノ地點ヨリ發シテ日本停車場ニ至ル支線ハ單ニ三「ヴェルスト」ニ過キサルヘシ該線ノ技術的工事及多少ノ土地購買ハ避ケ得ヘカラサルコト勿論ナリト雖モ之カタメニ要スヘキ費額ハ露國案ノ要スルモノヨリ格外ニ少額ナルヘキハ爭フヘカラサルモノナリ

第二　日本停車場ト露國停車場間ノ距離モ亦僅ニ三「ヴェルスト」餘ナレハ兩停車場間ノ接續線路建築モ日本停車場ノ支線ノ如ク同樣ノ利益ヲ有スヘシ

第三　兩國停車場間ノ距離短キタメ列車ノ往復ハ露國案ヨリ遙ニ著シキ利益アル條件ノ下ニ行ハルヘク兩國鐵道會社間ノ交通協同等モ隨テ容易ニ且ツ迅速ニ行ハルヘシ兩國ノタメニ永久的著大ノ便益ヲ與フルコト明白ナリ

第四　日本案ハ露國案ヨリ大ナル割合ニ於テ現在線ノ利用ヲ許スカ故ニ一層經濟的ナルモノナリ

第五　兩國停車場間ノ短距離ハ兩國臣民間ノ關係ヲ漸々親密ナラシメ且ツ其商業ニ便宜ヲ與フヘシ故ニ將來兩停車場ヲ殷盛ナラシムルノ因ト爲ルヘシ

鐵道營業上ニ必要ナル一切ノ條件ヲ具備スルモノハ前陳ノ日本案ナルカ故ニ日本國公使ハ露國政府ニ於テ日本國政府ノ選定シタル敷地ニ關シ異議ナカランコトヲ希望ス

日本國公使ハ露國政府ニ於テ原則上寛城子停車場ノ中部ニ對スル日本國ノ所有權ヲ認メラレタルニ依リ露國ノ利益ヲ侵害セサル限ハ露國鐵道

合社ノ使用ニ任セタル地所以外ニシテ其南方ニ於テ日本中央停車場ノ敷地ヲ選定スルノ權利モ亦原則上日本國ノタメニ認メラルヘシト信スルニ依リ日本國委員カ最モ深厚ナル調和的精神ヲ以テ交通路及日本停車場ニ至ル通路ノ方法ヲ協議スヘク且ツ兩國鐵道會社ノタメニ最モ有利ニシテ正實ナル解決ヲ見ンコトヲ切ニ希望スルモノナルコトハ露國委員ニ於テ之ヲ確信アランコトヲ乞フ

千九百七年（二月二十一日／三月六日）聖彼得堡ニ於テ

第二十號

覺書（露國外務大臣提出）

日本國公使ハ二月二十一日附覺書ヲ以テ日本國政府ハ寛城子ニ於ケル日本停車場敷地ニ關スル露國政府ノ提案ニ同意シ難キ旨ヲ露國委員ニ通知セラレタリ日本國公使ハ右拒絶ノ理由ヲ説明セラル、ト同時ニ日本國專門家ノ意見ニ依リ刻下追究スル目的ニ一層適合スヘキ敷地ノ圖面ヲ露國委員ニ交付セラレタリ右圖面ニ依レハ日本國ノ停車場ハ長春市街ノ西北ニ方リ露國停車場ニ接近シタル地ニ在リ露國委員ハ該提案ノ有益ナルヲ認ムルニ拘ラス停車場敷地ニ關スル新案ヲ日本國委員ニ提出シタルハ雙方ノ利益ヲ圖ルノ考ナリシナリ露國案ニ依レハ新停車場ハ同シ鐵道線路上ニシテ現在停車場ノ最附近ニ建築セラルヘキナリ

右露國提案承諾セラレスト雖モ露西亞帝國政府ハ本問題ノ確定ヲ欲スルニ因リ日本國政府ノ希望ヲ熙諾スルコトヲ茲ニ聲明ス

千九百七年（三月二十五日／三月十二日）聖彼得堡ニ於テ

第二十一號

以電報啓上候陳者過般日本國專門委員ニ於テ決定致候別紙滿洲ニ於ケル日露兩國鐵道接續業務ニ關スル假條約案及御送付候

本使ハ右假條約ニ調印ノタメ本國政府ノ訓令ヲ請求可致ニ付キ貴下ハ別紙假條約案全部ニ付キ御同意ニ候ヤ否ヤ御回報相成度候

又寛城子停車場及石碑嶺炭坑ニ關シ御面晤致度ニ付キ成ルヘク明日何カニテ會合致度何分ノ御答ヲ煩シ度希望致候

右御依頼旁々本使ハ茲ニ貴下ニ向ヒテ敬意ヲ表シ候敬具

千九百七年四月（九日／二十二日）聖彼得堡ニ於テ

本野一郎

露國委員長ウェンツェル貴下

第二十二號

滿洲ニ於ケル日露鐵道接續業務ニ關スル

假條約案

日本帝國政府及露西亞帝國政府ハ千九百五年（八月二十三日／九月五日）ポーツマスニ於テ兩政府間ニ調印セラレタル講和條約第八條ノ規定ニ從ヒ滿洲ニ於ケル日本國及露西亞國ノ鐵道接續業務ニ關スル條約ヲ締結スルコトニ決定シ之カタメ日本國全權委員、、、、及露西亞國全權委員、、、、ハ各其本國政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ假條約トシテ左ノ諸條款ヲ協議決定セリ

此條約中一方ニ於テ南滿洲鐵道會社及他ノ一方ニ於テ東清鐵道會社ニ關スル規定ハ兩國政府ニ於テ各當該會社ヲシテ之ヲ正確ニ履行セシメンカタメ必要ナル措置ヲ執ルコトヲ互ニ約定ス

第一條　兩鐵道線ノ連絡ハ東清鐵道寛城子停車場ノ境界線ニ於テ之ヲ行フヘシ南滿洲鐵道會社ハ同鐵道會社ノ採用セル線路軌間ヲ以テ同鐵道長春停車場ヨリ東清鐵道寛城子停車場ノ境界マテ其線ヲ延長スヘク東清鐵道會社ハ南滿洲鐵道會社ノ敷設ニ係ル日本ノ該延長線ニ接續シテ之ト同一軌間ノ線路ヲ寛城子露國停車場ノ乘降場ニ至ルマテ敷設スヘシ東清鐵道會社ハ寛城子露國停車場ノ乘降場ヨリ同停車場ノ境界マテ一「メートル」五二四ノ軌道幅（即チ五英尺ノ露西亞軌道幅）ヲ以テ其線路ヲ延長敷設スヘク南滿洲鐵道會社ハ東清鐵道會社ノ敷設ニ係ル該露國延長線ニ接續シテ之ト同一軌間ノ線路ヲ長春日本停車場ノ乘降場ニ至ルマテ敷設スヘシ

日露兩鐵道線ノ連結點及該連結ノ方法ハ兩會社間ノ合意ヲ以テ之ヲ決定スヘシ

第二條　南滿洲鐵道會社及東清鐵道會社ハ其線路連結ノ外雙方線路軌間ノ相異アル結果トシテ必要ト認メタル終點停車場ニ於ケル旅客及貨物ノ直接交通ヲ圖リ且ツ成ルヘク短少ノ時間ト成ルヘク少額ノ費用トヲ以テ貨物ノ積換ヲ行フカタメ必要ナル諸般ノ設備ヲ爲スヘシ

兩鐵道會社ハ各自己ノ地域内ニ於ケル建築設計ヲ自ラ決定スルノ權利ヲ保留ス

第三條　本條約第一條及第二條ニ規定セル兩鐵道會社各自ノ職務ニ屬スル一切ノ工事ハ各會社ノ負擔トス而シテ該工事ハ兩會社ニ於テ成ルヘク速ニ且ツ成ルヘク同時ニ之ヲ竣成セシムヘシ

第四條　鐵道線路、乘換及積換ノ設備竝ニ其他各鐵道所屬地域内ニ於ケル附屬物件ノ維持ハ各會社ノ負擔トス

第五條　南滿洲鐵道及東清鐵道間ノ輸送ハ左記ノ條件ニ從ヒテ之ヲ行フヘシ

南滿洲鐵道ノ旅客列車ハ同列車ニ依リ輸送セラル、旅客、手荷物及其他ノ物件ヲ搭載ノ儘日本線路ニ依リ寛城子ノ露國停車場ニ至ルヘク東清鐵道ノ旅客列車ハ同列車ニ依リ輸送セラル、旅客、手荷物及其他ノ物件ヲ搭載ノ儘露國線路ニ依リ長春ノ日本停車場ニ至ルヘシ

南滿洲鐵道ノ貨物列車ニシテ東清鐵道線ニ向フモノハ日本線路ヲ經テ寛城子ノ露國停車場ニ至リ同所ニテ該貨物ヲ露國鐵道ニ引渡シ若クハ積換スヘク東清鐵道ノ貨物列車ニシテ南滿洲鐵道線ニ向フモノハ露國線路ヲ經テ長春ノ日本停車場ニ至リ同所ニテ該貨物ヲ日本鐵道ニ引渡シ若クハ積換スヘシ

第六條　兩鐵道ノ接續ヲ目的トスル列車運轉時間表ハ兩鐵道會社事務局合意ノ上之ヲ調製スヘシ

第七條　兩鐵道終點停車場間通行ノタメ旅客及貨物ヨリ徴收スヘキ料金ハ南方ヨリ北方ニ向フモノハ南滿洲鐵道線路ノ現行運賃率ニ依リ北方ヨリ南方ニ向フモノハ東清鐵道線路ノ現行運賃率ニ依リテ之ヲ徴收スヘシ

兩會社ノ線路ニ依レハ運搬ノタメニ徴收シタル收入ノ分配ハ兩會社事務局間ニ締結スヘキ協定ニ從ヒテ之ヲ行フヘシ

第八條　兩會社ハ互ニ他方ニ屬スル接續線路及積換設備ヲ無賃ニテ使用スヘシ

第九條　兩鐵道會社ハ旅客及貨物ノ正確ナル運輸ヲ確實ナラシムルニ充分ナル列車運轉業務ヲ相互ニ協定組織シ且ツ此業務ノ利益ニ基キ作業業務ニ關スル諸規則及規定ヲ設クヘシ

第十條　列車運轉業務、旅客ノ運送、貨物ノ積換、信號事務等ニ關シ本條約ニ基キ追テ設クヘキ一切ノ規定ハ兩會社間ニ於テ各自政府ノ正式認可ヲ經ヘキ特別ノ取極ヲ以テ之ヲ定ムヘシ運送機關ノ相互的使用、兩會社使用人間ノ關係竝ニ收入ノ分配ニ付キ各會社ニ歸スヘキ配當額ヲ定ムルノ方法ハ追テ前記ノ如キ取極ヲ以テ之ヲ制定スヘシ

第十一條　本條約ニ規定セル事項ニ付キ若クハ其他本條約ニ規定セル兩會社相互間ノ關係ニ關スル一切ノ事項ニ付キ兩會社事務局間ニ意見ノ一致セサルコトアル場合ニハ兩國政府ニ於テ意見交換ノ上其協議決定ヲ以テ之ヲ解決スヘシ

追加條款

第一條　日本帝國政府及露西亞帝國政府ハ兩國鐵道間ニ旅客及貨物ノ直接交通ヲ開始センコトヲ希望シ之カタメ成ルヘク速ニ特別協定ノ締結ヲ圖ランコトヲ約定ス

第二條　日露兩國ノ全權委員ハ長春ヨリ吉林ニ至ル鐵道線路敷設セラルヽマテ本日調印セラレタル條約第五條ヲ採用スルコトニ同意シタルニ依リ兩締盟國ハ追テ該鐵道敷設セラレタルトキハ東清鐵道ニ依リ北方ヨリ來リテ吉林又ハ大連ニ向フ旅客ノ轉乘及吉林線又ハ南滿洲鐵道線ニ依リ來著シテ北方ニ向フ旅客ノ轉乘ハ長春ノ日本停車場ニ於テ之ヲ行フヘキコトヲ約定ス之カタメ關係兩會社間ニ追テ特別ノ協定ヲ締結スヘシ

第三條　本日調印ノ假條約ニ規定セル工事竣成前ト雖モ滿洲ニ於ケル鐵道接續業務ノ實行ヲ期センカタメ南滿洲鐵道會社ハ寛城子ノ露國停車場附近ニ假停車場ヲ建設スヘシ且ツ日本假停車場及寛城子露國停車場間ニ旅客列車ニ依リ運送セラルヽ旅客、小包、手荷物及其他物品ノ輸送及貨物ノ積換ヲ行ハンカタメ兩會社ハ各自此目的ニ必要ナル設備ヲ爲スヘシ

第二十三號

本野公使ヨリウェンツェル氏ニ交付シタル議定書案

滿洲ニ於ケル日本及露國鐵道接續假條約ニ記名スルニ方リ兩締盟國ハ寛城子停車場及石碑嶺ニ[illegible]炭坑ニ關スル問題ヲ決定スルノ有益ナルコトヲ認メタルニ依リ兩國ノ全權委員ハ左ノ條款ヲ協定セリ

第一條

寛城子停車場及其附屬物件ハ原則上日本國及露西亞國ノ共有物ナリト雖モ實際ノ便宜上該停車場及其附屬物件ハ露西亞國ノ專有ニ歸スヘク之カタメ露西亞國政府ハ日本國カ寛城子停車場及其附屬物件ノ共同所有權ヲ放棄シタル報償トシテ露貨五十六萬三百九十三留ヲ日本國政府ニ支拂フヘシ

第二條

露西亞國政府ハ兩鐵道接續假條約ニ記名後成ルヘク速ニ本議定書ニ添付セル圖面中二二三號ヲ以テ示シタル地點ノ南方ニ在ル一切ノ鐵道及一切ノ附屬物件ヲ總テ現形ノ儘日本國政府ニ引渡スヘシ日本國及露西亞國政府ハ前記條約ニ記名後直ニ南滿洲鐵道會社竝ニ東清鐵道會社ニ對シ相互ニ前記ノ鐵道及其附屬物件竝ニ前顯炭坑ノ受渡ニ必要ナル訓令ヲ發スヘシ

第三條

日本國政府ハ追テ寛城子露國停車場ト長春市街トノ間ニ於テ長春日本停車場ヲ建築スヘキ場所

ヲ選定スルコトヲ兩締盟國間ニ約定ス

第四條

日露兩鐵道會社ノ間ニ締結スヘキ相互鐵道間ノ旅客及貨物ノ轉送ニ關スル詳細ノ規則ハ鐵道接續假條約調印後成ルヘク速ニ關係兩會社間ニ協商決定スヘシ本件ニ關スル兩會社委員ノ會合スヘキ場所及時日ハ最モ雙方ノ便宜ト爲ルヘキ方法ニ依リ追テ之ヲ定ムヘシ

第五條

本日締結セラレタル條約ハ該條約ノ追加條款第三條ニ揭クル日本假停車場ノ建築竣工ヲ告クルトキヨリ實行セラルヘキコトヲ兩締盟國間ニ約定ス

右證據トシテ兩國ノ全權委員本議定書ニ記名調印スルモノナリ

第二十四號

以書翰致啓上候陳者寬城子停車場及石碑嶺竝ニ陶家屯炭坑ニ關シ今般兩國委員ノ間ニ協定セラレタル議定書案正ニ領收致候

本件ニ關スル協商ノ際若シ吉林ニ至ル鐵道ヲ建築スル場合ニハ寬城子露國停車場長春市街間ニ直接ノ交通ヲ確定スルノ必要ニ付キ閣下ノ御注意ヲ促シタリシカ本問題ハ弊社ノ爲メ極テ重要ナルモノニ付キ吉林線ヲ有スル鐵道會社ハ其目的ニ於テ該鐵道線路ト露國停車場長春市街間ニ通スル主要ナル道路ト交叉スル點ニハ踏切若クハ陸橋ヲ建設スヘシト云フ箇條ヲ議定書案第三條（別紙參照）中ニ規定スル儀ニ關シ閣下ニ於テ異議ナカランコトヲ希望致候該取極ニ記名ノ都合モ有之候ニ付キ本件ニ關スル閣下ノ御所決成ルヘク速ニ御回報相成度此段及御依賴候右得貴意旁ヽ本委員ハ茲ニ閣下ニ向ヒテ敬意ヲ表シ候敬具

千九百七年五月（二十五日 十二日）聖彼得堡ニ於テ

ウェンツェル

日本國特命全權公使本野一郎閣下

第二十五號

千九百七年五月（二十五日 十二日）附ウェンツェル氏書翰附屬修正案

第三條

日本國政府ハ追テ寬城子露國停車場ト長春市街トノ間ニ於テ長春日本停車場ヲ建築スヘキ場所ヲ選定スルコトヲ兩締盟國間ニ約定ス

吉林ニ至ル鐵道線路ヲ建築スル場合ニハ鐵道會社ハ寬城子露國停車場ト長春市街間ノ主要ナル道路ト該鐵道線路ト交叉スル點ニ踏切若クハ陸橋ヲ建築スヘシ

第二十六號

以書翰致啓上候陳者寬城子露國停車場ト長春市街トノ間ニ通スル主要ナル道路ト吉林鐵道線路ト交叉スル點ニ踏切若クハ陸橋ヲ建築スル件ニ關スル一項ヲ議定書第三條ニ加フルノ必要アル旨五月（二十五日 十二日）附貴翰ヲ以テ御申越ノ趣閱悉致候本件ニ關スル特別ナル一項ヲ該議定書ニ記入スルコトハ原則上異存無之旨茲ニ及御回答候

然シナカラ將來ノ吉林鐵道會社ハ直接日本國政府ニ隷屬スヘキモノトモ思ハレス候ニ付キ本件ニ關シ日本國政府カ差向約定シ得ルハ該鐵道會社ヲシテ踏切若クハ陸橋ヲ建築セシムルコトヲ努ムヘシト云フニ止ルコトヲ茲ニ御注意致置候依テ御提出ノ條文ニ少シク修正ヲ加フルコトヲ及提議候若シ之ニ對シテ御異存無之候ハ條約及議定書共御示定ノ時日ニ記名可致候

別紙議定書第三條修正案相添回答旁ヽ本使ハ茲ニ閣下ニ向ヒテ敬意ヲ表シ候敬具

千九百七年五月（二十七日 十四日）聖彼得堡ニ於テ

本野一郎

東清鐵道會社副總裁ウェンツェル貴下

第二十七號

千九百七年五月（二十七日 十四日）附本野公使書翰附屬修正案

第三條修正案

日本國政府ハ追テ寬城子露國停車場ト長春市街トノ間ニ於テ長春日本停車場ヲ建築スヘキ場所ヲ選定スルコトヲ兩締盟國間ニ約定ス

吉林鐵道線路建築ノ場合ニ日本國政府ハ長春停車場ノ境界線以外ニ於テ寬城子露國停車場ト長春市街トノ間ニ通スル主要ナル道路ト鐵道線路ト交叉スル點ニハ該鐵道會社ヲシテ踏切若クハ陸橋ヲ建設セシムルコトヲ努ムヘシ

第二十八號

以書翰致啓上候陳者五月（二十七日 十四日）附貴翰閱悉致候議定書第三條ノ文章修正案ニハ全然御同意ニ付キ本問題ハ目下露國外務大臣閣下ノ決定ニ任セ居候右御回答旁ヽ本委員ハ茲ニ閣下ニ向ヒテ敬意ヲ表シ候敬具

千九百七年五月（三十一日 十八日）聖彼得堡ニ於テ

ウェンツェル

日本國特命全權公使本野一郎閣下

第二十九號

以書翰致啓上候陳者滿洲ニ於ケル露西亞國及日本國兩鐵道接續業務竝ニ寬城子停車場問題ニ關シ露西亞及日本兩國政府間ノ協議決定シタルニ依リ本大臣ハ本件ニ關スル假條約及議定書ニ記名スルノ勅許ヲ受ケ候間此段及御通知候就テハ來ル露曆五月三十一日ヲ以テ右書類ニ記名ノ

日ト定メ午後三時外務省ニ於テ記名ノ儀ヲ茲ニ提議致候間何分ノ御回報ヲ煩シ度候右御依賴旁ヽ本大臣ハ茲ニ重テ閣下ニ向ヒテ敬意ヲ表シ候敬具

千九百七年（六月十二日 五月三十日）聖彼得堡ニ於テ

イズヴォルスキー

日本國特命全權公使本野一郎閣下

第三十號

以書翰致啓上候陳者閣下ハ滿洲ニ於ケル日、露兩國鐵道接續業務ニ關スル假條約竝之ニ關スル議定書ニ記名スルノ勅許ヲ得ラレタル旨（六月十二日 五月三十日）附貴翰ヲ以テ御通知ノ趣敬承致候本使ハ右書類ニ記名ノタメ閣下ノ御提議ニ係ル木曜日即チ（六月十三日 五月三十一日）ヲ承諾致候ニ付キ同日午後三時專門委員帝國鐵道技師吉川氏竝ニ當公使館書記官落合丸毛ノ二氏同伴外務省ヘ出頭可致候右回答旁ヽ本使ハ茲ニ重テ閣下ニ向ヒテ敬意ヲ表シ候敬具

千九百七年（六月十三日 五月三十一日）聖彼得堡ニ於テ

本野一郎

露國外務大臣イズヴォルスキー閣下

第三十一號

以書翰致啓上候陳者日本帝國政府ハ日露鐵道接續業務ニ關スル假條約附屬議定書第二條ノ規定實施ノタメ鐵道及附屬物件竝ニ右議定書ニ記載セル炭坑受授ニ關シ南滿洲鐵道會社ニ必要ナル訓令ヲ與ヘ可申ニ付キ閣下ニ於テ同樣ノ訓令ヲ東清鐵道會社ニ與ヘラレ必要ノ措置ヲ執ラレ成ルヘク速ニ右引渡ノタメ該會社ニ於テ指定セラルヘキ委員ノ姓名ヲ本使ニ御通知相成度此段御依賴旁ヽ本使ハ茲ニ閣下ニ向ヒテ敬意ヲ表シ候敬具

千九百七年六月（十七日 四日）聖彼得堡ニ於テ

本野一郎

露國外務大臣イズヴォルスキー閣下

第三十二號

以書翰致啓上候陳者五月三十一日ニ調印セラレタル議定書第二條ノ規定實施ノタメニ執ルヘキ措置ニ關シ六月四日附公文ヲ以テ御申越ノ次第有之候ニ付キ本大臣ハ早速大藏大臣ト交涉ヲ開始致候處右鐵道及議定書第二條ニ規定シアル炭坑引渡ノタメ電報ヲ以テ必要ナル訓令ヲ東清鐵道會社事務局ニ與ヘタル旨同大臣ヨリ通知有之候

露貨五十六萬三百九十三留ノ金額ハ上海ニ於テ露清銀行ヲ經テ日本ノ銀行ヘ支拂可申候右金額支拂ノ期日ハ實際ノ都合上本年八月（二十三日 十日）ト示定センコトヲ希望致候

本大臣ハ茲ニ重テ閣下ニ向ヒテ敬意ヲ表シ候敬具

千九百七年六月十二日聖彼得堡ニ於テ

イズウォルスキー

日本國特命全權公使本野一郎閣下

第三十三號

以書翰致啓上候陳者滿洲ニ於ケル日露鐵道接續業務假條約附屬議定書第二條ニ揭ケタル鐵道及炭坑ノ引渡竝ニ金額ノ支拂ノ件御申越相成候六月（二十五日 十二日）附貴翰ノ回答トシテ本使ハ茲ニ日本帝國政府ハ該鐵道及炭坑受授ノタメ必要ナル訓令ヲ南滿洲鐵道會社ニ與ヘタルコト同會社理事犬塚氏カ東清鐵道會社ノ代表者ト交涉スヘキ委員ニ指定セラレタルコト及日本帝國政府ハ七月（二十五日 十二日）ニ右引渡ノ終了ヲ希望スルコトヲ閣下ニ報道スルノ光榮ヲ有シ候

滿洲ニ於ケル日露兩國鐵道接續假條約附屬議定書第一條ニ揭ケタル金額ノ受授ハ前記鐵道及炭坑ノ引渡ト同時ニ行フヘキモノト日本帝國政府ニ於テ思考致候ヘトモ若シ露西亞帝國政府ニ於テ故障有之候ハヽ日本帝國政府ハ八月（二十三日 十日）上海ニ於テ露清銀行及橫濱正金銀行ノ仲介ヲ經テ完了セシムルモ異存更ニ無之候

本使ハ茲ニ重テ閣下ニ向ヒテ敬意ヲ表シ候敬具

千九百七年（七月三日 六月二十日）聖彼得堡ニ於テ

本野一郎

露國外務大臣イズヴォルスキー閣下

第三十四號

以書翰致啓上候陳者日本帝國政府ハ鐵道接續業務假條約附屬議定書ニ揭ケタル鐵道及炭坑受授ノタメ必要ナル訓令ヲ南滿洲鐵道會社ニ與ヘ犬塚氏ハ東清鐵道會社代表者トノ交涉委員ニ指定セラレタル旨本年（七月三日 六月二十日）附書翰ヲ以テ申越候處日本帝國政府ハ豫知セサリシ故障ノタメ犬塚氏ノ代ニ同鐵道會社理事野々村氏ニ前記鐵道及炭坑受授ノ任務ヲ命シ候間此段閣下ニ報道スルノ光榮ヲ有シ候本使ハ茲ニ重テ閣下ニ向ヒテ敬意ヲ表シ候敬具

千九百七年（七月十日 六月二十七日）聖彼得堡ニ於テ

本野一郎

露國外務大臣イズヴォルスキー閣下

第三十五號

以書翰致啓上候陳者本月二十日竝二十四日附貴翰ヲ以テ御申越ノ趣ハ早速大藏大臣ニ移牒致候處本年五月三十一日ノ議定書ニ規定セル鐵道及炭坑ノ引渡ヲ七月（二十五日 十二日）ニ實行スル件竝ニ野々村氏カ右鐵道及炭坑受授委員ニ指定セラレ

タル件ニ付キ電報ヲ以テ必要ナル訓令ヲ東清鐵道會社長ニ發シタル旨同大臣ヨリ回報有之候又右議定書第一條ニ規定セル金額支拂ノ件ニ付キテハ八月二十三日在上海横濱正金銀行支店ニ於テ實行スヘキ旨追テ同地ノ露清銀行支店ヘ訓令ヲ發スル筈ニ有之候

右御通知旁〻本官ハ茲ニ重テ閣下ニ向ヒテ敬意ヲ表シ候敬具

千九百七年六月二十七日聖彼得堡ニ於テ

グーベストフ

日本國特命全權公使本野一郎閣下

第三十六號

以書翰致啓上候陳者南滿洲鐵道會社理事國澤氏今般日露鐵道接續實行ニ關シ東清鐵道會社代表者ト協商ヲ爲スヘキ委員ニ任セラレ本日寬城子ニ向ケ出發可致筈ニ付キ右閣下ニ御通知スルノ光榮ヲ有シ候右ノ趣可然其筋ヘ御通知相成候樣此段御依頼旁〻本使ハ茲ニ重テ閣下ニ向ヒテ敬意ヲ表シ候敬具

千九百七年七月（十五八）日聖彼得堡ニ於テ

本野一郎

露國外務大臣イズウォルスキー閣下

◎日露協約

明治四十年八月十五日官報

去月三十日露國聖彼得堡ニ於テ帝國特命全權公使本野一郎ト露國外務大臣イズウォルスキートノ間ニ調印セラレタル日露協約左ノ如シ

日露協約

日本國皇帝陛下ノ政府及全露西亞國皇帝陛下ノ政府ハ幸ニ日本國及露西亞國間ニ克復セラレタル平和及善鄰ノ關係ヲ鞏固ナラシメムコトヲ希望シ且將來兩帝國ノ關係ニ於ケル一切誤解ノ原因ヲ除去セムコトヲ欲シ左ノ條款ヲ協定セリ

第一條

締約國ノ一方ハ他ノ一方ノ現在ニ於ケル領土保全ヲ尊重スルコトヲ約ス又締約國間ニ謄本ヲ交換セル締約國ト淸國トノ現行諸條約及契約ヨリ生スル一切ノ權利（但シ機會均等主義ニ反セサル權利ニ限ル）竝一千九百五年九月五日即露曆八月二十三日「ポウツマス」ニ於テ調印セラレタル條約及日本國ト露西亞國トノ間ニ締結セラレタル諸特殊條約ヨリ生スル一切ノ權利ハ互ニ之ヲ尊重スルコトヲ約ス

第二條

兩締約國ハ淸帝國ノ獨立及領土保全竝同國ニ於ケル列國商工業ノ機會均等主義ヲ承認シ且自國ノ執リ得ヘキ一切ノ平和的手段ニ依リ現狀ノ存續及前記主義ノ確立ヲ擁護支持スルコトヲ約ス

右證據トシテ下名ハ各其ノ政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ之ニ記名調印スルモノナリ

明治四十年七月三十日即露曆一千九百七年七月十七日（七月三十日）聖彼得堡ニ於テ本書ヲ作ル

本野一郎

イズウォルスキー

明治四十年八月二十七日官報

昨二十六日內閣總理大臣ヨリ各省大臣ヘ左ノ訓令ヲ通達セラレタリ

內閣訓令

各官廳

帝國ト露國トハ五十年來親善ナル與國タリ一朝不幸ニシテ干戈相見ルニ至リタルモ今ヤ平和克復ニ歸シ國交舊ニ復シタルノミナラス兩國政府ハ進テ將來紛爭ノ原由ヲ一掃シ以テ東洋ノ平和ト康寧トヲ確保セムカ爲メ協商ヲ遂ケ締約方ニ成ル惟フニ戰後ノ常態トシテ彼我ノ民心動モスレハ猜忌ヲ挾ミ誤解ヲ來スコトナキヲ保セス是ノ如キハ啻ニ個人間ノ關係ニ止マラス延テ國交ノ好誼ヲ損シ協約ノ精神ヲ誤ル所以タラスムハアラス局ニ當ル者宜ク此ノ點ニ留意シ國民ヲシテ協約ノ[illegible]ニ善鄰ノ誼ヲ以テ[illegible]ノ情誼ニ[illegible]シムルコトヲ期スヘシ

明治四十年八月二十六日

內閣總理大臣　侯爵西園寺公望

第三章　開港

◎開港港則中改正

明治四十年十一月十日
勅令第三百三十三號總、大、遞、內、外、大臣副署

朕開港港則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

開港港則中左ノ通改正ス

第一條中武豐ノ項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

名古屋ノ港界ハ西突堤燈臺ヲ中心トシテ二海哩半ノ半徑ヲ有スル圓圈ノ一弧內

附　則

本令ハ明治四十年十一月十日ヨリ之ヲ施行ス

◎開港及開港ニ於ケル輸出入貨物ノ指定中改正

明治四十年十月二十八日
勅令第三百三十號總、大、大臣副署

朕明治三十二年勅令第三百四十二號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十二年勅令第三百四十二號中左ノ通改正ス

第一條中「尼崎、武豐」ノ次ニ「名古屋」ヲ加フ

附　則

本令ハ明治四十年十一月十日ヨリ之ヲ施行ス

明治四十年十一月二十九日
勅令第三百四十號總、大、大臣副署

朕明治三十二年勅令第三百四十二號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十二年勅令第三百四十二號中左ノ通改正ス

第二條中「米、籾、大麥、小麥、燕麥、玉蜀黍及豆類」ノ次ニ「コークス」ヲ、「鐵鑛」ノ下ニ「及滿俺鑛」ヲ、「銑鐵」ノ下ニ「、滿俺鐵及スピーゲルアイゼン」ヲ加フ

第二條ノ三中「背森港及蘇澳港」ヲ「背森港」ニ改メ「テー形、アングル形其ノ他類似ノモノ」ノ前ニ「條鐵」ヲ、「軌條及軌條用フヰッシプレート」ノ次ニ「管」ヲ「鐵製牝牡螺旋釘、ワッシャー、リベット及ドッグスパイクス」ノ前ニ「線」ヲ加フ

附　則

本令ハ明治四十年十二月一日ヨリ之ヲ施行ス

◎臺灣關稅規則ニ依ル開港場所指定中改正

明治四十年五月十七日
臺灣總督府令第三十號

明治三十二年八月府令第八十七號中「蓬中保行下下湖口」ヲ削ル

本令ハ明治四十年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

第四章　渡航及在留

◎外國旅券規則

明治四十年三月十五日
外務省令第一號
改正　四〇年第七號

外國旅券規則左ノ通相定ム

外國旅券規則

第一條　外國ヘ旅行スル者ニ下付スル旅券ハ外務大臣之ヲ發給シ外國ニ於テハ帝國大使、公使、領事官及貿易事務官ヲシテ之ヲ發給セシム

第二條　旅券ノ下付ヲ請フ者ハ書面ニ左ノ事項ヲ記載シ之ニ戶籍謄本又ハ其ノ氏名、本籍地及身分ヲ證明スヘキ文書ヲ添附シ內國ニ於テハ本籍地又ハ所在地ノ地方上級行政廳（東京府ニ在リテハ警視廳以下之ニ同シ）ニ、關東州ニ於テハ關東都督府、外國ニ於テハ在外公館ニ出願スヘシ但シ關東州ニ於テハ關東都督、外國ニ於テハ帝國大使、公使、領事官又ハ貿易事務官ノ認定ニ依リ戶籍謄本又ハ其ノ他ノ文書ノ添附ヲ省略セシムルコトヲ得

一　氏名（外國名ヲ有スル者ハ其ノ外國名ヲ附スヘシ）
二　本籍地（本籍地ト所在地ト異ナルトキハ所在地ヲモ併記スヘシ）
三　身分（戶主、家族ノ別、家族ナルトキハ戶主ノ氏名及戶主トノ續柄ヲ記載スヘシ）
四　年齡（年齡ハ何年何月何日生）
五　職業
六　旅行地名
七　旅行ノ目的

旅券ノ下付ヲ請フ者北海道又ハ長崎縣下對馬國ニ本籍地若ハ所在地ヲ有スルトキハ前者ハ函館支廳ニ後者ハ對馬島廳ニ出願スルコトヲ得

第三條　臺灣ニ於ケル旅券ノ下付ハ臺灣總督ノ定ムル所ニ依リ樺太ニ於ケル旅券ノ下付ハ樺太廳長官ノ定ムル所ニ依ル

臺灣住民カ內地ニ在リテ旅券ノ下付ヲ出願スルトキハ本令第二條第一項各號ノ事項及戶籍謄本添附ニ關スル規定ニシテ適用シ得サルモノハ之ニ依ラサルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ出願官廳ニ內地渡航證ヲ提示スルコトヲ要ス

第四條　[illegible]ハ[illegible]ノ定ムル所ニ依[illegible]

第五條　內地、關東州[illegible]國臣民ノ旅券ノ下付ヲ請フ者ハ本令ノ規定ヲ準用ス但シ內國ニ在リテハ北海道、東京府、京都府、大阪府、神奈川縣、兵庫縣、長崎縣、新潟縣及福井縣ニ限リ旅券ノ下付ヲ出願スルコトヲ得

前項出願ノ場合ニ於テハ本籍地及戶籍謄本ノ添附ヲ省略セシムルコトヲ得

第六條　官命ニ依リ外國ニ旅行スル者ハ內國及關東州ニ於テハ其ノ所管官廳ヲ經由シ外務省ニ、外國ニ於テハ在外公館ニ旅券ノ下付ヲ出願スルコトヲ得但シ第二條第一項第一號、第六號及第七號ノ事項ヲ記載シ家族又ハ從者ヲ同行スルトキハ同行者ニ關シテモ第二條第一號乃至第四號ノ事項ヲ併記スヘシ

官命ニ依リ外國ニ在ル者其ノ所在地ニ家族又ハ從者ヲ呼寄セムトスルトキハ其ノ旅券下付ノ出願ニ關シテ前項ノ規定ヲ準用スルコトヲ得

第七條　移民保護法ノ規定ニ依リ移民取扱人ニ依ル移民又ハ保證人ヲ要スル移民ハ其ノ旅券下付ノ出願ヲ爲ストキハ移民取扱人又ハ保證人ノ連署ヲ要ス

第八條　第二條ノ規定ニ依リ內國及關東州ニ於テ旅券ノ下付ヲ受クル者ハ一枚ニ付金一圓ニ相當スル收入印紙ヲ旅券ニ貼附スヘシ外國ニ於テ帝國大使、公使又ハ領事ノ定ムル付手數料ハ明治三十三年外務省令第三號ノ規定ニ依ル

第九條　旅券ノ下付ヲ受クル者ハ其ノ旅券ニ署名スヘシ若シ署名スルコト能ハサルトキハ代署セ

シメ本人之ニ實印ヲ押捺スヘシ

旅券面ニ査證アルコトヲ必要トスル國ニ旅行スル者ハ其ノ定ムル所ニ依リ査證ヲ受クヘシ

第十條　左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ旅券ノ下付ヲ受クルコトヲ得ス但シ第二號ニ該當スル者ハ清國又ハ韓國ニ旅行セムトスル場合ヲ除クノ外此ノ限ニ在ラス

一　懲戒命令中ノ者

一　清國又ハ韓國在留禁止命令中ノ者

第十一條　第二條ノ規定ニ依リ旅券ノ下付ヲ受ケタル後六箇月以內ニ出發セサル者ハ旅券ヲ返納スヘシ

第十二條　旅行者歸國若ハ歸著シタルトキハ旅券ヲ返納スヘシ

旅券ノ下付ヲ受ケタル者死亡シタルトキハ其ノ遺族ヨリ之ヲ返納スヘシ

第十三條　商業漁業其ノ他職業ノ爲特定ノ地ニ數次往復スル者ハ歸國若ハ歸著每ニ其ノ旅券ヲ返納スルコトヲ要セス但シ旅券領收ノ日ヨリ三箇年ヲ過キテ歸國若ハ歸著スルトキハ之ヲ返納スヘシ

前項特定ノ地ハ外務大臣之ヲ告示ス

第十四條　旅行十年ニ及ヒ歸國セサル者ハ旅券ヲ領收シタルトキヨリ十年以內ニ帝國大使、公使、領事官又ハ貿易事務官ノ査證ヲ受クヘシ其ノ後十年ニ及フ每ニ亦同シ

第十五條　旅券ノ下付ヲ受ケタル者第十條各號ノ一ニ該當スルニ至リタルトキ又ハ第二條第一項第一號乃至第三號、第六號及第七號ノ事項ニ變更ヲ生シタルトキハ直ニ旅券ヲ返納スヘシ

第十六條　旅券ヲ紛失シタルトキハ直ニ屆出ツヘシ之ヲ發見シタルトキ亦同シ

第十七條　本令ノ規定ニ依リ旅券ノ返納又ハ其ノ紛失若ハ發見ノ屆出ヲ受クヘキ官廳ハ內國ニ於テハ地方上級行政廳、警視廳、函館支廳及對馬島廳、關東州ニ於テハ關東都督府、外國ニ於テハ在外公館トス

第十八條　本令ニ於テ在外公館ト稱スルハ帝國大使館、公使館、總領事館、領事館、總領事館分館、領事館分館及貿易事務館ヲ謂フ

第十九條　左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ其ノ旅券ヲ沒收シ二十五圓以下ノ罰金又ハ二十五日以下ノ重禁錮ニ處ス

一　第二條第一項各號ノ事項ヲ詐稱シ又ハ第十條各號ノ一ニ該當スル者其ノ事實ヲ申告セス其ノ他詐欺ノ所爲ヲ以テ旅券ノ下付ヲ受ケタル者及之ヲ幫助シタル者

一　他人ノ氏名ヲ記載シタル旅券ヲ使用シ又ハ之ヲ使用セシメ其ノ他不正ノ目的ヲ以テ旅券ヲ授受シタル者及之ヲ幫助シタル者

一　本令ニ依リ返納スヘキ旅券ヲ返納セスシテ使用シタル者

附　則

第二十條　舊規則ニ依リ旅券ノ下付ヲ受ケタル者ニ對スル第十一條ノ期間ハ該旅券面ノ日ヨリ之ヲ起算ス

第二十一條　本令ハ明治四十年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十三年（六月）外務省令第二號外國旅券規則ハ本令施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

明治四十年四月一日
外務省告示第七號

明治四十年（三月）外務省令第一號外國旅券規則第十三條ニ依リ同一旅券ヲ以テ數次往復シ得ヘキ地ヲ左ノ通相定ム

露領薩哈嗹島及沿海州

◎外國旅券規則

明治四十年四月二十日
統監府令第十六號

外國旅券規則左ノ通定ム

外國旅券規則

第一條　韓國ニ在ル帝國臣民及韓國臣民ニシテ外國ニ旅行スル者ニ下付スル旅券ハ統監之ヲ發給ス

第二條　旅券ノ下付ヲ請フ者ハ書面ニ左ノ事項ヲ記載シ之ニ戶籍謄本又ハ其ノ氏名、本籍地及身分ヲ證明スヘキ書類ヲ添付シ理事廳又ハ理事廳支廳ニ出願スヘシ但シ理事官又ハ副領事官ノ認定ニ依リ戶籍謄本又ハ其ノ他ノ文書ノ添付ヲ省略セシムルコトヲ得

一　氏名（韓國臣民ニ在リテハ[illegible]併記スヘシ）

二　本籍地（韓國臣民ニ在リテハ住所地）

三　所在地

四　身分（戶主、家族ノ別、家族ナルトキハ戶主ノ氏名及戶主トノ續柄ヲ記載スヘシ）

五　年齡（何年何月何日生）

六　職業

七　旅行地名

八　旅行ノ目的

第三條　官命ニ依リ外國ニ旅行スル者ハ其ノ所管官廳ヲ經由シテ統監府ニ旅券ノ下付ヲ出願スルコトヲ得但シ第二條第一號、第七號及第八號ノ事項ヲ開申スヘシ家族又ハ從者ヲ同行スルトキハ同行者ニ係ル第二條第一號乃至第五號ノ事項ヲ併セテ開申スヘシ

第四條　移民保護法ノ規定ニ依リ移民取扱人ニ依ル移民又ハ保證人ヲ要スル移民ニシテ第二條ノ出願ヲ爲ストキハ移民取扱人又ハ保證人ノ連署ヲ要ス

第五條　第二條ノ規定ニ依リ旅券ノ下付ヲ受クル者ハ一枚ニ付金一圓ニ相當スル收入印紙ヲ旅券領收證ニ貼付スヘシ

第六條　旅券ノ下付ヲ受クル者ハ其ノ券面ニ署名スヘシ若シ署名スルコト能ハサルトキハ代署セシメ本人之ニ實印ヲ押捺スヘシ但シ韓國臣民ニ在リテハ實印ノ押捺ヲ省略セシムルコトヲ得

旅券面ニ査證アルコトヲ必要トスル國ニ旅行スル者ハ其ノ定ムル所ニ依リ査證ヲ受クヘシ

第七條　清國在留禁止命令中ノ者ハ該國ニ旅行スル場合ニ限リ旅券ノ下付ヲ受クルコトヲ得ス

第八條　第二條ノ規定ニ依リ旅券ノ下付ヲ受ケタル後六箇月以內ニ出發セサル者ハ旅券ヲ返納スヘシ

第九條　旅行者歸國若ハ歸著シタルトキハ旅券ヲ返納スヘシ

旅券ノ下付ヲ受ケタル者死亡シタルトキハ其ノ遺族ヨリ之ヲ返納スヘシ

第十條　商業、漁業其ノ他ノ職業ノ爲特定ノ地ニ數次往復スル者ハ歸國又ハ歸著每ニ其ノ旅券ヲ返納スルコトヲ要セス但シ旅券領收ノ日ヨリ三箇年ヲ過キテ歸國若ハ歸著シタルトキハ之ヲ返納スヘシ

前項特定ノ地ハ統監之ヲ告示ス

第十一條　旅券ノ下付ヲ受ケタル者第二條第一號乃至第四號、第七號及第八號ノ事項ニ變更ヲ生シタルトキハ直ニ旅券ヲ返納スヘシ

第十二條　旅券ヲ紛失シタルトキハ直ニ屆出ツヘシ之ヲ發見シタルトキ亦同シ

第十三條　韓國ニ於テ旅券ノ返納又ハ其ノ紛失若ハ發見ノ屆出ヲ受クヘキ官廳ハ統監府、理事廳及理事廳支廳トス

第十四條　左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ其ノ旅券ヲ沒收シ二十五圓以下ノ罰金又ハ二十五日以下ノ重禁錮ニ處ス

一　第二條各號ノ事項ヲ詐稱シ又ハ第七條ノ事實ヲ申告セス其ノ他詐欺ノ所爲ヲ以テ旅券ノ下付ヲ受ケタル者及之ヲ幫助シタル者

二　他人ノ氏名ヲ記載シタル旅券ヲ使用シ又ハ之ヲ使用セシメ其ノ他不正ノ目的ヲ以テ旅券ヲ授受シタル者及之ヲ幫助シタル者

三　本令ニ依リ返納スヘキ旅券ヲ返納セスシテ使用シタル者

附　則

第十五條　舊規則ニ依リ旅券ノ下付ヲ受ケタル者ニ對スル第八條ノ期間ハ該旅券面ニ記載シタル下付ノ日ヨリ之ヲ起算ス

第十六條　本令ハ明治四十年五月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十九年（六月）統監府令第三十四號韓國人外國旅券規則ハ本令施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

明治四十年五月二日
統監府告示第六十五號

明治四十年（四月）統監府令第十六號外國旅券規則第十條ニ依リ同一旅券ヲ以テ數次往復シ得ヘキ地ヲ左ノ通定ム

一　清國盛京省、吉林省及黑龍江省

二　露領薩哈嗹島、沿海州及黑龍州

◎外國旅券規則

明治四十年十月三十日
關東都督府令第八十六號

外國旅券規則左ノ通相定ム

外國旅券規則

第一條　關東州ヨリ直ニ外國ニ渡航セムトスル帝國臣民ニシテ旅券ノ下付ヲ請フ者ハ左ノ事項ヲ記載シタル願書ヲ其ノ本居地若ハ寄留地ヲ管轄スル廳ニ差出スヘシ

一　氏名

二　本籍若ハ本居地

三　寄留地

四　身分（戶主、家族ノ別、家族ナルトキハ戶主ノ氏名及戶主トノ續柄ヲ記載スヘシ）

五　族稱

六　生年月日

七　職業

八　旅行地名

九　旅行ノ目的

前項ノ願書ニハ戶口調査簿ノ抄本及本島人ニ在リテハ最近ノ撮影ニ係ル本人ノ寫眞（半身二葉）ヲ添附スヘシ

第二條　官命ニ依リ外國ニ旅行スル者ハ所屬官廳ヲ經由シテ旅券ノ下付ヲ關東都督府ニ請求スヘシ此ノ場合ニハ第一條第一項第一號第八號第九號ノ事項ヲ開申スヘシ家族若ハ從者ヲ同行スルトキハ同行者ニ係ル第一條第一項第一號乃至第六號ノ事項ヲ併セテ開申スヘシ

官命ニ依リ外國ニ在ル者家族及從者ヲ其ノ所在地ニ呼寄セムトスル場合ニ於ケル旅券下付ノ請求ニ關シテハ前項ノ規定ヲ準用ス

第三條　戶主ト同行スル家族、夫ト同行スル妻又ハ父若ハ母ト同行スル子ニシテ旅券ノ下付ヲ請フトキハ其ノ氏名、身分及年齡ヲ戶主、夫又ハ父母ノ旅券ニ併記スルコトヲ得但シ夫ト同行スル妻ヲ除クノ外十二歲未滿ノ者ニ限ル

第四條　臺灣ニ在ル韓國臣民ノ旅券ノ下付ニ關シテハ此ノ規則ヲ準用ス但シ臺北縣及臺南縣ニ限リ旅券ノ下付ヲ出願スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ本籍地ノ記載ヲ省略セシムルコトヲ得

第五條　第一條ニ依リ旅券ノ下付ヲ受クル者ハ手數料トシテ一枚ニ付金一圓ニ相當スル收入印紙ヲ旅券領收證ニ貼附スヘシ

第六條　旅券ヲ領收シタルトキハ直ニ旅券面指定ノ箇所ニ署名スヘシ但シ署名スルコト能ハサルトキハ代署セシメ本人之ニ捺印スヘシ

旅券面ニ査證アルヲ必要トスル國ニ旅行スル者ハ其ノ定ムル所ニ依リ査證ヲ受クヘシ

第七條　清國ニ旅行スル者ニシテ開港場以外ノ地ニ赴カムトスル者ハ其ノ目的地最寄ノ帝國領事館ニ出頭シ清國內地旅行ニ要スル護照下付ヲ出願スヘシ其ノ手續ハ領事館ノ定ムル所ニ依ル

第八條　左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ旅券ノ下付ヲ受クルコトヲ得ス

一　不正ノ營業ヲ目的トシテ外國ニ渡航セムトスルモノト認メラレタル者

二　旅行地ノ國法ニ違反シテ渡航ヲ企ツルモノト認メラレタル者

三　環戒命令中ノ者

四　清國若ハ韓國在留禁止命令中ノ者ニシテ該國ニ旅行セムトスル者

第九條　旅行者歸著シタルトキ又ハ旅券下付ヲ受ケタル後二箇月以內ニ出發セサルトキハ二十日以內ニ下付ヲ受ケタル官廳ニ旅券ヲ返納スヘシ

旅券下付ヲ受ケタル者死亡シタルトキハ一箇月內ニ遺族ヨリ之ヲ返納スヘシ

第二條ニ依リ下付ヲ受ケタル旅券ハ本人歸著後所屬官廳ヲ經テ臺灣總督府ニ返納スヘシ

第十條　旅行十年以上ニ及ヒ歸國セサル者ハ十年毎ニ帝國大使、公使、領事官又ハ貿易事務官ノ査證ヲ受クヘシ但シ清國ニ旅行スル者ニ在リテハ五年毎ニ之ヲ受クヘシ

第十一條　旅券ヲ領收シタル者第一條第一項第一號乃至第六號第八號第九號ノ事項ニ變更ヲ生シタルトキ又ハ第八條第三號第四號ニ該當スルニ至リタルトキハ直ニ旅券ヲ返納スヘシ

第十二條　旅券ヲ亡失シタルトキ又ハ之ヲ發見シタルトキハ直ニ下付ヲ受ケタル官廳ニ屆出ヘシ

第十三條　左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ其ノ旅券ヲ取上ケ百圓以下ノ罰金又ハ六箇月以下ノ重禁錮ニ處ス

一　第一條第一項各號ノ事項ヲ詐稱シ又ハ第八條各號ノ一ニ該當スル者ニシテ其ノ事實ヲ隱蔽シ又ハ旅券下付ノ願書ニ他人ノ寫眞ヲ添附シ其ノ他詐欺ノ所爲ヲ以テ旅券ノ下付ヲ受ケタル者及之ヲ幇助シタル者

二　他人ノ氏名ヲ記載シタル旅券ヲ使用シ又ハ之ヲ使用セシメタル者其ノ他不正ノ目的ヲ以テ旅券ヲ授受シタル者及之ヲ幇助シタル者

三　此ノ規則ニ依リ返納スヘキ旅券ヲ返納セスシテ使用シタル者

四　旅券ニ貼付シタル寫眞ヲ取換ヘ之ヲ使用シタル者

第十四條　此ノ規則ニ依リ返納スヘキ旅券ヲ返納セサル者又ハ第十條ノ査證ヲ受ケス若ハ第十二條ノ屆出ヲ爲ササル者ハ十圓以下ノ罰金ニ處ス

附　則

本令ハ明治四十年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十三年府令第九十五號外國旅行券則ハ之ヲ廢止ス

◎移民保護法中改正

明治四十年四月十日
法律第三十三號　外、大臣副署

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル移民保護法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

移民保護法中左ノ通改正ス

第五條ニ左ノ一項ヲ加フ

移民取扱人ハ行政廳ノ許可ヲ得テ移民ト直接ノ關係ヲ有スル業務ヲ營ムコトヲ得

「第十五條」ヲ「第十五條ノ一」ニ改ム

第十五條ノ二　行政廳ハ必要ト認ムルトキハ移民取扱人ニ同業組合ノ設立ヲ命スルコトヲ得

同業組合ハ法人トス

同業組合ニ關スル規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

「第二十條」ヲ「第二十條ノ一」ニ改ム

第四章　移民運送船

第二十條ノ二　本法ニ於テ移民運送船ト稱スルハ命令ヲ以テ定ムル地方ニ渡航スル五十人以上ノ移民ヲ搭載スル船舶ヲ謂フ

第二十條ノ三　移民運送船ニ依ル移民ノ運送ハ行政廳ノ許可ヲ受クルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

前項ノ許可ヲ受ケタル者ハ行政廳ノ定ムル所ニ依リ保證金ヲ納付スヘシ

第二十條ノ四　行政廳ハ前條ノ許可ヲ受ケタル者ノ行爲ニシテ法令若ハ許可ノ條件ニ違反シタルトキ又ハ移民ノ利益ヲ害スルモノト認ムルトキハ其ノ許可ヲ取消スコトヲ得

第二十條ノ五　移民運送船ニ依リ移民ノ運送ヲ爲サムトスル者ハ其ノ運送毎ニ豫メ行政廳ノ

認可ヲ受クヘシ

第二十條ノ六　行政廳ハ移民運送船ノ發著港ヲ指定スルコトヲ得

第二十條ノ七　行政廳ハ移民運送船ノ船長ヲシテ運送移民ニ關スル諸般ノ報告ヲ爲サシムルコトヲ得

第五章　雜則

第二十條ノ八　金錢貸付ヲ業トスル者ニシテ移民ニ對シ渡航費其ノ他渡航ノ準備ニ必要ナル金錢ヲ貸與スルトキハ其ノ條件ニ付豫メ行政廳ノ認可ヲ受クヘシ

第二十條ノ九　移民出發港ニ於テ移民宿泊業ヲ營マムトスル者ハ行政廳ノ許可ヲ受クヘシ

前項ノ許可ヲ受ケタル者ハ移民宿泊所ノ設備、移民ノ給養竝宿泊料其ノ他移民ノ負擔ト爲ルヘキ事項ニ付豫メ行政廳ノ認可ヲ受クヘシ

第二十條ノ十　移民取扱人ニ非スシテ移民乘船ニ關スル周旋ヲ爲サムトスル者ハ行政廳ノ許可ヲ受クヘシ

前項ノ許可ヲ受ケタル者ハ移民乘船ニ關スル周旋ノ方法及移民ノ負擔ト爲ルヘキ事項ニ付豫メ行政廳ノ認可ヲ受クヘシ

第二十條ノ十一　行政廳ハ前二條ノ許可ヲ受ケタル者ノ行爲ニシテ法令ニ違反シタルトキ又ハ移民ノ利益ヲ害スルモノト認ムルトキハ其ノ營業ヲ停止シ又ハ營業ノ許可ヲ取消スコトヲ得

「第四章」ヲ「第六章」ニ改ム

第二十三條ニ左ノ一項ヲ加フ

行政廳ノ許可ヲ受ケスシテ第五條第二項ノ營業ヲ爲シタル移民取扱人亦前項ニ同シ

「第二十六條」ヲ「第二十六條ノ一」ニ改ム

第二十六條ノ二　第二十條ノ三ニ違反シタル者ハ五百圓以上一萬圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十六條ノ三　第二十條ノ二ニ違反シタル者ハ二百圓以上三千圓以下ノ罰金ニ處ス行政廳カ移民運送船ノ發著港ヲ指定シタル場合ニ於テ其ノ指定ニ違反シタル者亦同シ

第二十六條ノ四　第二十條ノ七ニ依リ行政廳ノ命シタル報告ヲ爲ササル者ハ五十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十六條ノ五　第二十條ノ八、第二十條ノ九及第二十條ノ十ニ違反シタル者ハ百圓以上千圓以下ノ罰金ニ處ス

「第五章」ヲ「第七章」ニ改ム

附　則

本法ハ明治四十年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

●移民保護法施行細則

明治四十年六月八日
外務省令第三號

移民保護法施行細則左ノ通相定ム

移民保護法施行細則

第一章　移民

第一條　移民保護法第一條ノ勞働ハ農業、漁業、露領沿海州及薩哈嗹島沿岸ニ於テ行フ漁業ヲ除ク、鑛業、工業、土木、運搬、建築、炊事、洗濯、裁縫、理髮、給仕及看病等ニ關スル勞働トス

第二條　移民渡航ノ許可ヲ受ケムトスルトキハ渡航地、渡航ノ目的及渡航年限ヲ詳記シ本籍地又ハ寄留地ノ地方長官ニ出願スヘシ但シ寄留地ノ地方長官ニ出願スル場合ニ於テハ三箇月以上其ノ地ニ住居シタル事實ヲ證明スヘキ書類ヲ添附スルコトヲ要ス

前項ノ出願者ニシテ移民取扱人ニ依ル者ニ在リテハ移民取扱人之ニ連署シ移民保護法第三條ニ依リ保證人ヲ要スル場合ニ在リテハ保證人之ニ連署スヘシ但シ契約移民ニ在リテハ出願ノ際移民保護法第十三條第一項ノ契約書ヲ添附スヘシ

第三條　移民保護法第三條ニ依リ保證人ヲ定メシムヘキ地ハ外務大臣之ヲ告示ス

第四條　移民保護法第三條ノ保證人ハ本籍地又ハ寄留地ノ地方長官ニ於テ適當ト認ムル者ニ限ル

第二章　移民取扱人

第五條　移民取扱人タラムトスル者ハ左ノ事項ヲ詳記シ外務大臣ニ出願シテ許可ヲ受クヘシ但シ商事會社ノ場合ニ於テ合名會社ニ在リテハ總社員、合資會社ニ在リテハ無限責任社員、株式會社ニ在リテハ發起人又ハ取締役、株式合資會社ニ在リテハ無限責任社員ヨリ出願シ且定款ヲ添附スルコトヲ要ス

一　商號アルモノハ其ノ商號

二　營業所

三　營業資本金額

四　營業年限ヲ定ムルモノハ其ノ年限

五　移民ヲ渡航セシムヘキ地

六　移民募集ノ方法及其ノ渡航前後ニ於ケル周旋方法

七　出願者ノ履歴

八　出願者ノ財產但シ合名會社及合資會社ニ在リテハ各社員ノ出資額及財產、株式會社ニ在リテハ株式ノ總數及一株ノ金額、株式合資會社ニ在リテハ無限責任社員ノ出資額、株式總數及一株ノ金額

移民取扱人ノ相續人ニシテ其ノ營業ヲ繼續セムトスル者又ハ移民取扱人ノ營業ヲ讓受ケムトスル者ニ關シテハ前項ノ規定ヲ準用ス

第六條　移民取扱人前條ニ依リ許可ヲ受ケタル後左ノ場合ニ於テハ外務大臣ノ許可ヲ受クヘシ

一　前條第一項第二號乃至第六號ニ掲ケタル事項ヲ變更セムトスルトキ

二　合名會社及合資會社ニ在リテ社員及其ノ出資額ヲ變更セムトスルトキ又ハ新ニ社員ヲ加入セシメムトスルトキ但シ新ニ社員ト爲リタル者ニ關シテハ其ノ履歷書及財產調書、出資額ヲ變更セムトスル者ニ關シテハ其ノ財產調書ヲ添附スルヲ要ス

三　株式會社ニ在リテ資本金、株式ノ總數及一株ノ金額ヲ變更セムトスルトキ

四　株式合資會社ニ在リテ無限責任社員及其ノ出資額又ハ株式引受額ヲ變更セムトスルトキ又ハ株式ノ總數及一株ノ金額ヲ變更セムトスルトキ

第七條　左ノ事項ハ移民取扱人ニ於テ一週間以內ニ外務大臣ニ屆出ツヘシ

一　商號ノ新設、取得、變更又ハ廢止

二　開業ノ年月日

三　業務執行社員又ハ取締役ノ選任、解任又ハ死亡ノ場合ニ於テハ其ノ氏名住所

四　同一廳府縣內ニ於ケル主タル營業所ノ移轉

五　支店又ハ出張所ノ設置移轉

六　前數號ニ掲ケタルモノノ外法令ノ規定ニ依リ登記シタル事項

七　商事會社ニ在リテハ前條第二號乃至第四號ニ掲ケタルモノノ外定款ヲ變更シタルトキ

移民取扱人死亡シタルトキハ其ノ相續人ヨリ屆出ツヘシ

主タル營業所ヲ置ク廳府縣以外ノ地ニ於ケル支店又ハ出張所ノ設置移轉ハ一週間以內ニ其ノ地ノ地方長官ニモ屆出ツヘシ

第八條　左ノ各號ノ一ニ該當スル者及外務大臣ニ於テ不適當ト認ムル者ハ移民取扱人又ハ代理人タルコトヲ得ス

一　禁治產者及準禁治產者

二　剝奪公權者及停止公權者

三　家資分散又ハ破產ノ宣告ヲ受ケ其ノ確定シタル時ヨリ復權ノ決定確定スルニ至ル迄ノ者

四　禁錮以上ノ刑ノ宣告ヲ受ケタル時ヨリ其ノ裁判確定スルニ至ル迄ノ者

第九條　移民取扱人移民保護法第五條第二項ノ業務ヲ兼營セムトスルトキハ左ノ事項ヲ詳記シ外務大臣ニ出願シテ許可ヲ受クヘシ

一　兼營スヘキ業務ノ種類及其ノ業務ヲ經營セムトスル地方

二　兼營スヘキ業務ト移民トノ關係

三　兼營スヘキ業務ニ充當スヘキ資本金額

四　兼營スヘキ業務經營ノ方法

移民取扱人移民渡航地ニ於テ業務ヲ兼營セムトスル場合ニ於テハ前項ノ出願書ニ該地方ノ狀況書ヲ添附スルヲ要ス

第十條　移民取扱人前條ニ依リ許可ヲ受ケタル後其ノ業務ノ兼營ヲ廢止セムトスルトキ又ハ前條第一項各號ニ掲ケタル事項ヲ變更セムトスルトキハ其ノ事情ヲ詳記シ外務大臣ニ出願シテ許可ヲ受クヘシ

第十一條　移民保護法第十條ニ依リ移民取扱人ニ於テ代理人ヲ定メムトスルトキハ左ノ事項ヲ詳記シタル書類ヲ添附シ外務大臣ニ出願シテ許可ヲ受クヘシ

一　代理人ノ族籍

二　代理人ノ履歷

三　代理人ノ財產

外務大臣前項ノ許可ヲ與ヘタルトキハ附屬第一號書式ノ許可證ヲ移民取扱人ニ下付ス但シ移民取扱人ハ該許可證ヲ代理人ニ交付スヘシ

代理人ノ解任又ハ死亡ハ移民取扱人ニ於テ解任ノ日又ハ死亡ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ一週間以內ニ外務大臣ニ屆出ツヘシ

第十二條　外務大臣ハ代理人ノ行爲法令ニ違反シタルトキ又ハ公益ヲ害スルモノト認メタルトキハ其ノ許可ヲ取消スコトアルヘシ

第十三條　移民取扱人又ハ代理人カ本店、支店又ハ出張所ニ於テ使用スル事務員ノ選任ハ所在地地方長官ノ定ムル所ニ依リ同長官ニ出願シテ認可ヲ受クヘシ

地方長官ハ前項事務員ノ行爲法令ニ違反シタルトキ又ハ公益ヲ害スルモノト認メタルトキハ之カ解任ヲ移民取扱人又ハ代理人ニ命スルコトアルヘシ

第十四條　代理人其ノ業務ヲ行フトキハ許可證ヲ、移民取扱人又ハ代理人ノ使用スル事務員其ノ事務ヲ行フトキハ認可證ヲ携帶スヘシ

代理人死亡シタルトキ、解任セラレタルトキ又ハ其ノ許可ヲ取消サレタルトキハ移民取扱人ハ遲滯ナク許可證ヲ外務大臣ニ返納スヘシ

移民取扱人又ハ代理人ノ使用スル事務員死亡シタルトキ又ハ解任セラレタルトキハ移民取扱人又ハ代理人ハ遲滯ナク其認可證ヲ該地方長官ニ返納スヘシ

第十五條　業務執行社員、取締役又ハ代理人ニシテ移民渡航地ニ渡航スルトキ又ハ渡航地ヨリ歸國シタルトキハ移民取扱人ハ遲滯ナク其ノ旨ヲ外務大臣ニ屆出ツヘシ

業務執行社員、取締役又ハ代理人ニシテ移民渡航地ニ到着シタルトキハ遲滯ナク其ノ旨ヲ所轄在外帝國官廳ニ屆出ツヘシ

第十六條　移民渡航地ニ在留スル業務執行社員、取締役又ハ代理人ニシテ歸國ノ爲出發セムトスルトキ又ハ一時其ノ地ヲ立去ラムトスルトキハ所轄在外帝國官廳ニ出願シテ許可ヲ受クヘシ

在外帝國官廳カ前項歸國ノ許可ヲ與フル場合ハ他ノ業務執行社員、取締役又ハ代理人カ其ノ地ニ在留スルトキニ限ル

第十七條　外務大臣必要ト認ムルトキハ移民取扱人カ移民渡航地內ニ於テ業務執行社員、取締役又ハ代理人ヲ在留セシムヘキ場所ヲ指定スルコトアルヘシ

第十八條　移民渡航地ニ在留スル業務執行社員、取締役又ハ代理人ハ移民名簿ヲ備ヘ移民ノ就業地、職業及雇主ノ氏名ヲ明記シ且契約移民ニ付テハ賃金支拂簿ヲ備ヘ官廳ノ命アル時ハ何時ニテモ之ヲ示スヘシ

第十九條　移民ニシテ渡航地外ニ轉住シタルトキハ其ノ渡航地ニ在留スル業務執行社員、取締役又ハ代理人ハ遲滯ナク其ノ氏名及轉住地ヲ在留地及轉住地ノ在外帝國官廳ニ屆出ツヘシ

前項ノ場合ニ於テ移民取扱人ハ遲滯ナク其ノ旨ヲ外務大臣ニ屆出ツヘシ

第二十條　移民取扱人移民ヲ募集セムトスルトキハ移民募集地方別豫定表ヲ添附シ豫メ之ヲ主タル營業所ヲ置ク地ノ地方長官ニ屆出ツヘシ

第二十一條　移民取扱人又ハ代理人移民募集ノ目的ヲ以テ新聞紙ニ廣告文ヲ掲載シ又ハ印刷物ヲ配付セムトスルトキハ豫メ其ノ募集地ノ地方長官ニ出願シテ認可ヲ受クヘシ

第二十二條　移民取扱人移民ノ募集ヲ爲スニ當テハ自己所在ノ地又ハ業務執行社員若ハ取締役ノ在留スル地方ヲ除クノ外代理人ヲシテ募集ノ期間其ノ募集ノ地ニ在留セシムルコトヲ要ス

第二十三條　移民保護法第十三條ノ契約書ニハ左ノ事項ヲ記載スルコトヲ要ス

一　契約期限

二　手數料

三　渡航及歸航費用ノ支辨方法

四　賃金及貸金ノ支拂方法

五　渡航地ニ於ケル周旋方法

六　移民ノ疾病其ノ他困難ノ場合ニ於ケル救助又ハ歸國ノ方法

移民取扱人ハ前項契約書ノ全文ニ移民渡航地ノ狀況書ヲ添附シ移民本籍地又ハ寄留地ノ地方長官ニ出願シテ認可ヲ受クヘシ

第二十四條　移民取扱人移民ニ關シテ別ニ他人ト契約ヲ爲シタルトキハ該契約書寫ヲ添附シ其ノ旨ヲ主タル營業所ヲ置ク地ノ地方長官ニ屆出テ且其ノ移民ノ渡航地ヲ管轄スル在外帝國官廳ニモ屆出ツヘシ

移民取扱人前項ノ契約ニ基キ移民ヲ募集セムトスルトキハ前條ノ手續ヲ爲スニ當リ該契約書寫ヲ添附スヘシ

主タル營業所ヲ置ク地ノ地方長官必要ト認ムルトキハ第一項契約書ノ原本ノ提示ヲ命スルコトアルヘシ

第二十五條　當該官廳ニ於テ移民保護法第十三條ニ掲ケタル契約書ヲ示スヘキコトヲ命シタルトキハ移民取扱人及移民ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第二十六條　移民保護法第十四條ニ依リ手數料ノ認可ヲ受ケムトスルトキハ移民取扱人ハ移民ノ渡航地及手數料ノ額ヲ記載シ移民本籍地又ハ寄留地ノ地方長官ニ出願スヘシ

第二十七條　移民取扱人移民保護法第十五條ノ一ニ依リ限定シタル移民ノ出發期日ヲ移民ニ通知スルニハ書面ヲ以テスルコトヲ要ス

移民取扱人前項ノ通知ヲ爲シタルトキハ其ノ旨ヲ主タル營業所ヲ置ク地及移民出發港所在地ノ地方長官ニ屆出ツヘシ

第二十八條　移民出發港所在地ノ地方長官必要ト認ムルトキハ其ノ地ニ代理人ヲ在留セシムヘキ旨ヲ移民取扱人ニ命スルコトアルヘシ

第二十九條　移民取扱人移民ヲ渡航セシムルトキハ移民ノ出發ト同時ニ移民ノ氏名ヲ其ノ渡航地ヲ管轄スル在外帝國官廳ニ屆出ツヘシ但シ契約移民ニ係ルトキハ移民保護法第十三條第一項ノ契約書寫ヲ添附スヘシ

第三十條　移民ノ身上ニ關スル異變其ノ他移民ニ關スル重要ナル事件ハ移民取扱人直ニ之ヲ外務大臣ニ屆出ツヘシ

前項ノ場合ニ於テ移民渡航地ニ在留スル業務執行社員、取締役又ハ代理人ハ遲滯ナク其ノ旨ヲ所轄在外帝國官廳ニ屆出ツヘシ

第三十一條　移民取扱人ハ附屬第二號書式ニ依リ毎月末日渡航者名簿ヲ調製シ翌月五日迄ニ又附屬第三號及第四號書式ニ依リ毎年末日歸國者名簿及死亡者名簿ヲ調製シ翌年三月三十一日迄ニ外務大臣ニ提出スヘシ

第三十二條　外務大臣必要ト認ムルトキハ附則ニ定ムル移民取扱人同業組合規程ニ準據シ該組合ヲ設立スヘキコトヲ移民取扱人ニ命令ス

第三十三條　本章中移民取扱人ヨリ外務大臣ニ出

願又ハ屆出ヲ爲スヘキ場合及第三十一條ニ依リ名簿ヲ提出スヘキ場合ニ於テハ其ノ主タル營業所ヲ置ク地ノ地方長官ヲ經由スヘシ

前項ノ場合ニ於テハ提出書類ノ謄本一通ヲ添ヘ原本ト共ニ之ヲ地方長官ニ差出スヘシ

第三章　保證金

第三十四條　移民保護法第十六條ニ掲ケタル保證金ハ之ヲ主タル營業所ヲ置ク地ノ地方長官ニ納付スヘシ

第三十五條　移民取扱人ノ納付スヘキ保證金ノ額及其ノ增減ハ外務大臣之ヲ定ム

第三十六條　移民取扱人ノ納付スヘキ保證金ハ國債證券又ハ地方債證券ヲ以テ之ニ代用スルコトヲ得

前項國債證券及地方債證券ノ價格ハ其ノ納付ヲ受クヘキ地方長官ノ定ムル所ニ依ル

本條證券ノ價格ニ異動アリタルトキハ地方長官ハ移民取扱人ヲシテ之ニ依リ生シタル不足額ヲ追納セシムヘシ

第三十七條　主タル營業所ヲ置ク地ノ地方長官ハ移民取扱人ノ保證金ノ增額ヲ追納セシメ又ハ其ノ缺損ヲ塡補セシムル場合ニ於テ一箇月以內ノ猶豫ヲ與フルコトヲ得

第四章　移民運送船

第三十八條　移民保護法第二十條ノ二ニ依リ命令ヲ以テ定ムル地方ハ外務大臣之ヲ告示ス

第三十九條　移民保護法第二十條ノ二ニ依リ移民ノ員數ヲ算定スル場合ニ於テ五年以上十二年未滿ノ者ハ二人ヲ以テ、二年以上五年未滿ノ者ハ四人ヲ以テ一人ニ積算シ二年未滿ノ者ハ之ヲ算入セス

第四十條　移民運送船ニ依リ移民ノ運送ヲ爲サムトスルトキハ左ノ事項ヲ記載シ帝國運送業者ニ在リテハ其ノ本店所在地ノ地方長官ヲ經由シ外國運送業者ニ在リテハ帝國內ニ在ル其ノ代表者所在地ノ地方長官ヲ經由シ外務大臣ニ出願シテ許可ヲ受クヘシ但シ船籍證書寫竝移民運送船傭船ナルトキハ傭船契約書寫ヲ添附スルコトヲ要ス

一　商號アルモノハ其ノ商號

二　本店所在地

三　移民運送船

四　船長ノ國籍、住所、氏名

五　移民乘船港、到着港竝寄航港

六　移民乘船港ヨリ到着港ニ至ル迄ノ航海豫定日數

七　營業資本金額

八　運送スヘキ移民ノ限定人員

同一運送業者カ同一航路ニ使用スル移民運送船ハ二隻以上ヲ同一ノ願書ニ併記スルコトヲ得

外務大臣必要ト認ムルトキハ出願者ノ履歷書、商事會社ニ在リテハ其ノ定款ヲ提出セシムルコトアルヘシ

第四十一條　第三十八條ニ依リ外務大臣ノ告示シタル地方ニ於ケル一定ノ港ヘ一箇年二回以上航海ヲ爲ス移民運送船ニ關シテハ二回以上ノ運送ニ付同時ニ前條ノ出願ヲ爲スコトヲ得但シ一箇年ヲ超ユル期間ニ亙ルコトヲ得ス

第四十二條　外務大臣移民運送船ニ依ル移民ノ運送ヲ許可シタルトキハ附錄第五號書式ニ依リ移民運送許可證ヲ下付ス

第四十三條　第四十條ノ許可ヲ受ケタル運送業者ニシテ同條第一項第三號及第五號ニ掲ケタル事項ヲ變更セムトスルトキハ同條ノ手續ニ準シ外務大臣ニ出願シテ許可ヲ受クヘシ

前項ノ運送業者第四十條第一項第一號、第二號、第四號、第七號及第八號ニ掲ケタル事項ヲ變更シタルトキハ遲滯ナク同條ノ手續ニ準シ之ヲ外務大臣ニ屆出ツヘシ

第四十四條　移民運送船ニ依リ移民ノ運送ヲ爲サムトスル者第四十二條ノ許可證ヲ下付セラレタルトキハ該許可證ヲ移民運送船船長ニ交付スヘシ

移民運送船船長ハ官廳ノ命アルトキハ何時ニテモ前項ノ許可證ヲ提示スヘシ

第四十五條　移民運送業者移民到着港ニ移民ノ運送ヲ了シタルトキハ遲滯ナク第四十條ノ手續ニ依リ運送許可證ヲ外務大臣ニ返納スヘシ第四十一條ノ出願ニ基キ下付セラレタル許可證ノ期間滿了シタルトキ亦同シ

第四十六條　移民保護法第二十條ノ三第二項ニ依リ納付スヘキ保證金ノ額ハ外務大臣臨時之ヲ定ム

前項ノ保證金ハ第四十二條ノ許可證ヲ下付セラレタルトキ出願者ヨリ即時ニ之ヲ當該地方長官ニ納付スヘシ

本條ノ保證金ニ關シテハ第三十六條及第三十七條ノ規定ヲ準用ス

第四十七條　移民運送船ニ依ル移民ノ運送賃ニ關シテハ移民運送業者ハ第四十條ノ出願ト同時ニ同條ノ手續ニ準シ外務大臣ニ出願シテ認可ヲ受クヘシ

第四十八條　運送業者第四十一條ノ出願ヲ爲ス場合ニ於テハ一定ノ期間ニ對スル運送賃ノ最高額ヲ定メ其ノ認可ヲ出願スルコトヲ得

運送業者前項ノ認可ヲ受ケタル後所定ノ期間內ニ運送賃最高額ノ增額ヲ爲サムトスルトキハ外務大臣ニ出願シテ增額ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス

第四十九條　前條ニ依リ運送賃最高額ノ認可ヲ受ケタル運送業者ハ運送賃ノ額ヲ定メ發航前五日迄ニ之ヲ移民乘船港所在地ノ地方長官ニ屆出ツヘシ但シ運送賃ニ變更ナキ時ハ本條ノ屆出ヲ要セス

第五十條　移民運送業者ハ移民運送船發航ノ日時ヲ豫メ移民乘船港所在地ノ地方長官ニ屆出ツヘシ

第五章　雜則

第五十一條　金錢貸付ヲ業トスル者ニシテ移民ニ對シ渡航費其ノ他渡航ノ準備ニ必要ナル金錢ヲ貸與セムトスルトキハ利率償還ノ方法其ノ他契約條件ノ要領ヲ記載シ其ノ所轄地方長官ニ出願シテ認可ヲ受クヘシ

第五十二條　前條ノ認可ヲ受ケタル金錢貸付業者ハ移民貸付金ニ付別ニ帳簿ヲ備ヘ置クコトヲ要ス

當該官吏ハ前項帳簿ノ檢査ヲ行フコトアルヘシ此場合ニ於テ金錢貸付業者ハ其ノ檢査ヲ拒ムコトヲ得ス

第五十三條　移民出發港ニ於テ移民宿泊業ヲ營マムトスル者ハ其ノ地ノ地方長官ニ出願シテ許可ヲ受クヘシ

第五十四條　移民取扱人ニ非スシテ移民乘船ニ關スル周旋ヲ爲サムトスル者ハ移民乘船地ノ地方長官ニ出願シテ許可ヲ受クヘシ

第五十五條　前二條ノ許可及第五十一條ノ認可ノ出願手續ニ關スル規程竝前二條ノ許可ヲ受ケタル者及第五十一條金錢貸付業者ノ取締ニ關スル規程ハ地方長官之ヲ定ム

第六章　罰則

第五十六條　第六條、第十條、第十三條第一項、第十四條、第十六條第一項、第十八條、第二十一條、第二十二條、第二十四條第一項第二項、第二十五條、第二十七條、第三十條、第三十一條、第四十三條、第四十四條又ハ第五十二條ニ違反シタル者ハ五圓以上二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十七條　第七條、第十一條第三項、第十五條、第十九條、第二十條、第二十九條、第四十五條、第四十九條又ハ第五十條ニ違反シタル者ハ二圓以上十圓以下ノ罰金ニ處ス

附　則

第五十八條　本令中地方長官トアルハ東京府ニ在リテハ警視總監トス

第五十九條　本令ニ於テ在外帝國官廳ト稱スルハ帝國總領事館、領事館又ハ貿易事務館ヲ謂ヒ總領事館、領事館、貿易事務館ナキ地ニ於テハ帝國大使館及公使館ヲ謂フ

第六十條　本令ハ明治四十年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治二十九年外務省令第三號ハ本令施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

第一號書式

移民取扱人業務代理人許可證

移民取扱人　氏　名

移民保護法第十條ニ依リ（府縣）（郡市）（區町村）番地何某ヲシテ（內地海外某地）ニ於テ業務代理ヲ爲サシムルノ件許可ス

明治　年　月　日

外務大臣　氏　名　印

第二號書式

渡航者名簿

旅券番號	[illegible]	氏名	[illegible]	年齡	[illegible]	渡航地	[illegible]	契約期限

渡航者總數

第三號書式

歸國者名簿

旅券番號	[illegible]	氏名	族籍	在留地	本邦出發ノ年月日	歸着ノ年月日

歸國者總數

第四號書式

死亡者名簿

旅券番號	[illegible]	氏名	族籍	在留地	本邦出發ノ年月日	[illegible]

死亡者總數

第五號書式

移民運送許可證

移民運送業者住所　氏　名

船名	
船舶所有者住所氏名	
船長氏名	

移民乘船港	移民乘船港到着港間ノ寄航港	移民到着港	移民乘船港ヨリ到着港ニ至ル航海豫定日數	逓送スヘキ移民隊定人員	許可期間

右移民保護法第二十條ノ三ニ依リ許可ス

明治　年　月　日

外務大臣　氏　名㊞

●移民保護法第三條ニ依リ移民ヲシテ保證人ヲ定メシムヘキ地

明治四十年六月十一日
外務省告示第十四號

移民保護法第三條ニ依リ移民ヲシテ保證人ヲ定メシムヘキ地ヲ左ノ通相定メ本年七月一日ヨリ施行ス

一比律賓群島　一濠洲及太平洋諸島
一暹羅國　一墨西哥國
一伯剌西爾國　一智利國
一秘露國　一亞爾然丁國
一亞弗利加洲

明治三十六年外務省告示第六號ハ之ヲ廢止ス

●移民保護法第二十條ノ二ニ依リ命令ヲ以テ定メシムヘキ地

明治四十年六月十一日
外務省告示第十五號（改正　四〇年第一九號）

移民保護法第二十條ノ二ニ依リ命令ヲ以テ定メシムヘキ地ヲ左ノ通相定メ本年七月一日ヨリ施行ス

一米領布哇　一墨西哥國　一伯剌西爾國
一智利國　一秘露國　一亞爾然丁國
一英領加奈陀

●居留民團法施行規則

明治四十年四月二十三日
外務省令第二號

居留民團法施行規則左ノ通相定ム

居留民團法施行規則

第一章　總則

第一條　居留民團ノ設立、廢止、分合又ハ其ノ地區ノ變更ヲ要スルトキハ外務大臣之ヲ定ム

前項ノ處分ニ付財産處分ヲ要スルトキハ設立ノ場合ヲ除クノ外關係アル居留民會ノ意見ヲ徴シ直接上級監督官廳ノ認可ヲ得テ領事之ヲ定ム

第二條　居留民團ノ地區内ニ住居スル帝國臣民又ハ該地區内ニ事務所ヲ有スル帝國法人ハ居留民團ノ財産及營造物ヲ共用スル權利ヲ有シ負擔ヲ分任スル義務ヲ負フ

第三條　居留民團ハ其ノ地區内ニ住居スル帝國臣民又ハ該地區内ニ事務所ヲ有スル帝國法人ノ居留民團ニ對スル權利義務、居留民團ノ事務、居留民團ノ財産及營造物ニ關スル事項ニ付條例ヲ設クルコトヲ得

條例ハ一定ノ公告式ニ依リ之ヲ告示スヘシ

第四條　本規則ニ基キ發スル領事館令ハ公使ヲ經テ外務大臣ノ認可ヲ受クヘシ但シ居留民團法第五條第一項但書ノ場合ニ於テハ公使ヲ經ルコトヲ要セス

第五條　本規則ニ於テ領事ト稱スルハ居留民團ノ地區ヲ管轄スル總領事、領事、副領事及其ノ代理者ヲ謂フ

第六條　居留民團ノ地區内ニ住居セス又ハ事務所ヲ有セスト雖モ六箇月以來第八條ニ規定シタルト同様ノ居留民團課金ヲ負擔スル帝國臣民又ハ帝國法人ニ付テハ本規則中居留民團ノ地區内ニ住居スル帝國臣民又ハ該地區内ニ事務所ヲ有スル帝國法人ニ關スル規定ヲ準用ス

第七條　帝國專管居留地内ニ於テ土地又ハ家屋ヲ所有シ若ハ占有シ、物件ヲ所有シ使用シ若ハ占有シ又ハ特定ノ行爲ヲ爲ス外國人又ハ外國法人ニシテ自國領事ノ公ノ認許ヲ得テ居留民團ニ關スル帝國ノ法令及條例ニ從フモノハ本規則中帝國臣民又ハ帝國法人ニ關スル規定ヲ準用ス

帝國專管居留地所在地方ノ當該國住民若ハ法人又ハ該地方ニ領事官ヲ有セサル國ノ臣民、人民若ハ法人ニシテ帝國專管居留地内ニ於テ土地又ハ家屋ヲ所有シ若ハ占有シ、物件ヲ所有シ使用シ若ハ占有シ又ハ特定ノ行爲ヲ爲ス者ニ對シテハ居留民團ニ關スル帝國ノ法令及條例ヲ準用ス

第二章　居留民會

第八條　左ニ掲ケタル者ハ居留民會議員トス

一　居留民團ノ地區内ニ住居スル帝國臣民ニシテ六箇月以來居留民團課金ヲ負擔スル者

二　居留民團ノ地區内ニ事務所ヲ有スル帝國法人ニシテ六箇月以來居留民團課金ヲ負擔スル者

前項課金ノ種類及金額ハ領事館令ヲ以テ之ヲ定ム

第九條　左ニ掲ケタル者ハ居留民會議員タルコトヲ得ス

一　剝奪公權者又ハ停止公權者

二　家資分散又ハ破産ノ宣告ヲ受ケ其ノ確定シタルトキヨリ復權ノ決定確定スルニ至ル迄ノ者

三　禁錮以上ノ刑ノ宣告ヲ受ケタルトキヨリ其ノ裁判確定スルニ至ル迄ノ者

四　租税又ハ公課ノ滯納處分中ノ者

五　在留禁止ヲ命セラレ滿期渡航後二箇年ヲ經サル者

第十條　第八條第一號ニ掲ケタル者不在又ハ疾病ノ爲居留民會ニ出席スルコト能ハサルトキハ代人ニ依リ議決ニ加ハルコトヲ得

前項ノ代人ハ書面ニ依リ委任ヲ證スルコトヲ要ス

第十一條　法人、未成年者、女子、禁治産者及準禁治産者ハ代人ニ依ルノ外議決ニ加ハルコトヲ得ス但シ左ノ規定ニ從フヘシ

一　法人ハ其ノ法定代理人又ハ其ノ委任ヲ受ケタル者ヲ代人ト爲スコトヲ要ス

二　未成年者又ハ禁治産者ハ其ノ法定代理人ヲ代人ト爲スコトヲ要ス

三　妻ハ其ノ夫ヲ代人ト爲スコトヲ要ス

四　未婚ノ女子又ハ寡婦ハ其ノ委任ヲ受ケタル者ヲ代人ト爲スコトヲ要ス

五　準禁治産者ハ其ノ保佐人ヲ代人ト爲スコトヲ要ス

前項ノ代人ハ書面ニ依リ其ノ代人タル資格ヲ證スルコトヲ要ス

第十二條　未成年者、女子、禁治産者、準禁治産者及第九條ニ掲ケタル者ハ代人ト爲ルコトヲ得ス

第十三條　居留民會議員ハ名譽職トス

第十四條　行政委員會ハ第八條ノ規定ニ依リ居留民會議員タルヘキ者ヲ調査シ毎年一回議員名簿ヲ調製シタル上之ヲ各議員ニ通知シ且之ヲ公告スヘシ

議員名簿ニ登錄セラレタル者ニ非サレハ議員タルコトヲ得ス

議員名簿調製ノ時期ハ領事館令ヲ以テ之ヲ定ム

第十五條　居留民會議員名簿ハ之ヲ居留民團事務所ニ備付五日ヲ下ラサル期間關係者ノ縱覽ニ供スヘシ關係者異議アルトキハ縱覽期間内ニ之ヲ領事ニ申立テ決定ヲ求ムルコトヲ得其ノ決定ニ不服アル者ハ直接上級監督官廳ノ決定ヲ求ムルコトヲ得

議員名簿ハ居留民會通常會開會前十日ヲ以テ確定シ確定ノ時ヨリ一箇年間之ヲ据置クヘシ但シ前項ノ決定確定シタル場合ニ於テ其ノ決定カ名簿ト一致セサルトキハ名簿ヲ修正スヘシ

第十六條　居留民會議員名簿ニ登錄セラレタル者ニシテ議員タル資格ヲ有セス又ハ之ヲ有セサルニ至リタルトキハ行政委員會ハ之ヲ其ノ本人ニ通知スヘシ

前項ノ通知ヲ受ケタル者行政委員會ノ處分ニ不服アルトキハ領事ニ申立テ決定ヲ求ムルコトヲ得其ノ決定ニ不服アル者ハ直接上級監督官廳ノ決定ヲ求ムルコトヲ得

前項ノ決定ニ依リ議員タル資格ヲ有セサルコト確定シタルトキハ行政委員會ニ於テ名簿ヲ修正スヘシ

第十七條　居留民會ノ議決ヲ經ヘキ事項ノ概目左ノ如シ

一　居留民團條例ヲ定ムルコト

二　歲入出豫算ヲ定ムルコト及決算報告ヲ認定スルコト

三　居留民團ノ課金、使用料、手數料及加入金ノ賦課徴收ニ關スルコト

四　不動産ニ關シ權利ノ得喪ヲ目的トスル行爲ヲ爲スコト

五　基本財産ノ設置、管理及處分ニ關スルコト

六　歲入出豫算ヲ以テ定ムルモノヲ除クノ外新ニ義務ノ負擔ヲ爲シ又ハ權利ノ拋棄ヲ爲スコト

七　財産及營造物ノ管理及處分ノ方法ヲ定ムルコト

八　居留民團ニ係ル訴訟又ハ和解ニ關スルコト

九　教育ニ關スルコト殊ニ幼稚園、學校及圖書館ノ設立維持ニ關スルコト

十　消防及義勇隊ニ關スルコト

十一　貧民救助ニ關スルコト

十二　衞生ニ關スルコト殊ニ傳染病豫防及眞水ノ供給、下水ノ排泄並市場、病院、墓地及火葬場等ニ關スルコト

十三　交通ニ關スルコト殊ニ道路、港岸等ノ維持、改修、街燈ノ設備並交通機關ニ關スルコト

十四　公園又ハ公衆ノ娛樂ニ供スヘキ設備ニ關スルコト

十五　其ノ他法令及條約ニ依リ居留民會ノ權限ニ屬スル事項

第十八條　居留民會ハ其ノ權限ニ屬スル事項ヲ行政委員會ニ委任スルコトヲ得

第十九條　居留民會ニ於テハ日本語ヲ用ウ

居留民會ノ議事ハ之ヲ議事錄ニ存スヘシ

第二十條　居留民會ハ居留民團ノ公益ニ關スル事件ニ付意見書ヲ監督官廳ニ呈出スルコトヲ得

第二十一條　居留民會ハ監督官廳ノ諮問アルトキ

ハ意見ヲ具申スヘシ

第二十二條　居留民會ノ意見ヲ徵シテ處分ヲ爲スヘキ場合ニ於テ居留民會其ノ意見ヲ呈出セサルトキハ當該官廳ハ其ノ意見ヲ俟タスシテ直ニ處分ヲ爲スコトヲ得

第二十三條　居留民會ハ帝國臣民タル議員中ヨリ議長ヲ選擧スヘシ議長ノ任期ハ翌年ノ居留民會通常會ニ於テ議長ノ選擧アル迄トス

議長故障アルトキハ帝國臣民タル議員中ヨリ假議長ヲ選擧シ議長ノ職ヲ行ハシムヘシ

議長ハ會議ノ事ヲ總理シ會議ヲ開閉シ議場ノ秩序ヲ維持ス

本規則ニ從ヒ始メテ居留民會組織セラレ議長ノ選擧アル迄ノ間又ハ本條第二項假議長ノ選擧ニ當リテハ議長ノ職ハ假ニ出席議員中ノ年長者之ヲ行フ

第二十四條　居留民會ハ通常會及臨時會トシ領事之ヲ招集ス

通常會ハ毎年一回之ヲ開キ其ノ會期ハ七日以内トス

臨時會ハ領事必要ト認メタルトキ又ハ行政委員會若ハ居留民會議員五分ノ一以上ノ請求アリタルトキ之ヲ開キ其ノ會期ハ三日以内トス

居留民會ノ議事ニ付スヘキ事件ハ少クトモ開會ノ一週間前ニ之ヲ告知スヘシ但シ急速ヲ要スル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第二十五條　居留民會ハ議員定數ノ三分ノ一以上出席シ又ハ代表セラルルニ非サレハ會議ヲ開クコトヲ得ス但シ通常會ニシテ同一ノ事件ニ付集會再同ニ至ルモ仍三分ノ一ニ滿タサルトキハ此ノ限ニ在ラス

第二十六條　居留民會ノ議事ハ出席者ノ過半數ニ依リ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第二十七條　居留民會ハ會議規則及傍聽人取締規則ヲ設ケ領事ノ認可ヲ受クヘシ

第二十八條　居留民會ニ書記ヲ置キ議長ニ隷屬シ庶務ヲ處理セシム

第二十九條　本章ニ規定スルモノノ外居留民會ニ關シ必要ナル規定ハ領事館令ヲ以テ之ヲ定ム

第三章　行政委員會及吏員

第三十條　居留民團ニ行政委員及豫備行政委員ヲ置ク

居留民會ハ毎年其ノ通常會ニ於テ議員中ヨリ行政委員及豫備行政委員ヲ選擧シ領事ノ認可ヲ受クヘシ

行政委員ハ過半數帝國臣民タルコトヲ要ス

行政委員ノ員數、選擧及認可ニ關スル規定ハ領事館令ヲ以テ之ヲ定ム

第三十一條　行政委員ハ代人ヲ許サス但シ法人ハ其ノ代人ヲ指定シテ行政委員ニ選擧セラルルコトヲ得

第十二條ニ列擧シタル者ハ前項ノ代人タルコトヲ得ス

第三十二條　左ニ掲ケタル者ハ行政委員タルコトヲ得ス

一　在職官吏

二　居留民團ノ有給吏員

三　神官、神職、僧侶其ノ他諸宗ノ教師

四　學校教員

五　第十二條ニ列擧シタル者

第三十三條　行政委員確定シタルトキハ領事ハ直ニ之ヲ各行政委員ニ通知シ且之ヲ公告スヘシ

行政委員已ムヲ得サル事故アルトキハ領事ノ許可ヲ得テ辭任スルコトヲ得

第三十四條　行政委員ハ行政委員會ヲ組織シ帝國臣民タル行政委員中ヨリ議長及議長代理者ヲ選擧スヘシ

議長及議長代理者共ニ故障アルトキハ帝國臣民タル行政委員中ヨリ假議長ヲ選擧シ議長ノ職ヲ行ハシムヘシ

議長ハ會議ノ事ヲ總理シ會議ヲ開閉シ議場ノ秩序ヲ維持ス

議長ハ行政委員會ノ名ヲ以テ文書ノ往復ヲ爲シ及之ニ署名ス

本規則ニ從ヒ始メテ行政委員會組織セラレ議長及議長代理者ノ選擧アル迄ノ間又ハ本條第二項假議長ノ選擧ニ當リテハ議長ノ職ハ假ニ出席委員中ノ年長者之ヲ行フ

第三十五條　行政委員會ノ議事ハ出席委員ノ過半數ニ依リ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第三十六條　第十九條ノ規定ハ行政委員會ニ之ヲ準用ス

行政委員ノ定足數ハ領事館令ヲ以テ之ヲ定ム

行政委員ニシテ日本語ヲ解セサル者アルトキハ領事ノ許可ヲ得テ通譯者ヲ用ヰルコトヲ得

第三十七條　行政委員會ハ其ノ執務章程ヲ定メ領事ノ認可ヲ受クヘシ

第三十八條　行政委員會ハ必要ニ應シ特別委員會ヲ設クルコトヲ得

特別委員會ノ組織、權限其ノ他必要ナル事項ハ行政委員會ニ於テ之ヲ定メ領事ノ認可ヲ受クヘシ

第三十九條　行政委員中資格ノ喪失其ノ他ノ事由ニ依リ闕員ヲ生シ領事之カ補闕ヲ必要ト認ムルトキハ豫備行政委員中ヨリ之ヲ補フヘシ但シ補闕ノ順序ハ領事館令ヲ以テ之ヲ定ム

前項ノ規定ハ行政委員ノ選擧アリタル後領事ノ認可ヲ得サル者アルカ爲定數ノ行政委員ヲ得ルコト能ハサル場合ニ之ヲ準用ス

豫備行政委員ヲ以テ行政委員ノ補闕ヲ爲スコト能ハサルニ至リタルトキハ居留民會臨時會ヲ開キ補闕選擧ヲ爲スヘシ

第四十條　行政委員ハ名譽職トス

第四十一條　行政委員會ハ居留民團ヲ代表シ且居留民團ノ事務ヲ處理ス

行政委員會ノ處理スル事務ノ概目左ノ如シ

一　居留民會ノ議決ヲ經ヘキ事件ニ付其ノ議案ヲ發シ及其ノ議決ヲ執行スルコト

二　財産及營造物ヲ管理スルコト

三　收入支出ヲ命令シ及會計ヲ監督スルコト

四　證書及公文書類ヲ保管スルコト

五　居留民團ノ課金、使用料、手數料及加入金等ヲ賦課徵收スルコト

六　其ノ他法令及條約ニ依リ行政委員會ノ權限ニ屬スル事項

第四十二條　行政委員中一名ヲ會計主任トシ帝國臣民タル行政委員中ヨリ行政委員會ニ於テ之ヲ選擧ス

會計主任ハ居留民團ノ出納其ノ他會計事務及第四十四條ニ關スル國ノ出納其ノ他會計事務ヲ掌ル

第四十三條　居留民團ニ必要ノ吏員ヲ置キ行政委員會ニ附屬セシム

前項吏員ノ定數、任免、職務、任期、給與及懲戒ニ關スル事項ハ行政委員會ニ於テ之ヲ定メ領事ノ認可ヲ受クヘシ

第四十四條　行政委員會ハ法令、條約又ハ領事ノ委任ニ依リ居留民團ノ地區内ニ於ケル國ノ行政事務ヲ掌ル

前項ノ事務ヲ執行スル爲必要ナル費用ハ特別ノ規定アル場合ヲ除クノ外居留民團ノ負擔トス

第四十五條　行政委員會ハ居留民會其ノ議決スヘキ事件ヲ議決セサルトキハ領事ノ指揮ヲ請ヒ其ノ議決ヲ經ヘキ事件ヲ專決處分スルコトヲ得

前項ノ處分ハ次期ノ居留民會ニ之ヲ報告スヘシ

第四十六條　第三十條第四項、第三十一條乃至第三十三條及第四十條ノ規定ハ豫備行政委員ニ之ヲ準用ス

第四十七條　行政委員會ニ於ケル議長及會計主任ノ選擧、行政委員及豫備行政委員ノ離任其ノ他行政委員及豫備行政委員ニ關シ必要ナル規定ハ領事館令ヲ以テ之ヲ定ム

第四章　居留民團ノ財務

第四十八條　居留民團ハ不動産又ハ積立金等ヲ以テ一般又ハ特別ノ基本財産ト爲シ之ヲ維持スヘシ

領事ハ必要ト認ムルトキハ額ヲ定メテ基本財産ノ蓄積ヲ命スルコトヲ得

第四十九條　居留民團ハ必要ナル費用並法令及條約ニ依ル費用ヲ負擔スヘシ

居留民團ハ其ノ公益上必要アル場合ニ於テハ寄附又ハ補助ヲ爲スコトヲ得

第五十條　居留民團ハ課金、使用料、手數料及加入金等ヲ賦課徵收スルコトヲ得

第五十一條　國ノ用ニ供スル土地、家屋又ハ物件ニ對シテハ居留民團ハ國ニ課金ヲ賦課スルコトヲ得ス

第五十二條　居留民ノ一部ヲ利スル營造物ノ設置、維持ノ費用ハ其ノ關係者ニ負擔セシメ居留民團ノ地區ノ一部ヲ利スル營造物ノ設置、維持ノ費用ハ其ノ部内ニ於テ課金ヲ納ムル義務アル者ニ負擔セシムルコトヲ得但シ營造物ノ收入アルトキハ先ツ其ノ費用ニ充ツヘシ

居留民ノ一部又ハ居留民團ノ地區ノ一部ニ對シ特ニ利益アル事項ニ關シテハ不均一ノ賦課ヲ爲スコトヲ得

第五十三條　居留民團ノ地區内ニシテ帝國專管居留地以外ノ地方ニ住居スル帝國臣民又ハ該地方ニ事務所ヲ有スル帝國法人ニシテ外國ノ政府又ハ公共團體若ハ之ニ準スヘキモノニ課金ヲ納付スル者ニ對シテハ其ノ同種ノ居留民團課金又ハ其ノ他ノ負擔ノ全部若ハ一部ヲ免除スルコトヲ得

第五十四條　居留民團課金ノ賦課ヲ受ケタル者其ノ賦課ニ付違法又ハ錯誤アリト認ムルトキハ納入ノ告知ヲ受ケタル日ヨリ一箇月以内ニ行政委員會ニ異議ヲ申立ツルコトヲ得使用料、手數料又ハ加入金等ノ徵收ニ關シ亦同シ

居留民團ノ財産又ハ營造物ヲ使用スル權利ニ關シ異議アル者ハ之ヲ行政委員會ニ申立ツルコトヲ得

本條ノ異議ハ行政委員會之ヲ決定ス其ノ決定ニ不服アル者ハ領事ノ決定ヲ求ムルコトヲ得

第五十五條　居留民團ノ課金、使用料、手數料及加入金等ヲ定期内ニ納メサル者アルトキハ行政委員會ハ國稅ノ徵收ニ關スル規定ニ準據シ之ヲ處分スヘシ但シ該規定ニ據リ難キトキハ領事館令ヲ以テ特別ノ規定ヲ設クルコトヲ得

居留民團課金ノ賦課ヲ受ケタル者ノ中無資力者

アルトキハ行政委員會ノ意見ヲ以テ會計年度內ニ限リ納入ノ延期ヲ許スコトヲ得其ノ年度ヲ超ユル場合ニ於テハ居留民會ノ議決ニ依ル

第五十六條　居留民團ハ其ノ負債ヲ償還スル爲、居留民團ノ永久ノ利益トナルヘキ事業ノ爲又ハ天災事變等已ムヲ得サル場合ニ限リ居留民會ノ議決ヲ經テ居留民團債ヲ起スコトヲ得

居留民團債ヲ起スニ付居留民會ノ議決ヲ經ルトキハ併セテ起債ノ方法、利息ノ定率及償還ノ方法ニ付議決ヲ經ヘシ其ノ變更ヲ要スルトキ亦同シ

居留民團ハ豫算內ノ支出ヲ爲スニ付必要アルトキハ居留民會ノ議決ヲ經テ一時ノ借入金ヲ爲スコトヲ得此ノ借入金ハ其ノ年度ノ收入ヲ以テ償還スヘシ

第五十七條　行政委員會ハ每會計年度歲入出豫算ヲ調製シ年度開始前ニ居留民會ノ議決ヲ經ヘシ

居留民團ノ會計年度ハ政府ノ會計年度ニ同シ

第五十八條　行政委員會ハ居留民會ノ議決ヲ經テ既定豫算ノ追加又ハ更正ヲ爲スコトヲ得

第五十九條　豫算外ノ支出又ハ豫算超過ノ支出ニ充ツル爲豫備費ヲ設クヘシ

豫備費ハ居留民會ノ否決シタル費途ニ充ツルコトヲ得ス

第六十條　居留民團費ヲ以テ支辨スル事件ニシテ數年ヲ期シテ施行スヘキモノ又ハ數年ヲ期シテ其ノ費用ヲ支出スヘキモノハ居留民會ノ議決ヲ經テ各年度ノ支出額ヲ定メ繼續費ト爲スコトヲ得

第六十一條　居留民團ハ條例ヲ以テ特別會計ヲ設クルコトヲ得

第六十二條　豫算ハ居留民會ノ議決ヲ經タル後直ニ領事ノ認可ヲ受クヘシ既定豫算ノ追加又ハ更正ニ付テモ亦同シ

前項ノ場合ニ於テ領事ハ理由ヲ示シ更正シテ認可スルコトヲ得但シ不服アル居留民團ハ直接上級監督官廳ノ決定ヲ求ムルコトヲ得

本條領事ノ認可確定シタルトキハ行政委員會ハ豫算又ハ其ノ追加若ハ更正ヲ公告スヘシ

第六十三條　會計主任ハ行政委員會ノ命令ニ依ルニ非サレハ支拂ヲ爲スコトヲ得ス

第六十四條　居留民團ノ出納檢査、出納閉鎖ノ期限、決算報告、豫算調製ノ式其ノ他財務ニ關シ必要ナル規定ハ領事館令ヲ以テ之ヲ定ム

第五章　居留民團ノ監督

第六十五條　監督官廳ハ居留民團ノ行政ヲ監督スル爲必要ナル命令ヲ發シ處分ヲ爲スコトヲ得

上級監督官廳ハ下級監督官廳カ居留民團ノ行政ニ關シ爲シタル命令又ハ處分ヲ停止シ又ハ取消スコトヲ得

第六十六條　居留民團債ヲ起シ並起債ノ方法、利息ノ定率及償還ノ方法ヲ定メ又ハ之ヲ變更スルトキハ領事、公使及外務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

但シ居留民團法第五條第一項但書ノ場合ニ於テハ公使ヲ經ルコトヲ要セス

第六十七條　左ニ揭ケタル事項ハ領事ノ認可ヲ受クヘシ

一　居留民團條例ヲ定ムルコト

二　居留民團ノ課金、使用料、手數料及加入金ヲ新設シ又ハ變更スルコト

三　第五十二條ニ依リ居留民ノ一部若ハ居留民團ノ地區ノ一部ニ費用ヲ負擔セシメ又ハ不均一ノ賦課ヲ爲スコト

四　第五十三條ニ依リ居留民團課金又ハ其ノ他ノ負擔ノ全部若ハ一部ヲ免除スルコト

五　一時ノ借入金ヲ爲スコト

六　不動產ニ關シ權利ノ得喪ヲ目的トスル行爲ヲ爲スコト

七　基本財產ノ處分ニ關スルコト

八　寄附又ハ補助ヲ爲スコト

九　豫備費ノ支出ヲ爲スコト

第六十八條　監督官廳ノ認可又ハ許可ヲ要スル事件ニ付テハ監督官廳ハ認可又ハ許可申請ノ趣旨ニ反セスト認ムル範圍內ニ於テ更正シテ認可又ハ許可ヲ與フルコトヲ得

第六十九條　本規則ニ依リ異議ヲ申立テ又ハ監督官廳ノ決定ヲ求ムルハ別ニ期間ヲ定メタルモノヲ除クノ外處分又ハ決定ヲ爲シタル日ヨリ十日以內ニ之ヲ爲スヘシ

附　則

第七十條　居留民團設立ノ際其ノ地區內ニ居留スル帝國臣民ノ共同財產ニシテ慣例ニ依リ公共ノ目的ノ爲存スルモノハ之ヲ居留民團ノ財產ニ編入スルコトヲ得

居留民團設立ノ際其ノ地區內ニ居留スル帝國臣民ノ公共ノ目的ノ爲存スル從來ノ負債ハ之ヲ居留民團ノ負債ニ編入スルコトヲ得

本條ノ處分ノ爲必要ナル事項ハ領事館令ヲ以テ之ヲ定ム

第七十一條　本規則ニ依リ始メテ居留民會成立シ及行政委員就任スルニ至ル迄ノ間其ノ職務ハ領事ノ指命スル者ニ於テ一時之ヲ施行スヘシ

●京城居留民團地區改正

明治四十年九月五日
統監府告示第百十七號

明治三十九年八月統監府告示第七十六號中京城居留民團ノ地區左ノ通改正ス

地區
京城城內一圓
敦義門（通稱西大門）及崇禮門（通稱南大門）外一帶ノ地域
弘濟院、鞍峴ノ東麓、阿峴、背拔（四契ノ一部ヲ除ク）瓦署（統監府鐵道管理局用地ヲ除ク）梨太院、典牲署及葛月里ヲ以テ其ノ境界線トス但シ其ノ各地ハ本地區ニ屬ス
興仁門（通稱東大門）外一帶ノ地域
駱山ノ東麓、紫芝洞、關羽廟（通稱東廟）往十里及大峴洞ヲ以テ其ノ境界線トス但シ其ノ各地ハ本地區ニ屬ス

●居留民團設立

明治四十年八月一日
外務省告示第十八號

來九月一日左記居留民團ヲ設立ス

名稱	地區
天津居留民團	天津日本專管居留地及其ノ境界線ヨリ二里以內ノ地域
上海居留民團	上海各國共同居留地、佛國專管居留地及該各居留地境界線ヨリ二英里以內ノ地域（浦東ヲ含ム）
漢口居留民團	漢口、漢陽、武昌
牛莊居留民團	營口、背地子
安東居留民團	安東新市街及北、小沙河ヨリ南、五道溝ニ至リ東、鴨綠江岸ヨリ四、山頂分水線ニ至ル地域但シ鐵道專用地ヲ除ク

明治四十年九月五日
統監府告示第百十六號

明治四十年九月十五日左記居留民團ヲ設立ス

名稱	地區
龍山居留民團	楊花鎭ヨリ西江、孔德里ヲ經テ京城居留民團境界線ニ接シ西氷庫ニ至ル漢江右岸一帶ノ地域但シ其ノ各地ハ本地區ニ屬ス

第十五輯

軍事

第十五輯　軍事

第二章　軍區　常備團隊

○陸軍管區表（四〇、軍令陸三）……一
○各聯隊區司令部對馬警備隊司令部沖繩警備隊區司令部位置（四〇、陸告二一）……五
○陸軍常備團隊配備表（四〇、軍令陸四）……五

第三章　要塞地帶

○要塞地帶圖中改正（四〇、六、五、陸告）……九
○要塞地ニ於ケル禁止制限解除事項及其區域中改正（四〇、陸告六等）……一〇

第六章　戒嚴　徴發

○馬匹徴發事務細則中改正（四〇、陸令一三）……一〇
○戒嚴令、徴發令ヲ樺太ニ施行制（四〇、勅令二五七、第八輯第一章ニ收ム）

第八章　召集

○陸軍召集條例中改正（四〇、勅令三一四）……一一
○陸軍召集條例施行細則中改正（四〇、陸令一五）……一四
○補充兵役歩兵ノ教育召集ハ當分行ハス（四〇、陸達七二）……二二
○近衛師團ニ於テ演習召集及教育召集ヲ施行スヘキ者（四〇、陸達八二）……二二
○陸軍召集諸費支出規程中改正（第十一輯第七章ニ收ム）
○臺灣在郷陸軍軍人戰時召集規程中改正（四〇、臺令二九）……二二
○海軍召集條例施行細則中改正（四〇、海令五）……二三

第九章　教育

○陸軍召募規則中改正（四〇、陸令三）……二三
○陸軍中央幼年學校本科生徒入學期日及納金ニ關スル規定中改正（四〇、陸告五）……二三
○陸地測量部修技所生徒募集規則中改正（四〇、陸令六）……二三
○法科大學陸軍經理學校員外學生修學規則（四〇、陸達七六）……二四

第十章　兵役

第一款　徴兵

○北海道沖繩縣及小笠原島ニ徴兵令施行制中改正（四〇、勅令二五五）……二四
○徴兵事務條例中改正（四〇、勅令二五四）……二四
○徴兵事務條例施行細則中改正（四〇、陸令二〇等）……二六
○徴兵事務條例施行細則中北海道沖繩縣及大島八丈島小笠原島ニ施行シ難キ諸件取扱方竝警備隊兵卒入營前取扱方廢止（四〇、陸令一一）……三一
○現役砲兵輸卒及輜重輸卒ノ入營シ難キモノ取扱方廢止（四〇、陸達四六）……三一
○徴兵處分ヲ受クヘキ所在不明者調査規程（四〇、陸訓甲一）……三一
○歩兵隊兵員徴集區指定表（四〇、陸達五六）……三二
○徴兵檢査規則中改正（四〇、陸令一）……三三
○臺灣居住者徴兵身體檢査願書差出方（四〇、臺令二）……三三

第四款　國民軍

○國民兵役ニ在リテ召集セラレタル者及國民軍編入志願者ニ關スル制中改正（四〇、勅令三一五）……三四

第五款　服役

○國民兵役ニ在ル者ノ服役及召集ニ關スル制中改正（四〇、勅令三一六）……三四
○在韓國第十三師團及歩兵第十二旅團諸隊兵卒服役延期（四〇、陸令一六）……三四
○陸軍現役歩兵科兵卒ノ歸休ニ關スル制（四〇、勅令三三二）……三四
○陸軍在郷軍人臺灣居住者取扱方（四〇、陸訓一〇）……三四
○海軍高等武官准士官服役令中改正（四〇、勅令三三四）……三五

第十五輯　軍事

第二章　軍區　常備團隊

◎陸軍管區表

明治四十年九月十八日
軍令陸第三號陸軍大臣副署

朕陸軍管區表ヲ改定シ之カ施行ヲ命ス

陸軍管區表左ノ通改正ス

（別表ノ通）

附則

本令施行ノ期日ハ陸軍大臣之ヲ定ム

師管旅管ニ付テハ當分ノ內陸軍大臣ニ於テ別表ニ依ラス當時ノ管轄區域ヲ定ムルコトヲ得

陸軍管區表

師管	旅管	聯隊區	警備隊區	管轄區域
第一	第一	麻布		東京府　牛込區　南多摩郡　神奈川縣 麴町區　芝區　小石川區　北多摩郡　橘樹郡　都筑郡 神田區　麻布區　荏原郡　伊豆七島 日本橋區　赤坂區　豐多摩郡　小笠原島 京橋區　四谷區　西多摩郡
		甲府		山梨縣　高座郡　足柄上郡 神奈川縣　愛甲郡　足柄下郡 橫濱市　鎌倉郡　津久井郡 橫須賀市　三浦郡 久良岐郡　中郡
	第二	本郷		東京府　埼玉縣 本郷區　深川區　北足立郡　北埼玉郡 下谷區　北豐島郡　南埼玉郡　北葛飾郡 淺草區　南足立郡 本所區　南葛飾郡
		佐倉		千葉縣
第二	第三	福島		福島縣　柴田郡　亘理郡 福島市　相馬郡　刈田郡　名取郡 信夫郡　雙葉郡　伊具郡 伊達郡　石城郡 宮城縣
		若松		福島縣　東白川郡　大沼郡 若松市　[illegible]　耶麻郡　南會津郡 安積郡　田村郡　河沼郡 [illegible]　石川郡 [illegible]
	第二十五	仙臺		宮城縣　黑川郡　加美郡 仙臺市　登米郡　玉造郡　宮城郡 本吉郡　遠田郡 牡鹿郡　栗原郡 桃生郡　志田郡
		山形		山形縣
第三	第五	名古屋		愛知縣　土岐郡 名古屋市　愛知郡 東春日井郡　西春日井郡 知多郡 岐阜縣
		岐阜		岐阜縣　揖斐郡 岐阜市　武儀郡　愛知縣 郡上郡　山縣郡　丹羽郡　葉栗郡 加茂郡　稻葉郡 可兒郡　本巢郡
	第三十	桑名		三重縣　海西郡 四日市市　員辨郡　岐阜縣 桑名郡　三重郡　安八郡　海津郡 愛知縣　羽島郡　養老郡 中島郡　海東郡　不破郡
		津		三重縣　度會郡　北牟婁郡 津市　安濃郡　志摩郡　南牟婁郡 宇治山田市　一志郡 河藝郡　飯南郡 鈴鹿郡　多氣郡
第四	第七	大阪		大阪府 西區　西成郡 南區　東成郡 東區　中河內郡 北區
		篠山		兵庫縣　北河內郡 氷上郡　有馬郡 多紀郡　川邊郡 大阪府 豐能郡　三島郡
	第三十二	堺		大阪府 堺市　泉北郡 南河內郡　泉南郡 兵庫縣 津名郡　三原郡
		和歌山		和歌山縣
第	第九	廣島		廣島縣 廣島市　高田郡 吳市　賀茂郡 豐田郡　安藝郡
		松山		愛媛縣　西宇和郡 松山市　喜多郡 越智郡　東宇和郡 溫泉郡　北宇和郡 伊豫郡　南宇和郡
	第二	山口		山口縣 吉敷郡　美禰郡 阿武郡　大津郡 佐波郡　厚狹郡 都濃郡

五	十一	岩國		山口縣 玖珂郡 大島郡 熊毛郡 廣島縣 佐伯郡 山縣郡 安佐郡
第六	第十一	熊本		熊本縣 熊本市 飽託郡 上益城郡 下益城郡 阿蘇郡 宇土郡
		八代		熊本縣 八代郡 球磨郡 葦北郡 鹿兒島縣 出水郡 伊佐郡 薩摩郡 姶良郡
			沖繩	沖繩縣
	第三十六	鹿兒島		鹿兒島縣 鹿兒島市 鹿兒島郡 日置郡 川邊郡 揖宿郡 熊毛郡 大島郡
		都城		宮崎縣 兒湯郡 東諸縣郡 宮崎郡 南那珂郡 西諸縣郡 北諸縣郡 鹿兒島縣 囎唹郡 肝屬郡
第七	第十三	札幌		北海道廳 札幌區 札幌郡 空知郡（富良野村ヲ除ク） 夕張郡 樺戶郡 雨龍郡 濱益郡 厚田郡 石狩郡（石狩國） 小樽區 小樽郡 高島郡 忍路郡 余市郡 古平郡 美國郡 積丹郡 岩內郡 古宇郡（後志國） 千歲郡 室蘭郡 有珠郡 虻田郡 幌別郡 白老郡 勇拂郡（占冠村ヲ除ク）（膽振國） 沙流郡 新冠郡 靜內郡 浦河郡 樣似郡 幌泉郡 三石郡（日高國）
		函館		北海道廳 函館區 龜田郡 上磯郡 松前郡 檜山郡 爾志郡 茅部郡（渡島國） 久遠郡 奧尻郡 太櫓郡 瀨棚郡 島牧郡 壽都郡 歌棄郡 磯谷郡（後志國） 山越郡（膽振國）
	第十四	釧路		北海道廳 根室郡 花咲郡 野付郡 標津郡 目梨郡（根室國） 廣尾郡 中川郡 十勝郡 河西郡 河東郡 上川郡（十勝國） 厚岸郡 釧路郡 阿寒郡 川上郡 白糠郡 足寄郡（釧路國） 色丹郡 得撫郡 新知郡 占守郡 國後郡 振別郡 擇捉郡 蘂取郡 紗那郡（千島國）
		旭川		北海道廳 上川郡 空知郡 富良野村（石狩國） 勇拂郡 占冠村（膽振國） 增毛郡 留萌郡 苫前郡 天鹽郡 中川郡 上川郡（天鹽國） 宗谷郡 枝幸郡 禮文郡 利尻郡 網走郡 斜里郡 常呂郡 紋別郡（北見國）
第八	第四	青森		青森縣 青森市 下北郡 上北郡 三戶郡 東津輕郡 岩手縣 九戶郡 下閉伊郡 二戶郡
		盛岡		岩手縣 盛岡市 上閉伊郡 氣仙郡 岩手郡 紫波郡 稗貫郡 和賀郡 江刺郡 東磐井郡 膽澤郡 西磐井郡
	第十六	秋田		秋田縣 秋田市 仙北郡 平鹿郡 南秋田郡 河邊郡 由利郡 雄勝郡
		弘前		青森縣 弘前市 北津輕郡 南津輕郡 中津輕郡 西津輕郡 秋田縣 鹿角郡 北秋田郡 山本郡
第九	第六	金澤		石川縣 金澤市 羽咋郡 河北郡 石川郡 能美郡 江沼郡
		鯖江		福井縣 福井市 大野郡 坂井郡 吉田郡 足羽郡 今立郡 丹生郡 南條郡
	第三十一	高岡		富山縣 高岡市 氷見郡 射水郡 東礪波郡 西礪波郡 石川縣 珠洲郡 鳳至郡 鹿島郡
		富山		富山縣 富山市 下新川郡 中新川郡 上新川郡 婦負郡 岐阜縣 吉城郡 益田郡 大野郡
第十	第八	姬路		兵庫縣 姬路市 神崎郡 宍粟郡 飾磨郡 揖保郡 佐用郡 赤穗郡 岡山縣 和氣郡 邑久郡
		鳥取		岡山縣 英田郡 苫田郡 久米郡 勝田郡 眞庭郡 鳥取縣 鳥取市 岩美郡 八頭郡 氣高郡 東伯郡
	第二十	福知山		京都府 加佐郡 何鹿郡 與謝郡 天田郡 竹野郡 中郡 熊野郡 兵庫縣 出石郡 朝來郡 城崎郡 養父郡 美方郡
		神戶		兵庫縣 神戶市 美嚢郡 武庫郡 加東郡 明石郡 多可郡 加西郡 印南郡 加古郡

第十一	第十	丸龜		香川縣 高松市 丸龜市 大川郡 小豆郡 木田郡 香川郡 綾歌郡
		德島		德島縣
	第二十二	善通寺		香川縣 仲多度郡 三豐郡 愛媛縣 宇摩郡 新居郡 周桑郡 上浮穴郡
		高知		高知縣
第十二	第十二	中津		大分縣 東國東郡 西國東郡 速見郡 宇佐郡 玖珠郡 下毛郡 日田郡 福岡縣 築上郡 京都郡
		大分		大分縣 北海部郡 南海部郡 大分郡 大野郡 直入郡 宮崎縣 東臼杵郡 西臼杵郡
	第三十五	小倉		福岡縣 小倉市 門司市 企救郡 田川郡 遠賀郡 鞍手郡 嘉穗郡 宗像郡 山口縣 下關市 豐浦郡
		福岡		福岡縣 福岡市 糟屋郡 筑紫郡 早良郡 糸島郡 朝倉郡 佐賀縣 東松浦郡 西松浦郡
			對馬	長崎縣 上縣郡 下縣郡
第十三	第十五	新發田		新潟縣 新潟市 岩船郡 北蒲原郡 西蒲原郡 東蒲原郡 佐渡郡
		村松		新潟縣 長岡市 中蒲原郡 南蒲原郡 古志郡 北魚沼郡 南魚沼郡 三島郡 中魚沼郡
	第二十六	松本		長野縣 松本市 北佐久郡 南佐久郡 小縣郡 諏訪郡 南安曇郡 埴科郡 更級郡 東筑摩郡 北安曇郡
		高田		新潟縣 刈羽郡 東頸城郡 中頸城郡 西頸城郡 長野縣 長野市 下水內郡 上水內郡 下高井郡 上高井郡
第	第二	水戶		茨城縣
十四	十七	宇都宮		栃木縣
	第二十八	高崎		群馬縣
		熊谷		埼玉縣 大里郡 比企郡 入間郡 兒玉郡 秩父郡
第十五	第十七	豐橋		愛知縣 豐橋市 渥美郡 寶飯郡 南設樂郡 額田郡 碧海郡 幡豆郡 八名郡
		飯田		長野縣 上伊那郡 下伊那郡 西筑摩郡 岐阜縣 惠那郡 愛知縣 北設樂郡 東加茂郡 西加茂郡
	第二十九	靜岡		靜岡縣 靜岡市 駿東郡 富士郡 庵原郡 安倍郡 田方郡 賀茂郡
		濱松		靜岡縣 榛原郡 志太郡 周智郡 小笠郡 磐田郡 引佐郡 濱名郡
第十六	第十八	大津		滋賀縣 大津市 神崎郡 甲賀郡 蒲生郡 野洲郡 栗太郡 滋賀郡 三重縣 阿山郡 名賀郡
		敦賀		福井縣 敦賀郡 三方郡 遠敷郡 大飯郡 滋賀縣 伊香郡 東淺井郡 阪田郡 犬上郡 愛知郡 高島郡
	第十九	京都		京都府 上京區 下京區 愛宕郡 宇治郡 綴喜郡 相樂郡 北桑田郡 葛野郡 乙訓郡 紀伊郡 久世郡 南桑田郡 船井郡
		奈良		奈良縣
第十	第三十三	福山		廣島縣 尾道市 比婆郡 神石郡 深安郡 甲奴郡 蘆品郡 沼隈郡 雙三郡 世羅郡 御調郡
		岡山		岡山縣 岡山市 上道郡 赤磐郡 御津郡 上房郡 小田郡 吉備郡 都窪郡 兒島郡 川上郡 淺口郡 後月郡
	第三	濱田		島根縣 簸川郡 安濃郡 邇摩郡 邑智郡 那賀郡 美濃郡 鹿足郡

七	十四	松江		島根縣 海士郡 知夫郡 松江市 八束郡 能義郡 大原郡 仁多郡 飯石郡 周吉郡 穏地郡 鳥取縣 西伯郡 日野郡 岡山縣 阿哲郡
第十八	第二十三	大村		長崎縣 長崎市 佐世保市 東彼杵郡 西彼杵郡 北松浦郡 壹岐郡 南松浦郡
		佐賀		佐賀縣 佐賀市 佐賀郡 小城郡 杵島郡 藤津郡 長崎縣 南高來郡 北高來郡
	第二十四	久留米		福岡縣 久留米市 三井郡 八女郡 三瀦郡 山門郡 三池郡 浮羽郡 佐賀縣 三養基郡 神埼郡
		高瀬		熊本縣 菊池郡 鹿本郡 玉名郡 天草郡

備考

一、師管ノ番號ハ師團ノ番號ト、旅管ノ番號ハ歩兵旅團ノ番號ト同一トス

二、臺灣及樺太ノ管區ハ追テ之ヲ定ム

明治四十年九月十八日
陸軍省令第十二號

明治四十年軍令陸第三號ノ施行ニ關シ左ノ通定ム

陸軍管區表ハ明治四十年十月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ第十三乃至第十八師團司令部、歩兵第二十五乃至第三十六旅團司令部各其ノ衛戍地ニ就キ業務ヲ執ルニ至ル迄師團長ノ管轄及歩兵旅團長ノ事務監督ノ關係及區域ハ別表ニ依ル

軍法會議ノ管轄ニ關シテハ第十三乃至第十八師團司令部各其ノ衛戍地ニ就キ業務ヲ執ルニ至ル迄第一第十四兩師管區域ヲ以テ第一師管、第二第十三兩師管區域ヲ以テ第二師管、第三第十五兩師管區域ヲ以テ第三師管、第四第十六兩師管區域ヲ以テ第四師管、第九第十七兩師管區域ヲ以テ第五師管、第十二第十八兩師管區域ヲ以テ第十二師管トス

師團長	旅團長	聯隊區
第八師團長	第四旅團長	青森 盛岡
	第十六旅團長	弘前 秋田
第二師團長	第三旅團長	仙臺 山形 福島 若松
	第十五旅團長	新發田 村松 高田 松本
第一師團長	第一旅團長	佐倉 本郷 麻布 甲府
	第二旅團長	水戸 宇都宮 高崎 熊谷
第三師團長	第五旅團長	名古屋 岐阜 桑名 津
	第十七旅團長	靜岡 濱松 豐橋 飯田
第四師團長	第七旅團長	大阪 篠山 堺 和歌山
	第十八旅團長	敦賀 大津
	第十九旅團長	奈良 京都
第九師團長	第六旅團長	金澤 鯖江 富山 高岡
第十師團長	第二十旅團長	福知山 神戸
	第八旅團長	姫路 鳥取
第五師團長	第二十一旅團長	廣島 松山 山口 岩國
	第九旅團長	岡山 福山 松江 濱田
第十一師團長	第十旅團長	丸龜 德島
	第二十二旅團長	善通寺 高知
第六師團長	第十一旅團長	熊本 八代 鹿兒島 都城
第十二師團長	第十二旅團長	小倉 福岡 中津 大分
	第二十三旅團長	佐賀 大村
	第二十四旅團長	久留米 高瀬
第七師團長	第十三旅團長	札幌 函館
	第十四旅團長	釧路 旭川

明治四十年十二月三日
陸軍省令第二十一號

明治四十年陸軍省令第十二號第一項但書ニ關シ歩兵第三十三及第三十四旅團司令部ハ其ノ開廳ノトキヲ以テ各其ノ衛戍地ニ就キタルモノト看做ス

●各聯隊區司令部對馬警備隊司令部沖繩警備隊區司令部位置

明治四十年九月十八日
陸軍省告示第二十一號

陸軍管區表ニ依リ各聯隊區司令部、對馬警備隊司令部、沖繩警備隊區司令部左記ノ位置ニ於テ十月一日ヨリ事務ヲ開始ス

麻布聯隊區司令部	東京市赤阪區青山南町
甲府聯隊區司令部	神奈川縣横濱市南太田町
本郷聯隊區司令部	東京市本郷區眞砂町
佐倉聯隊區司令部	千葉縣印旛郡佐倉町
福島聯隊區司令部	福島縣福島市早稻町
若松聯隊區司令部	同右
仙臺聯隊區司令部	宮城縣仙臺市二十人町
山形聯隊區司令部	山形縣山形市香澄町
名古屋聯隊區司令部	愛知縣名古屋市南外堀町
桑名聯隊區司令部	同右
岐阜聯隊區司令部	岐阜縣稻葉郡上加納町
津聯隊區司令部	三重縣津市西堀端
大阪聯隊區司令部	大阪市東區大手前ノ町
篠山聯隊區司令部	同右
堺聯隊區司令部	同右
和歌山聯隊區司令部	和歌山縣和歌山市壹番町
廣島聯隊區司令部	廣島縣廣島市基町
岩國聯隊區司令部	同右
松山聯隊區司令部	愛媛縣松山市堀ノ内町
山口聯隊區司令部	山口縣吉敷郡上宇野令村
熊本聯隊區司令部	熊本縣熊本市千葉城町
八代聯隊區司令部	同右
鹿兒島聯隊區司令部	鹿兒島縣鹿兒島市山下町
都城聯隊區司令部	宮崎縣宮崎郡宮崎町
札幌聯隊區司令部	北海道札幌區北一條
函館聯隊區司令部	北海道函館區船見町
釧路聯隊區司令部	北海道釧路國釧路郡釧路浦見町
旭川聯隊區司令部	北海道石狩國上川郡旭川町
盛岡聯隊區司令部	岩手縣盛岡市仁王
秋田聯隊區司令部	秋田縣秋田市上中城町
弘前聯隊區司令部	青森縣弘前市富田町
青森聯隊區司令部	同右
金澤聯隊區司令部	石川縣金澤市大手町
鯖江聯隊區司令部	福井縣今立郡鯖江町
富山聯隊區司令部	富山縣富山市千石町
高岡聯隊區司令部	同右
姫路聯隊區司令部	兵庫縣姫路市本町
鳥取聯隊區司令部	鳥取縣鳥取市東町
福知山聯隊區司令部	京都府天田郡福知山町
神戸聯隊區司令部	兵庫縣神戸市中山手通
善通寺聯隊區司令部	香川縣仲多度郡善通寺町
丸龜聯隊區司令部	同右
德島聯隊區司令部	德島縣德島市德島町
高知聯隊區司令部	高知縣高知市帶屋町
小倉聯隊區司令部	福岡縣小倉市小倉城内
中津聯隊區司令部	同右
大分聯隊區司令部	大分縣大分郡大分町
福岡聯隊區司令部	福岡縣福岡市洲崎裏町
新發田聯隊區司令部	新潟縣北蒲原郡新發田町
村松聯隊區司令部	新潟縣刈羽郡柏崎町
高田聯隊區司令部	同右
松本聯隊區司令部	長野縣長野市南長野
水戸聯隊區司令部	茨城縣水戸市上市大町
宇都宮聯隊區司令部	栃木縣宇都宮市中河原
高崎聯隊區司令部	群馬縣高崎市下和田村
熊谷聯隊區司令部	同右
豐橋聯隊區司令部	愛知縣豐橋市八町
飯田聯隊區司令部	同右
靜岡聯隊區司令部	靜岡縣靜岡市追手町
濱松聯隊區司令部	同右
大津聯隊區司令部	滋賀縣大津市下大門町
敦賀聯隊區司令部	同右
京都聯隊區司令部	京都府紀伊郡深草村
奈良聯隊區司令部	同右
福山聯隊區司令部	廣島縣尾道市久保町
岡山聯隊區司令部	同右
濱田聯隊區司令部	島根縣那賀郡濱田町
松江聯隊區司令部	同右
大村聯隊區司令部	長崎縣東彼杵郡大村町
佐賀聯隊區司令部	同右
久留米聯隊區司令部	福岡縣久留米市
高瀬聯隊區司令部	同右
沖繩警備隊區司令部	沖繩縣那覇區久茂地村
對馬警備隊司令部	長崎縣對馬國下縣郡鷄知

●陸軍常備團隊配備表

明治四十年九月十九日
軍令陸第四號陸、大臣副署

朕陸軍常備團隊配備表ヲ改定シ之カ施行ヲ命ス

陸軍常備團隊配備表左ノ通改定ス

陸軍常備團隊配備表

師團	師團司令部所在地	步兵 旅團	步兵 旅團司令部所在地	步兵 聯隊	騎兵 旅團	騎兵 旅團司令部所在地	騎兵 聯隊	野砲兵 旅團	野砲兵 旅團司令部所在地	野砲兵 聯隊	山砲兵 大隊	工兵 大隊	輜重兵 大隊	重砲兵 旅團	重砲兵 旅團司令部所在地	重砲兵 聯隊	重砲兵 大隊	交通兵 旅團司令部所在地	交通兵 聯（大）隊	警備隊 司令部所在地	警備隊 步兵隊	軍樂隊	諸隊衛戍地名
近衛	東京	近衛第一 近衛第二	東京	近衛第一 近衛第二 近衛第三 近衛第四	第一	習志野	近衛 第十三 第十四	第一	東京	近衛 第十三 第十四		近衛	近衛					千葉	鐵道 聯隊本部 鐵道 第一大隊 鐵道 第二大隊 鐵道 第三大隊 電信 氣球			近衛	東京 習志野 千葉 習志野 東京
第一	東京	第一 第二	東京	第一 第四十九 第三 第五十七	第二	習志野	第一 第十五 第十六	第二 第三	國府臺 下志津	第一 第十五 第十六 第十七 第十八		第一	第一	第一	横須賀	第一 第二							東京 甲府 東京 佐倉 東京 習志野 東京 國府臺 下志津 横須賀
第二	仙臺	第三 第二十五	仙臺 山形	第二十九 第六十五 第四 第三十二			第二			第二	第一	第二	第二										仙臺 若松 仙臺 山形
第三	名古屋	第五 第三十	名古屋 津	第六 第六十八 第三十三 第五十一			第三			第三		第三	第三										名古屋 岐阜 名古屋 津
第四	大阪	第七 第三十二	大阪 和歌山	第八 第七十 第三十七 第六十一			第四			第四		第四	第四			第三 聯隊本部 第三 第一大隊 第三 第二大隊 第三 第三大隊						第四	大阪 篠山 大阪 和歌山 高槻 由良 深山 福良 由良
第五	廣島	第九 第二十一	廣島 山口	第十一 第二十二 第四十二 第七十一			第五			第五		第五	第五			第四	藝豫						廣島 松山 山口 廣島 忠海
第六	熊本	第十一 第三十六	熊本 鹿兒島	第十三 第二十三 第四十五 第六十四			第六			第六		第六	第六										熊本 鹿兒島 都城
第七	旭川	第十三 第十四	旭川	第二十五 第二十六 第二十七 第二十八			第七			第七		第七	第七				函館						札幌 旭川 函館
第八	弘前	第四 第十六	弘前 秋田	第五 第三十一 第十七 第五十二	第三	盛岡	第八 第二十三 第二十四			第八		第八	第八										青森 弘前 秋田 弘前 盛岡

第九	金澤	第六 金澤 第三十一 富山	第七 第三十六 第三十五 第六十九		第九	第九		第九	第九			金澤 鯖江 金澤 富山
第十	姫路	第八 姫路 第二十 福知山	第十 第四十 第二十 第三十九		第十	第十		第十	第十	舞鶴		姫路 鳥取 福知山 姫路 舞鶴
第十一	善通寺	第十 德島 第二十二 善通寺	第十二 第六十二 第四十三 第四十四		第十一	第十一		第十一	第十一			丸龜 德島 善通寺 高知
第十二	小倉	第十二 小倉 第三十五 福岡	第四十七 第七十二 第十四 第二十四		第十二	第十二		第十二	第十二	第二 下關 第五 第六 對馬	鷄知一六隊	小倉 大分 小倉 福岡 下關 鷄知 嚴原
第十三	高田	第十五 新發田 第二十六 高田	第十六 第三十 第五十 第五十八		第十七	第十九		第十三	第十三			新發田 村松 松本 高田 小千谷
第十四	宇都宮	第二十七 水戸 第二十八 宇都宮	第二 第五十九 第十五 第六十六		第十八	第二十		第十四	第十四			水戸 宇都宮 高崎 宇都宮
第十五	豐橋	第十七 豐橋 第二十九 靜岡	第十八 第三十四 第六十 第六十七	第四 豐橋	第十九 第二十五 第二十六	第二十一		第十五	第十五			豐橋 靜岡 濱松 豐橋
第十六	京都	第十八 敦賀 第十九 京都	第九 第十九 第三十八 第五十三		第二十	第二十二		第十六	第十六			大津 敦賀 京都 奈良
第十七	岡山	第三十三 岡山 第三十四 松江	第四十一 第五十四 第二十一 第六十三		第二十一	第二十三	第二	第十七	第十七			福山 岡山 濱田 松江
第十八	久留米	第二十三 大村 第二十四 久留米	第四十六 第五十五 第四十八 第五十六		第二十二	第二十四	第三	第十八	第十八	佐世保 長崎		大村 佐賀 久留米 佐世保 長崎

備考

臺灣、樺太、韓國、滿洲ニ在ル常備團隊ハ本表以外トス

本表ノ內新設及移轉スヘキ軍隊ノ配備時期ハ別ニ之ヲ定ム

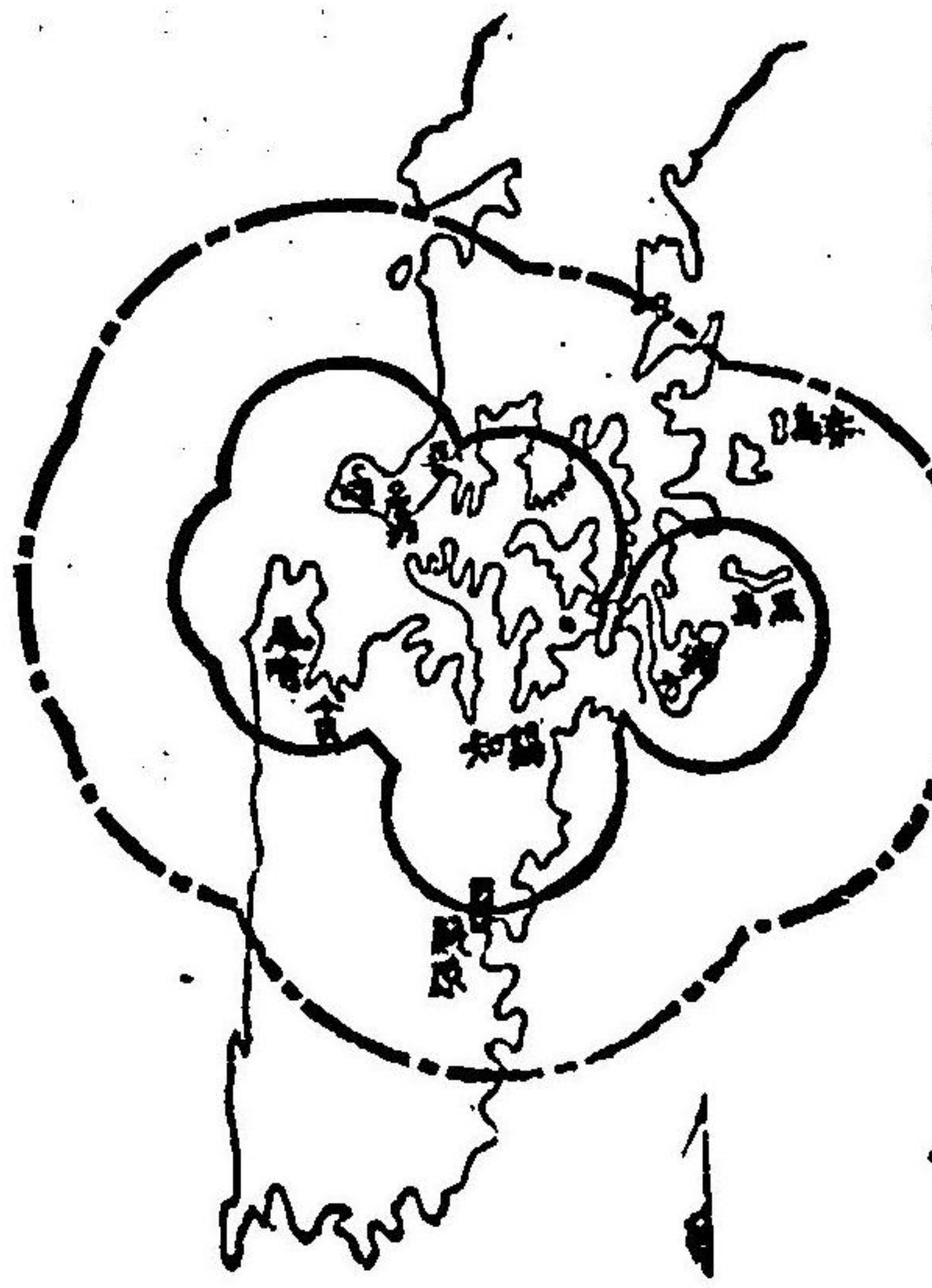
第三章　要塞地帶

●要塞地帶圖中改正

明治四十年六月五日　（陸軍省／海軍省）告示

明治三十六年五月（陸軍省／海軍省）告示對馬防備地ノ圖ヲ左ノ通改ム

對馬防備地



◎要塞地ニ於ケル禁止制限解除事項及其區域中改正

明治四十年四月一日
陸軍省告示第六號

明治三十四年十月陸軍省告示第九號附表廣島灣ノ欄ニ左ノ通加フ

事項	區域
同第十五條中堆土開鑿	吳市

明治四十年六月五日
陸軍省告示第十一號

明治三十六年五月陸軍省告示第八號附表中左ノ通改ム

一　對馬ノ欄「第九條中漁獵採藻」ノ縱欄中「緒方村」ノ下ニ「尾崎村、今里村、廻村」ヲ加フ

二　同「第十五條ニ揭クル事項」ノ縱欄中「貝口村、唐洲村、廻村、尾崎村」ヲ削ル

明治四十年九月三日
陸軍省告示第十九號

明治三十四年十月陸軍省告示第九號附表由良(其一)ノ欄ニ左ノ通追加ス

事項	區域
同第七條第二項區域中撮影、摸寫、錄取	和歌山縣紀伊國海草郡和歌山市、和歌浦町、湊村、雜賀村、雜賀崎村、宮前村、岡町村、鳴神村、四個鄕村、宮村、中ノ島村、西和佐村

第六章　徵發

◎馬匹徵發事務細則中改正

明治四十年九月十八日
陸軍省令第十三號

馬匹徵發事務細則附表ヲ別表ノ通改正ス

本令ハ明治四十年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治四十年度內ニ於テ徵發ヲ實施スル場合ニ在リテハ從前ノ管區表ニ依ル又同四十年度及四十一年度內ニ於ケル徵發準備、四十一年度內ニ於ケル徵發實施竝馬匹ノ調査及檢査ニ關シ第十三師團長ノ管轄スル徵馬管區ニ在リテハ第二師團長、第十四師團長ノ管轄スル徵馬管區ニ在リテハ第一師團長、第十五師團長ノ管轄スル徵馬管區ニ在リテハ第三師團長、第十六師團長ノ管轄スル徵馬管區ニ在リテハ第四師團長ノ管轄ニ屬スルモノトス

（別表）

徵馬管區表

所管師團	管轄區域	
		郡市區
近衞	茨城	悉皆（東茨城、久慈、多賀ノ三郡及水戸市ヲ除ク）
	東京	悉皆（所屬島嶼ヲ除ク）
	神奈川	悉皆
第一	埼玉	北足立、北埼玉、南埼玉、北葛飾
	千葉	悉皆
	山梨	悉皆
第二	宮城	名取、宮城、黑川、加美、志田、遠田、桃生、牡鹿、仙臺市
	福島	北會津、若松市
	山形	南村山、東村山、西村山、北村山、最上、飽海、西置賜、東置賜、南置賜、山形市、米澤市
第三	三重	悉皆（阿山、名賀ノ二郡ヲ除ク）
	愛知	愛知、東春日井、西春日井、丹羽、葉栗、中島、海東、海西、知多、名古屋市
	岐阜	稻葉、羽島、海津、養老、不破、安八、揖斐、本巢、山縣、武儀、郡上、加茂、可兒、土岐、岐阜市
	巖手	紫波、九戸、二戸
	靑森	南津輕、上北、下北、三戸
第四	大阪	悉皆
	兵庫	川邊、有馬、氷上、多紀、津名、三原
	宮城	玉造、栗原、登米、本吉
	巖手	和賀、膽澤、江刺、西磐井、東磐井
	秋田	由利、平鹿、雄勝
	和歌山	悉皆
	廣島	安藝、佐伯、安佐、山縣、高田、賀茂、豐田、廣島市、吳市
第五	山口	悉皆（豐浦、下關市ヲ除ク）
	愛媛	溫泉、越智、伊豫、喜多、東宇和、西宇和、北宇和、南宇和、松山市
	大分	東國東、速見、北海部、南海部、大野、直入
第六	熊本	飽託、宇土、阿蘇、上益城、下益城、八代、葦北、球磨、熊本市
	宮崎	宮崎、南那珂、北諸縣、西諸縣、東諸縣、兒湯
	鹿兒島	鹿兒島、揖宿、川邊、日置、出水、熊毛、鹿兒島市
第七	北海道	悉皆（所屬島嶼ヲ除ク）
第八	巖手	巖手、盛岡市
	靑森	西津輕、中津輕、東津輕、北津輕、靑森市、弘前市
	秋田	南秋田、北秋田、山本、河邊、仙北、鹿角、秋田市
第九	茨城	久慈、多賀
	栃木	上都賀、芳賀、鹽谷、那須
	岐阜	益田、大野、吉城
	福井	足羽、吉田、坂井、大野、今立、丹生、南條、福井市
	石川	悉皆
	富山	悉皆
	京都	何鹿、天田、加佐、與謝、中、竹野、熊野
第十	兵庫	武庫、明石、美嚢、加東、多可、加西、加古、印南、飾磨、神崎、揖保、赤穗、佐用、宍粟、城崎、出石、養父、朝來、美方、神戸市、姫路市
	宮城	刈田、柴田、伊具、亘理
	福島	悉皆（北會津、若松市ヲ除ク）
	鳥取	岩美、八頭、氣高、東伯、鳥取市
	岡山	邑久、和氣、眞庭、苫田、勝田、英田、久米
第十一	德島	悉皆
	香川	悉皆
	愛媛	周桑、新居、宇摩、上浮穴
	高知	悉皆
	鹿兒島	薩摩、伊佐、姶良、囎唹、肝屬
第十二	長崎	上縣、下縣
	山口	豐浦、下關市
	福岡	糟屋、宗像、遠賀、鞍手、嘉穗、朝倉、筑紫、糸島、早良、企救、田川、京都、築上、福岡市、門司市、小倉市
	大分	西國東、大分、玖珠、日田、下毛、宇佐
	佐賀	神埼、三養基、小城、東松浦、西松浦、杵島
	宮崎	東臼杵、西臼杵
第十三	新潟	悉皆
	群馬	多野、北甘樂、碓氷
	長野	悉皆（上伊那、下伊那、西筑摩ノ三郡ヲ除ク）
	山形	東田川、西田川
第十四	茨城	東茨城、水戸市
	栃木	河內、下都賀、安蘇、足利、宇都宮市
第十五	愛知	碧海、幡豆、額田、西加茂、東加茂、北設樂、南設樂、寶飯、渥美、八名、豐橋市
	靜岡	悉皆
	岐阜	惠那
	長野	上伊那、下伊那、西筑摩
	巖手	稗貫、氣仙、上閉伊、下閉伊
第十六	京都	愛宕、葛野、乙訓、紀伊、宇治、久世、綴喜、相樂、南桑田、北桑田、船井、京都市
	埼玉	入間、比企、秩父、兒玉、大里
	奈良	悉皆
	三重	阿山、名賀
	滋賀	悉皆
	福井	敦賀、三方、遠敷、大飯
	群馬	勢多、群馬、吾妻、利根、山田、新田、邑樂、佐波、前橋市、高崎市
第十七	鳥取	西伯、日野
	島根	悉皆
	岡山	御津、赤磐、上道、兒島、都窪、淺口、小田、後月、吉備、上房、川上、阿哲、岡山市
	廣島	御調、世羅、沼隈、深安、蘆品、神石、甲奴、雙三、比婆、尾道市
第十八	長崎	西彼杵、東彼杵、北高來、南高來、北松浦、南松浦、壹岐、長崎市、佐世保市
	福岡	浮羽、三井、三瀦、八女、山門、三池、久留米市
	佐賀	佐賀、藤津、佐賀市
	熊本	玉名、鹿本、菊池、天草

第八章　召集

◎陸軍召集條例中改正

明治四十年九月三十日
勅令第三百十四號總、陸、大臣副署

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ陸軍召集條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍召集條例中左ノ通改正ス

第一條中「簡閲點呼ヘ」ノ下ニ「特別ノ規定アルモノヲ除クノ外」ヲ加フ

第二條中「補充」ヲ「臨時」ニ改ム

第五條中「在鄕軍人」ノ下ニ「及國民兵」ヲ加ヘ第二項ヲ削ル

第七條第一項中國民兵以下ヲ削ル

第九條　本條例中在鄕軍人トアルハ休職停職豫備役後備役ノ將校同相當官准士官、豫備役後備役ノ下士兵卒（工卒ヲ包含ス以下同シ）歸休兵及十二月一日以後ニ於テ未タ入營セサル現役兵竝補充兵ヲ謂フ

第十四條　削除

第五條中「動員」ノ下ニ「實施」ヲ加フ

第二十條　師團長ハ動員令ヲ聯隊區司令官ニ遞シ憲兵隊長及關係アル地方長官（東京府ニ在リテハ警視總監及府知事）ニ其ノ要旨ヲ通知スヘシ

第二十一條中「之ヲ郡長ニ」ヲ「關係アル郡長ニ之ヲ」ニ改ム

第二十二條第二項中「之ヲ憲兵分隊長ニ」ヲ「關係アル憲兵分隊長ニ之ヲ」ニ改ム

第二十四條　町村長ハ令狀ヲ受ケタルトキハ之ヲ應召員又ハ召集通報人（休職停職者ニ對シ命令ヲ通報スヘキ者ヲ包含ス以下同シ）ニ交付シ召集通報人ヲ設ケサル不在者アルトキ又ハ召集通報人不在ナルトキハ其ノ戶主又ハ家族中家事ヲ擔當スル者ニ交付スヘシ

前項ノ受領人不在ナルトキハ町村長ハ適當ノ方法ニ依リ應召員ニ令狀ヲ交付シ又ハ召集ノ旨ヲ傳達スヘシ

令狀ノ交付ニ接シタル者ハ該令狀ニ添附シタル受領證ニ記名捺印シ直ニ之ヲ返付スヘシ

第二十七條　動員實施ニ方リ演習召集敎育召集又ハ臨時召集中ノ者ニシテ當該部隊ノ充員召集ニ應スヘキ者ハ部隊長直ニ之ヲ其ノ部隊ニ編入シ他ノ部隊ノ充員召集ニ應スヘキ者ハ其ノ召集ヲ解除シ聯隊區司令官ヨリ受ケタル令狀ヲ交付スヘシ

第二十八條　應召員中令狀又ハ通報受領ノ際傷痍疾病ノ爲應召スルコト能ハサル者ハ令狀又ハ通報受領後二十四時間以內ニ聯隊區司令官ニ宛テタル屆書ニ醫師ノ診斷證書及令狀ヲ添ヘ之ヲ本籍地町村長ニ差出スヘシ

應召員中傳染病豫防ノ爲交通遮斷隔離又ハ停留ヲ命セラレタル者ハ令狀又ハ通報受領後二十四時間以內ニ聯隊區司令官ニ宛テタル屆書ニ憲兵又ハ警察官吏ノ證明書及令狀ヲ添ヘ之ヲ本籍地町村長ニ差出スヘシ

令狀又ハ通報受領後出發迄ノ間ニ於テ前二項ノ事故ノ爲應召スルコト能ハサルニ至リタル者ハ直ニ前二項ノ手續ヲ爲スヘシ

前三項ノ場合ニ於テ寄留又ハ旅行先ヨリ屆出ヲ爲ス者ハ其ノ屆書ニ診斷證書又ハ證明書及令狀ヲ添ヘ本籍地町村長ニ宛テ發送スヘシ

犯罪所在不明等ノ爲應召スルコト能ハサル者アルトキ又ハ其ノ虞アルトキハ令狀ヲ受領シタル者ヨリ令狀受領後二十四時間以內ニ聯隊區司令官ニ宛テタル屆書ニ憲兵又ハ警察官吏ノ證明書及令狀ヲ添ヘ之ヲ本籍地町村長ニ差出スヘシ

第一項乃至第四項ノ手續ヲ爲スニ方リ未タ令狀ヲ受領セサル者ハ受領後別ニ其ノ令狀ヲ差出スヘシ

第三十二條　應召員中事故ニ因リ歸郷ヲ命セラレタル者ハ二日以內ニ其ノ在職地又ハ衛戍地ヲ出發シ歸郷シタルトキハ到着後二日以內ニ屆出ツヘシ但シ本籍地外二十日以上滯在若ハ寄留セムトスルトキ又ハ歸郷旅行十日以上ヲ要スルトキハ本籍地町村ニ於テ召集ノ命アルトキ之ヲ通報スヘキ者（成年者ニ限ル）ヲ定メ歸郷ヲ命セラレタル日ヨリ二日以內ニ屆出ツヘシ

前項ノ屆書ハ將官同相當官ニ在リテハ本籍地所管ノ師團長ニ、上長官士官及准士官ニ在リテハ本籍地所管ノ町村長郡長及聯隊區司令官ヲ經テ其ノ師團長ニ、下士兵卒及補充兵ニ在リテハ本籍地所管ノ町村長及郡長ヲ經テ其ノ聯隊區司令官ニ差出スヘシ

第三十三條　充員召集ノ解除ハ復員令ニ依リ之ヲ實施ス但シ必要アルトキハ復員令ニ依ラス陸軍大臣ノ定メタル時期ニ於テ一部召集解除ヲ行フコトヲ得

第三章ノ下「補充召集」ヲ「臨時召集」ニ改ム

第三十七條　臨時召集トハ充員召集實施後缺員ヲ補充スル爲又ハ戰時事變ニ際シ必要アルトキ臨時在郷軍人ヲ召集スルヲ謂フ但シ充員召集實施後缺員ヲ補充スル場合ノ外召集ノ時期ハ陸軍大臣之ヲ定ム

第三十七條ノ二　師團長ハ其ノ師團ニ動員下令アリタルトキハ在郷軍人ノ外國ニ居住又ハ旅行中ノ者ニ對スル臨時召集令ヲ聯隊區司令官ニ遞スヘシ

第三十八條　師團長ハ臨時召集令ヲ聯隊區司令官ニ遞シ憲兵隊長及關係アル地方長官（東京府ニ在リテハ警視總監及府知事）ニ其ノ要旨ヲ通知スヘシ

第三十九條中「前條」ヲ「前二條」ニ「補充」ヲ「臨時」ニ改ム

第四十一條中「補充」ヲ「臨時」ニ改ム

第四十二條　國民兵召集トハ國民軍ヲ編成スル爲動員令ニ依リ國民兵（[illegible]）ヲ召集スルヲ謂フ

第四十三條　町村長ハ其ノ管內ニ在籍スル國民兵ノ人員及退役將校同相當官准士官（[illegible]）ノ名簿ヲ作リ之ヲ郡長ニ差出スヘシ

町村長ハ其ノ管內ニ在籍スル第一國民兵及退役將校同相當官准士官ノ身體體格ノ精度ヲ適宜ノ方法ニ依リ調査スヘシ

第四十四條中「前條」ノ下ニ「第一項」ヲ加ヘ「警視總監地方長官及」ヲ削ル

第四十五條　戰時ニ方リ師團長ハ國民兵召集ノ準備ヲ行フニハ召集スヘキ國民兵ノ要員ヲ定メテ各聯隊區ニ配當シ且必要ノ事項ヲ聯隊區司令官ニ遞シ其ノ種類及年齡ヲ地方長官（東京府ニ在リテハ警視總監及府知事）及憲兵隊長ニ通知スヘシ

聯隊區司令官ハ前項ニ基キ之ヲ各郡ニ配當シ且必要ノ事項ヲ郡長ニ遞スヘシ

第四十六條　郡長ハ聯隊區司令官ヨリ前條第二項ノ配當及遞ヲ受ケタルトキハ町村ニ於ケル當該國民兵ノ總員ヲ準トシ比例ヲ以テ之ヲ各町村ニ配當シ且必要ノ事項ヲ町村長ニ遞スヘシ

第四十七條　町村長ハ國民兵要員ノ配當及遞ヲ受ケタルトキハ之ニ基キ應召員ヲ定メテ國民兵召集名簿及國民兵召集令狀ヲ作リ其ノ名簿ニ應召員ノ戰時名簿ヲ添ヘ郡長ヲ經テ聯隊區司令官ニ差出シ令狀ハ之ヲ保管スヘシ

町村長ハ國民兵召集名簿及召集令狀調製後國民兵ニ異動ヲ生シタルトキハ直ニ名簿及令狀ヲ訂正シ其ノ都度郡長ヲ經テ聯隊區司令官ニ通知スヘシ

第四十八條　國民兵召集ニ關シテハ第十六條第十八條乃至第二十二條第二十四條乃至第二十六條第二十八條乃至第三十一條及第三十三條乃至第三十五條ヲ準用ス

前項ノ場合ニ於テ國民兵動員令ノ遞ヲ受ケタル郡長ハ之ヲ町村長ニ遞シ町村長ハ召集令狀ノ交付ヲ爲スヘキモノトス

應召員中事故ニ因リ歸郷ヲ命セラレタル者及召集解除ヲ命セラレタル者ニハ第三十二條ヲ準用ス但シ同條中聯隊區司令官ニ差出スヘキ屆書ハ本籍地町村長ニ宛テ差出スヘシ

第四十九條　國民兵召集實施後缺員ノ補充其ノ他必要アルトキハ第四十二條ニ依ラス臨時國民兵ヲ召集ス其ノ召集及解除ニ關シテハ第十六條第二十四條乃至第二十六條第二十八條乃至第三十一條第三十三條第三十六條第三十七條但書第三十八條第四十五條乃至第四十七條及第四十八條第三項ヲ準用ス

前項ノ場合ニ於テ聯隊區司令官ハ召集令ヲ關係アル郡長ニ郡長ハ之ヲ町村長ニ遞シ町村長ハ召集令狀ノ交付ヲ爲スヘシ

第五十條　第二國民兵役ニ在ル者ノ召集ニ關シ必要アルトキハ前諸條ノ規定ニ依ラサルコトヲ得此ノ場合ニ於テ其ノ方法ハ陸軍大臣臨時之ヲ定ム

第五十一條中第一項ノ割註ヲ「（休職停職者及十二月一日以後ニ於テ決定シ入營セサル現役兵及未タ敎育セサル補充兵ヲ除ク）」ニ改ム

第五十六條中「警視總監」ヲ削リ「地方長官」ノ下ニ「（東京府ニ在リテハ警視總監及府知事）」ノ割註ヲ加フ

第五十九條中「父母」ノ下ニ「妻子」ヲ加フ

第六十一條第二項ヲ左ノ如ク改ム

應召員中事故ニ因リ歸郷ヲ命セラレタル者及召集解除ヲ命セラレタル者ニハ服役條例中現役ヨリ豫備役又ハ後備役ニ入ル者ノ歸郷ニ關スル規定ヲ準用ス但シ歸郷シタルトキノ屆書ハ本籍地町村長ニ宛テ屆出ツヘシ

第六十二條中「第一」ヲ削ル

第六十四條第二項中「第三十二條」ヲ「第六十一條第二項」ニ改ム

第六十九條　簡閲點呼トハ在郷軍人（未タ敎育セサル補充兵ヲ除ク）ヲ集合シテ之ヲ點檢査閲スルヲ謂フ但シ集合セシムヘキ者ノ種類ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第七十一條　師團長ハ部下ノ將校ニ簡閲點呼執行官ヲ命シ之ニ必要ナル訓示ヲ授クヘシ

演習召集敎育召集ニ應シタル者ノ簡閲點呼ハ其ノ年ニ限リ師團長ニ於テ之ヲ免除スルコトヲ得

師團長ハ簡閲點呼ニ參會スヘキ者僅少ナル僻陬ノ地其ノ他已ムヲ得サル場合ニ在リテハ簡閲點呼ヲ省略スルコトヲ得

第七十二條中「警視總監」ヲ削リ「地方長官」ノ下ニ「（東京府ニ在リテハ警視總監及府知事）」ノ割註ヲ加フ

第七十七條中「町村長」ノ上ニ「郡長及」ヲ加ヘ「必要アルトキハ」ヲ削ル

第八十一條　正當ノ事由ナクシテ第二十四條第三項第二十六條第二項第二十八條第一項乃至第五項第三十條第一項第二項第三十一條第一項第九十八條第一項第六十條第一項第七十八條ノ規定及之ヲ準用シタル規定ニ違背シタル者並正當ノ事由ナクシテ簡閲點呼ニ參會セサル者ハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處シ又ハ五日以上十日以下ノ拘留ニ處ス

第二十九條第一項ノ規定及之ヲ準用シタル規定ニ違背シタル者ハ三十圓以下ノ罰金ニ處シ又ハ一月以下ノ重禁錮ニ處ス

第八十三條中「臺灣」ノ下ニ「、樺太、韓國、南滿洲」ヲ加フ

第八十四條　削除

第八十五條中「士官適任證書」ヲ「士官勤務適任證書」ニ改ム

附　則

本令ハ明治四十年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

師團長ハ本令施行後六月以內ニ在リテハ本令改正ノ一部ニ付仍從前ノ規定ニ依ルコトヲ得

明治三十七年勅令第八十三號ハ之ヲ廢止ス

●陸軍召集條例施行細則中改正

明治四十年九月三十日
陸軍省令第十五號

陸軍召集條例施行細則中左ノ通改正ス

第一條　召集擔任ノ官吏公吏ハ動員手簿ヲ作リ之ニ充員召集臨時召集及國民兵召集ニ關シ自ラ計畫準備シタル事項ヲ記入シ以テ召集實施ニ方リ事務ノ敏活ヲ圖リ且其ノ狀況ヲ參考ト爲スヘキ事項ヲ記スルノ用ニ供スヘシ

動員手簿ニハ前項ニ準シ馬匹徵發事務ニ關スル事項ヲモ附記スヘシ

第二條中「ニ關係アル」ヲ「擔任ノ」ニ「訂正スヘシ」ヲ「訂正シ諸官衙ニ關係アルモノハ其ノ異動ヲ同官衙ニ報告又ハ通報スヘシ」ニ改ム

第三條第一項中「及國民兵召集令」ヲ削リ同條第二項中「及」ヲ「同令狀及國民兵召集令狀ヲ」ニ改メ「交付スル爲」ノ下ニ「竝至急ヲ要スル臨時召集令狀ヲ送達スル爲」ヲ加フ

第五條第一項中「補充」ヲ「臨時」ニ同條第二項中「普通ノ封筒ヲモ用井サルモノトス」ヲ「總テ封筒ヲ用井サルモノトス」ニ改ム

第六條　市町村長ハ其ノ所管外ニ在郷軍人又ハ第一國民兵ノ轉籍シタル者アルトキハ本人ニ關スル在郷軍人名簿（式第三號ノ二）又ハ第一國民兵名簿ヲ轉籍地市町村長ニ送付スヘシ但シ第一國民兵ニ係ルトキハ仍其ノ戰時名簿ヲモ送付スヘシ

町村長ハ在郷軍人名簿ノ副本ヲ作リ之ヲ郡長ニ差出スヘシ

第八條中但書ヲ左ノ如ク改ム

但シ憲兵隊長ノ報告ハ憲兵司令官ヲ經由スヘシ又警視總監地方長官憲兵隊長ハ其ノ報告ト同時ニ其ノ地所管ノ師團長ニ之ヲ通報スヘシ

第十五條中「訂正スヘシ」ヲ「訂正シ其ノ旨ヲ聯隊區司令官ニ通知スヘシ」ニ改メ左ノ一項ヲ加フ

郡市長ハ在郷軍人中寄留者ハ旅行ノ屆書ヲ受ケタルトキハ召集通報人ノ住所氏名ヲ記シタル紙片ヲ令狀ノ一端ニ貼附シ置キ復歸シタルトキハ之ヲ除去スヘシ

第二十二條中「出發」ヲ「召集部隊ニ到著」ニ改ム

第二十三條第二項及第三項中「憲兵」ノ下「又ハ」ヲ削ル

第二十四條第一項中「憲兵」ノ下「又ハ」ヲ削リ同條第二項ヲ左ノ如ク改ム

前項ノ應召スルコト能ハサル者其ノ事故止ミ市町村長ニ屆出テタルトキハ市長ハ聯隊區司令官、町村長ハ郡長ノ通達ニ基キ到著セシムヘキ最終期日迄ニ指定ノ地ニ到著セシメ得ルトキハ其ノ令狀ノ餘白ニ事由及到著日時ヲ記シ之ヲ本人ニ交付シテ出發セシメ否ラサルトキハ其ノ出發ヲ差止メ其ノ旨（所在不明又ハ旅行ノ爲在ルヘキ場所ニ在ラサル者ニ在リテハ其ノ事由ヲ附記シ）ヲ市長ハ聯隊區司令官及憲兵警察官吏ニ通知シ町村長ハ郡長ニ報告シ憲兵警察官吏ニ通知スヘシ

第二十七條　郡長ハ第二十三條第一項ノ報告ヲ受ケタルトキハ令狀ノ發送ヲ終リタル月日時刻及交付人員竝各町村中令狀ノ交付ヲ終リタル最終ノ月日時刻ヲ聯隊區司令官ニ通知スヘシ

第二十九條第一項中「人名」ノ下ニ「住所」ヲ加ヘ「二十五日」ヲ「三十日」ニ改ム

第三十二條中「憲兵」ノ下「又ハ」ヲ削ル

第三十三條中「憲兵」ノ下「又ハ」ヲ削ル

第三十六條　郡長ハ聯隊區司令官ヨリ復員ニ方リ召集ヲ解除セラレタル者ノ人名ノ通知ヲ受ケタルトキハ之ヲ町村長ニ達スヘシ

第三十七條　市町村長ハ第三十二條及第三十六條ノ通達ニ基キ條例第三十二條ノ規定ニ該當シタル者アルトキハ其ノ人名住所及事由ヲ聯隊區司令官及憲兵警察官吏ニ通知スヘシ

第三章ノ下「補充召集」ヲ「臨時召集」ニ改ム

第三十九條　郡市長ハ聯隊區司令官ヨリ臨時召集令狀ヲ受ケタルトキハ直ニ待命員名簿又ハ充員召集名簿ニ照較シ該名簿ニ召集部隊及到著期日ヲ記入シ待命員名簿ニ記載シアル者ニ在リテハ之ヲ充員召集名簿ニ追記シ郡長ハ其ノ令狀ヲ町村長ニ送付シ市長ハ其ノ令狀ヲ各自ニ交付スヘシ

充員召集名簿及待命員名簿ニ記載セサル者ヲ召集スル場合ニ於テハ前項ニ依リ充員召集名簿ニ追記スヘシ

郡市長ハ充員召集名簿ニ記載シアル者ノ臨時召集令狀ヲ受ケタルトキハ其ノ充員召集令狀ヲ直ニ聯隊區司令官ニ還付スヘシ

第四十條中「補充」ヲ「臨時」ニ改ム

第四十四條　市町村長ハ國民兵ノ現在員國民兵役ニ編入スヘキ者及國民軍編入ヲ許可サレタル者竝以上ノ者ニ付健康程度ヲ調査シタル結果ニ基キ國民兵人員表（様式八）及退役將校名簿（様式九）ヲ作リ市長ハ十二月十五日迄ニ聯隊區司令官ニ町村長ハ十一月三十日迄ニ郡長ニ差出スヘシ

第四十五條中「警視總監地方長官及」ヲ削ル

第四十七條中「追記スヘシ」ヲ「追記シ異動アル毎ニ戰時名簿ヲモ訂正スヘシ」ニ改ム

第五十條　市町村長ハ條例第四十七條ニ依リ國民兵召集名簿（様式第十九）ヲ調製シタルトキハ同名簿ニ基キ國民兵召集令狀（様式第十九ノ二）ニ住所兵種官等級氏名召集部隊及到著場所ヲ記入シ部隊毎ニ區分シ

保管スヘシ

第五十一條　市長ハ聯隊區司令官、町村長ハ郡長ヨリ國民兵動員令ノ達ヲ受ケタルトキハ其ノ通知ニ係ル到著日數ヲ動員令ニ示ス動員第一日ヨリ起算シテ實際ノ暦日ニ換算シ到著日時ヲ記入スヘキ令狀裏面ノ空欄ニ記入シ直ニ探定ノ方法ヲ以テ各自ニ交付スヘシ

汽車汽船ニ乘ルヘキ日時ヲ記入スヘキ令狀ニハ聯隊區司令官ノ通知ニ基キ之ヲ記入スルモノトス

第五十一條ノ二　國民兵召集ニ關シテハ第十六條乃至第十九條第二十二條乃至第二十四條第二十六條第二十七條第三十條乃至第三十八條ヲ準用ス但シ第二十四條第一項ノ屆書ハ聯隊區司令官又ハ郡長ニ差出スヲ要セス又第三十二條中待命員名簿ニ記載スルモノニ在リテハ別ニ名簿ヲ調製シテ記載スヘキモノトス

第五十一條ノ三　條例第四十九條ニ依リ臨時國民兵ヲ召集スル場合ニハ其ノ召集及解除ニ關シ本章及第三章中ノ規定ヲ準用ス

第五十三條中「演習召集」ノ下ニ「又ハ教育召集」ヲ「演習」ノ下ニ「又ハ教育」ヲ加フ

第五十六條中「出發」ヲ「到著」ニ改ム

第六十一條第三項ヲ左ノ如ク改ム

第一項ニ依リ名簿發送後召集ニ應シタル者アルトキ又ハ傷痍疾病ノ爲演習若ハ教育ニ堪ヘサル者（兵役上ノ區分ヲ記入ス）アルトキハ直ニ其ノ旨ヲ聯隊區司令官ニ通知シ前二項ノ手續ニ依リ取扱フヘシ

第六十五條　郡市長ハ前條ノ通知ヲ受ケタルトキハ郡長ハ之ヲ町村長ニ達シ市長ハ其ノ應召セサル者ノ中屆書ヲ受ケサル者ノ人名ヲ憲兵警察官吏ニ通知スヘシ

第六十六條　町村長ハ前條ノ達ヲ受ケタルトキハ其ノ應召セサル者ノ中屆書ヲ受ケサル者ノ人名ヲ憲兵警察官吏ニ通知スヘシ

第六十七條中「父母」ノ下ニ「妻子」ヲ加フ

第七十條第一項中「第一項」及同條第二項ヲ削ル

第七十一條　郡長ハ前條ノ通知ヲ受ケタルトキハ之ヲ町村長ニ達スヘシ

第七十二條　削除

第七十三條中「第二十三條」ノ下ニ「第三項ヲ除ク」ノ割註ヲ加ヘ「第二十七條ニ依リ」以下ヲ「第二十七條ニ依リ通知スル際其ノ旨ヲ附記スルモノトス」ニ改ム

第七十八條　補缺召集ニ關シテハ第二十二條第二十三條第三項第四項第二十四條第二十五條第一項第二十六條第二十八條第二十九條第一項第三十四條第五十六條乃至第五十八條第六十一條第一項第三項第六十二條第六十四條乃至第六十六條ヲ準用ス

第八十一條中「其ノ狀況ヲ悉シテ」ヲ「召略地名及其ノ在郷軍人ノ數等ヲ具シ其ノ狀況ヲ」ニ改ム

第八十六條中「憲兵」ノ下「又ハ」ヲ削ル

第八十七條中「憲兵」ノ下「又ハ」ヲ削ル

第八十八條中「憲兵」ノ下「又ハ」ヲ削ル

第九十二條　簡閱點呼ニ關シテハ第二十六條第三十四條ヲ準用ス

第九十三條　削除

第一樣式記註第五號中「例トス」ヲ「例トシ且動員區分ヲ省略スルコトヲ得」ニ改メ左ノ一號ヲ加フ

六　國民兵ノ動員令ハ本樣式ニ準ス但シ「何師團」ヲ「何師管」トシ「何動員」ノ上ニ「國民兵」ノ三字ヲ記入スルヲ例トス

第三樣式ヲ別記ノ如ク改ム

第四樣式本文中「充員」ノ下ニ「臨時」ヲ加ヘ欄外記註第一號中「補充」ヲ「臨時」ニ改ム

第五樣式及第八樣式ヲ別記ノ如ク改ム

第八樣式ノ二欄外記註第一號中「二月」ヲ「四月」ニ「一月」ヲ「三月」ニ改ム

第九樣式第十一樣式及第十二樣式ヲ別記ノ如ク改ム

附則

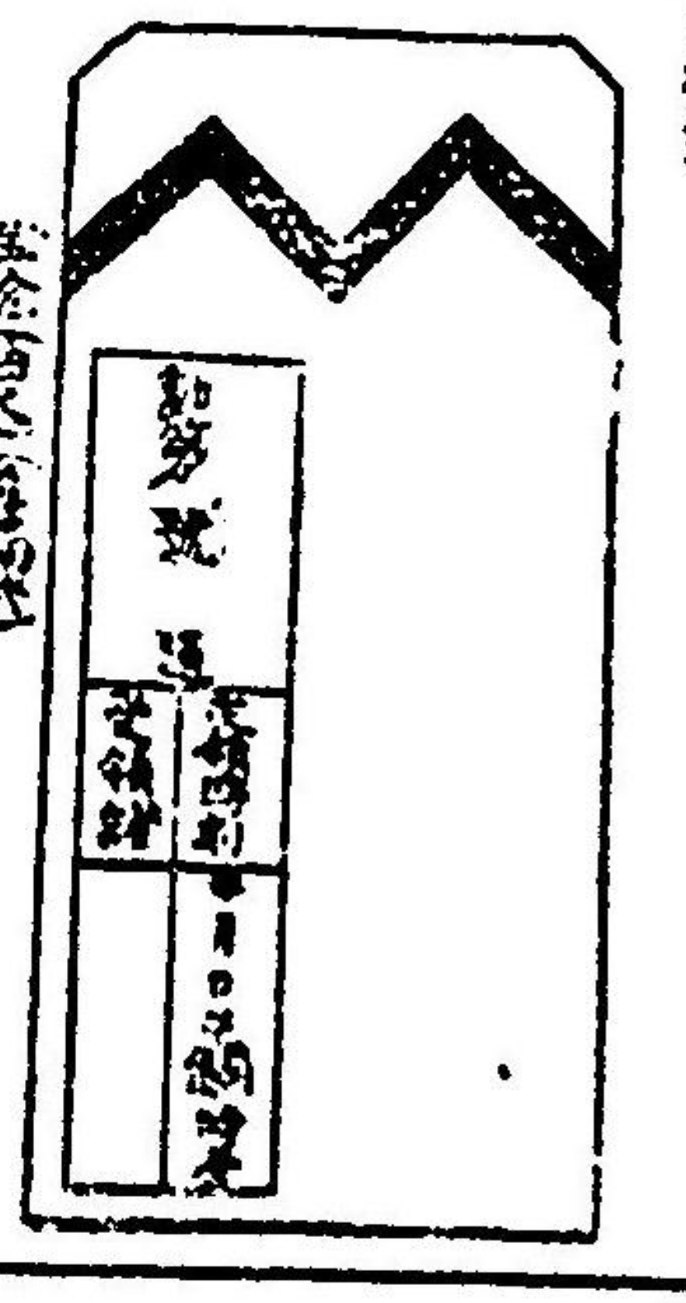
本令ハ明治四十年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

師團長ハ本令施行後六箇月以内ニ在リテハ本令改正ノ一部ニ付從前ノ規定ニ依ルコトヲ得

明治三十七年陸軍省令第十四號ハ本令施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

（別記）

第三樣式



一　封筒用紙ハ適宜白色又ハ淡鼠色ニシテ山形ハ紅色トス

二　動ノ字ノ下ニ適宜ノ符號ヲ記入スルコトヲ得

第三樣式ノ二

在郷軍人名簿

兵科	「何兵」	
族籍	華（士）族 平民	
本籍	「何府（縣）何郡（區）（市）町（村）番地」	
官等級		
氏名	「某長（次）男（兄、弟（戸主））」 「鈴　何　某」	
誕生	「何年何月何日」	
入隊	「何兵士官候補生トシテ何年何月何日何隊ヘ入隊」	
所管	「何師管」 「何聯隊區」	
適任證書	「何年何月何兵士官勤務（何兵下士）適任證書ヲ受ク」	
特業	「電信或ハ何々」	
死亡	「何年何月何日何地ニ於テ戰（病）死」	
現役	就役	「何箇年」「何年何月何日ヨリ何年何月何日ニ至ル」
	歸休	「何箇年」「右　同」
豫備役		「何箇年何箇月」「右　同」
後備役		「何箇年」「右　同」
補充兵役	就役	「何箇年何箇月」「右　同」
	教育	「何日」「右　同」
備考	「何々ノ爲何年何月何日迄服役延期」 「何々ニテ何箇月假勤」 「何年何月何日何隊ヘ充員召集ニ應シ何々等ノ戰鬪ニ參與ス何年何月何日召集解除」 「何年何月何日勤何等ニ敍セラレ何章ヲ賜ハル」 「服役滿期（病氣ノ爲常備後備役免除）ニ付何年何月何日ヨリ何年何月何日ニ至ル國民兵役」 「何年何月何日何隊ヘ演習召集何月何日召集解除」	

一　本名簿ハ美濃紙半葉一名ヲ限リ記載シ役種兵科毎ニ區分シ之ヲ一括シ見出ヲ附シ置クヘシ

二　本名簿ノ表紙ニハ「在郷軍人名簿」ト記シ左下ニ府縣郡市町村名ヲ記スヘシ

三　寄留地旅行先及召集通報人住所氏名ハ附箋ヲ用ヰルモノトス

四　第一國民兵名簿ハ本名簿ヲ轉用シ在郷軍人名簿ニ準シテ別ニ編綴シ該表紙ニハ「第一國民兵名簿」ト記載スヘシ

五　補充兵ノ輜重輸卒ニ在リテハ其ノ職業ヲ欄外上部ニ記載スヘシ

六　區畫及備考欄中「」、（）ハ記載例ヲ示ス

七　本樣式ハ名簿ノ初ニ添附シ置クヘシ

第五樣式

表面

七寸五分（曲尺）

受領證

一何月何日何隊ヘ召集ノ爲（何隊ヘ召集ノ爲何月何日何集合場ヘ到著スヘキ）充員（臨時）召集令狀

右受領ス

明治　年　月　日午前後　時　分

何府縣郡市町村

兵役官（兵種等級補充兵何兵）　何　某㊞

召集通報人其ノ他本人ニ代リ受領シタル者ハ左ニ記名捺印スヘシ

何聯隊區司令部

御中

四寸（曲尺）

四寸五分（曲尺）

充員（臨時）召集令狀

何府縣郡市町村

兵役官（兵種等級）

（補充兵何兵）　何　某

右充員（臨時）召集ヲ令セラル依テ左記日時到著地ニ參著シ此ノ令狀ヲ以テ當該召集事務所ニ屆出ヘシ

但シ何月何日午　何時何分何驛（何港）發ノ汽車（汽船）ニ乘ルヘシ

召集部隊	何　隊
到著日時	何年何月何日午前後何時
到著地	何市何區何町何隊（何集合場）

何聯隊區司令部㊞

召集ニ應スル爲汽車（汽船）ニ乘ルヘキ者ハ指定ノ日時場所以外ニ於テハ乘車（乘船）ノ準備ナキヲ注意スヘシ

乘車（乘船）切符ヲ求ムルトキ及乘車（乘船）スルトキハ此ノ令狀ヲ係員ニ示スヘシ

五寸（曲尺）

裏

召集旅費金何圓何拾錢

右何所ニ於テ支給ス依テ此ノ令狀ヲ係員ニ示シテ受領スヘシ

代人ヲシテ受領セシムルトキ爲シ得レハ其ノ委任狀中ニ召集部隊及到著地ヲ記入スヘシ

一　用紙ハ適宜ニシテ淡紅色トス

二　字及番地ハ必要ニ應シ記入スルモノトス

三　到著地ハ何市何區何町又ハ何府縣何郡何町村ノ何ト詳密ニ記載スヘシ

四　但書及欄外記註ハ一例ヲ示シタルニ過キス聯隊區司令部ニ於テ必要ト認メタル事項ヲ記入スヘキモノトス

五　應召員ノ到著時刻ハ師團長ノ計畫セル應召員交付回數ニ基キ適宜之ヲ定ムルモノトス

六　下士適任證書所持者及特業者ハ氏名ノ右肩ニ（下　證）（木）（喇）等又補充兵ニ在リテハ既教育ナルト未教育ナルトニ依リ（已）（未）ノ符號ヲ圏書スルモノトス

七　休職停職將校同相當官准士官ノ令狀ニ限リ發送ノ年月日ヲ記入スルモノトス

八　令狀中氏名及召集部隊名到著日時到著地等ハ特ニ大ナル文字ヲ用ヰ且明瞭ニ記入スヘシ

九　受領者印顆ヲ所持セサルトキハ花押又ハ拇印ヲ爲スモ妨ケナシ

十　外國ニ居住又ハ旅行中ノ者ノ到著時日ハ師團長ノ規定ニ基キ之ヲ記入スルモノトス

第五樣式

面

一　色ハ適宜トス

二　聯隊區司令部ニ於テハ令狀裏面ニ應召員及應召員ニ代リ令狀ヲ受領スヘキ者ノ心得ト爲ルヘキ事項ヲ記入スルコトヲ得

第八樣式ノ一

何郡市町村第一國民兵人員表

明治何年何月調
何郡市役所町村役場

元兵種	官等	健康程度＼年齢	何歳			計
歩兵	下士	甲				
		乙				
	兵卒	甲				
		乙				
	補充兵	甲				
		乙				
	計					
輜重兵	下士	甲				
		乙				
	兵卒	甲				
		乙				
	計					
衛生部	下士	甲				
		乙				
	看護手	甲				
		乙				
	計					
經理部	下士	甲				
		乙				
	計					
諸職工	何工長	甲				
		乙				
	計					
海軍兵	下士	甲				
		乙				
	計					
合計						

一　本表人員ハ元下士以下ノ者ヲ記ス

二　本表年齢ノ區畫ニハ月數ヲ記載セス各年齢ニ相當スル人員ハ翌年四月一日ヨリ翌々年三月三十一日迄ニ滿年ニ達スル者ヲ記ス

三　健康程度ノ欄中甲ハ應召後ノ勤務ニ堪ユル者乙ハ傷痍疾病等ノ爲勤務ニ適セサル者ヲ記ス

四　國民軍編入許可ノ元下士上等兵看護手ノ人員ハ朱ヲ以テ又元下士兵卒中特業ヲ有セシ人員ハ符號ヲ附シ相當欄中ニ別記スヘシ

五　海軍卒ノ區畫ニハ元雜卒職工ヲ合記ス

六　本表人員ニ異動ヲ生スルモ其ノ時時訂正ヲ要セス

第九樣式

何郡市町村退役將校名簿

明治何年何月調
何郡市役所町村役場

官名　氏名	摘要	健康程度	年齢	住所
歩、大尉　何　某		甲（乙）	何歳	
一、軍醫				

一　本表ノ年齢ハ月數ヲ記セス調査スル月ノ年齢ヲ記ス但シ月計算ニ依ル

二　健康程度ノ欄中甲ハ召集後ノ勤務ニ堪ユル者乙ハ傷痍疾病等ノ爲勤務ニ適セサル者ヲ記ス

三　國民軍編入許可ノ將校同相當官准士官ハ其ノ氏名ノ右肩ニ「志」ノ字ヲ朱書スヘシ

第九樣式ノ二

何師管國民兵何動員　到着日數何日　何月何日
何隊國民兵召集名簿　到着時刻午前（後）何時　何郡（市）何町（村）役場

元兵科官等級氏名	應否	摘要	年齢	住所

一　此ノ名簿ハ各隊毎ニ之ヲ作リ聯隊區司令部ニ於テハ充員召集名簿ニ準シテ適宜ニ編綴シ表紙ヲ附スヘシ

二　國民軍編入許可者ハ「志」ノ字ヲ氏名ノ左肩ニ又元下士兵卒中特業ヲ有セシ者ハ該特業ノ頭字例ヘハ（喇）（蹄）（木）等ノ符號ヲ氏名ノ右肩ニ朱書スヘシ

三　第二國民兵ニ在リテハ元六週間現役兵タリシ者ハ（六）幹部適任證書ヲ有スル者ハ（幹）ノ符號ヲ氏名ノ右肩ニ朱書スヘシ

四　摘要ノ區畫ニハ名簿調製後ニ於ケル身上ノ異動及召集後ノ職務上參考ト爲スヘキ件等ヲ摘記ス

第九樣式ノ三

表　面

七寸五分（曲尺）

受領證

一　何月何日何隊ヘ召集ノ（何隊ヘ召集ノ爲何月何日何集合場ヘ到着スヘキ）國民兵召集令狀

右受領ス

明治　年　月　日午前（後）　時　分

何府縣郡市町村
元兵種官等級　何　某　印

召集通報人其ノ他本人ニ代リ受領シタル者ハ左ニ記名捺印スヘシ

府縣郡市町村役場
御中

四寸五分（曲尺）

四寸（曲尺）

國民兵召集令狀

何府縣何郡市町村
元兵種官等級　何　某

右國民兵召集ヲ令セラル依テ左記日時到着地ニ參着シ此ノ令狀ヲ以テ當該召集事務所ニ屆出ヘシ

但シ何月何日午　何時何分何驛（何港）發ノ汽車（汽船）ニ乘ルヘシ

召集部隊	何　隊
到着日時	何年何月何日午前（後）何時
到着地	何府縣何郡何町何隊（何集合場）

何府縣郡市町村役場　印

乘車（乘船）切符ヲ求ムルトキ及乘車（乘船）スルトキハ此ノ令狀ヲ係員ニ示スヘシ

五寸（曲尺）

一　用紙ハ適宜ニシテ淡紅色トス

二　字及番地ハ必要ニ應シ記入スルモノトス

三　國民軍編入許可者ハ「志」ノ字ヲ氏名ノ左肩ニ又元下士兵卒中特業ヲ有セシ者ハ該特業ノ頭字例ヘハ(喇)(蹄)(木)等ノ符號ヲ第二國民兵ニ在リテハ元六週間現役兵タリシ者ハ(六)幹部適任證書所持者ハ(幹)ノ符號ヲ氏名ノ右肩ニ登書スヘシ

四　到着地ハ何市何區何町又ハ何府縣何郡何町村ノ何ト詳密ニ記載スヘシ

五　但書及欄外記註ハ一例ヲ示シタルニ過キス必要ト認メタル事項ハ聯隊區司令官ノ指示ニ基キ市町村長ニ於テ之ヲ記入スルモノトス

六　應召員ノ到着時刻ハ聯隊區司令官ノ指定ニ基キ之ヲ記入スルモノトス

七　召集部隊ノ下ニハ必要ニ應シ其ノ所在地名ヲ括弧内ニ記載スヘシ

八　受領者印顆ヲ所持セサルトキハ花押又ハ拇印ヲ爲スモ妨ナシ

第九樣式ノ三

召集旅費金何圓何拾錢

右何所ニ於テ支給ス依テ此ノ令狀ヲ係員ニ示シテ受領スヘシ

代人ヲシテ受領セシムルトキ爲シ得レハ其ノ委任狀中ニ召集部隊及到着地ヲ記入スヘシ

裏面

一　色ハ適宜トス

二　市町村役場ニ於テハ令狀裏面ニ應召員及應召員ニ代リ令狀ヲ受領スヘキ者ノ心得ト爲ルヘキ事項ヲ記入スルコトヲ得

第十一樣式

表面

七寸五分(曲尺)

受領證

一何月何日ヨリ何日間何隊ヘ召集ノ演習(教育)召集令狀

右受領ス

明治　年　月　日午前/後　時　分

何府縣郡市町村

兵役官(兵種等級補充兵何兵)何　某㊞

召集通報人其ノ他本人ニ代リ受領シタル者ハ左ニ記名捺印スヘシ

何聯隊區司令部

御中

四寸(曲尺)

演習(教育)召集令狀

何府縣郡市町村

兵役官(兵種等級)
(補充兵何兵)　何　某

右演習(教育)ノ爲何日間召集ヲ令セラル依テ左記日時到着地ニ參著シ此ノ令狀ヲ以テ當該召集事務所ニ屆出ヘシ

召集部隊	何　隊
到着日時	何年何月何日午前/後何時
到着地	何市何區何町何隊

何聯隊區司令部㊞

四寸五分(曲尺)

五寸(曲尺)

一　字及番地ハ必要ニ應シ記入スルモノトス

二　到着地ハ何市何區何町又ハ何府縣何郡何町村ノ何ト詳密ニ記載スヘシ

三　受領者印顆ヲ所持セサルトキハ花押又ハ拇印ヲ爲スモ妨ナシ

第十一樣式

裏面

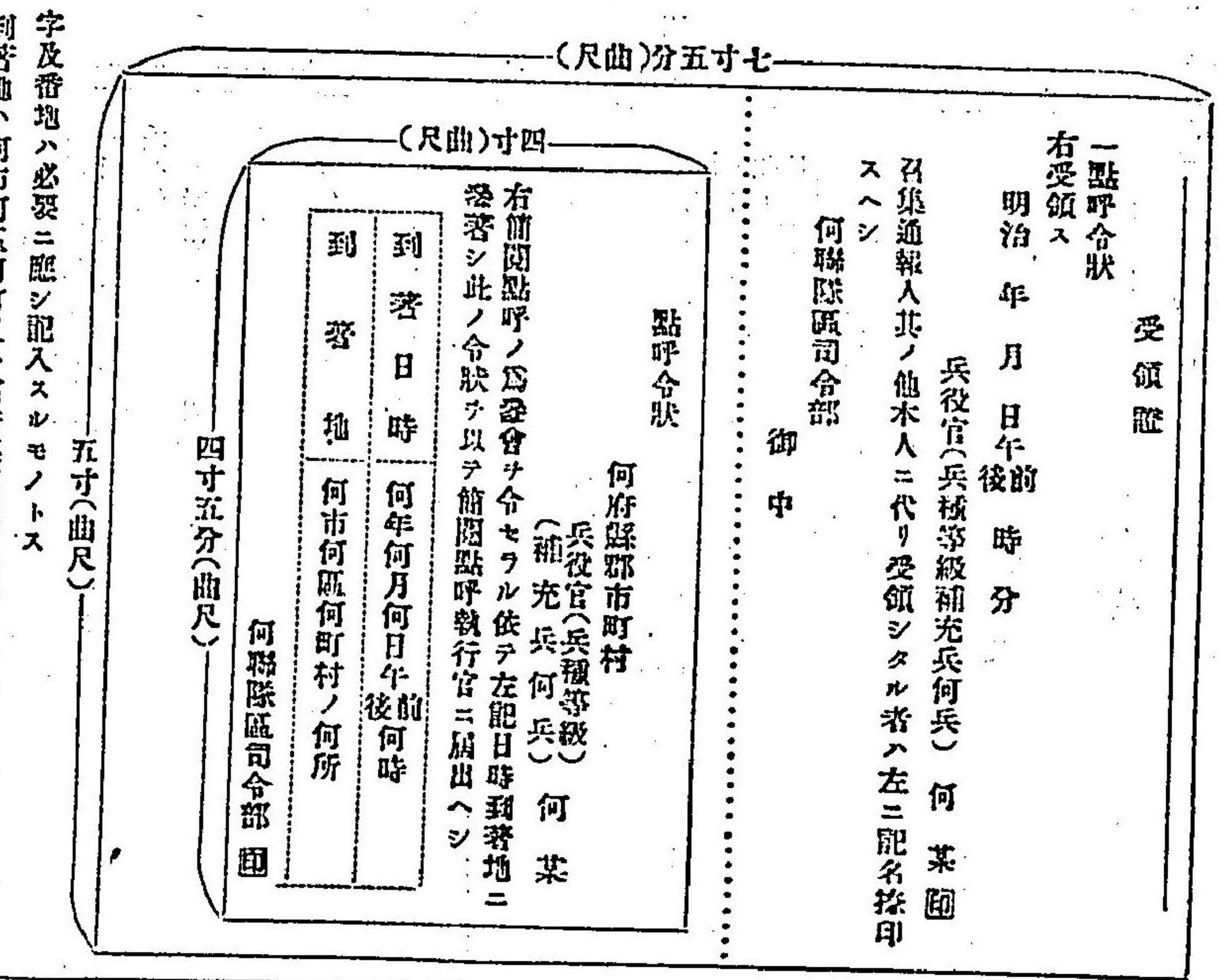
召集旅費金何圓何拾錢

右何所ニ於テ支給ス依テ此ノ令狀ヲ係員ニ示シテ受領スヘシ

代人ヲシテ受領セシムルトキ爲シ得レハ其ノ委任狀中ニ召集部隊及到着地ヲ記入スヘシ

聯隊區司令部ニ於テハ應召員及應召員ニ代リ令狀ヲ受領スヘキ者ノ心得ト爲ルヘキ事項ヲ記入スルコトヲ得

第十二樣式



受領證

一點呼令狀

右受領ス

明治　年　月　日午前後　時　分

兵役官（兵種等級補充兵何兵）何　某 印

召集通報人其ノ他本人ニ代リ受領シタル者ハ左ニ記名捺印スヘシ

何聯隊區司令部

御中

點呼令狀

何府縣郡市町村

兵役官（兵種等級）
（補充兵何兵）何　某

右簡閲點呼ノ爲參會ヲ命セラル依テ左記日時到着地ニ參著シ此ノ令狀ヲ以テ簡閲點呼執行官ニ屆出ヘシ

到着日時	何年何月何日午前後何時
到着地	何市何區何町村ノ何所

何聯隊區司令部 印

一　字及番地ハ必要ニ應シ記入スルモノトス

二　到着地ハ何市何區何町又ハ何府縣何郡何町村ノ何所ト詳密ニ記載スヘシ

三　本令狀ノ裏面ニハ聯隊區司令部ニ於テ點呼受令者及之ニ代リ令狀ヲ受領スヘキ者ノ心得ト爲ルヘキ事項ヲ記入スルコトヲ得

四　受領者印顆ヲ所持セサルトキハ花押又ハ拇印ヲ爲スモ妨ナシ

●補充兵役步兵ノ教育召集ハ當分行ハス

明治四十年十月三十一日
陸軍省陸達第七十二號

補充兵役步兵ノ教育召集ハ明治四十一年以降當分之ヲ行ハス

●近衛師團ニ於テ演習召集及教育召集ヲ施行スヘキ者

明治四十年十二月十二日
陸軍省陸達第八十二號

近衛師團ニ於テ演習召集及教育召集ヲ施行スヘキ者左ノ通定ム

一、第一、第十四師管ニ在籍スル補充兵ニシテ戰時近衛師團ノ要員ニ充ツヘキ者ハ近衛師團ニ於テ教育ヲ爲サシム但シ鐵道聯隊、電信大隊、氣球隊ノ要員ニ充ツヘキモノハ各師管在籍者トモ當該諸隊ニ於テ教育ヲ爲サシム

二、第一、第十四師管ニ在籍ノ者ニシテ近衛師團ニ於テ現役ヲ終リタル豫備役後備役將校同相當官准士官下士兵卒及近衛師團ニ於テ教育ヲ受ケタル補充兵ハ近衛師團ニ於テ勤務演習ヲ爲サシム但シ鐵道聯隊、電信大隊、氣球隊ニ於テ現役ヲ終リタル者（後備ノ將校相當官下士兵卒ヲ除ク）及同諸隊ニ於テ教育ヲ受ケタル補充兵ハ各師管在籍者トモ當該諸隊ニ於テ勤務演習ヲ爲サシム

三、豫備役後備役工兵科士官准士官下士兵卒中習電信教導大隊及工兵大隊ニ於テ電信術ヲ修業シタル者ハ電信大隊ニ於テ勤務演習ヲ爲サシム

四、本鄉聯隊區、甲府聯隊區管區內（山梨縣ヲ除ク）ニ寄留シ第一師管ニ於テ勤務演習ヲ爲サムトスル者アルトキハ近衛師團ニ於テ勤務演習ヲ爲サシム

附則

明治三十二年陸達第二十八號ハ之ヲ廢止ス

●臺灣在鄉陸軍軍人戰時召集規程中改正

明治四十年五月四日
臺灣總督府令第二十九號

明治三十六年八月十二日府令第八十七號臺灣在鄉陸軍軍人戰時召集規程中左ノ通改正ス

第八條第二項削除

第十二條中「戶籍上自己ノ異動ヲ生シタルトキハ（戶籍上自己ノ異動ノ通知ヲ受ケタル者ハ之ヲ知リタル日ヨリ）」ヲ「第九條ノ屆出事項ニ異動ヲ生シタルトキハ其ノ事項ヲ」ニ改ム

第十三條第一項中「戶籍上本人ノ」ヲ「第九條ノ屆出事項ニ」ニ改ム

第十七條中但書ヲ左ノ如ク改ム

但シ動員下令後缺員ヲ補充スル爲若ハ當該部隊ノ要員ニ充ツル爲ノ召集ハ臨時之ヲ命令ス

第十八條中但書ヲ左ノ如ク改ム

但シ演習召集中ノ者ニ對シテハ其ノ事由及到着日時ヲ召集部隊長ニ通知（遠隔ノ地ナルトキハ電信ヲ以テ）スルモノトス

第二十三條中「聯隊長ヨリ受ケタル令狀ヲ」ヲ「令狀ニ所要ノ記入ヲ爲シ之ヲ」ニ改ム

樣式ヲ別記ノ如ク改ム

附則

本令ハ明治四十年六月一日ヨリ之ヲ施行ス

別記

（樣式）

召集ニ關スル居住屆

本籍地	府（縣）郡（市）町（村）番地
前居住地	廳、堡、街（庄）（社）番戶（臺灣ニ於テ居住地ヲ變更シタル者ニ限ル）
居住地	廳、堡、街（庄）（社）番戶
居住年月日	何年何月何日
徵集年（下士及下士候補者ニシテ陸軍諸生徒ヨリ出身シタル者ハ生徒ト爲リシ年月）	何年（何年何月）
任官經歷	何年何月何日少尉 何年何月何日中尉（准士官以上ニ限ル）
下士初任年月日	何年何月何日（下士ニ限ル）
陸軍出身ノ區分	一年志願兵又ハ教導團生徒或ハ下士候補生等（特進昇進ノ者ハ記入ヲ要セス）
休職（停職）ニ入リタル年月日	何年何月何日（准士官以上ニ限ル）
豫備役編入年月日	何年何月何日
後備役編入年月日	何年何月何日
現役（召集）最終職名	步兵第一聯隊副官又ハ工兵第三大隊附等（准士官以上ニ限ル）
所轄聯隊區名	山口、仙臺等（下士以下ニ限ル）
職業	何商、何官衙何掛、何會社技手、通信、鐵道工夫等
特業	測量學、石版學、寫眞術、喇叭、鍛鐵、木鍛、蹄鐵、鐵工術、通信、電信建築術等現役中特別ノ修得ヲ爲シタル者
生年月日	何年何月何日
師團長（聯隊區司令官）ヘ屆出年月日	何年何月何日（現役ヲ退キ又ハ居住地ヲ變更シタル者ハ其ノ年月日）

右及御屆候也

年　月　日

豫備（後備）（休職）（停職）（歸休）
陸軍何兵何官（等級）何　某 印

何師團長何某殿

●海軍召集條例施行細則中改正

明治四十年五月一日
海軍省令第五號

海軍召集條例施行細則第五十三條中「臺灣」ヲ「臺灣及樺太」ニ改ム

第九章　教育

●陸軍召募規則中改正

明治四十年三月六日
陸軍省令第三號

陸軍召募規則中左ノ通改正ス

第五十一條中特待生ノ下「初度被服料金十圓」ヲ「初度被服料金二十五圓」ニ「毎月納金三圓五十錢」ヲ「毎月納金四圓」ニ自費生ノ下「初度被服料金三十圓」ヲ「初度被服料金三十五圓」ニ「毎月納金六圓五十錢」ヲ「毎月納金七圓」ニ改ム

附則

本令ハ明治四十年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

●陸軍中央幼年學校本科生徒入學期日及納金ニ關スル規定中改正

明治四十年三月六日
陸軍省告示第五號

明治三十六年陸軍省告示第十五號陸軍中央幼年學校本科生徒入學期日及納金ニ關スル件中左ノ通改正シ本年四月一日ヨリ施行ス

第三項中特待生ノ下ニ「初度被服料金拾圓」ヲ「初度被服料金貳拾五圓」ニ「毎月納金參圓五拾錢」ヲ「毎月納金四圓」ニ自費生ノ下「初度被服料金參拾圓」ヲ「初度被服料金參拾五圓」ニ改ム

●陸地測量部修技所生徒募集規

則中改正

明治四十年四月二日
陸軍省令第六號

明治三十六年陸軍省令第三號陸地測量部修技所生徒募集規則中左ノ通改正ス

第二條第一號中「二十八年」ヲ「三十二年」ニ改ム

第三條　試驗科目左ノ如シ

一　作文　漢字交リ文及書簡文
二　地理　內國及外國（中學程度）
三　數學　算術（開立迄）代數（比例迄）幾何（平面及立體初步）
四　物理　全般（中學程度）
五　圖畫　鉛筆畫

第五條中「五月十五日」ヲ「八月盡日」ニ改ム

第七條中「七月盡日」ヲ「十月十日」ニ改ム

●法科大學陸軍經理學校員外學生修學規則

明治四十年十一月二十日
陸軍省陸達第七十六號

法科大學陸軍經理學校員外學生修學規則左ノ通定ム

法科大學陸軍經理學校員外學生修學規則

第一條　陸軍經理學校員外學生ヲ東京帝國大學法科大學ニ囑託シ教授セシム之ヲ法科大學陸軍員外學生ト稱ス

第二條　法科大學陸軍員外學生ハ專ラ高等ナル法科ヲ講究シ陸軍經理ノ發達ニ資スルモノトス

第三條　陸軍經理學校長ハ員外學生ノ修ムヘキ學科ヲ定メ陸軍大臣ニ上申シ陸軍大臣ハ許否決裁ノ上豫メ之ヲ東京帝國大學總長ニ通報ス

第四條　陸軍經理學校條例第十五條第二項及第十七條ノ規定ハ員外學生ニモ亦適用ス但シ病氣其ノ他ノ事故ニ因ル闕席屆ハ直ニ關係大學長ニ出シ尙陸軍經理學校長ニ屆出ツルモノトス

第五條　員外學生ノ願出ニシテ學業ニ關スルモノハ陸軍經理學校長之ニ所要ノ意見ヲ附シ關係大學長ニ移ス

第六條　員外學生ハ陸軍經理學校ヲ卒業シタル年ノ九月ニ於テ法科大學ニ入學シ該大學諸學科中ノ一科目ヲ專修スルモノトス其ノ修學期ハ約四箇年トス

第七條　陸軍經理學校長ハ員外學生修學ノ狀況及其ノ成績ヲ詳カニシ學生監督ノ責ニ任ス

第八條　員外學生ハ帝國大學夏期休暇中東京ニ於ケル陸軍官衙又ハ軍隊ノ經理事務ヲ實視研究セシムルコトアリ

第九條　員外學生中病氣其ノ他ノ事故ニ因リ所定ノ時期ニ帝國大學ニ入學シ得サル者又ハ所定ノ期限ニ於テ大學ノ科程ヲ修了シ得サル者アルトキハ陸軍經理學校長事由ヲ具シ陸軍大臣ノ認可ヲ受ケ入學又ハ修學期ヲ延ヘスコトヲ得

第十條　員外學生中成業ノ目途ナキ者ハ陸軍經理學校長理由ヲ具シ陸軍大臣ノ認可ヲ受ケ退學セシム

第十一條　陸軍經理學校長ハ修學期末ニ於テ員外學生修學ノ成績ヲ調査シ其ノ考科表ヲ陸軍大臣ニ進達シ原所管ニ復歸ヲ命ス

第十章　兵役

第一款　徵兵

●北海道沖繩縣及小笠原島ニ徵兵令施行制中改正

明治四十年七月六日
勅令第二百五十五號
副署　總、陸、海、內、大臣

朕明治二十八年勅令第百二十六號及明治三十年勅令第二百五十八號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十八年勅令第百二十六號中第二條、第三條及第四條並明治三十年勅令第二百五十八號中第二項ヲ削ル

附則

本令ハ明治四十年九月一日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際明治二十八年勅令第百二十六號第二條及明治三十年勅令第二百五十八號第二項ニ依リ徵集猶豫中ノ者ニ關シテハ仍從前ノ規定ニ依ル

●徵兵事務條例中改正

明治四十年七月六日
勅令第二百五十四號
副署　總、陸、海、內、大臣

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ徵兵事務條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

徵兵事務條例中左ノ通改正ス

第三條　徵募區ハ一郡一市又ハ一島嶼ノ管轄區域ヲ以テ一區ト爲ス但シ北海道ニ在リテハ支廳ノ管轄區域、沖繩縣ノ區ニ在リテハ區ヲ以テ一區ト爲シ一市ニシテ二聯隊區ニ分屬スルモノハ各別ニ一區ト爲ス

東京市、京都市、大阪市ニ於テハ更ニ徵募區ヲ檢査區ニ分チ區ヲ以テ檢査區ト爲ス

第四條　步兵隊ノ兵員ハ聯隊每ニ其ノ師管ノ一聯隊區ヨリ、其ノ他ノ兵員ハ其ノ師管各聯隊區ヨリ之ヲ徵集ス但シ要員銓試上ノ必要ニ依リ他ノ聯隊區又ハ他ノ師管ヨリ之ヲ徵集スルコトヲ得

徵兵區ヲ有セサル聯隊ノ兵員ハ各師管又ハ數師管ヨリ之ヲ徵集ス

警備隊ノ兵員ハ其ノ警備隊區ヨリ之ヲ徵集ス

海軍兵員ハ各師管內沿海及島嶼ヲ包括スル聯隊區及沖繩警備隊區ヨリ之ヲ徵集ス

第八條第一項中割註ヲ削ル

第十六條第一項割註中「及北海道」ヲ削ル

第十七條　師管徵兵官タル師團長、師管徵兵署官タル師團軍醫部長遠隔ノ地ニ在ル爲其ノ職務ヲ行ヒ難キ場合ニ於テハ必要ニ應シ陸軍大臣他ノ師團長又ハ師團軍醫部長ヲ指定シテ其ノ職務ヲ行ハシムルコトヲ得

第二十一條第一項中割註ヲ削リ第二項割註中「及北海道」ヲ削ル

第二十二條第一項但書ヲ左ノ如ク改ム

但シ地方ノ狀況ニ依リ二箇所以上ノ地ニ逐次開設シ又ハ一徵募區若ハ一檢査區ノ徵兵署ヲ他ノ徵募區若ハ檢査區內ニ設クルコトヲ得

第二十三條第一項ニ左ノ但書ヲ加フ

但シ前條第一項但書ノ場合ニ於テハ豫メ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ヨリ師管徵兵官ノ認可ヲ受クヘシ

第二十七條ニ左ノ但書ヲ加フ

但シ徵兵令第十二條ニ依ル陸軍現役兵志願者ヲ採用シタルトキハ其ノ名簿ヲ徵集名簿ニ添附スヘシ

第三十八條中「及明治二十八年勅令第百二十六號第二條」ヲ削ル

第四十二條第二項第三項ヲ左ノ如ク改ム

警備隊兵ノ入營ハ二期ニ分チ其ノ第一期ハ徵募年ノ十二月一日、第二期ハ翌年六月一日トシ輜重輸卒ノ入營ハ四期ニ分チ其ノ第一期ハ徵募年ノ十二月一日、第二期ハ翌年三月一日、第三期ハ同年六月一日、第四期ハ同年九月一日トス

第七師管、第八師管、第九師管及第十三師管ニ於ケル輜重輸卒ノ入營ハ三期ニ分チ其ノ第一期ハ徵募年ノ翌年三月一日、第二期ハ同年六月一日、第三期ハ同年九月一日トス

第四十三條　削除

第四十六條　現役兵入營前若ハ入營後ニ於テ死亡、疾病、犯罪其ノ他ノ事故ニ依リ又ハ第四十二條第一項但書ノ期日ヲ過クルモ入營シ難キ者アルニ依リ闕員ヲ生シタルトキハ徵募年ノ翌年一月三十一日迄ニ其ノ徵募區同兵種ノ補充兵ヲ以テ徵集順序ニ從ヒ補充ス但シ警備隊兵及輜重輸卒ニ在リテハ入營スヘキ月ノ十日迄ニ次期入營スヘキ者ヲ繰リ上ケ入營セシメ其ノ最終期ニ於テハ前期ニ繰リ上ケタル闕員ト其ノ期ノ闕員トヲ補充ス又看護卒ニ在リテハ入營スヘキ月ノ十日迄ニ補充スルモノトス

徵兵令第十二條ニ依リ陸軍現役兵ニ採用シタル者闕員ト爲リタル場合ノ補充ハ之ヲ採用シタル聯隊區又ハ警備隊區內ニ於ケル同兵種ノ補充兵ヲ以テ徵集順序ニ從ヒ補充ス

第一項ノ場合ニ於テ其ノ徵募區ヨリ補充スルコト能ハサルトキハ聯隊區又ハ警備隊區內他ノ徵募區ヨリ、第一項又ハ第二項ノ場合ニ於テ其ノ聯隊區又ハ警備隊區ヨリ補充スルコト能ハサルトキハ師管內他ノ聯隊區又ハ警備隊區ヨリ、其ノ師管ヨリ補充スルコト能ハサルトキハ他ノ師管ヨリ之ヲ補充スルコトヲ得其ノ補充ハ總テ徵集順序ニ依ルモノトス

前二項ニ依ル補充員ノ配賦ハ各徵募區、各聯隊區又ハ警備隊區、各師管同兵種補充兵ノ總數ヲ準トシ比例ヲ以テ之ヲ定ム

臨時ニ多數ノ闕員ヲ生シタル場合ニ於テハ第一項ノ期日ニ拘ラス前諸項ノ例ニ依リ各年次ニ於ケル現役兵ノ闕員ヲ補充スルコトヲ得

第四十九條第一項中「島司郡市長」及「聯隊區司令官」ノ上ニ「寄住地」ヲ加フ

第五十一條　徵兵令第十二條ニ依リ現役ニ服セムコトヲ志願スル者ハ其ノ願書ニ戶主及親權者連署シ身元證明書ヲ添ヘ市町村長ノ奧書證印ヲ受ケ徵兵檢査ノ際任意ノ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ニ願出テ身體檢査ヲ受クヘシ但シ海軍兵志願者ニ在リテハ九月一日迄ニ鎭守府ニ願出テ許可ヲ受クルカ又ハ徵兵檢査ノ際聯隊區徵兵署又ハ警備隊區徵兵署ニ申立テ身體檢査ヲ受ケ合格者ハ其ノ合格證書ヲ添ヘ鎭守府ニ願出ツルモノトス

檢査及入營ノ爲往復スル旅費ハ自辨トス

第一項ノ出願者中陸軍兵志願者ハ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ニ於テ本人希望ノ兵種隊號ヲ登錄シ配賦要員ニ充テ得ヘキ者ニ限リ之ヲ許可シ本人本籍地所管ノ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ニ通知スヘシ

第五十二條　前條ニ依リ服役ヲ許可シタル者入營シタルトキハ當該隊長又ハ鎭守府兵事官ヨリ本籍地ノ市町村長ニ通知スヘシ

第五十三條　他ノ徵募區ニ寄留スル者ハ願ニ依リ其ノ地ニ於テ身體檢査ヲ受クルコトヲ得

前項ニ依リ身體檢査ヲ受ケタル者ハ寄留地徵募區ノ壯丁ト合シテ抽籤ヲ行フコトヲ得

第五十四條割註中「以下同シ」ヲ削ル

第五十六條　削除

第五十七條第二項中「警備隊區司令官」ヲ「警備隊司令官」ニ改ム

第九十八條第一項ヲ左ノ如ク改ム

傷痍疾病、犯罪若ハ所在不明等ノ爲又ハ志願兵

出願者ニシテ其ノ檢査ノ爲徵兵檢査ヲ受ケ難キ場合ニ於テハ本人ヨリ、本人屆出ヲ爲シ得ヘカラサルトキハ家事擔當者ヨリ書面ヲ以テ檢査當日迄ニ島司郡市長ニ屆出ツヘシ其ノ傷痍疾病ノ者ハ醫師ノ診斷書ヲ添フヘシ

第五十八條ノ二第一項中「及徵兵令第十三條第五項ニ該當スル者」ヲ「、徵兵令第十三條第五項ニ該當スル者、身體檢査前ロ體檢査ヲ終リタル徵募區ニ轉籍シタル者其ノ他其ノ年徵兵檢査ヲ受クヘキ者」ニ改メ同條第二項ヲ左ノ如ク改ム

前項ニ依リ身體檢査ヲ爲シタル者ノ中抽籤ヲ要スル者ニ付テハ第九十三條ニ依リ寄留地ニ於テ身體檢査ヲ受ケタル者ノ例ニ依ル

第六十條ニ左ノ但書ヲ加フ

但シ徵兵令第十二條ニ依リ現役ニ服スル者ノ入營旅費ハ此ノ限ニ在ラス

第六十三條第一項中「其ノ願出」以下ヲ「其ノ取扱ハ第五十三條ニ依リ寄留地ニ於テ身體檢査ヲ受クル者ノ例ニ依ル」ニ改ム

第六十五條　北海道千島、伊豆七島及小笠原島ニ於ケル聯隊區徵兵官タル聯隊區司令官ノ職務ハ聯隊區副官又ハ他ノ將校ヲシテ臨時之ヲ行ハシムルコトヲ得

北海道千島、伊豆七島及小笠原島ニ於ケル徵兵事務執行ノ際ハ第十四條ノ規定ニ依ラス軍醫一名ヲ以テ聯隊區徵兵醫官ト爲シ聯隊區徵兵副醫官ヲ置カサルコトヲ得

第六十六條　本令中郡役所トアルハ北海道ニ在リテハ支廳、市役所トアルハ北海道及沖繩縣ニ在リテハ區役所、警備隊司令官トアルハ沖繩警備隊區ニ在リテハ警備隊區司令官、郡長郡書記トアルハ北海道ニ在リテハ支廳長支廳屬、市長市書記トアルハ北海道及沖繩縣ニ在リテハ區長、區書記、町村長トアルハ町村制ヲ施行セサル地ニ在リテハ戸長其ノ他町村長ニ準スヘキ者ニ該當ス

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

徵兵事務條例細則ハ之ヲ廢止ス

本令施行ノ際徵兵令第十二條ニ依リ陸軍現役ニ服スルコトノ許可ヲ受ケ未タ入營セサル者ハ更ニ本令ノ規定ニ依リ願出ツヘキモノトス

砲兵輸卒及輜重輸卒ノ入營期日ニ關スル改正ハ明治四十年十二月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治二十八年勅令第百二十六號第二條及明治三十年勅令第二百五十八號第二項ニ依リ徵集ヲ猶豫セラルル者ニ關シテハ仍從前ノ規定ニ依ル

●徵兵事務條例施行細則中改正

明治四十年二月九日
陸軍省令第二號

徵兵事務條例施行細則中左ノ通改正ス

第十七條中「甲乙兩種」ヲ「甲種、第一乙種、第二乙種」ニ改ム

第二十二條第一號ノ割註ヲ「二人以上ナルトキハ年齡ノ順序同年齡ノ者ハ抽籤ノ順序ニ依ル（第二號第三號第四號第六號第七號第八號第十號第十一號第十二號亦同シ）」ニ、第五號ノ割註ヲ「呼出ノ順序ニ從フ（第九號第十三號亦同シ）」ニ、第六號第七號第八號第九號中「乙種」ヲ「第一乙種」ニ改メ第九號ノ次ニ左ノ四號ヲ加フ

十　第二乙種合格者ニシテ徵兵令第二十八條ニ當ル者

十一　第二乙種合格者ニシテ徵兵令第十三條第五項及第二十三條ニ當リ抽籤ノ法ニ依ラスシテ徵集スル者

十二　第二乙種合格者ニシテ徵兵令第二十七條ニ當リ徵集スル者

十三　第二乙種合格者ニシテ抽籤ノ者

第五十五條　削除

第一樣式、第四樣式、【第五樣式】、第六樣式中「（乙）」ヲ「（第一乙）（第二乙）」ニ改ム

第一樣式中「（[illegible]）」ノ欄ノ次ニ「（[illegible]）」ノ欄ヲ加ヘ欄外第四號中「第何項、第五項第九項ヲ除ク」ヲ「第何項（第五號第九號第十三號ヲ除ク）」ニ改ム

第二樣式裏面第一號ヲ左ノ通改ム

一　本證書ハ翌年假決又ハ終決ノ前日迄其ノ效ヲ有スルモノトス但シ徵兵令第二十三條ニ該當スル者ハ翌年假決又ハ終決前ト雖其ノ事故止ムトキハ同時ニ效ヲ失フモノトス

第七樣式ノ四中「乙種」ヲ「第一乙種」ニ改メ其ノ欄ノ下ニ「第二乙種」ノ一欄ヲ加フ

第七樣式ノ五、第七樣式ノ六中「乙種」ヲ「第一乙種」ニ改メ其ノ欄ノ次ニ「第二乙種」ノ一欄ヲ加フ

附　則

本令施行前ニ於ケル乙種合格者ノ編入順序ニ關シテハ從前ノ規定ニ依ル

明治四十年七月六日
陸軍省令第十號

徵兵事務條例施行細則中左ノ通改正ス

第一條　條例第四條第一項但書及同條第二項ニ依リ兵員徵集區域ヲ定ムルコト左ノ如シ

近衞ノ步兵隊及騎兵隊ノ兵員　各師管
前號以外ノ近衞兵員　第一師管
騎兵第一旅團、野戰砲兵第一旅團ノ兵員（近衞兵員ヲ除ク）　第十四師管
鐵道隊、電信隊ノ兵員　各師管
第七師團ノ兵員　第一師管（伊豆七島及小笠原島ヲ除ク）、第二師管、第七師管、第八師管、第十三師管、第十四師管
臺灣步兵隊ノ兵員　第三師管、第四師管、第五師管、第六師管、第九師管、第十師管、第十一師管、第十二師管、第十五師管、第十六師管、第十七師管、第十八師管
臺灣山砲兵隊ノ兵員　第十七師管、第十八師管
基隆及澎湖島重砲兵隊ノ兵員　第四師管、第五師管、第十二師管、第十八師管

第六師團、第十二師團及第十八師團ノ兵員ハ沖繩警備隊區ヨリモ之ヲ徵集ス

第一條ノ二　前條ノ現役兵員ハ徵集師管ヲ管轄スル師團ノ同兵種ノ兵員ヲ通シテ之ヲ配賦シ近衞師團、鐵道隊、電信隊及重砲兵隊ノ兵員ニ在リテハ各適當ノ者ヲ以テ之ニ充テ其ノ他ノ兵員ニ在リテハ其ノ殘員中ニツキ徵集順序ニ從ヒ本籍師團兵ト交互之ニ充テ第十四師管ノ騎兵、砲兵ニ在リテハ本籍師團兵、第七師團兵及騎兵旅團又ハ砲兵旅團兵ノ順序ニ依ルモノトス

前項ニ依リ決定シタル者翌年同ト爲リ又ハ第一條ニ依ル各團隊兵徵集區域內ニ於テ轉籍スルモ其ノ決定ヲ變更セサルモノトス

第一條ノ三　條例第二十一條ノ壯丁名簿ハ附錄第一樣式ニ依リ之ヲ作リ一市（東京市、京都市、大阪市ニ在リテハ區）町村ヲ一冊ト爲シ冊尾ニ其ノ人員ノ總計ヲ記シ市町村長（東京市、京都市、大阪市ニ在リテハ區長）之ニ署名押印スヘシ

第八條第一項中「九月下旬」ヲ「八月下旬」ニ改ム

第九條第一項中「及明治二十八年勅令第百二十六號第二條」ヲ削ル

第十條第二項ヲ削ル

第十一條第三號中「要塞砲兵」ヲ「重砲兵」ニ改メ同條第五號中「及砲兵輸卒」ヲ削リ同條第六號ヲ削ル

第十三條第二項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

假決中滿四十歲ヲ超過シタル者ノ名簿ハ之ヲ徵集免除名簿ニ編入シ終決ノ區畫ニ其ノ事由ヲ記スルモノトス

第十四條第二項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

沖繩警備隊區ニ於テ要員ヲ充タシ能ハサルトキハ警備隊區司令官ハ之ヲ第六師團長ニ、第六師團長ハ之ヲ陸軍大臣ニ具狀スヘシ

第十九條中「及明治二十八年勅令第百二十六號第一條」ヲ削ル

第十七條第二項ヲ左ノ如ク改ム

抽籤ノ番號ハ甲種、第一乙種、第二乙種各合格者中抽籤ヲ要スル者ノ數ニ應シ第一番ヨリ起スモノトス

第二十二條中「編入順序」ヲ「徵集順序」ニ、同條第一號割註中「第二號第三號第四號」ヲ「第二號乃至第四號」ニ改メ第三號ノ次ニ左ノ一號ヲ加フ

三ノ二　徵兵令第十二條ニ依リ陸軍現役兵ノ志願ヲ許可シタル者

第二十三條第二項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

徵兵令第十二條ニ依リ陸軍現役兵ノ志願ヲ許可シタル者ニハ第一項ニ準シ現役兵證書ヲ付與スヘシ

第二十九條中第二項ヲ削ル

第三十五條　入營兵集合地ハ附表ニ依ル

第三十六條　現役兵ヲ入營セシムルトキハ聯隊區司令部員又ハ警備隊司令部員ヲ入營地若ハ入營兵集合地ニ派遣シ之ヲ當該隊長又ハ入營兵受領員ニ交付セシム

入營ノ人員甚少ナルトキ及入營兵受領員出發後到著シタル者ハ直ニ入營セシム

沖繩警備隊區ヨリ徵集ノ現役兵入營ノトキハ地方吏員之ヲ引率シ第一項ノ取扱ヲ爲スモノトス

第三十七條第一項ヲ左ノ如ク改ム

附表ニ揭ケル諸兵入營ノ期ニ先チ當該師團司令部、臺灣總督府及鎭守府ハ入營兵集合地ヨリ入營地ニ至ル日數ヲ量リ集合地到著ノ日割ヲ定メ豫メ之ヲ各聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ニ通知スヘシ

第三十七條ノ二　警備隊兵及輜重輸卒ヲ數期ニ分チ入營セシムルニハ第二十二條ノ徵集順序ニ依ル其ノ各期ニ於ケル入營兵ノ員數ヲ聯隊區、警備隊區、徵募區ニ配當スルハ概ネ同區ニ於ケル同兵種現役兵徵集人員ノ數ニ比例スルモノトス

第三十七條ノ三　警備隊兵及輜重輸卒ニシテ徵兵令第二十七條ニ該當シ入營シ難キ者ハ次期ニ繰リ下ケ入營セシメ其ノ終期ニ於テ入營シ難キ者ハ次年徵募ノ現役兵ト同時ニ入營セシム

前項ノ者ノ中傷痍疾病ノ者ハ徵兵檢査ノ際身體檢査ヲ爲シ徵集ニ適セサル者ハ徵集免除若ハ兵役免除ノ處分ヲ爲スモノトス

第一項ニ依リ入營ヲ次年ニ繰リ下ケタル者アルトキハ之ヲ翌年ノ配賦要員中ニ加フルモノトス

第三十八條中「ヨリ各隊長又ハ近衞師團若ハ海軍」ヲ「若ハ入營兵引率員ヨリ各隊長又ハ」ニ改ム

第三十九條第二項中「第三項」ヲ「第五項」ニ改メ第三項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

條例第四十六條ニ依ル現役兵ノ補充ハ同條規定ノ期日ニ入營セシムルヲ得ル場合ニ於テハ必ス

其ノ補充ヲ爲スヘキモノトス但シ師管內ヨリ補充スル能ハサルトキハ師團長之ヲ陸軍大臣ニ具狀スヘシ

第四十一條第一項中「島司郡市長（東京市、京都市、大阪市ニ在リテハ區長）ハ現役兵及陸軍補充兵ノ戶籍抄本（海軍ニ在リテハ戶籍謄本）ヲ」ヲ「市町村長（東京市、京都市、大阪市ニ在リテハ區長）ハ現役兵及陸軍補充兵ノ戶籍抄本（海軍ニ在リテハ戶籍謄本）ヲ作リ町村ニ在リテハ之ヲ島司郡長ニ送付シ島司郡市長（東京市、京都市、大阪市ニ在リテハ區長）ハ之ヲ」ニ改ム

第四十四條　補充兵ニシテ未タ教育ヲ終ラサル者他ノ徵募區ニ轉籍（抽籤日後其ノ年十二月三十一日迄ニ係ルモノヲ包含ス）シタルトキハ第二十二條ニ依リ其ノ徵集順序ヲ定メ抽籤番號ヲ有スル者ニ在リテハ新本籍地徵募區同種補充兵最高抽籤番號ヲ率トシ比例ヲ以テ相當番號ノ上位ニ列セシム但シ比例算出上端數ヲ生スルトキハ之ヲ切リ捨ツルモノトス

第四十七條割註中「區長」ノ下ニ「以下同シ」ヲ加フ

第四十九條　條例第五十三條及第六十三條ニ依リ身體檢査ヲ受ケンコトヲ希望スル者ハ寄留地若ハ檢査地ノ島司郡市長ニ願出テ且其ノ由ヲ本籍地ノ市町村長（東京市、京都市、大阪市ニ在リテハ區長）ニ屆出ヘシ其ノ願出ヲ取消サントスル者及更ニ寄留換ヲ爲シ其ノ地ニ於テ身體檢査ヲ受ケントスル者亦同シ但シ身體檢査ニ關スル願出ハ町村ニ在リテハ町村長ヲ經由スヘキモノトス

前項寄留換ノ場合ニ於テハ前願出ヲ爲シタル島司郡市長ニモ屆出ヘシ

第一項ノ願出期日ハ本籍地及寄留地若ハ檢査地徵募區ノ檢査開始前三十日迄ニ限ルモノトス

島司郡市長第一項ノ願出ヲ許可シタルトキハ直ニ之ヲ本籍地ノ島司郡市長ニ通知シ其ノ通知ヲ受ケタル島司郡市長ハ其ノ壯丁名簿若ハ前年ノ假決名簿ヲ直ニ寄留地又ハ檢査地ノ島司郡市長ニ送附スヘシ

身體檢査若ハ抽籤終ルトキハ前項ノ名簿ニ檢査ノ結果及抽籤番號ヲ記入シ之ニ檢査ヲ行ヒタル徵募區同種兵最高ノ番號ヲ添ヘ直ニ聯隊區徵兵官又ハ警備隊區徵兵官ヨリ本籍地ノ聯隊區徵兵官又ハ警備隊區徵兵官ニ送附スヘシ但シ對馬警備隊區ニ於テ身體檢査ヲ受ケタル者ニ在リテハ抽籤ヲ施行セス該名簿ニ檢査ノ結果ノミヲ記入シ之ヲ本籍地ノ島司郡市長ニ送附スルモノトス

島司郡市長前項但書ノ名簿ヲ受領シタルトキハ聯隊區徵兵署、聯隊區聯合徵兵署又ハ警備隊區徵兵署開設ノトキ之ヲ同署ニ提出スヘシ但シ抽籤ヲ要スルモノニシテ當該徵兵署閉鎖後師管內各徵兵署閉鎖前ニ到着シタルトキハ之ヲ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ニ送附シ一般ノ例ニ依リ同聯隊區若ハ警備隊區內又ハ同師管內便宜ノ徵兵署ニ於テ抽籤ヲ施行シ其ノ徵集順序ヲ定ムルモノトス

第一項ノ屆出ヲ爲ササル者ハ五錢以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

第四十九條ノ二　條例第五十八條ノ二ニ該當スル者ハ其ノ壯丁名簿若ハ假決名簿ヲ本籍地聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ヨリ檢査ヲ施行スル徵募區ノ徵兵官ニ送附シ條例第五十三條該當者ノ例ニ依リ取扱フモノトス

第五十條中「前條」ヲ「前二條」ニ改ム

第五十一條ノ二　條例第五十一條ニ依リ陸軍現役兵ヲ志願スル者アルトキハ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ニ於テ願書其ノ他ニ依リ壯丁名簿ノ樣式ニ準シ其ノ名簿ヲ作リ志願ヲ許可シタル者ニ在リテハ之ヲ現役兵名簿ニ添附シ其ノ旨ヲ本籍市町村長（東京市、京都市、大阪市ニ在リテハ區長）ニ通知スヘシ

前項現役兵志願者ノ名簿及現役兵證書ニハ徵兵令第十二條ノ志願者ナルコトヲ記入スルモノトス

第五十二條　他ノ徵募區ニ於テ身體檢査又ハ抽籤ヲ爲シタル者ハ第二十二條ニ依リ其ノ徵集順序ヲ定メ其ノ抽籤番號ヲ有スル者ニ在リテハ本籍地徵募區及抽籤ヲ行ヒタル徵募區同種兵ノ最高番號ヲ率トシ比例ヲ以テ本籍地相當番號ノ上位ニ列セシム但シ比例算出上端數ヲ生スルトキハ之ヲ切リ捨ツルモノトス

第五十五條　聯隊區司令官、警備隊司令官ハ一年志願兵志願者ノ人名ヲ調査シ其ノ年徵兵檢査ヲ受ケタル者ニ在リテハ其ノ結果ヲ師團長ニ報告スルノ外第五十四條ニ依ル取扱ノ資ニ供スヘシ

第五十六條中「及第六十三條」ヲ「第五十八條ノ二、第六十三條及明治三十九年陸軍省令第十六號第九條」ニ改メ「身體檢査」ノ下ニ「若ハ抽籤」ヲ加フ

第五十七條中「近衞師團及第七師團司令部」ヲ「近衞、第七、第十二、第十八師團司令部及臺灣總督府」ニ改メ同條但書ヲ左ノ如ク改ム

但シ第七師團ニ在リテハ第三十七條第二項ノ入營期日、第七師團、第十二師團及第十八師團ニ在リテハ第三十七條ノ二ノ入營人員ヲモ通知スルモノトス

第五十七條ノ二　徵兵令第十三條第五項ニ該當スル者ハ更ニ教職ニ就クト雖同項ノ規定ニ依リ之ヲ徵集スルモノトス但シ其ノ者ニシテ同條第一項ノ學校ニ入學シ條例第五十五條ノ手續ヲ爲ストキハ其ノ徵集ヲ猶豫スヘシ

第五十七條ノ三　徵兵令第十三條第五項又ハ同第二十三條第二項ニ該當スル者ニシテ其ノ教職ヲ罷メタルトキ滿二十八歲以下又ハ斷期ノトキニ於テ滿三十二歲以下ナルトキハ之ヲ徵集スルモノトス

第五十七條ノ四　徵兵令第十三條第一項ニ揭クル學校ニ在校ノ者ト雖其ノ年十二月一日ニ於テ滿二十八歲ヲ過クル者ハ其ノ徵集ヲ猶豫セサルモノトス

第五十七條ノ五　徵兵令第十二條ニ依リ陸軍現役兵ノ志願ヲ許可シタル者條例第四十七條第四十八條ノ事故ヲ生シタルトキハ單ニ志願兵ヲ免スルモノトス

第五十七條ノ六　本令中警備隊司令官トアルハ沖繩警備隊區ニ在リテハ警備隊區司令官、郡長、郡書記トアルハ北海道ニ在リテハ支廳長、支廳書記、市長、市書記トアルハ北海道及沖繩縣ニ在リテハ區長、區書記、町村長トアルハ町村制ヲ施行セサル地ニ在リテハ戶長其ノ他町村長ニ準スヘキ者ニ該當ス

第五十九條　削除

附表

入營兵集合地指定表

師管	聯隊區	近衞兵鐵道隊兵電信隊兵集合地	海軍兵集合地	第七師團兵集合地	臺灣澎湖島軍隊兵集合地
第一		東京	橫須賀	仙臺	
第二	福島 若松	東京	橫須賀	仙臺	
	仙臺 山形	福島	福島	青森	
第三		東京	四日市		神戶
第四		京都	神戶		神戶
第五		京都	吳		門司
第六		門司	佐世保		長崎
第七		福島	青森		

第五樣式ヲ別紙ノ如ク改ム

第六樣式欄外記註第一號ヲ左ノ如ク改ム

裏面「何兵第何聯(大)隊」ハ近衞、臺灣諸兵及他ノ師管ヨリ徵集スル兵員ニ在リテハ其ノ編入スヘキ師團隊號ヲ以テ之ニ代ヘ海軍兵ニ在リテハ「何鎭守府ノ兵籍」ト記スヘシ

第七樣式ノ一陸軍現役近衞師團ノ欄中「砲兵輸卒」「鐵道隊兵」ノ欄ヲ削リ同第何師團ノ欄中「砲兵輸卒」ヲ「重砲兵」ニ、「要塞砲兵」ヲ「鐵道隊兵」ニ、「砲兵助卒」ヲ「電信隊兵」ニ改メ同陸軍補充兵ノ欄中「砲兵助卒」「砲兵輸卒」ノ欄ヲ削リ欄外記註第三號中「第七師團」ヲ「他ノ師團隊」ニ、「該師團」ヲ「該師團隊」ニ改メ左ノ一號ヲ加フ

四　沖繩警備隊區ヨリ第十二師團、第十八師團ニ徵集シタル人員ハ符號ヲ附シテ區別スヘシ

第七樣式ノ二徵集延期猶豫人員欄中「明治二十八年勅令第二百十六號ニ該當スル者」ノ欄ヲ削ル

第七樣式ノ三、外「四尺八寸未滿者」ノ欄ノ下ニ「國民兵不適格者」ノ欄ヲ加ヘ欄外記註第一號但書ヲ削ル

第七樣式ノ四欄外記註第二號中「近衞師團及第七師團」ヲ「他ノ師團、團隊」ニ改ム

第七樣式ノ五中「要塞」ヲ「重砲兵」ニ改メ「砲兵助卒」「砲兵輸卒」ノ欄ヲ削リ欄外記註第二號ヲ左ノ如ク改ム

一　鐵道隊電信隊ノ兵員ハ工兵ノ欄ニ、他ノ師團、團隊ニ徵集シタル其ノ他ノ兵員ハ相當欄ニ各符號ヲ附シテ別記スヘシ

第八樣式中「本人」ノ上ニ「何兵何隊希望」ヲ加ヘ「父(母)(戶主)(後見人)氏名㊞」ヲ「步(騎)(野戰砲)(要塞砲)(工)(輜重)兵何聯(大)隊、何鎭守府」中」ヲ「何聯隊區、警備隊區司令官兵名殿(何鎭守府御中)」ニ改メ欄外記註ヲ削ル

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本令中第十七條第二項及第五樣式ノ改正ハ明治四十一年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

本令中第一條第三十五條ノ改正ハ明治四十年九月十一日ヨリ之ヲ施行ス

本令中第三十七條ノ二ノ改正ハ明治四十年十二月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治二十八年勅令第二百十六號第二條ニ依リ徵集ヲ猶豫セラルル者ニ關シテハ仍從前ノ規定ニ依ル

第八		函島	青森	青森	
第九		東京	敦賀		神戸
第十	鳥取 福知山	京都	舞鶴		神戸
	姫路 神戸		神戸		
第十一		京都	神戸		門司
第十二		門司	佐世保		門司
第十三		東京	直江津	青森	
第十四		東京	横須賀	仙臺	
第十五		東京	四日市		神戸
第十六		東京	舞鶴		神戸
第十七		京都	呉		門司
第十八		門司	佐世保		長崎

第一師管ヨリ鐵道隊電信隊ニ入營スル兵員ハ本表ニ依ラス直ニ入營スルモノトス

第五樣式（抽籤名簿）

府（縣）郡（市）何兵抽籤名簿

何町

甲抽籤ニ加ヘサル者（令第二十八條ニ該ル者、令第十三條第五項ニ該ル者等ト記入ス）　何某

何村

甲（第一乙）（第二乙）抽籤ニ加ヘサル者（令第十二條ニ依レル同籍者又ハ第二十一條ノ規定者ト記入ス）　何某

何村

甲第一番　何某

何町

甲第二番　何某

何町

第一乙抽籤ニ加ヘサル者（令第二十八條ニ該ル者、令第二十三條ニ該ル者ト記入ス）　何某

何村

第一乙抽籤ニ加ヘサル者　何某

何村

第一乙第一番　何某

（注意）第二十二條ノ規定ニ依リ編入ノ順序ニ列記スルモノトス

本用紙ハ島廳郡市役所ニ於テ調製スヘシ

第七樣式ノ七

（明治何年）第何師管徴兵表附錄徴兵令第十二條ニ依ル陸軍現役兵志願者人員表

種別		步兵			騎兵			砲兵							
								野戰砲隊		山砲大隊			重砲隊		
等位		甲種	第一乙種	第二乙種	甲種	第一乙種	第二乙種	甲種	第一乙種						
採用者ノ本籍師管別	第一														
	第二														
	第三														
	第十五														
	何														
	何														
	計														
不採用者															
不合格者															

種別		工兵									輜重兵			計	備考
		工兵隊			鐵道隊			電信隊							
採用者ノ本籍師管別	第一														一　近衛師團、第七師團、臺灣諸隊等ニ採用シタル人員ハ符號ヲ附シテ各別記シ其ノ符號ノ事由ヲ備考中ニ記入スヘシ 二　本表人員中採用者ノ身長及普通教育程度ハ第七樣式ノ三第七樣式ノ六ニ準シ之ヲ調製スルモノトス
	第二														
	第三														
	第十五														
	何														
	何														
	計														
不採用者															
不合格者															

●徴兵事務條例施行細則中北海道沖繩縣及大島八丈島小笠原島ニ施行シ難キ諸件取扱方竝豫備隊兵卒入營前取扱方廢止

明治四十年七月六日
陸軍省令第十一號

明治三十三年陸軍省令第三十號及明治二十二年陸軍省令第七號ハ之ヲ廢止ス

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治二十八年勅令第百二十六號第二條及明治三十年勅令第二百五十八號第二項ニ依リ徴集ヲ猶豫セラルル者ニ關シテハ仍從前ノ規定ニ依ル

●現役砲兵輸卒及輜重輸卒ノ入營シ難キ者取扱方廢止

明治四十年七月六日
陸軍省陸達第四十六號

明治三十年訓令甲第四號明治三十二年訓令乙第六號、同年訓令乙第七號明治三十三年訓令乙第一號ハ之ヲ廢止ス

●徴兵處分ヲ受クヘキ所在不明者調査規程

明治四十年四月五日
陸軍省訓令甲第一號

警視廳　道廳　府縣

徴兵處分ヲ受クヘキ所在不明者調査規程左之通定ム

第一條　警視總監及地方長官ハ隨時所轄内ノ島司、郡長、市町村長、警察署長、警察分署長、憲兵隊長、憲兵分隊長ヲシテ徴兵終決處分未濟者及徴兵相當者ニシテ所在不明ナル者ノ調査ヲ為サシムヘシ

第二條　地方長官ハ每年所轄内ニ於ケル所在不明ノ徴兵終決處分未濟者ノ原籍氏名生年月日ヲ官報ニ掲載スヘシ

前項ノ徴兵終決處分未濟者ニシテ死亡、徴兵處

分賦、滿四十歲超過等ノ爲留後調査ヲ要セサルトキ前項ニ同シ

第三條　警視總監及地方長官ハ第一條ノ調査ニ關シ絶ヘス相互ニ聯絡ヲ保持シ且必要ノ事項ハ時機ヲ失セス所轄內ノ官公署ニ通知シ又ハ之ヲシテ報告若ハ通報セシムヘシ

第四條　第一條ノ調査ニ關シテハ左ノ各項ニ依ルノ外時機ヲ利用シテ適當ノ手段ヲ採ルヲ要ス

一、島司、郡長、市町村長、警察署長、警察分署長、憲兵隊長、憲兵分隊長ハ所轄內ニ本籍ヲ有スル所在不明ノ徵兵終決處分未濟者ニ對シテハ本人ノ親族其ノ他心當リノ者ニ就キ平素ノ行動行先キ等ヲ搜査シ又ハ親戚ヲシテ搜査セシメ其ノ端緒ヲ得タルトキハ必要ノ事項ヲ具シ直ニ當該地ノ市町村長、警察署長、警察分署長、憲兵隊長又ハ憲兵分隊長ニ通知スヘシ

⊕前項ノ通知ヲ受ケタル市町村長、警察署長、警察分署長、憲兵隊長、憲兵分隊長ハ直ニ搜査ヲ爲シタル上相當ノ處置ヲ爲シ且通知ヲ爲シタル官公署ニ通知スヘシ

二、島司、郡長、市町村長、警察署長、警察分署長、憲兵隊長、憲兵分隊長ハ第二條第一項ニ依リ官報ニ揭載シタル者ノ所在ヲ發見シタルトキハ直ニ關係ノ官公署ニ通報シ且其ノ蹤跡ヲ失セサルノ手段ヲ採ルヘシ

前項ノ外所轄內ニ本籍ヲ有セサル現住者ニシテ故ナク徵兵終決處分ヲ受ケスト認ムル者アルトキハ直ニ之ヲ本籍地ト認定シタル市町村長ニ通知スヘシ

三、市町村長ハ毎年一月其ノ年ノ壯丁名簿ニ編入スヘキ者（前年[illegible]決ヲ含ム）ノ在不在ヲ調査シ其ノ不在者ニ對シテハ戸主又ハ家族擔當者若ハ親戚ヲシテ搜査ヲ爲サシムヘシ

第五條　第一條ノ調査ヲ爲スニ際シテハ鑛山、工場其ノ他壯年者ノ集團スル場所ニ對シテハ特ニ注意ヲ加フルヲ要ス

第六條　本規程ノ實行ニ關シ必要ナル細則ハ警視總監及地方長官之ヲ定ム

第七條　本規程中郡長トアルハ北海道ニ在リテハ支廳長、市長トアルハ東京市、京都市、大阪市、北海道及沖繩縣ニ在リテハ區長、町村長トアルハ町村制ヲ施行セサル地ニ在リテハ町村長ニ準スヘキ者ニ該當ス

附　則

所在不明ノ徵兵終決處分未濟者搜査ニ關スル從前ノ訓令ハ之ヲ廢止ス

明治三十五年以後明治三十九年以前ニ係ル所在不明ノ徵兵終決處分未濟者ニ關シテハ本年ニ於テ第二條第一項ノ手續ヲ爲スヘシ

●歩兵隊兵員徵集區指定表

明治四十年九月十八日
陸軍省陸達第五十六號

歩兵隊兵員徵集區指定表左ノ通定メ改正陸軍管區表施行ト同時ニ之ヲ施行ス

明治三十二年陸達第三十五號ハ之ヲ廢止ス

歩兵隊兵員徵集區指定表

師團	旅團	歩兵聯隊	聯隊區名
第一	第一	第一聯隊	麻布
		第四十九聯隊	甲府
	第二	第三聯隊	本郷
		第五十七聯隊	佐倉
第二	第三	第二十九聯隊	福島
		第六十五聯隊	若松
	第二十五	第四聯隊	仙臺
		第三十二聯隊	山形
第三	第五	第六聯隊	名古屋
		第六十八聯隊	岐阜
	第三十	第三十三聯隊	桑名
		第五十一聯隊	津
第四	第七	第八聯隊	大阪
		第七十聯隊	篠山
	第三十二	第三十七聯隊	堺
		第六十一聯隊	和歌山
第五	第九	第十一聯隊	廣島
		第二十二聯隊	松山
	第二十一	第四十二聯隊	山口
		第七十一聯隊	岩國
第六	第十一	第十三聯隊	熊本
		第二十三聯隊	八代
	第三十六	第四十五聯隊	鹿兒島
		第六十四聯隊	都城
第八	第四	第五聯隊	青森
		第三十一聯隊	盛岡
	第十六	第十七聯隊	秋田
		第五十二聯隊	弘前
第九	第六	第七聯隊	金澤
		第三十六聯隊	鯖江
	第三十一	第三十五聯隊	高岡
		第六十九聯隊	富山
第十	第八	第十聯隊	姬路
		第四十聯隊	鳥取
	第二十	第二十聯隊	福知山
		第三十九聯隊	神戸
第十一	第十	第十二聯隊	丸龜
		第六十二聯隊	德島
	第二十二	第四十三聯隊	善通寺
		第四十四聯隊	高知
第十二	第十二	第四十七聯隊	中津
		第七十二聯隊	大分
	第三十五	第十四聯隊	小倉
		第二十四聯隊	福岡
第十三	第十五	第十六聯隊	新發田
		第三十聯隊	村松
	第二十六	第五十聯隊	松本
		第五十八聯隊	高田
第十四	第二十七	第二聯隊	水戸
		第五十九聯隊	宇都宮
	第二十八	第十五聯隊	高崎
		第六十六聯隊	熊谷
第十五	第十七	第十八聯隊	豐橋
		第六十聯隊	飯田
	第二十九	第三十四聯隊	靜岡
		第六十七聯隊	濱松
第十六	第十八	第九聯隊	大津
		第十九聯隊	敦賀
	第十九	第三十八聯隊	京都
		第五十三聯隊	奈良
第十七	第三十三	第四十一聯隊	福山
		第五十四聯隊	岡山
	第三十四	第二十一聯隊	濱田
		第六十三聯隊	松江
第十八	第二十三	第四十六聯隊	大村
		第五十五聯隊	佐賀
	第二十四	第四十八聯隊	久留米
		第五十六聯隊	高瀬

備考

一、第六、第十二、第十八師團各歩兵聯隊ノ兵員ハ本表ノ外沖繩警備隊區ヨリモ徵集ス

二、近衞師團各歩兵聯隊ノ兵員ハ各師管ヨリ、第七師團各歩兵聯隊ノ兵員ハ第一、第二、第七、第八、第十三、第十四師管ヨリ之ヲ徵集スルヲ以テ本表中ニ之ヲ揭ケス

●徵兵檢査規則中改正

明治四十年二月九日
陸軍省令第一號

明治二十五年陸軍省令第三號徵兵檢査規則第三條第二號ノ末尾ニ「其ノ體格比較的良好ナルモノヲ第一乙種トシ之ニ亞クモノヲ第二乙種トス」ヲ加フ

●臺灣居住者徵兵身體檢査願書差出方

明治四十年二月一日
臺灣總督府令第二號

明治三十九年勅令第三百十八號ニ依ル臺灣居住者徵兵身體檢査願書ハ左記樣式ニ依リ所轄廳ヲ經テ檢査ヲ受ケントスル部隊ニ差出スヘシ

（樣式）（用紙半紙罫紙）

徵兵身體檢査願

本籍　何縣（何市）何郡何町（村）
何番地（番戸、番屋敷）
華、士、族（平民）
寄留地　何廳何堡（里）何街（庄、社）
何番戸
職業　氏　名
生年月日　年齡

明治何年徵兵適齡ニ相當候ニ付テハ明治三十九年勅令第三百十八號ニ依リ（何地ニ於テ）身體檢査相受度候間此段相願候也

明治　年　月　日

右　氏　名　印

身體檢査部隊宛

備考

一　職業記載方

イ、本業副業ハ收入ノ多少ニ依リ區別シ收入ノ多キヲ本業トシ其少ナキヲ副業トス

ロ、本業及副業ヲ有スル者ハ之ヲ併記スヘシ（假令ハ大工ニシテ鍛冶ヲ副業トスル者ハ大工兼鍛冶職ト記スルカ如シ）

ハ、商、工業ハ其職業名ヲ記スヘシ（假令ハ吳服商又ハ大工職ト記スルカ如シ）

ニ、官吏、教員、神職、僧侶、銀行員、會社員、生徒（學校名ヲ冠ス）等ハ其旨ヲ記スヘシ

ホ、元官吏、教員、銀行員、會社員、農商工業者ニシテ現ニ無職業ノ者ハ（無職業「元何」）ト記スヘシ

二　事故ニ因リ適齡當時身體檢査ヲ受ケサル者ハ其ノ理由ヲ明記スヘシ（假令ハ徵兵令第二十三條ニ依リ何々學校在學ノ爲徵集猶豫等ト記載シ尚是等ハ證明書寫ヲ添附スヘシ）

三　一年志願兵志願ノ者ハ（一年志願致度儀ニ付身體檢査願）ト現役志願ノ者ハ（現役志願致度儀ニ付身體檢査願）ト記シ本文ニハ（徵兵令第十三條ニ依リ一年志願兵服役致度候ニ付テハ明治三十九年勅令第三百十八號ニ依リ云云）ト（徵兵令第十二條ニ依リ現役ニ服シ度候ニ付テハ明治三十九年勅令第三百十八號ニ依リ云云）ト記載スヘシ

第四款 國民軍

●國民兵役ニ在リテ召集セラレタル者及國民軍編入志願者ニ關スル制中改正

明治四十年九月三十日
勅令第三百十五號總、陸、大臣副署

朕明治三十七年勅令第二百三十三號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十七年勅令第二百三十三號中左ノ通改正ス

第三條 削除

第八條 削除

第十條中「國民兵補充召集臨時召集及」ヲ削ル

附 則

本令ハ明治四十年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

第五款 服役

●國民兵役ニ在ル者ノ服役及召集ニ關スル制中改正

明治四十年九月三十日
勅令第三百十六號總、陸、大臣副署

朕明治三十八年勅令第百五十三號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十八年勅令第百五十三號中左ノ通改正ス

第二條 削除

附 則

本令ハ明治四十年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

●在韓國第十三師團及步兵第十二旅團諸隊兵卒服役延期

明治四十年十月七日
陸軍省令第十六號

韓國ニ在ル第十三師團及步兵第十二旅團ノ諸隊ニ屬スル兵卒ニシテ現役期限滿ツル者ハ徵兵令第七條ニ依リ當分其ノ服役ヲ延期ス

●陸軍現役步兵科兵卒ノ歸休ニ關スル制

明治四十年十月二十八日
勅令第三百三十二號總、陸、大臣副署

朕陸軍現役步兵科兵卒ノ歸休ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 陸軍現役步兵科兵卒ニシテ勤務ヲ習得シタル者ハ當分ノ内服役二年ノ終ニ於テ之ヲ歸休セシム

戰時又ハ事變ノ際其ノ他軍事上必要ノ場合ニハ前項ニ拘ラス在營ノ期間ヲ伸縮シ又ハ所要ノ人員ヲ限リ歸休セシメサルコトヲ得

第二條 前條ノ規定ハ各兵科ノ軍隊ニ服役スル當該兵科以外ノ現役兵卒ニ之ヲ適用スルコトヲ得

第三條 陸軍服役條例第百十七條ノ二、第百十七條ノ三、第百十九條ノ二、第百二十條第二項及第百六十九條ノ規定ハ前二條ニ依ル歸休兵ニ之ヲ適用セス

第四條 陸軍服役條例中一年以上臺灣ニ居住スル歸休兵ニ關スル規定ハ臺灣以外ノ軍隊ニ在リテ第一條又ハ第二條ニ依リ歸休ヲ命セラレタル者ニ之ヲ適用セス

第五條 陸軍服役條例中一年以上臺灣ニ居住スル歸休兵ニ關スル規定ハ臺灣ノ軍隊ニ在リテ第一條又ハ第二條ニ依リ歸休ヲ命セラレ臺灣ニ居住スル者ニ之ヲ準用ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本令ハ明治三十八年以後徵集ノ兵卒ニ之ヲ適用ス但シ明治三十八年徵集ノ兵卒ハ其ノ一部ヲ歸休セシム

●陸軍在郷軍人臺灣居住者取扱方

明治四十年十二月二十四日
陸軍省訓令第十號
臺灣總督府 師團司令部[illegible]

陸軍在郷軍人ニシテ臺灣ニ居住スル者アルトキハ左記ノ取扱ヲ爲スヘシ

一 師團長ハ休職、停職、豫備役、後備役ノ陸軍將校同相當官及准士官ニシテ臺灣ニ居住ノ屆出ヲ受ケタルトキハ兵役、官氏名、居住スヘキ地名及其ノ戰時職務ニ關シ參考ト爲ルヘキ事項ヲ臺灣總督ニ通報スヘシ

二 聯隊區司令官、警備隊區司令官ハ豫備役、後備役ノ陸軍下士兵卒（輸卒縫工ヲ包含ス）歸休兵及補充兵ニシテ臺灣ニ居住ノ屆出ヲ受ケタルトキハ兵役、官名（兵卒ハ兵種）氏名及居住スヘキ地名ヲ其ノ居住地所管ノ廳長ニ通報スヘシ

三 師團長、聯隊區司令官、警備隊區司令官ハ前二項ノ通報ヲ爲シタル後准士官以上ノ者ニシテ他ノ師管ヘ轉籍シタルトキ下士以下ノ者ニシテ聯隊區又ハ警備隊區管區外ヘ轉籍シタルトキハ前二項ノ例ニ依リ臺灣總督又ハ廳長ニ通報スヘシ

四 第一項第二項ノ者ニシテ居住地ヲ轉換シ又ハ臺灣總督府管外ヘ轉住シタルトキハ第一項第二項ノ例ニ依リ臺灣總督又ハ廳長ヨリ本籍地所管ノ師團長又ハ聯隊區司令官若ハ警備隊區司令官ニ通牒スヘシ

●海軍高等武官准士官服役令中改正

明治四十年十一月十三日
勅令第三百三十四號總、海、大臣副署

朕海軍高等武官准士官服役令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍高等武官准士官服役令中左ノ通改正ス

第三條中「上等機關兵曹」ヲ削リ「船匠師」ノ次ニ「上等機關兵曹」ヲ加フ

附 則

本令ハ明治四十年十二月一日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際既ニ現役定限年齡ヲ超過シタル者ハ本令施行ノ日ヨリ後備役ニ服セシム

第十六輯

學事時氣象

第十六輯　學事　時　氣象

第一章　學事

第三款　小學校　幼稚園　公學校　公學堂

○小學校令中改正（四〇、勅令五二）……一一
○小學校令施行規則中改正（四〇、文令六等）……一一
○小學校令中改正要旨並施行上注意事項（四〇、文訓一）……一六
○臺灣小學校規則（四〇、臺令八一）……一八
○臺灣小學校高等小學科修業年限中改正（四〇、臺告五四）……一一
○臺北幼稚園廢止（四〇、臺告二九）……一一
○臺灣公學校令廢止（四〇、勅令一四）……一一
○臺灣公學校令（四〇、律令一）……一一
○臺灣公學校規則中改正（四〇、臺令五）……一一
○臺灣公學校設立廢止規程（四〇、臺令八）……一五
○臺灣公學校學務委員規程（四〇、臺令一〇）……一五
○蕃人ノ子弟ヲ就學セシムヘキ公學校ノ名稱位置中改正（四〇、臺告一〇一等）……一六
○公學校財務規程（本章第十七款ニ收ム）
○關東州小學校及關東州公學堂ノ規則（四〇、關令一九）……一六

第四款　高等女學校

○高等女學校令中改正（四〇、勅令二八一）……一六
○臺灣總督府高等女學校規則（四〇、臺令三四）……一六

第五款　中學校

○中學校令中改正（四〇、勅令二八〇）……一七
○臺灣總督府中學校規則（四〇、臺令三二）……一七

第六款　師範學校

○師範學校規程（四〇、文令一二）……二〇
○師範學校教科用圖書撰定手續師範學校生徒ニ退學ヲ命シタルトキ學資償還方師範學校ニ於テ支給スヘキ生徒ノ學資費目及支給方師範學校職員教授管理等ニ關スル諸規程制定改廢文部省ヘ開申方廢止（本章第二十款ニ收ム）

第七款　高等學校

○高等學校大學豫科入學者選拔試驗規程中改正（四〇、文告一五〇）……二九

第八款　帝國大學

○東京帝國大學分科大學講座種類及其數中改正（四〇、勅令一五三）……二九
○京都帝國大學法科大學ニ法律學科及政治學科設置（四〇、文令一六）……二九
○京都帝國大學法科大學醫科大學文科大學及理工科大學講座種類及其數中改正（四〇、勅令一八七）……三〇
○東北帝國大學ニ關スル制（四〇、勅令二三六）……三〇
○東北帝國大學農科大學講座種類及其數（四〇、勅令二四〇）……三〇

第九款　專門學校

○專門學校入學者檢定規程ニ依ル無試驗檢定ヲ受クルコトヲ得ル者指定（四〇、文告二七等）……三〇
○官立醫學專門學校規程（四〇、文令一〇）……三一
○東京外國語學校修業年限學科學科目及其ノ程度竝研究生選科生專修科及速成科ニ關スル規程中改正（四〇、文令四等）……三三
○東京美術學校圖畫師範科規程（四〇、文令一八）……三三

第十款　實業學校

○東京高等工業學校規程中改正（四〇、文令八）……三四
○名古屋高等工業學校規程中改正（四〇、文令九）……三四
○熊本高等工業學校規程中改正（四〇、文令一）……三七
○仙臺高等工業學校規程（四〇、文令三等）……三七
○盛岡高等農林學校規程中改正（四〇、文令二六）……四五
○實業學校卒業者ノ研究補習ニ關スル規程（四〇、文令二）……四五

○實業學校諸規程中改正〔四〇、文令二七〕……四五

第十一款　醫學校

○臺灣總督府醫學校規則中改正〔四〇、臺令六七〕……四六

第十二款　學習院

○學習院學制中改正〔四〇、宮達甲一〕……四六
○學習院規則中改正〔四〇、宮令一〕……四六

第十四款　國語學校

○臺灣總督府國語學校規則中改正〔四〇、臺令三三等〕……四六

第十六款　學校ノ認定及指定

○公立私立學校認定ニ關スル規則中改正〔四〇、文令三三〕……四八
○私立醫學專門學校指定規則中改正〔四〇、文令三四〕……五〇
○公立私立齒科醫學校指定規則中改正〔四〇、文令五〕……五〇
○敎員檢定ニ關スル規程第五條ノ指定學校中改正〔四〇、文告二六四〕……五〇

第十七款　資本

○市町村立小學校敎育費ヲ補助セシムル爲北海道地方費及府縣費支出制〔四〇、勅令二一七〕……五一
○市町村立小學校敎員住宅費補助ニ關スル規程〔四〇、文令三〇〕……五一
○公學校財務規程〔四〇、臺令一九〕……五一

第十八款　敎員　生徒

○敎員檢定ニ關スル規程中改正〔四〇、文令一三〕……五三
○敎員檢定ニ關スル規程第五條ノ指定學校中改正（本章第十六款ニ收ム）
○敎員檢定試驗出願者中軍役若ハ之ニ關スル職務ニ服スル者試驗延期方廢止竝延期中ノ者有效方〔四〇、文告二三七〕……五三
○實業學校敎員養成規程中改正〔四〇、文令二二〕……五三
○公立私立實業學校敎員資格ニ關スル規程〔四〇、文令二八〕……五四
○公立私立實業學校敎員資格ニ關スル規程ニ依ル指定者〔四〇、文告二四八〕……五四
○臺灣小學校臺灣公學校敎員檢定及免許ニ關スル規程中改正〔四〇、臺令八二〕……五五
○師範學校敎科用圖書撿定手續師範學校生徒ニ退學ヲ命シタルトキ學資償還方師範學校ニ於テ支給スヘキ生徒ノ學資種目及支給方師範學校訓育敎授管理等ニ關スル諸規程制定改廢文部省ヘ開申方廢止（本章第二十款ニ收ム）
○東京美術學校圖畫師範科卒業者服務規程〔四〇、文令一九〕……五五
○文部省直轄實業專門學校委託生規程〔四〇、文令二三〕……五六
○臺灣總督府中學校及臺灣總督府高等女學校生徒及卒業者ノ他ノ學校ヘ入學轉學ニ關スル規程〔四〇、文令三五〕……五六
○韓國居留民團設立ノ學校生徒兒童及卒業者他ノ學校ヘ入學轉學方〔四〇、文告七三等〕……五六
○關東州小學校兒童及卒業者他ノ學校ヘ入學轉學方〔四〇、文令一五〕……五六

第十九款　外國留學生

○水產講習所在外研究生規程〔四〇、勅令三二九〕……五七

第二十款　敎科用圖書

○小學校敎科用圖書翻刻發行規則中改正〔四〇、文令四一〕……五七
○翻刻發行スヘキ小學校敎科用圖書定價〔四〇、文告一一七〕……五七
○敎科用圖書檢定規則中改正〔四〇、文令三一〕……五七
○小學校敎科用圖書檢定方廢止〔四〇、文告二五八〕……五八
○師範學校敎科用圖書撿定手續師範學校生徒ニ退學ヲ命シタルトキ學資償還方師範學校ニ於テ支給スヘキ生徒ノ學資種目及支給方師範學校訓育敎授管理等ニ關スル諸規程制定改廢文部省ヘ開申方廢止〔四〇、文訓七〕……五八
○採定小學校敎科用圖書〔四〇、臺告一八九〕……五八
○小學校使用敎科用圖書〔四〇、臺告一九〇〕……五八

第二章　時

○關東都督府管內標準時〔四〇、關告三五〕……五九

第三章　氣象

○臺灣警報信號標規則中改正〔四〇、臺令三八〕……五九

第十六輯　學事　時　氣象

第一章　學事

第三款　小學校　幼稚園　公學校　公學堂

●小學校令中改正

明治四十年三月二十一日
勅令第五十二號總、文大臣副署

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ小學校令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

小學校令中左ノ通改正ス

第十三條　削除

第十八條　尋常小學校ノ修業年限ハ六箇年トス

高等小學校ノ修業年限ハ二箇年トス但シ延長シテ三箇年ト爲スコトヲ得

第十九條　尋常小學校ノ教科目ハ修身、國語、算術、日本歷史、地理、理科、圖畫、唱歌、體操トシ女兒ノ爲ニハ裁縫ヲ加フ

土地ノ情況ニ依リ手工ヲ加フルコトヲ得

第二十條第二項以下ヲ左ノ如ク改ム

前項教科目ノ外手工、農業、商業ノ一科目又ハ數科目ヲ加フ其ノ數科目ヲ加ヘタル場合ニ於テハ兒童ニハ農業、商業ヲ併セ課スルコトヲ得ス

土地ノ情況ニ依リ英語ヲ加フルコトヲ得

農業、商業、英語ハ之ヲ隨意科目ト爲スコトヲ得

第二十三條第一項中「第三項」ヲ「第二項」ニ、第二項中「定メム」ヲ「延長セム」ニ改ム

第三十六條第一項中「又ハ之ニ代用スル私立小學校」ヲ削ル

附　則

本令ハ明治四十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ第十三條及第三十六條第一項ノ改正ハ明治四十年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

市町村立尋常小學校ニ代用シタル私立小學校ニ關シテハ其ノ代用期間ノ滿了スルニ至ル迄仍其ノ代用ヲ存續スルコトヲ得

特別ノ事情ニ依リ第十八條第一項ニ依リ難キ場合ニ於テハ市町村立小學校ニ在リテハ市町村又ハ町村學校組合ニ於テ、私立小學校ニ在リテハ設立者ニ於テ期間ヲ定メテ府縣知事ノ認可ヲ受ケ當分ノ內尋常小學校ニ關シテハ仍從前ノ規定ニ依ルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ高等小學校ニ關シテモ仍從前ノ規定ニ依ルコトヲ得

前項ニ依ル尋常小學校ノ教科目ニ關シテハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

第十九條ノ教科目中唱歌及第二十條第二項ノ教科目ハ當分ノ內之ヲ闕クコトヲ得

本令施行ノ際現ニ在學スル高等小學校ノ兒童ニ關シテハ其ノ卒業スルニ至ル迄仍從前ノ規定ニ依ルコトヲ得

●小學校令施行規則中改正

明治四十年三月二十五日
文部省令第六號

明治三十三年文部省令第十四號小學校令施行規則中左ノ通改正ス

第三條第二項中「近易ナル」ヲ削ル

第四條第二項及第三項ヲ左ノ如ク改ム

尋常小學校ニ於テハ初ハ十以下ノ數ノ範圍內ニ於ケル數ヘ方、書キ方及加減乘除ヲ授ケ漸ク其ノ範圍ヲ擴メテ百以下ノ數ニ及ホシ更ニ進ミテ通常ノ加減乘除竝ニ小數、諸等數及簡易ナル分數、步合算ヲ授クヘシ

高等小學校ニ於テハ分數、步合算ヲ授ケ比例ニ及ホシ學校ノ修業年限ニ應シ更ニ求積ヲ授ケ又土地ノ情況ニ依リテハ日用簿記ノ大要ヲ授クヘシ

第五條第二項ヲ左ノ二項ニ改ム

尋常小學校ニ於テハ建國ノ體制、皇統ノ無窮、歷代天皇ノ盛業、忠良賢哲ノ事蹟、國民ノ武勇、文化ノ由來、外國トノ關係等ノ大要ヲ授ケ以テ國初ヨリ現時ニ至ルマテノ事歷ヲ知ラシムヘシ

高等小學校ニ於テハ前項ノ旨趣ヲ擴メテ稍々詳ニ我國發達ノ蹟ヲ知ラシムヘシ

第六條第二項ヲ左ノ二項ニ改ム

尋常小學校ニ於テハ本邦ノ地勢、氣候、區劃、都會、產物、交通等竝ニ地球ノ形狀、運動等ノ大要ヲ理會セシメ且韓國及滿洲地理ノ大要ヲ授ケ兼テ本邦トノ關係ニ於テ重要ナル諸國ノ地理ニ關スル簡易ナル知識ヲ得シムヘシ

高等小學校ニ於テハ各大洲ノ地勢、氣候、區劃、交通等ノ概略ヨリ進ミテ本邦トノ關係ニ於テ重要ナル諸國ノ地理ノ大要及本邦ノ政治經濟上ノ狀態竝ニ外國ニ對スル地位等ノ大要ヲ知ラシメ又地文ノ一斑ヲ授クヘシ

第七條第二項ヲ左ノ二項ニ改ム

尋常小學校ニ於テハ植物、動物、鑛物及自然ノ現象ニ就キ主トシテ兒童ノ目擊シ得ル事項ヲ授ケ特ニ重要ナル植物、動物、鑛物ノ名稱、形狀、效用及發育ノ大要ヲ知ラシメ又通常ノ物理化學上ノ現象及人身生理ノ初步ヲ授クヘシ

高等小學校ニ於テハ前項ニ準シ漸ク其ノ程度ヲ進メ特ニ重要ナル元素及化合物、簡易ナル器械ノ構造、作用、人身ノ生理衞生ノ大要ヲ授ケ兼テ植物、動物、鑛物ノ相互及人生ニ對スル關係ノ大要ヲ理會セシムヘシ

第八條第二項及第三項ヲ左ノ如ク改ム

尋常小學校ニ於テハ單形ヨリ始メ漸ク簡單ナル形體ニ及ホシ實物若ハ手本ニ就キ又時時自己ノ工夫ヲ以テ畫カシムヘシ

高等小學校ニ於テハ前項ニ準シ漸ク其ノ程度ヲ進メテ諸般ノ形體ヲ畫カシムヘシ土地ノ情況ニ依リテハ簡易ナル幾何畫ヲ授クルコトヲ得

第九條第二項及第三項ヲ左ノ如ク改ム

尋常小學校ニ於テハ平易ナル單音唱歌ヲ授クヘシ

高等小學校ニ於テハ前項ニ準シ漸ク其ノ程度ヲ進メテ授クヘシ又便宜簡易ナル複音唱歌ヲ授クルコトヲ得

第十條第二項ヲ左ノ如ク改ム

尋常小學校ニ於テハ初ハ適宜ニ遊戲ヲ爲サシメ漸ク普通體操ヲ加ヘ又男兒ニハ兵式體操ヲ加ヘ授クヘシ

第十一條第二項ヲ左ノ如ク改ム

尋常小學校ニ於テハ運針法ヨリ始メ漸ク通常ノ衣類ノ縫ヒ方ヲ授ケ又便宜裁チ方、繕ヒ方等ヲ授クヘシ

第十七條第一項但書ヲ削リ第二項ヲ左ノ二項ニ改ム

手工ヲ加フルトキ又ハ第一學年、第二學年ニ於テ圖畫ヲ課スルトキハ其ノ毎週教授時數ハ學校長ニ於テ他ノ教科目ノ毎週教授時數ヲ減シ之ニ充ツヘシ

唱歌ヲ闕クトキハ其ノ毎週教授時數ハ學校長ニ於テ他ノ教科目ニ配當スルコトヲ得

第十八條第一項中「乃至第七號表」ヲ「又ハ第六號表」ニ改メ第二項及第三項ヲ左ノ如ク改ム

手工、農業、商業ノ三科目ヲ闕クトキハ學校長ニ於テ第一學年、第二學年ノ男兒ニ就キテハ毎週二時、第三學年ノ男兒ニ就キテハ毎週四時ヲ他ノ教科目ニ配當スヘシ

英語ヲ加フルトキハ學校長ニ於テ他ノ教科目ノ毎週教授時數中ヨリ二時以下ヲ減シ之ニ充ツヘシ

第十九條第一項第一號中「二十八時」ヲ「三十時」ニ、第二號中「三十時」ヲ「三十二時」ニ改ム

第二十九條第二項中「此ノ場合ニ在リテハ府縣知事ハ豫メ文部大臣ノ指揮ヲ受クヘシ」ヲ削ル

第三十一條ニ左ノ一項ヲ加フ

特別ノ事情アルトキハ市町村立小學校ニ在リテハ市町村又ハ町村學校組合ニ於テ、私立小學校ニ在リテハ設立者ニ於テ府縣知事ノ認可ヲ受ケ第一項又ハ第三項ノ規定ニ依ラサルコトヲ得

第四十條中「代用私立小學校ニ在リテハ設立者ニ於テ」ヲ削ル

第四十八條第一項中「及教授時間」ヲ「教授時間及毎週教授時數」ニ改メ第二項ヲ削ル

第五十二條中「第四十八條第一項」ヲ「第四十八條」ニ改ム

第五十三條但書中「尋常小學校」ノ下ニ「第四學年以下」ヲ加フ

第九十七條　削除

第百八條第一項但書ヲ左ノ如ク改ム

但シ手工、農業、商業、英語ノ一科目若ハ數科目ハ之ヲ闕クコトヲ得

第百九條第一項及第二項ヲ左ノ如ク改ム

小學校准教員ノ試驗科目及其ノ程度ハ左ノ如シ但シ農業、商業及體操中ノ兵式體操ハ男子ニ限リ裁縫ハ女子ニ限ル

修身	道德ノ要旨
教育	教授法ノ大要
國語	普通文及小學校教科用讀本ノ講讀竝ニ作文習字
算術	整數、分數、小數、諸等數、步合算、比例、求積
歷史	日本歷史ノ大要
地理	日本地理及外國地理ノ大要
理科	博物、物理、化學ノ大要
圖畫	自在畫及簡易ナル幾何畫
音樂	唱歌、樂器使用法
體操	普通體操及兵式體操
裁縫	通常ノ衣類ノ裁チ方、縫ヒ方、繕ヒ方
手工	手工ノ大要
農業	農業ノ大要
商業	商業ノ大要

圖畫、音樂、手工、農業、商業ノ一科目若ハ數科目ハ之ヲ闕クコトヲ得

第百十條第二項中「試驗ハ」ノ下ニ「教育ノ大要及」ヲ加フ

第百十一條　尋常小學校本科正教員ノ試驗科目及其ノ程度ハ左ノ如シ但シ體操中ノ兵式體操ハ男子ニ限リ裁縫ハ女子ニ限ル

修身	道德ノ要旨
教育	教育、教授法及學校管理法ノ大要
國語	普通文及小學校教科用讀本ノ講讀竝ニ作文、習字
算術	整數、分數、小數、諸等數、步合算、比例、求積
歷史	日本歷史ノ大要
地理	日本地理及外國地理ノ大要
理科	博物、物理、化學ノ大要
圖畫	自在畫
音樂	唱歌、樂器使用法
體操	普通體操及兵式體操
裁縫	通常ノ衣類ノ裁チ方、縫ヒ方、繕ヒ方

音樂ハ之ヲ闕クコトヲ得

第百十二條　尋常小學校准教員ノ試驗科目及其ノ程度ハ左ノ如シ但シ體操中ノ兵式體操ハ男子ニ限ル

修身	道德ノ要旨
教育	教授法ノ大要
國語	小學校教科用讀本ノ講讀竝ニ作文、習字
算術	整數、分數、小數、諸等數、步合算、比例
歷史	日本歷史ノ大要
地理	日本地理及外國地理ノ大要
理科	博物、物理、化學ノ初步
圖畫	簡易ナル自在畫
唱歌	單音唱歌
體操	普通體操及兵式體操

圖畫、唱歌ノ一科目若ハ二科目ハ之ヲ闕クコトヲ得

第百十三條第二號中「他ノ府縣ニ於テ授與シタル」ヲ削ル

第百十四條第二項中「三箇年以內ニ」ヲ削ル

第百十六條　府縣知事又ハ高等師範學校長、女子高等師範學校長ハ左ノ各號ノ一ニ該當シ其ノ成績佳良ナル者ニ就キ普通免許狀ノ授與ヲ文部大臣ニ申請スルコトヲ得

一　小學校正教員府縣免許狀ヲ有シ十箇年以上市町村立小學校、高等師範學校、女子高等師範學校、師範學校ノ訓導ノ職ニ在ル者

二　高等師範學校又ハ女子高等師範學校ヲ卒業シ三箇年以上市町村立小學校、高等師範學校、女子高等師範學校、師範學校ノ訓導ノ職ニ在ル者

三　文部省直轄學校ニ於テ某科目ニ關シ特ニ教員ノ職ニ適スル教育ヲ受ケテ卒業シ三箇年以上市町村立小學校、高等師範學校、女子高等師範學校、師範學校ノ訓導ノ職ニ在ル者

第百五十九條中「三十時」ヲ「三十二時」ニ改ム

第百七十六條　特別ノ事情アル市町村又ハ町村學校組合ニ於テハ他ノ小學校設置負擔ノ區域ヨリ入學スル兒童ニ就キテハ府縣知事、其ノ他ノ兒童ニ就キテハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ期限ヲ定メテ前二條ノ制限ヲ超エタル授業料ヲ徵收スルコトヲ得

第百八十三條第八號中「第三項」ヲ「第二項」ニ改メ第十一號ヲ削ル

第八章　削除

附　則

本令ハ明治四十一年四月一日ヨリ施行ス但シ第二十九條第二項、第三十一條、第四十條、第四十八條、第五十二條、第九十七條、第百十六條、第百七十六條、第百八十三條及第八章ノ改正ハ明治四十年四月一日ヨリ施行ス

明治四十年勅令第五十二號附則第四項ノ教科目ニ關シテハ仍從前ノ例ニ依ル但シ管理者又ハ設立者ニ於テ府縣知事ノ認可ヲ受ケ本令ノ規定ヲ斟酌スルコトヲ得

地理ノ教授ノ程度ニ關シテハ從前ノ規定ニ依リ編纂シタル教科用圖書ヲ使用スル間ハ仍從前ノ例ニ依ル

本令施行ノ際存在スル補習科ニ關シテハ仍從前ノ例ニ依ルコトヲ得

本令施行前第百十四條第一項ニ依リ授與シタル證明書ノ效力ハ仍從前ノ規定ニ依ル

市町村又ハ町村學校組合ハ當分ノ內府縣知事ノ認可ヲ受ケ本令施行ノ際現ニ高等小學校ニ於テ徵收スル授業料額ノ範圍內ニ於テ尋常小學校第五學年及第六學年ノ授業料額ヲ定メ之ヲ徵收スルコトヲ得

明治四十年勅令第五十二號附則第二項ニ依リ存續スル代用私立小學校ニ關シテハ仍從前ノ規定ニ依ル

明治四十年勅令第五十二號附則第三項ニ依ル尋常小學校ノ兒童ノ學籍簿ハ仍從前ノ樣式ニ依ルコトヲ得

第四號表

學年／教科目	第一學年		第二學年		第三學年		第四學年		第五學年		第六學年	
	毎週教授時數		毎週教授時數		毎週教授時數		毎週教授時數		毎週教授時數		毎週教授時數	
修身	二	道德ノ要旨	二	道德ノ要旨	二	道德ノ要旨	二	道德ノ要旨	二	道德ノ要旨	二	道德ノ要旨

國語	算術	日本歷史	地理	理科	圖畫	唱歌	體操	裁縫	手工	計
一〇	五					四				二二
發音、假名及近易ナル普通文ノ讀ミ方、書キ方、綴リ方、話シ方	二十以下ノ數ノ範圍內ニ於ケル數ヘ方、書キ方及加減乘除				（單形 簡單ナル形體）	平易ナル單音唱歌	遊戲		簡易ナル細工	
一三	六					四				二四
假名、日常須知ノ文字及近易ナル普通文ノ讀ミ方、書キ方、綴リ方、話シ方	百以下ノ數ノ範圍內ニ於ケル數ヘ方、書キ方及加減乘除				（單形 簡單ナル形體）	平易ナル單音唱歌	遊戲 普通體操		簡易ナル細工	
一四	六				一	一	三	一		男二七 女二八
日常須知ノ文字及近易ナル普通文ノ讀ミ方、書キ方、綴リ方、話シ方	通常ノ加減乘除				單形 簡單ナル形體	平易ナル單音唱歌	遊戲 普通體操	運針法 通常ノ衣類ノ縫ヒ方	簡易ナル細工	
一四	六				一	一	三	二		男二七 女二九
日常須知ノ文字及近易ナル普通文ノ讀ミ方、書キ方、綴リ方、話シ方	通常ノ加減乘除及小數ノ呼ヒ方、書キ方及簡易ナル加減乘除 （珠算　加減）				簡單ナル形體	平易ナル單音唱歌	遊戲 普通體操	通常ノ衣類ノ縫ヒ方、繕ヒ方	簡易ナル細工	
一〇	四	三		二	男二 女一	二	三	三		男二八 女三〇
日常須知ノ文字及普通文ノ讀ミ方、書キ方、綴リ方、話シ方	整數 小數 諸等數 （珠算　加減）	日本歷史ノ大要	日本地理ノ大要	植物、動物、鑛物及自然ノ現象、通常ノ物理化學上ノ現象	簡單ナル形體	平易ナル單音唱歌	普通體操 遊戲 男　兵式體操	通常ノ衣類ノ縫ヒ方、繕ヒ方	簡易ナル細工	
一〇	四	三		二	男二 女一	二	三	三		男二八 女三〇
日常須知ノ文字及普通文ノ讀ミ方、書キ方、綴リ方、話シ方	分數 步合算 （珠算　加減乘除）	前學年ノ續キ	前學年ノ續キ韓國及滿洲其ノ他外國地理ノ大要	植物、動物、鑛物及自然ノ現象、通常ノ物理化學上ノ現象、人身生理ノ初步	簡單ナル形體	平易ナル單音唱歌	普通體操 遊戲 男　兵式體操	通常ノ衣類ノ縫ヒ方、裁チ方、繕ヒ方	簡易ナル細工	

圖畫ハ第一學年第二學年ニ於テハ毎週一時之ヲ課スルコトヲ得

手工ハ第一學年第二學年第三學年ニ於テハ毎週一時、第四學年第五學年第六學年ニ於テハ毎週二時之ヲ課スルコトヲ得

（　）及手工ノ各欄ハ朱書トス

第五號表

教科目／學年	毎週教授時數	第一學年	毎週教授時數	第二學年
修身	二	道德ノ要旨	二	道德ノ要旨
國語	八	日常須知ノ文字及普通文ノ讀ミ方、書キ方、綴リ方	八	日常須知ノ文字及普通文ノ讀ミ方、書キ方、綴リ方
算術	四	分數 步合算 比例 （珠算　加減乘除）	四	比例 （日用簿記） （珠算　加減乘除）
日本歷史	三	日本歷史ノ大要	三	前學年ノ續キ
地理		外國地理ノ大要		地理ノ補習
理科	二	植物、動物、鑛物及自然ノ現象、通常ノ物理化學上ノ現象、元素及化合物、簡易ナル器械ノ構造作用、人身生理衛生ノ大要	二	自然ノ現象、通常ノ物理化學上ノ現象、元素及化合物、簡易ナル器械ノ構造、作用、人身生理衛生ノ大要
圖畫	男二 女一	諸般ノ形體	男二 女一	諸般ノ形體 （簡易ナル幾何畫）
唱歌	二	單音唱歌 （簡易ナル複音唱歌）	二	單音唱歌 （簡易ナル複音唱歌）
體操	三	普通體操 遊戲 男　兵式體操	三	普通體操 遊戲 男　兵式體操
裁縫	四	通常ノ衣類ノ縫ヒ方、裁チ方、繕ヒ方	四	通常ノ衣類ノ縫ヒ方、裁チ方、繕ヒ方
手工	男二 女一	簡易ナル細工	男二 女一	簡易ナル細工
農業	二	農事　農事ノ大要 水產　水產ノ大要	二	農事　農事ノ大要 水產　水產ノ大要
商業	二	商業ノ大要	二	商業ノ大要
英語		讀ミ方、書キ方、綴リ方、話シ方		讀ミ方、書キ方、綴リ方、話シ方
計	男二八　三〇 女三〇　三二		男二八　三〇 女三〇　三二	

（　）及英語ノ各欄ハ朱書トス

第六號表

教科目／學年	毎週教授時數	第一學年	毎週教授時數	第二學年	毎週教授時數	第三學年
修身	二	道德ノ要旨	二	道德ノ要旨	二	道德ノ要旨
國語	八	日常須知ノ文字及普通文ノ讀ミ方、書キ方、綴リ方	八	日常須知ノ文字及普通文ノ讀ミ方、書キ方、綴リ方	八	日常須知ノ文字及普通文ノ讀ミ方、書キ方、綴リ方
算術	四	分數 步合算 比例 （珠算　加減乘除）	四	比例 （珠算　加減乘除）	男四 女三	前各學年ノ補習 求積 （日用簿記） （珠算　加減乘除）
日本歷史	三	日本歷史ノ大要	三	前學年ノ續キ	二	維新以來ノ事蹟
地理		外國地理ノ大要		地理ノ補習		地理ノ補習
理科	二	植物、動物、鑛物及自然ノ現象、通常ノ物理化學上ノ現象、元素及化合物、簡易ナル器械ノ構造、作用、人身生理衛生ノ大要	二	自然ノ現象、通常ノ物理化學上ノ現象、元素及化合物、簡易ナル器械ノ構造、作用、人身生理衛生ノ大要	二	理科ノ補習
圖畫	男二 女一	諸般ノ形體	男二 女一	諸般ノ形體 （簡易ナル幾何畫）	男二 女一	諸般ノ形體 （簡易ナル幾何畫）

唱歌	二	單音唱歌（簡易ナル複音唱歌）	二	單音唱歌（簡易ナル複音唱歌）	一	單音唱歌（簡易ナル複音唱歌）
體操	三	普通體操 遊戲 男 兵式體操	三	普通體操 遊戲 男 兵式體操	三	普通體操 遊戲 男 兵式體操
裁縫	四	通常ノ衣類ノ縫ヒ方、裁チ方、繕ヒ方	四	通常ノ衣類ノ縫ヒ方、裁チ方、繕ヒ方	六	通常ノ衣類ノ縫ヒ方、裁チ方、繕ヒ方
手工	男 二 女 一	簡易ナル細工	男 二 女 一	簡易ナル細工	男 四 女 二	簡易ナル細工
農業	二	農事 水産 農事ノ大要 水産ノ大要	二	農事 水産 農事ノ大要 水産ノ大要	男 四 女 二	農事 水産 農事ノ大要 水産ノ大要
商業	二	商業ノ大要	二	商業ノ大要	男 四 女 二	商業ノ大要
英語		讀ミ方、書キ方、綴リ方、話シ方		讀ミ方、書キ方、綴リ方、話シ方		讀ミ方、書キ方、綴リ方、話シ方
計	男 二八 三〇 女 三〇 三二		男 二八 三〇 女 三〇 三二		男 二八 三〇 女 三〇 三二	

（　）及英語ノ各欄ハ朱書トス

第十號表

氏名	生年月日

住所	入學年月日	入學前ノ經歷	卒業年月日	退學年月日	退學ノ理由

保護者			
氏名	住所	職業	兒童トノ關係

	學業成績													在學中出席及缺席		身體ノ狀況									備考
學年	修身	國語	算術	日本歷史	地理	理科	圖畫	唱歌	體操	裁縫		操行	修了ノ年月日	出席日數	缺席日數 病氣事故	身長	體重	胸圍	脊柱	體格	眼疾	耳疾	齒牙	疾病	
第一學年																									
第二學年																									
第三學年																									
第四學年																									
第五學年																									
第六學年																									

備考　學校醫ヲ置カサル學校ニ於テハ身體ノ狀況ハ之ヲ闕クコトヲ得

明治四十年六月十五日
文部省令第二十號

明治三十三年文部省令第十四號小學校令施行規則中左ノ通改正ス

第百四十八條月俸表中本科正教員ノ欄十級及准教員ノ欄六級ヲ削ル

附　則

本令ハ明治四十一年四月一日ヨリ施行ス

明治四十年八月一日
文部省令第二十四號

明治三十二年文部省令第十四號小學校令施行規則中左ノ通改正ス

第九十九條第一項ヲ左ノ如ク改ム

會長ハ府縣ニ在リテハ內務部長タル府縣事務官、北海道ニ在リテハ第二部長タル道廳事務官ヲ以テ之ニ充ツ

●小學校令中改正要旨並施行上注意事項

明治四十年三月二十五日
文部省訓令第一號

北海道廳　府　縣

今般勅令第五十二號ヲ以テ小學校令中ニ改正ヲ加ヘラレ文部省令第六號ヲ以テ小學校令施行規則ノ一部ヲ改正セリ今左ニ改正ノ要旨ヲ擧ケ且其ノ施行上特ニ注意ヲ要スル事項ノ大要ヲ示サン

義務教育ノ年限即チ尋常小學校ノ修業年限ヲ六箇年ニ延長スルハ改正令ノ主眼トスル所ナリ蓋シ從來ノ修業年限ヲ以テ義務教育ノ本旨ヲ全ウスルコトハ頗ル困難ナルニ因リ明治三十三年現行小學校令制定ノ際既ニ其ノ年限ヲ延長スルノ必要ヲ認メタルモ當時四箇年ノ義務教育スラ尚未タ普及スルニ至ラサリシカ故ニ將來ニ之カ實行ヲ期スルコトトシ其ノ準備トシテ尋常小學校ニ修業年限二箇年ノ高等小學校ヲ併置スルコトヲ奬勵スルニ止メタリ爾來義務教育ハ著シク普及スルニ至レルノミナラス尋常小學校ニ高等小學校ヲ併置シタルモノ亦大ニ增加シ今ヤ改正ノ時機既ニ熟セルヲ認ムルト共ニ戰後益々國民ノ智德ヲ上進スルノ必要アリ是レ義務教育ノ年限ヲ延長セラレタル所以ナリ固ヨリ今回ノ改正ハ未タ之ヲ以テ足レリトスルニアラスト雖モ我國現下ノ情況ハ遽ニ之ヲ六箇年以上ニ延長スルコトヲ許ササルヲ以テ暫ク之ニ滿足シ其ノ完成ハ更ニ之ヲ他日ニ期セントス

尋常小學校修業年限ノ延長ハ現在ノ高等小學校第一學年第二學年ヲ尋常小學校ノ範圍內ニ移シタルニ外ナラス故ニ其ノ教科目ニ關シテハ多少ノ取捨ヲ爲シタリト雖モ概ネ高等小學校第一學年第二學年ノ教科目ヲ加ヘラレタルニ過キス而シテ此等ノ教科目中手工ハ從來教育上ノ效果顯著ニシテ將來ハ必設ノ科目ト爲スノ期至ルヘキヲ以テ務メテ其ノ加設ヲ奬勵センコトヲ望ム

高等小學校ハ現在ノ第三學年第四學年ヲ其ノ第一學年第二學年トシテ仍之ヲ存續シ土地ノ情況ニ依リテハ三箇年ニ延長スルヲ得ルコトトナレリ蓋シ義務教育ハ他日再ヒ其ノ年限ノ延長セラルルコトアルヘク又本來高等小學校ハ義務教育ヲ終リタル兒童ニ一層精深適切ナル普通教育ヲ施スヲ主トスルモノナレハ其ノ目的トスル所自ラ中學校高等女學校等ト同シカラス故ニ義務教育ヲ終リ尚二三箇年間教育ヲ受ケントスル者ニシテ中學校若ハ高等女學校等ニ入リ半途ニ退學スルカ如キ者ニアリテハ寧ロ初ヨリ高等小學校ニ入學シ適切ニシテ且完結セル教育ヲ受クルヲ以テ優レリトス若シ夫レ此ノ際義務教育年限ノ延長ニ伴ヒ既設ノ高等小學校ヲ廢止セントスルカ如キハ毫モ理由ナキコトナルノミナラス更ニ必要アル場合ニ於テハ却テ之カ新設ヲ躊躇スヘカラサルナリ

義務教育年限ノ延長ハ全國一齊ニ之ヲ實施スルハ固ヨリ望ム所ナレトモ市町村ノ情況ニ依リ遽ニ之ヲ實行シ難キモノアランコトヲ慮リ特別ノ事情アルモノハ當分仍從前ノ規定ニ依ルコトヲ許サレタリ是レ市町村ノ經濟ヲ斟酌シ成ルヘク便宜ノ處置ヲ許スノ旨趣ニ外ナラス

此ノ如ク義務教育年限ノ延長ハ其ノ時機既ニ熟シ加フルニ市町村ノ情況ニ依リ仍從來ノ規定ニ依ルコトヲ得シムル等便宜ノ處置ヲ許スヲ以テ改正令ノ實施ハ甚シキ困難ナキヲ信スルモ之ニ伴ヒ學級數ヲ增シ隨テ校舍ノ增築ト教員ノ增加トヲ要シ經費ノ增額ヲ來スヘキハ免レサル所ナリ然ルニ市町村ノ經濟ハ十分ノ餘裕アリト云フコトヲ得ス加フルニ時勢ノ進步ニ伴ヒ市町村ノ事業モ漸次多キヲ加フヘク單ニ教育上ノミニ就テ之ヲ見ルモ教員優待等經費ノ增加ヲ要スヘキモノアルヲ以テ此ノ改正令ヲ實施スルニ當リテハ務メテ節約ノ方法ヲ講スルコトヲ怠ルヘカラス即チ或ハ學級ノ編制ヲ整理シ或ハ二部教授ヲ施シ以テ校舍及教員ノ不足ヲ補フカ如キ適宜ノ方法ヲ設ケ改正令ノ實施ヲ圓滑ニスルコトヲ期セサルヘカラス蓋シ二部教授ハ之ヲ近年ノ研究ニ徵スルニ尋常小學校第一學年第二學年等幼年兒童ノ學級ニ行フトキハ其ノ教育上ノ效果ハ殆ト通常ノ教授ニ讓ラサルヲ見ル故ニ改正令實施ニ際シ經濟上必要アル場合ニ於テ一部ノ兒童ニ之ヲ行フハ時宜ニ適シタルモノタルヲ信ス殊ニ六箇年ノ單級教授ニ至リテハ若シ通學路等ノ關係上格別ノ支障ナキ場合ニ於テハ之ヲ二部教授ト爲スヲ以テ却テ利アリトスヘシ

補習教育ハ從來常ニ奬勵シタル所ナレトモ未タ十分ニ其ノ目的ヲ達スルニ至ラサリシハ遺憾トスル所ナリ今ヤ尋常小學校ノ年限ヲ延長スルモ之ニ接續シテ設クヘキ普通ノ補習教育及實業補習教育ハ益々之ヲ奬勵スルコトヲ怠ルヘカラス今回補習科ノ教授時數ノ制限ヲ廢止シタルハ畢竟之カ施設ヲシテ一層地方ノ情況ニ適切ナラシメンカ爲ニ外ナラス

尋常小學校教員ノ試驗檢定ニ就テハ其ノ程度ヲ進メ且試驗ヲ闕クコトヲ得ル科目ノ數ヲ減シタリ是レ修業年限ノ延長ニ伴ヒ其ノ學力ノ程度ヲ進メサルヲ得サルニ至リタルヲ以テナリ而シテ從來四箇年ノ尋常小學校ノ教員タルヘキ資格ヲ有スル者ヲ以テ改正後直ニ六箇年ノ尋常小學校ノ教員タルヘキ資格ヲ認メタルカ故ニ之ニ對シテハ適當ノ方法ヲ設ケ理科其ノ他必要ナル學科目ヲ講習セシメ以テ其ノ學力ヲ補習セシメンコトヲ努ムヘシ

尋常小學校ニ於テハ授業料ヲ徵收セサルヲ本體トシ特別ノ事情アルカ爲之ヲ徵收スル場合ト雖モ仍學年ニ依リ其ノ額ニ差等ヲ設ケサルヲ原則トスルハ

勿論ナリ然レトモ從來高等小學校ニ關シテハ授業料ノ收入ヲ以テ重要ナル財源ト爲セル地方少カラサルヲ以テ改正令實施ノ際高等小學校ニ於テ徵收スル授業料額ヲ超エサル限リハ尋常小學校ノ第五學年第六學年ニ於テ特ニ當分ノ內之ヲ徵收スルコトヲ許セリ是レ經濟上洵ニ已ムコトヲ得サルニ出テタルナリ而シテ之カ施行上ニ就キテハ愼密ノ查覈ヲ遂ケ適應ノ措置ヲ爲サンコトヲ要ス代用私立小學校ハ之ヲ既往ノ實驗ニ徵スルニ其ノ成績公立學校ニ比シ著シク劣ルモノアルノミナラス今ヤ全國ヲ通シテ市町村立學校ノ施設普及セルカ爲ニ其ノ數實ニ多カラスシテ僅ニ一地方ニ偏在スルニ過キス故ニ特ニ之ヲ一ノ制度トシテ存置スルノ必要ヲ認ムル能ハサルニ至レリ是レ今回ノ改正令ニ於テ此ノ制ヲ廢セラレタル所以ナリ

本大臣ハ各地方長官カ能ク改正ノ旨趣ヲ體シ國運ノ發展ニ鑑ミ地方經濟ノ狀況ニ應シ施設誘掖宜シキヲ得テ益々國民敎育ヲ進步セシメンコトヲ望ム

●臺灣小學校規則

明治四十年十月八日
臺灣總督府令第八十一號

臺灣小學校規則左ノ通相定ム

臺灣小學校規則

第一章　總則

第一條　小學校ハ內地人ノ兒童ヲ敎育スル所トス

小學校ハ兒童身體ノ發達ニ留意シテ道德敎育及國民敎育ノ基礎竝其ノ生活ニ必須ナル普通ノ知識技能ヲ授クルヲ以テ本旨トス

第二條　小學校ハ之ヲ分テ尋常小學校及高等小學校トス

尋常小學校ノ敎科ト高等小學校ノ敎科トヲ一校ニ併置スルモノヲ尋常高等小學校トス

第三條　尋常高等小學校ニ於ケル尋常小學校ノ敎科ヲ授クヘキ部分ニ對シテハ尋常小學校ノ規定ヲ準用シ高等小學校ノ敎科ヲ授クヘキ部分ニ對シテハ高等小學校ノ規定ヲ準用ス

第二章　設置

第四條　小學校ハ臺灣總督ニ於テ須要ト認ムル地ニ之ヲ設置ス

特別ノ事情アルトキハ小學校ノ分敎場ヲ設クルコトアルヘシ

第三章　修業年限、敎科目、敎則、敎科用圖書及編制

第五條　小學校ノ修業年限、敎科目、敎則、敎科用圖書及編制ニ關シテハ特ニ規定スルモノノ外小學校令及文部省令ノ定ムル所ニ依ル但シ同令中市町村及管理者ノ職權ハ廳長之ヲ行ヒ府縣知事ノ職權ハ臺灣總督之ヲ行フ

第六條　高等小學校修業年限ノ延長及小學校敎科目ノ加除ハ臺灣總督之ヲ定ム

第七條　小學校ニ補習科ヲ置クコトヲ得

補習科ニ關スル規定ハ別ニ之ヲ定ム

第八條　學校長ハ夏季休業ノ前六週間以內及後三週間以內ニ於テ每週ノ敎授時數十時以內ヲ減スルコトヲ得

前項ニ依リ減スヘキ敎授時數ハ學校長ニ於テ便宜各敎科目ノ每週敎授時數ヲ斟酌シテ之ヲ定ムヘシ

第九條　卒業證書、修業證書及學習證書ハ別記第一號、第二號及第三號書式ニ依ル

第十條　尋常高等小學校ニ於テハ尋常小學校ノ兒童ト高等小學校ノ兒童トヲ合シテ學級ヲ編制スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ一學級ノ兒童數ハ尋常小學校及高等小學校ノ一學級ノ兒童數ヲ斟酌シテ之ヲ定ムヘシ

第十一條　學校長ノ擔任スル敎授ヲ補助スル爲五學級以上ノ小學校ニ於テハ本科正敎員一人四學級以下ノ小學校ニ於テハ准敎員一人ヲ置クコトヲ得

第十二條　小學校ノ學級ヲ編制シ又ハ之ヲ變更セムトスルトキハ廳長ニ於テ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

第四章　學年、休業日及式日

第十三條　小學校ノ學年ハ四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル

學年ハ分チテ左ノ三學期トス

第一學期　四月一日ヨリ八月三十一日マテ
第二學期　九月一日ヨリ十二月三十一日マテ
第三學期　翌年一月一日ヨリ三月三十一日マテ

第十四條　每日ノ敎授始終ノ時刻ハ學校長之ヲ定ムヘシ

第十五條　小學校ノ休業日ハ左ノ如シ

一　祝日、大祭日
二　臺灣神社祭日
三　始政紀念日
四　日曜日
五　夏季休業　七月十一日ヨリ八月三十一日マテ
六　冬季休業　十二月二十六日ヨリ翌年一月七日マテ
七　學年末休業　三月二十六日ヨリ同月三十一日マテ

前項ノ外臨時休業ヲ要スルトキハ學校長ニ於テ其ノ事由ヲ具シ廳長ノ認可ヲ受クヘシ

天災事變其ノ他急迫ノ場合ニ際シ前項ノ認可ヲ受クル暇ナキトキハ學校長ニ於テ休業ヲ行フコトヲ得

第十六條　紀元節、天長節、一月一日及始政紀念日ニ於テハ職員及兒童小學校ニ參集シテ左ノ順序ニ從ヒ儀式ヲ行フヘシ

一　職員及兒童「君カ代」ヲ合唱ス
二　職員及兒童ハ
天皇陛下
皇后陛下ノ御影ニ對シ奉リ最敬禮ヲ行フ
三　學校長ハ敎育ニ關スル勅語ヲ奉讀ス
四　學校長ハ敎育ニ關スル勅語ニ基キ聖旨ノ在ル所ヲ誨告ス
五　職員及兒童ハ其ノ祝日ニ相當スル唱歌ヲ合唱ス

御影ヲ拜戴セサル小學校ニ於テハ前項第二號ノ式ヲ闕ク

第五章　學齡、入學、在學及退學

第十七條　內地人ノ兒童滿六歲ニ達シタル翌日ヨリ滿十四歲ニ至ルマテ八箇年ヲ以テ學齡トス

第十八條　學年開始マテニ學齡ニ達セサル兒童ハ其ノ學年中ハ之ヲ小學校ニ入學セシムルコトヲ得ス

第十九條　小學校ニ兒童ヲ入學セシメムトスルトキハ其ノ兒童ヲ保護スル者ニ於テ左ノ各號ニ揭クル事項ヲ具シ學校長ニ申出ヘシ

一　兒童竝保護者ノ氏名、出生年月日、本籍地、現住所及族稱
二　兒童入學前ノ經歷
三　保護者ノ職業及兒童トノ關係

在學ノ兒童ニ關シ前項第一號及第三號ニ揭クル事項ニ異動ヲ生シタルトキ又ハ兒童死亡シタルトキハ保護者ニ於テ遲滯ナク之ヲ學校長ニ屆出ヘシ

第二十條　學校長ハ入學シタル兒童ニ就キ別記第四號書式ニ依リ學籍簿ヲ編製スヘシ

前項學籍簿ニ記載ノ事項ニ異動ヲ生シタルトキハ遲滯ナク之ヲ加除訂正スヘシ

第二十一條　學校長ハ別記第五號書式ニ依リ在學兒童ノ出席簿ヲ作リ其ノ出席缺席ヲ明ニスヘシ

第二十二條　在學ノ兒童ヲ退學セシメムトスルトキハ其ノ兒童ヲ保護スル者ニ於テ其ノ事由ヲ具シ學校長ニ申出ヘシ

第二十三條　學校長ハ傳染病ニ罹リ若ハ其ノ虞アル兒童又ハ性行不良ニシテ他ノ兒童ノ敎育ニ妨アリト認メタル兒童ノ出席ヲ停止スルコトヲ得

第二十四條　學校長ハ在學兒童ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スル者アルトキハ廳長ノ認可ヲ受ケ退學ヲ命スルコトヲ得

一　性行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者
二　引續キ六箇月以上缺席シタル者
三　正當ノ事由ナクシテ引續キ一箇月以上缺席シタル者

第六章　授業料

第二十五條　小學校ニ入學シタル兒童ヲ保護スル者ハ其ノ兒童ノ在學中授業料ヲ納ムヘシ

第二十六條　授業料ハ尋常小學校ニ在リテハ一箇月三十錢、高等小學校ニ在リテハ一箇月五十錢トシ每月下旬ニ於テ其ノ月分ヲ徵收ス但シ退學又ハ死亡ノ場合ハ隨時之ヲ徵收ス

第二十七條　夏季休業若ハ學校ノ都合ニ依リ休業全月ニ涉リタルトキ又ハ兒童ノ病氣其ノ他正當ノ事由ニ依リ缺席全月ニ涉リタルトキハ其ノ月分ノ授業料ヲ徵收セス

第二十八條　本島內他ノ小學校ニ在學シタル者入學シタル場合ニ於テ既ニ其ノ月分ノ授業料ヲ納メタルトキハ再之ヲ徵收セス

第二十九條　貧窮ノ爲授業料ヲ納ムルコト能ハサル者ニ對シテハ廳長ニ於テ其ノ全部若ハ一部ヲ免除スルコトヲ得

附　則

本令ハ明治四十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十五年府令第二十四號臺灣小學校規則ハ之ヲ廢止ス

（別記）

第一號書式

番　號

卒業證書

校印

道府縣族稱
氏　名
生年月日

尋常（高等）小學校ノ敎科ヲ卒業セシコトヲ證ス

年　月　日

何尋常（高等又ハ尋常高等）小學校長　氏　名　印

備考　修業年限三箇年ノ高等小學校ノ卒業證書ニハ高等小學校ノ下ニ修業年限三箇年ヲ割註ニ入ル

第二號書式

番號

修業證書

道府縣族稱

氏名

生年月日

校印

尋常（高等）小學校第何學年ノ課程ヲ修業セシコトヲ證ス

年　月　日

何尋常（高等又ハ尋常高等）小學校

第三號書式

番號

學習證書

道府縣族稱

氏名

生年月日

校印

尋常（高等）小學校（第何學年乃至第何學年）ノ課程ヲ何箇年間學習セシコトヲ證ス

年　月　日

何尋常（高等又ハ尋常高等）小學校

第四號書式

住所	本籍地族稱	氏名	生年月日

入學年月日	入學前ノ經歷	尋常小學校卒業年月日	高等小學校卒業年月日	退學年月日	退學ノ理由

保護者				
氏名	住所	本籍地族稱	職業	兒童トノ關係

	學年	尋常小學校						高等小學校		備考
		第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	第六學年	第一學年	第二學年	
學業成績	修身									
	國語									
	算術									
	日本歷史									
	地理									
	理科									
	圖畫									
	唱歌									
	體操									
	裁縫									
	手工									
	英語									
	操行									
	修了ノ年月日									
在學中出席及缺席	出席日數									
	缺席日數（病氣 事故）									
身體ノ状況	身長									
	體重									
	胸圍									
	脊柱									
	體格									
	眼疾									
	耳疾									
	齒牙									
	疾病									

備考　身體ノ状況ノ欄ハ醫師ヲシテ檢査ヲ行ハシメタルトキ之ヲ記入スヘシ又修業年限三箇年ノ高等小學校ニ在リテハ第二學年ノ次ニ第三學年ノ欄ヲ設クヘシ

第五號書式

明治　年　月分

何學校第何學年兒童出席簿

擔任　官職　氏名

番號 氏名	一日	二日	三日	四日	五日	六日	七日	八日	九日	十日	十一日	十二日	十三日	十四日	十五日	十六日	十七日	十八日	十九日	二十日	二十一日	二十二日	二十三日	二十四日	二十五日	二十六日	二十七日	二十八日	二十九日	三十日	三十一日	出席累計	缺席累計
出席數																																	
缺席數																																	
授業日數																																	

入學兒童數	退學兒童數
月末在籍兒童數	出席兒童數
皆出席兒童數	皆缺席兒童數
兒童出席總數	兒童缺席總數
一日出席平均兒童數	一日缺席平均兒童數

記載例　｜出席　×早退　φ遲參　○病氣缺席　△事故缺席

●臺灣小學校高等小學科修業年限中改正

明治四十年四月十六日
臺灣總督府告示第五十四號

明治三十五年五月告示第五十九號臺灣小學校高等小學科ノ修業年限ニ左ノ通追加ス

打狗尋常高等小學校　四箇年

●臺北幼稚園廢止

明治四十年三月十五日
臺灣總督府告示第二十九號

臺北幼稚園ハ明治四十年三月三十一日限之ヲ廢止ス

●臺灣公學校令廢止

明治四十年二月二十六日
勅令第十四號總、內、大臣副署

朕臺灣公學校令廢止ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣公學校令ハ之ヲ廢止ス

附　則

本令ハ明治四十年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

●臺灣公學校令

明治四十年二月二十六日
律令第一號

臺灣公學校令明治三十九年法律第三十一號第一條及第二條ニ依リ勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣公學校令

第一條　公學校ハ街庄又ハ數街庄ニ於テ臺灣總督ノ認可ヲ受ケ之ヲ設立スルモノトス

第二條　公學校ハ授業料ヲ徴收スルコトヲ得

第三條　公學校ハ基本財産ヲ有スルコトヲ得

第四條　公學校ノ設立維持ニ關スル費用ハ基本財産ノ收入寄附金及授業料ヲ以テ支辨スルノ外其ノ設立區域内街庄住民ノ負擔トス

前項ノ負擔ハ臺灣總督ノ定ムル所ニ從ヒ廳長之ヲ賦課徴收ス

第五條　公學校教員ノ俸給及諸給與ハ地方税ノ支辨トス

非常災ノ爲前條ノ費用ヲ一時ニ負擔スルコト能ハサルトキハ一定ノ期間內地方税ヨリ繰替ヲ爲スコトヲ得

第六條　公學校設立區域内街庄住民ノ負擔スル費用及授業料ハ租税滞納處分ノ例ニ依リ之ヲ徴收スルコトヲ得

第七條　公學校ハ臺灣總督ノ監督ヲ承ケ廳長之ヲ管理ス

第八條　本令ニ規定スルモノノ外必要ナル規定ハ臺灣總督之ヲ定ム

第九條　本令ハ蕃人ノ子弟ヲ就學セシムヘキ公學校ニ之ヲ適用セス

附　則

本令ハ明治四十年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

臺灣公學校令ニ依リ設置シタル公學校ハ本令ニ依リ設立シタルモノト看做ス

●臺灣公學校規則中改正

明治四十年二月二十六日
臺灣總督府令第九號

明治三十七年（三月）府令第二十四號臺灣公學校規則中左ノ通改正ス

第二條中「十六歲」ヲ「二十歲」ニ改ム

第三條　公學校ノ修業年限ハ六箇年トス但土地ノ情況ニ依リ四箇年又ハ八箇年ト爲スコトヲ得」

公學校ノ教科目ハ修身、國語、算術、漢文、唱歌、體操トシ女兒ノ爲ニ裁縫ヲ加ヘ修業年限八箇年ノ公學校ニハ理科、圖畫及男兒ノ爲ニ手工、農業、商業ノ一科目若ハ二科目ヲ加フ

土地ノ情況ニ依リ漢文、唱歌、裁縫ヲ缺キ又修業年限六箇年ノ公學校ニ在テハ男兒ノ爲ニ手工、農業、商業ノ一科目若ハ二科目ヲ加フルコトヲ得

廳長ハ修業年限ヲ四箇年又ハ八箇年ト爲サントスルトキ又ハ教科目ヲ加除セントスルトキ若ハ第二項ノ教科目ヲ定メントスルトキハ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

第四條　削除

第二章中「設置」ヲ「設立」ニ第七條、第八條中「廳長」ヲ「臺灣總督」ニ改ム

第十一條第四項中產業ノ下ニ「、重要ナル制度」ヲ加フ

第十二條第二項中「ニ及ヒ漸次度量衡、貨幣及時ノ計算」ヲ「、分數、步合算及比例」ニ改メ第五項ヲ左ノ如ク改ム

算術ノ問題ハ度量衡、貨幣及時ノ計算ニ關スル事項等ニ就キ日常ニ適切ナルモノヲ選ヒ且他ノ教科目ニ於テ授ケタル事項ニ連絡セシムヘシ

第十七條第三項　削除

第十九條ノ二　理科ハ通常ノ天然物及自然ノ現象ニ關スル知識ノ一斑ヲ得シメ其ノ相互及人生ニ對スル關係ノ大要ヲ理會セシメ迷信ヲ去リ兼テ觀察ヲ精密ニシ自然ヲ愛スルノ心ヲ養フヲ以テ要旨トス

理科ハ植物、動物、鑛物、地文及通常ノ物理化學上ノ現象中主トシテ兒童ノ目擊シ得ル事項ニシテ成ルヘク農業、商業、工業等實際生活ニ適切ナルモノヲ選ヒテ教授シ又人身生理及衛生ノ大要ヲ授クヘシ

理科ヲ授クルニハ成ルヘク實地ノ觀察ニ基キ若ハ標本、模型、圖畫等ヲ示シ又簡單ナル實驗ヲ施シ明瞭ニ理會セシメンコトヲ要ス

第十九條ノ三　圖畫ハ通常ノ形體ヲ看取シ正シク之ヲ畫クノ能ヲ得シメ兼テ美感ヲ養フヲ以テ要旨トス

圖畫ハ先ツ單形ヨリ始メ漸ク簡單ナル形體ニ及ホシ時時直線曲線ニ基キタル諸形ヲ工夫シテ之ヲ畫カシムヘシ尙進ミテハ簡易ナル幾何畫ヲ授クルコトヲ得

圖畫ヲ授クルニハ成ルヘク他ノ教科目ニ於テ授ケタル物體及兒童ノ日常目擊セル物體中ニ就キテ之ヲ畫カシメ兼テ清潔ヲ好ミ綿密ヲ尙フノ習慣ヲ養ハンコトニ注意スヘシ

第二十條　毎週教授時數ハ第一學年二十三時第二學年二十六時第三學年乃至第六學年二十八時第七、第八學年三十時トス但シ夏季休業前十週間及夏季休業後四週間ハ毎週教授時數ヨリ十時以內ヲ減スルコトヲ得

前項ニ依リ教授時數ヲ減スルトキハ廳長ニ於テ各教科目ノ毎週教授時數ヲ便宜斟酌スヘシ

教授時ハ四十五分トス

第二十一條　各學年ノ教授程度及各教科目毎週教授時數ハ別表ニ依ルヘシ

第二十二條　修業年限六箇年ノ公學校ニ於テ手工、農業、商業ノ中二科目ヲ加設スル場合ニ限リ二時以內毎週教授時數ヲ增スコトヲ得

第二十二條ノ二　二部教授ヲ爲ス場合ニ於テハ毎週教授時數ヲ第一、第二學年ニ在テハ各部十八時迄ニ其ノ他ハ各部二十一時迄ニ減スルコトヲ得但シ夏季休業前十週間及夏季休業後四週間ハ各學年共十五時迄ニ減スルコトヲ得

第二十二條ノ三　二部教授ヲ爲ス場合ニ於テハ各教科目ノ毎週教授時數ハ廳長之ヲ定メ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ但シ前條ニ依リ夏季休業前後ニ毎週教授時數ヲ減スル場合ニ於テハ廳長ニ於テ便宜斟酌スヘシ

第二十二條ノ四　數學年ノ兒童ヲ一學級ニ編制スルトキハ各學年ノ程度ニ拘ラス全部又ハ一部ノ兒童ヲ同一ノ程度ニ依リ教授スルコトヲ得

第三十五條　學校長ハ各學年ノ課程ヲ修了セリト認メタル者ニハ第二號書式ノ修業證書第二十二條ノ四ノ規定ニ依リ一學年間學習セシ者ニハ第三號書式ノ學習證書ヲ授與スヘシ

第六章　削除

第一號書式中本校ノ下ニ「修業年限何箇年」ヲ加フ

（別表）

修業年限六箇年公學校各學年教授ノ程度及毎週教授時數表

教科目		修身	國語	算術	漢文	體操	唱歌	裁縫	手工	農業	商業	計
第一學年	毎週教授時數	二	九	四	五	二	一					二三
		道德ノ要旨	近易ナル事項ノ話シ方、片假名及近易ナル話シ文ノ讀ミ方、綴リ方、書キ方	二十以下ノ數ノ範圍內ニ於ケル數ヘ方、書キ方及加減乘除	單語、短句及平易ナル短文ノ讀ミ方、綴リ方	遊戲、普通體操	單音唱歌					
第二學年	毎週教授時數	二	一二	四	五	二	一					二六
		同上	近易ナル事項ノ話シ方、平假名及近易ナル話シ文ノ讀ミ方、綴リ方、書キ方	百以下ノ數ノ範圍內ニ於ケル數ヘ方、書キ方及加減乘除	平易ナル短句短文ノ讀ミ方、綴リ方	同上	同上					
第三學年	毎週教授時數	二	一三	五	五（女三）	二	一	三				二八
		同上	近易ナル事項ノ話シ方、漢字交リ話シ文ノ讀ミ方、綴リ方、書キ方	通常ノ加減乘除	平易ナル文章ノ讀ミ方、綴リ方	同上	同上	運針法				
第四學年	毎週教授時數	二	一三	五	五（女三）	二	一	三				二八
		同上	同上	同上	同上	同上	同上	運針法、通常衣類ノ縫ヒ方				
第五學年	毎週教授時數	二	一四（女一二）	五	四（女三）	二	一	四				二八
		同上	同上	小數、複名數並珠算ノ加減	同上	同上	同上	通常衣類ノ縫ヒ方、繕ヒ方	簡易ナル細工	農業ノ大要	商業ノ大要	
第六學年	毎週教授時數	二	一四（女一二）	五	四（女三）	二	一	四				二八
		同上	同上	小數、複名數並珠算ノ加減乘除	同上	同上	同上	同上	同上	農業ノ大要水產ノ大要	同上	

一　手工、農業、商業ノ一科目若ハ二科目ヲ加フルトキハ修身科ヲ除ク他ノ教科目ノ毎週教授時數ヨリ各二時以內ヲ割キテ其ノ毎週教授時數ニ充ツヘシ

一　漢文、唱歌、裁縫ノ一科目又ハ教科目ヲ缺クトキハ其ノ毎週教授時數ハ適宜他ノ毎週教授時數ニ充ツヘシ

修業年限四箇年公學校各學年教授ノ程度及毎週教授時數表

教科目		修身	國語	算術
第一學年	毎週教授時數	二	九	四
		道德ノ要旨	近易ナル事項ノ話シ方、片假名及近易ナル話シ文ノ讀ミ方、綴リ方、書キ方	二十以下ノ數ノ範圍內ニ於ケル數ヘ方、書キ方及加減乘除
第二學年	毎週教授時數	二	一二	四
		同上	近易ナル事項ノ話シ方、平假名及近易ナル話シ文ノ讀ミ方、綴リ方、書キ方	百以下ノ數ノ範圍內ニ於ケル數ヘ方、書キ方及加減乘除
第三學年	毎週教授時數	二	一三	五
		同上	近易ナル事項ノ話シ方、漢字交リ話シ文ノ讀ミ方、綴リ方、書キ方	通常ノ加減乘除
第四學年	毎週教授時數	二	一三	五
		同上	同上	同上

漢文	體操	唱歌	裁縫	計
五	二	一		二三
單語及短句、平易ナル短句、短文ノ讀ミ方、綴リ方	遊戲及普通體操	單音唱歌		
五	二	一		二六
平易ナル短句短文ノ讀ミ方、綴リ方	同上	同上		
（女三）五	二	一	三	二八
平易ナル文章ノ讀ミ方、綴リ方	同上	同上	運針法	
（女三）五	二	一	三	二八
同上	同上	同上	運針法、通常衣類ノ縫ヒ方	

一　漢文、唱歌、裁縫ノ一科目若ハ數科目ヲ缺クトキハ其ノ毎週教授時數ハ適宜他ノ毎週教授時數ニ充ツヘシ

修業年限八箇年公學校各學年教授ノ程度及毎週教授時數表

教科目	修身	國語	算術	漢文	體操	唱歌	理科
毎週教授時數	二	九	四	五	二	一	
第一學年	道德ノ要旨	近易ナル事項ノ話シ方、片假名及近易ナル話シ文ノ讀ミ方、綴リ方、書キ方	二十以下ノ數ノ範圍內ニ於ケル數ヘ方、書キ方及加減乘除	單語及短句、平易ナル短句ノ讀ミ方、綴リ方	遊戲及普通體操	單音唱歌	
毎週教授時數	二	一二	四	五	二	一	
第二學年	同上	近易ナル事項ノ話シ方、平假名及近易ナル話シ文ノ讀ミ方、綴リ方、書キ方	百以下ノ數ノ範圍內ニ於ケル數ヘ方、書キ方及加減乘除	平易ナル短句短文ノ讀ミ方、綴リ方	同上	同上	
毎週教授時數	二	一三	五	（女三）五	二	一	
第三學年	同上	近易ナル事項ノ話シ方、漢字交リ話シ文ノ讀ミ方、綴リ方、書キ方	通常ノ加減乘除	平易ナル文章ノ讀ミ方、綴リ方	同上	同上	
毎週教授時數	二	一三	五	（女三）五	二	一	
第四學年	同上	同上	同上	同上	同上	同上	
毎週教授時數	二	（女一三）一四	五	（女三）四	二	一	
第五學年	同上	同上	小數、複名數並珠算ノ加減	同上	同上	同上	
毎週教授時數	二	（女一三）一四	五	（女三）四	二	一	
第六學年	同上	同上	小數、複名數並珠算ノ加減乘除	同上	同上	同上	
毎週教授時數	二	九	四	二	二		三
第七學年	同上	近易ナル事項ノ話シ方、漢字交リ話シ文ノ讀ミ方、綴リ方、書キ方、漢字交リ普通文ノ讀ミ方	分數、歩合算、珠算ノ加減乘除	普通文章ノ讀ミ方、綴リ方	同上		人身生理、衛生ノ大要、天然物及自然界ノ現象
毎週教授時數	二	九	四	二	二		三
第八學年	同上	同上	歩合算、比例、珠算ノ加減乘除	同上	同上		同上

教科目	圖畫	裁縫	手工	農業	商業	計
毎週教授時數						二三
第一學年						
毎週教授時數						二六
第二學年						
毎週教授時數		三				二八
第三學年		運針法				
毎週教授時數		三				二八
第四學年		運針法、通常衣類ノ縫ヒ方				
毎週教授時數		四				二八
第五學年		通常衣類ノ縫ヒ方、繕ヒ方				
毎週教授時數		四				二八
第六學年		同上				
毎週教授時數	三	五		五		三〇
第七學年	諸般ノ形體	同上	簡易ナル細工	農業ノ大要	商業ノ大要	
毎週教授時數	三	五		五		三〇
第八學年	同上	同上	同上	農業ノ大要、水產ノ大要	同上	

一　漢文、唱歌、裁縫ヲ缺クトキハ其ノ教授時數ハ適宜他ノ教授時數ニ充ツヘシ

第三號書式

學習證書　校印

住所
何　某
年　月生

右者本校（第何學年第何學年）ノ課程ヲ何箇年間學習セシコトヲ證ス

年　月　日

何公學校

番號

● 臺灣公學校設立廢止規程

明治四十年三月八日
臺灣總督府令第八號

臺灣公學校設立廢止規程左ノ通相定ム

臺灣公學校設立廢止規程

第一條　公學校ヲ設立セムトスルトキハ關係街庄長ハ所轄廳長ヲ經テ臺灣總督ニ出願スヘシ

公學校ノ分離、併合、廢止又ハ分校ノ設立若ハ設立區域ヲ變更セントスルトキ亦同シ

第二條　公學校設立ノ願書ニハ左ノ事項ヲ具備スヘシ

一　公學校ノ名稱、位置但シ名稱ニハ其ノ所在地名ヲ冠スヘシ
二　設立區域內堡里街庄名
三　維持方法
四　就學スヘキ兒童ノ概數

第三條　廳長ニ於テ公學校設立ノ願書ヲ受理シタルトキハ左ノ事項ヲ調査シ意見ヲ附シテ臺灣總督ニ進達スヘシ

一　前條各號ノ事項
二　設立區域內街庄住民ノ戶數、人口及就學年齡兒童ノ男女別數
三　向學心ノ狀況
四　住民ノ負擔力

前項ノ書類ニハ設立スヘキ公學校ヨリ隣接セル既設公學校及設立區域各街庄ニ至ル距離ヲ示シタル地圖ヲ添附スヘシ

第四條　廳長ニ於テ公學校ノ分離、併合、廢止又ハ設立區域變更ノ願書ヲ受理シタルトキハ其ノ事由ヲ調査シ意見ヲ附シ且其ノ所屬資產ノ處分方法ヲ具シ臺灣總督ニ進達スヘシ

第五條　公學校ノ授業ヲ開始セムトスルトキハ廳長ヨリ開校ノ期日ヲ具シ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

第六條　公學校設立ノ認可ヲ受ケ相當期間內ニ開校ノ設備ヲ完了セサルトキハ其ノ認可ヲ取消スコトアルヘシ

附　則

本令ハ明治四十年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

公學校ノ設置廢止ニ關スル從前ノ規定ハ總テ之ヲ廢止ス

● 臺灣公學校學務委員規程

明治四十年三月十三日
臺灣總督府令第十號

臺灣公學校學務委員規程左ノ通定ム

臺灣公學校學務委員規程

第一條　臺灣公學校ニ學務委員ヲ置クコトヲ得

學務委員ハ各校三人以上九人以下トス

第二條　學務委員ハ其ノ學校設立區域內ノ住民中ヨリ廳長之ヲ命ス

第三條　學務委員ハ左ノ各號ノ事項ニ就キ廳長及公學校長ヲ補助シ又ハ其ノ諮問ニ應シテ意見ヲ陳述ス

一　就學及出席督促等ニ關スル事項
二　設備ニ關スル事項
三　學租ニ關スル事項
四　基本財產ニ關スル事項

附　則

本令ハ明治四十年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

●蕃人ノ子弟ヲ就學セシムヘキ公學校ノ名稱位置中改正

明治四十年六月二十八日
臺灣總督府告示第百一號

明治三十八年三月告示第三十號蕃人ノ子弟ヲ就學セシムヘキ公學校ノ名稱位置中左ノ通改正ス

【大嵙崁】公學校　同　七腳川社

明治四十年九月二十日
臺灣總督府告示第百三十八號

明治三十八年三月告示第三十號蕃人ノ子弟ヲ就學セシムヘキ公學校ノ名稱位置中「太魯閣」ヲ「七腳川」ニ改ム

●關東州小學校及關東州公學堂ノ規則

明治四十年四月一日
關東都督府令第十九號

明治三十九年三月關東洲民政署令第十三號關東洲小學校規則ハ明治四十年勅令第四十九號ニ依ル關東州小學校ニ明治三十九年三月關東洲民政署令第十四號關東洲公學堂規則ハ明治四十年勅令第五十號ニ依ル關東州公學堂ニ之ヲ準用ス

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ施行ス

第四款　高等女學校

●高等女學校令中改正

明治四十年七月十八日
勅令第二百八十一號總、文、大臣副署

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ高等女學校令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

高等女學校令中左ノ通改正ス

第九條第一項中「伸縮」ヲ「延長」ニ改ム

第十條　高等女學校ニ入學スルコトヲ得ル者ハ年齡十二年以上ニシテ尋常小學校ヲ卒業シタル者又ハ之ト同等ノ學力ヲ有スル者タルヘシ

第十五條中「文部大臣ノ認可ヲ經テ」ヲ「別段ノ規定アルモノヲ除クノ外」ニ改ム

第十七條第二項中「授業料入學料等ニ關スル規則」ヲ「授業料入學料等ノ額」ニ改ム

附　則

本令ハ明治四十年八月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ第十條ハ明治四十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

修業年限三箇年ノ高等女學校ハ本令施行ノ際現ニ在學スル生徒ノ卒業ニ至ル迄仍之ヲ存續スルコトヲ得

修業年限四箇年ノ尋常小學校ノ課程ヲ卒リタル者ノ入學ニ付テハ第十條施行後ト雖仍從前ノ例ニ依ル

●臺灣總督府高等女學校規則

明治四十年五月二十日
臺灣總督府令第三十四號

臺灣總督府高等女學校規則左ノ通相定ム

臺灣總督府高等女學校規則

第一條　高等女學校ノ修業年限ハ四箇年トス

高等女學校ニ補習科ヲ置ク其ノ修業年限ハ一箇年トス

第二條　高等女學校ニ入學スルコトヲ得ル者ハ年齡滿十二年以上ノ女子ニシテ尋常小學校ヲ卒業シタル者又ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者トス

補習科ニ入學スルコトヲ得ル者ハ本校卒業者及明治三十二年勅令第三十一號高等女學校令ニ依ル高等女學校ヲ卒業シタル者トス

第三條　高等女學校ノ學科目ハ修身、國語、英語、歷史、地理、數學、理科、圖畫、家事、裁縫、音樂、體操トス

前項ノ學科目ノ外隨意科トシテ教育、手藝ノ一科目又ハ二科目ヲ加フルコトアルヘシ

補習科ノ學科目ハ前二項ノ學科目中ニ就キ學校長之ヲ定ム

第四條　學科ノ程度及每週教授時數ニ關シテハ明治三十四年文部省令第四號高等女學校令施行規則第一章ノ規定ヲ準用シ學年、學期、休業日、入學、退學及授業料ニ關シテハ臺灣總督府中學校規則第二部ニ關スル規定ヲ準用ス

入學試驗檢定、成績考查及卒業、懲戒方法其ノ他本令施行ニ關シ必要ナル規定ハ中學校長之ヲ定メ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

附　則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十七年九月府令第六十七號臺灣總督府國語學校第三附屬高等女學校規程ハ之ヲ廢止ス

第五款　中學校

●中學校令中改正

明治四十年七月十八日
勅令第二百八十號總、文、大臣副署

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ中學校令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

中學校令中左ノ通改正ス

第十條　中學校ニ入學スルコトヲ得ル者ハ年齡十二年以上ニシテ尋常小學校ヲ卒業シタル者又ハ之ト同等ノ學力ヲ有スル者タルヘシ

第十四條中「文部大臣ノ認可ヲ經テ」ヲ「別段ノ規定アルモノヲ除クノ外」ニ改ム

第十六條第二項中「授業料入學料等ニ關スル規則」ヲ「授業料入學料等ノ額」ニ改ム

附　則

本令ハ明治四十年八月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ第十條ハ明治四十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

修業年限四箇年ノ尋常小學校ノ課程ヲ卒リタル者ノ入學ニ付テハ第十條施行後ト雖仍從前ノ例ニ依ル

●臺灣總督府中學校規則

明治四十年五月二十日
臺灣總督府令第三十二號
改正　四〇年第一二四號

臺灣總督府中學校規則左ノ通相定ム

臺灣總督府中學校規則

第一章　總則

第一條　中學校ハ內地人ノ男子ニ須要ナル高等普通教育ヲ爲スヲ以テ目的トス

第二條　中學校ニ高等女學校ヲ附設ス

高等女學校ハ內地人ノ女ニ須要ナル高等普通教育ヲ爲スヲ以テ目的トス

高等女學校ニ關スル規則ハ別ニ之ヲ定ム

第三條　中學校ニ第一部、第二部ヲ置ク

第一部ノ修業年限ハ六箇年トシ之ヲ前期三箇年後期三箇年ニ分ツ

第二部ノ修業年限ハ五箇年トス

第四條　第一部ニ高等科ヲ置キ卒業後實務ニ就カント欲スル者ノ爲ニ須要ナル教育ヲ爲スモノトス其ノ修業年限ハ二箇年トス

第五條　第二部ニ補習科ヲ置キ其ノ修業年限ハ一箇年トス

第六條　第一部ニ入學スルコトヲ得ル者ハ年齡滿十一年以上ニシテ尋常小學校第五學年ノ課程ヲ卒リタル者又ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者トス

第七條　第二部ニ入學スルコトヲ得ル者ハ年齡滿十二年以上ニシテ尋常小學校ヲ卒業シタル者又ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者トス

第八條　高等科ニ入學スルコトヲ得ル者ハ第一部卒業者又ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者トス

第九條　補習科ニ入學スルコトヲ得ル者ハ第二部卒業者又ハ明治三十二年勅令第二十八號中學校令ニ依ル中學校卒業者トス

第二章　學科、程度及學寮

第十條　第一部ノ學科目ハ國民科、國語、漢文、英語、歷史、地理、數學、博物、理化學、圖畫、唱歌、實科（手工、農業、商業）體操（教練、遊技ヲ含ム）トス

前項ノ學科目ハ前期ニ於テハ必須科トシ後期ニ於テハ生徒ノ所長ニ從ヒ之ヲ斟酌スルコトヲ得

第十一條　第二部ノ學科目ハ修身、國語及漢文、英語、歷史、地理、數學、博物、物理及化學、法制及經濟、圖畫、唱歌、體操トシ其ノ程度ハ明治三十四年文部省令第三號中學校令施行規則第一章ニ規定スル所ニ依ル

第十二條　高等科ノ學科目ハ外國語（英語ヲ除ク）法制、經濟其ノ他必要ナル學科目トス

補習科ノ學科目ハ第十一條ノ學科目中ニ就キ學校長之ヲ定ム

第十三條　第一部ノ生徒ハ總テ之ヲ學寮ニ收容スルモノトス

第十四條　第一部、第二部ノ學科課程及每週教授時數並第一部生徒ノ學寮每週行事ハ附表ノ如シ

第十五條　高等科及補習科ノ學科課程及每週教授時數ハ學校長之ヲ定ム

第三章　學年、學期及休業日

第十六條　學年ハ四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル之ヲ分テ左ノ三學期トス

第一學期　自四月一日　至八月三十一日
第二學期　自九月一日　至十二月三十一日
第三學期　自一月一日　至三月三十一日

第十七條　休業日ハ左ノ如シ

一　日曜日
一　祝日、大祭日、始政紀念日、臺灣神社祭日
一　夏季　自七月十一日　至八月三十一日
一　年末年始　自十二月二十六日　至一月七日
一　學年末　一週間

第四章　入學、轉學及退學

第十八條　生徒ハ學年ノ始ニ於テ第一學年生徒ニ限リ募集ス但シ第二學年以上ノ入學志願者ハ身體、品行及學力ヲ調査シテ入學ヲ許可スルコトアルヘシ

第十九條　第一部入學志願者中ノ尋常小學校第五

學年ノ課程ヲ卒ヘサル者、第二部入學志願者中尋常小學校卒業者ニアラサル者ニ就キテハ試驗ニ依リ其ノ學力ヲ檢定ス

第一部入學志願者中尋常小學校第五學年ノ課程ヲ卒ヘタル者又ハ第二部入學志願者中尋常小學校ヲ卒業シタル者ハ其ノ他ノ志願者ニ先チテ入學ヲ許スコトアルヘシ

前項ノ者入學ヲ許スヘキ人員ニ超過スルトキハ試驗ニ依リ入學者ヲ選拔ス

第二十條　中學校生徒ニシテ退學シタル者一箇年以內ニ再入學ヲ志願シタルトキハ試驗ニ依ラスシテ同一學年以下ノ學年ニ入學ヲ許可スルコトアルヘシ

第二十一條　第二部生徒ニシテ他ノ中學校ニ轉學ヲ志願スル者アルトキハ學校長ハ正當ノ事由アリト認ムル場合ニ限リ其ノ在學證書及成績表ヲ移轉先ノ學校ニ送付スヘシ

他ノ中學校ヨリ第二部ニ轉學ヲ志願スル者アルトキハ缺員アル場合ニ限リ許可スルコトアルヘシ

第二十二條　學校長ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル者ニハ退學ヲ命スヘシ

一　性行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者

二　學力劣等ニシテ成業ノ見込ナシト認メタル者

三　引續キ一箇年以上缺席シタル者

四　正當ノ事由ナクシテ引續キ一箇月以上缺席シタル者

第二十三條　學校長ハ敎育上必要ト認メタルトキハ懲戒ヲ加フルコトヲ得

第五章　授業料

第二十四條　授業料ハ每月一圓六十錢トス

第二十五條　十五日前ニ退學シ又ハ十六日後ニ入學シタル者ノ授業料ハ其ノ月分ノ半額ヲ徵收ス

學校ノ都合ニ依リ十五日前又ハ十六日後全ク授業ヲ休止スルトキハ其ノ月ノ授業料半額ヲ徵收ス

第二十六條　夏季休業又ハ學校ノ都合ニ依リ引續キ休校一箇月ニ亙リ若ハ本人ノ病氣缺席引續キ一箇月ニ亙ル者ハ一箇月分ノ授業料ヲ免除ス

第二十七條　入學試驗檢定、成績考査及卒業、懲戒方法、學寮規定其ノ他本令施行ニ關シ必要ナル規定ハ學校長之ヲ定メ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

附　則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス但シ第一部ニ關スル規定施行ノ期日ハ別ニ之ヲ定ム

本令ハ施行ノ際現ニ臺灣總督府國語學校中學部ニ在學スル者ハ中學校生徒トシ臺灣總督府國語學校第三附屬高等女學校ニ在學スル者ハ高等女學校生徒トス

第一部學科課程及授業時數表

學科	國民科	國語	漢文	英語
前期	國民ノ心得	話方、作文、讀方、習字		日常卑近ノ事物ニ付テノ會話、發音、綴字、習字
	一	四		九
	同上	同上		讀方、譯解、會話、文法、習字
	一	四		七
	同上	同上		同上
	一	四		七
後期	同上	讀方、文法、話方、作文	清語ノ會話、漢文、時文講讀	讀方、譯解、會話、作文、文法
	一	三	五	五
	國憲國法ノ大要	同上	同上	同上
	一	三	三	五
	同上	同上	同上	同上
	二	三	三	五

學科	數學	歷史	地理	博物	理化學	計
前期	算術	史談	自然	研究	研究	
	四	一	二			21
	算術、代數	本邦史	本邦及東亞各國	重要ナル植物、動物、鑛物		
	四		二	一		21
	代數、幾何	同上	西アジア、ヨーロッパ及アフリカ	同上		
	四	二	一	二		21
後期	同上	東亞各國史	アメリカ大洋洲及東印度諸島	生理、衛生	化學及鑛物	
	四	二	一	二	二	25
	同上	西洋史	地文（本邦ニ關スル事項ヲ主トス）	動植物ノ分類、解剖、生理及生物ノ進化ノ大要	化學及鑛物、物理	
	四	二	二	二	三	25
	幾何、三角術、測量	本邦近代史及最近世界史（東西各國ノ國際關係ノ事蹟ヲ主トス）	人文地理（本邦ニ關スル[illegible]トス）		物理	
	四	二	二		四	25

備考　圖畫、唱歌、實科、體操ニ於テハ學寮每週行事表ヲ參照スヘシ

第一部生徒學寮每週行事表

本表ハ每週行事ノ標準ヲ示シタルモノニシテ實施ノ際ハ季節ノ遲速日ノ長短等ニ從ツテ斟酌スルコトヲ得

日＼時	六〜30	30〜七	七〜30	30〜50	50〜八10	八10〜一二50	50〜
月		（起床、冷水摩擦、服裝整頓）	（徒歩運動）	（朝食）	（服具整頓）	（學科）	（午食）
火							
水							
木							
金							
土							
日				起床等	朝食	服具整頓　服裝等檢査　書翰發送及面會	食

30　30　30

日＼時	一〜10	10〜二	二〜三	三〜四	四〜20	20〜五	五〜六	六〜30	30〜七	七〜30	30〜八	八〜九	九〜一〇
月	（換衣）	手工園藝	運動遊技		（換衣及沐浴）	（休憩（茶））	（唱歌、演説、讀書等）		（夕食）	（食後談話）	（隨[illegible]讀[illegible]）	（前期生自習）	
火			戸外勞働										
水		（學科）	運動遊技										
木		手工園藝	戸外勞働										
金			運動遊技										
土		午休　競技博物採集遠足等						沐浴					（修養）
日		散歩											

備考
- 體操ハ學科又ハ運動遊技ノ時間ノ中ニ付テ每週三時間ヲ課ス
- 運動遊技ハ擊劍、柔術、水泳、漕艇、ベースボール、フートボール、ローンテニス等ヲ包括ス
- 戸外勞働ハ農牧業ニ屬スル各種ノ作業ヲ包括ス

第二部各學年各學科課程每週授業時數表

學科目＼學年	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
修身	道德ノ要領	同上	同上	同上	同上
	一	一	一	一	一

國語及漢文	英語	歷史地理	數學	博物	物理及化學	法制及經濟	圖畫	唱歌	體操	計
講讀、文法、作文、習字	發音、綴字、讀方、譯解、會話、書取、習字	日本史及アジア地誌	算術	礦物			自在畫	普通樂譜、歌法	普通體操、兵式體操	
七	六	三	四	二			一	一	三	三六
同上	讀方、譯解、會話、作文、書取	日本史アジア及大洋洲地誌	算術代數	植物			自在畫用器畫	同上	同上	
七	六	三	四	二			一	一	三	三六
同上	讀方、譯解、會話、書取、作文、文法	東洋史ヨーロッパ地誌	代數幾何	生理、衞生、動物			自在畫	同上	同上	
七	七	三	四	二			一	一	三	三四
講讀、文法、作文	同上	西洋史アフリカ及アメリカ地誌	同上	礦物 第一、二學期 二 第三學期 一	化學 第一、二學期 三 第三學期 四		自在畫用器畫		同上	
六	七	三	四				一		三	三四
講讀、文法、作文、國文學史	同上	西洋史及日本史地文	幾何三角法		物理				同上	
六	七	三	四		四	二			三	三四

第六款　師範學校

●師範學校規程

明治四十年四月十七日
文部省令第十二號

師範學校規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

師範學校規程

第一章　生徒教養ノ要旨
第二章　豫備科及本科
第一節　學科及其ノ程度
第二節　教授日數及式日
第三節　編制
第四節　教科用圖書
第五節　入學退學及懲戒
第六節　學資
第七節　卒業後ノ服務
第三章　講習科
第四章　附屬小學校及附屬幼稚園
第五章　設備
第六章　設置及廢止
第七章　補則
第八章　附則

師範學校規程

第一章　生徒教養ノ要旨

第一條　師範學校ニ於テハ師範教育令ノ旨趣ニ基キ特ニ左ノ事項ニ注意シテ其ノ生徒ヲ教養スヘシ

一　忠君愛國ノ志氣ニ富ムハ教員タル者ニ在リテハ殊ニ重要トス故ニ生徒ヲシテ平素忠孝ノ大義ヲ明ニシ國民タルノ志操ヲ振起セシメンコトヲ要ス

二　精神ヲ鍛錬シ德操ヲ磨勵スルハ教員タル者ニ在リテハ殊ニ重要トス故ニ生徒ヲシテ平素意ヲ此ニ用ヒシメンコトヲ要ス

三　規律ヲ守リ秩序ヲ保チ師表タルヘキ威儀ヲ具フルハ教員タル者ニ在リテハ殊ニ重要トス故ニ生徒ヲシテ平素長上ノ命令訓誨ニ服從シ起居言動ヲ正シクセシメンコトヲ要ス

四　教授ハ教員タルヘキ者ニ適切ニシテ小學校令及小學校令施行規則ノ旨趣ニ副ハンコトヲ旨トスヘシ

五　教授ハ常ニ其ノ方法ニ注意シ生徒ヲシテ業ヲ受クル際教授ノ方法ヲ會得セシメンコトヲ務ムヘシ

六　學習ノ方法ハ偏ニ教授ノミニ頼ラシムヘキモノニアラス故ニ生徒ヲシテ常ニ自ラ學識ヲ進メ技藝ヲ研クノ習慣ヲ養ハシメンコトヲ務ムヘシ

第二章　豫備科及本科

第一節　學科及其ノ程度

第二條　本科ヲ分チテ第一部及第二部トス但シ第二部ハ土地ノ情況ニ依リ之ヲ設ケサルコトヲ得

第三條　豫備科ハ本科第一部ニ入學セントスル者ニ必要ナル教育ヲ爲スヲ以テ目的トス

第四條　豫備科ノ修業年限ハ一箇年トス

本科第一部ノ修業年限ハ四箇年トス

本科第二部ノ修業年限ハ男生徒ニ就キテハ一箇年、女生徒ニ就キテハ二箇年又ハ一箇年トス

第五條　豫備科ノ學科目ハ修身、國語及漢文、數學、習字、圖畫、音樂、體操トシ女生徒ノ爲ニハ裁縫ヲ加フ

第六條　本科第一部ノ男生徒ニ課スヘキ學科目ハ修身、教育、國語及漢文、英語、歷史、地理、數學、博物、物理及化學、法制及經濟、習字、圖畫、手工、音樂、體操トス但シ英語ハ隨意科目トス

前項學科目ノ外農業、商業ノ一科目又ハ二科目ヲ加フ其ノ二科目ヲ加ヘタル場合ニ於テハ生徒ニハ一科目ヲ學習セシムヘシ

第七條　本科第一部ノ女生徒ニ課スヘキ學科目ハ修身、教育、國語及漢文、歷史、地理、數學、博物、物理及化學、家事、裁縫、習字、圖畫、手工、音樂、體操トス

前項學科目ノ外隨意科目トシテ英語ヲ加フルコトヲ得

第八條　修身ハ教育ニ關スル勅語ノ旨趣ニ基キ道德上ノ思想及情操ヲ養成シ實踐躬行ヲ勸奬シ師表タルノ威儀ヲ具ヘシメ且小學校ニ於ケル修身ノ教授ニ必要ナル知識ヲ授ケ其ノ教授ノ方法ヲ會得セシムルヲ以テ要旨トス

修身ハ初ハ嘉言善行等ニ徵シ生徒日常ノ行狀ニ因ミテ道德ノ要領ヲ教示シ又作法ヲ授ケ進ミテハ稍秩序ヲ整ヘテ自己、家族、社會及國家ニ對スル責務ヲ知ラシメ倫理學ノ一斑及教授法ヲ授クヘシ

前項ノ外女生徒ニ就キテハ現行法制上ノ事項ノ大要ヲ授クヘシ

第九條　教育ハ教育ニ關スル一般ノ知識ヲ得シメ特ニ小學校教育ノ旨趣方法ヲ詳ニシ教育ノ技能ヲ習得セシメ兼テ教育者タルノ精神ヲ養フヲ以テ要旨トス

教育ハ心理及論理ノ大要ヨリ始メ教育ノ理論、教授法及保育法ノ概說、近世教育史ノ大要、教育制度、學校管理法、學校衞生ヲ授ケ又教育實習ヲ課スヘシ

前項ノ外女生徒ニ就キテハ便宜保育實習ヲ課スヘシ

第十條　國語及漢文ハ普通ノ言語文章ヲ了解シ正確且自由ニ思想ヲ表出スルノ能ヲ得シメ兼テ小學校ニ於ケル國語教授ノ方法ヲ會得セシメ兼テ文學上ノ趣味ヲ養ヒ智德ノ啓發ニ資スルヲ以テ要旨トス

國語及漢文ハ現時ノ國文ヲ主トシテ講讀セシメ進ミテハ近古ノ國文ニ及ホシ又國語ノ使用ニ練熟セシメ實用簡易ナル文ヲ作ラシメ文法ノ大要ヲ授ケ又平易ナル漢文ヲ講讀セシメ且教授法ヲ授クヘシ

第十一條　英語ハ普通ノ英語ヲ了解スルノ能ヲ得シメ知識ノ增進ニ資シ兼テ小學校ニ於ケル英語教授ノ方法ヲ會得セシムルヲ以テ要旨トス

英語ハ發音、綴字、讀方、譯解、書取、會話、作文、習字及文法ノ大要ヲ授ケ且教授法ヲ授クヘシ

第十二條　歷史ハ歷史上重要ナル事蹟ヲ知ラシメ社會ノ變遷、邦國盛衰ノ由ル所ヲ理會セシメ特ニ我國ノ發達ヲ詳ニシ國體ノ特異ナル所以ヲ明ニシ且小學校ニ於ケル日本歷史教授ノ方法ヲ會得セシムルヲ以テ要旨トス

歷史ハ日本歷史及外國歷史トシ日本歷史ニ於テハ國初ヨリ現時ニ至ルマテノ重要ナル事蹟ヲ授ケ外國歷史ニ於テハ世界大勢ノ變遷ニ關ル事蹟ヲ主トシ著名ナル諸國ノ興亡、人文ノ發達及我國ノ文化ニ關係アル事蹟ノ大要ヲ知ラシメ且教授法ヲ授クヘシ

第十三條　地理ハ地球ノ形狀、運動竝ニ地球表面及人類生活ノ狀態ヲ理會セシメ我國及諸外國ノ國勢ヲ知ラシメ且小學校ニ於ケル地理教授ノ方法ヲ會得セシムルヲ以テ要旨トス

地理ハ世界地理ノ概略及日本地理竝ニ我國ト重要ノ關係アル諸外國ノ地理ノ大要ヲ知ラシメ又地文ノ一斑及人文地理ノ概說ヲ授ケ且教授法ヲ授クヘシ

第十四條　數學ハ數量ノ關係ヲ明ニシ計算ニ習熟セシメ且小學校ニ於ケル算術教授ノ方法ヲ會得セシメ兼テ生活上必要ナル知識ヲ與ヘ思考ヲ精確ナラシムルヲ以テ要旨トス

數學ハ算術、代數及幾何ヲ授ケ且教授法ヲ授クヘシ

前項ノ外男生徒ニ就キテハ簿記ノ大要ヲ授クヘシ

第十五條　博物ハ天然物ニ關スル知識ヲ與ヘ其ノ相互及人生ニ對スル關係ヲ理會セシメ且小學校ニ於ケル理科教授ノ方法ヲ會得セシムルヲ以テ要旨トス

博物ハ重要ナル植物、動物、鑛物ニ關スル一般ノ知識、標本ノ採集製法竝ニ人體ノ構造、生理及衞生ノ大要ヲ授ケ又小學校ニ於ケル教授ニ必要ナル實驗ヲ課シ且教授法ヲ授クヘシ

第十六條　物理及化學ハ自然ノ現象ニ關スル知識ヲ與ヘ其ノ法則竝ニ人生ニ對スル關係ヲ理會セシメ且小學校ニ於ケル理科教授ノ方法ヲ會得セシムルヲ以テ要旨トス

物理及化學ハ重要ナル物理上及化學上ノ現象及定律、器械ノ構造及作用、元素及化合物ニ關スル知識ヲ授ケ又小學校ニ於ケル教授ニ必要ナル實驗ヲ課シ且教授法ヲ授クヘシ

第十七條　法制及經濟ハ法制及經濟ニ關スル事項ニ就キ國民ノ生活上必要ナル知識ヲ得シムルヲ以テ要旨トス

法制及經濟ハ帝國憲法ノ大要及日常生活ニ適切ナル法制上及經濟上ノ事項ヲ授クヘシ

第十八條　家事ハ家事整理ニ必要ナル知識ヲ得シメ兼テ勤勉、節儉、秩序、周密、清潔ヲ尚フノ念ヲ養フヲ以テ要旨トス

家事ハ衣食住、養老、育兒、看病、家計簿記其ノ他一家ノ整理經濟等ニ關スル事項ヲ授クヘシ

第十九條　裁縫ハ裁縫ニ關スル知識技能ヲ得シメ且小學校ニ於ケル裁縫教授ノ方法ヲ會得セシメ兼テ節約利用ノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス

裁縫ハ普通ノ衣類ノ縫ヒ方、裁チ方及繕ヒ方等ヲ授ケ且教授法ヲ授クヘシ

第二十條　習字ハ文字ヲ端正且敏速ニ書寫スルノ能ヲ得シメ且小學校ニ於ケル國語書キ方教授ノ方法ヲ會得セシムルヲ以テ要旨トス

習字ハ姿勢及執筆ヲ正シ運筆ノ方法ヲ授ケ楷書、行書ヲ主トシ草書及假名ニ及ホシ兼テ細字ノ速寫及黑板上ニ於ケル練習ヲ爲サシメ且教授法ヲ授クヘシ

第二十一條　圖畫ハ物體ヲ精密ニ觀察シ正確且自由ニ之ヲ畫クノ能ヲ得シメ且小學校ニ於ケル圖畫教授ノ方法ヲ會得セシメ兼テ意匠ヲ練リ美感ヲ養フヲ以テ要旨トス

圖畫ハ寫生畫ヲ主トシ臨畫及考案畫ヲ加ヘ授ケ黑板上ニ於ケル練習ヲ爲サシメ又幾何畫ヲ授ケ且教授法ヲ授クヘシ

第二十二條　手工ハ物體ニ關スル觀念ヲ正確ナラシメ簡易ナル物品ヲ製作スルノ技能ヲ得シメ且小學校ニ於ケル手工教授ノ方法ヲ會得セシメ兼テ工作ノ趣味ヲ長シ勤勞ヲ好ムノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス

手工ハ天然物ノ模造、日用器具ノ製作等諸種ノ細工ヲ授ケ又材料ノ性質、工具ノ保存法等ヲ知ラシメ且教授法ヲ授クヘシ

第二十三條　音樂ハ音樂ニ關スル知識技能ヲ得シメ且小學校ニ於ケル唱歌教授ノ方法ヲ會得セシメ美感ヲ養ヒ心情ヲ高潔ニシ德性ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス

音樂ハ單音唱歌、複音唱歌及樂器使用法ヲ授ケ且教授法ヲ授クヘシ

第二十四條　體操ハ身體ノ各部ヲ均齊ニ發育セシメ姿勢ヲ端正ニシ身體ヲ強健ニシ且其ノ動作ヲ機敏耐久ナラシメ又精神ヲ快活剛毅ナラシメ且小學校ニ於ケル體操ノ教授ニ必要ナル知識技能ヲ得シメ其ノ教授ノ方法ヲ會得セシメ兼テ規律ヲ守リ協同ヲ尚フノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス

體操ハ男生徒ニ就キテハ普通體操、遊戲、兵式體操トシ且教授法ヲ授ケ女生徒ニ就キテハ普通體操、遊戲トシ且教授法ヲ授クヘシ

第二十五條　農業ハ農業ニ關スル知識技能ヲ得シメ且小學校ニ於ケル農業教授ノ方法ヲ會得セシメ兼テ農業ノ趣味ヲ長シ勤勞ヲ好ムノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス

農業ハ土壤、水利、肥料、農具、耕耘、栽培、森林、養蠶、養畜、農產製造、農業經濟等ニ關スル事項ヲ授ケ且教授法ヲ授クヘシ

土地ノ情況ニ依リ水產ニ關スル事項ヲ加ヘ授クヘシ

第二十六條　商業ハ商業ニ關スル知識ヲ得シメ且小學校ニ於ケル商業教授ノ方法ヲ會得セシムルヲ以テ要旨トス

商業ハ商業要項、商業簿記、商業算術、商業地理及其ノ地方ニ於ケル重要ナル商品ノ大要ヲ授ケ且教授法ヲ授クヘシ

第二十七條　豫備科及本科第一部ニ於ケル各學科目ノ每週教授時數ハ男生徒ニ就キテハ甲號表、女生徒ニ就キテハ乙號表ニ依ルヘシ但シ必要アルトキハ學校長ハ每週教授時數ノ總計及各學科目ノ一學年間ニ於ケル教授時數ノ總計ヲ增減セサル範圍内ニ於テ之ヲ變更スルコトヲ得

甲號表

學科目＼學科及學年	豫備科	本科第一部 第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
修身	二	二	一	一	一
教育			二	四	教育實習九 三 二
國語及漢文	一〇	六	四	三	二
英語		三	三	三	二
歴史		二	二	二	
地理		二	二	一	
數學	六	四	三	三	二
博物		三	二	一	
物理及化學			二	三	四
法制及經濟					二
習字	三	二	一	一	
圖畫	二	三	三	三	三
手工					
音樂	二	二	二	二	一
體操	六	五	五	五	三
農業又ハ商業			二	二	二
計	三一	三四	三四	三四	三四

乙號表

學科目＼學科及學年	豫備科	本科第一部 第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
修身	二	二	一	一	二
教育			二	四	教育實習九 三 三
國語及漢文	九	六	四	三	二
歴史		二	二	二	
地理		二	二	一	
數學	五	三	三	二	二
博物		二	二	一	
物理及化學			二	二	四
家事				二	二
裁縫	四	四	四	四	三
習字	三	二	一	一	
圖畫	二	三	三	三	三
手工					
音樂	二	二	二	二	一
體操	四	三	三	三	二
英語		（三）	（三）	（三）	（二）
計	三一	三一 （三四）	三一 （三四）	三一 （三四）	三二 （三四）

第二十八條　本科第二部ノ男生徒ニ課スヘキ學科目ハ修身、教育、國語及漢文、數學、博物、物理及化學、法制及經濟、圖畫、手工、音樂、體操トス

法制及經濟ハ中學校ニ於テ學習シタル生徒ニハ之ヲ缺クコトヲ得

第二十九條　本科第二部ノ女生徒ニ課スヘキ學科目ハ修身、教育、國語及漢文、數學、博物、物理及化學、裁縫、圖畫、手工、音樂、體操トス但シ修業年限ヲ二箇年ト爲シタル場合ニ於テハ歴史、地理ヲ加フ又隨意科目トシテ英語ヲ加フルコトヲ得

第三十條　修身ハ第八條ニ準シ道德ノ要領ヲ教示シ又小學校ニ於ケル修身ノ教授ニ必要ナル知識竝ニ作法ヲ授ケ且教授法ヲ授クヘシ

前項ノ外女生徒ニ就キテハ現行法制上ノ事項ノ大要ヲ授クヘシ

第三十一條　教育ハ第九條ニ準シ且修業年限一箇年ノ學科ヲ修ムル生徒ニ就キテハ歴史、地理ノ教授法ヲ授クヘシ

第三十二條　國語及漢文ハ第十條ニ準シ現時ノ國文ヲ主トシテ講讀セシメ又國語ノ使用ニ練熟セシメ實用簡易ナル文ヲ作ラシメ又平易ナル漢文ヲ講讀セシメ且教授法ヲ授クヘシ

第三十三條　歴史、地理ハ第十二條及第十三條ニ

準シ既得ノ知識ヲ補習セシメ且敎授法ヲ授クヘシ

第三十四條　數學ハ第十四條ニ準シ算術ヲ授ケ且敎授法ヲ授クヘシ

前項ノ外男生徒ニ就キテハ簿記ノ大要ヲ授ケ女生徒ニ就キテハ便宜代數、幾何ヲ授クヘシ

第三十五條　博物ハ第十五條ニ準シ主トシテ小學校ニ於ケル敎授ニ必要ナル實驗ヲ課シ標本ノ採集調製法ヲ授ケ又既得ノ知識ヲ補習セシメ且敎授法ヲ授クヘシ

第三十六條　物理及化學ハ第十六條ニ準シ主トシテ小學校ニ於ケル敎授ニ必要ナル實驗ヲ課シ又既得ノ知識ヲ補習セシメ且敎授法ヲ授クヘシ

第三十七條　裁縫ハ第十九條ニ準シ既得ノ知識技能ヲ補習セシメ且敎授法ヲ授クヘシ

第三十八條　圖畫ハ第二十一條ニ準シ既得ノ知識技能ヲ補習セシメ又黑板上ニ於ケル練習ヲ爲サシメ且敎授法ヲ授クヘシ

第三十九條　英語、法制及經濟、手工、音樂、體操ハ第十一條、第十七條、第二十二條乃至第二十四條ニ準シ之ヲ授クヘシ

第四十條　本科第二部ニ於ケル各學科目ノ每週敎授時數ハ男生徒ニ就キテハ甲號表、女生徒ニ就キテハ修業年限ニ依リ乙號表又ハ丙號表ニ依ルヘシ但シ學校長ハ第二十七條但書ニ準シ之ヲ變更スルコトヲ得

甲號表

學科目＼學年	第一學年
修身	二
敎育	敎育實習 七 八 一五
國語及漢文	二
數學	二
博物	三
物理及化學	
法制及經濟	二
圖畫	三
手工	
音樂	二
體操	三
計	三四

乙號表

學科目＼學年	第一學年	第二學年
修身	一	二
敎育	四	敎育實習 三 八 一一
國語及漢文	五	三
歷史	二	
地理	二	
數學	四	三
博物	二	三
物理及化學		
裁縫	三	三
圖畫	三	二
手工		
音樂	二	一
體操	三	三
英語	（三）	（三）
計	三一 （三四）	三一 （三四）

丙號表

學科目＼學年	第一學年
修身	二
敎育	敎育實習 七 六 一三
國語及漢文	三
數學	三
博物	三
物理及化學	
裁縫	二
圖畫	三
手工	
音樂	二
體操	三
計	三四

第二節　敎授日數及式日

第四十一條　敎授日數ハ每學年二百日以上トス但シ次條ノ場合及特別ノ事情ニ依リ文部大臣ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニアラス

試驗及修學旅行ニ充ツル日數ハ前項ノ日數ニ算入セス

第四十二條　傳染病豫防ノ爲必要ナルトキ其ノ他非常變災アルトキハ地方長官ニ於テ臨時休業ヲ爲サシムルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ地方長官ハ其ノ事由ヲ具シ遲滯ナク文部大臣ニ屆出ツヘシ

第四十三條　紀元節、天長節及一月一日ニハ職員及生徒學校ニ參集シテ祝賀ノ式ヲ行フヘシ

第三節　編制

第四十四條　學級ハ同學年ノ生徒ヲ以テ之ヲ編制スヘシ

一學級ノ生徒數ハ凡四十人以下トス

第四十五條　修身、裁縫、音樂、體操ハ學級ノ異ル生徒ヲ合シテ同時ニ之ヲ敎授スルコトヲ得

英語、法制及經濟、農業、商業ハ學級ノ異ル生徒ヲ合シテ前條第二項ノ制限ヲ超エサル場合ニ限リ同時ニ之ヲ敎授スルコトヲ得

第四十六條　敎員ノ數ハ四學級ノ學校ニ於テハ十一人以上トシ四學級以上一學級ヲ加フル每ニ一人以上ノ割合ヲ以テ之ヲ增スヘシ但シ女生徒ノミヲ置キタル學校ニ於テハ本文ニ依ル員數ヨリ一人ヲ減ス

農業、商業ノ二科目ヲ加フル學校ニ於テハ本科第一部男生徒ノ學級數十二以下ナルトキハ敎員一人、十三以上ナルトキハ同二人ノ割合ヲ以テ前項ノ員數ヲ增スヘシ

第四節　敎科用圖書

第四十七條　豫備科及本科ノ敎科用圖書ヲ定メ又ハ之ヲ變更スル必要アリト認メタルトキハ地方長官ハ其ノ意見ヲ文部大臣ニ申出ツヘシ此ノ場合ニ於テハ地方長官ハ學校長ノ意見ヲ聞クコトヲ要ス

第五節　入學、退學及懲戒

第四十八條　豫備科及本科ニ入學スルコトヲ得ル者ハ身體健全、品行方正ニシテ第四十九條乃至第五十一條ノ學力ヲ有スル者タルヘシ

第四十九條　豫備科ニ入學スルコトヲ得ル者ハ修業年限二箇年ノ高等小學校ヲ卒業シタル者又ハ年齡十四年以上ニシテ之ト同等ノ學力ヲ有スル者タルヘシ

第五十條　本科第一部ニ入學スルコトヲ得ル者ハ豫備科ヲ修了シタル者又ハ修業年限三箇年ノ高等小學校ヲ卒業シタル者若ハ年齡十五年以上ニシテ之ト同等ノ學力ヲ有スル者タルヘシ

第五十一條　本科第二部ニ入學スルコトヲ得ル者ハ男生徒ニ就キテハ中學校ヲ卒業シタル者又ハ年齡十七年以上ニシテ之ト同等ノ學力ヲ有スル者、女生徒ニ就キテハ修業年限ヲ二箇年ト爲シタル場合ニ於テハ修業年限四箇年ノ高等女學校ヲ卒業シタル者又ハ年齡十六年以上ニシテ之ト同等ノ學力ヲ有スル者、修業年限ヲ一箇年ト爲シタル場合ニ於テハ修業年限五箇年ノ高等女學校ヲ卒業シタル者又ハ年齡十七年以上ニシテ之ト同等ノ學力ヲ有スル者タルヘシ

第五十二條　生徒ニ缺員アルトキハ身體健全、品行方正ニシテ學力及年齡當該學級ニ相當スル者ヲ以テ補缺スルコトヲ得

第五十三條　入學志願者ノ檢定ニ關スル規程ハ地方長官之ヲ定ム

第五十四條　必要アリト認メタルトキハ地方長官ハ豫備科ヲ修了シタル者以外ノ入學者ニ對シ四箇月以內ノ期間ニ於テ假入學ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第五十五條　學校長ハ本科ヲ卒業シタル者ニ卒業證書ヲ授與スヘシ

第五十六條　學校長ニ於テ學力劣等若ハ身體虛弱ニシテ成業ノ見込ナシト認メタル者又ハ性質不良ニシテ敎員タルニ不適當ト認メタル者ニハ退學ヲ命スヘシ

第五十七條　生徒ハ自己ノ便宜ニ因リ退學スルコトヲ得ス但シ已ムヲ得サル事由ニ因リ學校長ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニアラス

第五十八條　學校長ハ敎育上必要ト認メタルトキハ生徒ニ懲戒ヲ加フルコトヲ得

第六節　學資

第五十九條　公費生ノ員數、之ニ支給スヘキ學資及其ノ支給方法ハ地方長官之ヲ定ム

私費生ヲ置カントスルトキハ地方長官ハ其ノ員數ヲ定メ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第六十條　懲戒ニ因リ放校ニ處セラレタル者及自己ノ便宜ニ因リ退學シタル者ニ對シテハ地方長官ハ公費生ニ就キテハ授業費及其ノ在學中支給シタル學資、私費生ニ就キテハ授業費ヲ償還セシムヘシ但シ情狀ニ依リ其ノ全部又ハ一部ノ償還ヲ免除スルコトヲ得

前項授業費ノ金額ハ年額三拾圓以下ニ於テ地方長官之ヲ定ムヘシ

第七節　卒業後ノ服務

第六十一條　本科卒業者ハ左ノ各號ノ一ニ規定セ

ル期間其ノ道府縣ニ於テ小學校敎員ノ職ニ從事スル義務ヲ有ス但シ次條ノ義務ヲ終リタル者ハ學事ニ關スル他ノ公職ニ從事シ尙特別ノ事情ニ依リ地方長官ノ許可ヲ受ケタルトキハ他ノ道府縣、臺灣又ハ樺太ニ於テ就職スルコトヲ得

一 第一部公費男子卒業者ニ在リテハ卒業證書受得ノ日ヨリ七箇年

二 第一部公費女子卒業者ニ在リテハ卒業證書受得ノ日ヨリ五箇年

三 第一部私費卒業者ニ在リテハ卒業證書受得ノ日ヨリ三箇年

四 第二部卒業者ニ在リテハ卒業證書受得ノ日ヨリ二箇年

第六十二條 本科公費卒業者ハ左ノ各號ノ一ニ規定セル期間其ノ道府縣ニ於テ地方長官ノ指定スル小學校敎員ノ職ニ從事スル義務ヲ有ス

一 第一部男子卒業者ニ在リテハ卒業證書受得ノ日ヨリ三箇年

二 第一部女子卒業者ニ在リテハ卒業證書受得ノ日ヨリ二箇年

三 第二部卒業者ニ在リテハ卒業證書受得ノ日ヨリ二箇年

第六十三條 學資ノ支給額ニ差等ヲ設ケタル場合ニ於テ本科第一部公費卒業者ニシテ最多額ノ支給ヲ受ケサル者ニ就キテハ第六十一條ノ期間ヲ男子五箇年、女子三箇年トス

第六十四條 特別ノ事情アルトキハ前三條ノ期間內ニ於テ地方長官ノ許可ヲ受ケ本邦兒童ノ爲外國ニ於テ小學校令ノ旨趣ニ準シテ設立セル公立又ハ之ニ準スヘキ學校ノ敎員ノ職ニ從事スルコトヲ得

前項ノ服務ハ第六十一條及第六十二條ノ服務ト同視ス

第六十五條 服務期間內ニ於テ敎員養成ヲ目的トスル官立學校ニ入學セントスル者アルトキハ地方長官ハ之ヲ許可スルコトヲ得

前項ノ學校ニ入學シタル場合ニ於テハ在學中第六十一條及第六十二條ノ義務ノ履行ヲ猶豫ス其ノ卒業シタル場合ニ於テ當該學校ニ關スル法令ノ規定ニ依リ卒業後服務義務ヲ有スルトキハ第六十一條及第六十二條ノ義務ハ之ヲ免除ス

第六十六條 本科卒業者ニシテ第六十一條及第六十二條ノ義務ヲ盡クスコト能ハサル事由ヲ生シタル者又ハ外國政府ノ招聘ニ應シ敎員ノ職ニ從事セントスル者アルトキハ地方長官ハ必要ト認ムル期間內ノ義務ヲ免除スルコトヲ得

第六十七條 本科卒業者ニシテ服務期間內ニ於テ左ノ各號ノ一ニ該當スル者アルトキハ地方長官ハ公費卒業者ニ就キテハ授業費及其ノ在學中支給シタル學資、私費卒業者ニ就キテハ授業費ヲ償還セシムヘシ但シ情狀ニ依リ其ノ全部又ハ一部ノ償還ヲ免除スルコトヲ得

一 正當ノ事由ナクシテ第六十一條及第六十二條ノ義務ヲ盡ササルトキ

二 懲戒免職ニ處セラレタルトキ

三 小學校令ノ規定ニ依リ免許狀其ノ效力ヲ失ヒ又ハ免許狀褫奪ノ處分ヲ受ケタルトキ

四 前條前段ノ事由ニ因リ第六十一條及第六十二條ノ義務ヲ免除セラレタルトキ

第六十八條 前條授業費ノ金額ハ年額三拾圓以下ニ於テ地方長官之ヲ定ムヘシ

第三章 講習科

第六十九條 小學校敎員講習科ハ小學校敎員免許狀ヲ有スル者ニ必要ナル講習ヲ爲スモノトス

特別ノ必要アルトキハ尋常小學校敎員タラントスル者ニ必要ナル講習ヲ爲ス爲小學校敎員講習科ヲ設クルコトヲ得

第七十條 尋常小學校准敎員タラントスル者ノ爲設クル講習科ニ入學スルコトヲ得ル者ハ身體健全、品行方正ニシテ修業年限二箇年ノ高等小學校ヲ卒業シタル者又ハ之ト同等ノ學力ヲ有スル者トシ其ノ講習期間ハ一箇年以上トス

尋常小學校本科正敎員タラントスル者ノ爲設クル講習科ニ入學スルコトヲ得ル者ハ身體健全ニシテ尋常小學校准敎員免許狀ヲ有スル者又ハ身體健全、品行方正ニシテ之ト同等ノ學力ヲ有スル者トシ其ノ講習期間ハ二箇年以上トス

第七十一條 幼稚園保姆講習科ハ保姆タラントスル者又ハ保姆タルヘキ資格ヲ有スル者ニ必要ナル講習ヲ爲スモノトス

第七十二條 講習期間一箇年以上ノ講習科ヲ置キタルトキハ一學級毎ニ一人以上ノ割合ヲ以テ第四十六條ノ敎員定數ヲ增スヘシ

第七十三條 講習科ニ關シ必要ナル規程ハ地方長官之ヲ定ム

第四章 附屬小學校及附屬幼稚園

第七十四條 師範學校ニハ附屬小學校ヲ設クヘシ

女生徒ヲ置キタル師範學校ニハ成ルヘク附屬幼稚園ヲ設クヘシ

特別ノ事情アルトキハ地方長官ハ期間ヲ定メテ文部大臣ノ許可ヲ受ケ市町村立小學校ヲ以テ附屬小學校ニ代用シ又ハ市町村立若ハ私立ノ幼稚園ヲ以テ附屬幼稚園ニ代用スルコトヲ得

第七十五條 附屬小學校及附屬幼稚園ニハ小學校令第一條乃至第三條、第十八條乃至第二十七條、第三十七條、第三十八條、第四十七條、小學校令施行規則第一條乃至第二十八條、第三十條乃至第三十三條、第三十五條第一項及第四項、第三十七條、第三十八條、第四十二條乃至第五十三條、第五十六條、第百九十五條乃至第二百二條、第二百六條、第二百七條ヲ準用ス但シ小學校令第二十三條、第二十七條第三項、小學校令施行規則第十八條ノ二、第十九條、第三十一條第四項、第四十四條、第四十六條ニ關シテハ地方長官ニ於テ之ヲ專行スヘシ

第七十六條 附屬小學校ニ於テハ尋常小學校ノ敎科ト高等小學校ノ敎科トヲ併置スヘシ

第七十七條 附屬小學校ニ於テハ單級尋常小學校ノ例ニ準シテ編制シタル學級、數學年ノ兒童ヲ以テ編制シタル學級及一學年ノ兒童ヲ以テ編制シタル學級ヲ設クヘシ但シ女生徒ノミヲ置キタル師範學校ニ於テハ單級尋常小學校ノ例ニ準シテ編制シタル學級ヲ設ケサルコトヲ得

第七十八條 附屬小學校ニ於テハ二部敎授ヲ行フヘシ但シ已ムヲ得サル事情アルトキハ此限ニアラス

第七十九條 附屬小學校ノ敎員ハ小學校ノ正敎員免許狀ヲ有スル者タルヘシ

第八十條 附屬小學校ノ授業料及附屬幼稚園ノ保育料ニ關スル規程ハ地方長官之ヲ定ム

第五章 設備

第八十一條 師範學校ニ於テハ校地、校舍、寄宿舍、體操場及校具ヲ備フヘシ

前項ノ外農業ヲ加ヘタル學校ニ於テハ農業實習地ヲ備フヘシ

第八十二條 校地ハ學校ノ規模ニ適應セル面積ヲ有シ道德上竝ニ衞生上害ナキ所タルヘシ

第八十三條 校舍ハ敎授上、管理上竝ニ衞生上適當ニシテ質朴堅牢ナルヘシ

第八十四條 體操場ハ屋內體操場及屋外體操場トス

第八十五條 校具ハ圖書、器械、器具、標本、模型及表簿等トス

第八十六條 土地ノ情況ニ依リ學校長、舍監及敎員ノ住宅ヲ設クヘシ

第八十七條 校舍、寄宿舍及屋內體操場ヲ設ケ又ハ之ヲ變更シタルトキハ圖面ヲ添ヘ文部大臣ニ屆出ツヘシ

第六章 設置及廢止

第八十八條 師範學校ノ設置及廢止ハ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第八十九條 前條ニ依リ設置ノ認可ヲ受ケントスルトキハ左ノ事項ヲ具申スヘシ

一 名稱

二 位置

三 學科

四 生徒及兒童ノ定員、附屬幼稚園ヲ設クルトキハ幼兒ノ定員

五 學級、編制、附屬幼稚園ヲ設クルトキハ組ノ編制

六 開校年月

七 經費

前項第一號、第二號、第六號ノ變更ハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ、第三號乃至第五號ノ變更ハ文部大臣ニ屆出ツヘシ

前二項ノ位置ニ關シテハ校地ノ面積、地質、屋外體操場ノ區域、面積竝ニ附近ノ狀況ヲ記載シタル圖面及飮用水ノ定性分析表ヲ添附スヘシ

第七章 補則

第九十條 地方長官ハ師範學校ノ學則ヲ定メ遲滯ナク文部大臣ニ屆出ツヘシ其ノ之ヲ變更シタルトキ亦同シ

學則中ニ規定スヘキ事項左ノ如シ

一 學年、學期及休業日ニ關スル事項

二 學科課程及敎授時數ニ關スル事項

三 生徒ノ學業成績考査ニ關スル事項

四 生徒ノ入學、退學及懲戒ニ關スル事項

五 學資及授業費ニ關スル事項

六 寄宿舍ニ關スル事項

七 生徒ノ取締ニ關スル事項

八 講習科ニ關スル事項

九 附屬小學校及附屬幼稚園ニ關スル事項

十 其ノ他必要ナル事項

第八章 附則

第九十一條 本令ハ明治四十一年四月一日ヨリ施行ス

第九十二條 從前ノ規定ニ依ル本科ハ本令施行ノ日ヨリ當然本科第一部ニ變更セラレタルモノト看做ス

第九十三條 本令施行ノ際現ニ豫備科及本科ニ在學スル女生徒ノ修業年限ハ仍從前ノ規定ニ依ル但シ本令ノ規定ニ依ルコトヲ妨ケス

第九十四條 第六條及第二十八條ノ學科目中法制及經濟ハ當分之ヲ缺クコトヲ得

第八條第三項及第三十條第二項ニ規定シタル現行法制上ノ事項ノ大要ハ當分之ヲ授ケサルコトヲ得

法制及經濟ヲ缺キタル場合ニ於テハ其ノ爲週敎授時數ハ他ノ學科目ニ配當スルコトヲ得

第九十五條 本令施行ノ際現ニ豫備科及本科ニ在學スル生徒ニ課スヘキ學科目及其ノ程度ニ關シ

テハ從前ノ規定ヲ斟酌シ又ハ之ニ依ルコトヲ得

第九十六條　本令施行ノ際現ニ簡易科ニ在學スル生徒ニ就キテハ其ノ卒業ニ至ルマテ仍從前ノ規定ニ依ル

第九十七條　簡易科卒業者ノ服務義務ニ關シテハ第二章第七節ノ規定ヲ準用ス但シ其ノ服務期間ハ仍從前ノ規定ニ依ル

第九十八條　本令施行前師範學校ヲ卒業シタル者ニ對シテハ授業費償還ニ關スル規定ヲ適用セス

第九十九條　明治二十四年文部省令第二十六號、明治二十五年文部省令第八號、同第十號乃至第十二號、同第十五號、明治二十六年文部省令第十四號、明治三十年文部省令第十九號、同第二十一號及明治三十一年文部省令第四號ハ之ヲ廢止ス

明治四十年四月十七日
文部省訓令第六號
北海道廳　府縣

近年我邦教育ノ進歩ニ伴ヒ師範學校ノ現行規定中改正ノ必要ヲ感スルモノ尠カラス殊ニ今回義務教育ノ年限延長セラレタルニ際シ適良ナル教員ノ養成ヲ要スルコト益々切ナルニ至レリ是レ師範學校ニ關スル從來單行ノ諸規程ヲ總括シテ新ニ師範學校規程ヲ制定セル所以ナリ今左ニ其ノ改正ノ要旨ト施行上注意スヘキ事項ノ一斑トヲ掲示スル所アルヘシ

師範學校ノ學科ニ就キテハ本科ヲ第一部及第二部ニ分チ從來ノ簡易科ハ之ヲ廢止スルコトトセリ而シテ第一部ニ於テハ女生徒ノ修業年限ヲ男生徒ト同シク四箇年トシ又豫備科ノ修業年限ヲ一箇年ト定メタリ蓋シ從來本科卒業者ニ與ヘタル小學校教員ノ資格ハ男女ニヨリテ差異ナキニ拘ハラス其ノ修業年限ヲ異ニセルハ女子教育ノ發達尚幼稚ナリシ時代ニ於テ蓋シ已ムコトヲ得サルニ出テタルモノナリト雖今ヤ其ノ進歩發達著シク且教職ノ女子ニ待ツモノ漸ク切ナラントスルノ形勢ニ鑑ミ優良ナル女教員養成ノ必要ヲ認メタルヲ以テ本規程ニ於テハ男女共ニ其ノ修業年限ヲ同一ナラシメタリ

又第二部ニ於テハ主トシテ中學校又ハ高等女學校ノ卒業者ヲ入學セシメ之ニ一箇年若ハ二箇年必要ナル教育ヲ施シ以テ第一部ニ於ケルト同等ノ成績ヲ擧ケシメンコトヲ期セリ從來此等ノ學校卒業者ニシテ小學校ニ教員タル者尠カラスト雖教授訓練ニ關スル智識技能未タ十分ナラサルモノアリ近年地方ニヨリテハ短期ノ講習科ヲ設クルモノナキニアラス而モ其ノ期間、學科目、教授時數ノ如キ正教員養成ノ機關トシテハ頗ル不完全タルヲ免レス是レ今回一定ノ課程ノ下ニ新ニ第二部ヲ設ケ正教員養成ノ途ヲ開キタル所以ナリ然レトモ正教員ノ不足ハ一朝一夕ニ之ヲ補充シ得ヘキニアラサルカ故ニ第二部ヲ設置スル爲ニ第一部ノ縮少ヲ計ルカ如キハ本規程ノ趣旨ニ副ハサルモノトス而シテ若シ第二部ニ於テ毎年一學級ヲ編制スルニ足ルヘキ生徒數ヲ得難キトキハ男女生徒ノ各學級ヲ隔年交互ニ設ケ又ハ講習科ト交互ニ之ヲ設クル等便宜ノ方法ニヨリ苟モ中學校又ハ高等女學校ノ卒業者ニシテ小學校教員タラントスル者ハ成ルヘク遺漏ナク之ヲ收容シテ以テ第二部ヲ設クヘキナリ

高等小學校卒業者ヲシテ直ニ師範學校ニ進入スルコトヲ得シムルハ學校ノ系統上適當ノコトナルノミナラス一面ニハ優秀ナル生徒ヲ得ンカ爲メニ最有效ノ方法タリ是レ今回本科第一部ノ入學資格中ニ修業年限三箇年ノ高等小學校卒業者ヲ加ヘ又豫備科ノ修業年限、學科程度等ヲ一定シテ高等小學校第二學年修了者トノ連絡ヲ計リタル所以ナリ而シテ修業年限三箇年ノ高等小學校ハ當分其ノ數尚多カラサルヘキヲ以テ地方長官ハ成ルヘク豫備科ノ施設ヲ企圖センコトヲ望ム

小學校教員講習科ハ現ニ小學校教員タル資格ヲ有スル者ニ必要ナル補習ヲ爲サシムルヲ以テ本體トシ特別ノ必要アルトキハ尋常小學校教員養成ノ爲ニ之ヲ設クルヲ得ルコトトシ且其ノ講習期間ニ關スル制限ヲ定メタリ今ヤ小學校令ノ改正ニヨリ從來ノ尋常小學校教員ノ資格ヲ有スル者ト雖將來ノ尋常小學校教員トシテハ學力ノ不足ヲ免カレサルニ至ルヘキカ故ニ此等教員ノ爲特ニ講習科ヲ設ケ學力ノ補習ヲ計ルコトハ今日ノ最モ急務トスル所ナリ

學科目ニ就キテハ社會ノ趨勢ト從來ノ經驗トニ鑑ミテ本科第一部ノ男生徒ニ對シ新ニ法制及經濟ヲ加ヘ又男女生徒ヲ問ハス手工ヲ必修セシムルコトトシ英語ハ男生徒ニ對シテハ必修科目トシ女生徒ニ對シテハ之ヲ加設スルコトヲ得シメ共ニ隨意科目トナセリ而シテ法制及經濟ハ當分ノ內之ヲ缺クコトヲ得シメ倂其ノ實施ニ就キテハ準備ヲ要スルモノアリ此旨追テ訓示スル所アラントス又英語ハ元來學習ニ困難ナル學科ナルヲ以テ學力ニ餘裕アル者又ハ講學ノ材幹アル者ノ之ヲ修ムルハ固ヨリ妨ナシト雖徒ニ世ノ流行ニ倣ヒテ之ヲ學習スルカ如キハ深ク戒ムヘキコトニシテ學校職員ヲシテ指導其ノ方ヲ誤ラシメサランコトヲ要ス

本科第二部ハ高等普通教育ヲ終レル者ニ對シテ短期ノ師範教育ヲ施シ教員タルニ適セシメントスルモノナレハ此ノ旨趣ニ基キ其ノ學科目及程度ヲ配當規定セリ故ニ之ヲ授クルニハ主トシテ既得ノ知識技能ニ基キテ之ヲ統合補習セシメ殊ニ小學校ニ於ケル教職ニ關シ必要ナル事項ヲ習得セシムルコトニ注意セサルヘカラサルナリ

師範學校ニ於テハ生徒ニ學資ヲ支給スルハ其ノ本則トスル所ナレトモ地方ニヨリ入學志望者ノ多少、生活程度ノ高低等固ヨリ同一ナラサルカ故ニ全國劃一ノ制ニ依ルコトヲ要セサルノミナラス現今ノ狀況ニ就キテ之ヲ考フルトキハ學資ノ金額ニ差等ヲ設ケテ必要ニ應シ適度ニ之ヲ支給シ而シテ其ノ節約シ得タル所ハ以テ女生徒ノ修業年限延長等ニ要スヘキ經費ヲ補ヒ又ハ生徒ノ員數ヲ增加スル等他ノ需要ニ充テンカ爲學資ノ種類金額ハ之ヲ地方長官ノ適當ナル措置ニ一任セリ又從來ノ經驗ニ徵スルニ卒業者ノ服務年限ハ長キニ失スルノ嫌ナキニアラサルヲ以テ本規程ニ於テハ其ノ年限ヲ減縮シタリ

附屬小學校及附屬幼稚園ニ就キテハ特別ノ事情アルトキハ市町村立小學校及幼稚園又ハ私立ノ幼稚園ヲ以テ代用スルコトヲ許セリ是レ將來師範學校ノ增設又ハ生徒ノ增加ニ伴ヒ附屬小學校又ハ附屬幼稚園ヲ設置シ若ハ之ヲ擴張スルノ必要アルニ際シ土地ノ情況地方經濟ノ緩急ニヨリ便宜ノ施設ヲ爲スコトヲ得シメ教育及保育ノ實習上支障ナカラシメンカ爲ナリ又附屬小學校ニ於テハ規程ニ示セル學級ノ外成ルヘク盲人、啞人又ハ心身ノ發育不完全ナル兒童ヲ教育センカ爲特別學級ヲ設ケ之カ教育ノ方法ヲ攻究センコトヲ希望ス蓋シ此ノ如キ施設ハ從來未タ多ク見サリシ所ナリト雖教育ノ進歩ト文化ノ發展トニ伴ヒ將來ニ於テハ其ノ必要アルヲ認ムルヲ以テナリ

要スルニ今回改正ノ要旨ハ小學校教育ノ發達ニ伴ヒ其ノ源泉タル師範教育ノ內容ヲ改善シ一層優良ナル小學校長及教員ヲ得兼テ其ノ不足ヲ補充スルニ足ルヘキ人員ヲ養成セシメムトスルニ外ナラス而シテ諸般ノ施設ニ關シ教育上障害ナキ範圍內ニ於テ節約利用ノ方法ヲ講シ以テ多數ノ生徒ヲ養成センコト最希望ニ堪ヘサルナリ即チ土地ノ情況ニ應シ私費生及女生徒ノ員數ヲ適度ニ增加スルコト教育ニ妨ナキ限ニ於テ校舍ノ利用度數ヲ增加シ教員勤務ノ繁閑ヲ考ヘ便宜從二部ノ教授ヲ獎勵スルコト又ハ生徒收容上ノ必要ニヨリテハ一部ノ生徒ヲ外宿セシムル途ヲ講スル等ノ如キ孰モ此ノ目的ヲ達スルニ於テ便宜ノ方法タラスンハアラス而シテ制度ノ改善ハ未タ必スシモ直ニ教育ノ改善ヲ意味セス地方長官ハ宜シク學校職員ヲ督勵シ以テ本規程改正ノ旨趣ヲ貫徹セシメムコトヲ期スヘシ

第七款　高等學校

●高等學校大學豫科入學者選拔試驗規程中改正

明治四十年五月二日
文部省告示第百五十號

明治三十六年文部省告示第八十四號高等學校大學豫科入學者選拔試驗規程中左ノ通改正ス

第六條第一項ヲ左ノ如ク改ム

選拔試驗ヲ受ケントスル者ハ其入學セントスル高等學校及修業セントスル部類ヲ指定スヘシ

指定スヘキ部類ハ左ノ如シ

第一部甲類	英語法科 政治科
第一部乙類	英語文科
第一部丙類	獨語法科 獨語文科
第一部丁類	佛語法科 佛語文科
第二部甲類	工科 理科
第二部乙類	農科 醫科ノ內藥學科
第三部	醫科

第八條ヲ左ノ如ク改ム

第八條　選拔試驗ヲ受ケントスル者ハ高等學校ヨリ受驗志望者名票ヲ受領シ之ニ族籍、氏名、志望事項等ヲ記シ出願前六箇月以內ニ撮影シタル寫眞（寫眞ハ脫帽シ半身ヲ撮影シタルモノニシテ其裏面ニハ族籍、氏名ヲ記入スヘシ）ヲ添ヘ試驗ヲ受ケントスル高等學校ニ差出スヘシ

第八款　帝國大學

●東京帝國大學分科大學講座種類及其數中改正

明治四十年四月二十四日
勅令第百五十三號（文、大臣副署）

朕明治二十六年勅令第九十三號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十六年勅令第九十三號中左ノ通改正ス

法科大學ノ部「民事訴訟法　一講座」ヲ「民事訴訟法、破產法　二講座」ニ、「經濟學、財政學　三講座」ヲ「經濟學　四講座」ニ改メ其ノ次ニ「財政學　一講座」ヲ加ヘ醫科大學ノ部「藥學」ノ次ニ「藥品製造學　一講座」ヲ加ヘ工科大學ノ部「應用化學」ノ下「三講座」ヲ「四講座」ニ、「採鑛學、冶金學　五講座」ヲ「採鑛學　二講座」ニ改メ其ノ次ニ「冶金學　三講座」ヲ加ヘ文科大學ノ部「英語學、英文學」ノ下「一講座」ヲ「二講座」ニ、理科大學ノ部「理論物理學」ノ下「一講座」ヲ「二講座」ニ改メ農科大學ノ部「農政學、經濟學」ノ次ニ「水產學　三講座」ヲ、其ノ次ニ「水產海洋學　一講座」ヲ加フ

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●京都帝國大學法科大學ニ法律學科及政治學科設置

明治四十年五月十八日　文部省令第十六號

京都帝國大學法科大學ニ法律學科及政治學科ヲ置ク

本令ハ明治四十年九月十一日ヨリ之ヲ施行ス

●京都帝國大學法科大學醫科大學文科大學及理工科大學講座種類及其數中改正

明治四十年五月十日　勅令第百八十七號總、文、大臣副署

朕明治三十六年勅令第六十八號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十六年勅令第六十八號中左ノ通改正ス

法科大學ノ部「民法」ノ下「三講座」ヲ「四講座」ニ、「刑法、刑事訴訟法」ノ下「一講座」ヲ「二講座」ニ、「經濟學」ノ下「二講座」ヲ「三講座」ニ改メ「國際私法」ノ次ニ「法制史　一講座」「比較法制史　一講座」ヲ加ヘ醫科大學ノ部「病理學」ノ下「一講座」ヲ「二講座」ニ改メ文科大學ノ部「哲學、哲學史」ノ前ニ「國史學　一講座」「史學、地理學二講座」「東洋史學　一講座」ヲ、「心理學」ノ次ニ「宗教學一講座」「社會學　一講座」ヲ、「支那語學、支那文學」ノ次ニ「西洋文學　一講座」ヲ加ヘ理工科大學ノ部「物理學」ノ下「三講座」ヲ「四講座」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●東北帝國大學ニ關スル制

明治四十年六月二十二日　勅令第二百三十六號總、文、大臣副署

朕東北帝國大學ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　仙臺ニ帝國大學ヲ置キ東北帝國大學ト稱ス

第二條　札幌農學校ヲ東北帝國大學農科大學トス

第三條　東北帝國大學ノ分科大學及分科大學中ノ各學科開設ノ期日ハ文部大臣之ヲ定ム

第四條　東北帝國大學總長ノ職務ハ當分ノ內東北帝國大學農科大學長ヲシテ之ヲ行ハシム

第五條　帝國大學令第六條乃至第八條ノ規定ハ當分ノ內東北帝國大學ニ之ヲ適用セス

附則

本令ハ明治四十年九月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治四十年六月二十四日　文部省令第二十一號

東北帝國大學農科大學ハ本年九月一日ヨリ開設ス

東北帝國大學農科大學ニハ農學科、農藝化學科、林學科及畜產科ヲ置キ農學科、農藝化學科ハ本年九月十一日ヨリ林學科、畜產科ハ明治四十三年九月十一日ヨリ其ノ授業ヲ開始ス

●東北帝國大學農科大學講座種類及其數

明治四十年六月二十二日　勅令第二百四十號總、文、大臣副署

朕東北帝國大學農科大學ノ講座ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

東北帝國大學農科大學ニ於ケル講座ノ種類及其ノ數ヲ定ムルコト左ノ如シ

農學	二講座
農藝化學	二講座
農藝物理學	一講座
植物學	一講座
動物學、昆蟲學、養蠶學	三講座
園藝學	一講座
畜產學	一講座
農政學、殖民學	一講座

附則

本令ハ明治四十年九月一日ヨリ之ヲ施行ス

第九款　專門學校

●專門學校入學者檢定規程ニ依ル無試驗檢定ヲ受クルコトヲ得ル者指定

明治四十年二月二十四日　文部省告示第二十七號

明治三十六年文部省令第十四號專門學校入學者檢定規程第八條第一號ニ依リ無試驗檢定ヲ受クルコトヲ得ル者ヲ指定スルコト左ノ如シ

仙臺高等工業學校ノ入學ニ關シテハ工業學校卒業者

明治四十年三月八日　文部省告示第六十三號

明治三十六年文部省令第十四號專門學校入學者檢定規程第八條第一號ニ依リ左記ノ者ヲ專門學校ノ入學ニ關シ中學校卒業者ト同等ノ學力ヲ有スルモノト指定ス

東京府私立日蓮宗大學林中等科卒業者（明治三十八年三月以後ノ卒業者ニ限ル）

明治四十年三月十六日　文部省告示第七十二號

明治三十六年文部省令第十四號專門學校入學者檢定規程第八條第一號ニ依リ左記ノ者ヲ專門學校ノ入學ニ關シ中學校卒業者ト同等ノ學力ヲ有スルモノト指定ス

廣島縣私立第四佛教中學卒業者（明治四十年三月以後ノ卒業者ニ限ル）

明治四十年三月二十一日　文部省告示第八十二號

明治三十六年文部省令第十四號專門學校入學者檢定規程第八條第一號ニ依リ左記ノ者ヲ專門學校ノ入學ニ關シ中學校卒業者ト同等ノ學力ヲ有スルモノト指定ス

新潟縣私立有恆學舍本科卒業者（明治四十年三月以後ノ卒業者ニ限ル）

明治四十年三月三十日　文部省告示第九十九號

東京府私立宗教大學ノ入學ニ關シテハ明治三十六年文部省令第十四號專門學校入學者檢定規程第八條第一號ニ依リ左記ノ者ヲ中學校卒業者ト同等ノ學力ヲ有スルモノト指定ス

愛知縣私立第四教區宗學教校卒業者（明治三十五年三月以後ノ卒業者ニ限ル）

明治四十年八月一日　文部省告示第二百九號

明治三十六年文部省令第十四號專門學校入學者檢定規程第八條第一號ニ依リ左記ノ者ヲ專門學校ノ入學ニ關シ中學校卒業者ト同等ノ學力ヲ有スルモノト指定ス

長崎縣私立東山學院卒業者（明治四十一年三月以後ノ卒業者ニ限ル）

明治四十年十一月三十日　文部省告示第二百八十五號

明治三十六年文部省令第十四號專門學校入學者檢定規程第八條第一號ニ依リ左記ノ者ヲ專門學校ノ入學ニ關シ中學校若ハ修業年限四箇年ノ高等女學校ノ卒業者ト同等以上ノ學力ヲ有スルモノト指定ス

一　臺灣總督府中學校第二部卒業者

一　臺灣總督府高等女學校卒業者

●官立醫學專門學校規程

明治四十年四月十日　文部省令第十號

官立醫學專門學校ノ修業年限、學科、學科目及其ノ程度竝研究生ニ關スル規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

官立醫學專門學校規程

第一條　官立醫學專門學校ノ學科ヲ分チテ醫學科及藥學科トス

岡山醫學專門學校ニハ藥學科ヲ設置セス

第二條　官立醫學專門學校ノ修業年限ハ醫學科ヲ四箇年トシ藥學科ヲ三箇年トス

第三條　各學科ノ學科目及其ノ程度ハ左ノ如シ

醫學科

學科目		第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
		每週教授時數	每週教授時數	每週教授時數	每週教授時數
倫理		一			
獨逸語		八	四	四	四
化學	理論及實驗	六			
解剖學	理論	八			
	實習		四		
	局所解剖學			一	
	組織學理論	二			
	組織學實習及顯微鏡用法		三		
胎生學			一		
生理學	生理學理論及實驗	三	五		
	醫化學理論及實驗				
衛生學	衛生學理論及實驗				二
細菌學	細菌學理論及實習		二	二	
病理學	總論　病理解剖學		六		
	病理解剖學實習			時々	時々
	病理組織學實習			二	
藥物學	理論及實驗		三		

處方學				〇、五	
內科學	理論			三	三
	臨床講義			三以上	三以上
	外來患者臨床講義			不定時	不定時
	小兒科學			一	
	診斷學		二		
外科學	總論		三		
	各論			三	三
	臨床講義			四以上	四以上
	外來患者臨床講義			不定時	不定時
	繃帶實習		一		
	手術實習			一	
皮膚病學黴毒學	理論及臨床講義			一以上	
	外來患者臨床講義			不定時	
耳鼻咽喉科學	理論及臨床講義			一以上	
	外來患者臨床講義			不定時	
眼科學	理論及檢眼鏡用法			四	
	臨床講義			一以上	一以上
	外來患者臨床講義			不定時	不定時
	産科學理論				三
産科學婦人科學	婦人科學理論			二	
	産科婦人科臨床講義及産科模型演習				二以上
	外來患者臨床講義				不定時
精神病學	理論 臨床講義				二
法醫學	理論				二
體操		三			
計		三一	三四	三五以上	二九以上

藥學科

學科目 ＼ 學年		第一學年 每週教授時數	第二學年 每週教授時數	第三學年 每週教授時數
倫理		一		
獨逸語		八	四	六
鑛物學		一		
化學	理論及實驗	七		
藥用植物學	理論	三		
	實習及顯微鏡用法	三		
分析學	理論	二	二	
	實習		九	
衞生化學	理論		二	
	實習		一	六
	細菌學理論及實習			一
裁判化學	理論			一
	實習			三
生藥學	理論		三	
	實習		二	
藥局方	日本藥局方 外國藥局方要領		一	
調劑學	理論		一	
	實習		二	二
製藥化學	理論		五	
	實習			一二
藥品鑑定	實習		一	五
體操		三		
計		二八	三三	三六

備考 各學科第二學年以上ニ於ケル倫理ハ特ニ毎週教授時數ヲ定メス適切ノ時期ニ於テ隨時之ヲ課スルモノトス

教授上各學年ヲ數學期ニ分ツ必要アルトキハ學校長ハ前項ノ毎週教授時數ノ範圍內ニ於テ適宜ニ各學期ノ毎週教授時數ヲ定ムルコトヲ得

學校長ハ臨時必要ト認メタル場合ニ於テハ第一項ノ毎週教授時數ヲ增減シ若ハ科外講義ヲ開クコトヲ得

第四條　卒業者ニシテ既修ノ學科目ニ就キ更ニ研究セントスル者アルトキハ學校長ハ必要ト認メタル場合ニ限リ二箇年以內當該學校ニ於テ研究ニ從事スルコトヲ許可スルコトヲ得

附　則

本令ハ明治四十年九月十一日ヨリ施行ス

●東京外國語學校修業年限學科學科目及其ノ程度竝研究生選科生專修科及速成科ニ關スル規程中改正

明治四十年二月十八日
文部省令第四號

明治三十七年文部省令第十三號東京外國語學校ノ修業年限、學科、學科目及其ノ程度竝研究生、選科生、專修科及速成科ニ關スル規程中左ノ通改正ス

第三條各學科ノ學科目及其ノ程度表中「英(佛、獨)語學科」ヲ「英(佛、獨、露、伊、西)語學科」ニ「露(伊、西、淸、韓)語學科」ヲ「淸(韓)語學科」ニ改ム

附　則

本令ハ明治四十年四月一日ヨリ施行ス

明治四十年三月二十八日
文部省令第七號

明治三十七年文部省令第十三號東京外國語學校ノ修業年限、學科、學科目及其ノ程度竝研究生、選科生、專修科及速成科ニ關スル規程ヲ東京外國語學校ノ修業年限、學科、學科目及其ノ程度竝研究生、選科生及專修科ニ關スル規程ト改メ且同規程中第七條ヲ削除ス

本令ハ明治四十年四月一日ヨリ施行ス

●東京美術學校圖畫師範科規程

明治四十年六月五日
文部省令第十八號

東京美術學校圖畫師範科ノ修業年限、學科目及其ノ程度竝入學ニ關スル規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

東京美術學校圖畫師範科規程

第一條　東京美術學校圖畫師範科ノ修業年限ハ三箇年トス

第二條　東京美術學校圖畫師範科ノ學科目ハ倫理、教育學及教授法、美學及美術史、解剖學、圖案法、自在畫、幾何畫法、手工、習字、英語、教授練習及體操トス

第三條　前條各學科目ノ毎週教授時數ハ左ノ如シ

學科目	毎週教授時數		
	第一學年	第二學年	第三學年
倫理	一	一	一
教育學及教授法	二	二	二
美學及美術史	二	二	二
解剖學	二		
圖案法		二	
自在畫	一九	一九	一八
幾何畫法	三	三	二
手工	四	四	二
習字	二	二	
英語	二	二	
教授練習			一〇
體操	二	二	二
合計	三八	三九	三九

學校長ハ臨時必要ト認メタル場合ニ於テハ前項各學科目ノ毎週教授時數ヲ增減シ若ハ科外講義ヲ開クコトヲ得

第四條　東京美術學校圖畫師範科ニ入學ヲ許可スヘキ者ハ師範學校又ハ中學校ヲ卒業シタル者及專門學校入學者檢定規程ニ依リ檢定ヲ受ケタル者ニシテ年齡二十四年以下身體健全品行方正ナル男子ニ就キ地方長官之ヲ薦擧シ東京美術學校長其ノ中ヨリ試驗ノ上之ヲ定ム必要ト認メタルトキハ東京美術學校長ハ前項地方長官ノ薦擧ニ依ラスシテ入學ヲ許可スルコトヲ得

第五條　生徒ニ缺員アルトキハ東京美術學校長ハ前條ノ資格ヲ有シ且當該學年ニ相當スル學力ヲ有スル者ニ就キ試驗ノ上入學ヲ許可スルコトヲ得

第十款　實業學校

●東京高等工業學校規程中改正

明治四十年四月九日
文部省令第八號

明治三十八年文部省令第十五號東京高等工業學校規程附則中但書ヲ削除ス

●名古屋高等工業學校規程中改正

明治四十年四月九日
文部省令第九號

明治三十八年文部省令第九號名古屋高等工業學校規程中左ノ通改正ス

第三條ヲ左ノ如ク改ム

名古屋高等工業學校各學科ノ學科目及其ノ程度ハ左ノ如シ

但シ必要ノ場合ニハ教授定時間外又ハ休業中ニ於テ臨時講演ヲ聽カシメ又ハ練習ヲ課スルコトアルヘシ

土木科

學年／學科目	第一學年教授時數			第二學年教授時數			第三學年教授時數		
	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期
倫理	一五	一五	一〇	一五	一五	一〇	一五	一五	一〇
英語	六〇	六〇	四〇	四五	四五	三〇	四五	四五	三〇
數學	七五	七五	五〇	六〇	六〇				
物理學	四五	四五	三〇	三〇	三〇	二〇			
化學	三〇	三〇	二〇						
應用力學		三〇	四〇	六〇	六〇	四〇			
幾何畫	九〇	六〇							
建築材料	三〇	三〇							
應用機械學							四五	四五	三〇
家屋構造				三〇	三〇				
石工學				四五	四五	二〇			
橋梁					四五	三〇	四五		
道路鐵道				三〇	三〇	三〇	四五	三〇	
衛生工學							四五	三〇	二〇
河海工學						三〇	四五	四五	
地質學	三〇								
測量	三〇	四五	三〇	四五					
製圖及實習	一五〇	一六五	一五〇	一九五	一九五	一六〇	三〇〇	三七五	三〇〇
體操	三〇	三〇	二〇	三〇	三〇	二〇			
計	五八五	五八五	三九〇	五八五	五八五	三九〇	五八五	五八五	三九〇

機械科

學年／學科目	第一學年教授時數			第二學年教授時數			第三學年教授時數		
	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期
倫理	一五	一五	一〇	一五	一五	一〇	一五	一五	一〇
英語	六〇	六〇	四〇	四五	四五	三〇	四五	四五	三〇
數學	七五	七五	五〇	六〇	六〇				
物理學	四五	四五	三〇	三〇	三〇	二〇			
化學	三〇	三〇	二〇						
應用力學		三〇	四〇	六〇	六〇	四〇			
幾何畫	九〇	六〇							
工作法	三〇	三〇	二〇	一五	一五	一〇			
發動機				六〇	六〇	四〇	六〇	六〇	二〇
電氣工學				三〇	三〇	二〇			
工場建築							一五	一五	一〇
特別講義							七五	七五	五〇
製圖及實習	二一〇	二一〇	一六〇	二四〇	二四〇	二〇〇	三七五	三七五	二七〇
體操	三〇	三〇	二〇	三〇	三〇	二〇			
計	五八五	五八五	三九〇	五八五	五八五	三九〇	五八五	五八五	三九〇

建築科

學年／學科目	第一學年教授時數			第二學年教授時數			第三學年教授時數		
	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期
倫理	一五	一五	一〇	一五	一五	一〇	一五	一五	一〇
英語	六〇	六〇	四〇	四五	四五	三〇	四五	四五	三〇
數學	七五	七五	五〇						
物理學	四五	四五	三〇	三〇	三〇	二〇			
化學	三〇	三〇	二〇						
應用力學				七五	四五	三〇			
自在畫	六〇	六〇	四〇	六〇	六〇	四〇	四五	四五	

幾何畫	建築材料	家屋構造	設計法	建築史	衛生建築	施工法	裝飾法	測量	製圖及實習	體操	計
九〇	三〇	三〇							一二〇	三〇	五八五
九〇	三〇	三〇							一二〇	三〇	五八五
四〇		二〇							一二〇	二〇	三九〇
一五		三〇	三〇	三〇				一五	二二〇	三〇	五八五
一五		三〇	三〇	三〇				一五	二四〇	三〇	五八五
一〇		二〇	二〇	二〇				一〇	一六〇	二〇	三九〇
		三〇			三〇	四五	三〇		三四五		五八五
		三〇			三〇	四五	三〇		三四五		五八五
							二〇		三三〇		三九〇

機織科

學年	學期	倫理	英語	數學	物理學	化學	製造化學	應用機械學	圖畫	織物原料及計算	色染	機織	染織物整理	紡績	機械製圖	實習	體操	計
第一學年教授時數	第一學期	一五	六〇	七五	四五	六〇			一二〇	一五		三〇				一三五	三〇	五八五
	第二學期	一五	六〇	七五	四五	六〇			九〇	一五		三〇				一六五	三〇	五八五
	第三學期	一〇	四〇	五〇	三〇	四〇			四〇	一〇		二〇				一三〇	二〇	三九〇
第二學年教授時數	第一學期	一五	四五		三〇		三〇		六〇	一五	一五	六〇			七五	一六五	三〇	五八五
	第二學期	一五	四五		三〇		三〇	四五	六〇		一五	六〇			七五	一八〇	三〇	五八五
	第三學期	一〇	三〇		二〇		二〇	三〇	四〇		一〇	四〇			五〇	一二〇	二〇	三九〇
第三學年教授時數	第一學期	一五	四五					三〇				六〇	三〇	三〇	七五	三〇〇		五八五
	第二學期	一五	四五					三〇				六〇	三〇	三〇	七五	三〇〇		五八五
	第三學期	一〇	三〇									二〇		一〇	五〇	二七〇		三九〇

色染科

學年	學期	倫理	英語	數學	物理學	化學	製造化學	應用機械學	圖畫	織物原料	色染	機織	染織物整理	化學分析	機械製圖	實習	體操	計
第一學年教授時數	第一學期	一五	六〇	三〇	四五	四五			一二〇	三〇		一五		四五		一五〇	三〇	五八五
	第二學期	一五	六〇	三〇	四五	四五			九〇	三〇	三〇	一五		四五		一五〇	三〇	五八五
	第三學期	一〇	四〇	二〇	三〇	三〇			四〇		二〇	一〇		三〇		一四〇	二〇	三九〇
第二學年教授時數	第一學期	一五	四五		三〇		三〇	四五	四五		三〇			七五	七五	一六五	三〇	五八五
	第二學期	一五	四五		三〇		三〇	四五	四五		三〇			七五	七五	一六五	三〇	五八五
	第三學期	一〇	三〇		二〇		二〇	三〇	三〇		二〇			五〇	五〇	一一〇	二〇	三九〇
第三學年教授時數	第一學期	一五	四五					三〇			四五		三〇	一三五		二八五		五八五
	第二學期	一五	四五					三〇			四五		三〇	一三五		二八五		五八五
	第三學期	一〇	三〇								二〇			九〇		二四〇		三九〇

各學科目ノ每週教授時數ハ學校長之ヲ定ム

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

●熊本高等工業學校規程中改正

明治四十年一月十日
文部省令第一號

明治三十九年文部省令第九號熊本高等工業學校規程中左ノ通改正ス

第三條中採鑛冶金學科ニ關スル部分ヲ左ノ如ク改ム

採鑛冶金學科

學年	學期	倫理	英語	數學	物理學	化學	幾何畫法	測量	地質學鑛物學	機械工學	電氣工學	採鑛學	選鑛學	冶金學	鐵冶金學	試金術	吹管分析	鑛山法律	分析實驗及製圖	兵式體操	計
第一學年每週教授時數	第一學期		四	三	四	四	二	二	三										一五	二	三九
	第二學期		四	三	四	四	二	一	三										一六	二	三九
	第三學期		四	三	四	四	二	一	三										一六	二	三九
第二學年每週教授時數	第一學期		三							三	三	四		二		三	二		一七	二	三九
	第二學期		三							三	三	四		二		三	二		一七	二	三九
	第三學期		三							三	三	四		二		三	二		一七	二	三九
第三學年每週教授時數	第一學期		二									二	二	三	二			一	二五	二	三九
	第二學期		二									二	二	三	二			一	二五	二	三九
	第三學期		二									二		三	二			一	二七	二	三九

附則

本令ハ明治四十年七月四日ヨリ施行ス

●仙臺高等工業學校規程

明治四十年二月四日
文部省令第三號

仙臺高等工業學校ノ修業年限學科學科目及其ノ程度ニ關スル規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

仙臺高等工業學校規程

第一條　仙臺高等工業學校ノ修業年限ハ三箇年トス

第二條　仙臺高等工業學校ノ學科ハ土木工學科、機械工學科、電氣工學科及採鑛冶金學科トス

第三條　仙臺高等工業學校各學科ノ學科目及其ノ程度ハ左ノ如シ

土木工學科

學年／學科目	第一學年每週教授時數			第二學年每週教授時數			第三學年每週教授時數		
	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期
倫理	一	一	一	一	一	一	一	一	一
數學	六	六	六	三	三				
物理學	四	四	四						
物理實驗		四	四						
化學	三	三							
英語	四	四	四	三	三	三	二	二	二
幾何畫法	四	四							
地質學	二	二							
測量			二	三	三	三			
應用力學	一	二	二	五	五	五			
機械工學				三	三	三			
電氣工學				二	二	二			
石工學			二	二	二	二			
道路				二					
市街鐵道									三
鐵道						二	三	四	
橋梁						三	四	四	
河海工學							三	三	三
衛生工學							二	二	二
造家學							一	一	一
建築材料				一	一	一			
土木法令							一	一	一
工業經濟							一	一	一
設計製圖及實習	一三	七	一三	一三	一四	一三	一九	一八	二三
兵式體操	二	二	二	二	二	二	二	二	二
計	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九

備考　休業中ニ於テ工業ノ實地ニ就キ實習セシムルコトアルヘシ（以下各學科之ニ倣フ）

機械工學科

學年／學科目	第一學年每週教授時數			第二學年每週教授時數			第三學年每週教授時數		
	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期
倫理	一	一	一	一	一	一	一	一	一
數學	六	六	六	三	三				
物理學	四	四	四	三	三	三			
物理實驗		四	四						
化學	三	三							
英語	四	四	四	三	三	三	二	二	二
幾何畫法	四	四							
應用力學			二	五	五	五			
工作法	二	二	二						
機械製造法				二	二	二			
發動機				三	三	四	四	四	四
電氣及磁氣	二	二	二						
電氣工學				二	二	二			
特別講義							五	五	五
工業法令							一	一	一
工業經濟							一	一	一
工業簿記								一	一
工業衛生							二		
工場建築							一	一	一
兵式體操	二	二	二	二	二	二	二	二	二
製圖及實習	一二	七	一三	一五	一五	一七	二〇	二一	二一
計	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九

電氣工學科

學年／學科目	第一學年每週教授時數			第二學年每週教授時數			第三學年每週教授時數		
	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期
倫理	一	一	一	一	一	一	一	一	一
數學	五	五	五	四	四				
物理學	四	四	四						
物理實驗		四	四						
化學	三	三							
英語	四	四	四	三	三	三	二	二	二
幾何畫法	四	四							
應用力學			二	五	五	五			
工作法	二	二	二	一	一	一			
機械工學				三	三	三			
電氣及磁氣	二	二	二						
電氣工學			四	六	六	六	八	八	八
電氣化學							二	二	二
製造冶金學							二	二	
機械製圖				四	四	四			
工業法令								一	一
工業經濟							一	一	一
工業簿記								一	一

工業衛生						二		
工場建築						一	一	一
兵式體操	二	二	二	二	二	二	二	二	二
機械實修	四	三	三				一八	一八	二〇
製圖及實習	八	五	六	一〇	一〇	一四			
計	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九

採鑛冶金學科

學科目／學年	第一學年毎週教授時數			第二學年毎週教授時數						第三學年毎週教授時數					
				採鑛學科			冶金學科			採鑛學科			冶金學科		
	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期
倫理	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
數學	五	五	五												
物理學	四	四	四												
物理實驗		四	四												
化學	三	三	三												
英語	四	四	四	三	三	三	三	三	三	二	二	二	二	二	二
幾何畫法	四	四													
測量			二	三	三	三									
地質學鑛物學	四	四								二	二	二			
應用力學			二	二	二	二	二	二	二						
機械工學				三	三	三	三	三	三						
電氣工學				二	二	二	二	二	二						
探鑛學				二	二	二	二	二	二						
採鑛學				三	三	三	二	二	二	四	四	四			
冶金學				二	二	二	四	四	四				二	二	二
製造化學													二	二	二
製造冶金學													二	二	二
電氣化學													二	二	二
吹管分析及試金術							二	二	二	二	二	二			
機械製圖				三	三	三									
鑛業法規										一	一	一	一	一	一
工業簿記											一	一		一	一
工業衛生										二			二		
工場建築										一	一	一	一	一	一
兵式體操	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
分析製圖及實習	一二	八	一二	一三	一三	一三	一六	一六	一六	二二	二三	二三	二二	二三	二三
計	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九

備考 第二學年以上ノ者ニ對シテハ特ニ採鑛學科冶金學科ニ分チ各其ノ一ヲ專修セシム

第四條 卒業者ニシテ既修ノ學科ニ就キ更ニ研究セントスル者アルトキハ二箇年以内在學セシムルコトヲ得

第五條 各學科中ノ一學科目若ハ數學科目ヲ撰擇シテ學修セントスル者ハ撰科生トシテ二箇年以内在學ヲ許スコトヲ得

明治四十年十二月十九日
文部省令第三十六號

明治四十年文部省令第三號仙臺高等工業學校規程中左ノ通改正ス

第三條中各學科ノ學科目及其ノ程度ヲ左ノ如ク改ム

土木工學科

學科目／學年	第一學年毎週教授時數			第二學年毎週教授時數			第三學年毎週教授時數		
	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期
倫理	一	一	一	一	一	一	一	一	一
體操	二	二	二	二	二	二	二	二	二

數學	五	五	五	四					
物理學	四	四	四						
物理學實驗		三	三						
化學	三	三							
英語	四	四	四	三	三	三	二	二	二
地質學	二	二							
測量	二	二	二	二	二	一			
應用力學		二	二	四	五	五			
建築材料	一	一	一						
石工學			二	二	二	二			
道路				二					
鐵道及市街鐵道					二	二	四	四	三
橋梁						四	四	四	
河海工學						二	三	三	三
衛生工學							三	二	二
原動機				四	五			二	
電氣工學				二	二	二			
建築學								二	一
工業法令及經濟								二	二
設計、製圖及實習	一五	一〇	一三	一三	一五	一五	二〇	一五	二三
計	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九

（備考）休業中其ノ他便宜ノ時ニ於テ工業ノ實地ニ就キ實習セシム以下各學科ノ備考ハ之ニ倣フ

機械工學科

學科目 學年	第一學年每週教授時數			第二學年每週教授時數			第三學年每週教授時數		
	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期
倫理	一	一	一	一	一	一	一	一	一
體操	二	二	二	二	二	二	二	二	二
數學	六	六	六						
物理學	四	四							
物理學實驗		三	三						
英語	四	四	四	三	三	三	二	二	二
工作法	二	二	二						
機械運動及力學		二	二						
材料及構造強弱學		二	二						
水力學及水力原動機				二	二	二			
熱力學及熱力原動機				七	五	五	三		
原動所設計及管理法							四		
機械小質及價格計算法								二	
特殊機械				二	二	二	一	三	三
暖房及通風								二	
機械設計法				二	二	二			
電氣工學	二	二	四	四	四	二	二		
製造冶金學							二	二	
工業法令、經濟及簿記							二	二	二
工場建築及衛生							一	二	一
設計、製圖及實習	一八	一一	一三	一六	一八	二〇	一二	一四	二一
實驗							七	七	七
計	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九

電氣工學科

學科目 學年	第一學年每週教授時數			第二學年每週教授時數			第三學年每週教授時數		
	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期
倫理	一	一	一	一	一	一	一	一	一
體操	二	二	二	二	二	二	二	二	二
數學	六	六	六						
物理學	四	四	二						
物理學實驗		三	三						
化學及製造化學	三	三	三						
英語	四	四	四	三	三	三	二	二	二
電氣及磁氣	二	二	二						
交流理論			二	一					
電氣機械及器具			二	四	四			六	
電燈					二				
電氣鐵道								二	
電力						二	二		
電信及電話									六
電氣工學設計法								三	三
應用力學					四	四			
工作法	二	二	二						
原動機				七	五	五	七		
電氣化學							二	二	
製造冶金學							二	二	二
工業法令、經濟及簿記							二	二	二
工場建築及衛生							一	二	一
製圖實習及實驗	一五	一二	一〇	二一	一八	二二	一八	一七	二〇
計	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九

採鑛冶金學科

學年	學科	學期	倫理	體操	數學	物理學	物理學實驗	化學及製造化學	英語	測量	地質及鑛物學	探鑛學	採鑛學	冶金學	製造冶金學	電氣化學	原動機	電氣工學	工業法令、經濟及簿記	工場建築及衛生	吹管分析	化學分析	試金術及冶金實驗	設計製圖及實習	計
第一學年每週教授時數		第一學期	一	二	五	四		三	四		四											六		一〇	三九
		第二學期	一	二	五	四	三	三	四		六											四		七	三九
		第三學期	一	二	五	四	三	三	四		二		三	二								四		六	三九
第二學年每週教授時數	採鑛學科	第一學期	一	二					三	三			四	四			六					六	一	九	三九
		第二學期	一	二					三	三		二	三	二			五					五	四	九	三九
		第三學期	一	二					三	三		二	三	二								六	四	一三	三九
	冶金學科	第一學期	一	二					三	三			四	四			六					七	一	八	三九
		第二學期	一	二					三	三		二	二	四			五					五	四	八	三九
		第三學期	一	二					三	三		二	二	四								六	四	一二	三九
第三學年每週教授時數	採鑛學科	第一學期	一	二					二		四	二	四	二				二	二	一	三		四	一〇	三九
		第二學期	一	二					二		四		六	二				二	二	二	一		三	一〇	三九
		第三學期	一	二					二		四		四	二				二	二	一			三	一六	三九
	冶金學科	第一學期	一	二				二	二			二	二	二	二	二		二	二	一	三		八	六	三九
		第二學期	一	二				二	二				二	二	二	二		二	二	二	三		一〇	五	三九
		第三學期	一	二				二	二					二	二			二	二	一			一五	八	三九

（備考）第二學年以上ノ者ニ對シテハ特ニ採鑛學科冶金學科ニ分チ各其ノ一ヲ專修セシム

附　則

本令ハ明治四十一年四月一日ヨリ施行ス

本令施行ノ際現ニ第二學年以上ニ在學スル生徒ニ課スヘキ學科目及其ノ程度ハ其ノ卒業ニ至ルマテ新舊規定ヲ斟酌シ學校長之ヲ定ム

●盛岡高等農林學校規程中改正

明治四十年八月十二日
文部省令第二十六號

明治三十七年文部省令第十二號盛岡高等農林學校規程中左ノ通改正ス

第三條中林學科ノ備考ヲ左ノ如ク改ム

（備考）行政事務見習ハ第三學期中之ヲ課ス

本令ハ明治四十一年一月一日ヨリ施行ス

●實業學校卒業者ノ研究補習ニ關スル規程

明治四十年一月十四日
文部省令第二號

實業學校卒業者ノ研究補習ニ關スル規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

實業學校卒業者ノ研究補習ニ關スル規程

第一條　工業學校甲種農業學校水産學校及甲種商業學校ニ於テ本科卒業ノ後特ニ實業ニ關スル事項ヲ研究セントスル者アルトキハ設備ノ許ス限リ之ヲ在學セシムルコトヲ得

第二條　明治三十二年文部省令第八號工業學校規程第十一條及第十二條、同年文部省令第九號農業學校規程第十七條及第十八條、同年文部省令第十號商業學校規程第十五條及明治三十四年文部省令第十六號水産學校規程第十三條及第十四條ヲ削除ス

明治三十二年文部省令第十號商業學校規程第十七條中「專攻科及」及「各」ヲ削ル

附　則

第三條　本令ハ明治四十年四月一日ヨリ施行ス

第四條　本令施行ノ際現ニ專攻科又ハ補習科ニ在學スル生徒ニ對シテハ其ノ修了ニ至ルマテ仍ホ從前ノ規定ニ依ルコトヲ得

●實業學校諸規程中改正

明治四十年九月二十一日
文部省令第二十七號

實業學校諸規程中左ノ通改正ス

明治三十二年文部省令第八號工業學校規程第四條、同年文部省令第九號農業學校規程第九條、同年文部省令第十號商業學校規程第五條、同年文部省令第十一號商船學校規程第五條及同三十四年文部省令第十六號水産學校規程第四條中「四箇年」ヲ「二箇年」ニ改ム

明治三十二年文部省令第八號工業學校規程第九條、同年文部省令第九號農業學校規程第十四條、同年文部省令第十號商業學校規程第十四條、同年文部省令第十一號商船學校規程第十四條、同三十四年文部省令第十六號水産學校規程第九條中「高等小學校第二學年修了」ヲ「尋常小學校卒業」ニ改ム

明治三十二年文部省令第十號商業學校規程第九條、同年文部省令第十一號商船學校規程第九條中「十年」ヲ「十二年」ニ改メ「修業年限四箇年、」ヲ削ル

明治三十二年文部省令第九號農業學校規程第九條中「修業年限四箇年ノ」ヲ削ル

明治三十五年文部省令第一號實業補習學校規程第

五條中「十年」ヲ「十二年」ニ改メ「學齡ヲ過キタル者」ヲ「就學ノ義務ナキ者」ニ改ム

附　則

本令ハ明治四十一年四月一日ヨリ施行ス

工業學校、甲種農業學校、水產學校本科、甲種商業學校、甲種商船學校ニ於ケル修業年限四箇年ノ尋常小學校ノ課程ヲ卒リタル者ノ入學ニ付テハ仍從前ノ例ニ依ル

徒弟學校、乙種農業學校、乙種商業學校及乙種商船學校ニ於テハ本令施行後三箇年間ニ限リ修業年限四箇年ノ尋常小學校ヲ卒リタル者又ハ之ト同等ノ學力ヲ有スル者ヲ入學セシムルコトヲ得

第十一款　醫學校

●臺灣總督府醫學校規則中改正

明治四十年八月十五日
臺灣總督府令第六十七號

明治三十二年（七月）府令第五十四號臺灣總督府醫學校規則中左ノ通改正ス

第一條　臺灣總督府醫學校ニ於テ本島人ニ醫學ヲ授クルニハ此ノ規則ニ依ル

第二十二條　公醫候補生ノ教習並熱帶醫學研究ニ關スル規定ハ臺灣總督ノ認可ヲ得テ醫學校長之ヲ定ム

第十二款　學習院

●學習院學制中改正

明治四十年一月二十二日
宮內省達甲第一號

明治三十九年（四月）宮內省達甲第四號學習院學制第十二條第一項ヲ左ノ如ク改ム

現在ノ高等學科ハ當分ノ內之ヲ存ス其ノ修業年限、學級及一學級ノ修學期限ハ從前ノ規則ニ依ル

●學習院規則中改正

明治四十年三月三十日
宮內省令第一號

明治三十九年（四月）宮內省達乙第五號學習院規則中左ノ通改正ス

第三十二條中「高等學科」ノ上ニ「明治三十九年九月現在ノ」ヲ加ヘ「竝現在ノ中等學科ノ最上級」ヲ削ル

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第十四款　國語學校

●臺灣總督府國語學校規則中改正

明治四十年五月二十日
臺灣總督府令第三十三號

明治三十五年（七月）府令第五十二號臺灣總督府國語學校規則中左ノ通改正ス

第一條第一項中「中學部」及第二項ヲ削ル

第三條　削除

第六條第三項ヲ削ル

第八條第十二條　削除

第十五條中「中學部ヲ五箇年」ヲ削ル

【第十六條第二項中「中學部」ヲ削ル】

【第十七條中「シ中學部第一、二學年ヲ二十八時同第三、四、五學年ヲ三十時ト」ヲ削ル】

第二十一條　削除

第二十五條中「中學部生徒ハ自費トシ」ヲ削ル

第二十九條中但書ヲ削ル

第三十五條中「中學部及」ヲ削ル

第六章　削除

附　則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治四十年十二月二十五日
臺灣總督府令第百十五號

明治三十五年（七月）府令第五十二號臺灣總督府國語學校規則中左ノ通改正ス

第七條中「十八歲九箇月」ヲ「十九歲」ニ改メ「本島人ニシテ」ノ下ニ「修業年限六箇年ノ」ヲ加フ

第九條中「以下ニシテ」ノ下ニ「修業年限六箇年ノ」ヲ加フ

第十五條中「三箇月」ヲ削ル

第十六條　學年ハ四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル

學年ハ分チテ左ノ三學期トス

第一學期　四月一日ヨリ八月三十一日マテ
第二學期　九月一日ヨリ十二月三十一日マテ
第三學期　翌年一月一日ヨリ三月三十一日マテ

第十七條　教授日數ハ每學年凡四十週トス

每週ノ教授時數ハ師範部甲科ニ在リテハ第一學期三十七時、第二學期三十六時、第三學期八時トシ師範部乙科、國語部、實業部電信科及鐵道科ニ在リテハ三十時トシ實業部農業科ニ在リテハ三十二時トス

前項ノ每週教授時數ハ五月一日ヨリ七月十日マテ及九月一日ヨリ同月三十日マテノ間ニ於テ六時以內ヲ減スルコトヲ得

第十九條中第一項ヲ削ル

第二十條中師範部甲科課程表ヲ左ノ如ク改ム

師範部甲科課程表

學年 學科目	第一學年									
	第一學期				第二學期				第三學期	
	每週授時數 午前	每週授時數 午後		程度	每週授時數 午前	每週授時數 午後		程度	每週授時數	程度
修身	一			人倫道德ノ要領	一			同上		
教育	五			心理學、教育學、教育史、管理法、臺灣教育法規、各科教授法	七			同上	六	同上
國語	三			言語學大意、日本語法、國語教授法	四			同上		
臺灣語	十二			發音、口述、記述、作文	八			同上	二	同上
理科					二	二		本島ニ特有ナル博物、理化學及教授資料、衛生及急救療法		
歷史地理	二			本島ニ必要ナル歷史及地理教授資料						
唱歌	一	四		單音唱歌、樂器使用法、樂典	一	二		同上		
手工		四		理論及實習		三		同上		
農業		三		農業大意及實習	一	三		同上		
商業		四		商業大意及實習		三		同上		
體操		二		遊戲、普通體操、兵式體操		二		同上		
計	二四	一三	三七		二四	一二	三六		八	

一第三學期ニ於テハ本表ノ外實地授業ニ從事セシム

第二十四條　生徒ハ學年ノ末ニ於テ其ノ募集ヲ行ヒ學年ノ始ニ於テ之ヲ入學セシム

第二十七條　入學セムトスル者ハ願書（第一號書式）ニ左ノ書類ヲ添ヘ國語學校長ニ出願スヘシ

一　履歷書（第二號書式）
二　醫師ノ身體檢査書（第三號書式）
三　內地人ニ在リテハ戶籍謄本本島人ニ在リテハ戶口調査簿抄本
四　師範部ニ入學セムトスル者ハ前各號ニ揭クルモノノ外身分ニ關スル證明書（第四號書式）

（第一號書式）

入學願

某儀（師範部ニ限リ「教員志願ニ付」ヲ挿入）御校何部（何科）ヘ入學仕度候間御許可被成下度尤入學ノ上ハ御規則御命令ヲ堅ク遵守致スヘキハ勿論某ノ身上ニ關シテハ保證人ニ於テ一切引受可申（給費生ニ限リ「若御規則ニ觸レ御給與ノ學資金辨償ヲ命セラレ候節ハ本人及保證人ノ連帶責任ヲ以テ速ニ辨償可仕候」ヲ挿入）候依テ別紙履歷書、身體檢査書、戶籍謄本（戶口調査簿抄本）（師範部ニ限リ「身分ニ關スル證明書」ヲ挿入）相添保證人連署此段相願候也

年　月　日

本籍地、族稱、現住所（本島人ニ在リテハ本籍地ヲ省略ス）職業
志願者　氏　名　印
生年月日

本籍地、族稱、現住所（本島人ニ在リテハ本籍地ヲ省略ス）職業
保證人　氏　名　印
生年月日

臺灣總督府國語學校長氏名殿

（第二號書式）

履歷書

（本籍地以下記載方第一號書式ニ同シ）

氏　名
生年月日

一　學業
何年何月何日ヨリ何年何月何日マテ何學校、何書院、何書房又ハ何所氏名ニ就キ何々修業

等

一職業

何年何月何日ヨリ何年何月何日マテ何所ニ於テ何々ニ從事セシ等

一賞罰

何年何月何日何所ニ於テ何賞ヲ受ケ又ハ何罰ヲ受ケシ等

右ノ通相違無之候也

年　月　日　　右　　氏　名　印

（第三號書式）

身體檢査書

（本籍地以下記載方第一號書式ニ同シ）

氏　名

生年月日

一體格

一身長

一體重

一胸圍

一中心視力

色盲

眼病

一聽力

耳疾

一呼吸器

一神經系

一皮膚

一言語

一既往現在ノ疾病又ハ畸形

右檢査候成相違無之候也

年　月　日檢査

現住所（本居地又ハ寄留地）

醫師　氏　名　印

（第四號書式）

身分ニ關スル證明書

本籍地、族稱（本島人ニ在リテハ本居地）

氏　名

一　禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルコトナシ（國事犯ニシテ禁錮以上ノ刑ニ處セラレ復權シタル者ハ其ノ由ヲ詳記スヘシ）

二　信用若ハ風俗ヲ害スル罪ヲ犯シテ罰金ノ刑ニ處セラレ又ハ監視ニ付セラレタルコトナシ

三　破産若ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ又ハ身代限ノ處分ヲ受ケタルコトナシ（破産若ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ復權シタル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ債務ノ辨償ヲ終ヘタル者ハ其ノ由ヲ詳記スヘシ）

四　教員免許狀褫奪ノ處分ヲ受ケタルコトナシ

右ノ通相違ナキコトヲ證明ス

年　月　日

本籍地市町村長（本島人ニ關シテハ本居地區長）　氏　名印

第三十五條「族籍」ヲ「稱名」ニ「何某」ヲ「氏名」ニ改メ「生年月」ノ下ニ「日」ヲ加フ

第三十六條中「族籍」ヲ「道府縣族稱（本島人ニ在リテハ本居地名）」ニ「何某」ヲ「氏名」ニ改メ「生年月」ノ下ニ「日」ヲ加フ

附　則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際現ニ在學スル師範部甲科ノ生徒ニ關シテハ仍從前ノ規定ニ依ル

第十六款　學校ノ認定及指定

●公立私立學校認定ニ關スル規則中改正

明治四十年十一月六日
文部省令第三十三號

明治三十二年文部省令第三十四號中左ノ通改正ス

第一條第一項ニ左ノ二號ヲ加ヘ第一號以下順次繰下ク

一　名稱

二　位置

第四條第一項中「認定ヲ受ケタル學校ニ於テ」ノ下ニ「名稱、位置、」ノ四字ヲ加フ

（參考）

○文官任用令第三條第三號ノ認定諸學校一覽中改ム

明治四十年一月十六日
文部省告示第十號

明治四十年一月二十三日
文部省告示第十四號

明治四十年二月十四日
文部省告示第三十四號

明治四十年二月二十六日
文部省告示第四十五號

明治四十年三月一日
文部省告示第五十四號

明治四十年三月六日
文部省告示第六十一號

明治四十年三月三十日
文部省告示第百二號

明治四十年四月三十日
文部省告示第百四十六號

明治四十年八月二日
文部省告示第二百十號

明治四十年十二月十日
文部省告示第二百八十八號

（以上本文ハ徵兵令第十三條ノ認定諸學校一覽中改正ニ收ム）

○徵兵令第十三條ノ認定諸學校一覽中改正

明治四十年一月十六日
文部省告示第十號

北海道廳立水産學校ノ位置ヲ北海道小樽區ニ變更シ北海道廳立小樽水産學校ト改稱ノ件認可セリ

明治四十年一月二十三日
文部省告示第十四號

北海道廳立水産學校ニ對スル文官任用令及徵兵令上認定ノ效力ハ別科生ニ及ハス

明治四十年一月二十六日
文部省告示第二十一號

東京府東京市小石川區私立臺灣協會專門學校ヲ明治四十年二月ヨリ私立東洋協會專門學校ト改稱スルノ件認可セリ

明治四十年一月三十一日
文部省告示第二十三號

清國上海　東亞同文書院

右ハ徵兵令第十三條ニ依リ認定ス

明治四十年二月七日
文部省告示第三十號

廣島縣私立第四佛敎中學

右ハ徵兵令第十三條ニ依リ認定ス

明治四十年二月十四日
文部省告示第三十四號

佐賀縣立有田工業學校ニ對スル徵兵令竝文官任用令上等位認定ニ關スル明治三十六年文部省告示第百十五號本文ニ「但シ認定ノ效力ハ別科生ニ及ハス」ヲ加フ

明治四十年二月二十六日
文部省告示第四十五號

岐阜縣稻葉郡加納町ニ設置ノ岐阜縣立農學校ヲ明治四十年四月一日ヨリ岐阜縣立農林學校ト改稱ノ件認可セリ

明治四十年三月一日
文部省告示第五十四號

石川縣市立金澤商業學校ヲ明治四十年四月ヨリ縣立ニ變更シ石川縣立金澤商業學校ト改稱ノ件認可セリ

明治四十年三月一日
文部省告示第五十七號

長崎縣私立東山學院

右ハ徵兵令第十三條ニ依リ認定ス

明治四十年三月六日
文部省告示第六十一號

愛知縣立工業學校ニ對スル徵兵令竝文官任用令上ノ認定ニ關スル明治三十六年文部省告示第三十五號本文ニ「但認定ノ效力ハ撰科生及聽講生ニ及ハス」ヲ加フ

明治四十年三月二十九日
文部省告示第九十一號

東京府東京市小石川區私立淨土宗大學ヲ私立宗敎大學ト改メ京都府京都市上京區ニ設置セル私立淨土宗大學專門科ト稱スル分校ヲ私立宗敎大學分校ト改稱スルノ件認可セリ

明治四十年三月三十日
文部省告示第九十八號

京都府立醫學專門學校ニ對スル徵兵令上認定ノ效力ハ研究生ニ及ハス

明治四十年三月三十日
文部省告示第百二號

新潟縣中頸城郡立高田農業學校中魚沼郡立中魚沼染織學校ヲ明治四十年四月ヨリ縣立ニ變更シ新潟縣立高田農學校新潟縣立十日町染織學校ト改稱ノ件認可セリ

明治四十年四月一日
文部省告示第百四號

東京府私立淨土宗大學ニ對スル徵兵令上認定ノ效力ニ關スル明治三十七年文部省告示第百八號中「撰科生及」ヲ削ル

明治四十年四月一日
文部省告示第百五號

東京府私立日本大學ニ對スル徵兵令上認定ノ效力ハ專門部撰科生ニ及ハス

明治四十年四月二日
文部省告示第百七號

東京府荏原郡大崎村私立日蓮宗大學林ヲ明治四十年四月一日ヨリ私立日蓮宗大學ト改稱ノ件認可セリ

明治四十年四月二日
文部省告示第百八號

東京府私立日蓮宗大學ニ對スル徵兵令上認定ノ效